
Christ / Alarm

五木萩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Christ / Alarm

【Nコード】

N8171K

【作者名】

五木萩

【あらすじ】

タイトル意識『クライスト・アラーム主の警鐘』

女子高生・歌鳥は突如迷い込んだ異世界で、
無垢ゆえの信念の乏しさのために戦線離脱を宣告された反乱軍の少年兵・クリスタルに出会う。

戦乱の地で出会った“異端”の2人の物語。

【1】セヴァルスタの反乱軍

異界より乙女舞い降りき

其は虹色の唄の継承者

曙光の翼もつ雲雀の娘

朱き血の民に約束の刻を告げるもの也

【Prologue:Crystal】

平原を抜ける風は砂と血を含んで煙たく舞い上がる。

空に響いた鬨の声は味方の勝利を告げるもの、

丘陵の上、石造りの砦に白旗があがった。

感慨もなさげに、それを見上げる少年がいる。

年の頃は15〜17、

戦士と呼ぶには線が細く、小柄でさえあるが、

片手に携えるは身の丈程の白銀の長槍、

その周囲に積まれた屍の数が彼の戦果を物語る。

息も乱さず、返り血もお付き合い程度、そうして彼は踵を返した。

味方ですら畏怖を込めた視線で見送るこの少年の名をクリスタルと
いう。

……名もなきこの反乱軍における最強の雄。

リーヴダリル暦406年、

その夏、長く圧政を布いた第28代皇帝ヘルヴァルド5世が崩御。

当時、その後継はヘルヴァルド5世の末弟・バルカシオン公爵が有力と目されていた。

残虐さでは亡兄に劣らぬ男である。

これに異を唱えた諸侯13連名が、

ヘルヴァルド5世の一女であり、現・聖地ヴァナディースの長、シスター・クローディアの皇位継承権を主張。

対立は2年に及び、公爵派がバルカシオンの即位を強行するに至って、内乱の幕はあがった。

*

帝都イザヴェルより南方に位置するセヴァルスタ諸島は、公爵派の領地である。

この地に反バルカシオン派の旗があがったのは2年前、内乱勃発から半年後、

当初100人に満たぬ徒党だったが、勝利を収める度に同志を募り、

現在では1万に及び一軍にまで成長。

これの指導者の名を
イリアスといった。

落城から一夜明け、比較的小綺麗に残っていた一室に、イリアスは
クリスタルを呼んだ。

最も戦果をあげた功労者、賞賛あつて然るべきところを、迎えた盟
主の表情は重い。

「活躍は聞いている。
よく皆を助けてくれた。
疲れてはいないか？」

少年はコクンと頷く。

感情の見えぬ表情にその仕草は、どこか子供じみて見えた。

「それは結構。

…だがクリス、

お前は少しばかり、正確に殺し過ぎる」

親しい人間はクリスタルのことを“クリス”と呼ぶ。

イリアスの言葉に、クリスはきよとんと首を傾げた。
卓の上で腕を組み、イリアスは渋面のまま続けた。

「お前は残酷ではない。

動けぬ者や、命乞いする者に止めを刺すような事はしないだろう。

もつとも、お前の敵になった者は一撃で死ぬわけだから、これは想像だが。

…正確に急所を狙えるなら、正確に外すことも出来ないか？」

その問いに対し、

クリスはその表情を変えぬまま、

「敵はみんな殺そうとしてくるのに？」

と、拙い口調で返した。

抑揚に欠ける声は柔らかく、しかし温度を欠いて機械的ですからある。

イリアスが小さな溜め息を吐いた。

「相手の意図は関係ない、これは人道の問題だ。

情けを乞う機会すら与えない事は、

情けをかけないと同じ事、

……そしてそれは、我々が敵としている連中の思想なんだ、クリス」

書斎風の部屋にはイリアスとクリスの他に長身の男が1人居た。

彼は開け放たれた扉の横で軽く腕を組みながら壁にもたれかかり、見守るといふには少しばかり軽薄そうな視線を2人に向けている。

イリアスは続ける。

「もう7年か？」

俺がお前を見つけたとき、お前は獣同然だった。

それを拾って育てたのは、お前が子供で俺が大人だったからだ。

生きる術を知らない子供にそれを与えるのが、大人の義務だから。

……けれど、

お前はもう子供じゃない」

きよとんとして、クリスがイリアスを見返した。

「敵と同じ思想をもつ人間をここに置いておくわけにはいかないんだ、

…クリス」

*

「本気かよ？」

イリアスとクリスの先の会話を聞いていた男が、退室して廊下を歩み去るクリスの背を見送りながら、イリアスを振り返る。

「一番の稼ぎ頭を追い出したりしたら士気に影響しないかね？」

「その兵士達からの苦情なんだ。

あれの活躍は機械的過ぎて、士気云々よりも、悪心に近いものを周

りに与えるらしい」

「苦情ねえ……」

「…別に追い出したい訳じゃない。

ただ何の為に我々が戦っているのか考えて欲しいだけだ。

あいつの身に染み付いた、《森の仔》時代の悪癖に気付かぬまま、戦地に連れてきてしまったのは俺だ。

このまま信念なき殺戮者にしてしまうくらいなら槍を捨てさせてしまった方が良い。

もう森に帰らずとも、生きてはいけるだろう……」

*

砦を出て裏山へ回り、クリスは丘の上から、戦死者の為に墓を掘る仲間達をいつものように不思議な思いで見下ろした。

なぜ人間は自身の死後、その体を獣や鳥に与える事を拒むように、穴を掘るのだろうか。

命の尊さを説くというのなら、土に直接還るよりも、他者の腹に収まってやった方が筋が通るだろうに。

否定はしないが、賛成もしていない行為に加わる気にはなれず、クリスは独り山に分け入った。

特に目的はなく、ただの気分転換のつもりでブラブラしていたら、微かに水音が聞こえた。

それに惹かれて、木々の隙間を抜けると、そこは溪谷だった。

近づくにつれ大きくなる音でクリスの耳を叩いた主は、見上げる程の巨大な滝だった。

谷間の川に落ちる水の飛沫が風に舞い上がって、崖から覗き込んでいたクリスの肌を撫でる。

心地良く感じられて、しばらくこうしていようか、などと思った時だった。

「？」

クリスは目を丸くして、顔を上げた。

目の前に、光の砂（粒と呼ぶにはあまりに細かい）が帯状になって流れている。

「虹…？」

手を伸ばすと、それは指先で溶けて消えた。

虹は実は触れられるのか、などとボンヤリしていたら、目の前を“それ”が谷底へ墜落していった。

ひと、だった。

「！！」

“それ”が水面に届くより先に、クリスは躊躇なく崖の縁を蹴った。伸ばした手は空中では届かず、視線での追跡は激しい水飛沫で断ち切られる。

自身から生じた無数の泡が水面に浮かんで消えた時、幸いにも澄み切っていた水流の中、クリスは求めるものを視界に捉えた。

クリスの位置よりも運良く下流、流れに乗れば難はない。

クリスの手が、そのか細い手首を掴んだ …

【Prologue:Canaria】

…歌鳥^{カトリ}は一人、ぼんやり庭を眺めていた。

亜麻色の髪が夜風に揺れて、日本人離れた顔をくすぐる。

ようやく肌に馴染んできたセーラー服の裾を直して、もう何度目になるか縁側に腰を下ろした。

月も星も見えなかったけれど、背後の座敷からの明かりと玄関前の忌中の提灯のお陰で、

祖母の手入れの名残を残すその庭を、隅々まで見渡せた。

21時もとくに過ぎ、甲問客の足は絶えたが、

遠方から来た親類たちが久々の世間話に花を咲かせているらしい。

背後の座敷から、賑やかな声が漏れ聞こえてくる。

「……あれ？」

「アンタまだこんな所にいたの？」

背後からかけられた蓮っ葉な声に振り向くと、従姉の理彩が立っていた。

「キャミソールにショートパンツ、肩にはタオルを掛けている。」

夜風が通る5月の廊下で、寒くないのかしらと歌鳥は内心で首を傾げた。

「さっさとお風呂入ってきたら？
空いたわよ」

「博巳くんは？」

「部屋でゲームでもしてんでしょ、
先に入っちゃいなよ」

「……うん」

歌鳥が頷いて腰を浮かせた時、ちょうど障子が開いて伯母の志保子が出て来た。

志保子は理彩の格好を見るなり眉を吊り上げて、みっともない、お客がいるのに、と娘を咎めた。

この日、夕方から伯母は機嫌が悪い。

理彩の夫が、大した距離でもないのに、仕事を理由に祖母の通夜に
来ないからだった。

薄情にも見えるが、3ヶ月も別居している妻の実家に顔を出しにく
い気持ちはわからなくもない。

鬱陶しそうに母親を宥めると、理彩はさっさと行ってしまった。

娘の背中を見送りながら深いため息を吐いた志保子と、居心地悪く
佇んでいた歌鳥の目が合った。

「…歌鳥ちゃん、自分の部屋戻ってていいわよ。
もう後はする事ないから」

「はい、伯母さん」

明らかに刺を含んだ伯母の声にも、歌鳥は顔色ひとつ変えない。

寂しいけれど慣れている。

伯母が立ち去り、小さく息を吐いた。

その時足元を見て、自分がローファアーマのままだと気付いた。

脱いで縁側に上がるうかと思っただが、どうせ靴を置きに玄関に行く
のだから、庭から回ろうと思っ直した。

下手に家の中を歩いて、親戚と顔を合わせ話の種にされるのも嫌だ。砂利を踏みしめて庭を出て、玄関の戸に手を掛けた時、ふと“何か”感じて、歌鳥は振り向いた。

この北原家は集落の最も高台にある為、垣根と門柱の向こうに点在する家の明かりを見下ろせる。

その景色が、突然霞んだ。

「何…？」

眩暈にも似た、その感覚。

次の瞬間、歌鳥の足下がふわりと浮いた。

…

【セヴァルスタ砦】

…

(……お母さんは入院する事になったから)

数年前、病院のロビーで、伯父は歌鳥にそう言った。

(しばらく伯父さんの家においでね。)

お祖父ちゃんもお祖母ちゃんもいるし、いとこのお姉ちゃんもいるから淋しくないよ)

頭を撫でてくれる大きな手の感触がなんだか切なくて、歌鳥は俯きながらも頷いた。

(……………おかあさん、いつ治りますか?)

問いかけと共に見上げた伯父の顔はどこか複雑な色を湛えていて、歌鳥は言葉を飲み込んだ。

(…ごめんなさい)

小さな手で、自分の裾を握る。

(かとり、おじさんのおうちで、いい子にします)

*

…体がやけに重い。

節々が軋むように痛い気がする。

やっとの事で瞼をあげると、見たことのない天井があった。

「…?」

目眩を堪えて体を起こし、歌鳥は辺りを見回した。
ギシ、とベッドが鳴く。

歌鳥の部屋ではない。

灰色の石造りの壁で、ベッドとその脇に小さな卓が一つずつ、

くすんだ色の木枠の窓が開いていて、さして広くはない部屋の中に
風を誘う。

「…?…どこ…?」

困惑して、歌鳥は記憶を辿った。

確か……

「!…!…お葬式っ……」

祖母の通夜だった。

そこまでで記憶が途切れている。

今は何時だろう、窓から射し込む陽光が、既に日付が変わっている
事を教えている。

そこへ、

「あれっ、起きたんだ」

あどけない声がして、そちらへ顔を向けると、
音もなく開けられていた扉の前に、見慣れぬ装いの少年が立っている。

歌鳥と目が合うと、満面の笑みを浮かべて駆け寄って来た。

「大丈夫？

痛いところとかない？」

本当に気遣わしげにそう問われ、歌鳥は状況のわからないまま、とりあえず頷いた。

「は…はい…大丈夫…」

小学生、かろうじて中学生くらいだろうか、覗き込んできた表情は幼気で、口調は一層あどけなかった。

「よかったあ、

ずっと目エ覚まさないんだもん、頭でも打ったのかと心配したよ。」

全身で安堵を表す少年の様子に微かに笑んで、歌鳥はすぐに首を傾げた。

「…ずっと？」

うん、と少年が頷く。

「2日くらい、寝てたよ。」

「そんなに!？」

驚いて、ふと体を見下ろしてみれば、服は覚えのない装いに替わっている。

「ここ、どこですか？
どうして私、ここにいるの？」

頼りなげに訊ねる歌鳥に、答える少年の声は闊達だった。

「川に落ちたから助けて来た、ってクリスが言ってたけど？」

「川…って…」

山間に位置する北原家の前には、国道を挟んですぐ、確かに川がある。

けれど、家の敷地から外に出た覚えはないし、そもそもガードレールを飛び越えてあの川に落ちるとは考えられない。

歌鳥は首をひねり、

そしてキョトンと顔を上げた。

「クリス…？」

外国人？

少年が頷いて、

「おれ達の仲間なんだけどき、2日前にお姉さんのことおぶって、全身ずぶ濡れで帰って来たんだ。」

で、最初クリスってば、ほかの怪我人と同じ部屋に運び込もうとしたんだけど、

男ばっかりの所に若い女の子を入れるのはチョット、ってストップ
かかって、慌ててこの部屋片付けたんだよ」

よく舌を噛まないものだ、と呆れるほど滑らかな説明である。

圧倒されながら頷いて、少年の言葉が切れた所でようやく歌鳥は口
を開いた。

「ええと…、怪我人…って…、ここは病院か何かですか？」

少年が、キョトンとして首を傾げた。

「こんな田舎にそんなの在るわけないじゃん、

ここはセヴァルスタのセナ砦だよ」

*

少年が出ていった部屋で1人、歌鳥は頭を抱えてしまった。

「お…落ち着いて、落ち着かなきゃ…」

さっきの少年の名前はケイヴィンというらしい。

『クリス』はギリギリ許容範囲だとしても（苗字とか）、『ケイヴ
イン』は日本人では絶対にあり得ない。

おまけに何度も聞き直してみたのだが、地名も日本では絶対あり得
ない。

「が…外国??」

それにしては日本語で会話が成立していたのが解せない。

それにさっきの少年も、名前はともかく顔立ちは何の違和感もなかった。

「どうしよう…、もう、何がなんだか…」

涙声で呟いて、ケイヴィンが乾かしておいた、という言葉とともに置いていったセーラー服に目をやる。

とりあえず歌鳥は袖を通した。

まったく違和感のない感触が肌をなぞる。

(夢じゃない…)

おろおろと部屋の中を歩き回り、少し躊躇った挙句、そつと扉を開けて廊下を窺った。

日頃行動力には欠けるタイプのだが、自分の置かれている状況が全くわからない。

何もせずにじっとしているのは堪え難く、せめて足だけでも動かしていなければ気が狂いそうになる。

(こんなのSFだよ…)

どうしよう…)

帰らなげや。

きつと昏 …

「……」

そこで歌鳥の思考は停滞する。

(捜してる、…)

それは間違いないだろうけれど。

*

「カトリ、っていうらしいよ」

砦の中庭で、乱れた花壇の縁に腰掛けながら槍の手入れをしていた
クリスが、
ケイヴィンの声に首を傾げた。

「何が」

「クリスが助けてきた女の子だよ、
カトリって名前なんだってさ。」

ついさっき目を覚ましたんだ」

「ん、……」

身を乗り出しての報告にも無関心に、クリスはただ頷いただけだっ
た。

対して興味を示したのは、クリスの横で何をするでもなく中庭を眺めていた男、

2日前のクリスとイリアスの会話の場に同席していた男である。

「へえ、そりゃあよかったな。

美人か？」

「うん、でもドルにはちょっと若いよ」

ドルと呼ばれた男（本名はドルサックという）が声を立てて笑った。

「んな下心はねえよ。

どうにかなるとしても、そこは水まで被った色男に譲るさ」

おどけた視線は、黙々と刃を研く作業であっけなく断ち切られた。

ドルサックが苦笑する。

「助けた甲斐はともかく、向こうに助けられた甲斐はなさそうだな」

*

助けられた甲斐のなさそうな歌鳥は、なんとなく人目を避けて砦内を歩き回るうち、完全に方向を見失っていた。

「迷った……」

困り果てて辺りを見回せば、経過の当然の結果として人の気配も影もない。

石の壁の廊下は暗く、しかも所々抉られたように崩れていて、その破片が足取りの邪魔をする。

進むにつれて窓は狭まり、射し込む光も細くなっていく。

「お腹空いたな…」

おとなしくしてれば良かったのかしら、

ケイヴインくん後でまた来るって言ってたし…」

軽いため息を吐いた歌鳥の足が“何か”に滑った。

その異様な感触に驚いて、歌鳥は少し大袈裟に転倒する。

「痛っ………何……?……」

手をついた先、やけに粘つく感触に顔をしかめ、歌鳥は暗がりの中で目を凝らした。

それは ……

たまぎるような悲鳴をあげて、歌鳥はその場から弾かれたように逃げ出した。

それは赤黒く変色し、なお乾くことを拒む程の大量の血溜まりだった。

*

ふと、クリスが手を止めて顔を上げた。

それに気付いたドルサツクが、浮かしかけていた腰を止めてその顔を覗き込む。

「どうした？」

「声」

「声？」

頷いて、クリスが立ち上がる。

「よくない声。見てくる」

「？、おう」

手入れ途中の槍を片手に持って歩きだしたクリスに手を振って、ドルサツクは軽く笑う。

やっぱりあいつはよくわからない。

*

激しい眩暈で足がもつれて、歌鳥は崩れるように倒れこんだ。

2日も食べていない体での全力疾走、貧血で視界が暗くなる。

涙が滲んだ。

「もうイヤ…、なんなの…？」

気が付けば、そこは森の中だった。

本人は知る由もないが、歌鳥が迷い込んだのは砦内から裏山へ続く隠し通路だったのだ。

出入口は先の戦いするとき打ち壊されていたので、何の障害もなく森に抜けてしまった。

立ち上がるうとしたが、足が全く動かなかった。

仕方なく上半身だけを起こし、ペタンとアヒル座りのため息を吐く。

「…そういえばケイヴィンくんが、兵隊がどうか言ってたなあ…」

歌鳥は振り仰いで、木々の隙間から覗く建物を見た。

石造りの、その威容。

「お城に、兵隊、か…。」

まるで博巳くんがやってたTVゲームみたい…」

これで何か翼や牙の生えた怪物でも出てきたら完璧だ、などと考えていたら、草を掻き分ける音がした。

歌鳥はそちらに顔を向け、そして凍りついた。

「……………嘘……………」

まさか。

冗談だったのに。

「嘘でしょ……」

一直線に歌鳥を見据える、水藻に似た緑色の眼。

鈍い朱色の毛並み、姿は虎に似ている。

実際の所、本物の虎よりはやや小ぶりだが、現在それは大した問題ではない。

問題は、その剥かれた牙と唸り声にもあらわな激しい敵意だった。

これは、何。

混乱と恐怖で思考が空転する。

逃げ出そうにも、疲労と貧血で体がいうことをきかない。

歌鳥自身の鼓動の合間に、目の前の獣が前脚を軋ませる音が耳に届いた。

「……………いや……」

軋む。

それは目の前の獲物を仕留めるため虎が身体を屈めた音だ。

朱色の獣が躍る。

喉が凍り付いて悲鳴すら出ない。

瞬きする猶予すらない。

「……ッ……！！！！」

……その、瞬間。

その瞬間、歌鳥の視界を横切つて雷光が走る。

刹那だった。

目の前の獣は姿を消し、視野の外で地響きがした。

「え……」

音の方へ顔を向けるとほぼ同時、

歌鳥の視線と同じ速度でそれに駆け寄る人影がある。

横倒しになった虎の首に、天を指し直立して突き刺さる白銀の刃。

駆け寄つたその人物が躊躇もなくそれを引き抜く。

ずいぶん変わった形状の槍だ。

両端に大きさの異なる刃が付いていて、両刃とも根元から細い鎖を垂らし、柄にくぐらせた輪（子供が通れそうな大きさの）に繋がっている。

槍の柄を掴んだ手首を返し、振りかぶる。

動きの度に輪に繋がれた鎖が揺れて、涼しげな音を奏でた。
獣の首に、雷の疾さで斬撃が墜ちる。

すくむほど重い音がして、歌鳥はびくりと肩を震わせた。

呆然と、歌鳥はその一連の“作業”を見守った。

あまりにあつという間の出来事で声も出ない。

そのとき背後から、

「カトリー!!」

振り向くと、木々の合間を駆けてくるケイヴィンの姿があった。

歌鳥がああ隠し通路に迷い込んでいたとき、偶然そこに繋がる回廊で掃除をしていたこの少年は、

歌鳥があげた悲鳴を聞いて、出処を求めて追って来ていたのだ。

「大丈夫!? どうしたの!?!」

ケイヴィンは歌鳥の元へ走り寄り、

次いで虎の骸の傍らに立つ人物に目を移した。

「クリス!! それ何?

《ゴーレム》!?!」

「やっつけたの?」

少年の声に、クリスと呼ばれた彼が肩越しに視線を向け、無言で頷いた。

ほっと息を吐き、ケイヴィンは屈み込んで歌鳥の身体を確認しながら、

「襲われたの？
怪我はない？」

ない、と歌鳥は頷き、地に伏した獣とクリスを見比べた。

不思議な事に、彼の槍には血の一滴も付いておらず、刃が木漏れ日を弾いて鏡のように煌めいた。

「戻ろう、カトリ。
歩けそう？」

ケイヴィンに促され、歌鳥は立ち上がろうと足に力を込めたが、腰が抜けてしまって思うようにいかない。

その様子を見て、ケイヴィンが既に背を向けて歩きだしていたクリスに声をかけた。

「待つてクリス！
カトリ動けないんだって、運んであげてよ」

感情に乏しい瞳がこちらを振り向き、慌てて歌鳥は頭を振る。

「だ、大丈夫です、

少し休めば歩けます。
先に戻っていて」

「でも」

そのときクリスが無言で歩み寄り、ケイヴィンに槍を渡した。

そのまま歌鳥に背を向けてしゃがみこむ。

負ぶされ、ということだろう。

「本当に、大丈夫ですから…」

促すでもなく、クリスは屈んだまま身動きもない。
ケイヴィンが、

「早く。この辺はまだ危ないかもしれないだよ」

と言つので、縮まりながら歌鳥が折れた。

「あの…、じゃあ、

失礼します…」

おずおずとクリスの首に腕を回し、体重を預けた途端ふわりと体が
浮いた。

一見して華奢な少年なのに、人ひとりを背負いながら軽々と立ち上
がり、足取りに影響もなく黙々と歩く。

後に続くケイヴィンが小走りに追ってくる程だ。

緊張で、歌鳥はクリスの背中で固まっている。

同じクラスの男の子ともろくに話した事もないのに、この状況。

変に意識しないよう、気を紛らわそうと努めていると、雑に束ねられていたクリスの長い黒髪が目に残った。

それは一見して黒色だが、光に当たると艶やかな深緑に映える。

「きれい…」

思わず出た呟きに、クリスが首を傾げて振り向いた。

鼻先同士がつきそうなるほど至近距離で目が合って、

「じ、ごめんなさいっ、

何でもないです！」

歌鳥は真っ赤になって俯いた。

クリスは不思議そうな顔をしたが、特に気に留めない様子ですぐに前を向く。

(ああ、

ビックリしたあ…)

少年の背中で顔を伏せたまま、歌鳥は内心で呟く。

(…眼…)

息を呑むほど透明な、
赤紫の瞳だった。

それがあまりに印象的で、具体的な目鼻立ちが頭に残らなかったほど。

(……………きれいな眼……………)

それはさながら夜明けに続く暁の色 ……

…

【イリアスの懸念】

簡素な卓上に広げられた地図と手元の紙を見比べながら、盟主イリアスは無言だった。

窓と扉は風を通すため開け放たれ、壁一面の本棚から古びた書物特有の匂いを微かに踊らせる。

そこへ一言もなくズカズカと踏み込んでくる足音があって、しかしイリアスは紙面から目も上げなかった。

顔を見なくともわかる。
ドルサクだろう。

「どうした大将？
難しい表情して」

予想通りのバリトンの声に対し、指摘に違わぬ声色でイリアスが

「お前、今回の戦いをどう思った？」

と問うた。

唐突、かつ深刻そうなその声に、ドルサックはひとまずおどけてみせた。

「まあ……、皆の活躍あつて楽勝？つてか？

特に援軍もなかったし」

「……《ゴーレム》」

呟くような一言に、ドルサックが得心したように頷いた。

「ああ、そういえば少なかったな」

「少ないなんてものじゃない、俺が予想していた半分以下だ。

陽動部隊に至つては一体も見えていないと聞く。

どうもここ最近の戦いで感じるんだが、いくら辺境とはいえ敵の戦力が少な過ぎないか」

ドルサックが首を捻る。

「そうだなあ……、

総力戦になるとしたら此処だと思ってたんだがな」

「ああ…、妙だ」

腕を組み、ドルサックが目線を宙に泳がせて唸る。

「状況が変わって本土に戦力を送ったんじゃないのか？」

「そついう報告はない。」

第一、いくらなんでも我々のような連中が暴れている土地から兵を取り上げはしないだろう。

セヴァルスタは辺境だが、重要な資源の宝庫だ」

「ふーん、…」

2人が各々思案に耽ろうと黙りこんだ時、扉の陰から兵士の1人が顔を出した。

報告がある、と言う彼に入室を促すと
イリアスはさつきまでドルサックといたときの気安い雰囲気から、盟主の顔に切り替える。

「先ほど裏山で発見された残留ゴーレムが、クリスタル「アーム」に討伐されました」

ドルサックが軽く口笛を吹いた。

「やっぱ野生の勘は頼りになるねえ」

たしなめるように横の男に目をやったイリアスが、

「報告ご苦労、
処理はまだほかのゴーレムの屍体と一緒に出来るな。
場所は決まったか？」

これにはドルサックが応えた。

「裏の川辺に結構広い所があつて、そこに全部運ばせてある。

何せ盛大に火を使うからな、山に入ったら大事だ。

水が近い場所で、あとは風向きとの相談だけ」

「なるべく早く。

始末が遅れては体が気化して毒を吐くからな」

はいはい、とドルサックは頷き、姿勢良く立っている兵士に笑いかけた。

「一応聞いとくけど、怪我人は？」

「おりません。

一般人の少女が居合わせたと聞きましたが、無事だったようです」

イリアスが軽く眉をひそめた。

「一般人？」

近隣の住民には避難を勧告し、護衛をつけて自軍の拠点に送った筈だが。

首をひねるイリアスの横で、ドルサックが思い当たった。

「多分カトリって娘じゃないか？」

クリスが拾って来たっていう……」

その言葉に、イリアスが目を丸くする。

「……クリスが？」

*

(……お礼言いそびれちゃった……)

灰色の部屋のベッドにちよこんと腰掛けながら、
歌鳥は1人硝然とうなだれている。

クリスに背負われたままこの部屋に戻り、降ろされた途端に気が抜けてすっかり安心してしまい、

我に戻った時には、彼はケイヴィンを残し部屋から出て行ってしまっていた。

情けなく溜め息を吐いたところにノックの音がして、歌鳥は少し緊張した。

快活な声がして、戻ってきたケイヴィンが顔を出す。

「カトリ、食事。

食べれそう？」

器一杯のシチュー（だと思つ）を盆に載せ、歌鳥に差し出してきた。

歌鳥は丁寧に頭を下げ、それを両手で受取った。

「食事は兵士が優先だから、おかわりは待ってね」

「ケイヴィンくんは？」

「食べたんですか？」

「おれはまだ怪我人の世話とかあるから」

歌鳥は曖昧に頷いて、

「大変なんですね……」

「怪我とかする訳でもないし、全然ヘーキ」

少年の働き者な言い種がなんだか微笑ましく、歌鳥が笑みをこぼした。

そのとき扉の方から足音がして、

「！、先生！」

ケイヴィンの声に首を傾げて、歌鳥は部屋の前に立つ長身の男を見た。

彼は穏やかに笑んで、歌鳥に向かって声をかけた。

「失礼しても構わないかな？」

歌鳥は控えめに頷く。

ゆるく束ねた黒髪を肩に垂らし、優しげながら堂々とした雰囲気がある。

年の頃は20代半ばから30代半ばといったところか。

一見して知性の方が先に漂う男だったが、ごく軽い武装をしており、腰には細身の剣を下げている。

それを見て、歌鳥の体が強張った。

気付いて、彼は少女を安心させるように笑いかける。

「済まない、怯えさせてしまったかな」

ベルトからそれを外し壁に立て掛ける彼に、

「ごめんなさい…、」

その、慣れてないので…」

男は鷹揚に笑って、いや、と言った。

「武器は怖くて当たり前だ、女性の居室にこんなもの持ち込んだこ
つちが悪い」

明るい口調に、少し緊張が解けたのか歌鳥が緩やかに笑う。

その横でケイヴィンが、

「先生どうしたの？
お見舞い？」

「まあそれに近いかな」

「ふーん？」

「じゃあ後でね、カトリ」

パタパタとケイヴィンが出て行ってしまつと、初対面のイリアスと2人きりになつてしまい、歌鳥はなんとなく落ち着かない。

イリアスは卓の上に置かれた盆に目を留めた。

「ああ、食事をするところだったのか。
それは悪かつたね」

「あ、いえ……」

「食べながらでいいから、少し話をしてくれるかな」

頷き、歌鳥は部屋の隅に置かれた椅子を引っ張つて1つをイリアスに差し出し、
もう1つをベッド脇に置いて、行儀良く卓の上で食事に手をつけ始めた。

イリアスはその様子を、さりげなく眺めた。

ずいぶん育ちが良さそうだと見当をつけて、優しく声を掛ける。

「確かカトリ、…でよかったかな？」

「はい」

「こつこつという言い方は失礼かもしれないが、少し変わった名前だね」

歌鳥は笑って頷く。

子供の頃から、珍しい名前である自覚はあった。

「何か意味がある？」

その問いに、意図を測りかねて首を傾げつつ、

「意味…ですか？」

…“歌う鳥”…です」

その答えに、イリアスが微笑んだ。

「良い名前だ」

ありがとうございます、とはに cand、歌鳥が顔を伏せる。

イリアスは柔らかな笑みを浮かべたまま口を開いた。

「…私はイリアス＝マツクールという。」

「一応ここにいる兵士たちの命を預かる者だ」

歌鳥は首を傾げた。

「…お医者さんですか？」

その言葉に、イリアスはくすりと笑った。

「何故そう思った？」

「え…、さつきケイヴィンくんが“先生”って呼んでいたから…」

ああ、とイリアスが得心したように頷く。

「昔、似たようなことをしていたからね。

でももう先生と呼ばれるような立場ではないかな。

今はここの最高指揮官をしている」

一瞬おいて、歌鳥はきよとんと目を丸くした。
反応に困り、

「ええと…、…

大変そうですね…」

「それなりに」

長いこと匙を持つ手が止まったものだから、イリアスが首を傾げて
歌鳥の顔を覗き込んできた。

「食欲がないか？」

そういえば随分眠っていたとか…、体調は」

大丈夫です、と応えながら歌鳥はなんとなく、この人は尋問に来た、
という気がしていた。

そこまで不穩ではなくとも、そういう目的で来たのだと。
無理もない、とも思う。

「川で溺れていたと聞いたが、何があった？
君はどここの村の娘かな」

「…わかりません…」

そう答えるしかない。

「わからない？」

「…はい」

適当な嘘をつく事すら出来る筈もなく、
歌鳥は蚊の鳴くような声で呟く。

その様子に、イリアスは一層表情を和らげて歌鳥を見た。

しばしの沈黙。

カチャリと音を立てて器を下ろし、思い詰めた表情で歌鳥が顔を上げる。

「あのっ…、日本…って言って、分かりますか？」

イリアスは瞬いた。

聞いた事のない単語だ。

それを察してか、少女はなおも心細げな色を浮かべ、さらに幾つかの単語を口にしたが、

やはりそのどれも聞き覚えはない。

そう答えると、少女は俯いて肩を落とす。

「知識が足りなくて済まないが…、ええと、…それは地名なのかな？」

弱々しい仕草で歌鳥が首を振る。

やはり、とは思ったが、ここは歌鳥の知らない世界なのだ。

だから彼も歌鳥の世界を知らない。

けれど、何故 …？

「カトリ？」

イリアスが気遣わしげに、黙り込んだ歌鳥に声を掛ける。

少女は整った顔立ちを歪めて、今にも泣き出しそうだった。

「…すみません…、

なんだか…頭が混乱して…よくわからないんです…」

「頭？」

イリアスは眉をひそめて、そつと歌鳥の額に触れた。

「流された時にどこかに打った可能性はあるな…」

…可哀想に。

イリアスの労るような呟きが、歌鳥の記憶の中の声と重なった。

（ …可哀想にね）

*

【世界の境】

…あれは祖母が入院してしばらくしてからの事だったろうか、
退院の見込みはない、と周囲の誰もが感づき始めていた頃だ。

山間の集落、よくある中年女たちの立ち話。

学校からの帰り道、偶然歌鳥は耳に挟んだ。

（ほら、あそこはお嫁さんがちよつとキツイから）

（でもね、お婆ちゃんもよくなかったと思うのよ。）

いくら歌鳥ちゃんが可愛いからってあんな露骨に区別したら、そりや志保子さんだつて面白くないわよ。

そりや確かにあそこの子は2人共お世辞にも出来がいいとは言えな

いけど、同じ孫に変わりないんだから)

(どうなっちゃうのかしらねえ、歌鳥ちゃん。

まさか追い出されはしないだろうけど、

お婆ちゃんがよく『嫁が孫を苛める』なんて愚痴ってたらしいわよ)

(話し半分にしたって、良好な関係じゃないでしょうね。

あそこは旦那さんも家に寄り付かないから間に入ってもらえないし、

上のお姉ちゃんはともかく、

下の子は高校入学前に合格取り消しになったんですって、問題起こして)

(あんな大人しい子には酷な環境よねえ…、
…可哀想に)

*

自分の境遇が、他人から見たら“可哀想”と言われるような種類のものであることは承知している。

けれど、歌鳥はそういう言葉もそういう視線も欲しくはなかった。

確かに伯母は歌鳥に冷たかったが、虐げはしなかったのだ。

常識と世間体。

それらによって構築された伯母の自制心が、歌鳥を迫害から守って

きた。

だから歌鳥も、それに従うつもりだった。

本当なら中学を卒業したらすぐに北原の家を出てもよかったのだ。

けれど、それがたとえ歌鳥自身の意志だとしても、周囲は歌鳥と志保子の確執を疑うだろう。

だから高校卒業までは、北原の家に留まることを決めていた。

卒業したら、大学でも就職でも、とにかく一人暮らしが不自然にならない土地へ行く。

疎遠に見えぬよう、時折は北原家に顔を出す。

そう決めていた。

…なのに、こんな形で。

今頃、北原の家はどうなっているのだろうか。

歌鳥が急に姿を消した事を周囲はどう見ただろう。

それとも …と、歌鳥は思う。

ついに自分は逃げ出して来てしまったのだろうか？

…あの世界から。

*

陽は傾いて鮮やかな色を空に滲ませる。

城壁の上で肌寒い風に髪を躍らせながら、クリスは無感情に空と大地の境界線を眺めた。

それが世界の境界ではない事を、クリスは森から出て初めて知った。

この大地には、クリスには見えぬ線引きがしてあるらしい。

それ故の、争い。

「お？何してんだ？
クリス」

気安げに自分を呼ぶ声の主は、クリスよりも10以上も年上の友人（そう当人に教えられた）だった。

「ドルサック」

「なんだ、また遠い目で自然界鑑賞か？
やっぱ帰りたいたいのか？」

クリスが首を傾げる。

「“やっぱ”？」

「ん？ああ、……」

たまに、お前にはその方が幸せなんじゃねえか、って思う事がある

んだ」

「…なぜ？」

不思議そうに問うクリスに、ドルサックが自嘲気味に笑んだ。

「人殺しは楽しくねえだろ？」

戦なんざ人間しかやってねえ、

…て事は他の生き物からしたら馬鹿馬鹿しい行為なんだろうぜ」

「森でも生き物は殺した」

何の色みもない声音。

「生き物と争わない生き物はいない」

「そりゃ生き残る為だろ？」

いわゆる食物連鎖だ。

お前が言ってるのは、狩りとそれに対する抵抗の事だろう？

それは厳密には争いじゃない」

ほんの少し、クリスは眉をひそめた。

不快の表れという訳ではなく、釈然としない、といった類の表情だ。

「これも生きるためだと、イリアスは言っていた」

「ん？…ん…、
まあ確かにそうなんだが、アレだ、同族で争うのが人間だけだ・っ
て話だな。」

同族殺しは人間だけが踏み込む行為だ」

「何が違う？」

予想していなかった種類の返答に、今度はドルサックが目を丸くする。

「その“同族”は何を見て区別している？」

おれは自分と同じ生き物を見た事はない」

子供の屁理屈にも似た言い分に、ドルサックは苦笑せざるを得ない。

クリスは生き物を線引き出来ていない。

食べる為に生き物を殺せるから、人間も躊躇なく殺す事が出来る。

目的と行為は直結しない。

（まあ、それがクリスだからなあ…。今更…）

下手に今クリスの価値観に手を加えて、混乱させるのは避けたい。

ドルサックはイリアスと違って、打算的に物事を考える型の男だった。

正直ドルサックは今のままのクリスでも構わない。

むしろ今のままでいてくれた方が助かる。

敵を追い払うならまだしも、捕虜にでもしたら食費と治療費がかさむだけだ。

クリスは戦場以外で他人に害を与えたことはないのだし、物事に頓着しないから他者への敵意も持たない。

ただ降り掛かる火の粉を払っているだけ。

ならそれでいいではないかと思う。

当たり前前の環境の中では、まったく無害な少年だ。

ドルサックから見ればイリアスの言う“兵士の苦情”など、ただの“愚痴”に過ぎない。

彼らにしたって、クリスが戦線から離脱する事の方が死活問題だろう。

（理想主義者なんだよな、イリアスの野郎は。

まあ、だからこそ皆あいつに付いてきた訳なんだが）

ドルサックが軽くため息を吐いたとき、その理想主義の盟主からの召集を告げる兵士の声が聞こえた。

無言でクリスがきびすを返す。

まだ自身の質問に対するドルサツクの答えをもらっていない事は、何の気掛かりにもならないらしい。

その背をしばし眺めて、

(さて…、どうしたもんかな…。

クリスはその調子、イリアスも頑固なヤツだから、

俺が頭をひねってやらなきゃマジでクリスを追い出すかもしれん)

それだけは、避けたい。

(…戦場で俺の仕事が増えちまう)

*

【セヴァルスタの反乱軍】

…砦の前庭に集められた兵は8000弱、全軍の約5分の4にあたる。

残りは怪我やその世話のために砦内におり、これより行なわれる盟主の演説を、せめて窓を開けて待っていた。

日没も間近、藍に染まりつつある空の下、松明に火が灯され、露台にイリアスが姿を見せた。

朗々と、盟主がよく通る澄んだ声を響かせる。

「まずは皆の頑張りに感謝する。

労いが遅れた事を詫びてから、これからの事を伝えたい。

しばらくは、このセナ砦を拠点とし、南半島の掌握を堅固なものとする。

我々の目的は都へ攻め上ることではない、

僭王バルカシオンを排除し、聡明なる聖女クローディア殿下を御位に就けることである。

不正を許さず、父王への諫言が盛んだったが故に不当に疎まれ、王宮を追われた方だ。

皇女を遠ざけて以降、ヘルヴァルド5世の治世は悪化の一途を辿った。

その悪虐に最も忠実だったのが彼のバルカシオンだ。

…これは皆も身に染みているだろう」

兵士たちの同意と頷きが波を作るかのようだ。

ここにいる兵の殆んどは元々は農村や漁村から集まった一般民である。

ここセヴァルスタ諸島はバルカシオンの直轄地ではないが、

統治を任される領主はバルカシオンの一族と姻戚関係を結ぶ事で権

威を得た男だった。

故に彼はバルカシオンの流儀でもってこの地を治めてきた。

重税を課し、苦役を強いてきた。

反乱を防ぐ為の人質として、奉公と称して村人の妻子を領主府や本島に召しあげた。

圧政に抗う道はないように思えた日々。

しかし反旗は上がった。

イリアスは理想と現実感覚を併せ持つ指導者だった。

彼はかつては神の教えを説いて各地を回る巡教僧だった。

セヴァルスタに流れ着いたのは5〜6年前のこと。

小さな農村に留まり小さな教会を建てたのは、村人に文字や学問を教える為、

そして1人の少年に人間社会の中で生きる術を教える為だった。

数年後、村人に慕われるようになったイリアスは国の情勢を憂いていた。

課された税を納められず刑罰を受ける人々を見、理不尽な労役に倒れる人々を見て、

優しくも強靱な意志を秘めていた神父は、祈りを捨て戦いを選んだ。

イリアスを慕う村人たちが中心となって結成されたその組織はとにかく結束が強く、忠実だった。

イリアスは彼らでも実行可能な作戦を立てられる知識と聡明さを持っていた。

そして、1つの村から始まった反乱は少しずつ規模を拡げ、呼応した民がイリアスの元を集った。

人が増えてもイリアスは当初からの姿勢と方針を変えなかった。

剣を手にしていても、彼は“優しい神父”のままの態度で兵士たちに接した。

それ故だろうか、兵士たちのイリアスへ向ける敬愛には、ただの指導者への崇拜ではなく、まるで慈父か何かに対するような暖かな尊敬の色がある。

盟主の演説は続く。

「悪しき前例は繰り返すべきではない。

バルカシオンの治世を認める訳にはいかない、我々はその意志を確かに示した。

こうして我々がバルカシオンを支援する土地を掌握することは彼奴の戦力を削ぐことになり、

ひいては本国で戦う聖女クローディア殿下の軍勢を支援することに

繋がるのだ。

これはリーヴダリル全土の解放の第一歩だ。

それを誇り、しかし驕る事なく今後も努めて欲しい」

それに応じ歓声上がる。

兵士たちの声がとどろく中で、露台の隅に控えていたドルサックが微笑みながら手を叩いている。

その横で、クリスはただイリアスの背を見つめた。

誰もが同じ想いで、ここにいる。

それを確かめる度、クリスは自分が“異物”である事を自覚する。

もっとも、それに何の痛みも寂しさも感じていないのがクリスという少年なのだが、

それこそが、彼を異端たらしめている最大の要因だった。

（ 帰りたいのか？ ）

クリスは空を仰いだ。

望郷はない。

望みなどない。

クリスには何も無いのだ。

【歌鳥とクリス】

「カトリ、おはよー」

ケイヴィンが歌鳥の居室に顔を出したとき、ちょうど歌鳥は朝の身仕度を整えたところだった。

朝食の盆を持った少年を見て、歌鳥は微笑って、

「おはようございます」

と丁寧に応えた。

ケイヴィンから盆を受けとり、早々と部屋を出て行くこととする少年を慌てて呼び止める。

「あの、ちょっと待って」

「？、何？」

歌鳥は少し躊躇いがちに

「あの…これ食べてから、なんですけど…、何か手伝える事ありませんか？」

「え？」

いかにも内気そうな仕草で言葉を続ける。

「私だけ何もしないでただお世話になっているのは何だか申し訳なく…。」

何もわからないから、かえって邪魔になってしまっただけかもしれないんですけど…。」

それを聞いて、ケイヴィンが笑った。

「そんな事ないよ。」

男ばつかりの所だから、カトリみみたいな綺麗な娘が顔を出したら皆よろこぶと思うな」

曖昧に、歌鳥は笑って応える。

…この状況に関して、何か覚悟や諦めがあるわけではない。

戻れるものならば戻らなければ、とも思う。

けれどその方法の手掛かりすらなく、
こちらの人々は異界の存在すら知らない。

歌鳥もあちらにいた頃異界の存在など知らなかったのだから当然だが。

すぐに戻れるという事はないと思う。

突然こちらに来たのだから、突然戻るといふ事もあるかもしれない

が、いつになるかわからない。

なら、それまでここにいる間の居場所が必要だ。

そしてそれは無償で与えられたものであってはならない。

歌鳥はそう思っている。

…

ケイヴィンの後ろにくっついて砦の中を歩き回る内、歌鳥はこちらの人々の姿形が多種多様であることに驚かされた。

すでに面識のあるケイヴィン達が黒髪で（厳密にはケイヴィンは赤みのある黒、クリスは黒緑）、

顔立ちも日本人に近いので今まで違和感を覚えなかった。

しかしこうして数多くの顔を見てみると、
兵士ばかりとあって男性ばかりだが、

その目鼻立ちは東洋人を基として様々な人種の風合いを感じさせる。

それらに多種の髪や瞳の色の組み合わせがあつて、この世界には“
他人の空似”はそうそうないだろうと思われた。

髪や瞳といえは、歌鳥も日本では珍しがられて幼少期には苛められたりしたものだ、

亜麻色の髪と濃紺の瞳など地味なものだ。

なにせ、ここには赤や青の原色の髪をもった人々がいる。

兵士たちの誰もが歌鳥に愛想良く接してくれた。

それに対して控えめに笑って応じながら、

ケイヴィンの見よう見真似で怪我人に食事を運んだり砦内の掃除をした。

洗い物の籠を抱え、

「あ」

と歌鳥が声をあげ、ケイヴィンが首を傾げて少女を見上げた。

「何？」

「あの、後で昨日会ったクリスさんの居るところ教えてもらえませんか？

私2回も助けてもらったのに、まだ1回もお礼を言ってないんです」

「クリス？いいけど一緒に捜すことになるよ。

決まったところになんかないもん、クリス」

*

砦の裏庭、陽が当たらないため少し湿った土の上に1本の人の腕ほど細い木材を垂直に立て、

クリスは槍を構えながらそれを見据えている。

クリスほどの熟練者がする訓練の様相ではないが、本人は（おそらく）真剣な様子で、息を吐いてまずは横風ぎに一闪した。

材木の上部から拳大ほどの木片を弾き出し、それを目で追って瞬速の連撃を繰り出す。

（ …… 正確に急所を狙えるなら、正確に外すことも出来ないか）

… 木片は、地に落ちるまで原型を保った。

クリスは首を傾げる。

… こういう事ではない気がする。

*

「よう、ケイ。

彼女連れか？」

廊下で陽気に声を掛けられ振り向いたケイヴィンが、声の主を見て子犬のように駆け寄った。

「カトリだよ、仕事手伝ってもらってるんだ」

へえ、と笑ったのは背の高い鷹揚とした雰囲気のある30代前半の男だ。

髪の色は藍鼠、愉しげな瞳も同じ色合いでいかにも涼しげだった。

彼はケイヴィンから歌鳥の顔に視線を移し、軽く手を挙げて親しげな声を発した。

「聞いてた以上に別嬪さんだな、もう体の調子はいいいのかい？」

歌鳥はその男に少し気後れを見せて、

「あ、…ええ、もう何ともありません」

と応えた。

ドルが鷹揚に笑う。

「そうか、

そりゃ良かった。」

…俺はドルサッカーハ―シーって者だ、よろしくな」

何故かケイヴィンが誇らしげに、

「ドルはねえ、ここでは先生の次に偉いんだよ。そう見えないけどね」

と言った。

「威張れるほど働いてないからな」

笑いながらケイヴィンの頭に掌をかぶせた男に、
歌鳥が深々とお辞儀する。

「歌鳥といます。
よろしく願います」

その様子にドルサックはわずかに目を細めた。

「うん、まあむさ苦しい所だがしばらく我慢してくれな」

控えめな微笑で歌鳥が首を振る。

ケイヴィンがドルサックの袖を揺すり、

「ねえドル、クリス何処に居るか知らない？」

「クリス？」

裏庭にいたぜ、材木相手に不毛な特訓してたな。
どうかしたか？」

「カトリがお礼言いたいんだって」

「ああ、……」

得心したように呟いて、ドルサックは意味ありげに歌鳥を眺めた。

歌鳥が首を傾げる。

「…あの？」

「ん？ … ああ、何でもない。」

クリスだがなあ、あいつは相手が誰だろうが変わらず無愛想な奴なんだ。

美人に対する礼儀つてもんもないが根はいい奴だから、氣い悪くしないでやってくれな？」

「はい。 ……、あつ、い、いいえ……」

頬を染めて、歌鳥は顔を伏せた。

*

不毛な特訓を続けるクリスは、無意識にだが自棄になり始めていた。辺りに散らばり、積み重なる無数の木片。

意味はないと自覚しつつ、それでも手を止めないのは何をすればいいのかわからないから。

クリスにはイリアスが言う“情け”というものが何なのかわからない。

敵を生かす事が情けをかける事なら、最初から武器など持たなければいい。

敵が武器を掲げる前に、逃げてしまえばいいのに。

けれどイリアスは戦いを選んだ。

育て親の決断に、クリスは少しの疑問を抱えつつも、ついて行くことを選んだ。

選択の余地はなかったようにも思う。

何故ならクリスはその頃まだ子供だったから。

けれどクリスはもう子供ではない。

(ここを出る……)

ピンとこない。

クリスには自身の未来のイメージがない。

ここを出て、それから ……?

「クリス！」

「！」

唐突に呼び掛ける声に集中力を断たれ、クリスの腕から槍が滑った。

「あ」

凄まじい音を立てて、斬撃の速度を保ったままの槍が石の壁に激突した。

足を止めていた、歌鳥の髪を数本かすめる位置に。

「……っ……、」

驚愕に言葉もなく立ちすくむ歌鳥の元に、ケイヴィンが悲鳴をあげて駆け寄ってくる。

「カトリっ！！大丈夫！？」

「は……はい……。」

だ……だい……大丈夫……」

膝が崩れそうになるのを堪えながら、歌鳥が頷く。

ケイヴィンに遅れて走り寄ってきたクリスが、その様子を確認して壁から槍を抜き取った。

ケイヴィンが怒鳴る。

「クリスっ！！先に言うことあるだろ！？」

「？」

予期せぬ少年の剣幕に、クリスが目を丸くする。

慌てて、歌鳥がケイヴィンを留めるようにその肩に手を掛けた。

「いいの、本当に大丈夫ですから」

「そーいう事じゃなくって！」

そのとき、歌鳥とクリスの目が合った。

無表情、というよりも無感情に見える赤い瞳。

ついさっきの衝撃が尾を引いて、昨日は美しく見えたそれがひどく不気味に思えた。

歯の根が震えて、二の句が次げない。

「あっ……、……ごめんなさいっ……！」

やっとのことでそう叫ぶと、歌鳥はその場を逃げ出した。

不思議そうに、クリスはその背を見送る。

すると背中をケイヴィンに思いきり叩かれた。

「？」

「何してるんだよっもう……早く追いかけて謝って来て……！」

「……何を？」

「何を、じゃないよ！」

ビックリさせて怖い思いさせちゃったんだから当たり前だろ……！」

手にした槍を示され、クリスは目を丸くしてすぐに頷いた。

「……そうか」

「そうだよつ、
クリスのバカっ!!」

*

(ああもう!
何やってるの!)

情けなさに涙が滲んだ。

階段を駆け上がり、歌鳥は息を吐いた。

(またお礼言えなかった)

しかもかなり失礼な態度を取った気がする。

あんな、逃げ出すかのような
…

(もうイヤ…
なんでいつもこうなの…)

肩を落として廊下を歩いたが、どうも目指す部屋にたどり着かない。

「あれ…、間違えた?」

壁や床の様式は同じだが、窓から見える光景が少し違う。

どうやら棟を間違えたらしい。

人影がなく、場所を訊く相手も見付からないので、

仕方なく部屋から見えていた山の形を探して現在の位置を確かめようと廊下を歩いた。

静か過ぎるのに不審と不安を抱きながら進んでいると、静かだがよく通る男の声が聞こえた。

…ちよつと気が弱そうな子だな。

ギクリと、歌鳥の足が止まる。

その声は行く手のすぐ右側の部屋から聞こえたらしかった。

扉は少し隙間が開いており、微かな陰を床に描いている。

「普通の娘に見えたが、普通より大人し過ぎるくらいだな、あれは」

「…今のところはな」

なんとなく、歌鳥は息を潜めて身を縮めた。

話の内容で、どうやら自分のことを言っているのだとわかった。

声には聞き覚えがある。

イリアスとドルサクだと思う。

イリアスの静かな声が響いた。

「受け答えには支障はなかったが、所々に違和感がある。

服もそうだが、名前や口にした単語も響きが耳慣れないし……。

……もしかしたら、東方辺りの民族の古い言語なのかもしれないな、あの辺りはリーヴダリルとは国交がないから文化も伝わっていないし……」

「国交のないトコの娘がこんな紛争地区うろついてるのは妙じゃねーか？」

「……まだ何もかも憶測の域だよ、とりあえずどこかの密偵と考えるのは無理がある。」

……あれが演技でなければの話だが」

歌鳥はその言葉に目を見開く。

ひっそりと、しかし速やかにその場を後にした。

*

「カトリを捜してる。見てないか」

クリスに問いに、声を掛けられた3人組の兵士が互いの顔を目を丸くして見合わせた。

「カ、カトリ？」

「え……と、ケイヴィンと一緒にいた女の子だろ？見てないよ」

その答に、クリスは頷いて背を向けた。

それを見ながら、3人組は困惑したような色を顔に浮かべている。

「…俺ここに1年いるけどクリスタルに話し掛けられたの初めてだ」

「俺初めて声聞いた」

「…あいつ喋るんだ…」

*

…わかってる。

そう、歌鳥は自分に言い聞かせる。

（わかってる。

イリアスさんは悪くない、間違ってる。

だって不自然なもの、

怪しまれて当然、

それだって私が悪い事した訳じゃないんだもの、

気にしなければいいの）

しかし胸の内になにやらモヤモヤしたものが疼いて、歌鳥の足を重くする。

気がつけば廊下の壁と窓は途切れ、
淡い陽射しが歌鳥の影を腰の高さほどの手摺りに捺り付けていた。
足を止めて俯き、歌鳥は呟いた。

「…なんだか私、北原にいた頃と同じ事してる…」

*

…祖母と伯母の不仲が露骨になってきたのは祖父が亡くなった後、
歌鳥は中学に上がる頃だった。

(歌鳥ちゃんはお利口さんねえ)

祖母は歌鳥をよく褒めた。

少しばかりの誇張はあったが、歌鳥は祖母の自慢の種だったのだ。

(お父さんもお母さんもいなくて淋しいでしょうに、ホントしっかりして良い子ね)

(髪？あれは地毛よ。当たり前じゃない。

うちの歌鳥ちゃんは真面目な子なんだから。

あれはお父さんに外国の血が入ってるかららしいのよ、だから歌鳥ちゃんも鼻が高いし、目もパッチリしてるでしょ？)

(歌鳥ちゃん、本当にこの高校でいいの？)

先生はもっと上のレベルのところ薦めてたじゃない。

慣れちゃえば電車通学だって苦にはならないわよ)

…愛情だったとは思つ。

それでも祖母に褒められる度に、歌鳥は居心地が悪かった。

祖母が歌鳥を褒めるとき、

その言葉の裏にはいつも同居する2人の従姉弟への、

…そして彼らを通して、その母親である志保子への非難があったからだ。

(理彩と博巳はどうしてああなのかしらね)

(昨日も夜遊びよ、まだ高校生なのに。

毎日なんだか濃い化粧して、パンツまで見えそうな丈のスカート履いて、みつともないったら)

(博巳も結局お姉ちゃんと同じ高校にしか進めないみたいね)

(恥ずかしいわ、入学取消しだなんて。

ちゃんとした育ち方した子はそんな事にはならないわよ)

歌鳥を褒めるとき、祖母の言葉にはいつもそれらの言葉がつけ加えられ、

その度に志保子の機嫌が悪くなる。

祖母を見る目だけでなく、歌鳥を見る目も鋭くなるのだ。

(… 仕方ない、伯母さんが嫌な気持ちになるのは当たり前だわ。

私のこと嫌いになっちゃっても無理はない…。

でも私が何かした訳じゃないし、それは伯母さんだってわかってる筈だもの。

気にしなければいいの …)

…

「…なのに、いつつも落ち込んでウジウジしてる…」

歌鳥はため息を吐いて手摺りにもたれた。

そのとき歌鳥のいた渡り廊下の下を通り抜けようとした人影が、こちらに気付いて見上げてきた。

「いた」

「え？」

それをクリスだと確認するが早かったか、

クリスが傍の樹の枝を伝って2階分の高さを昇り、歌鳥の目の前に辿り着いたのが早かったか。

目を丸くして、歌鳥は呆然とそれを眺めていた。

「ク…、クリスさん？」

「ん」

頷き、クリスは軽々と枝を蹴って歌鳥の横へ飛び移って来た。

顔を上げて真っ直ぐ歌鳥の顔を見る。

「カトリ」

呼び掛けられたというよりも、名前を確認されたと感じるような、抑揚のない静かな声音。

「はい…、歌鳥です」

「ん」

頷くその仕草がやけにあどけない。

表情は相変わらず何の色も窺えないが、含むものも感じられなかった。

まったくの、無垢。

「ちつき」

拙い口調。

歌鳥は無意識に、真っ直ぐクリスを見返していた。

「危ない、怖い思いをさせてしまって、すまなかった」

折り目正しく頭を下げてくるクリスマスに対し、歌鳥は慌てて、

「い、いいんです。」

怪我したわけでもないし、そんなこと…。

それに、私の方こそ…。」

口籠もった歌鳥を、首を傾げてクリスマスが見上げた。

顔を上げて、続く言葉を待っている。

ふと、歌鳥の顔から笑みが零れた。

正面にしたクリスの表情があまりに子供じみていて、なんだか可愛らしく見えたからだ。

晴れやかに、歌鳥は笑う。

「昨日と、その前と、

2度も助けてもらってありがとうございます」

クリスはきょとんと瞬いて、しかしすぐに頷いた。

初めて見たこの少女の笑顔は、なんだか印象的で心に残った。

【無自覚の軋み】

セヴァルスタに雨期が近づく。

穏やかな陽光はどこか憂いを含んだ淡い雲を透かして平原を撫でる。
薄藍色の空の下を翔る影があった。

滑空し、一路丘陵の上にそびえる石造りの砦を目指して。

一羽の鷹の羽ばたきが空に小さく響いた。

*

「降りそうかしら」

空を仰いだ歌鳥の呟きに、ケイヴィンが洗濯物の籠を抱えながら応えた。

「どうかな。」

早いとこ干しちやおつ」

頷き、歌鳥もまた籠を抱えてケイヴィンと連れ立って井戸に向かった。

たらいに水を張っていると、兵の数人に手伝おつかと声を掛けられた。

自分たちの仕事だからと、ケイヴィンが固辞する。

「親切なんですね」

去った彼らの背中を見ながら歌鳥が言うと、ケイヴィンが笑った。

「違うよ、

あいつらはカトリとお近付きになりたいだけ。

他の世話人にはあんなこと言わないもん」

ここにはケイヴィンと同じように兵士たちの身の回りを世話する役割の人々がいるが、そのいずれも男性だった。

ケイヴィンにくつついて手伝う内に顔見知りも増えたが、生来の人見知りが災いして、歌鳥はその殆んどと挨拶程度の言葉しか交わしていない。

「思っただんですけど…」

「ん？」

「ここって女の人もだけど、子供もいないですよね？ケイヴィンくん以外」

「…む。

そりゃあ成人はまだ先だけどさあ…」

子供と言われたことが心外だったらしい。

そんな少年に苦笑して、歌鳥はケイヴィンに年齢を尋ねた。彼は12、と答えた。

「いいんですか？こんな所にいて。

親御さん心配しません？」

しない、と言った顔は何の翳りもない。

「親はどつちももういないから。」

母ちゃんはおれがうんと小つちやい時に本土に奉公に行つて、
そこで小競り合いに巻き込まれて死んじゃった。

父ちゃんもおれを先生んトコに預けたきり出稼ぎ先で死んだし」

淡々と語るケイヴィンの様子に歌鳥は複雑な表情を浮かべた。

「そう…」

「だから、おれ行く所ないんだよね。」

先生はここ旗揚げした時おれをどつかの村に預けようとしたんだけど、

絶対ヤダって言って残ったんだ。

少しくらい危なくなつて、好きな人達と一緒に居られた方がいい」

その言葉に、歌鳥が頷く。

「そうですね、きっと」

「カトリは？親は？」

歌鳥は笑つて首を振った。

「お父さんは私が赤ちゃんの頃いなくなって、

お母さんも私が幼稚園…、じゃない、私が小さい時に亡くなりました」

「戦？」

「いえ、そういう酷いことではないです」

その言葉にケイヴィンが首を傾げたとき、頭上で小さな羽ばたきが聞こえた。

見上げて見れば、一羽の鷹が上階の窓に降り立とうとしていた。

それを見て、ケイヴィンが声を上げる。

「ラリーだ！」

「え？」

首を傾げる歌鳥にケイヴィンが頷く。

「先生のゴーレムだよ」

「ゴーレム…って…」

この前のあれか。

てっきりこちらの世界の猛獣の一種かと思っていたのだが。

そう言うと、ケイヴィンが不思議そうに首を振った。

「違うよ？」

カトリがいた所にはなかった？ゴーレム」

“いなかった”でなく“なかった”という言い回しにも引っ掛かりを感じながら、歌鳥はゆるゆる頷いた。

*

そのときクリスは中庭で薪を割っていた。

数日かけて材木十数本を細切れにしてしまったので、勿体ないとケイヴィンにこっぴどく叱られて言い付けられたのだ。

ケイヴィンはイリアスの次にクリスとの付き合いが長いので遠慮がない。

しかもクリスが頼まれればまず断らないことを知っているのだから、そう遠慮がなかった。

順調に束を積み上げていたときにイリアスの世話人から呼び出しを受けて、

クリスは続きを断念してその場を後にした。

今や司令室となっているイリアスの居室に向かうと、既に主だった数人が顔を揃えていた。

開け放たれていた扉からクリスの到着に気付いたドルサクが手招きする。

クリスの入室を認めて、イリアスが頷いて集まった面々を見回す。クリスが集合の最後だったらしい。

イリアスの肩には三つ目の鷹が乗っている。

「先ほどラリーが南西の草原地帯で残留ゴーレムの群れを発見した」
集まった男達が顔を見合わせる。

「近隣の村に危害が及ぶ可能性がある。

ただちに討伐隊を編成して駆除に向かってもらおう」

イリアスから言葉を継いで、ドルサックが笑った。

「80人もいりゃ充分だ。

俺とクリスと、一軍数隊から人選する。

さほど遠い距離じゃねえから、昼飯食ったらすぐ出立だ」

*

「ゴーレムは“造る”獣だよ。

ヒト型もあるらしいけど、おれは見たことない。

殆んどが獣」

洗濯物を吊す縄を張りながら、歌鳥を見上げてケイヴィンが説明する。

「造るって…どうやって？生き物でしょう？」

「知らない。」

“造獣師”って職業の人がいて、その人達が依頼人の血で造るらしいけど、実際見たことないし」

「…血？」

それを聞いて、歌鳥が顔をしかめた。

「うん、だからゴーレムは只の獣と違って調教の手間がないんだ、最初から持ち主の一部だから。」

騎獣として使われる事が多いかな、先生のラリーは小さいから偵察とか」

「裏の馬たちも？」

「ううん、アレは皆ただの馬だよ。」

ゴーレム造るのは凄いいお金掛かるし、国からの許可証がなきゃ造獣師は造らないことになってる。

先生がラリーを造ったのは随分昔のことで、ここにいる皆はもう許可下りないと思う」

曖昧ながらも頷いて、歌鳥は少し呆然としていた。

もしかしたらこの世界は歌鳥が思っている以上に、元の世界とは仕

組みが異なるのかもしれない。

この話が常識であるなら。

*

“残留ゴーレム”とは主を失ったゴーレムのことだ。

ゴーレムは持ち主が死ぬ前に“処分”するよう定められている。

ゴーレムは忠実だが、主以外の人間には御すことが出来ない。

だから主が死んだ後は言うことをきかず持て余されるケースが殆んどで、

場合によっては人畜に害を与える。

戦死など、主が横死した場合は凶暴性を増す傾向があり、

これは主の断末の無念がゴーレムに強く残る故と言われている。

*

砦を出発して峠を2つほど越えた頃、

一行を先導する鷹が旋回して、先頭を征く馬上のドルサツクの肩に降り立った。

その後ろには背中向きでクリスが同乗している。

彼は馬に乗れないわけではないが、

戦場で乗騎を必要としないので移動は乗せてもらう事になっている。

生身で馬の機動力に張り合えるのはクリスぐらいであろう。

本来ドルサックと同等の待遇で隊のひとつくらい任されてもいいのだが、

他者とのコミュニケーションが極端に苦手なので単独で行動することを許されている。

実力的にも、1人で一部隊の扱いだ。

後ろにクリスを乗せたドルサックには、丘の稜線を眺めながら少しばかり思うところがあった。

発見された残留ゴーレムの数は50。

その殆んどが軍人が好んで使う戦闘能力の高いタイプなので、先の戦いで戦死した敵軍の兵士が主であることは疑いない。

しかし何故ここで、という気がしている。

先の戦いではイリアスが訝しがるほど少数しか見なかった。

その戦いで見た殆んどは先日屍体を処分したばかり、あれが全てである筈だ。

でなければ、今から処理に向かうゴーレム達の主たちは、戦闘用のゴーレムを有していながら、その戦いの場にゴーレムを連れなかったという事になる。

それはある意味、武器を持たず戦地へ向かう事と等しい。

(妙な話だ…)

そのとき、後ろでクリスが身じろぎした。

「どうした？クリス」

「近い。降りる」

見れば丘の裾野、見下ろす草地に赤や黒の点が動いている。

そして、耳障りな咆哮が。

「どうやら向こうも気付いたな。行くぞ」

ドルサツクの声に、クリスは頷き、他の者は声を上げてこれに応えた。

…

“ 狩猟 ” にも似た戦いが始まって数分の事である。

前述した通り彼らが相手としているゴーレムは戦闘能力が高いので、これを仕留めるのは易しくない。

しかも彼らの殆んどは元々は農民である。

故に彼らは数人で1体を囲いこんで倒していく手段を取った。

1人で戦っているのはクリスとドルサツクくらいのものである。

ドルサツクの得物は大刀、戦い方はクリスとは違い正確さに欠け苛烈、力任せの斬撃だった。

実力はクリスと比肩するが、何せ威嚇も兼ねて空振りも多く、仕留める数はクリスに遠く及ばない。

クリスが最強と言われる所以は、攻撃の精密さに由来する。

そのクリスの異変に気付いたのはドルサツク1人だった。

正確には、気付く余裕があったのがドルサツクだけだった。

しかし余裕があったとしても余人にその“異変”が分かったかどうかは疑問だ。

それほど些細な違和感だった。

(クリス?)

どこか精彩を欠く動き。

上の空、とまではいかない迄も何かか乱されている、という印象。

どうした、と掛けようとしたドルサツクの声は、叫びになってその喉を越えた。

「何してるクリス!!!
後ろだ!!!」

クリスの反応は明らかに遅かった。

振り向きざまに一閃した刃は空を斬り、
低く屈んだ豹に似たその牙がクリスの喉ぶえを狙い迫りくる。

かろうじて地を蹴って飛びすさり一撃を躲したものの、体勢を直した位置には別の獣が身構えていた。

「！」

虎の太い爪がクリスを切り裂いた。

「クリス！！」

袈裟懸けに裂かれた傷から鮮血が噴き上がる。

周囲に広がる動揺を余所に、流血する当人が最も他人事のような顔をしていたが、倒れ伏して気を失うまでのことだった。

【洗礼】

…雨が降っていた。

（何をしている？）

少年は虚ろな目を向けた。

ひどく美しい柘榴石ガーネットの瞳だった。

(…俺の言葉が理解るか)

彼は頷く。

顔立ちは整っていたが、肌は見苦しいほどに汚れていた。

伸びるに任せた髪と、欠けて形の歪な爪。

纏った獣の毛皮には所々に肉片がこびり付いていた。

(親はどうした?)

ほんの少し、少年が首を傾けた。

それがどういいう意志を示す仕草なのか、男には判断が付かなかった。

(…おいで)

差し出された手を、少年はただ見つめた。

彼はその手の意味を理解していないように見えた。

(…おいで、お前はここの民にはなれない。

一緒に、帰ろう)

降りしきる雨。

咳き込むほどの草と土の匂いに包まれたまま、

彼は自分の手を握った手を見つめた。

（名前は？）

彼は瞬く。

（親はお前を何と呼んでいた？）

零れ落ちるひとつの言葉。

…クリスタル。

*

「
…ああ、よかった。
目が覚めました？」

クリスは目の前に、自分の顔を心配そうに覗き込む少女の顔を見た。

見慣れてはいないが、見覚えはある。

「
……カトリ」

「はい、歌鳥です。

…具合、どうですか？」

「
……痛い」

無表情のまま呟いて、クリスは起き上がらないまま天井を見渡す。

歌鳥が慌てた。

「ああっ、そうですね、すぐにお医者さま……」

「いい。寝れば治る」

言って、クリスは困ったような表情を浮かべた歌鳥を見上げた。

「……なぜそんな顔する？」

「なぜ……って……」

心配だからに決まっているでしょう？」

「平気なのに？」

歌鳥は心底不思議そうなクリスの顔を見て、少し呆れた。

「クリスさんが平気かどうかなんて、私にはわかりません。だから心配するんです」

クリスは少し瞬いた。

そうか、と呟いて天井を仰ぐ。

なんとなく、このまま眠るのが惜しい気がした。

クリスが目を閉じない事、どうやら本当に平気らしい様子を確認し、歌鳥はほっと息を吐いてベッド脇の椅子に座った。

「もうすぐケイヴィンくんがお水持ってきてくれると思います」

「…ん」

「皆さん心配していましたよ、
今は何か大事な仕事に人手が必要だからってお外に出ているんです
けど」

「…ん」

クリスの返事は無愛想だったが、怪我のせいもあるのだろうと歌鳥
は気にしなかった。

歌鳥の言った、皆の大事な仕事というのはゴーレムの屍体の処理だ
ろうとクリスは見当をつける。

ふと、

「おれ以外、けがは」

「え？…ええ、少しは。」

でもクリスさんが一番ひどい怪我でしたよ。

…皆さん驚いてました、クリスさんが怪我するなんて…って。

ケイヴィンくん聞いたんですけど、ここで一番お強いクリスさ
んなんですってね」

クリスは特に自慢も謙遜もしなかった。

静かに視線を窓に向ける。

開け放たれたその向こうに、一羽の鷹が城壁からこちらを覗き込んでいるのが見えた。

イリアスのラリーだ。

見張りか様子見か、それを見て、一応心配されているのだと思った。

「…出ていく、…」

「え？」

ふと出たクリスの呟きに、歌鳥が首を傾げた。

「出ていく、って…」

「あ、トイレですか!？」

「ちがう」

慌てて腰を浮かせた歌鳥を横目で見て、

「…イリアスが」

ポツポツと、クリスは言葉を紡ぐ。

「おれは、敵とおなじ戦いかたをするから、ここにはいけないと言った」

歌鳥は怪訝そうに眉をひそめた。

意味がよく理解らない。

「なんで戦っているのかを考えろ…」と言われた。

考えてもよくわからない。

わかったような気がするのと、すぐに違くなる」

まるで子供の喋り方だ。

要領を得ず、歌鳥がおずおずと口を挟む。

「あの…、私もよくわからないんですけど、

この人たちは悪い王様を倒す為に戦っているって、ケイヴィンくんに聞いてますよ?」

「そういうことはおれにはよくわからない。

“森の仔”だから」

歌鳥は首を傾げた。

「もりのこ?」

「…おれは森で育ったから、人の世界のしくみがよくわからない。

国、っていうしくみも変なかんじがする。

…顔もみたことのない大勢の生きものが同じものようにまとめられているのは変だ」

「…そう、ですか？」

…うん……」

「…同じならなぜ戦うんだろう……」

その表情は変わらない。

温度のない柔らかな声は淡々としていて、しかしどこか危うげだっ
た。

事情は全くわからないが、わからないなりに歌鳥は口を開く。

「…同じだから、」

「？」

「同じだから…」

少しの違いが怖いんです」

歌鳥は弱々しく微笑む。

「全然違うなら、気にならない。

でも少しの違いだと、その“少し”が目について仕方なくなるんで
す。

…自分と違う、正しいのはどっち…って」

「どっち…」

頷く。

「違いと間違いは似てる。

正しくない、って言われてるみたいないな気持ちになります。

だから、…怖い」

「…カトリは怖いのか？」

クリスの問いに、歌鳥は寂しげに笑む。

「…私は違うのが“少し”じゃないから…」

その笑みが壊れるかと思った。

クリスは瞬いて歌鳥を見つめた。

「…カト」

「あ　っ！！クリス起きてる　っ！！」

クリスが呼び掛ける声は、ケイヴィンの快活な声にかき消された。

「よかったあ〜！

平気？痛くない？」

部屋に駆け込んでくる少年の姿を見て、歌鳥は椅子から腰を上げる。

「私、お医者さまに知らせて来ますね。
お薬とか包帯も必要でしょうし」

「あっ、うん！お願い」

水差しを手にしたケイヴィンが笑って歌鳥を送る。

一礼して少女が出て行った扉をクリスはしばし見つめた。

…違う。

確かに、彼女はクリスが知る誰とも違う。

何が違うのか、わからないけれど。

*

家庭においても学校においても、

“浪川歌鳥”という少女は“異物”だった。

嫌でも目立つ容姿、

嫌でも目立つ境遇。

歌鳥には友人はいない。

周囲に嫌われていた訳ではないし、歌鳥が拒絶した訳でもない。

ただ歌鳥は自分の家庭の話を頑なに避け、

周囲もいつしか腫物に触れるような扱いをし出し、

自然と距離が開くようになった。

それで良かった。

歌鳥は何より他人との接触が怖かった。

自分が誰かと関わると、必ず誰かを不快にする、
そんな気がした。

何故なら歌鳥は“異物”だから。

…なのに、この場所は居心地が良い。

理由はわかっている。

歌鳥がここで“違う”のは当たり前だからだ。

“異物”であることを恐れる必要がない。

皮肉にも歌鳥を今まで苦しめてきたものが、この境遇においては歌鳥を守っていた。

「…調子でも悪かったのか？」

イリアスの問いに、ベッドに仰臥したままクリスは首を振った。

クリスの意識が戻った事を知って、イリアスはすぐに作業の指揮をドルサックに任せて駆け付けた。

部屋に踏み込んでクリスの普段通りの様子を見、
安心を通り越して虚脱してしまった。

ベッド脇の椅子に腰掛け、呻きにも似た声を発する。

「…俺の言葉のせいか」

どこか沈痛なイリアスの面持ちに、クリスは目を丸くしてすぐに首を振った。

「ゴーレムにやられた」

「知っている。」

そういう意味じゃない。

お前の集中力が欠けていたらしいのは俺がお前に言った言葉が原因か、

と聞いている」

クリスは瞬き、少し考えて頷いた。

「急所を外すのは難しかった、だから」

「なんでゴーレム相手にそんな事をする!!」

張り上げた声は小さな一室に響き、クリスを少しばかり驚かせた。

顔を伏せてしまったイリアスに向かって、

クリスは微かに動揺を滲ませた声で言葉を掛けた。

「人間で練習はできない」

「…だからそういう意味じゃない…！」

イリアスは怜悯な顔に苦渋の色を浮かべる。

「自身を傷つけてまで他者を傷つけるな、とは言わない……、

俺が言いたいのはそういう事じゃないんだ、クリス……！」

クリスはただ、微かに困惑した表情でイリアスを見つめた。

「…イリアスはおれがいると辛いのか」

虚を突くその問いに、イリアスは瞬いてクリスを見返した。

「…そういう事じゃない」

「辛そうに見える」

「辛いんじゃない。

悔やんでいる。」

「…俺はお前に何をしてきたのだから」と

「………？…育てられた」

イリアスは首を振る。

「…子供が森に捨てられると、精霊がその子を育ててくれる。」

それを“森の仔”という。

しかし人間はすでに森にとって“異物”だ。

だからだろう、森の仔は皆子供のまま生涯を終える。

だからイリアスはクリスを森から連れ出した。

その時クリスは森の仔としての寿命に限りなく近い年齢だったから。

しかし、それ故に、クリスという人格は既に完成されていたのだ。

「 …… 飯を食わせるだけなら獣でも出来る。」

それではお前を森から連れ出した意味がない……」

初めて会ったあの日と変わらぬ無垢なままの目で、クリスはイリアスを見返してくる。

「 …… イリアス」

「 うん？」

「 …… おれは本当に人間なのか」

その言葉に、イリアスは目を瞠った。

クリスの声はどこまでも抑揚がない。

「おれは同じはずの人間の気持ちがわからない。

違うことが辛くない。

…ほんとうは同じ生きものじゃないからなんじゃないか…」

返答に窮し、それでも何か言葉を返そうとクリスの顔を見、しかしイリアスはそれを断念した。

問いかけておきながら、気が抜ける程あどけない顔でクリスが寝入ってしまったからだ。

ため息を吐き、それでもふと笑みがこぼれた。

(…子供の頃と同じ顔で眠るんだな…)

愛しそうに、イリアスはその額を撫でた。

…こうしていると、自分がこの子に何を求めているのかわからなくなりそうになる。

……それでも …

*

…とりあえずクリスが問題なく歩き回れるようになるまでには6日程かかった。

常識で考えれば驚異的な回復力だが、クリスならそれくらいの事はやってのけても不思議はないと思われ

たのか、
誰もが大きな疑問も感じずそれを受け入れた。

回廊を抜け、出くわしたケイヴィンから労りの言葉と安静の指示を無視している事へのお叱りを受けて、
一応おとなしく、もと来た道を引き返す。

渡り廊下で、クリスは中庭を見下ろし足を止めた。

見つけた。

籠を抱えている。

歩きながら、途中で声を掛けられて、笑ってそれに応えてはいたが、あれは笑顔には見えない。

一度クリスに向けてくれたものとは違う。

…深手を負ってから初めて目を覚ましたあの日以来、クリスは歌鳥と顔を合わせていない。

世話する手が足りたせいだが、クリスは歌鳥を待っていた。

もう一度話したい。

なんとなく、クリスの求める答えを彼女は持っているような気がした。

クリスはきびすを返して廊下を歩き始めた。

*

スツキリしない薄曇りの空の下、籠の中の小芋が揺れる。

さっきの兵士から声を掛けられたのは確か3回目くらいだと思う。

内容は他愛ないものだが、そうやって話し掛けてくるものが他にも5人くらいあって、

歌鳥は少々困惑している。

元いた世界では歌鳥に話し掛けてくる男子なんていなかった。

それは歌鳥が周囲に対してあまりに厚い壁を張っていたからなのだが、

本人が意識していなかっただけで、歌鳥は実は男子の人気が高かった。

それがこちらに来てやけにあからさまになった。

どうやらこちらの人々はそういう事に積極的らしく、屈託なく話し掛けられれば笑って応えるしかない。

悪意はないのだから決して不快ではないのだが、何せ慣れていない状況だ。

(…疲れた…)

情けなくため息を吐いたところで、歌鳥は回廊の段差に足を引っ掛けた。

「きゃっ」

かろうじて転倒は回避したがバランスを崩したせいで籠の中身が下に転がる。

「ああ、…」

膝について散らばった小芋を集めていたら、不意にそれを拾って差し出してくる手があった。

礼を言おうと顔を上げて、歌鳥はその手の主を見る。

「あ、クリスさん」

それに頷き、クリスは小芋を腕に集め始めた。

「あ、…ありがとうございます…」

「ん」

その短い返事に、歌鳥はつい吹き出した。それに気付いたクリスが首を傾げる。

「なに？」

「あつ、…いえ、

何でもないです、ごめんなさい」

クリスは不思議そうに歌鳥を見つめる。

少し傾けた顔が幼げで、微笑ましい。

「…もう怪我はいいんですか？」

歌鳥が訊ねると、クリスは無言で頷いた。

「…この前」

「え？」

ポツリと零れた眩きに歌鳥が首を傾げると、クリスは確認するようにしながら言葉を続ける。

「違うことが、怖いって話…」

あ、と歌鳥は複雑そうな顔をした。

「あの時は…、ごめんなさい」

「？」

クリスは予想していなかった反応に首を傾げる。

「私、なんだか事情もよく知らないくせに、知ったような口を利いた気がして…」

「…何が？」

「あ、…え・と…」

口籠もる歌鳥を、クリスは見つめる。

「…はじめて話したときも、その次のときもカトリは謝ってた。
…なぜ？」

「え？そ、そうでしたか？

ごめんなさい」

「悪いなんて思ったことはない。

カトリはおれがけがをした時、おれが平気かわからないから心配だと言った。

…なのにどうしておれの気持ちはいつも悪いほづに先回りする？」

歌鳥の肩が微かに震えた。

クリスの口調に責める色はない。

ただ不思議そうに歌鳥の目を真っすぐに見る。

その無垢な瞳には、ごまかしの通じない何かが漂っていた。

「…え、と………」

…なぜ？

歌鳥は目を逸らせないまま自問する。

…なぜって、いつもそうしてきた。

責められる前に、傷つく前に。

いつだって問題の原因は歌鳥にあったが、いつだってそれは歌鳥に責任はなかった。

歌鳥本人も、そして周囲もそれをわかっていた。だからこそ誰も歌鳥を責めなかったのだ。

…なら、なぜ？

なぜ歌鳥はいつも顔を伏せねばならなかった？

「…私は…」

不意に、クリスの顔に動揺の色が浮かんた。

どうしたのだろうかと思いついて、すぐにその理由が理解した。

頬を伝ってこぼれた雫。

「…あ。」

クリスにとっても予想外だったが、

歌鳥にとっては更に動揺する事態だった。

「うそっ…、あれ？」

一度それが決壊すると、もう止まらなくなった。

溢れて溢れて、理由もわからないまま頬を、掌を、袖を濡らし続ける。

「違っ…、ごめんなさい、何でもないんです、
ごめんなさいっ……
…どうして…っ…?…」

クリスは慌ててハンカチになるものを懐に探していたが、
そもそもそんな物を持ち歩く習慣がないので見つかる筈もない。

歌鳥は必死に声を殺して、涙を止めようと謝りながら俯いている。

時折ゆれる小さな肩が痛々しい。

ひどく胸がざわついて、クリスは困り果てた。

クリスには自分が泣いた記憶がなく、
誰かが泣いているのを慰めた経験もなかった。

必死に記憶を辿り、どうするべきか頭を回転させる。

しかし答がわからない。

わからないなりに、クリスはゆっくり手を伸ばして歌鳥の頭に触れた。

「……」

「…ごめん、…なさい…」

「いい。」

カトリは悪くない」

歌鳥は目を見開く。

その言葉 …

「…私、……」

しぼり出される、積年の思い。

「私…、嫌われる事が怖かった……」

クリスは首を傾げたが、促すでもなくただ頷いた。

「私のせいじゃないって…思っても、何も変わらなかった…。

いつそ本当に私のせいなら良かったのに……私のせい、なら、自分で解決できたの…に…」

父親がいなくなったのは歌鳥のせいじゃない。

母親が死んだのは歌鳥のせいじゃない。

祖母と伯母の確執も歌鳥が何かをしたせいじゃない。

歌鳥を幸せにしない全ての要素が、

歌鳥の行いとはまったく無関係のものだ。

「仕方ない…って、…

私のせいじゃないって…

でも、そうしたら誰かのせいにするしか…、なくて

……でも駄目なの。

誰かのせいにしてしまったら、今度こそ私のせいで私が嫌われる…
…」

「…、ん」

事情はまったくわからないが、言っている意味はなんとなく理解出来た。

クリスの声は染み入るほどに柔らかく淡い。

「そんなの気にしなればいいのに……」

他人にどう思われるかばかり気にして……悪いほうばかり目について…、

いつも……」

「ん……」

「……嫌い……」

私、こんな私…、私が一番嫌いですっ……」

顔を覆ったまま、歌鳥は俯いている。

なおもごめんなさい、と呟いて。

指の間からこぼれ落ちる雫を見やって、

クリスはそつと歌鳥の腕を下ろさせた。

「だいじょうぶ」

相も変わらず、抑揚に欠けるその声で。

「おれはカトリをきらってない」

涙で濡れた瞳のまま、

歌鳥は顔を上げてクリスを見た。

無表情。

しかし無垢そのものの顔がそこにある。

「カトリが泣いてもきらわない。」

だから謝らなくていいし、おれの気持ちは考えなくていい」

赤紫の澄んだ瞳が、

滲むほど濡れた濃紺の瞳を見守る。

後にも幾つかの言葉が交わされた気がしたが、

歌鳥はそれを後日になっても思い出す事が出来なかった。

ただ、人前で声を上げて泣いたのは、

記憶にある限り初めての事だったと思う。

…

セヴアルスタに雨期が近付いている。

風に混じる水の匂いが草をそよがし、
薄藍の空は一層憂える。

雨はまだ降り始めてもない。

【1】セヴァルスタの反乱軍（後書き）

初めまして、五木萩と申します。

もしくは初めましてではない方もいらっしゃる……かな？
この話は以前掲載したものを直して載せておりますので。

改編は2度めです。

正直手間がかかりました……。
話の大筋は変わっていませんが。

今回は色々と心境の変化といいますが ……、
私、東北のちよつと今大変な県に在住してるんですよ……。

で、しばらく続きを書く心境にもなくて、ようやく最近になって再開してみたわけでした。

で、で、一番新しい話と文章の形態？みたいなものを統一したいなあ……と思い、10何話と掲載させていただいた話を全て編集し直しました。

大変だった！！！！

すごく大変だったので、たぶんこれが最後の改編でしょう。
これからは一直線で行きたいと思えます。

よろしかったらお付き合いください。
では、これで。

これから掲載ラッシュが始まります 〓 (^3^) /

【2】あるひとつの終焉

夜を足元から飲み込んで
暁の咽喉が産声をあげる
吐息は薔薇色
大地を奔るは罪業の腕

【Prologue:Lies】

…天上を覆う間は煌めく星と虹の紗に彩られ、
ドーム型の巨大な籠をいくつも抱く。

そこは宇宙に似ている。

その籠のひとつに、

星空の下で色とりどりの花々を咲かす庭園がある。

ひとり枝を詰めていた手を止めて、

夕陽色の髪をした青年が顔を上げた。

「何？」

どこへともなく投げ掛けた言葉は、
同じくどこからともなく響く少女の声で応えられた。

『すぐに来れる?』

姿なき声は幼く、しかしどこか大人びた口調だった。

それに応える青年の声は闊達で柔らかく、よく澄んでいる。

「道具を片付ける時間を差し引いてくれるなら」

『ええ構わないわ』

「ありがとう、マリー。」

待ってもらうついでに、何の用なのか簡潔に聞かせてくれる?」

マリーと呼ばれた姿なき少女の声は、

何の感情も滲ませぬまま淡々と言葉を告げる。

『貴男のゴーレムを貸して欲しいの。』

気になる事があるみたいだから』

「気になる事?」

足元の麻袋に道具一式を放り込みながら、青年は瞳を空に泳がせた。

夕陽色の髪に対して、瞳は晴れ渡った蒼穹だ。

「……あいつ?」

『そのようね』

ふうん、と呟いた彼を指して花壇の陰からヒラリと漆黒の蝶が舞う。

差し出された指に止まると瞬きするように羽根を動かした。

「で？何処に？」

『セヴァルスタ諸島よ』

蝶が揺らぐ。

羽根に開いた一对の蒼い瞳が、長い睫毛で本物の瞬きをした。

【春の終わり】

リーヴダリル帝国

南方セヴァルスタ諸島。

帝都より遠く離れたこの地に反乱の旗が揚がったのは2年ほど前の事である。

1人の神父を盟主と仰ぐその軍勢は南半島の要所セナ砦を攻め落とすまでに迫ったが、

雨期を前にその勢いを休ませている。

リーヴダリル歴410年、

風はまだ春の匂いを含ませている頃である。

…農村の畦道に細やかな雨が降る。

その道中を駆ける小柄な人影に目を留めて、

1人の農夫が声を上げた。

「おおい、こつちだ、
入ってきなあ」

その声に気付き、道を駆けていた人物が木造の小屋の軒下で手を振る男の姿を認めた。

全身を覆うマントをはためかせながら、その小屋に駆け込む。

農夫が柔く声をかけた。

「少し弱まるまで、休んでいきな」

「ありがとう」

その声に男はおや、と呟いた。

「お前さん女の子か。」

「1人だったからってつきり」

うん、と頷いたその少女がマントを脱いだ。

年の頃は15〜16、

褐色の肌に黄銅色の髪、

にっ・と笑った顔はいかにも利発そうで、仕草のひとつひとつにも生命力が溢れている。

少女は屈託なく男を見上げ口を開いた。

「おじさん、ここの人？」

「ああ、そつだ」

「静かだな、1人か？」

「ああ、女房と子供はセナにやったよ。

ここは境が近いから、いつ戦になるかも知れないからな」

「おじさんは？」

「一緒に行かなかったの？」

マントの露を払いながら、少女が首を傾げる。

男は何故か困ったような顔で笑って、

「必ず来るって決まったもんでもねえし……、
何せ畑があるからなあ……。」

「嬢ちゃんの方こそ1人かい？」

少女が笑う。

「うん、セナに行くところ」

それを聞いて男も笑う。

「うん、そうかそうか、
それがいいよ。」

この辺りは危ないからな。
皆に行けばイリアス神父の解放軍が守ってくれる」

止みかけた雨、
陽光が滲むようにして雲を溶く。

「おじさん、名前は？」

「ん？」

緑玉の瞳が見上げて笑む。

「皆に家族がいるんだろ？
元気にしてるって、伝えておいてやるよ」

*

セナ砦の陥落から1ヶ月。
平穏な日々が流れている。

北半島に残る敵勢力が砦の奪還に動くことに備えて、盟主イリアスは近隣の農民を砦内に避難させた。

これにより砦の中では女子供の姿が見られるようになり、戦の殺伐とした空気は和らいでいる。

…

「…ああ、止んでる」

中庭に出た歌鳥カトリは空を見上げて声を上げた。

彼女に続いて顔を出したケイヴィンが笑う。

「干せるかなあ」

「どつでしようね、

まだ雲行きは怪しいかも」

振り返り微笑むこの少女は、現在この砦の中で、最も“異質”な立場にある人物である。

歌鳥は“異邦人”だ。

理由も経緯もわからず、

突如この異界に迷い込んでしまった。

祖母の通夜から記憶が飛んで、

気が付いたらこの砦の一室に眠っていた。

知らない間に川で溺れていたらしく、

表向きそのショックによる記憶障害で、自身の出自を覚えていないという事になっている。

世界が違うのだから、
過去など無いも同然だろうと歌鳥は思っている。

異界の存在などここでは誰も知らないのだ。

歌鳥は故郷で家族とも友人とも疎遠であった。

父母はなく、

家には冷やかな伯母と滅多に帰らぬ伯父、
事情の複雑な従姉弟2人があるばかり。

歌鳥は故郷に帰る事を切望していない自分を自覚していたが、一応
気に掛けてはいる。

(きっと大騒ぎになっただろうな……)

それともただの家出だと思われたかしら、
だったらいいんだけど……)

失踪だの誘拐だの大きな騒ぎになっていたとしたら、伯母は大層不
快な思いをしていることだろう。

何より世間体を気にする人だから。

同情はするが罪悪感は以前ほどではない。

いい気味と迄は思わないが歌鳥にもどうしようもない事だと思っ
うになった。

開き直ったのか、遂に達観したのか、
歌鳥自身にも判断がつかかねる心境の変化だ。

そのきっかけになったのが1人の少年である事だけが確かな事だった。

…その少年が廊下の向こうから歩いてくる姿を認めて歌鳥は微笑った。

「おはようございます、
クリスくん」

「ん…」

短い返事と無愛想はいつもの事だ。

加えて、見たところどうやら寝起きらしい。
重そうな目蓋が赤紫の瞳を忙しく撫でる。

笑う歌鳥の横でケイヴィン少年が呆れたようにクリスを見上げた。

「クリスだらけ過ぎっ！
早く顔洗って来てっ！」

見下ろすほど年少の子供の指示に素直に頷くクリスを見、歌鳥はくすくすと声を出して笑った。

…彼はフルネームを
クリスタル＝アーム
という。

この反乱軍においては鬼神のごとき豪勇で同胞にすら畏れられる最強の戦士である。

…とは言われても歌鳥にはいまいちピンとこない。

槍の腕前に関しては実際に目の当たりにしているので疑いはしないが、

普段のクリスを見るかぎり他人に怖れられる要素は見当たらなかった。

背は高くなく体格は細身、顔立ちは中性的で、繊細にすら見える。

どこかあどけない風情は内面から表れるものらしく、彼は子供っぽいというより、無垢の雰囲気を持つ少年だった。

ちなみに幼少期の頃に人間社会の外に捨てられた為、年齢は不詳である。

推定では歌鳥とそう離れた年齢ではないらしいので、“さん”付けから“くん”付けに切り替えた訳だ。

ところで、歌鳥とクリスが2人で並んでいるとかなり目立つ。

当人たちの知らぬ所でこの2人は注目の的だった。

ここに来た当初は兵士達に随分言い寄られて困惑していた歌鳥だったが、最近になってそれがない。

皆に女性が増えたから珍しくも何ともなくなったのだろう、と歌鳥は思っているが、

実際はその少し以前、歌鳥がクリスと親しくなっていると判断された頃から、声を掛けてきた男たちは息を潜めている。

戦場に出た経験がある者でクリスを怖れない者はいない。

周囲でそんな思惑が飛び交っているとは当の2人は夢にも知らないのだが。

…

相も変わらずケイヴィンの後に付いて歩き回って雑用をこなしている歌鳥だが、この時は1人で洗濯物の籠を抱えて中庭に向かっていた。

（今日1日は降らないと
いいけど……）

などと考えていた時、

廊下の出会い頭に現れた人影に驚いて歌鳥がよろめいた。

それを見た相手が、慌てて歌鳥を支える。

「ゴメン！大丈夫！？」

「は、はい。こちらこそ」

顔を上げて、歌鳥は自分とそう背格好の変わらぬ相手の顔を見た。額を丸出しにするほど短く切られた明るい色の髪と、黒すぎるほどの褐色の肌。

一見するとどう見ても少年にしか見えないが、すぐに少女だとわかった。

発せられた声が澄明な高い女声だったからだ。

転ばずにすんだ礼を言いながら、内心で歌鳥は首を傾げた。

一度見れば忘れようもなさそうな印象的な容姿だが、見覚えがない。

それに、皆に集まっている少女達とはどこか趣が違う気がした。

相手も同じような事を考えているらしく、まじまじと歌鳥の顔を見ている。

…そこへ。

「ヴィヴィ姉っ？」

振り向くと、歌鳥に遅れて井戸から洗濯物を運んで来たケイヴィンが体を傾け立っていた。

その視線は歌鳥を挟んで立っている少女に向けられている。

少女は笑ってケイヴィンに応えた。

「よう、ケイ。

少しは背え伸びたか？」

ぱつと笑って、ヴィヴィと呼んだ少女にケイヴィンが駆け寄る。

「お帰り！」

もう先生に会った？」

「いや、まだ。

イリアス何処にいる？」

歌鳥は首を傾げた。

ここでイリアスを呼び捨てする人物は殆んどいない。

「案内する？」

「ああ、いいや。

自分の仕事しな。

山程あんだろ？」

抱えていた籠を指差され、ケイヴィンが頷き、歌鳥に視線を移した。

「カトリ、

それ、おれがやるからヴィヴィ姉の案内してあげてくれない？」

「え？あ、はい」

抱えていた籠を下ろして、歌鳥は同年代であろう少女の顔を見た。

彼女が頷く。

「よろしく」

*

…今や司令室となっているイリアスの居室は、かつて書斎だった部屋が使われている。

半端な階の、半端な位置にあり、場所はかなり分かりにくい。

その分かりにくい部屋へと歌鳥が少女を連れて行き、ノックをしてドアを開けた時、部屋の中には2人の男が居た。

共に壮年の偉丈夫、顔を出した歌鳥を認めて、片方は微笑って、片方は鷹揚に声を掛けた。

「よう、どうした？」

「おはようございます。案内を頼まりました」

「案内？」

歌鳥の後ろに覗く顔を見て、奥の椅子に腰掛けていたイリアスがおや、と笑む。

「戻ったか、エレナ」

イリアスの呼び掛けに少女は複雑な表情を浮かべた。

「名前の方で呼ぶな、っていつも言ってるんだろ」

真実不快そうな少女の口調と表情に歌鳥は目を丸くし、部屋の真ん中のソファ―に座っていた男はくっくつと笑った。

イリアスは顔を傾け、

「良い名前だと思っただがなあ……」

と零す。

少女の返事は素っ気なかった。

「オレの名前じゃなければオレもそう思うよ。」

…あ・久し振り、ドル」

「おう、無事で何よりだ」

歌鳥はしばし3人の様子を不思議そうに眺めた。

イリアスとドルサツクに

こんな雑な態度を取る人物は初めて見る。

しかし、歌鳥はすぐに我に返った。

「あの、じゃあ私これで」

ケイヴィンの手伝いに戻るつもりで踵を返した所に、イリアスの声

が掛かった。

「御苦労様、カトリ。
ついでと言っては悪いが、何か飲み物を頼めるかな。
彼女に」

「あ、はい分かりました。

…何でも？」

「酒なら何でも」

茶化す口調のドルサックを横目で睨んで、イリアスが「茶」、と言
い切った。

くすくすと笑い、分かりましたと返事して歌鳥が退室する。

その背中を見送り、エレナがイリアス達に向いた。

「で、あれ誰？」

「保護した少女だよ。
記憶が混乱しているらしく出身は不明だ。

よく働かし、気も利く様だからケイヴィンの手伝いをしてもらって
いる」

それを聞いてエレナが少し眉をひそめた。

「出身不明って…、

そんなよくわかんない奴を近付けていいのかよ？

お前また賞金額上がったたぜ？」

「気をつけてはいる」

イリアスは、ドルサツクの座るソファーに向き合って置かれたもうひとつに座るようエレナに示した。

さて、と呟く。

「何か変わった事は？」

「ああ、…うん・少し気になる話があるんだ」

*

【神隠し】

ケイヴィンは思いがけない光景にキョトンとして足を止めた。

「クリス？」

クリスだけがただ廊下を歩いているだけなら勿論驚きはしないが、彼は1人ではなかった。

たくましくもないその腕にしがみつくようにして歩く、幼い少女。

「何？その子どうしたの」

見れば少女は泣きじゃくっている。

ケイヴィンの声に気付いたクリスが振り向いた。

ケイヴィンに少女を示し、短く言う。

「母親が」

「？」

年齢の割に異常に拙い口調でクリスが説明するには、こういう経緯である。

*

…クリスが朝食を済ませて槍の訓練のため裏庭に向かうと、微かに子供の泣く声が聞こえた。

不審に思ってその声を探し林を分け入ると、少女が泣きながらしゃがみこんでいた。

「…どうした」

クリスは泣く子供に接した経験はないが気後れはしなかった。

子供は泣くものだ。

視線を合わせて屈みこみ、クリスは首を傾げる。

涙にまみれた顔を上げた少女が言うには、

朝起きたら隣で寝ていた筈の母親の姿がなかった、という。

頷くクリスに対して少女はしゃくりあげながら、

思い当たる所は探した、

もしかしたら用があつて家に帰つたのかもしれないと思つて帰り道を探したのだがその道がわからない、と訴える。

クリスは首をひねつた。

常識に欠ける彼でも、それは不自然だと感じた。

「…じゃあ、さがそう」

泣く少女が頷き、クリスの手を握つた。

知る者は殆どいないのだが、クリスは子供や動物には何故かやたらと懐かれる。

無言でクリスはその手を引いて砦の中へ戻つた。

…これが事の経緯である。

*

「変だねえ、

給仕場は搜した？」

「さがした」

少女の顔を覗きこみながらクリスに問うケイヴィンに短い声が返さ

れる。

「井戸場は？浴場は？」

「さがした」

ことごとく擦れ違った、というのは考えにくい。

「おかしいなあ……」

「おうちにかえったのかもしれない」

少女の訴えに、ケイヴィンとクリスが目を交わす。

……どんな用があるにせよ、母親が一言もなく子供を置いて姿を消すだろうか。

「……さがそう」

クリスの言葉に頷き、

ケイヴィンが宥めるように、泣きじゃくる少女に声を掛けた。

「おれ皆に聞いてみるよ、何か知ってる人がいるかもしれない。

お前、名前は？」

母ちゃんは何ていう？」

クリスにしがみつきながら、少女は小さくリシア、と呟いた。

「ママはエメリア」

「そうか、うん」

言って、ケイヴィンは踵を返す。

クリスがリシアの手を緩く握り返した。

*

「…ラリーを通じて調べろつつたゴーレムの話、
ちよつと妙な噂を聞いた」

卓上で腕を組みながら、イリアスがエレナの言葉に眉を上げた。

「妙な噂？」

「帝都の連中が、造獣師を召集してる。

名目は戦力の増強ってことらしいんだが、

実際のトコ召集が始まって2ヶ月余り、
戦場に投入されるゴーレムが増えた話はないらしい」

イリアスは眉をひそめた。

「…それは確かに妙だな。

殖やせるものならとつくに殖やしているはずだ。

ゴーレムは量産出来ない。

生涯にひとつしか持てないのだから」

…ゴーレムとは呪術と血によって造られる獣であり、使い魔のごとく人間に使役される生き物である。

軍人が使うことが多く、

馬などよりも主に忠実で、知能や戦闘能力が高い。

因みにこの軍でゴーレムを有しているのは、イリアスただ一人である。

「まだ造っていない人間がそんなにいるとは思えないが……」

「一般人にも造らせてるってのは？」

エレナの意見に異を唱えたのはドルサツクだ。

「まさか。ゴーレムは主にしか従えないんだぜ？」

いわば懐刀、しかも性能が主人の能力に関係しない。

そんな危なっかしいモンを民衆に持たせる訳がねえ」

頷き、イリアスは考え込むように頬杖をついた。

「…たとえ主人の方を脅迫してゴーレムを戦場に駆り出すとしても…。」

いや、それでもやはり量産は出来まい……。

ゴーレム造りには主の血を必要とするから、
体格や体力に余裕のある人間でなければ無理だ」

「それで主人が死んだりしたら、暴走ゴーレムだけが残るってわけ
だろ？」

かなりリスキーだな」

ドルサツクの指摘に頷き、イリアスは頬杖していた腕を下ろしてそ
れを眺めた。

薄手の長袖に隠されているが、その下には本人の風貌には似つかわ
しくない傷痕が在る。

ゴーレムを造るのに必要な血は一滴二滴ではない。

必要量を採って終わりなら良いが、
必ずそれで済むとは限らなかった。

幸いイリアスは軽い貧血を数日味わっただけで済んだが、
止血や処置がうまくいかず死亡する例も耳にした。

「…駄目だな、

目的に見当を付けられる程俺もゴーレムには詳しくはない」

イリアスが息を吐いた時、扉の向こうから女の声がした。

「すみません、開けて貰えませんか？」

両手が塞がっちゃって…」

「ああ、カトリか。
ご苦労さん」

ドルサックがドアを開け、カップの載ったトレイを抱えた歌鳥を招き入れた。

「ありがとうございます」

歌鳥は笑って小さくお辞儀をし、部屋に入ってひとりひとりにカップを手渡す。

「どうぞ。…ええと…」

エレナの前に来て、歌鳥が少し困った顔をした。

どう呼ぶべきか迷っているのだろう。

察して、ドルサックが声を掛けた。

「カトリ、こいつは

エレナ＝ヴィヴィッドっていうんだが、自分の名前が嫌いらしくてな。

名前で呼ぶと怒るから、姓から取ってヴィヴィって呼んどけ、皆そっしてさ」

はあ、と応えた歌鳥が改めてエレナに向けた。

「どうぞ、ヴィヴィさん」

「アリガト」

どこかぶっきらぼうな態度に歌鳥は首を傾げたが、特に気には留めなかった。

「じゃあ、失礼します」

「ああ御苦労様、
何度も済まなかったね」

いいえ、と歌鳥は笑った。

*

周囲の視線を独占しながら子供の手を引くクリスと、歌鳥が行き合ったのは数分後のことだった。

「クリスくん？…その子、どうしたんですか？」

歌鳥は目を泣き腫らした

少女に目を留める。

5歳くらいだろうか。

クリスはケイヴィンにしたのと同じ説明を、歌鳥にもした。

「そう…それは心細いね、大丈夫？リシアちゃん」

リシアは歌鳥を泣き疲れて淀んだ瞳で見上げた。

「…リシア、たのめるか」

「はい？」

クリスの言葉に歌鳥が首を傾げる。

「リシアのいた村に、行ってみる。…念のため」

「でも……」

その可能性は低いのでは、という推測はクリスも共有していた事だったが、

少しでも少女を安心させてあげたいのだという彼の気遣いが伺えた。

「1日あれば行って帰って来れる。」

大丈夫だと思う」

前半は距離、後半は情勢に関する見通しだった。

「ええ、でも……。」

それはイリアスさんに相談してからにしましょう？

無断で遠出をしたらきつと心配します」

キョトンとして、クリスは少し考えて頷いた。

彼はこつこつ事にはいつも気が回らない。

*

厨房から兵士たちの休憩所にまで顔を出して、
ケイヴィンはロシアの母を尋ね歩いていた。

「どんな母さんなんだ？」

兵士の問いにケイヴィンは首を振る。

「来たばかりの母子だからまだ顔おぼえてない」

「じゃあ俺たちにもわからないよ」

「若いはずだよ、娘がまだ小さいもの。」

髪が赤茶色で肩までの長さだと言ってた」

見たか？と兵士が後の仲間を振り返る。

それには否、という返事が返ってきた。

「そつえば」

隅から聞こえた呟きに、ケイヴィンが飛び付いた。

「なに？何でもいいよ、

何か知ってるの!？」

いや、と若い兵士は言い淀む様子だった。

「直接は関係ないと思うんだけど……、

他にもいなくなったやつがいるな…って

「？」

「なに？どいつだ？」

眉をひそめて年配の兵士が振り返る。

「おれと同じ村から来た奴なんだけど…、
一昨日から姿が見えないんだよなあ。

部屋にも帰って来ないし。

私物はそのままだから、どっかにいるとは思っただけど…」

「なんだあ、そんな事…」

言っつて、ケイヴィンは何か引っ掛かった。

「…捜してみた？」

「いや、だつてホラ、

昼はたまたま顔合わせないだけで、

夜はもしかしたら避難してきた中に気が合う女がいてそこに入り浸
つてんのかも……」

「子供の前で何言つてんだオマエは」

どつかれて、彼は気まずげに目を泳がせた。

ケイヴィンは何か考え込んでいる。

「…捜してみしてくれる？
なんか変だよ、それ」

*

イリアスの部屋にクリスが顔を出したのは正午過ぎの事だったが、ドルサツクとエレナはまだ同室していた。

クリスの拙い説明の内容にまずイリアスが眉をひそめ、次いでエレナが声を上げた。

「…娘がリシアで母親がエメリア？…」

オレ、ここに来る途中で、その2人の家族に会ったぞ？」

「？」

クリスが首を傾げる。

「父親が村に残ってた。

ここに居る家族への伝言を頼まれてたんだ。

…母親は村には行ってないと思うぜ、

帰ったのなら途中でオレとすれ違っはずだ」

クリスが考えこむ。

「…なら皆の中にいる…」

「朝からずっと捜しているのだろうか？」

なのに未だ見つからないのは不可解だな…。

幼い子供を置いて、それ程難解な場所に行くとは…」

…なら。

（攫われたか）

イリアスは首を振る。

農村の一市民だ。

わざわざ皆に忍び込んで攫う理由がわからない。

…ふと、再びエレナが口を開いた。

「…神隠し」

「あ？」

エレナの呟きに耳を傾けたのはドルサクだった。

「なんだ神隠しって」

渋い顔でエレナが応えた。

「…最近マラバールで夜毎人間が姿を消すらしい」

マラバルとは諸島最大の港町であり、セヴァルスタ諸島の首都である。

今のイリアスらにとっては最大の敵拠点と言える。

「姿を消すつて……、
夜逃げじゃねーの？ソレ」

「いや、家財道具は残ってるらしいし、
子供だけが消えるつてのも聞いた。

第一、城門の守りが堅くてホイホイ出入りなんか出来ねえよ。

オレだつて検問の目を盗んで抜けて来るのにすつげえ苦労したんだぞ」

「…神隠し…」

イリアスが呟いた時、更に困惑する報告が駆け込んで来たケイヴィン少年によりもたらされた。

「…先生！変だよ！！」

ここ最近で兵士や避難してきている人が何人か姿を消してる！
それも皆荷物は残して！」

*

【不可視の妖】

歌鳥は眠る少女を抱き抱えながら砦の中庭の階に腰掛けていた。

夕陽が沈む刻限になるまで砦中を歩き回ったりシアは疲れきって、休憩のつもりで座ったこの場所で寝入ってしまった。

小さく寝言でママ、と呟くのが痛々しかった。

(…ママ、か…)

歌鳥は切ない想いで少女の頭を撫でた。

「…カトリ」

柔らかな声に首だけで振り返ると、クリスが階を降りてくるのが見えた。

「…クリスくん。」

「どうでした？行くの？」

「行かない。」

「……多分行っても見つからない」

その言葉に歌鳥は怪訝そうに首を傾げた。

「…どういう事？」

クリスはイリアスの居室で聞いた話を歌鳥に告げた。

「…いなくなってる？」

「…ん」

「どうしてでしょう…。
逃げちゃったのかしら？」

…うつん、リシアちゃんのお母さんは逃げるわけじゃないですよね、
だってそもそも逃げて来てここに居たんだもの」

歌鳥が抱えたりシアの顔をクリスが覗きこむ。

少女の閉じた目尻には、涙の痕が赤く残っている。

「…子どもには」

「はい？」

「…子どもには、親がいるんだな」

その言葉に歌鳥は少し目を丸くした。

「ええと…“いる”って言うのは“必要”の意味？」

クリスが頷く。

この少年は言葉数が少なく文章で喋ることが苦手なので、確認しないと会話が成り立たないことがある。

「おれは覚えてないから、わからないけど」

染み入るほど静かな声音でクリスが呟き、歌鳥は少し首を傾けて彼

の顔を見た。

相変わらず表情には何の心情も窺えなかったが、歌鳥はなんとなく淋しさに似た色を濃紺の瞳に浮かべた。

…クリスは親に捨てられた子供だと聞いた。

イリアスに拾われたときは言葉を話さなかったが理解はしていたらしい。

知ってはいたのだ。

ただ忘れてしまっていた。

言葉を覚えるまでの年齢になってから森に捨てられた子供は、

人と接することなく育ち、それ以前の記憶を失った。

…赤ん坊のまま捨てられるのと、どちらがより残酷だろう。

歌鳥は目を伏せ、リシアに掛けた自分の上着を撫でて小さく語り出した。

「……私のお母さんが亡くなったとき、私はちょうどリシアちゃんと同じくらい歳のだったから、心細い気持ちはわかる気がします……」

歌鳥の言葉に、クリスが顔を向ける。

それに向かって微笑み、歌鳥は僅かに目を伏せて、リシアの髪を撫でた。

「いて当り前の人がいなくなると、とても悲しい」

そのとき、パタ、と小さな音がして、パラパラと雨粒が落ちてきた。

「はいろっ」

歌鳥の腕からリシアを受け取り、クリスが立ち上がった。

既に陽は地平に飲み込まれている。

「カトリ」

「はい？」

呼び掛けて、しかしクリスは言葉を次げなかった。

「よく、わからない」

「はい？」

歌鳥が首を傾げる。

クリスも首を傾げた。

うまく、言葉が出ない。

何か話したい事があるのに頭の中で形にならない。

なおも首をひねるクリスの様子を見て、くす、と歌鳥が笑った。

「わかったら聞かせてくださいね」

優しい声にクリスはキョトンと目を丸くして、続いてコクリと頷いた。

その顔に、一瞬ふわりと温かな色が浮かぶ。

…微笑みに似ていた。

*

歌鳥とケイヴィンの2人でぐずるリシアを慰めながら夕食を済ませ、とりあえず今夜はリシアを歌鳥の部屋で眠らせる事になった。

部屋までリシアを抱き抱え連れていく役になったクリスと歌鳥が並んで薄暗い廊下を歩いていったとき。

「…カトリ？」

突然足を止めた歌鳥を怪訝そうにクリスが振り返る。

歌鳥は立ちすくみ、一点を凝視していた。

…あれはなに。

床の一ヶ所、水銀のような液体が撒かれているように見えた。

問題はそれが生き物の様にゆっくりと床を滑り、這い回っている事だ。

緩やかに、足元から予感は昇ってきた。

…あれは良くない物だ。

初めての感覚だった。

全身の血が警鐘を鳴らす。

「カトリ？」

「…あれ」

歌鳥はクリスの前方、動き回る水銀の膜を指差した。

その指し示す方を見やり、クリスは首を傾げた。

「？」

その反応に、歌鳥は戦慄を覚えた。

…見えてないの？

するりと“それ”がクリスの足元に近づく。

「…駄目！！離れて！！」

歌鳥の悲鳴とクリスの落下は同時だった。

「！！！！？」

クリスの右足が突然沈む。

ガクンと崩れた体はしかし、正常な床に残されていた左足の跳躍に救われた。

「なに？」

クリスの腕の中でリシアが困惑の声を上げた。

再び歌鳥が叫ぶ。

「こつち！早く！！」

離れなければ。

歌鳥がクリスの腕を引き、2人は駆け出した。

振り返る歌鳥の目に追って来る水銀の膜が見えたが、その速度はど
うやら早足よりも遅い。

少しの間を置き、歌鳥は迷う。

クリスとリシアにはあれが見えていなかった。
なら、他の人にも見えない可能性が高いのでは。

（放っておいていいの？）

クリスの足が沈んだ。

あれは人を飲み込む孔だ。

(もしかして、あれが)

リシアの母や兵士たちを。

心臓が叩かれた様に激しく脈打つ。

生まれて初めて、使命感が歌鳥の胸を急き立てる。

(どっしょっ…)

焦燥する歌鳥の横で、

クリスも初めての感覚に戸惑っていた。

クリスは“森の仔”だ。

第六感なら人間よりも獣に近く、気配や危険を察する能力は群を抜き鋭い。

なのに、今は何も感じられない。

何かは在る。確実に。

足に残る異様な感覚の名残がその証だ。

水よりは重く温い、泥よりは軟らかく冷たい。

(なにが)

見えない。感じられない。

得体の知れない何かに対し戦慄するのは初めてだ。

それは獣の部分の本能だった。

「カトリ」

「はい」

「何が見えてる？」

「水…、銀色の水みたいなものが床の上で動いているのが見えます。

鳥とかの影みたいなのに、ベツタリ床の上を滑ってる」

「どこにいる？」

「追って来てます。

でも随分遅いみたい…」

「……」

頷き、クリスは怯え切ったりシアを抱きなおした。

「人の、多いところに行くとは良くない」

「ええ、でも…」

「おれ達でおとりになれるなら、なった方がいい。

あれが見えてて、遅いなら逃げ切れる。

位置を教えてください」

珍しくクリスが饒舌に言葉を操る。

頷き、歌鳥は後ろを振り向いた。

「いるか」

「はい、こっちに向かって来てます」

「…カトリ、リシア、耳、塞いでくれ」

「はい？」

突然の指示に歌鳥が聞き返したと同時に、クリスは大きく息を吸い込んだ。

…

*

小粒の雨が夜風に混じり、霧の様に回廊の窓から吹き込んで男の肩を撫でる。

ドルサツクは寒そうに軽く身震いして、寝静まるにはまだ早い皆内を見回した。

ドルサツクは豪胆な男だったが、ああも怪談めいた話の後では神経も尖る。

しかも、具体的な対処策は何も出ていない。

（夜毎消える人間、ねえ）

ふとドルサツクは足を止め、自分が歩いてきた方向に目を向けた。

（……まさかイリアスまで消えたりしないよな？）

そんな事態にでもなったら大事である。

引き返そうか迷っている所で、

耳を貫くようなやたらよく透るテノールが聞こえた。

「……ドルサツク！……！」

……、

間を置いて自分の名前だと気づき、ドルサツクは目を丸くした。

「……何？俺？」

今の声は誰だ。

呼ばれた男は首を傾げる。

ドルサツクのみならず皆中の人々が何事かと思いい顔を見合わせる。

しかし声の主を正確に判断出来たのはただ1人だけだった。

居室にて資料を漁っていた、声の主の“育て親”。

「……クリス？」

*

あまりに突然、あまりに絶大な音量に歌鳥は腰を抜かすかと思った。リシアなどは目を点にして声もない。

「……クリスく……、どこからそんな声が……」

「今はどこにいる」

事も無げ、しかし重要な問い掛けに歌鳥は慌てて視線を巡らした。

「……あそこ！」

今、壁の松明の下を通りました、蛇行しながら向かって来る……」

視覚によって追って来てる訳ではなさそうだ、と歌鳥は思った。

得体の知れない奇怪を前に歌鳥は意外に平静だった。

使命感に腹を括った所為かもしれないし、

普段と変わらず心情の色に欠けるクリスの顔がすぐ横にある所為かもしれない。

「あの、なんでドルサツクさん？」

答えをクリスの口から聞く前に、呼ばれた当人が軽い足取りで2人の行く手に姿を見せた。

「お？クリス？

……今の声、お前かよ！？」

ドルサツクは意外な事実を目を丸くする。

彼はクリスと言葉を交わすのは（比較的）頻繁だったがああも張り上げられた声を聞くのは初めてだった。

クリスが歌鳥に向き、数秒前の問いに答える。

「一番近くに匂いがした」

「はい？匂い？」

「匂いつて…お前そこまで野性が……」

呆れたようなドルサツクの言葉が続くのに構わず、クリスは腕に抱いたりシアをドルサツクの胸に突き出した。

「頼む。」

連れて向こうの方に走ってくれ」

「は？何だよ？」

とりあえず茫然としている少女の体を受け取り、ドルサツクは首を傾げた。

後方を振り返った歌鳥が切迫した声を上げる。

「来ました！！」

「はあ？」

ドルサツクは歌鳥の視線の先を怪訝な表情で探ったが、特に異常は見当たらなかった。

それを察し、歌鳥とクリスは顔を見合わせる。

説明する時間が惜しい。

「行ってくれ」

「イヤいつたい何が…」

「早く！！！！」

「早く！！！！」

他にもないクリスと歌鳥の2人に同時に怒鳴られてはドルサツクも口を開けるしかない。

声もなく頷き、振り返りながらも薄暗い廊下を駆け出した。

2人がそれに遅れて走りだし、廊下の岐路で別方向に踏み出す。

数歩を駆け、クリスが訊いた。

「来たか」

「はい、こっちに」

頷き、歌鳥と並んで走る。

より近くにいる者を追って来る、と判断した。

だが、これから …

(どうすれば……)

撒いてはいけない。

追い付かれてもいけない。

どう対処すべきなのか解らない。

さすがに歌鳥の息が弾む。

全速力とはいかないまでも走り続けるのはこの華奢な娘には辛い。

(いつまで …)

何とかしなければ。

けれど触れれば飲み込まれてしまう。

そんなものをどうすれば ……、

その時、歌鳥のやや前方を駆けていたクリスが歩調を緩めた。

「イリアス」

「壁に寄りなさい」

2人の行く手、穏やかな声ながら毅然として指示したイリアスは左

手に細い弓を構えて矢をつがえている。

歌鳥は驚いたが、指示通りに壁にぶつかるようにして身を寄せた。

見えるのか、とは訊くまでもない。

矢尻はまっすぐ床の水銀を指している。

イリアスは苦笑めいた表情を浮かべた。

「…さて、昔とつた杵柄がどこまで通じるか」

弓弦が鳴く。

一直線に水銀の膜を捉えた矢はしかし音を立てて石の床を抉り削っただけ、

依然としてその膜は這い回りながら迫り来る。

小さく舌打ちし、イリアスが第二矢を放った。

結果は同じ。

その間にクリスと歌鳥の2人を自分の後ろへ下がらせ、第三矢を右手に取る。

その矢尻で弓を構えた左手を掻き切った。

イリアス自身の血に塗れた矢が水銀を狙う。

「これで駄目なら一旦退却だな」

呟いて、弦から矢を放つ。

石の床に弾かれる筈の矢がズブツ、と嫌な音を立ててめり込んだ。

瞬間、その水銀が膨れ上がった。

クリスは目を瞠る。

依然クリスにはその水銀の姿は見えない。

しかし景色の一部分が歪み、霞のように人の形を成したのが見えた。

胸の悪くなるような絶叫が上がる。

クリスには聞こえなかったが、歌鳥とイリアスには聞こえた。

イリアスは微かに眉をひそめたただだったが、

歌鳥はあまりのおぞましさに悲鳴を上げて膝から崩れ落ちた。

咄嗟に駆け寄ったクリスがその肩を支えたのを視界の端に見留めながら、

イリアスは“それ”から目を離さない。

床に倒れ伏した人型のそれから水銀が流れ落ちて、

半透明の皮膚のような表面を露にした。

ノックペリとして、凹凸に乏しい顔。

目は無かった。

歌鳥もそれを凝視した。

気味が悪かったが、目を逸らす事が出来ない。

3人の視線が集まる中、突然その体が崩壊する。

まるで砕かれた寒天の様な欠片が、吸い込まれるようにして床に消えた。

「…っ……」

吐き気がする。

歌鳥は口を押さえた。

イリアスは溜め息を吐くと、しゃがみこんでいる2人に顔を向けた。

「大丈夫か？」

歌鳥は弱々しく頷いたが、クリスが首を振った。

血の気の引いた歌鳥の顔をクリスは覗き込んでいる。

相変わらずの無表情だが、仕草から気遣いが窺えた。

イリアスは言い表わせない色を表情に浮かべて、その様子を眺めた。

「…カトリ、大丈夫か」

「…はい、」

騒ぎを聞き付けた兵士達が駆けつけて来た。

松明の灯りが揺らめく。

背中を撫でる寒気は夜風のせいばかりではあるまい。

イリアスは自身で付けた腕の傷から滴った血を見た。

薄暗い廊下、石の床に落ちた赤はやけに不気味な色をしている

：

【魔を祓う鉄】

…闇が、広い。

点在する蒼白い灯りはぼやけて、漆黒に生えたカビか孢子のようだ。

粘りを含む何かが弾ける音が響いた。

闇の中から白い手が伸び、岩肌に似た床の上に転がり落ちた半透明の欠片を一つ拾い上げた。

欠片を拾った手の主の背に、闇の中から声が掛かる。

「…如何なされたか」

くすんだ、老齡に近い歳の男の声だ。

それに対し、応えた声は若く澄んだ男の声、ただ感情に欠けて寒々

しい。

「…セナへ差し向けていた“ドール”が破壊され戻って来ました」

「なんと」

「どうやら反乱軍の中に、対処出来る人間がいたようですね」

滲むような灯りに、初老の男の姿が浮かぶ。
その顔は苦々しく歪められていた。

「イリアス＝マツクールでございましょう。」

やつは聖地ヴァナディースで神の教えを学んだ身」

「…なるほど？」

確かに聖職者なら不浄を祓う術にも通じる」

(……しかし)

声には出さず、青年は拾い上げた欠片を掲げ眺めた。

「…少し気に掛かることがありますので、
今夜はこれで失礼いたします」

「では、後日」

深々と頭を下げた男を、

青年は冷ややかですらある蒼氷の眼で見やり頷いた。

顔立ちは端整で、美男と言っても差し障りないが、
顔色が蒼白を通り越し白蟻のようで、
真っ白な髪と相まって年齢を不詳に見せている。

彼は静かに踵を返すと、音もなく闇の中へ消えた。

一夜明けたセナ砦、
その一室。

「何が何だかサツツパリなんだが？」

ドルサックが顔をしかめ、イリアスの居室のソファアでふんぞり返った。

向かいのソファアではこの部屋で夜を明かした歌鳥が小さくなって座っている。

「あ…、あの…、

昨日は私、ずいぶん失礼な言い方を」

「あーあー、それはいい。面食らったけど」

クリスの大声も初めてなら歌鳥の怒声も初めてで、
しかも意外に過ぎる事だった。

「……………リシアは？」

訊ねる声は窓際から。

歌鳥同様、この部屋で朝を向かえたクリスのものだ。

その横では机に向かい武器に何やら細工を施しているイリアスがいる。

クリスの問いに、ドルサックが軽く手を振った。

「あの嬢ちゃんなら面倒見の良さそうな婆さんに預けてきた。

…で？何があつた？」

「…よくわからない」

クリスの本音であつた。

歌鳥が困つたような目線をイリアスに向け、それに頷いたイリアスが口を開く。

「神隠し騒ぎの真相に爪が掛かつたような感じだな」

はあ？とドルサックが眉を上げた。

…

「…で、その…クリスを飲もうとした変なモンは、大将と歌鳥にしか見えなかつた、って？」

「居合わせた者の中では。」

他の者に見せてみた訳ではないからな。

割合では5分の2だ。
低くはない」

「5分の2の、2がお前らじゃあなあ……」

歌鳥は少し居心地悪そうにスカートの裾を撫でた。

「まあ……、そうだな。」

俺とカトリは、意味は違うがここでは毛色が違うか」

「で、その変なモンの正体は何なのか心当たりは？」

ドルサツクの間イリアスは首をすくめた。

「仕留めたんだろ？お前」

「証拠も残っていない手柄を肯定するのは気が引けるが、おそらくは。」

ただアレが何なのかは全くわからん」

「じゃあなんで倒せた？」

今だってソレへの対策の為にそんなモンいじりまわしてんじゃねーのか？

暇潰しか？」

「もちろん暇潰しではないし、趣味でもない」

イリアスは剣の刀身に、錐で何か文字を刻み付けている。

「正体はわからんが、何に属するものかはわかった。

…多分“白い血の民”に関わるものだろう」

「白い血……？」

歌鳥の呟きに、イリアスが頷く。

「…摂理を逸脱する不浄のものだ」

1本めの作業を終え、次の物に手を伸ばす。

手に取ったのは細刃の剣、長くもなく、実戦には向かなそうに見えた。

「私とカトリにしか見えなかった理由は不明だが、被いが効く事はわかった。

昨夜は咄嗟のことで、詠唱も祈祷も省略したんだが、神はまだこの血の聖なるを認めて下さっているようだな…」

どこか遠い目をして左手の包帯を眺めるイリアスを、歌鳥は不思議そうな表情で見た。

それに気付き、イリアスが少し寂しげに笑む。

「被いには通常それなりの手順や呪文が要るんたが、ある程度の修行を積んだ僧なら、その血だけでそれらの行程を省略出来る。」

「しかし、いくらなんでも毎回それをするのは辛い。
俺が生傷だらけになってしまっ」

「で、それが解決策か？」

ドルサツクの声に、苦笑気味に頷いたイリアスが剣を翳す。

「とりあえずは。」

刃に被いの匂を刻んで即興の呪具に仕立てた。

これを使えば、誰でもあの異形に傷を与えられる筈だが……、

自信はないな、

俺はもう還俗したも同然だから、そんな者の術がどこまで通じるか……」

イリアスが顔を曇らせた時、ノックの音がしてエレナが部屋に入ってきた。

「昨夜いなくなったやつはいないそうだ。」

あんたが昨夜殺ったつつうバケモノが神隠しの原因てのは、あり得そうだな」

「そうか、わかった。」

ありがとうエレナ」

「名前で呼ぶなっつーの!」

エレナの一声に、重かった空気が少し和らいだ。

間を置いて、歌鳥がポツリと呟いた。

「…いなくなった人たちはどうなったのかしら…」

ドルサックが口を開く。

「よくて監禁、悪くて餌食…ってところか。

何せソイツの目的が誘拐か捕食かわからん」

珍しくクリスが口を挟む。

「おれの足は落ちたけど、なんともない」

「何かの参考になんのか?ソレ。

……まあ、穴の中が溶岩や氷水じゃあないって事は確かになったな」

冗談めかしたドルサックの言葉にも大真面目な表情で頷き、クリスはイリアスに向いた。

ドルサックも同じく、少し姿勢を正してイリアスを見る。

「また来るのかね?」

「それは先方に訊くほかに知る術はないな。

しかし来ない、と断定は出来ない。

だからこうして備えようとしてるんだが ……」

クリスがイリアスの顔を覗き込んで、声を出した。

「おれの槍もできるか」

「彫るだけならすぐだが ……」

イリアスが言い淀んだのは、ある問題が胸に掛かっていたからだっ
た。

それをドルサックが代弁する。

「武器はいいとして、その変なモンはイリアスとカトリにしか見え
ないんだろ？」

そんなんにどう対処すりゃいいんだよ？

カトリにまで刃物持たせんのか？」

「 ……最悪そういうことになる」

ギョツとして、歌鳥が弾かれたようにイリアスの顔を見た。

クリスが微かに眉をひそめる。

イリアスの伶俐な顔は苦渋に染まっている。

「私……？、でも私、武器なんて……」

「だろうな、その手を見れば分かる。

だが協力はしてもらわねばならない。

私と君とで、あれが余人を飲み込む前に見つけなければ、対処しようとする事さえ出来ないんだ」

いつになく深刻なイリアスの顔に、歌鳥は言葉を失くした。

「……ええ、それは……、わかります……」

やります、とは言えない。

けれど、やらないとも言えなかった。

*

「これは私の推測だ、絶対ではない。

それは心に留めておいてくれ。

まず一つ、神隠しとやらの原因がアレならば、つまりマラバールの神隠しもアレと同じモノが関係している可能性が高い。

敵が送り込んできた刺客という線も考えはしてみたが、ならばまず私を狙うのが普通だろう。

戦力を削る目的だったとしても、
一晩に1人か2人を減らすだけでは効率が悪いし、兵士でない者も
被害に遭っている。

ただ不安を煽りたいという目的ならわからなくもないが、
同じ騒ぎがマラバルでも起きている事を考えると、これも不可解
だな。

次に、神隠しが夜にしか起こっていない事と、アレが被いによって
滅せる不浄のものである事から、

アレは夜にしか活動をしないものだと思われる。

これは私の僧侶だった頃の知識から推測している。

加えてクリスとカトリから聞いた話によれば、

アレはかなり動きが鈍く、ご丁寧に廊下を這って2人を追ったそう
だ。

つまり瞬間移動したり飛び跳ねたりはしない。

壁を擦り抜ける事もない。

調べた結果、姿を消した者のいずれも中庭の天幕や、広間から繋が
る大部屋など、

密閉されない空間で寝起きしていた事がわかった。

今日から日没前には城門を閉ざすことにし、外部からの侵入を防ぐ。

ただ、壁を擦り抜けはせずとも、

這って登る位の芸当はしてもおかしくないから防ぎきれるものか不明だ。

かといって、ここの全員を隙間のない密閉空間に押し込めるのはまず不可能。

とりあえず、私とカトリで手分けして皆内を見回り、アレの出現を警戒するほか対処策はあるまい。

幸いアレは闇の中では大層目立つ。

遠くからでも発見するのは難しくない。

もちろん、カトリに独りで巡回をさせる気はない。

護衛役は必ず付ける。

剣を持ってもらうのは万が一に備えてだ。

アレを発見したら、位置を護衛役に指示してくれればいい。

あの異形は鈍重だ、

口頭の指示で仕留められるだろう。

…大変な時期に予想外の災難を被ったものだが、放っておける種類の事ではあるまい。

無駄な混乱を防ぐ為にも、アレの存在は他言無用で頼む。

神隠しだけでも皆は不安だろうが、

原因が得体の知れないアレではそれを知っても少しも安心には繋がらないだろうし、
むしろパニックを引き起こしかねない。

…くれぐれも」

【曇天】

…空を覆う雲は重く、地平線を押しつぶすかのようだった。

セナ砦は不安の中にある。

人間の不可解な消失は最早隠しようもなかった。

混乱は避けねばならない。敵側に察知されれば、この不安定な状況のなか態勢を整えねばなくなる。

イリアスは二重の心労に悩まされた。

しかも夜の巡回を始めるようになってから、寝不足ものしかかっている。

「…寝ちゃどうだ？」

生欠伸をして椅子に掛けるイリアスに、
ドルサツクが珍しく気遣うように声を掛けた。

「こんな時間に床に入っては、変な誤解を招きかねんだろう」

「大将が遂にくたばったってか？
それが現実になるよりいいと思うがねえ。」

昼の仕事は俺でも代われるが、夜の方はそうもいかないだろ。

見回りに備えて少し寝ろ」

イリアスは薄く笑って横に立つ男に目を向けた。

「…お前に心配されるのは初めてだな」

「俺はいつでも心配してるぜ？」

お前は実は視野が狭いからな。

なんでいつもわざわざ身を縮めなきゃ通れんような道を選ぶのか
とってる」

「…初耳だな」

「初めて言ったからな」

イリアスは頬杖について軽くため息を吐いた。

「………思えばお前も奇特な男だな。」

流れの傭兵の身でよく俺のやる事に付き合ってくれるものだと思っ
ていた」

今度はドルサックが鼻で笑った。

「食って暮らせりゃあどこでもいいんだ、
ついでに言っと、退屈しない所なら申し分ない。」

だから、ここにいる」

「…国の大事も道楽か」

責めるでもなく、イリアスは呆れた様な声を発した。
ドルサツクは悪びれた様子もない。

「俺はリーヴダリル人じゃないからな。」

いよいよヤバくなれば他の国に行くだけだ。

まあしばらくそのつもりはないから安心していい」

「わかった、恩に着る…」

ぐったりと椅子にもたれるイリアスに、ドルサツクは小さく呟いた。

「しかし、俺の無頓着は許せるくせに、
なんでクリスのは許せないかねえ」

イリアスは天井を仰いだまま、目を丸くした。

「クリス？」

「クリス。」

アイツだって俺と似たようなモンだと思っがね。

アイツは考えがないんじゃないかと、
考えを人間と同じ方法で表現できないだけなんじゃないかと思うが」
ドルサツクの言葉に対し、体を起こしたイリアスが微かな揺らぎを
含んだ声で応えた。

「…俺も最近似たような事を思うようになった」

*

その頃、クリスは中庭に張られた天幕の間を縫って歩いていた。

「おにいちゃん！」

子供の声に顔を向けると、危なっかしい足取りで駆け寄ってくるリ
シアの姿が見えた。

少女は心細い表情を顔いっぱい浮かべてクリスを見上げる。

「ママは？まだいない？」

クリスは無言で頷く。

しゅんとうなだれた背中を軽く叩くと、花壇の縁に誘った。

煉瓦で出来た縁に腰を下ろしたクリスの隣にちよこんと座り、
リシアがクリスに向かって話し掛ける。

「おねえちゃんは何してるの？」

「おねえちゃんもいなくなっちゃったの？」

クリスは首を振った。

リシアの言う“おねえちゃん”とは歌鳥の事だろう。

「寝てる」

「どうして？びょうき？」

クリスは再び首を振る。

「少し、疲れているから」

リシアは幼い顔をしかめて、クリスの顔から目を離した。

その視線の先では、リシアより少し年少の子供が父親と手をつないでいる。

切ない表情でその親子を見つめるリシアの横顔に、何か胸に疼くものをクリスは見つけた。

(…………)

遠い昔、同じような想いを抱いてああいう光景を見つめていたような気がする。

イリアスに拾われた後ではない。

森の中で暮らしていた頃でもないだろう。

ならばそれ以前、クリスが忘れてしまった幼少期だ。

(…“さみしい”…)

そういう気持ちを持っていた頃があったのだろうか。そう思うと、妙な気分だった。

*

歌鳥は体を起こした。

窓の外は曇り空で薄暗く、日没前か日没後か判然とはしなかったが、もう眠る気はしなかったので、ベッドから出て身仕度を始めた。

歌鳥は毎日、陽が沈むと同時に砦内を巡回している。

体力がないので昼に眠っておかないと保たない。

他言無用ということだが、ケイヴィンには隠してはおけなかった。

イリアスやドルサクも、それは理解して彼にだけは事情を説明してくれた。

それでケイヴィンは日没の前後になると仮眠している歌鳥を起こしに来てくれるようになった。

「カトリ？起きてる？」

ノックの音がして、ドアの向こうから少年の声が聞こえる。

「はい、起きてます」

歌鳥が扉を開けると軽食を載せたトレイを持ってケイヴィンが入って来た。

「ありがとうございます」

「いいよ。大丈夫？
疲れてない？」

はい、と歌鳥は笑って応えたが、それは半分は嘘だった。

歌鳥は内気に過ぎるほどに大人しい少女だ。

刃物を持ち歩くというだけでも神経が擦り切れる想いだった。

それでもこの苦行に等しい役目を引き受けているのは、ひとつは使命感からだった。

歌鳥にしかできない。

そういう事は初めてのことだった。

しかし、歌鳥はそれにより張り切るといふタイプではない。

むしろ背負う責任に疎んでしまうタイプだった。

けれど疎んだからといって投げ出せる少女でもない。

気の弱さより責任感が勝っているのである。

（大丈夫…大丈夫…）

歌鳥は言い聞かせる。

無意識に胸元で手を組んだ歌鳥の顔をケイヴィンが覗き込んだ。

「本当に平気？」

…今日は誰と一緒になの？」

「え、と……確か」

歌鳥は思い起こそうと宙を仰いだ。

その時だった。

けたたましく鐘の音が鳴り響いたのは。

…敵襲を報せる警鐘である。

*

…なぜ、とイリアスは歯噛みする。

「あれです！」

見張り場の兵士に促されて北の稜線に目を向ける。

布陣を展開する人馬の群、目測で兵の数は三千、イリアスは眉をひそめた。

曇り空に隠された太陽からの光は色味すらない。

これから空は闇に染まるばかりである。

「夜襲を狙ってる…って訳じゃなさそうだな」

横に立つたドルサツクの声にイリアスは低く頷いた。

「夜襲ならば闇に乗じた上で隙を突かなければ意味がない。

ああも堂々と平原の真ん中を通る道理があるか」

この凶報を受けてすぐに、イリアスは自身のゴーレム・ラリーを斥候に放った。

イリアスがまず警戒したのは伏兵の存在である。

「くそっ…なぜ今頃に…」

はた、と顔を上げた。

(今頃に、狙ったような)

イリアスはそのよく通る声を張り上げた。

「全兵を配置につかせる。

市民は中庭に集め、決して外壁の外に出してはならない。

……クリスとカトリ、あとエレナを呼んでくれ」

後半はドルサック1人のみに発した小言での指示だった。

ドルサックが頷き、踵を返して回廊を奔り去る。

イリアスは表情を引き締め司令官の顔になった。

*

イリアスの居室に集められ、歌鳥は顔色を曇らせて隣に立つクリスの顔を見た。

視線に気付いたクリスが赤紫の瞳で歌鳥を見返す。

エレナは落ち着きなく部屋を歩き回っていた。

ケイヴィンも同席した。

ドアが開き、イリアスが部屋に集まっていた顔触れを確認し、頷く。

その後ろにはドルサックが従っていた。

「厄介な事になった。

我々は直ちに迎撃態勢に入らねばならない。

あの異形は敵側に所属するものという可能性が濃厚になったな、

あの夜から9日、ここから徒歩でちょうどマラバールに達する」

「どっしり...?」

歌鳥の疑問にイリアスが頷いて応えた。

「アレの存在に我々が気付いた事を、アレを差し向けていた何者かが知った。」

連中の目的が果たされていないとしたら後釜を補充してくるだろう。

そんな時に敵襲が重なった　：偶然にしてはあんまりなタイミングだな。

最悪を推測するなら、アレがマラバールの兵を引き連れ出てきた…
：もしくは、その逆か」

「戦闘中にアレが現れて、兵士たちを飲み込んでいったら間違いなく混乱が起きるだろうな…、」

ドルサツクが低く呟く。

「神隠しが兵士たちの頭に刻まれていれば、混乱が起きる確率は高まるな。」

しかも複数であの異形を出して来るとしたら、

兵士と市民たちに分断される戦闘時はいい狙いどきだろう」

歌鳥は小さく肩を震わせて窓の方へ目をやった。

「しかし応戦はしなければならぬ」

イリアスの声は一層低い。

「不確定な脅威に怖じて、目の前の問題に足踏みしている暇はない。

応戦はする。

私は出撃して戦場の指揮をとる。

ドルサックは砦内の守りを頼む」

「逆じゃないのか」

「あの異形の出現の可能性を考慮したならこの形しかない、

出ると決まったものでもないが、出たときに対応出来る人間は必要だ。

クリス、もしアレが現れたらサインを出す。

位置を示したら目立たぬ所作で地面に槍を刺せ」

クリスが頷く。

手にした長槍の刃には疵のように文字が刻みつけられている。

「市民は中庭に集める。

…カトリ」

「…はい」

「君は露台から彼らの様子を見守っていてくれ。

エレナも彼女と共に。

もしアレが現れたらエレナに位置を。

エレナは、それを受けたら市民には悟られぬ様サインでドルサックに伝える」

「わかった」

「……ただ戦況によってはドルサックは戦場に呼び寄せる。優先すべきはやはりそちらだからね。」

その時はアレの事は捨て置いていい、仕方ない」

不安げな表情のまま、歌鳥は頷く。

砦内に広まる異様な空気がこの部屋にいても判った。

(戦いが始まる……)

歌鳥は臆病な胸の鼓動をなだめるように手を添えた。その手すら微かに震える。

その時、歌鳥の肩にそっと置かれる手があった。

「……クリスくん」

声は発さず、ただ頷く。

赤紫の瞳が静かに見つめてくる。

「……大丈夫です、私は……」

力なく、微笑おうとしたが歌鳥はそこまでは出来なかった。

…この胸の、腹の底から迫り上げるような震えはなんだろう。

歌鳥は怯えている。

それは単なる不安や恐怖でなく、予感だった。

(…よくない事が…)

歌鳥はそれを振り払うように頭を振った。

(ダメよ、悪いことばかり考えちゃ…、

大丈夫…、…大丈夫)

…

*

陽は落ちたのだろう。

辺りは闇に包まれ、月も星もない。

ただ、稜線の向こうに展開した軍勢の篝火が、夕闇に赤い彩りを添えている。

城門前に布陣した陣頭に馬をたて、イリアスは眉根を寄せた。

あの軍勢ではセナ砦は落とせまい。

こちらの方が遙かに人数が多い。

それが不気味だった。

(伏兵はない……)

ラリーで上空から付近一帯を見回した。

大軍が隠れられそうな場所はなかった。

しかも相手は夜陰に紛れる気はさらさらないらしい。

得体の知れない罫を用意している……、
そんな気がしてならない。

ならばそれはあの水銀の影だとしか思えなかった。

(……もし数百単位でアレが出てきたら笑うしかないな……)

思いつつ、イリアスは実はその可能性は本気では信じていない。

そんな真似が出来るのなら、軍勢などは必要ないだろう。

丘の稜線を視線で撫でて、イリアスは布陣の端に佇むクリスの姿を見た。

その少年は普段通り、何の感情の色もない顔色で立っている。

明らかに他の兵士に比べて線が細い上に甲冑は纏わず、完成していない体格が露だった。

だがクリスは強い。

ならば指揮官として、彼を戦場に連れられない訳にはいかない。

イリアスは息を吐いた。
次いで背後の砦を仰ぐ。

彼がそのとき脳裏に浮かべていたのは、
あのおとなしく、いかにもか弱い風情の亜麻色の髪の少女だった。

*

戦端はまだ開かれない。

砦の内は静まり返る訳ではなかったが、騒然とする訳でもなかった。

中庭を行き来する人々に、混乱の様子は無い。

ドルサックがいつもの鷹揚な調子で人々を励まして回っているから
かもしれなかった。

その男の視線が時折上方へ向けられる。

その先の露台では一人の娘がどこか固い表情で中庭を見下ろしていた。
た。

ゆっくりと中庭に視線を巡らせ、ひとしきり見渡すと振り返って自
身の背後を見る。

…この繰り返し。

歌鳥は心細げに手に持った剣を握り直した。

そんな様子を見て、エレナが声を掛ける。

「大丈夫か？」

「え、…ええ、大丈夫です……」

「そうは見えねえけど」

弱々しく微笑み、歌鳥は再び露台の手摺りに手を置いた。

エレナとは初めて会った日以来、あまり言葉を交わす機会がなかった。

彼女は会話を好む少女ではなさそうに見えたし、それにどうも自分は彼女に敬遠されている気がする。

心当たりはある。

どう考えても歌鳥は得体が知れない。

最初はイリアス達にも警戒されていたのだ。

会って日の浅いエレナが歌鳥に対してよそよそしいのは当然だろう。

そう思っていたので、2人きりになって互いに気まずい思いをするのではないかと気に掛けたのだが、意外にもそういう事はなかった。

「剣」

短くエレナの声がして歌鳥は自分の手を見下ろした。

「え？」

「鞆の紐が鐙に引つ掛かつてるぜ、それじゃ、すぐに抜けねえだろ」

はっとして、歌鳥は慌てて手元を直した。

「う、ごめんなさい」

「別に。」

…そんなに使った事ねえんだろ？

無理に気負うことねえさ、オレもバケモノ対策の武器もらってるし」

「…はい、…ありがとうございます」

別に、というエレナの声は素っ気ない。

けれども歌鳥は嫌な思いはしなかった。

むしろ微笑ましい素っ気なさだと感じたので、歌鳥は気後れなくエレナの顔を見る。

歌鳥はエレナに声を掛けようとした。

…その時だった。

…

【白い影、黒い羽根】

（ ……貴女か？）

ぞっとするほど冷たく、静かな若い男の声が、耳元で聴こえた。
振り返る間は無かった。

「カトリッ！……！」

エレナが叫ぶ。

*

切迫した色の少女の声に、中庭にいた人々が露台を見上げた。

ドルサツクとケイヴィンはその声の主がエレナであることにすぐに
気付いた。

「何だ……！？」

*

エレナは驚愕し、剣を抜いたが一步も動けない。

「てめえ……どこから……っ」

歌鳥は、エレナの血の気の引いた顔を真正面に見ていた。

自由が利くのは、見開いた濃紺の瞳のみ。

華奢で小柄な身体は羽交い締められ、
口を塞ぐ掌の力で首を動かすことも出来ない。

(なに?)

歌鳥は身動き、声を出そうとした。すると耳元にまたあの声がする。

「お静かに。」

美しいお顔に傷がつきますよ」

囁く声、頬にかかった吐息さえ冷たく、歌鳥は総毛立った。

エレナは突然現れた青年に混乱した。

秀麗な貌、中背でほっそりとした体躯。

しかし歌鳥の身体を浮く程に強く羽交い締め、しかも歌鳥の抵抗をまったく問題にせず石のように動かない。

*

中庭のドルサツク達からは歌鳥の姿は見えない。

見えたのは白い背中だけ。

あれは歌鳥のもので、エレナのもでもない。

「ヴィヴィー!! どうした!?!」

どうしたもない、

エレナは返事が出来なかった。

歌鳥の背後は露台の縁だ。
地上からは3階分の高さがある。

そこから見知らぬ男が湧いたように現れたのだ。

その下で、ドルサックは露台と中庭の出入口を見比べる。

向かうべきか、否か。

瞬巡した間に、小さな影が駆け出したのが見えた。

「待て！！ケイ！！」

*

対峙するエレナなどまるで眼中にもない様子で、
青年は歌鳥に話し掛けた。

「ある人が貴女にお会いしたいそうです。
お越し頂きたい」

「ご丁寧に誘拐しようとしてんじゃねえよッ！！」

エレナは剣を突き付けたが、それ以上の事は出来なかった。

青年とのあいだには歌鳥の身体がある。

迂闊に斬り掛かれない。

エレナに対し一瞥すらせず、歌鳥の身体を抱えたまま彼はふわりと

手摺りに乗り上がった。

歌鳥はもがいたが、青年の腕は軋みもしない。

絶望か悔しさか、歌鳥の目に涙が滲む。

潤んだ視界に、ヒラリと何かが横切った。

（蝶々？）

…瞬間。

目の前に、吊されたように逆さまに、別の青年の顔が突如現れた。

目を射抜く夕陽の色の髪、蒼穹の瞳が悪戯ばく笑う。

歌鳥を捕えた青年の声が初めて揺らいた。

「夜胡蝶夜のあひだま…っ！」

笑った彼は片手で歌鳥の腕を掴み、

残る片手を歌鳥の耳元・背後の青年の顔前に突き出した。

指を弾く。

歌鳥には見えなかったが、エレナには見えた。

突然現れた青年が突き出し、鳴らした指から光の粒が噴出した。

顔面にその光をまともに受けた彼は仰け反って手摺りから落下し、

その直前に夕陽の髪のが、歌鳥の体を引き寄せて、白い髪の青年の腕からもぎ取った。

下に崩れ落ちる瞬間、青年が歌鳥の体を抱き込んで石の床から庇った。

さっきとは違う、血の通った暖かい腕だと思った。

彼は体を起こし、腕の中の少女の顔を覗き込む。

「怪我、ない？」

髪の色同様、暖かな笑顔だった。

ない、と頷き歌鳥は顔を赤らめた。

抱き抱えられた身体、突き合わせた顔が近い。

「ああ、ゴメンゴメン」

青年はすぐに身体を離して立ち上がる。

動いた彼の服から、微かに花の匂いがした。

歳は少し上だろうか、

中肉中背で、服の埃を払う手・その指の形が整っていて、とても綺麗だった。

「…あ…あの……」

ありがとう、と言おうと顔を上げた歌鳥の目に、彼の背後・露台の手摺りを越えて飛び込んで来る白い人影が映った。

「!!!
…後ろ…」

歌鳥の叫びとほぼ同時、

彼は振り返りざまに手を払って、白い青年の蹴撃を弾いた。

次の瞬間、歌鳥の腕を引く手があった。

「大丈夫か!？」

「ヴィヴィさんっ…」

友好的でない挨拶を交わした2人の青年が見合う。

夕陽の髪 of 青年が陽気な声を発した。

「久し振りだね、エツダ。

性悪の兄貴は元気かい？」

「貴男に他人の性格をどうこう言う趣味があったとは思いませんでした」

「自分を棚に上げたつもりはないよ、

俺の方が性格が悪い事は言うまでもない事だろう?」

軽口を叩いた青年が跳躍した。

エツダと呼ばれた青年が飛び退いて宙に躍る。

双方、羽根でも生えているかのように身が軽い。

「逃げるぞ！」

エレナが歌鳥の手を引く。

「え、でもっ……」

「でも、じゃねえっ！」

あの白髪お前を狙ってたぞ、

とにかくここはあの変な奴に任せて離れんだよ……！」

変な奴呼ばわりされた青年が苦笑する。

「ひどいな。」

けどまあ賢明な判断だ、

もし次に会う機会があったらライズって呼んでね」

茶目つ気たっぷりに笑って青年 ……ライズがエッダの手刀を払う。

彼らは2人共、武器は持たず素手で撃ち合っている。

不思議な事に、2人の手や脚が衝突する度に、光る粉のようなものが弾けて丸い虹を生んだ。

しかもその度鈴を叩きつけるような音が響く。

中庭にいた人々は何事かと露台を見上げていたが、事態を呑み込めた者は1人としていなかった。

「こんな辺境のゴタゴタにちよっかい出して、兄貴の指示かい？」

「お答えする必要がありません」

「そりゃそつだ。」

どうせ目的が何であろうと俺達とキミ達の利害は絶対一致しないんだから」

「同感です」

エツダが鋭く踏み込んだ。

回転を加えた蹴撃がライズの頭を捉える。

ライズが笑った。

次の瞬間、闇が剥がれて無数の黒蝶が舞う。

一瞬にして視界を塞がれたエツダがよろめいた。

そこへライズが遠慮も容赦も無く、跳躍しての踵落としをエツダの脳天にたたき込む。

石の床に頭を叩きつけられ、エツダの額から血が垂れた。

ぱた、という音に眉をひそめ、エツダが膝を立てる。

「……だから貴男はやりにくい」

「ちゃんと言ってるだろ、俺は性格悪いんだよ」

「なら顔もそれらしくして頂けないと失念してしまいます」

「それはそっちの落ち度」

ライズが両手を広げる。

蝶たちが再び闇に還った。

エツダが立ち上がる。

袖で軽く額を拭った。

それで傷から流れ出る血が止まる。

白蠟の肌と、純白の長衣が赤黒く汚れた。

エツダは不機嫌そうに眉をひそめたまま、血の気のない唇を動かした。

「貴男のお陰で予定が大幅に狂いました」

「それは悪かったね、

埋め合わせならいくらでも付き合っけど？」

「結構です。

……結構ですが、貴男をあしらうのは少々骨が折れそつだ。

独断ではありますが、予定をひとつ繰り上げさせて頂きましょうか」

エツダが飛ぶ。

手摺りを越え、中庭の上空に舞った。

追おうとしたライズが足を止める。

…空中でエツダが虚空に高く放り投げたもの。

紅い、血のように紅い

ひとかけら。

ライズが蒼穹の眼を見張った。

「ルビー・エーテル!？」

ライズの声が割れる。

闇夜に浮かぶ蒼白い影の直上で、

紅い閃光が奔った。

*

【崩れ逝く揺籃たち】

…それは遠くから見れば真紅の稲妻だった。

真っ直ぐに、漆黒の天空と地上の砦を繋いだ“それ”は、渦を巻いて空の雲を絡め取り飲み込んだ。

円形に晴れた雲の合間に、真っ白い満月が覗く。

しかし次の瞬間にその月は紅く染まった。

爆発のように瞬時に広がる紅い疾風、唐突に大地が激しく揺らぐ。

*

廊下をエレナに手を引かれて駆けていた歌鳥は震動に足元を掬われ、悲鳴を上げて転倒した。

紅い風が2人を飲み込み、そして通り過ぎていった。

*

ドルサツクとケイヴィンは歌鳥とエレナのいる露台を目指して階段を駆け上がりきった所だった。

突然の衝撃で石の壁に亀裂が走り、天井から瓦礫が降ってくる。

ドルサツクは咄嗟に、驚いて立ち竦むケイヴィンを引き寄せて抱き込み、床に伏した。

紅い風が通り抜けた事は、気付かなかった。

*

イリアスは紅い閃光が空を貫くその瞬間をその目で見た。

あれは何だ、と疑問を知覚する前に大地が突き上げられたように揺れ、イリアスは慌てて手綱を操った。

地の鳴動に、人間の悲鳴と馬のいななきが混じり、場は混乱を窮めた。

*

クリスは地面が震動を始めた瞬間、槍を大地に突き立てて体勢を保とうとした。

騎乗していなかったのが幸いして、膝をついた程度で堪え抜く。

周囲の仲間が次々と落馬するのを見たが、助け起こそうにも未だ震動を続ける地面の上、一歩たりとも自由に動けそうにない。

クリスが真っ先に探したのはイリアスの姿だった。

求める姿を夜闇の中に見つけて、せめて名を呼ぼうと口を開いた時、紅い透明な空気の波が、その場にいたすべての人間を飲み込んで通り抜けていった。

（何だ？）

一瞬、血の匂いを嗅いだ気がしてクリスは眉をひそめた。

…震動が止む。

クリスは息を吐いて、槍に縋り立ち上がった。

イリアスの無事と砦の様子を確認しようと思いを返し、視線で撫でた光景に違和感を感じた。

(……?)

クリスは、すぐ隣に蹲った仲間の肩に触れた。

…触れようと、した。

瞬間、彼の身体は砂のように崩れ、甲冑を残して風に舞った。

目を見開くクリスの視界の端で、次々と人影が崩れてゆく。

馬さえもその姿を残せず、横たわった身体の端から崩れていった。

1分を待たず、そこは紅い砂の舞う砂漠と化した。

*

「 ……っ痛…、大丈夫か？ケイ… 」

ドルサックは呻きながら身を起こして、抱いた少年の顔を探った。

辺りは夜の闇に埋め尽くされ、廊下の灯りはことごとく落ちたらしい。

身体に落ちてきた瓦礫、塵を払いドルサックは顔を歪めた。

背中に大きなそれが当たったらしい、起き上がると痛み息が詰まった。

「くそ…何だっただ…」

眩き、ケイヴィンの顔に手を触れたとき違和感を覚えた。

「ケイ？」

瓦礫からケイヴィンの体を抱えて這い出すと、いつの間にか晴れていた空の月光の恩恵にあやかれた。

「ケイ」

淡い月明かりに照らされ、気絶しているケイヴィンの顔を確認する。

ざっと見たところ目立った怪我はない。

頬の汚れを拭ってやろうと手を伸ばした時、

ドルサツクは目を疑った。

伸ばした自身の指が、

欠けている。

その光景に思い浮かべたのは砂の人形だった。

水で固めた砂の人形、乾いた先から崩れていくそれ。

欠けた指の先から流れるのは血ではなく、

乾いた紅い砂の粒だった。

*

【あるひとつの終焉】

…紅砂と化した騎馬の残骸に膝を埋めながら、
イリアスは撤退の命令を叫んだ。

しかしそれを聞き届けらるた者がいったい何人いただろう。

見渡す限りの砂の海、

生存者は1割にも満たぬ。

その殆んどが身体はどこかしらに砂化の被害を受けて動くこともままならない。

イリアスが無傷で済んでいるのは何かの奇跡かと思われた。

(こんなことが)

イリアスは一瞬にして同胞を失くした怒りと悲しみに目が眩んだ。

(これが人間のする事か……………!!)

噛み締めた唇に血が滲む。

そのとき、イリアスは自分の名を呼ぶ声に気付いた。

「イリアス!!」

「クリス!!無事なのか!?!」

イリアスは奇跡が自分の身にのみ起こった訳ではない事を知った。

駆け寄るクリスの、その体には何の欠損もない。

しかし、さすがに動揺しているのだろう、

クリスの声はいつもの静謐さと柔らかさを失くしていた。

「これは、何だ」

「わからない、とにかく、まだ息のある者を……」

言葉を途切らせ、イリアスが突如呻いた。

「イリアス？」

「……くそっ……！」

敵軍が前進を始めた……！！」

セナ砦と敵陣営の上空を旋回させていたラリーの目を通して、イリアスは絶望的な光景を視たのである。

自力で動けない者は見捨てるしかなかった。

中には生きたまま下半身を砂に変じさせた者もあり、そもそも手当てのしようもない。

籠城はかなわなかった。

城門を閉ざそうにも、地震により門は半壊してしまっていたのだ。

駆け込んだ砦内、中庭は外の惨状と大差なかった。

地を埋めつくす紅い砂と残された衣服、

クリスはその中にリシアのものを見つけた。

両手で数えきれるような数の生存者を引っ張り出し、動ける者にそれらを託して送り出した。

幸い馬も数頭は無事だったのだ。

微力だろうが彼らの退路を守る、

あまりに無謀なイリアスの決意にクリスは頷いた。

「森の中を行け、

我々は別方向に出て囿になる。

我々が敵を引き付けている間に南へ向かい、どこかの村に身を隠せ」

イリアス達も共に、という声は黙殺された。

イリアスはクリスの顔を見た。

「お前は行ってもいいんだぞ、

彼らを守ってやれ」

クリスは首を振った。

「イリアスを守る」

その言葉に、イリアスは目を丸くして苦笑った。

「…そうか」

クリスは月を背負った砦を振り返った。

敵が迫りくる今は、砦の中にまで踏み込んで生存者を探す余裕はない。

それでも、一度でいい。

クリスは探したかった。

だからせめて、名前を呼んだ。

たとえ返事を聞けても、駆け寄れないとわかっているのに。

「…カトリ！！！！」

…クリスの声が夜風に慄えた。

…

リーヴダリル歴410年、

南方セヴァルスタ諸島にて起きた民による反乱は幕を下ろした。

最後の本拠地となったセナ砦の近隣では、

その後しばらく、雨と風に紅い色が混じっていたという。

*
*
*

【2】あるひとつの終焉（後書き）

今回、色々ありました。

セナ砦での話は、もともとプロローグ的なこととして構想していました。

最初は、主人公の過去編として考えていたエピソードなのです。

だから潰滅するのは必然だったというか ……
これからは登場人物が一新されます。

では、次回。

おまけ登場人物設定

【浪川 歌鳥】

女子高生

15歳 / 157cm / A型

亜麻色の髪 / 濃紺の瞳

繊細 / 客観的 / 控えめ / 可憐

【クリスタル「アーム」】

反乱軍メンバー

15〜18歳 / 160cm / O型

黒緑の髪 / 赤紫の瞳

無垢 / 素直 / 天然 / 華奢

主人公ってどっちなんでしょうねえ……、
決めてないです。

2人とも主人公、ってことで。

【3】虹姫の帰還

歡喜せよ

いま女王は帰還せず

歡喜せよ

祝福のその御手に

歡喜せよ

麗しの羽音は愛の唄

歡喜せよ

汝の罪は浄められん

【岩窟の牢】

…雫の滴る音がする。

胸を締め付ける程せつなくか細い音だった。

（ …… ああ、

誰か泣いてるんだわ… ）

そんな、気がした。

…歌鳥は目を開けた。

苔むした岩肌、灯りはなく昼か夜か判然としない。

長いこと横たわっていたのだろうか、体の節々が痛かった。

ようやく起き上がり、歌鳥は自分の体を見下ろした。

セナの砦で着ていた衣服のまま、なんだか湿り、嫌な匂いがする。

この（おそらくは）洞窟に溢れる靄のような湿気のせいだろうか。

「……どう？」

ぼんやりする頭を2・3度振って、歌鳥は記憶を手繰り寄せる。

「……地震……」

はっとして歌鳥は顔を上げた。

砦の廊下をエレナと走っていて、突然強い地震が起きたのだ。

それでエレナと共に手を繋いだまま転倒した。

（それから……）

その後、ようやく体を起こしたのは歌鳥が先だった。

横で倒れているエレナの肩に手を触れようとした時、突然身体が落下した。

目にしたものは、銀色の水溜まりに腰まで沈んだ自分の身体だった。

それきり、歌鳥の記憶は途切れている …

…アレだ。

攫われた …!!

歌鳥の顔から血の気が引いていく。

慌てて辺りを見回した。

人気は無い。

立ち上がり、微かな、本当に微かな明かりと空気の流れを頼りに歩き出した。

(どうしよう…) ……、

どのくらいの時間が経ったのかしら…。

…皆は？どうなったの？)

歌鳥は不安に張り裂けそうな胸を抑えた。

(ヴィヴィさん怪我してたんじゃないのかしら…、

クリスくんといリアスさんは…?)

鈍い足音。

片手で岩の壁を撫でながら進み、しばらくして歌鳥は微かな気配を感じた。

「誰?…誰かいるの?」

気配を辿って岩の裂け目を見つけ、
子供が身を縮めても通れない程に細いその向こうにちらつく、幾
人かの人影が見えた。

「あの……」

歌鳥はおずおずと声を掛けた。

状況がわからない今は迂闊な行動かとも思ったが、
暗闇をただ歩いているだけでは埒が開かない。

「あの……!」

何度目かの呼び掛けに反応があり、
裂け目の向こうに逆光を背負った女の影が現れた。

「…あんだ…、」

「あ、……あの、私」

「あんだ、セナで……」

え、と歌鳥は相手の顔を見直した。

暗がりの中、顔は鮮明には見えない。

歌鳥は目を凝らして相手の顔を探る。

数秒して、相手の女の髪の色味と微かに浮かぶ面影に歌鳥は小さく息を飲んだ。

「リシアちゃんのお母さん……!？」

*

闇に目が慣れてきて、歌鳥は裂け目の向こうに覗く女の顔のつくりを詳しく見て取る事ができた。

リシアの母親にしては歳が思ったよりも上だと感じたが、聞けばリシアは彼女の末っ子だとの事だった。

上にいた2人の兄はすでに死去し、姉は歌鳥と同年代で、本土に奉公に行っていて、ここ数年に便りが絶えているという。

「気が付いたらここにいて……何がなんだか」

女の顔は暗がりでも憔悴の色が濃かった。

「リシアは？あの子は今、どうしているの？」

歌鳥は少し迷って、

「あの…お母さんの姿が見えなくなって、寂しがっていました…」

とだけ言った。

セナ砦に敵軍が迫っていた事は言わなかった。
余計な心配を掛けるだけだと思ったからだ。

…この時点では、歌鳥はリシアの死を知らない。

歌鳥はリシアの母エメリアの背後に、違う人の気配を感じて、それを尋ねた。

「ああ…、いるよ。」

皆セナにいた人達だ」

「皆さん、お怪我とかないですか？」

「大丈夫……、

日に一度食事もあるし……」

「食事……？」

あの、そちらはどういう所なんですか？

こっち側は何だか暗くて、岩しかなくて…

…洞窟みたいな感じなんですけど…」

「大差はないよ。」

ただ、こっちには鉄格子がある。

たまに兵士が来てここから誰かを1人2人外に連れて行くんだけど、その後どうなったのかは知らない」

「兵士……」

「多分マラバールの兵だ。
鎧に印があつたから。」

……あなたの方からは外に出られそう？」

歌鳥は辺りを見回した。

見えるのは闇と微かに浮かび上がる岩肌のみ。

「わかりません、

よく歩いて回つたわけでもないの……」

「むやみやたらに歩き回るのは危ないかもね……、

しかし何であんただけこつちに出なかつたんだらう、

皆こつちの……壁の少し上の方に穴があつてね、

そこから転がり落ちてくるんだけど」

「落ち……それ、大丈夫なんですか？」

「少し体を打つたけど大した事じゃない。

ただ、そこから出られりゃいいんだけど、苔やら何やらで滑って登れないんだ」

はあ、と相づちを打つた時、

突然歌鳥の側の岩に灯りが差した。

「何をしてる!?!」

男の声に振り向くと、松明を掲げた鎧姿の兵士、その後ろに同じ格好の男達が2人ほど見えた。

「何故こんな所にいる、
どうやって出た!？」

歌鳥は立ちすくみ、裂け目に背中を張りつけた。

「逃げな!!早く!!」

エメリアの声に弾かれて、歌鳥は駆け出した。

追って来る足音と鎧の音が、岩の壁や天井に不気味に響いた。

しばらく走ったが、見通しも足場もかなり悪い。

追いついてきた兵士に腕を掴まれ、その拍子に足が滑り倒れこんだ。

「大人しくしろ!!」

居丈高な声の調子に歌鳥は竦みあがるよりも嫌悪感を覚えた。

砦にいた兵士達はみな親切だったのに、なんて違いだろう。

腕を掴んだ兵士に無理やり首をねじ向けられ、歌鳥は顔をしかめた。

男達はその少女の顔を灯りの元で見、息を飲んだ。

絹のように滑らかな亜麻色の髪、

白い肌、繊細に整えられた目鼻立ち、
長い睫毛の下の夜空の濃紺の瞳 …、
思いもよらぬ美少女だ。

歌鳥も見た。

見上げた先に並ぶ男達の顔、そこによぎった色 …。

(… いやな目…)

男達が交わす視線の意味を歌鳥は知りたくもない。

交わされる言葉も、聴きたくなかった。

… おいどうする、すげえ上玉だぜ

… すぐに連れ戻さなくなつて

… 交代までまだ

… じゃあ …

歌鳥はいきなり引つ張り上げられた腕の痛み到我に返った。

「こつち、来いよ」

「いやです、離して…」

「ほら早くしろ」

「いや……」

歌鳥は身をよじる。

業を煮やした1人が歌鳥の肩を壁に押さえ付け、服の裾に手をかけた。

「……いや!! 離して!!!!」

……その時。

「……何をしている?」

突然、壮年の男の声が洞窟に響いた。

男達は驚いて振り向き、

その隙間から歌鳥も声の主の姿を見た。

一目で身分の高い男だと判った。

質素な平服を着ていたが、あの光沢は絹だろう。

前後に灯りを掲げた男2人を従えて、

どこか神経質そうな顔つきをしかめ兵士達と少女の姿を見やる。

その視線が、歌鳥の顔の上に留まった。

「……その娘は?」

「あつ……、セナ砦からの虜囚で、

どういうわけか牢の外におりましたところを発見致しまして……」

「ふん…」

男が歩み寄り、歌鳥の姿を眺めた。

不快な色の視線ではあったが、とりあえず身の危険は感じられない。

歌鳥は男の顔を見据えた。

その視線に、男は興味を持った。

「…連れて来い」

「は？」

「話が見たい。」

この奥の独房がよかろう」

男達は顔を見合わせ、

困いこんだ少女と目の前の男を見比べた。

*

どこか名残惜しそうな視線を残して兵士達が鉄格子の扉を閉めて立ち去り、

整えられた石造りの部屋に歌鳥は高貴そうな装いの男と向かい合った。

彼の連れていた2人は扉の前で佇んでいる。

ひんやりとした空気が肌に寒い。

男は片隅に置かれた椅子を示した。

「座るがいい」

少し迷って、歌鳥は素直に従った。

男は歌鳥の一挙手一投足を見て何かを測っている様子だった。

「…僕はマラバール総督ヴェルンドという」

歌鳥は目を睜った。

「総督…」

という事は、この男がセナに軍を送った…。

その動揺を見透かしたようにヴェルンドが薄く笑う。

「そなたはセナからこちらに送られた娘だそうだな？」

…しかし解せぬ。

そなたはどう見ても農民には見えぬ。

もしやそなたはイリアス・マツクールの縁者か？」

歌鳥は意外な問いに驚いて首を振った。

「いいえ …… 違います」

「真であるのかな？」

「違います」

その執拗さに歌鳥は不審を抱いた。

何故それが重要なのだ？

「…まあよからう、

セナ砦の陥落は時間の問題だ。

今さら何も変わらぬ」

ヴェルンドの言葉に、歌鳥は思わず目の前の男の顔を見つめた。

「あなたが命令して、セナに軍を送ったのですか」

歌鳥の声が微かに慄えた。

その言葉に、ヴェルンドが軽く眉を上げる。

「…おかしいな、

何故そなたがそれを知っている？

セナ砦への兵の到着は昨日の予定だ。

その時点では“ドール”は ……」

そこで男は何かに思い当たったようだった。

「……なるほど、

そなたがエツダ殿の“捜し物”か」

エツダ、という名前に歌鳥は目を丸くした。

あまりに多くの事が起きた為に、その一連の出来事を失念してしまっていた。

「ならば得心もいく。

このような穴蔵で他の虜囚と同じ扱いをするわけにはいかぬな、

…屋敷に一室を用意させよ」

最後の一言は扉の前に控えた従者に向けられたものだった。

一礼し、1人が踵を返して下がって行く。

「どういふことですか」

「エツダ殿のお戻りになるまで、

そなたを先程の様な危害から守る為だ。

不服はあるまい」

歌鳥は言葉を飲み込む。

配慮は有難い。

だがそれは、歌鳥に対する思いやりでも気遣いでもない、彼の口

振りが言っている。

「 …… 他の人達は？」

一体どうして沢山の人達を攫って閉じ込めているんですか、

マラバールでも人が消えていると聞きました。

それもあなたが？

それともあのエツダという人が？」

ヴェルンドは歌鳥の追究に、目を丸くしてまじまじと少女の顔を眺めて返した。

「そなたには関わりのない事だ。」

どうしても言うならば、エツダ殿が戻られてから訊けばよい」

ヴェルンドもまた踵を返し扉に向かう。

呼び止めようと発せられた歌鳥の声は虚しく石の壁に消えた。

*

それから1時間も置かずに、歌鳥は独房から連れ出された。

兵に囲われて歩く内、歌鳥は今までいたのが地下であった事を知った。

階段を上がり、足元の感触に気付き下を向く。

絨毯だ。

(すごい立派…)

廊下の床に敷き詰められた豪華な刺繍入りの絨毯。様々な絵画に彩られた壁。

初めて見るこちらの世界の upper class の建物だった。

「こちらを」

案内の兵士は、歌鳥をどう扱うべきかよく飲み込めていないらしい。った。

丁重に接しつつも、怪訝そうな色が顔に時折浮かぶ。

歌鳥が通されたのは海を望む露台がある一室だった。

見事な調度品が揃えられており、セナ砦にあったどの部屋とも較べようもない。

歌鳥の背後で扉が閉まり、ガチャンという音がした。錠を掛ける音だ。

心細く足を踏み出し、露台に向かう。

大理石で出来た手摺りから身を乗り出す様にして下を覗き込むと、下は波打つ岩場まで一直線に断崖絶壁だった。

「…これじゃ逃げ出すのは無理そうね……」

ため息を吐き、歌鳥は膝をつく。

（皆…大丈夫かな…）

胸が痛い。

不安に満ちて、口から押し出されてきそうだ。

（…クリスくん…、

みんな …）

【覚悟の終着】

曇天の朝だった。

獣の咆哮と人間の怒号が、雨の匂いを含む大気に混じって淀む。

セナ砦の敗残兵を追う騎兵隊である。

彼らが駆るのは馬のみではない。

猛獣の貌をしたゴーレムに騎乗した兵は、一騎で騎馬の兵5人分の力を発揮するとも言われる。

豹に似た獣に跨った、隊長らしき騎士が叫んだ。

「イリアス＝マックールを逃がすな！！」

勅命である、国賊の首をあげよ!!」

*

林の中を駆ける一騎、
馬上には2人の人間が乗っている。

後ろに騎乗した小柄な少年が、
はるか後方にこちらに向かい殺到してくる騎影を認めた。

「きた」

「よし、ここで迎撃する」

イリアスは手綱を操り馬首を巡らした。

迫る騎影は数える気にもならない。
それほど圧倒的に数の上では不利。

しかも、手柄を競う彼らの殺気は目に見えぬのが不思議なほどに鮮烈だった。

怖じける事なく敵を見据え、クリスは槍を携え馬から飛び降りた。

嘲るような笑声を上げて先頭の一騎がクリスに躍り掛かる。

しかし影が入れ替わった直後、騎乗していた男の体は地に投げ出された。

転がるようにして体を起こした彼の目に、

一撃で首を落とされた自身のゴーレムの姿が映る。

驚愕する暇もなく、彼は顔前に閃光を視た。
それが最期だった。

1人目の頭を兜ごと叩き割り、クリスは刃を払って続く騎兵のゴーレムの咽喉へ槍を突き出した。

そのまま騎手ごと薙ぎ払い、顔色ひとつ変えず確実にその胸を貫く。
敵から見ればクリスはさながら“死の化身”だった。

彼の周囲には死屍が積み重なり、対峙した者は二合と撃ち合えぬ。

筋骨隆々とした男がそれをやってのけるならまだしも、
彼は線の細い小柄な少年であり、見ようによっては少女のようにすら見える。

息ひとつ乱さぬその様は、不気味を通り越して神秘的ですらあった。
クリスに気圧され、敵兵が攻勢を緩める。

躊躇なく踏み込み、クリスはまずゴーレムを仕留め、次いで騎手を狙った。

手も足も休ませている暇はない。

なにぶん多勢に無勢である、クリスが一騎を仕留める間に3・4騎が押し寄せてくるのだ。

クリスの背後を取ったと見た兵が突然ゴーレムから転がり落ちた。

その背中には矢が突き立っている。

イリアスは馬上から弓を投げ捨てた。

あれが最後の矢だった。

剣を抜き、イリアスは馬腹を蹴ってクリスを取り巻く包囲網に穴を開けた。

「クリス！乗 ……」

イリアスの体勢が崩れた。

馬の咽喉に、騎手を失ったゴーレムが食らい付いていた。

「イリアス！！！！」

クリスが叫び、地に投げ出されたイリアスに向かって走り出した。

クリスが駆け寄るより早くイリアスのもとに駆け寄った騎影、

振り下ろされる白刃。

クリスの耳に突き刺さった声は、

一体誰のものだったか。

虚空を切り裂く、

悲鳴のような。

…

…歌鳥は露台から海の向こうを眺めた。

本当はせめてセナ砦の方角に向かっていたい。

しかし歌鳥には方向が判然としない上、外を望めるのはここしかない。
かった。

この部屋に軟禁されてから5日経つ。

心配して心配して、なのに具体的な行動は何一つ出来ずにいた。

食事は日に2度運ばれて来て、給仕は兵士がする。

その兵士にセナ砦の状況や地下牢の人々の事を訊いたが、彼らは一
様にして口を閉ざした。

歌鳥と言葉を交わさぬよう言い付けられているのかもしれない。

潮風が染みる。

こちらの海も水は塩辛いのだろうか。

ため息を吐き、手摺りから離れた。

夕闇が近い。

服の裾が揺れた。

歌鳥は自分の置かれた状況に、罪悪感に近いものを感じていた。

あまりに上等な部屋、
軟禁された当日から、毎晩5・6人の侍女が来て湯浴みの桶を運んでくる。

用意された着替えはセナ砦で着用していたものよりも遥かに上等な代物だった。

歌鳥は自分の姿を見下ろし顔をしかめた。

なぜ自分だけがこんな扱いを受けているのかわからない。

いま、同じ建物の地下には冷たい岩に囲まれて囚われている人々があり、

歌鳥にとって大切な人々は安否も知れないのに。

何度目かのため息を吐いたとき、

歌鳥はパサ、と軽いものが床に落ちる音を聞いた。

「?」

見回して、歌鳥は大理石の床の上に転がる“それ”を見つけた。

歩み寄り、膝をついて確認して歌鳥は首を傾げた。

形は、コウモリに近い。

片手に乗りそうな程小さく、歌鳥の知るコウモリよりはるかに可愛らしい顔をしていた。

奇妙なのはその色だ。
信じられない程にとにかく白い。

「こっちには白いコウモリなんているのね……」

しばし見守っているとそのコウモリがぐったりとしていて元気がない事が見て取れた。

歌鳥は少し迷って、手を伸ばした。

「何もしないから、
噛まないでね」

優しくそれを拾い上げると、歌鳥は部屋へ入った。

そっと卓の上に乗せ、
ハンカチを出してきて丸めたその上に乗せ直す。

指でその背中をそっと撫でると、きゅう、と弱々しい呻き声が漏れた。

「ごめんね、痛かった？
怪我でもしてるのかしら」

歌鳥は水差しを持ってきて、別のハンカチに水を湿らせてそれをコウモリの口元にあてがった。

小さな舌が出て、しみ出た水をちよろりと舐めた。

うつすらと目が開き、綺麗な碧い瞳が覗く。

「大丈夫？」

歌鳥は微笑う。

その時ドアをノックする音がし、歌鳥は慌てて卓の上からハンカチごとそれを持ち上げ、ベッド脇の棚に乗せた。

食事を運んできた兵士の声に返事をし、歌鳥は小さく声を掛けた。

「大人しくしててね、無理して動いたら駄目よ」

そのコウモリは億劫そうに身をよじり、歌鳥を見つめてすぐに目を瞑った。

…

【水晶ノ雨】

… 身体がひどく痛む。

エレナは意識が明確な形を取り戻すまでに、声を聞いた。

言葉はよく聞き取れなかったが、

若い男が話す声、次いで罵るような声音に変わった。

その後に若い女の声がして、それは明確な言葉に聞こえた。

「お止めなさいグレン！！」

あの時点でルビーが完成していたなんてボスにも予想出来なかったことよ、

ライズを責めるのは筋違いだわ」

エレナは眉間に力を込めて目を開けた。

眩暈を堪えて半身を起こし、そこがあばら家の中で、粗末な毛布の上に体を横たえていたのだとわかった。

エレナが体を起こしたのに気付き、

少し離れたところで立って話していた男女が顔を向けた。

歩み寄って屈んできた青年の顔には見覚えがある。

「大丈夫かい？」

「お前…さっきの…？」

彼は苦笑した。

「君からしたら“さっき”か……」

その言葉にエレナは初め首を傾げ、すぐに飛び上がった。

「どこだ此処！？」

オレなんでこんな所に……」

「ああ、俺が連れてきた。」

殺されると分かりきってる場所に置いてはおけなかったからね」

「は!？」

…!!

カトリ!!カトリは!？」

気を失う直前まで一緒にいた少女。

「君が倒れてた付近には、影も形もなかった。」

直前まで一緒にいたってんなら、混乱に乗じて連れ去られたんだろ
う。

あの子は多分 …」

そこで彼は言葉を切る。

エレナは構わず、立ち上がろうとしてよろめいた。

「おいおい、まだ無理だよ、安静にしなきゃ」

「そんな場合かよ!

とにかく …」

そこでエレナはハタと顔を上げる。

「…戦況は？」

セナはどうなったんだ？」

その問いに、エレナ達を見守っていた2人の男女が目を伏せた。

青年 … 夕陽の髪的青年、ライズが蒼穹の目でエレナを見た。

「隠しても仕方ない、

君には辛い事実だろうけど受け入れて欲しい。

君がいた皆の人々は殆んどが死んだ。

君達は敗けたんだ」

エレナは凍りついた。

「……嘘だ」

「気の毒だが本当だ。

頭目 … 名前はイリアス、だっけ？

彼も討ち取られ、その首がマラバールに送られたそうだよ」

…

…時は数日を遡る。

風の匂いに湿りが増した。降るな、と思った。

「……クリス、」

消え入るような声が耳元に聞こえた。

クリスは前だけを向いたまま、イリアスを背中に担いで歩き続ける。

森の繁みはクリスの味方だった。

遠くに、どこだ、捜せ、と言う声が飛び交うのが聞こえる。

クリスは眉をひそめて更に森の深くに踏み込む。

背中にぬるつく感触が増した。

イリアスの負った傷は深かった。

クリスの人間離れた嗅覚は既にイリアスの血の匂いで麻痺している。

「……クリス……もういい……」

クリスは応えない。

イリアスの声がかすれた。

「いいんだ、クリス……」

俺は最初からこのつもりだった……、

逃げ切れるとは思っていない……だから……」

クリスは答えない。

透明な赤紫の瞳は真っ直ぐ前だけを見つめる。

草を踏み分ける足取りが鈍くなっている事がイリアスにはわかった。

いくら身体能力が常軌を逸していてもクリスにも限界や疲労がある。

クリスが息を切らすのを、イリアスは初めて見た。

…振り下ろされた白刃がイリアスの肩を斬り裂いた直後、

振り下ろした敵兵はクリスによって斬り飛ばされてイリアスの視界から消えた。

その後クリスはイリアスの体を肩に担ぎ上げ、
片腕のみで槍を振るい敵陣を突破した。

たった1人で、自身よりも体格の勝る男1人を抱えて騎手とゴーレム40組以上を屍に変えながら、

50を超える追っ手から逃げ切ったのである。

マラバル兵の記憶に決して拭えぬ驚愕と凄まじい迄の衝撃を刻みつけて。

「……クリス、降ろせ」

「いやだ」

キツパリと言い放つクリスに、イリアスは弱々しく笑った。

「お前が…自分の意思をそこまでハッキリ言うのは…初めてだな
……」

イリアスは目を細めた。

返り血に汚れたクリスの姿は、初めて会った日を思い起こさせた。

「クリス…お前の言った…言葉……」

「しゃべるとよくない」

「…お前は…人間だよ…」

クリスは首を傾けた。

イリアスは優しい色の瞳を微笑ませる。

「お前は言ったな……、

自分は人間の気持ちがわからない、
だから自分は人間じゃないんじゃないか……と……

お前が正しいんだ、

クリス……

他人の気持ちなんて…、

他人にはわからない……

わかったような気になっているだけだ……。

俺は……ずっとお前を誤解していた……。

お前が素直で従順なのは……自我が欠けているからだ……思っていた……、

お前が、上が命じれば何も考えずに何でもするような人間になるのが怖かった……

お前が犯す罪と、そういうお前を作り上げた罪に、
……俺は自分が責められるのが怖かったんだ……」

雨粒が葉を叩く音がした。

「情けないだろう……、

俺は……お前が残酷ではない事は知っていたが……

……あの娘が現れるまで……お前が優しい子だったんだと……気付かなかった」

雨が、頭上の木の葉の間をすり抜けてきた。

血に濡れて、雨に濡れて、イリアスを背負った腕が滑る。

「……周りにいたのが……俺やドルサクみたいなのばかりで……

……お前が自分から他人に世話を焼くのを初めて見た……、

嬉しかったよ…

自分の不明にすっかりしたけれど…」

イリアスの口調は暖かい。

しかし、その声は低くなる一方だった。

「それがわかったから……

もういい……、

好きなように……生きなさい……。

お前はちゃんとわかってる……、

……戦う意味を……」

「イリアス」

クリスの声は微かに動揺を含んで揺れる。

雨が、こんなに冷たい。

「クリス…俺を降ろせ」

「いやだ」

「もう困は必要ない……、

先に逃がした者達への義理は通した……、

この先にまで、責任を負うことはないだろう……、

もういいんだ、クリス。

俺を見つけるまで追撃の手は緩まない……。

だからもうお前も……」

「いやだ」

「クリス」

「……いやだ」

クリスの声に子供じみた調子が混じる。

それにイリアスはくすりと笑った。

「クリス、……」

「いやだ」

「……カトリは生きてる……」

クリスはその言葉に虚を突かれ、目を瞠った。

イリアスは微笑う。

「ラリーで……捜した。」

彼女の残骸はどこにも無かった……。

…エレナもだ……。
ドルサツクとケイヴィンも……、

逃げ延びたか……。
捕まったか……。

…捜せ………」

クリスは戸惑った表情を浮かべ、
しかし頭を振った。

「イリアスも……」

「俺が一緒じゃ捜せまい」

「でも、イリアスをおいて行くのはいやだ」

イリアスが笑う。

…宥めるように、
あやすように。

「お前は俺を置いては行かないよ……。俺がお前を置いて行くんだ……」

クリスは目を見開く。

動揺と悲しみに似た色で顔を染めて、
絶るような声を出した。

「ちがう……、

……ちがう!!

イリアスはおれを置いていったりしない!!

イリアスはちがう!!!!

イリアスは ……」

赤紫の瞳が滲んだ。

イリアスはそれを見なかった。

否、見れなかった。

もうイリアスは視力を失っていたから。

「帰るよ……」

「か……える……」

「ラリーと……故郷に帰る……、

いつか……お前も来い……、

……いい所だ……」

イリアスの声は本来の澄明さを失い、かすれる。

クリスは知らず知らず足を早めた。

追っ手からではない、他の何かから逃げるように。

「……聖地ヴァナディースで待っている………」

それきりイリアスの声は絶えた。

クリスは、足を止めなかった。

寒い。とても。

あの日とは違う。

雨の中、あの日はあんなに暖かったのに。

） ……名は何という？（

……声が聞こえる。

（………そうか、クリスタルというのか）

（俺はイリアスという。

わかるか？

イリアス、だ。

………言っでござらん（

…

「 ……いりあす………」

クリスは呟く。

雨に霞む森の中、

イリアスの微笑む顔を見た気がした。

(……一緒に帰ろう…)

…

【祈りを冒した毒のこと】

セナ砦の陥落の報せは南半島の人々に混乱をもたらした。

*

「イリアス神父の軍が敗けた!？」

「それじゃセヴァルスタはどうなるんだ」

「息子達はどうなった!？」

「セナにいたんだよ!」

「砦を見たか、跡形もなかった」

「マラバールの連中が火を放ったんだ、

煙を見たか？

何を燃やしたらあんな真つ赤な煙が出るんだ」

ライズの制止を振り切って砦の見える丘に駆け上がったエレナは、

遠目から見ても廃墟と化した様相のセナ砦を目にし、愕然と立ち尽くした。

「……………うそ……………、
イリアス……………」

後ろに付いてきたライズがエレナに声を掛ける。

「これでわかったら？
嘘なんかつかないよ。」

納得できたら大人しく……………」

突然、エレナが弾かれた様にライズの胸ぐらに掴みかかった。

「どつという事だよアレは！！」

何があった！？
何でオレだけ連れ出したんだよっ！！」

「ちよっ……………痛い痛い」

「あの兵力差で敗けるわけない！！」

汚い手を使われたに決まってる、何があった！？

「言えよ、言えったら！！」

激昂するエレナだったが、

不意に横から伸びた手の平に頬を叩かれ、ポカンと口を開けた。

「落ち着きなさい!!」

毅然と言い放った女は背が高く、堂々としてエレナを見据えた。

歳の頃は17と18、

エレナよりもやや年上か。

緩やかに波打つ紺碧の髪を高く束ね、

深緑の瞳は濃い睫毛に囲われ、一層力強く輝く。

整い過ぎているほど整った眉を寄せ、女はエレナを睨みつける。

「恩人に掴みかかるとは何事なの!？」

助かっただけでも良しとなさい、

あれであなたが生き残ったのは奇跡に等しい事なのよ!!」

「キリエ、何もひっぱたかなくなたって」

「お黙りなさい!!」

頭に昇った血を降ろしてさしあげただけよ」

君もね、と呟いてライズが頭を搔いた。

呆然としたエレナに改めて向き直り、優しく語り掛ける。

「取り乱すのはわかるけど、あんまり激しく動いたり興奮したりす

るのは好くないんだよ。

君は“感染”しちゃってるから」

エレナは呟くようにライズの言葉を復唱した。

「感染…？」

ライズがエレナの目の前で人差し指を立てた。

「いいかい、よく聞いて。」

君の言う通り、君の仲間は“汚い手段”で敗けた。

あの夜に皆で起きた爆発を覚えてる？

あの時、皆には“毒”が撒かれたんだ。

その毒に、君の仲間のほぼ全てが感染して死んだ」

エレナの顔色が変わる。

再び激昂しかけた彼女を制し、ライズが続けた。

「その毒は感染したとほぼ同時に発症し、
死に至るか、身体の一部を失う。」

ごくたまに、その毒に感染すらない人間もいるけど、本当にごく
僅かだ。

そして君は、その僅かの内に入る人間じゃない」

キョトンとして、エレナはライズの顔を見る。

「どづいづ…」

「君は過半数側の人間だ。

感染して即死する方の体質なんだよ。

けど君は感染しながら発症はしなかった。

君が吸い込んだ毒は、ある抑止力により一時的に弱体化したんだ。

ただ、解毒されたわけではないから放っておけば必ず発症する。

それを抑える為にも、君は安静にして俺の治療を受けてね。

じゃないと死ぬよ」

「治療…って…なに？」

お前医者なの？」

ライズが笑う。

「いや、ただ毒に効く薬を持つてるだけ」

ライズの横に立って周辺に気を配っていたキリエが、どこからか姿を現した若者に気付き声を発した。

「グレン、どう?」

「駄目だ、気配のカケラもない。」

おい、お前のゴーレムもう消化されてんぞ!」

若者の言葉の後半はライズに向けられていた。

上半身だけでグレンという若者の方を向き、
ライズは肩を竦める。

「それは俺のせいじゃないしなあ、仕方ない。」

けっこう数ぶち込んだんだけどねえ」

「エツダが逃げた方角は判っているのだから充分よ。」

討伐隊に手を貸していた事も考えれば行き先は知れたも同然、
マラバール以外にないわ」

グレンが頷き、ライズの方に視線を寄越した。

「急ぐぞ、

……で、その女はどうする気だ?」

「連れて行くよ。」

友達の顔があれば信用してくれるだろ、
保護しやすくなる」

「保護？」

エレナが眉をひそめて言葉の意味を訊き返す。

ライズが笑った。

「君の可愛い友達を助けに行く。

あんなに心配してたんだ、

一緒に来てくれるだろ？」

…

その午後、酷薄で知られるマラバル総督ヴェルンドは、
待ち兼ねていたものが手元に届き上機嫌だった。

「よくやった、

これでようやく儂の顔も立ったわ。

すぐに帝都へ送り届けるのだ、

皇帝陛下もお待ちかねであるっ」

平伏した兵士が、総督の前に差し出した桶 …

… 布が被せられ中身は覗けぬそれに両手を添えて持ち、退出しよ
うとしたところに、

文官の1人が慌てた様子で謁見の間に入ってきた。

「何事か」

「失礼致します、

帝都イザヴェルからの使者の方が……」

なに、と言ったヴェルンドは立ち去りかけていた兵士を呼び止め、すぐ客人を通すように官に命じた。

数分後に謁見の間に姿を見せたのは、背の高い、1人の若い男だった。

その男は感じの良い笑みを浮かべ、ヴェルンドに一礼した。

「ご多忙の中、突然に伺いました非礼をお詫び申し上げます。

報せを出す暇がなかったものですから」

「いやいや、丁度ご報告がございました故。

ついに反乱軍の頭目の首をあげましてございます、御覧になりますか」

いえ、と言った男は辺りを見回す仕草をした。

無言で人払いを要求したのだと悟って、

ヴェルンドは、謁見の間に控えていた官や兵士全員に退室を促す。

意を汲んでもらった男が、にっこりと笑った。

彼はどう見ても20代後半〜30代半ばの顔をしているにも関わらず、

その笑みは見ようによってはあどけない、無垢そのもの顔だった。

【金糸雀の勇気】

歌鳥は意を決した。

これ以上この状況に身を置くことに堪えられない。

決心し、歌鳥はまずこの日の午前に食事を持ってきた兵士にいつもとは違う質問をした。

「…エツダさんはまだ戻らないのですか？」

兵士はその名前に反応を見せなかった。

首を傾げて歌鳥の顔を見返す。

「エツダさん。

ご存知ありません？」

総督…さまのお知り合いで…私はその人をお待ちしてここに」

歌鳥は気は弱いが、聡明な娘ではあった。

ヴェルンドとの会話から、彼が歌鳥を厚遇する理由が彼の意志ではなく、

エツダの意向を慮つての事なのだと推測した。

「いつ戻られるか、

ご存知ありませんか？」

兵士は首を振った。

隠しているわけではない、本当に知らないのだろう。

彼が部屋を出て行つてから、歌鳥は椅子に掛けて食事につけた。

パンとスープのみの献立、食器に陶器の器とスプーンしか持たされない。

とても凶器にはならない。

それを考慮してのメニューなのかも。

（食べておかなきゃ、

力が出ないと困るもの）

ほぼ無理矢理それらを咽喉に流し込み、

歌鳥は部屋を見回した。

ベッドからシーツを一枚引き剥がすと、

歯で噛んで切れ目をいれ、そこから一気に裂いて紐を作った。

何度も繰り返し、繋ぎ合わせて長いロープにする。

…

午後の食事の時刻が近い。

歌鳥は柵から引き出しを一つ丸ごと抜き取り、卓の上にハンカチで包んでおいていたコウモリをそれにそっと移した。

見つけた時から回復したのか全く判然とせず、変わらず動きは鈍い。

「ごめんね、

もう何もしてあげられなくなるかもしれないから……」

露台に向かい、風当たりの小さい位置に置いてパンのカケラを一緒に入れた。

「飛べるようなら、自分のおうちにお帰り。

無理そうなら、元気になるまで隠れてるのよ。

海鳥に食べられないようにね」

微笑ってコウモリの首元を指で撫で、歌鳥は立ち上がった。

扉に向かい、ピタリと耳を寄せる。

しばらく待って、鎧の鳴る足音が聞こえてきた。

兵士はいつも1人で来る。

歌鳥は大人しい虜囚だし、寸鉄帯びぬ身だ。

兵士達は遠慮はしても警戒して部屋に入って来ることはない。
緊張に心臓が高鳴る。

歌鳥はベッドのカーテンの陰に隠れた。

…ノックの音がした。

「食事です、」

ガチャンと音がして、錠が外された。

「入りますよ ……」

彼は何度かここに足を運んでいる。

どういう虜囚かは知らないが、
軟禁されている少女は貴人のように扱うよう言われていた。

呼び掛けに対する部屋の中からの返事がない事に迷ったが、
扉を開けて顔を覗かせた。

「失礼：？」

食事を載せたカートを押し、彼は部屋に踏み込む。

少女の姿は見えない。

不審に思つて部屋を見回すと、

半ば開いたカーテンの陰からベッドの上の膨らみが見えた。

歌鳥が昼、枕やクッションを丸めてシーツを掛けたものだ。ぱつと見、人が横たわっているように見える。

「？、具合でも……」

そのとき急に足元がひっくり返った。

「わあっ!?!」

「ごめんなさいっ!!」

歌鳥は兵士の頭に思い切り椅子を叩きつけた。

兜をかぶっているのだから、大した怪我はすまい。

兵士の足元を崩したのは、シーツで作ったあのロープだった。

向かいのタンスに括りつけ、絨毯の下に隠しながら端をこちらに持ってきた。

足を引つ掛ける際、歌鳥の腕力では心許なかつたのでベッドと椅子でテコを使った。

兵士は頭を襲つた衝撃から一瞬おいて立ち直つた時、扉の方に駆けて行つた少女の背中を見た。

それが閉ざされ、重い音が響くのを聞いて彼は青ざめる。

…錠を!!

歌鳥は駆け、後ろでドアを激しく叩く音を聞いた。

立ち止まる気も、振り向くつもりもなかった。

歌鳥はこの棟が屋敷の中において隔離されている様な場所にあることを判断していた。

初めてこの屋敷に連れて来られたあの地下から、豪華な様相の回廊を通って移されたあの部屋。

そこに到る迄の建物の装飾や、人の行き交いの増減の変化が根拠である。

じっさい記憶通り、廊下に人の気配は無かった。

絨毯の床は歌鳥の足音を吸い込んでくれる。

とりあえず脱出を成功させた歌鳥は、まずは地下牢へ向かうつもりだった。

囚われた彼らの安否を確認し、叶うなら助ける。

方法は今から考える。

とにかくあの部屋に大人しく居たままでは何も動かない。

歌鳥は駆けた。

…歌鳥は自分が閉じ込めた兵士が扉を叩く音が突然途切れ、

床の隙間から“紅い砂”が流れ出たことに全く気が付かなかった。

*

…時刻は夕暮れ、

邸内は薄暗く、壁の松明は灯される火を待っている。

廊下の向こうから歩いて来る侍女の姿に、歌鳥は足を止めた
…、
が、
すぐに平然と歩き出した。

侍女は歌鳥の姿を見てハツとした顔をしたが、
歌鳥に不審な様子がないので首を傾げた。

「あの………？」

「御苦労様です、
エツダさまはどちらにおいでですか」

につこり笑い、歌鳥は訊ねた。

平然を装いながら、歌鳥の心臓は忙しく早鐘を鳴らしている。

これは、大芝居だ。

歌鳥が何者で、何故ここにいるのか、
この屋敷にいる殆どの人間が理解していない事を歌鳥は肌で感じて
いた。

だから、ハツタリで乗り切れるはず。

侍女に行き合って引き返したり、逃げるような素振りを見せれば、

絶対に彼女は不審に思い、歌鳥が軟禁されていた部屋から逃げたと
思うだろう。

それで人を呼ばれたりしたら万事休すだ。

だから歌鳥は堂々と侍女に向き合った。

侍女は戸惑い気味に、

「はあ、あの……、

……エツダさま……？」

と答えた。

歌鳥はその答えを予想していた。

だから歌鳥が推測している事を、さも事実のように話した。

「エツダさま、です。

総督さまの所においでなのかしら、

大事なお話中かもしれないし ……」

「はあ、あの………」

「でも伺っただけ伺ってみますね、
お仕事中に呼び止めたりしてごめんなさい」

ちよこんとお辞儀して歩いて行く少女の背中を侍女は首を傾げて見送った。

しばらく歩き、歌鳥は息を吐いた。

安堵で膝が崩れそうだ。

我ながらよくやった、と思う。

(…うまくいった…、

…信じられない……)

よくもまあ度胸を絞り出せたものだ。

(…この調子で行けるかしら…)

自信はないが、やるしかあるまい。

歌鳥は頷き、記憶を辿って地下への通路を探した。

堂々と歩けば、歌鳥を呼び止める者はいなかった。

…

ようやく見覚えのある出入口と階段を見つけ、
そこに見張りがいない事に歌鳥は胸を撫で下ろした。

辺りを見回し、意を決して階段に足を踏み出す。

カツン、という足音に自分で驚き、歌鳥は靴にハンカチを巻いた。

(……よし……)

下に気配を探りながら、一歩ずつ降りる。

階下は暗闇で、歌鳥は足を踏み外さないよう神経を削った。

しばらく降りても何者の気配も感じられず、歌鳥の中で不安が膨らむ。

(こんなに深かったかしら……)

なんだか地の底にまで繋がっているみたい……)

冷やかな風が足元からはい上がる。

軽く鳥肌が立ち、歌鳥は思わず後ろを振り返った。

何も異変のないことを確認してため息を吐き、

歌鳥は階段が途切れたのに気付いて石の壁に身を寄せた。

(……話し声はしない……、

鎧の音もしない……)

緊張に震える足を励ましながら進み、
鉄格子を見つけて歌鳥は目を睜った。

岩の壁の牢獄。

そこは無人だった。

しかし歌鳥が驚いた理由はそれだけではない。

岩の床に蠢く、

…水銀の群れ。

「嘘っ……」

歌鳥は蒼白になって立ちすくんだ。

それに気付いた様に、水銀の一部が人の形に膨らんでこちらを向いた。

歌鳥はかるうじて悲鳴を飲み込んだが、その間に1人、2人と人間の形をしたモノが起き上がり、ドロドロと銀色の雫を滴らせながら迫ってくる。

(…これは、何…!?)

水銀が流れ落ちて、半透明な寒天状の腕が露出する。

吐き気を覚え、歌鳥は後退った。

その足に、気付かぬ内に別方向から伸びてきていた腕が絡みつく。

「イヤっ……」

グズグズとした感触に総毛立った。

振り払おうとして、歌鳥は声なき声を聴く。

(…タスケテ…)

歌鳥は目を見開いた。

(タスケテ)

(イタイ)

(サムイヨ…)

(イタイ、イタイ)

(ドコニイルノ…?)

「……っ……!?!?……」

悲痛な声だった。

耳を塞ぎたくなる様な衝動を堪えて、歌鳥は目を凝らした。

もう恐怖は感じなかった。

…その時、

「!?!?!」

歌鳥の身体が突然浮いた。

手足が宙を掻き、ふわりと一飛で階段の位置まで下がる。

歌鳥の身体を抱えた腕、

覚えのある感触に歌鳥は弾かれたように振り向いた。

「エツダ…さん、…!!」

視界のすぐ端に、無感情な蒼白の横顔が在った。

「あれらはまだ調教を済ませていない、

迂闊に寄っては飲み込まれますよ」

冷えた声音。

歌鳥は我に返り、叫んだ。

「…離して下さいっ!!」

全力で身をよじる。

すると予想に反して難なく腕はほどけ、歌鳥はガクンと体勢を崩した。

「きゃ…っ……」

それを追って、エツダの腕が伸びる。

ひんやりとした手が歌鳥の体を支えた。

「え、…あ、…」

その動作があまりに優しげだったので、歌鳥は困惑した。

「…あ…ありがとうございます…」

語尾を消え入らせながら、歌鳥は視線を泳がせる。

どつという態度に出たら良いものか迷い、か細い声で呟いた。

「…ここにいた…人たちは…？」

エツダの声は素っ気ない。

「お知り合いでも？」

何の感情も通わぬ口調で返されて、

歌鳥は思わず、鋭い動作でエツダを見た。

「…そういう事を言っているんじゃないんです！」

ここに捕まっていた人達をどうしたの？

何故いないんですか？

どうして…っ…！」

急に跳ね上がった激情を持て余し、

歌鳥の濃紺の瞳から涙が零れた。

問いかけの答えを聞く迄もなく、歌鳥はそれを悟っている。

…ここは何でも有りの世界だ。

「…あれが…そうなの？……」

エツダの眉が軽く上がる。

その反応を、歌鳥は肯定とみなした。

「やっぱりそうなの？」

あれは、本当は人なんですか？

あなた達が何かして、それであんな姿に？

あなた達があれを？」

エツダは白蛾の顔色を少しも動かさない。

歌鳥は俯き、顔を覆った。

「……ひどい……っ……」

細い指の隙間から、1粒、2粒と涙が零れ落ちる。

エツダはそれを無感動に見つめ、

「おわかりなら気もお済みでしょう、

このような場所に用はないはず、

参りましょう」

歌鳥は顔を伏せたまま頭を振った。

「……いやです……、」

私が言うことを聞けば、

あの人たちを元に戻してくれるの？

そんな事はしないのでしょうか、

ならば言うことを聞く理由はないわ」

「お聞き分け下さい、

彼らとあなたは違う」

単調に言われて、歌鳥は涙に濡れたままの顔を上げてエツダを睨み付けた。

「わかっていきます!!」

私はこの世界の誰とも違います!

だってここは私の世界じゃないんだもの、

けれどそれが何!?

みんな私に親切にしてくれたわ、
違いなんて関係ないって思った、

違う事なんてわかってる、

今さらあなたに諭されるまでもありません!!」

生まれて初めて、歌鳥は他人に怒りをぶつけた。

そもそも怒りを覚えた事すら初めてだったかもしれない。

いつも歌鳥は、不満を持つ前に相手の気持ちの先に回り込んで勝手に納得し、口をつぐんでいたから。

けれど、そういう一線は軽く飛び越えてしまった。

生まれて初めて他人を睨み据えて、怒りに速まる鼓動が全身を熱くする。

息が上がる。

「…混乱はごもつともですが、

あなたに行動の自由も選択の余地もない事くらいおわかりでしょう？

第一、いつまでもこの様な寒々しい場所におられてはお身体に障ります。

共に地上にお戻り下さい」

「…あなたは私のことは心配するの？

…不公平なんですネ」

涙に頬を濡らしたまま、

冷えた笑みを浮かべる。

エツダの声はさらに凍みるほど冷たい。

「お預かりしている御身ですので」

「預かる…?」

歌鳥はぼんやりとエツダを見上げた。

「“ある方”が地上で貴女を待っております。

参りましょう」

【Triangle Wings】

歌鳥が軟禁されていた部屋からの脱出を果たした日の前日の事である。

エレナとライズ達はセナ砦からマラバールへ向かい、遙か北方に広がる森林地帯にいた。

「なあ…コレいつまでつけんの？」

「なんか気味悪いんだけど」

エレナは複雑そうな表情で自身の首に張りついた黒蝶を示した。

その言葉に、ライズが控えめに抗議する。

「可哀想なこと言わないで貰える？」

サンディが泣いちゃうじゃないか」

「サンディって…、

…コレ、サンディっていつのか…」

「そ、俺の可愛いゴーレムだよ。

そのコの鱗粉が、君の体に回ってる毒の解毒剤になるわけ。

気味悪いなんて言ったら、失礼でしょう」

「ああ…、…うん…」

調子の狂う男だ、と思う。

やけに馴れ馴れしく、邪気の無さそうな笑顔を見せるが、
どうも腹の内が読めない。

「お前さあ、結局何者？」

「俺は君の敵の敵だよ、

今はそれだけ言っておく」

釈然としないまま、エレナは生返事だけ返した。

仲間を失った衝撃は、

今はとりあえず熱を失っている。

今は残る仲間を捜す事だけ考えよう。

泣くのも喚くのも、その後でいい。

エレナがそんな事を考えていたとき、
別行動をとっていたキリエとグレンが合流してきた。

「敗残兵の搜索や掃討はだいぶ収まってきているわ、
でもやっぱり街道に行くのは目立ちそうね」

ライズが頷いた。

「じゃあ“ゴーレム化”して上を突っ切って進むのが早いか」

グレンが軽くライズを睨んだ。

「てめえ今ゴーレム使ってたんだろ、
どうやって…」

「うん。俺は無理だね。」

だからここはグレンに乗せてもらって…」

「断る！！」

断固としたグレンの態度と、3人が交わす会話の不可解さにエレナは首を傾げていた。

そんなエレナには構わず、3人の問答劇は続く。

「だって俺がキリエに跨るわけにはいかないじゃないか、外聞的に」

「何の外聞だ、

俺はてめえだけは乗せねえぞ!!

絶っつ対っだつ!!」

「そんなに女の子の方を乗せたいの？」

グレンで意外とイヤらしいんだな」

「違っつツツ!!!!」

その会話をあきれたような表情で聞いていたキリエが、業を煮やしたように叫んだ。

「いい加減になさい!!」

いつまでやっているの!!!!」

もういいわ、

私が2人とも乗せて行くから!」

言うが早いのか、キリエの姿が突然霞んだ。

足元から吹き上がった光の膜に覆われた故の現象だったが、

それは一瞬の事だったのでエレナの目では認識できなかった。

目を睜るエレナの視線の先で、キリエの姿が霞んで滲む。

その光が弾けると、女の姿はどこにも無かった。

「うツそ……っ」

そこに居たのは1頭の馬だった。

しかも只の馬ではない、
翼をもっている。

純白の天馬、瞳は深緑。

そして。

『さあ、早く行くわよ』

エレナは驚愕に口をポカンと開けた。

声の主はその天馬、

しかもそれは、キリエの声そのものだった。

*

「うわぁ……」

エレナは雲にも触れられそうな上空から下を見下ろし感歎の声を洩らした。

キリエだった天馬の背中には鞍も付いていなかったが、馬術はまったく必要なかった。

少しばかりもの珍しげにキョロキョロと辺りを見回していたエレナに、声が掛かる。

『あまり下ばかり見て気を散じないで下さる？』

そちらの落ち度で転がり落ちても拾い上げないわよ』

高飛車な言い種にカチンときたが、エレナは言い返さなかった。

なんとなくこの少女は苦手だ。

歌鳥とは違う女らしさが、エレナにはむず痒い。

キリエに騎乗していたのはエレナ1人だった。

結局、グレンは折れざるを得なかった。

不平満々な声が空に響く。

『いいか、絶つつつ対に妙な真似すんじゃないぞ！！』

羽ばたく獣は、背中の青年に噛み付きかねない形相を見せる。

その顔は鋭い嘴をもった鷲であつた。

胴体は獅子、背中には逞しい翼が生えている。

所謂グリフォンだ。

その背中でライズが笑う。

「妙な真似なんてするはずないじゃん、
任務中にさ」

『ほざけ!!』

てめえずっと前、任務中に俺の食事に変な薬混ぜたり、人通りの多い広場で俺の ……』

「それはグレンの反応が面白かったから

こんなところでは何もしないって、
だって君が今取り乱したりなんかしたら、俺の身も危ないし」

『やっぱり降りろテメエ!!』

『うるさいわよ!!』
少しは落ち着きなさい!!』

エレナはそのやりとりを聞いて、ますます彼らの正体がわからなくなつた。

悪い連中には見えないのだが……。

「そつえばさあ、」

グレンに乗ったライズが、横を飛ぶキリエに乗るエレナに声をかけた。

「マラバールの陣営に俺のサンデイを1つ飛ばして、色んな話を盗み聞きしてんだけど、さっき面白い噂を聞いたよ」

エレナが怪訝そうにライズの方に顔を向ける。

「何だよ？」

「敗残兵の中に、たった1人で陣を突破した子どもがいたって。

しかもゴーレムにも馬にも乗らずに槍一本で、騎乗してた追っ手数十騎を振り切ったってハナシ」

エレナが顔色を変えた。

グレンが呆れたような声を出す。

「それ、人間か？」

「心当たり、ある？」

エレナちゃん」

ライズの問いにも答えず、エレナは呆然と地上を見下ろした。

胸を抑えながら呟いた声が慄える。

「……クリス……！！……」

【無垢の獣、嗜虐の獣】

…イリアスは死んだ。

背中に感じられていた体温が、雨に流されて冷え切っていくのを確認し、

クリスはようやくその体を近くの木の幹にもたれ掛けさせた。

イリアスは、死んだ。

目を閉じた顔を見つめて、クリスは何度もその言葉を頭の中で繰り返した。

繰り返して納得し、クリスは立ち上がる。

死者を弔うという感覚は、クリスにはない。

死体にも執着しなかった。

もう喋らない、動かない、ただイリアスだったというだけの物体。

イリアスの死は悼んでも、物を惜しむ理由はない。

第一、イリアス自身がそれを望まないだろう。

追っ手の目的はとりあえずイリアスだ。

イリアスが見つからない限り、彼らはマラバールへは帰らない。

探索の手が近隣の村に及ぶ前に、見つけさせてしまった方がいい。

差し出したところで損なわれるものなど何も無い。

イリアスはもういない。

これはイリアスではない。

頷き、クリスはイリアスの雨と血に濡れて顔に張りついた髪を撫でた。

言葉は、掛けなかった。

立ち去るときに、振り返ることもしなかった。

まだ別れじゃない。

約束があるから。

*

セナ砦の近くまで行ってみたが、
たむろす追討兵の数の多さを見て引き返した。

行っても得るものがあるとも思えない。

もうあれは建物とは言えないだろう。

クリスは繁みの中に身を屈めた。

この周辺には焦げた臭いと屍臭が満ちていて、クリスの鼻が利かな

い。

生き残っている仲間を捜さなければ。

それだけを頭の中に満たし、クリスは一旦この場から離れることにした。

しばらく歩き、クリスは遠くに声を聞いた。

反射的に眉をひそめる。

…人間を狩る人間の声だ。

槍を手に、クリスは駆け出した。

*

…小さな農村に悲鳴と怒号が響き合う。

逆賊に加担したとして、追討軍の一部の兵士達が農民達の虐殺を始めたのだ。

彼らは先の戦いで手柄を立てた同輩達に遅れをとるまいと功に逸っていた。

そもそも長年、武力でもってセヴァルスタは支配されてきた。

マラバールの兵士達はその流儀が染み付いている。

民を虐げる事に何の良心の呵責も感じなかった。

「どこに逆賊を匿っているのだ、
言えば命は助けてやるぞ」

そう叫びながら、返答を待たず剣を振り下ろす。

すべて大義名分だ。

首を刎ねてしまえばどうせ反乱軍の残党と農民の見分けなどつくまい。

兵士は残虐な笑声を上げて、次の獲物に向かい騎乗した豹型のゴーレムの腹を蹴った。

しかし直後、彼は突然襲ってきた衝撃によって地面に投げ出され、それを自覚する前に息絶えた。

小柄な少年が舞い降りる。

クリスは悲鳴すら上げさせずに兵を1人仕留めた。

落ちた騎手と入れ替わるようにしてゴーレムの背に乗り、後ろからその首に槍を突き通す。

獣の悲鳴に、兵士達は異変に気付き集まってきた。

少年は摒ぶたいに兵士達の頭上を飛び越え、後ろに回り込み最後尾の一騎を一度に斬り捨てた。

返す刃で隣のゴーレムの足を斬り落とす。

常軌を逸した豪勇に兵士達が浮き足立つ。

お構い無しに高く跳躍し、クリスは槍を振るった。

兵士達にとって、この日は人生最後の厄日となった。

1騎、2騎と、仲間が次々落とされていくのを目の当たりにして、
1人の兵士が乗騎の首を巡らして逃げ出した。

それを見て、クリスは慌てた。

今あれを逃がしては、敵にクリスがここに現れた事が知られてしま
い、
彼らの嘘が本物の大義名分になってしまう。

この村に、兵士達を引き寄せてしまう。

…それだけは……！

1騎を斬り捨てて、クリスは駆けた。

追い掛けて、しかし今更になって足がもつれ始めた。

追い継るようにしても、騎影は遠ざかるばかり。

絶望的な思いで声を上げようとした時、

…突然、繁みの中から黒い影が躍り出て騎手を蹴落とした。

クリスはポカンとして足を止めた。

一瞬にして現れたその人物は、次いで兵士の乗っていたゴーレムの頭に踵を落とした。

その衝撃でゴーレムの身体が霧散する。

目を見開いたクリスだったが、すぐにガクンと膝をついた。

それに気付いたその人物が悠然と歩み寄ってきて声を掛けた。

「おい、大丈夫か坊主」

頷き返事をしようとして、クリスは咽喉の渇きで声が出ないことに気付いた。

思い起こしてみれば、あの惨劇の夜以来、ろくに食事も摂らず水も口にしていない。

一睡すらしていなかった。

常人なら死んでもおかしくないな …、と、

自覚した途端に疲労や苦痛が身体に追い付いてきた。

激しい目眩の後、クリスの意識は唐突に闇に沈んだ。

*

…そして、次にクリスが目を覚ましたのは木の洞の中だった。

そうとすぐに判ったのは、クリスが幼少の頃に、よくこういう場所

をねぐらにしていたからだ。

クリスは身を起こし、すぐに横倒しになって吐いた。

胃の中に吐くものなど何もなく、出てきたのは胃液だった。

ひどい臭いに咳き込み、涙が滲んだ。

「…っ…はあ…っは…」

目眩がする。

こんなことは初めてだ。

クラクラしながら仰向けに寝転がる。

…その時、

「吐いたモンの上に頭乗っけんのはどうかと思うぞ、坊主」

出し抜けに野太いバリトンが聞こえて、クリスは飛び上がった。

見上げてみると、洞の入口に驚くほど背の高い男が立っている。

巨漢ではない、

堂々たる偉丈夫だ。

「歩けるか」

クリスは目を丸くする。

黙っていると、その大男が身を屈めて入って来、軽く顔をしかめた。

「臭えな。さつさと出る。」

口と頭洗ってメシだ」

「？」

「昨日の村人から貰った粥がある、固形物は喉通んねえだろ」

「…だれ…だ？…」

もつともな質問に、

彼はぞんざいな答えを返した。

「ロイド」

「ろいど？」

「さつさと来い」

横柄な物言いと態度だったが、不思議に反感は湧かず（元々クリスにはそういう事を頓着する性質はないが）、素直に頷き、ヨロヨロと立ち上がった。

数十歩の距離に川があり、クリスはロイドと名乗った男の後ろに付いて岸に向かい歩いた。

砂利を踏みしめた時、突然クリスは髪を掴まれて引き倒され、

しかもその後、水に頭を突っ込まされ、慌てふためいた。

「!?、!?、!?、!?」

「よし、落ちたな」

かなり乱暴に髪と顔を洗われて、クリスは激しく瞬き男の顔を見た。

「????」

彼はニコリともせず、隣に胡坐をかいて横に置いてあった荷物から竹筒を数本取出している。

歳はイリアスやドルサクよりも上に見える。

…40前後か。

黒い短髪。

コート、ズボン、靴に至るまで黒ずくめ。

顔のほぼ半分を覆った眼帯まで漆黒だった。

右の顔面に大きな傷痕があるらしく、その眼帯では隠しきれないでいる。

残された左半分の顔は彫りが深く、一応端正な内に入るだろう。

覗く隻眼は、濃い琥珀の色をしている。

ロイドは粗雑な動作で竹筒の1つをクリスに向かい投げて寄越した。

受け止め、促されるままに蓋を開けると中にはゆるい麦粥が入っていた。

「時間が惜しい。
さっさと食べ」

食べるというより、飲むという表現の方が正しい様なシロモノだったが、

丁度胃が弱っていたので有り難く口に入れた。

向かいでロイドが小さな瓶を開けた。
漂ってきた匂いで、酒だと判った。

一息ついて、クリスが顔を上げる。

「ありがとう」

「礼なら後で村人達に言うんだな。」

お前の介抱に部屋を貸してくれるっつう申し出もあったんだが、

本当に逆賊を匿ったら後々面倒があるだろう、
だから断った」

無言で頷き、クリスは改めてロイドをまじまじと見つめた。
小首を傾げ、

「ろいどは、おれの知り合いか？」

「はあ？」

「見おぼえがないけれど」

「じゃあ違えよ、

俺もお前みたいなすつとぼけた知り合いはいねえ」

呆れた顔でクリスを眺め、ロイドは瓶の中身を飲み干した。

納得し、クリスが頷く。

「自分を助けたから反乱軍の仲間だとしても？」

ロイドの問いに、クリスがこつくりと頷く。

「そう」

「おめでたい頭だ。

…まあいい、

お前、荷物は槍だけか？」

え、とクリスは辺りを見回した。

愛用の銀槍はロイドの背後に置いてあった。

ロイドが無造作にそれを掴み、クリスに渡す。

「大した代物だな。

あれだけ暴れてこれっぽちの刃こぼれか」

受け取って頷き、クリスが口を開いた。

「これになるまで、たくさんダメにしたからイリアスが……」

…まだ旗揚げして僅かの頃のことだ。

剣も槍も、並の品ではすぐにクリスの力量では潰れてしまい、

それを見かねたイリアスが、まだ手配書に顔の知られていなかった頃に自らマラバールに足を運んで選んできた。

そこそこ値の張る品だったらしいが、

この先クリスが使え潰す武器の数を考えれば安いものだといリアスは笑っていた …

「 …落ち着いたなら、
すぐに行くぞ」

ぶっきらぼうなロイドの声に、クリスがキョトンと首を傾げた。

「？、行く…？」

すると、どこか凄みのある表情でロイドが言った。

「仲間の仇を討つ機会をくれてやる。

羽目を外して暴れてる馬鹿共に少し痛い目をみてもらわなきゃならん。

お前、手伝え」

「？……」

おれは仲間をさがしに行かないと……」

控えめに渋るクリスに対し、ロイドがピシヤリといった調子で返す。

「アテは」

クリスは口をつぐむ。

ロイドは2つめの竹筒を開けるとまたクリスに手渡した。

「兵士達の気を引くのに、色々小細工して回った。

もう少しかき回すつもりだから、そのついでに捜せ」

「……………」

クリスは絶句する。

不快からではなく、混乱したからだだった。

「……ろいどは、

誰なんだ？……」

「名乗ったろうが。

そついうお前はまだ名前も言ってねえぞ？」

クリスが瞬く。

ここで不平を言わず素直に頷いてしまつのがクリスだろう。

「クリスタル」

「クリスタル、だな。
んじゃ、行くぞ、クー坊」

荷物をまとめたロイドが、いきなりクリスを脇に抱えた。

「!?、!?、!?」

まったく抵抗が出来ない。

クリスの体調が万全でないことを差し引いても、
この男には抗える気がしなかった。

「…ああ、」

「一応お前の将来の為に言うておくが」

「?」

「本当は、知らない大人について行くのは駄目なんだぞ、
俺はただの例外だ。」

「??？」

困惑するクリスの返事を待たず、
ロイドが跳躍した。

クリスはポカンと目を丸くする。

クリスを抱えたままロイドはその一飛で、森を1つ越えてしまった。

【DOLL】

…黄昏時の夕闇に乗り、

翼を持つその2組は総督府の麓、海岸添いの岩場に降り立った。

夕陽の髪のライズが辺りを見回す。

「さて」

行儀良く正面から邸内に入るつもりはない。

もしエツダにいき合ったら一戦交えるのを拒みはしないが、

目的は1人の少女、

騒ぎは避けるに越した事はない。

「中の様子が判れば簡単なんだけど …、

サンデイだけじゃ入れなかったからなあ、
結界が張ってあって」

ぼやくライズの後ろで光が揺らぎ、

キリエとグレンが元の人間の姿に戻った。

キリエがその牡丹色の唇を開く。

「あなたの場合、分裂させた分ゴーレムの力が弱まっているのもあるわ。」

本体は彼女に付きつきりだし」

キリエの言う“彼女”とはエレナのことだ。

そのエレナは、キリエとグレンの変身を目の当たりにして、複雑な表情をしていた。

「……もしかしてお前ら、人間じゃねえの？」

ポツリ、エレナが呟くように言った。

その問いに、キリエが眉を跳ね上げる。

「失敬な！」

これがゴーレム本来の姿なのよ、

本来ならばゴーレムと主は一心同体、
こうして身も心も、生命も1つにするべきなの。

それを愚かな先人が、自分達の保身ばかりを考えたから、

ゴーレムと人間を切り離して使役する術を生み出したものだから、
それが主流になってしまったのだけわ。

そんな浅慮を犯したものだから、残留ゴーレムなんてものが生まれ
たんじゃないの！」

「キリエ、キリエ」

宥めるようなライズの声に、キリエはハツとして口元に手を当てた。

罰の悪そうな顔で、

「ごめんなさい、

つい見苦しいところを」

と恥じ入ったように目を伏せる。

エレナはたじたじ、といった様子で目を泳がせた。

「ああ、あゝ…、

別に……。」

…それより、カトリは本当に上の屋敷にいんのかな」

「自信は7割、てとこ。」

まあ多分いるよ」

応えたのはライズである。それを横目にエレナは肩を落とした。

「んな適当な……。」

「エツダが攫わせたことは間違いないから。

そんでエツダがここにいるのは確かだと思う。」

仕留め損なっただけで、大分痛手は加えてやったから、まだ快復はしていないはずだ。

なら体を休ませるのに1番近い巢穴に戻るはず……」

説明しながらも、波打つ岩場を探りながら歩いていくライズに3人が続く。

「この先に地下水路に繋がる入口が……」

小さな呟きに、エレナが声を上げた。

「なんでそんな事知ってるんだ!？」

「ん? ……まあ色々」

答えになっていない、と言い募るエレナに、後ろから声が掛かる。

「お静かに。」

敵方にこちらの動きを知られては厄介だわ」

「ぐ……」

キリエは高飛車な言い方が板に付いているらしい。

その後ろで、グレンはむっつりと口を閉ざしている。

そういえばこの男は、ライズとはよく言い合いをしているが、エレナにはあまり話し掛けてこない。

別に仲良くする義理も必要も感じないが、エレナは少し気まづくなってライズの隣に並んだ。

小声で横の青年に訊く。

「あのグレンで奴、
もしかして怒ってる？」

「いや、ここ最近は何機嫌が悪いんだ。

別に君に何か思うところがあるとかじゃない、

気にしないで」

「ふうん……」

「あ、アレかな？」

岩場の切れ目に、大きな空洞があるのを発見し、
ライズが軽く声をあげる。

辺りは巨岩の群れに囲まれて、海側の方からは窺えないだろう。

「有事のときの脱出用、
てところかな？」

うん、歩ける足場はある。
通れそうだ」

ライズが笑って振り返る。

さざ波が反響して、声が掻き消えそう。

「暗いわね、灯りを…」

キリエが懐から蠟燭を取り出し、火を灯した。

溶けた蠟が手に垂れない様、傾けながらライズに手渡す。

潮の匂いに満ちた洞穴を、しばらく歩いてエレナが訊いた。

「ライズ、でいいか？」

「いいよ、何？」

「お前も変身すんの？」

「するよ。」

後ろの2人とは少し趣が違うけど。

…ああ・ほら、セナの砦で初めて会ったとき。

あの時、俺はゴーレム化して潜入してたんだ」

「ああ…」

エレナが頷く。

あの夜、ライズは忽然と現れた。

あれはライズが何も無い所から出現したように見えたが、
実際は闇に紛れて黒蝶の姿でライズがエツダに接近していたのだ。

そして至近距離にまで近づいたところでゴーレム化を解いた。

「変身っていうのは少し違うかな。」

キリエやグレンにしたって、ゴーレム化だけが手段じゃない。

他のゴーレム使い……、

俺らは“マリオン”て呼ぶんだけど、
そういう連中みたいに身体から引き離して使役する場合もあるし。

今みたいにね」

ライズがエレナの首元の蝶を示した。

「まあ身体から引き離せても……」

そこで言葉を切り、ライズが立ち止まった。

エレナが怪訝な表情をし、キリエとグレンが前に歩み出る。

「見つかったか」

「いや、人間の気配にしては……」

「じゃあゴーレム？」

問答の途中、ぐずぐずとした嫌な音がした。

「なんだ……？」

エレナが知らず眉を寄せ、ライズの袖を掴む。

彼女は反乱軍所属の密偵として、単身で敵地に潜入したりもしていた。

決して臆病な少女ではなく、
人一倍以上に度胸と思慮を兼ね備えた少女のはずだった。

なのに今、得体の知れない気配と怪異の前に、足の震えを覚えていた。

暗闇の中に、灯りが点ったように見えた。

しかし、違った。

「なんだよ、アレ…!?!」

エレナの顔が青ざめる。

洞穴の向こうから、水銀と寒天状の人型の群れが、
原型を崩しながら取り戻しながら、よろめきながら近づいて来る。

「うつわあ〜…!」

どこか呑気な声をあげながら、
ライズがエレナを退がらせる。

グレンが眉をひそめて先頭に躍り出た。

「ドール…!?!」

「実物は違うわあ〜…」

「何ぼやいているの、
もっと退がって！」

キリエの叱咤に肩をすくめ、
ライズはエレナの腕を掴んで飛びすさった。

グレンが再びゴーレム化し、獅子鷲の姿になる。

キリエは先刻とは違った変異を見せた。

天馬は確かに現れたが、キリエの姿はその背中であつた。

なにやら大きな白金の盾を片手に、
威厳に満ち満ちた声で高らかに叫ぶ。

「かかつてらっしゃい、
哀れなルビーの副産物達！！」

キリエ「ジェラルディンがお相手仕る！！」

「神妙に浄化しやがれ！！」

2人の猛々しいまでの背中を見ながら、
エレナが横のライズに呟いた。

「さっきあいつオレに静かにしろっつたよな…？」

「ああいう芝居じみたのが好きなんだよねえ……、あの2人」

ライズはむしる楽しげだ。

その視線の先で、血飛沫に代わって水銀の飛沫が飛び散る。

グレンの強靱な嘴と爪が人の形をした“それ”を砕いていく。

キリエの盾がドール達の体を叩き割っていった。

数では勝るが露鈍なドール達は、みるみる碎けて地面に溶けていく。

その様を眺めながら、味方が優勢であるはずなのに、ライズが眉をひそめた。

「キリがないな……」

「え？」

低い呟きに、エレナが隣の青年の顔を見る。

ライズの呟きを肯定する様に、

床に撒かれた水銀から再び次々とドール達が立ち上がった。

「はあ！？」

「なぜ！？」

私達力ならドールを浄化出来るって……」

グレンとキリエが狼狽し、ライズが声を張り上げた。

「一旦翔べ二人共！！」

多分ここでは無理なんだ、

結界がドールを引き留めている！」

「じゃあどーすんだよ！？」

グレンの問い掛けにライズは冷静だった。

「結界の支配者をなんとかしないと駄目だ、

それが …」

ライズの言葉が不自然に途切れた。

地面を覆った水銀溜まりが沸騰し、

立ち上がるドール達が唐突に動きを止めたからだ。

「なんだ？」

ドール達が痙攣する。

のっぺりとした顔面が、口を開いたように見えた。

叫ぶ。

叫ぶ。

瞬間、ドール達のすべてが崩れて溶け、弾けた。

砂より細かい粒子になって、光を弾いて虹色に輝く。

輝きながら宙を奔り、

真っ直ぐ頭上の岩盤を突き破り吹き上がった。

落ちてくる岩の破片から身を庇いながら、

ライズ達は呆然としてドール達だった光の激流の行方を見上げる。

「何なんだ…？ …」

【純白^{ゆい}き王】

…刻は黄昏より少しだけ遡る。

冷え冷えとした地下牢の前で、歌鳥は頑なにエツダを拒んでいた。

その気になれば力尽くで容易く歌鳥を連れ出せるだろうに、

エツダは律儀に説得を続けた。

抵抗されて、不要な怪我を負わせてしまいうリスクを避けたのかもしれない。

歌鳥は一步も動くつもりはなかった。

従わないこと、それが唯一歌鳥に出来た戦いだった。

しかし、それもエツダからセナ砦の陥落とイリアスの死を聞かされて潰える。

「うそ……」

歌鳥の膝が、糸を切られたように崩れ落ちた。

「…そんな…」

それきり声は出なかった。

信じない、とは言えなかった。

否定できる根拠を何ひとつ持っていない。

しかも歌鳥の頭は度重なる緊張と混乱で疲弊しきっていた。

信じないという逃避を選ぶことすら出来ない程に。

崩れ落ちたまま、表情さえ動かさずに、ただ茫然と、歌鳥は涙を零した。

イリアスの死。

ぱた、と涙が岩肌の床を叩く。

優しい人だったのに。

あんなに、皆に尊敬されて慕われて …、

クリスやケイヴィンの顔が浮かんだ。

彼らの悲しみはさぞ深いことだろう。

この時点では、歌鳥にクリス達の安否など知るよしもないが、そんなことに思い至るほど歌鳥は冷静ではいられなかった。

叫びも、嗚咽すらなく涙を零す歌鳥。

それを冷ややかに見下ろして、エツダは無言で歌鳥の体を抱え上げた。

茫然としたまま歌鳥は抵抗する素振りを見せない。

服越しに伝わる、エツダの冷たい皮膚の感触に対してごく僅かな嫌悪を抱いただけだった。

*

地下からの階段が終わり、絨毯の床の廊下に出る所で歌鳥は降ろされた。

茫然としたままの少女は、よろめきながらももう膝をついたりしなかった。

放心した心に、どうにでもなれという自暴自棄の念が働いたのかもしれない。

廊下に出てからの歌鳥は、素直にエツダの後ろについて歩いた。

抵抗するのが億劫になっていた。

ここに至ってようやく、

（ …… クリスくん、
大丈夫かな……、
… ケイクん……
ドルサツクさん……
…… ヴィヴィさんも…… ）

ぼんやりと、生死が定かになっていない彼らのことを想った。

（ …… 会いたいな…… ）

… エツダの足が、ある扉の前で止まった。
それにつられて歌鳥も足を止める。

「 ……？ …… 」

「 エツダです、兄様。
入ります 」

軽いノックの後、エツダが扉の向こうに声を掛けた。

「 入りなさい 」

… 部屋の中から応えた声に、歌鳥は目を上げた。

柔らかく、優しげで澄명한テノール。

… イリアスの声に似ている、とぼんやり思った。

エツダが扉に手を掛けた。

その肩越し、開いた扉の向こうにその声の主が佇んでいる。

…威圧感を与えぬ長身に薄浅葱の長衣を纏う男。

秀麗な目鼻立ちの顔に掛かる銀髪は微かに碧がかり、柔らかそうに揺れる。

瑠璃の瞳が優しく笑んだ。

「おかえり、エツダ。」

ヴェルンド卿からここ数日消息が絶えていたと聞いて心配しましたよ」

「申し訳ありません兄様」

頭を下げるエツダに向かい、彼は一層深く笑む。

「構いません、

何事もなかったなら何よりです。」

…で？」

兄と呼ぶ相手に促され、

エツダは体をずらして歌鳥の姿を見せた。

「こちらが」

歌鳥はその瞳に何の感情も浮かべないまま、男の姿を見る。

彼がニツコリと笑って、口を開いたのが見えた。

「名前を訊いておきましょうか」

虚ろな頭に響いた声は暖かささえ帯びていた。

力なく、歌鳥は唇を動かした。

「…歌鳥です……」

彼は少し首を傾けて、

「変わった名前ですね、

何か意味があるんでしょうか？」

と言った。

歌鳥は思わず微笑いそうになった。

あまりにも重なるイリアスの面影。

まったく同じ会話を、あの人と交わした。

歌鳥は名前の意味を応え ……、

「歌う、鳥」

そして、あの人は …

「綺麗な名ですね」

彼は微笑った。

歌鳥もクスリ、と笑った。

彼に対してではない。

嬉しかったわけでも、勿論可笑しかったわけでもない。

笑うと同時に涙が零れた。

ただただ、切なかった。

そんな歌鳥の様子を不思議そうに眺め、

エツダがその背中に手を回し、部屋の中にやんわり押し出す。

おとなしく足を踏み出して歌鳥は男と向き合った。

彼が笑いかけてきた。

なんだかあどけない風情の笑顔だと思った。

「では、歌鳥」

疲れ果てた濃紺の瞳が見上げる。

男の指が歌鳥の顎にそっと触れ、 …

「 …… おかえり」

身体の内を、戦慄が奔り抜ける。

歌鳥は目を裂かんばかりに見開いた。

…… 違う！！！！

声も出ない程の恐怖。

一瞬の内に、なぜ、と自問する。

この男に歌鳥を怯えさせる要素など何ひとつ無い。

柔らかな物腰、

優しい声、

邪気の無い笑み。

なのに、何故？

「いや……っ……」

直感的な、拒絶。

「……っ……いや……」

彼は笑みを浮かべたまま、少し首を傾けて歌鳥の顔を覗き込んだ。

しかと目が合わさり、

何かが歌鳥の中に流れ込んできた。

そして、あふれる。

耐え兼ねて、歌鳥は絶叫をあげた。

「いやあああああつー!」

ド…………ン…ッ!!

…突然、歌鳥の視界が光で霞んだ。

「!?!」

足元を失い、激しい流れに身体を奪われる。

(なにっ…!)

浮かぶ。

飲み込まれる。

(なに、これっ…………!?!)

光の激流が、少女を覆い隠す。

床を突き抜け、衝撃と共に吹き上がってきたそれは、そのまま天井をも突き破って、

少女を攫って夜の空に尾を引きながら流星のように飛び去った。

…南へ。

「おや……」

男はさしたる動揺を見せずそれを見送った。

エツダが駆け寄る。

大きな穴が空いた天井からは、その軌跡の名残すら見えない。

夜の薄雲に濁った星ばかりが在る。

「ドール達……!!」

「逃げられてしまいましたね、」

「すぐに追います!」

「いや・いいですよ、」

エツダ

「しかし……」

兄はニツコリと笑う。

「ドール達が彼女を慕うのは当然の事です。

本物だと判っただけで今回はよしとしましょう、

その気になれば生まれ育った異界に戻る力もあるのに、それをした様子もないですし。

どうやら彼女は頼るべき者をこちらに見つけているようです。

ならばその近くで成長してもらいましょうか」

まだ彼女は未熟だ。

口の中で呟き、彼は踵を返そうとした。

…そこへ。

「レイン＝ナイトメア!!」

名を呼ばれ、彼は振り向いた。

*

天井を突き破り、突き抜けていったドールの …… 光の激流。

ライズ達がそれを追い掛けたのは、ただ行く先を見届けようとしただけだった。

その先で見た、
思わぬ仇敵。

「レイン＝ナイトメア!!」

叫んだのはグレンだった。

「アーリーの仇!!!!!!」

続いてキリエが飛び込んでくる。

「逃がしはしない!!」

「覚悟なさい!!」

いきり立つ2人。

ライズがグレンの背中からエレナを抱えて床に降り立った。

部屋を見回し、エツダを見つけてエレナが叫ぶ。

「てめえ!! 白髪野郎!!」

「よくも仲間を!!」

「カトリをどこにやった!!」

威勢の良い罵声に眉ひとつ動かさず、エツダは兄の前に躍り出た。

エレナの問いに答えたのは兄・レインの方だった。

「彼女なら自力で帰りましたよ、

方角から見て、セナ地方ですね」

「はあ!?!」

ライズがエレナの肩を引いて退がらせる。

どこか冷ややかな色を浮かべた蒼穹の瞳をレインに向けた。

「ドールか…、
支配下に置いたわけだ」

レインが軽く肩を竦める。

「どうでしょう？」

切羽詰まった末に無意識に呼び寄せただけだと思いますよ、

操るまでは出来ていないでしょうね」

まるで他愛ない会話の様な声色で、レインは笑う。

エツダがライズ達の顔を順に認め、

「夜胡蝶」……、

“獅子鷲”、“盾乙女”…よくもまあ……」

と呟いた。

瞬間、ライズが跳躍してエツダを相手取る。

激烈な蹴り込みにエツダがよろめき、

飛び退って扉の外に転がり出た。

「なんだ、

もうそんな元気なの？」

「御陰様で。」

先日は大変なご馳走を頂きました。

しばらく胸焼けに悩まされ、
体内がまだ鱗粉まみれな気がします」

エツダの皮肉に、ライズは嘲笑と呼ぶにはあまりにも無邪気な笑み
で返した。

「謙遜するなつて。

あんだけ召し上がってくれて、
消化するの早かったじゃない。

もっと胃弱でいてくれれば追跡も易しかったのに」

ライズが跳ぶ。

突き出された拳を拳で跳ね返し、エツダが小さく舌打った。

まだ動きが鈍い。

体調は戻っていない。

広い廊下に飛び出して格闘する2人。

轟音を聞き付けて邸内が騒がしくなる。

様子を見に、1人の侍女が駆け付けてきた。

エツダが横目でそれを認める。

ライズがその意図に気付き、叫んだ。

「逃げる!!」

「え？」

見知らぬ男の切迫した剣幕に、声を掛けられた方は立ちすくむ。

不幸にも彼女はライズ側でなくエツダの後方から駆け付けてきた。

エツダは一飛で彼女の傍に降り立ち、その身体を一瞬で軽々と抱え上げた。

悲鳴をあげようとした口がそのまま凍り付く。

エツダの唇が彼女の首に押しあてられていた。

彼女の身体が手前にあった為に、

ライズはその行為を止めるのを躊躇ってしまった。

エツダが唇を離し、彼女の身体を押し退ける。

ドサリと音を立てて倒れた哀れな侍女の身体が、深紅の砂に変じて崩れ去った。

蒼穹の瞳に憐憫の色を浮かべる暇もなく、ライズは床を蹴って飛び掛かってきたエツダを迎え撃つ。

明らかに、エツダの動きに精彩さが戻っている。

「人妖が……!!」

毒づき、ライズは躍った。

*

レインは軽く腕を組んだ姿勢のまま、自身に向けられている敵意と憎悪の視線を微笑みながら受け止めていた。

グリフォンのグレンが床を蹴りつけ、レインに襲い掛かる。

丸腰の優男が、一瞬で強靱な爪に切り裂かれるかに見えたが、

見えぬ羽根でも生えているかのようにフワリと飛んでグレンの一撃を避けた。

派手な音を立てて壁や調度品が碎け散る。

「おやおや……」

レインは平然としたまま、笑みを消すことなく床に足を下ろした。

そこを狙って天馬に乗ったキリエが盾を振り下ろす。

頭上を捉えた。

仕留めた、と思ったキリエの平衡が崩れる。

キリエを振り返ることなく、レインは軽く腕を振って彼女を天馬ごと弾き飛ばしたのだった。

…が、驚愕すべきことに彼の腕はキリエにも天馬にも触れてはいない。

ただ軽く振っただけだ。

目に見えない衝撃に吹っ飛ばされ、キリエと天馬が壁を突き破って、ライズとエツダが居る廊下に投げ出された。

「キリエ!!」

呼び掛け、グレンの瞳に怒りが増してたぎる。

ふわりと笑ったレインが、何を思ったかパン、パンと手を打った。

「エツダ!おいで。

時間です。

帰りますよ」

「!?!」

呼び掛けに応じ、エツダがレインの許へ駆ける。

「待ちやがれ!!」

誰が逃がすか!!」

グレンが羽根をはばたかせようとした時、背後から悲鳴じみた声が出た。

エレナだ。

「おい！！！！下が！！！」

切迫した声に眉根を寄せて、少女にならない床に空いた大穴から下を覗き込んで、グレンは息を飲む。

…階下が銀色の水に沈んでいる。

「ドール……！！！」

まだこんな……！！！！！」

レインが頷くように微笑い、軽く手を広げた。

「さっきの彼らとは違いますよ、よく躡られていますからね。

さあ、早く止めてあげないと、

邸内の人々や下の街で暮らす市民達が飲み込まれてしまいます。

急がないとね」

にこやかに告げるレインにグレンが激昂して飛び掛かろうとした。

しかしそれを駆け込んで来たライズが留める。

「よせグレン！！！」

悔しいが従うしかない、

みすみすルビーの材料を集めさせる訳にはいかないだろ！！！！！！！」

「お前らに任す！」

俺はこいつの頭を噛みちぎってやらなきゃ気が済まねえんだよ！！
「！！」

「馬鹿野郎！！！！」

レインとエツダ2人を1人で相手にする気か！？」

ライズの指摘に返す言葉を見つけられず、
グレンが床に爪を食い込ませた。

それを眺めてレインが満足げに頷き、
場違いに優雅な礼をして言葉を滑らした。

「結界の鍵はこちらの総督、ヴェルンド卿がお持ちです、
受け取りに行かれるが宜しいでしょう。

それでは皆様、
御機嫌よう ……」

にこやかな顔が上げられたと同時に、
レインとエツダは衣を翻すようにして、ヒラリと闇に隠れる様に消
えた ……」

【漆黒くろき
益荒男ますあらい】

…時は数日を遡る。

セナ砦から南西に位置するある平原。

反乱軍の掃討を命じられてこの地に進軍してきた総督配下の1隊が陣営をとっていた。

この時、彼らの隊長は不機嫌の絶頂であった。

先の戦いで、彼らの隊は反乱軍の頭目を追い詰めた。

追い詰めたのみならず、その頭目に深手を追わせたのはこの隊の兵だったのだ。

その兵士は、直後に頭目に付き従っていた少年戦士の槍によって倒されてもはやこの世にいないが、

手柄はこの隊に帰されて然るべきである。

しかし手負いの頭目はその少年戦士によって連れ出され、

彼らは結果、反乱軍の首領を取り逃がした、という不名誉を背負わされた。

その後、逃げた頭目は他隊によって発見され、しかも既に息絶えていたという。

当然、彼らは面白くない。

意気揚々として、何の苦勞もなしに手柄を立てた他隊の連中の勝ち

誇ったような顔が思い出しても腹立たしい。

「あの小僧さえいなければ、今ごろ総督府にて褒賞を賜っていたのは我が身だった筈なのに、幾重にも忌まわしい。

こうなつては、せめてあの小僧の首を取らねば腹の虫がおさまらぬ。

しかしあの小僧、あの豪勇はまことに恐ろしい。

果たしてどうすれば損害を少なく奴を討ち取れるものか……」

思案する隊長の元に、敗残兵狩りに別行動をとっていた部下から報告が入った。

凶報であった。

「一山向この農村にて、1部隊が全滅致しましてございます!!」

農民の中に大層腕の立つ男がおりまして、その男1人の為に、50騎が1人残らず討ち取られました!」

報告を受けた隊長が目をむいた。

「なに! 奴か!」

しかし報告に来た兵士は首を振った。

「いえ、先の戦いで我々の陣を突破した、あの少年ではありませんせぬ、

その男は壮年で、ずば抜けた長身、

明らかに別人でございまして……」

隊長が声を荒げて叫ぶ。

「ばかな、何かの間違いではないのか？

そんなばけものが2人もいてたまるか！！」

*

この時点で“ばけもの”と呼ばれた2人は、
まだ行動を共にしていなかった。

2人が出会ったのは、

この日の翌日の事である。

壮年の男・ロイドに半ば連れ去られるようにして、
少年戦士・クリスはある村にたどり着いた。

「進んでるか？」

と、よく通る太いバリトンの声に、

村の中央の広場で何やら作業をしていた農夫達が顔を上げた。

「ああ、はい。

ええと、それで……」

「後で聞く」

素っ気なく言って、ロイドはクリスを小脇に抱えたまま村道を通り切って荒ら家に足を運んだ。

「お前、この辺の地理は詳しいな？」

「？」

「返事は」

「…たぶん」

ようやく地面に下ろされて、クリスはロイドを見上げる。

「大体の地形がわかってりゃいい。」

お前、ひとつ走りして追討軍の1部隊をおちよくって来い」

「……………？」

クリスが腑に落ちぬ表情で首を傾げた。

「おちよく……………？」

「ちょっと目の前でうるつけば構わん、

連中の際にはらまいた流言に信憑性を加えてくれりゃいいんだ」

「????？」

「手短かに説明してやる。」

1回で理解しろ」

…ロイドが言うには、こうである。

*

首領イリアスの首があがって以来、
追討軍の動きは収まるどころか、却ってエスカレートした。

セナ砦の残党はごく僅か、
つまり手柄をあげる機会もごく僅か。

一握りの功績に群がる兵士らの中には、
しのぎを削りそれを得るよりも、
功を捏造する事に目が向いてしまった者達もいる。

こうした状況の中、ロイドはセナの各地で村を襲撃する討伐隊を叩いて追い返した。

「それで幾つかの村で、兵を捕えて吊し上げた」

そこで、そこそこに痛め付けた兵士に嘘の情報を吹き込んだ。

反乱軍の残党が、ある村に示し合わせて集結し、再起の計画を立てている、と。

「奴らは気絶した振りをして、

俺と農夫の親父たちの嘘の会話に聞き耳を立てていたわけだ」

隙を見て、兵士は村を脱出して自軍に逃げ帰った。

勿論、わざとロイド達が逃がしたのだ。

「その嘘の集合場所の1つが、この村だ。

つまりこの近辺にお前が姿を見せれば、連中は兵士が持ち帰った情報を信じる。

今、この村の連中に迎撃の準備をさせている所だ。

色々と手段は揃えたが、何しろ戦いには慣れてない奴ばかりだからな、

だから敵方にも小細工をする必要がある。

わかったか？」

曖昧に、クリスが頷いた。

すると、ロイドがいきなりクリスの頭を乱暴に掴む。

「返事は“はい”だ！
躡けられなかったか」

クリスは気圧され、

「…あい……………」

と、ようやく口にした。

ハッキリ言って、クリスにとってこのロイドという男は全くの未知の生き物である。

粗雑で尊大この上なくせに、どういう訳か悪人には見えない。

頭を掻きながら小屋を出て、クリスは農夫の1人に声を掛けられた。

以前、セナ砦を反乱軍が攻め落として拠点とする前に滞在したことのある農村の住人だったとかで、

クリスは憶えていなかったが、相手はクリスを憶えていた。

「セナ砦にいた兵士が全滅したってのは、本当なのかい」

クリスは首を振った。

「おれは生きてる。」

他にも生き残って逃げた仲間も少しいる」

「そうか……」

男の顔は冴えない。

首を傾げ、クリスは思い当たった。

「家族が、いたのか？」

「……………」

淋しそうに微笑して、男は首を振った。

「おれだけじゃねえよ、みんな、そうだ。」

村の若い衆はみんな神父の軍に参加してた。

おれの息子だけじゃねえ……………」

肩を落とし歩いていく農夫の背中をじつと見つめながら、クリスはなんだかモヤモヤとしたものが胸に満ちてくる感覚を持て余した。

クリスは何にともなく、頷いた。

ロイドが何者かは分からないが、やろうとしている事は正しい。

それに討伐隊を放置すれば、今現在逃げ仰せている筈の仲間達に害が及ぶかもしれない。

彼らの背中を守る役目は、まだ終わっていない。

納得して、クリスは年齢の割に華奢な肩に槍を担ぎ上げ、颯爽と村を背に走り出した。

*

「奴らはおそらくは夜襲を仕掛けてくる」

日の傾いた農村の片隅、

ロイドが村人達を集めていた。

言い付け通りに討伐隊の前に姿を見せ、
そのついでに襲い掛かってきた数騎を倒してきたクリスも合流して
いた。

「功に焦っているからな、
時間的にも、態勢を整えてから来るとして今夜あたりだ。

他隊の連中と情報を共有して合流することはまずないだろう、
こちらは少数だと思われる。

まあ、実際その通りなんだが。

しかし、こちらには1人で1部隊を潰せるバケモノが2人揃ってる。
被害を抑える為にも、奴らはこちらの隙をつきたい筈だ」

クリスは首を傾げてロイドを見上げた。

視線に気付いたロイドが、軽く眉を上げて雰囲気だけで笑う。

クリスはロイドの今までの動向を知らないから、
彼の言った“バケモノ”の1人が自分を指している事は判っても、
もう1人がロイド自身を指しているとは判らなかつたのだ。

「夕闇が落ちたら、建物の中に灯りを置いたまま配置につけ。

奴らが狙うであろう先は無人しておく。

隙をついたと思っっている連中の隙をつくんだ。

来るのはせいぜい200人程度、

こちらがへまさえしなけりや問題なく返り討ちに出来る。

存分に、家族の仇を討て」

ロイドの最後の一言に、男達がいきり立って頷いた。

軍に参加せず、家と畑を守る為に残っていた男達だ。

クリスは少し複雑な気持ちになった。

いきなり頭に手を置かれて、クリスは驚いて上を見上げた。

予想に違わぬ顔がある。

「自分達の身は自分達で守るって事を覚えてもらわんとな。

もう頼るべき者はいない、

…そうなんだろう?」

…そうだ、

クリスもそう思っていた。

自分の身は自分で守る。

なのに、今になって胸に疼く何かが、クリスを俯かせた。

(……………)

漆黒のコートを翻して立ち去っていくロイドを見送り、
クリスはふと、近くにいた農夫にロイドはどのような人物なのかと訊
いてみた。

「さあ…、よく判らないんだが、

…まあ、マラバール兵に襲われた村を助けてくれたわけだし、
それに、なんだかああも堂々として偉そうだと自然と言うことを聞
いちゃうもんなんだなあ……………」

農夫の言葉は、クリスの感じたのとそのまま同じだったので、クリ
スはただ頷いた。

イリアス以外の人間の指図を受けて戦うのは初めてだったが、
目的に納得していれば気にならない。

やるべき事を明確に示してくれて有難いくらいだ。

「クー坊!!」

さっさと来い」

「!、……………ハイ」

しかし、他人に大してこんな感情を持ったのも初めてだと思う。

クリスはロイドに“ビビって”いた。

*

薄い雲がただでさえ淡い月を覆う夜だった。

闇に乗じて林を抜ける騎乗の一軍。

大きく起伏した丘の上から、ポツポツとした灯りを灯しながら寝静まりつつある村を見下ろし、

先頭の兵士が唇に薄く笑みを浮かべた。

「あそこか」

「はい、

あの少年戦士が去った方角とも矛盾しませんし」

「うむ」

頷き、彼は真つ直ぐに手を振り上げた。

「行くぞ、

逆賊を匿う村の下民共も一緒に斬り捨てよう、

一匹たりとも逃がすでないぞ！！

「かかれ！！」

号令が響き、呼応した兵達が一斉に村を目指して丘を駆け降りる。

駆け降り、

そして、

突然に大地が崩落した。

「何っ!?!」

騎兵達は、先頭の後輩達が隠されていた濠に転がり落ちるのを見て、乗騎を留めようとしたが、

後ろに続いた騎兵達の勢いに押されて、不本意ながら先頭の兵士に倣う羽目になった。

元々あつた断層に、縄を張って布と土を被せた即興の罨だった。

夜闇の中ではなだらかな稜線に見せられる。

半数ほどが罨に落ちた所でよく通る太い声が響いた。

「撃ち込め!!」

瞬間、人頭大の石が無数に尾を引きながら兵士達の頭上に降り注いだ。

身動きの取れぬ穴の中の兵達を飛び越えて、

石は濠の縁で足踏みしていた後方の兵士達に襲い掛かる。

石に当たり、体勢を崩した兵士達が乗騎から転がり落ちる。

直撃を免れた者は石に括り付けられた網状の縄にまとわりつかれ、苛立たしくそれを掴み、眉をひそめた。

石から生えた尾は、何かに湿った縄だった。

その湿り気の匂いに、兵の1人が悲鳴をあげた。

…油の臭いだ。

その意味する所は、彼が味方に報せるまでもなく全員が知ることとなった。

朱色の蛇が這うようにして騎兵達に迫りくる。

あっという間に、丘は火の海になった。

斜面の陰で、即興の投石器を並べて農夫達が様子を窺う。

「出てきた兵だけ相手にしろ、
ゴーレムだけは俺が引き受けてやる」

ロイドが悠然と言い放つ。

どうせ火攻めにするなら、もっと派手に油を撒き散らしても良かったが、
燃え広げさせて森や山に火が入っても困る。

炎と煙に巻かれながら数騎の兵士が転がり出てきた。

暗闇の中に災厄の元凶を見つけ、怒りの声を上げて騎首を巡らした。

そこにロイドが躍り出る。

長く強靱な脚で、虎の姿をしたゴーレムの頭を蹴り飛ばした。

どういう訳か、彼が攻撃を加えたゴーレムは、次々と霧散していく。乗騎を一瞬で失った兵士は地面に転がり落ち、茫然と顔を上げる。

そこに、棒切れや農具を構えた農夫達が殺到する。

穴から這い出した兵士達も同じ運命を辿った。

後方の兵士達が戦慄する。

見る見る内に、数の有利も覆ってしまっていた。

仲間の悲鳴を置き去りに、手綱を引いて逃げ出そうと駆け出した数騎があった。

「逃がすな!!」

ロイドの声に応えたように、背を向けて走り出していた彼らの前に小柄な人影が躍り出て、先頭の1騎を撃ち落とした。

「お前は!!」

驚愕が兵士達の口から突いて出た。

クリスが槍を構える。

鮮やかに、夜の森に深紅の飛沫が上がった。

*

クリスが仕留めたゴーレムに歩み寄り、ロイドはおもむろに足を振り上げ踵を落とした。

それでゴーレムは消える。

クリスは不思議そうにそれを眺めた。

ゴーレムの屍体は放っておくと毒を吐く。

だから、いつも戦の後は屍体を集めて燃やし、灰にする。

そういうものだと思っていた。

「燃やさなくても、消えるんだな…」

「なに感心してんだ、普通は消えないぞ。」

当たり前だと思つなよ」

ロイドの呆れた様な声色に気付いた風もなく、クリスは頷いた。

「…ロイドは強いんだな」

「そつだな」

短い肯定に、クリスは少し首を傾げた。

「村人を戦わせなくても、おれとロイドで勝てた気もした」

「勝てただろうな。」

だが駄目だ、

他人に頼る癖をつけさせたら、結局後々本人たちが困る」

「そうなのか」

「そうだ」

頷き、クリスがひとつ息を吐いた。

村人達が駆け寄ってきて、口々にロイドとクリスに礼を言う。

ぞんざいにそれに応えて、ロイドがクリスに向いた。

「明日は少し東の村だ」

「？」

「同じ戦略をあと2つだ。
キリキリ働け」

「え」

クリスが目を丸くした。

槍を持った手がカクンと落ちる。

結局ロイドが何者なのかも判らないまま、
クリスは、彼に3日連続でこき使われる羽目になったのである
…

【虹姫の帰還】

(……てくる……)

…呼吸を忘れるほどの激流の中で、
歌鳥は弱々しい女の声を聴いた。

(……帰ってくるわ……)

…お母さん？

(……あの人は帰ってくる、
ここで待っていていれば帰ってくるの……)

歌鳥を飲み込んだ光の流れは激しさを増し、ある時点で身体にかかる圧力を失ったように感じた。

(……どこにも行かないでね歌鳥……)

お母さんと一緒にお父さんを待っていてくれるでしょ？……)

…ああ、そつだ。

母はいつもそう言って、
そうしていつも最後に泣いていた。

(どこにも行かないでね……歌鳥……)

「お母さん……?」

(…行かないで…)

突然、歌鳥は押しつぶされるような抵抗を感じた。

手足に絡み付く、粘り着くような感覚。

微睡みの中を揺り起こされる。

「…いやっ!」

離して、お母さん!!

私はまだどこにも行きたくない!!!!!!」

振りほどくようにして躍らせた歌鳥の手が、
不意に何かを掴む。

必死に縋りつき、歌鳥は自身を覆っていた光の激流が弾けて散った
のを感じた。

…

「…カトリ?」

歌鳥は目を見開いた。

耳に触れた、
抑揚に欠けた柔らかな声。

…今……、

茫然と顔を上げ、
歌鳥は目の前に赤紫の瞳を見た。

薄曇りのこの夜、

先の2つの村に比べて迎撃の条件が揃わなかった上、
攻めてくる兵士の数に対し村人の数が心許なかったので、

ロイドはやむなく積極的に参戦する事を自身とクリスに許した。

共に戦場に立つてみると、ロイドの豪勇はクリスすら圧倒した。

ロイドは完全に丸腰で騎乗する兵士たちと渡り合っている。

いや、正確には素手ではない。

彼の肌は頭以外は漆黒に纏われている。

黒い手袋の拳が兜を被った兵士の頭を殴り飛ばした。
相手は軽く5メートルは飛んだろう。

しばらく観察して、クリスはキョトンと目を瞠った。

砕かれて跳ねた拳大の石が、ロイドのコートの裾に弾かれて飛んだ。

(…あれ何で出来てるんだろう…)

首を傾げ、クリスは目の前の敵を造作もなく薙ぎ払った。

…ところで、異変が起こったのは、

その戦いがとりあえず収まりつつあった頃のことである。

「…おい、何だあれ？」

気付いた村人の1人が空の向こうを指差す。

それは虹の尾を引いて奔る流星に見えた。

光の粒を零しながら、真っ直ぐ南を目指し奔る流星。

墜ちる先は、

火に焼け焦げて流血に汚れた土の広がる小さな村。

クリスとロイドが見上げた時、

それは真っ直ぐ2人の位置を目指していた。

「？」

「お？」

緊張感がない反応は、

それに対し直感的に2人共が危険を感じなかったからだった。

しかしその光が自分たちを直撃するとまでは予想し得なかったのは、不覚といえは不覚である。

「!?!」

「うおっ!?!」

いきなり激流に飲み込まれて、足元が失われた感触がした。

クリスはよろめき、

次いで突然襲ってきた衝撃に体勢を崩した。

光の波が弾け飛んで足が地面を見つけても、立て直せずに尻餅をつく。

我に返ったところで、

クリスはいつの間にか自分の体にしがみ付いている小柄で細い体に気付き、目を丸くした。

胸に顔を埋めている、

亜麻色の長い髪。

…まさか

「…カトリ?」

眩く様な呼び掛けに、

顔を上げて見上げてきたのは紛れもなくあの少女だった。

「…クリスくん…!?!」

呆然と、2人が見合う。

全く予期しなかった再会に言葉も出ない。

動揺を顔に出すことさえ出来ず、
ただただ目を瞠っていた。

…夢だろうか。

沈黙の後、

先に口を開いたのはクリスだった。

「カトリ」

呼び掛けというより、
確認といった感じの声。

…ああ、

歌鳥は虚ろげでさえある色の声で、

「…はい、歌鳥です…」

と、答えた。

それを聞いて、
クリスが、

…笑った。

「カトリ、いた」

子供のような、
無垢であどけない笑み。

歌鳥は目を瞪る。

…ああ、

本当にクリスくんだ…、

（だって、

クリスくんが笑った顔、
初めて見たもの）

歌鳥の頭で作り上げた夢や幻が、クリスの笑顔を見せられる筈ない。

クリスが笑う。

歌鳥も笑った。

笑った途端に涙が零れた。

クリスが頬を拭ってくれて、

歌鳥は微笑みながら涙を流す瞳を伏せた。

*

「おい」

いきなり野太い声がして、

クリスと歌鳥はキョトンと顔を見合せる。

「邪魔して悪いが、
そこをのけ、お前ら」

2人は辺りを見回す

…までもなく、自分達の下敷きになっている大柄な男の姿を見付けた。

「あ」

「きゃああっ!?!」

「ご、ごめんなさいっつ!?!?!?!
だっ、だ、誰ですかっ!?!」

慌てて謝る歌鳥の姿を少し眺めて、
ロイドは軽く腕を振った。

「別にお前らみたいなお子供が乗っかってきたところで痛くも痒くもないがな」

「ほ、本当にすみません…、」

「ああ、なんでこんな事に…」

ふと、歌鳥は辺りを見回した。

「…は…ど…?…」

何がどうなって …、

考えようとしたとき、
歌鳥達の周囲に光の粒が渦を巻き始めた。

「あ……」

それはふわりと宙に舞い上がり、
空に虹の幕を作って、消えた。

「綺麗……」

オーロラ。

歌鳥はそれを見送り、
ほっと息を漏らした。

暖かな、気配のようなものに包まれた気がした

…

【3】虹姫の帰還（後書き）

というわけで、物語は新章に入ろうとしています。

セナ砦の潰滅が必然であったように、イリアスの死もまた必然でした。

思い入れのある人物ではありませんでしたが、ぶっちゃけ生き延びて頂いても動かしようがないのです……

彼がいるとクリスの行動がかなり制限されますし。

次回、セヴァルスタ編が完結します。

それでは、また。

おまけ登場人物設定

【イリアス＝マックール】

反乱軍リーダー

享年29歳 / 180cm / A型

黒髪 / 紺青の瞳

穏和 / 理想主義 / 行動力 / カリスマ

【エレナ＝ヴィヴィッド】

反乱軍メンバー

16歳 / 158cm / O型

黄銅の髪 / 緑の瞳 / 褐色の肌

利発 / 直情的 / ぶっきらぼう / 男勝り

イリアスには眼鏡をかけさせようかとも思ってたのですが、別に

絵に起こすわけでもないのに記述はしませんでした。

【4】きみの答え

“それ”を“それ”と指し示す言葉など存在しない

なぜなら“それ”は

“その”“すべて”であり

“すべて”を“それ”と指し示す言葉など存在しないのだから

【因果応報の自負】

リーヴダリル歴410年。

南の辺境セヴァルスタ諸島首都・港町マラバール。

黄昏から間もない時刻、

人々は響いた轟音に顔を上げ、ポカンと口を開けた。

高台にそびえる威容の総督府、その屋敷の中から屋根を突き破り、

花火のように打ち上げられ、藍色の空を駆け抜けていった光の流星。

虹の尾を引きながら、真っ直ぐ南へと向かう。

それを見送り、港町の市民は首を傾げ、改めて総督府の方角を見や

る。

喧騒が、微かに届いた。

*

騒ぎはすぐに屋敷の中を駆け巡り、衛兵や侍官達が慌ただしく廊下
を行き交う。

地下から一気に屋根を貫いて開いた大穴を覗き込んだ兵士の1人が、
階下から突然に飛び上がってきた2つの影に驚いて飛び退いた。

翼を持つその一对は、脇目も振らず上昇する。

「どうすんだ!?!」

狼狽の声をあげたのは獅子鷲の背にしがみついた褐色の肌の少女。

緑玉の瞳に半ば怯えの色が浮かんだ。

宥めるように、彼女の体を抱えた夕陽色の髪の青年が蒼穹の瞳で笑
いかける。

「大丈夫だよ、

何とかするから」

「何とかって…!」

少女・エレナは穴の下に目をやった。

煌めく銀色の波が地下に蠢き、巨大な寒天状の腕を伸ばして追い纏ってくる。

「総督を捜す、

…キリエ！！」

呼び掛けに応えたのは獅子鷲の隣を飛翔していた天馬に騎乗した長身の少女、

高く結った紺碧の髪が大きくなびく。

「足止め、頼めるか？」

「長くは保たないわよ！？」

「百も承知！

グレン、屋敷の中に！」

名を呼ばれ、獅子鷲が首を反らして背中 of 青年に声を掛けた。

「総督がどこにいんのか、判ってんのかよ！？」

屋敷の中には結界のせいでゴーレム撒き散らせねえんだろ！？」

「まあね、

しかも総督がどんな顔かたちしてんのかも知らないし？」

「うおおい！…！」

「大丈夫、

知らないものは知ってる人に教えてもらえばいいだけだ」

青年・ライズが邪気の無い顔で不敵に微笑った。

*

階上の騒ぎに駆け付けようと廊下を駆けていた衛兵は、横を走っていた筈の同輩が突然姿を消した事に気付いた。

「!?!?.....おい!?!?

.....ま、まさか.....」

彼は城下の街で最近騒がれている“神隠し”の話进行思い起こした。

街の見回りをしに出ていた同僚も何人かその被害に遭っているとも聞いていた。

彼は、しかし気付かない。

足元に這う銀色の水膜。

数秒前に仲間を飲み込んだそれが彼の足元に忍びより、息を飲む間も与えぬまま、また1人を飲み込んだ。

*

セヴァルスタ領主でもあるマラバール総督ヴェルンドは、晴れやかな気分で雑務を終えて席を立った。

これから賓客を交え、夕食の宴席を設けるつもりだ。

2年にも渡った領民による反乱を鎮圧し、ようやく人心地ついたのである。

現皇帝バルカシオン（諸公の半数の反発を黙殺しての即位だった為、僭称であるとの声も強いが）は、この辺境の内乱を軽視しなかった。

セヴァルスタは肥沃な土地柄、作物の宝庫として通っている。

ヴェルンド卿は自身の娘を皇帝の末の皇子に嫁がせてこの土地を賜わった。

他の人物がこの地を治め、内乱の鎮圧に手間取った、などと言う話になれば罷免どころでは済まなかったかもしれない。

しかし皇帝の姻戚という地位を得ていた為に、

彼の不手際は追及されず、逆に乱の鎮圧に援護を得ることが出来た。

それなりの代償も払ったが …。

ふと足を止め、ヴェルンドは屋敷に迎えている賓客を気に掛けた。

彼の助力あって、首尾よく反乱軍の頭目を討ち取る事が出来た。

正確には、その客人の代理として逗留していた彼の弟の助力である。

その弟が、それ以来なんの音沙汰もない。

さしたる懇意があつたわけではないが（むしろどこか不気味な風情の青年だった為、苦手であつた）、
消息不明となると色々と気まずい。

隠してはおけず、兄である客人には正直にその事を伝え、

彼はヴェルンドを責める事なく事後の処理を進めてくれたが、内心
どう思つた事やら。

こちらとしても預かつていた身である。

手を尽くして捜し出さねば義理が立つまい。

そんな事を考えていた時、彼は轟音と建物の軋みを聞いた。

「…何事だ!？」

慌てた風の衛兵達が数人、ヴェルンドの御前に駆け付ける。

「邸内で何事が起こつたようでございます、

御身の安全の為にひとまずお部屋へ」

頷き、ヴェルンドは促されるままに足を進め、
そしてすぐに客の事を思い出した。

「邸内には帝都からの使者の方がおられる、

早急にご無事を確認せよ」

命じ、自身は兵士達に守られながら足早に廊下を駆け、喧騒の中を抜けて自室に戻った。

一息ついて後、事態の把握の為に衛兵達に指示を出そうとした時である。

突然、部屋の壁が突き破られた。

「!?!」

飛び散る石屑や木片、舞い上がる埃から顔を庇った腕を下ろし、ヴェルンドは部屋に乱入してきた獣の姿を見た。

「なん…!?!」

衛兵達も目を瞠る。

「あれは…!?!」

威風堂々とした一頭の獅子鷲、その背後に見える2人の男女。

進み出た青年が鷹揚に微笑う。

「マラバール総督、

ヴェルンド卿でよろしいか？」

断定に近い確認の声。

「貴様らは…!?!
どうやってここまで!?!」

ヴェルンドの疑問に対し、グレンが驚の顔に苦々しい皺を寄せる。

混乱の中、不審者として兵士達に斬り掛かれて、それらを薙ぎ払ったのはグレンである。

この部屋を捜し当てたのはライズの機転　…と云うべきか、グレンはいまいち快くない。

*

数分前、しばらくグレンに乗って廊下を疾走していたライズは、1人の侍女に目を留めた。

その目の前に舞い降りて、あっといわせる間もなく顔の前に手を突き出し、指を鳴らした。

光の粒が弾け、呆然とした彼女を抱き寄せ、ライズはその耳元に囁いた。

「…総督さまの居場所を教えて」

一種のいわゆる催眠術だ。

グレンは元より、ライズのそれを知っているが、

「…はい、」

と答えた侍女の従順な態度と、ウツトリとしたような表情を思い出すとむず痒くなる。

ニコニコと人好きのする顔をして、
照れも悪びれもせずにごうごう事を平然とやってのけるのだ、コイツは…、と、
グレンは辟易する。

その時、そのグレンの横をすり抜けた影があった。

猫を思わせる、しなやかで敏捷な動き。

…その手には、抜き身の短剣が。

…エレナ。

「…!!、おい!!」

慌ててグレンはゴーレム化を解き、
元の人間の姿の腕を伸ばした。

獅子鷲の体では彼女を傷付けてしまう、という配慮だったが、
それでグレンの手はエレナに届かなかった。

武器を携えてヴェルンドに突っ込んでくる少女の姿を見、
総督の周りを固めていた兵士達が剣を抜いて迎え撃つ態勢に入る。

しかしエレナはそんなものは目に入らなかった。

彼女の目に映るのは、初めて見る敵軍の総大将。

…仲間達を殺した。

堪えてきた激情は、仇敵の姿を見た瞬間にその防壁を打ち砕いた。

この男が …！

「はい、ストップ」

場違いに暢気な声がして、エレナの体が宙に浮く。

襟首を掴まれたまま後ろに放られ、
追い縋って来ていたグレンが彼女を受け止める。

なだめるように、グレンがエレナの肩を抱えて押し留めた。

「落ち着け！！、な！？」

「うつせえ！！放せつ！！
その男を殺してやる！！」

イリアス達の仇を取るんだ！！」

肩ごしにエレナ達を見て、ライズが軽く笑んだ。

「後でね」

予想していなかった言葉に一瞬呆け、エレナがグレンの腕の中で虚脱した。

同様に、グレンもポカンと口を開けた。

「後で、つて…」

「まず訊きたい事とかあるし、
やってもらわなきゃならない事もあるから。」

その後なら、煮るなり焼くなり好きにさせてあげていいんじゃない？

…ねえ？」

笑い、ライズが躍る。

舞うように飛び上がり、彼は兵士達の真ん中に飛び込んだ。

狼狽する間もなく、青年の手が伸びてきて、
衛兵達に囲まれていた男の胸ぐらを掴む。

引き寄せると同時に体の位置を入れ換えて、
ライズは兵士たちに対してヴェルンドを盾にする形となった。

「手下達に退室を命じる。」

聞かれて困る話もあるだろうか？

…ルビーについて、だ」

目を見開き、ヴェルンドは背後の青年の顔を首を振り探ろうとした
が、
羽交い締められた体は少しも自由にならない。

苦痛と屈辱に顔を歪めて、彼は青年の要求に従って兵士達を退がらせた。

*

「馬鹿な……!!」

自室の露台から外に連れ出されて、違う部屋に移動をし、ライズに突き飛ばされ、邸に空いた大穴から下を覗き込んだヴェルンドは愕然と声をあげた。

「なぜ、ドールが!？」

儂は何もしていない!!」

「だろうね、

…これはレインの置き土産だ」

レイン、という名を聞き、ヴェルンドは膝をついたまま振り返った。

「レイン…、

…置き、土産……!!？」

男の困惑を冷ややかに笑って眺め、ライズが口を開いた。

「アイツは帰ったよ」

「なっ……!!？まさか!!」

レイン殿はここで殖やしたドール達を引き取りに来られたのだ、
それが何故このような……」

追い討ちを掛けるライズの声は一層低い。

「レインはドールになんか興味ないよ。

あんなの、ルビーを造るついでに出来た副産物なんだから。

さて、このままでは邸内の人々や市民達が飲み込まれてしまつよね。

あなたのすべき事は？」

ヴェルンドは蒼白になった顔を上げて、
こ憎らしい程明朗な笑みを浮かべた青年を見る。

「む……無理だ、
儂には……、」

あのように膨れあがったものを制御する力は……」

「そんなのわかってるよ、
心配しないで。

アレは全て俺達が片付けるからさ」

ヴェルンドは目を見開く。

「貴様たちは……まさか……」

にっこりとライズが笑って体を屈めて、男の耳に囁いた。

「ルビーは世界を滅ぼす兵器だ。」

その完成に手を貸した罪を終末の日に償うか、

悔い改め正道に立ち戻った賢明な男となるか、

…選ぶといい」

【もしも私があなたに愛を説くのなら】

…セヴァルスタ南方のとある村、

藍色の空に光の粒が舞う。

夜空にも似た濃紺の瞳を仰がせて、歌鳥はぼうっとそれに見入った。

すると突然、視界が塞がった。

「きゃっ…!？」

頭から被せられたのは黒いコートだった。

「おい、クー坊」

歌鳥にそれを被せた男が、隣に立った少年・クリスに声を掛ける。

「連れてけ。」

若い娘がいるべき場所じゃない」

クリスは男・ロイドを見上げ、少し目を丸くして首を傾げた。

無言でロイドは辺りを目で示す。

…つい先刻まで、ここは戦場も同然だった。

未だ地に倒れ伏しながら悶える兵士達、
焼け焦げ、もしくはただの肉の塊と化した屍体達。

まだ歌鳥は周辺の様子に気付いていない。

「あの…?」

コートの中で頼りなげな声を出す歌鳥の背中をクリスの方に押し出して、

ロイドは再びクリスに村の方を顎で示した。

「行け。」

後はもう、オマエの出番はない」

「……ん」

短く頷き、クリスは歌鳥の手を取ってゆっくり歩き出した。

村人達は呆然としてそれを見送る。

突然空から流星の如く現れた少女。

じっくりと観察した訳ではないが、
白い肌と艶やかで長い亜麻色の髪、
そして繊細な目鼻立ちが見て取れた。

しかも身に纏っていた服は質素ではあったが、
素材は絹と紗のいかにも高級そうなローブ。

明らかに只者ではない。

見送りながら呆気にとられていた彼らの上に、野太いバリトンの声
が降る。

「さつさと片付けるぞ、
まだ生きてる兵士は殺すなよ、

お前らの怨みはわかるが、こいつらにも一応家族はあるだろう。

生き残った当人の運に免じて少しだけ許してやれ」

手当てをしるとまでは言わないから、
せめて止めは刺すな。

そう言って、ロイドは露になった屈強な肩越しに辺りを見回した。

複雑な表情の農夫達の顔が夕闇の中に見える。

ロイドはその意味をわかっていたが、
念を押す事はしなかった。

たとえ自分の言葉が聞き入れられず、朝になって死体が増えていたとしても、

ロイドはそれに驚きはしないだろうし、咎めもしないだろう。

そもそもロイドは彼らの仲間でもなければ同胞でもないのだし。

*

クリスは歌鳥を村の外れの小屋に連れて入った。

かつては厩だったらしく、散乱した藁屑が靴の隙間に入ってがさつく。

しかしクリスにしてみれば他人の家（しかも留守宅）に勝手に上がり込む訳にもいかないの、やむを得ぬ選択である。

歌鳥も特に不平は言わなかった。

口にしたのは別の事だ。

「クリスくん、

無事だったんですね…。

よかった…」

言って微笑んだ歌鳥の顔は言葉に反してひどく悲しげでもあった。

クリスは、彼女はすでに知っているのだと思った。

「…カトリ」

「…はい」

「…イリアスが、死んだ」

「……はい……」

聞きました、と言った声は消え入るほどに細い。

隅に寄せられていた藁の束に、どちらともなく歌鳥とクリスは並んで座った。

クリスは語る。

拙い口調、抑揚に欠ける声で。

ずっと、語るべき相手を待っていた気がする。

ずっと独りで抱えていた、その死を。

*

「…そう……」

沈んだ声で、しかし揺らぎもせずに歌鳥はクリスの語りに相づちを打ち続けた。

涙は出なかった。

クリスの語り口があまりに淡々としていたせいかもしれないし、歌鳥が既にイリアスの死を聞かされていて、涙はそれを初めて聞いた時に流していたからかもしれない。

クリスは言葉をひとつひとつ零すように続けていく。

「イリアスが、カトリは生きている、と言っていた。」

ドルサツクや、ケイヴィンや…エレナも生きているかもしれない、と。

捜しているうちに、いろんな村が襲われて…
…助けるのを手伝った。

………」

クリスが顔をあげ、歌鳥に真直ぐ向き直った。

「捜すことを後回しにしていた。いやな気持ちになるか？」

歌鳥は首を傾けた。

クリスの顔には何の感情の色も見えなかったが、彼が歌鳥の気持ちに気を掛けていたのだという事はわかった。

歌鳥は微笑み、緩やかに首を振る。

「いやな気持ちになんか、なりません。
立派な事だと思います。」

ドルサツクさん達もきつと同じ事を言うと思います」

歌鳥の答えに、クリスは顔を伏せて俯いた。

「…おれは、

自分は何をしてるんだろうと思ったりもした」

歌鳥がほんの少し眉をひそめて、クリスの顔を覗き込んだ。

彼は普段通りの無表情のまま、どこともなく一点を見つめている。

「何のために戦っているのか……今になっても」

「…クリスくん」

「答えられなかった。」

わからないままだ……、

なのにイリアスは、おれは答えを知っていると行って死んだ。

……わからない。

考えても、

考えてもわからない」

クリスが初めて、顔を歪める。

「ずっと、生き残るための戦いだと聞かされてきた。

イリアスがそう言った。

けど今になって思えば、生き残るためだというのなら、おれは戦いが始まったとき逃げてもよかったんだ。

生き残るには、危険に近づかないことが一番いいことだとおれは森でそう学んできたし、今でもそう思っている。

なのに、おれは戦った。

自分が死ぬかもしれない事を思わなかったわけじゃない。

死にたいと思っていたわけでもない。

死んでも不思議はないとも知っていた。

なのに戦ってきたんだ。

……………なぜ？

おれは他人の気持ちどころか、自分の気持ちすらわかってない……………」

初めて見るクリスの懊惱。

歌鳥は痛々しくそれを見つめた。

「…クリスくん……」

「おれは答えを知らない、

……イリアス……」

「……………」

歌鳥は俯く。

何を、言うべきだろう。

思い悩み、歌鳥は慰めとは違う言葉を口にした。

どんな言葉だろうと、彼を癒せるとは思えない。

「…私…離れている間、

皆さんに会いたいって思っていました……」

クリスが顔を上げる。

首を傾けて、歌鳥を見た。

「私はここの人間ではありません。

帰るべき場所はここにはない筈です。

なのに、私は生まれ育った場所ではなく、
クリスマスくんやイリアスさんがいる所をずっと想っていた。

…それはね、

皆さんが私に優しくしてくれたのが嬉しかったから……、

私が皆さんのことを好きになったからだと思うんです……」

「……すき?……」

クリスマスは目を丸くして歌鳥を見つめた。

「…うん、…好きです。」

…セナにいた時が、今まで生きてきた時間の中で一番幸せだった気が
します。

初めて、他人に真っ直ぐ顔を向けることを覚えたんです。

あの場所で、クリスマスくんのおかげで。

とても大切になってた…、

失われてしまったことが、とても悲しい。

…クリスマスくんは私以上に辛いでしょうから、
こんな事私が先に言うべきではないけど……」

目を伏せた歌鳥の隣で、
クリスマスは小さく呟いた。

…すぎ。

「おれは…イリアスが好きだったのかな……」

歌鳥がクリスに向く。

「…イリアスさんが…」

いなくなっって悲しいのでしょうか？」

「…かなしい…、…」

「…悲しんです。

とても辛そうです、

痛いでしょう？…」

しばしの沈黙の後、

クリスは頷いた。

「クリスくんはイリアスさんが好きだったんですよ、

…そう、

もしかしたら、

それが答えなのかも…」

その言葉に、クリスが目を丸くした。

食い入るように、歌鳥を見つめる。

「クリスくんはイリアスさんと一緒に居たかったから、

イリアスさんと生きる場所の為に戦っていたのかもしいない…、

…違う？」

柔らかい声で問われ、
クリスは言葉を失う。

…すき。

…お前は知っている、
戦う意味を。

…すきなひとのため。

頭の中に浮かんだ言葉は、形になる前に渦を巻く。

…お前が優しい子だとわかってよかった。

「……おれは」

知っている。

「わからない、…でも」

クリスは変わらない。
抑揚に欠けたその声も、
感情の見えぬその表情も。

…けれど。

「おれも、
あの場所がすきだった…」

一筋、頬を伝う。

歌鳥はそれを見て驚いたが、すぐに動揺は消えた。

当然のことだ、

彼は悲しんでいるのだから …。

… クリスの表情は変わらない。

微かな嗚咽さえ洩らさず、顔を歪めることもなく、
涙だけが彼の時を刻む。

ゆっくり、おそろおそろ手を伸ばし、

歌鳥はクリスの頭を抱え込んだ。

普段なら絶対にしない。

同年代の男の子にこんな事をする歌鳥ではない。

けれど今、目の前で泣いているこの少年はあまりに幼げに見えた。

… 泣き方さえ拙い子供。

離れてはいけない。

言葉を掛けてはいけない。

泣くこと以外、何もさせてはならない …、

そう思った。

歌鳥は何も言わなかった。

ただクリスの背中に触れてゆっくり撫でた。

クリスも何も言わなかった。

涙が頬を伝う感触と、

歌鳥が背中に触れる感触だけを知覚しながら、

クリスは目を伏せ、

そして閉じた

∴

*

【系操人形たちの暗躍】

一夜が明けた。

薄曇りの空に、朝陽は滲むように淡かった。

農村の外れ、

丘の端に立った長身の男が煙草をくわえ火を点ける。

生き残った敵兵は荒ら家のひとつに押し込んである。

負傷者をどうするか、考えなくてもなかったが、

後はもう村人達の寛容さに期待するしかない。

ロイドは地平を眺める。

(…多分死ぬ…)

彼らがした事を思えば当然の結末。

このまま放置され、
ゆるやかに殺されるのだろう。

ここは村人達の土地、
そこで犯した罪ならばその流儀で裁かれるべきだ。

ロイドは口出しするつもりはない。

煙混じりの息を吐いた時、ロイドの肩にヒラリと舞って留まるものがあつた。

漆黒の蝶。

羽根に刻まれた瞳が瞬きをする。

ロイドは口を開いた。

「…ライズか」

*

…ロイドがその小屋を覗き込んだ時、
クリスと歌鳥は木の壁にもたれて坐り込んだまま、身を寄せ合って

眠りこけていた。

幼気なさの残る2つの寝顔を見ると、起こすに忍びない気もしたが、ロイドは膝をついてまずはクリスの頭を揺らした。

「おい」

クリスがぼんやりと瞼を上げる。

「……?、」

「……ろいど……?」

「朝だ、起きろ。」

「……お前もな」

歌鳥の肩も揺らし、ロイドは立ち上がる。

ボンヤリした頭を振って顔を上げた歌鳥は、ロイドを見上げて目を見張った。

「……え……?あれ?」

あの、あゝ……、

お・お早うございます……」

顔は昨夜見たが、何者かはまったく知らない男だ。

驚くほど背が高い。

いま歌鳥が座ったまま見上げているという事を考慮しても、明らかに今まで会った人々の平均身長からずば抜けている。

「あの…どなたでしょうか…？」

「ロイド」

返答は短く、素っ気なかった。

困った歌鳥が隣に座るクリスを見る。

クリスは頷いた。

男を示し、

「ろいど」

とだけ言う。

歌鳥は肩を落とした。

「はい、

それは聞きました…」

結局、クリスもロイドが何者か知らない所以他に答えようもないのだが。

クリスが自分達の膝に掛けていたロイドのコートを持ち主に差し出し、

歌鳥の手を取って立ち上がった。

3人が厩を出たとき、村人達が数人駆け寄ってきた。

彼らの簡単な謝辞だけを受け取って、ロイドは差し出された金品は断った。

「貧しい連中だと思えばこそ手を貸したんだ。

最初から礼は期待していない、自分達の生活に役立てる」

聞きようによつては失礼極まりない言い草だったが、村人達は深く頭を下げて礼を述べた。

ロイドの尊大な態度には、不思議と人を不快にさせる厭味がない。

クリスが見上げてロイドに声を掛けた。

「もう終わったのなら、他の仲間を捜しに行きたい」

ろいどはこれからどうするんだ？

どこか安全な所に行くならカトリを任せたい」

ロイドが呆れた顔でクリスを見下ろす。

「オマエな……」。

会って間もない人間を簡単に信用してんじゃねえよ。

俺がもしも悪党だったらどうすんだ？」

クリスが首を傾げる。

「こんな娘を連れて歩いて仲間を捜すつもりはない、
つてのはわかる。」

だがコイツはオマエの仲間だろう。

…簡単に目を離して他人に任すのは感心しねえな」

「？」

目を丸くしているクリスに溜め息を吐き、
ロイドは振り向いて歌鳥を見た。

「オマエはどうなんだ？」

やっと会えた仲間と離れてこんなオッサンと2人きりにされちゃあ、
たまんねえだろ」

「え…、あ…いえ…。」

オッサンとは思いませんけど…。」

「そこじゃねえよ。」

…2人揃って天然か」

頭を掻きながら、ロイドが呟く。

「…娘は預かってやる。」

ただしクーク坊、オマエも来い」

「？」

首を傾げたクリスに向かい、琥珀色の瞳が雰囲気だけで微笑った。

「仲間に会わせてやる」

口にした言葉が耳に届くのとほぼ同時、

ロイドが腕を広げて右腕にクリス、左腕に歌鳥を抱え上げた。

「！？、！？」

「きゃあっ！？」

「舌、噛むなよ」

一瞬、沈む。

その直後、強靱な脚が地を蹴って、

3人の体はあり得ない高さにまで飛んだ。

「うそっ……」

歌鳥が声を上げる。

風を切り、ロイドのコートの裾がはためいた。

地上が遠い。

一飛で村と峠をひとつ越え、着地と同時にまた地を蹴って空に舞う。

気付けば、さっきまでいた村は3歩で見えなくなっていた。

セヴァルスタ総督府。

昨夜の騒ぎが嘘のように、屋敷と街は平常通りの生活を始めようとしていた。

港町の朝は早い。

滲む朝の光に包まれて、潮風さえもどこか甘い。

総督府の一室、

露台のある部屋の窓を開けて天蓋付きのベッドを振り返ったのはこの屋敷の住人ではない。

「大丈夫？ライズ」

眉をひそめて覗き込んできたキリエに弱々しく手を振って、ベッドに横たわったままのライズが呻いた。

「あゝ…、きつ…」

「水、いる？」

「いない。

…あゝあゝ、

何でこんな役立つゴーレム持ちだったんだろ……、

“新たに指示を出すまでは邸内の使用人全てに暗示をかけたまま待機”

って…、どう思う？

ボス、俺を殺そうとしてるよね？」

「…死ぬまでやれとは、仰らないと思うわ…」

同情混じりの苦笑を浮かべ、キリエがライズの額を冷やしていた布を取った。

「エレナちゃんの治療が終わって、

本体が自由になったってのは救いだな、

分身だけでこんなことしてたら、本当に死ぬわ」

「…大丈夫なの？

あの娘」

手桶に張った水に布を落として絞り直した手を止めて、キリエがライズを見た。

「地下牢に入れた総督に手を出したりしないかしら。

ずいぶん頭に血が昇っていたようだけど」

キリエの懸念に、ライズが薄く笑う。

「大丈夫だろ。」

俺達の用が済んだら好きにしてい
って言うてあるし。

期限が付けば、人間てのは意外と我慢できるモンさ」

その言葉に、キリエが形の良い眉をひそめる。

気に掛かってはいたのだ。

その、口約を。

「それ、本気なの？

本当に訊くことを訊いたらあの娘に……」

「さあ、

約束したのは俺だけだから、

キリエ達が止める分には問題ないんじゃない？」

呆れて、キリエが顔をしかめた。

布をライズの額に半ば放るようにして、

「本当いい性格してるわ、貴男。

いつか痛い目を見るわよ」

と吐き捨てた。

グツタリと青い顔色を向け、ライズが微笑った。

ふと、その表情が止まる。

キリエがそれを見留め、首を傾げた。

「？、ライズ？」

ライズはキリエを見ない。

どこともなく天井を眺めながら、

「あれえ〜…？」

…なんでそんなトコに居るの？」

と呟いた。

*

エレナは廊下を歩いていて、向こうから歩いて来る邸付きの侍女の姿に反射的に足を止めた。

しかし、侍女はエレナには目もくれずに、籠を抱えたままさっさと通り過ぎて行く。

「…本当に見えてねえんだ……、
すげーな…」

独り言のように零し、

ちらと、後ろにいた青年に視線を向けた。

「…なんでついて来んだよ？」

声を掛けられたグレンは、顔をしかめて目を逸らす。

「お前が変な真似しないように見張ってるって言われたんだよ」

「誰に」

苦虫を噛み潰したような顔で、青年は慥然と呟く。

「……ライズに」

「お前アイツに突っ掛かってる割に、結局いいなりになってるよな？」

痛いところを突かれたのか、グレンは大仰に顔をしかめた。

「うるせえな、

アイツは性格は悪いが、頭はいいんだよ。

そこを認めないで駄々こねる程、俺はガキじゃねえ」

「どーだか……」

エレナがぷいとそっぽを向いて歩き出した。

グレンは居心地悪く少女の後に続く。

(…なんか俺、

コイツにつきまとってるみたいじゃねえか？

アイツこうなるのを見越して、
この女の面倒頼んできたんじゃない……)

馬鹿馬鹿しい、戻ろつか、とも思ったがやはり気に掛かる。

グレンはエレナの気持ち理解できる。

セナ砦の惨劇は聞いた。

さぞ怨みは深いだろう。

それは昨夜の彼女の行動で実証された。

…自分の姿を見ているようで、なんとなく放っておけなかった。

「どこ行く気だ」

「うつせえな、

何か食い物探しに行くんだよ、

腹減ったし、

今なら何掻っ払ってもバレねんだろ？」

「そんなコソ泥の様な真似を……」

「あいにくオレは元・盗賊だ。

モノが有り余ってる所から何を盗ったって、少しも良心は咎めねえ
や」

エレナが褐色の手足で伸びをした。

軽く溜め息を吐いたグレンの耳に、聞き慣れた少女の声が聞こえた。

「グレン！」

「キリエ、どうした？」

キリエはグレンより少しだけ背が低い。女性としては長身の内に入るだろう。

駆け寄ってきたキリエは、ほとんど真っ直ぐに視線を合わせてグレンに向き合った。

「今からその娘を連れて、出掛けてくれるかしら？」

「何だよ？」

「ボスがセヴァルスタに来ているらしいの。」

セナ地方で直々に“虹姫”を保護したそうよ」

「なにっ！？ボスが！？」

よし、すぐに行く！！」

目の色を変えて走り出したグレンを呆気に取られたように見送ったエレナは、

隣に立ったキリエの顔を見た。

「…あの、オレもどつとか言わなかった？

いらぬなら別にいいけど……」

キリエが慌ててグレンの背に叫んだ。

「いるわよ、

そう言ったでしょ！

グレン！！

この娘を連れて行ってと言ったじゃない！！

置いて行かないで！！！！！！」

…セナ砦からはるか北、

森林地帯が途切れた場所に海へと繋がる河川がある。

その畔でひとまず足を休め、ロイドは抱えた2人を下ろした。

歌鳥が息を切らす。

「酔ったか？」

「…少し……」

クリスが、踞った歌鳥の顔を覗き込む。

無表情だが、仕草には気遣う姿勢が見て取れた。

歌鳥が弱々しく微笑んで、大丈夫です、と言った。

「あの…、ロイドさん。」

仲間に会わせてくれるってどついう事ですか？」

歌鳥の方を見ることなく、ロイドは空を仰いだ。

「すぐに来る」

言に違わず数分後、北の空に小さく翼を持つ影が見えた。

クリスは最初それを鳥の影だと思った。

それはクリスに一羽の鷹を連想させた。

…ラリー。

クリスは首を振る。

(…ラリーは帰った…)

彼と帰ったのだ。

目を伏せたクリスの横で、歌鳥が小さく狼狽の声をあげた。

「クリスくん…！」

怪訝に思っ て顔を上げると、近づいて来るその影が、単なる鳥でないことがわかった。

「…?…」

クリスは目を丸くする。

それは猛禽の顔と翼を持ちながら、屈強な四肢をも持っていた。

「何だ、あれ」

動揺も見せずに呟いて、クリスはしげしげと近づいて来る獣を眺めた。

綺麗な獣だと思った。

「クリス!!」

カトリ!!」

クリスはキョトンと、

歌鳥は目を瞠って、

突然に降ってきた声の意味を理解しようとした。

「今……」

目を凝らした先、舞い降りて来る獅子鷲の背に掴まった少女の姿が見えた。

「…エレナ?」

「ヴィヴィさんっ!!」

獅子鷲の脚が地につく前にエレナはその背から飛び降り、
クリスと歌鳥の所へと駆け寄った。

「よかった!

無事だったんだな、

2人共!」

「ヴィヴィさんも!!」

歌鳥の瞳に涙が滲む。

安心したら泣けてきて、エレナも目を潤ませて歌鳥に抱きついた。

「よかったあ...」

クリスは相変わらず感情の窺えない顔をして、2人の少女を見つめていたが、
赤紫の瞳にはどこか暖かみのある色が浮かんだ。

「ボス!!!」

不意に張りのある男声が響き、クリス達はその声に顔を向けた。

クリスと歌鳥は目を疑う。

舞い降りた獅子鷲の姿が光に溶けたように消えて、
今までそれに包まれていたかのように、
その中から1人の青年が姿を見せたのだ。

「？」

「え？え？」

そんな2人には目もくれず、人間の姿に戻ったグレンは真っ直ぐ駆け寄り、ロイドの足元に土下座した。

「すみません！！」

レイン・エツダの兄弟を捕捉しながら、みすみす両名を取り逃がしました！！」

「騒がしい」

短く言い捨て、ロイドがグレンの額を蹴飛ばす。

「おふっ！」

「そんな報告とつくにライズの奴に聞いた。

んな面白くもねえ話2回も聞かすな」

「すっ、すみませんっ…」

グレンが膝をついたまま、恐縮した素振りでロイドを見上げる。

呆気にとられ、クリス達はその様子を見守った。

歌鳥がエレナに、

「あの…、」

あの蹴られた人は誰ですか……？」

と問うた。

「グレンで名前しか知らないんだけど……、

あの蹴った男、誰？」

「ロイドさん……、

で名前しか知らないんです……」

ここでロイドが3人を振り返り、無言で軽く手招きした。

*

その後、歌鳥とエレナの2人はゴーレム化したグレンの背中に乗せられ、

ロイドがクリスを脇に抱えて、マラバールの総督府へ向かった。

そこへ向かうのなら、何もわざわざエレナを総督府の外に連れ出して、クリス達に引き合わせる事もないと思われたが、

昨夜そこから逃げてきた歌鳥を、いきなり連れて戻るのは酷だろう、というのがロイドの配慮だった。

総督府はすでに制圧下にあるという事を、

仲間であるエレナの口から聞かせれば少しは安心させてやれる。

粗雑な振る舞いにそぐわぬロイドの細やかな心遣いを歌鳥は意外に

思い、同時に好ましく思った。

(…怖い人じゃなさそう)

なんとなく、出会った頃のクリスが思い浮かんだ。

*

「ボス！

お疲れ様でございます」

「フットワーク軽すぎでしょ、
何こんな遠出してんスか？」

グレンの案内で一同が足を踏み入れた一室、
出迎えた少女が、先頭に立ったロイドに頭を下げる。

ロイドは乱暴な足取りで部屋の奥のベッドに歩み寄り、グッタリと
横になっていた青年を見下ろした。

「中年になるとマメに運動しねえと腹が出んだよ」

「よく言うよ」

「どうせ俺がアジトを空けたところで、ウチはマリーさえ居れば回
るんだ。」

留守番も1人いるし、
問題なかるう」

ライズが仰向けになったまま、ロイドを見上げて軽く笑った。

「ないね。
助かります。」

俺達だけじゃそちらのお嬢さんの保護までは手が回らなかった」

視線を向けられて、歌鳥がおずおずと進み出、ライズを窺うように身を乗り出した。

「具合が…?」

「もお最悪。」

でもまあ、心配ないから」

歌鳥が困ったように眉をひそめた。

「あの…、ライズさん、…でしたよね？」

あの時はありがとございました…」

「どういたしまして。」

でも結局その後、君は攫われちゃったワケだから、礼を言ってもらうのはなんか申し訳ないな」

「そんな事…」

歌鳥が淡い笑みを浮かべて首を振る。

部屋の入口に立っていたクリスは、不思議そうな顔でその会話を聞いた。

セナ砦でライズと顔を合わせたのは歌鳥とエレナのみ、クリスはそのとき砦の外に出ていたのでライズとは面識がない。

キリエが椅子を出してきて、部屋の中央に置かれた卓に並べた。

人数分が揃った所でロイドが頷く。

彼は歌鳥の肩を軽く叩き、クリスとエレナの方に振り返った。

「座れ。話がある。」

特に、お前にはよく聞いてもらわなきゃならん」

ロイドに見下ろされ、歌鳥は小首を傾げて見返した。

*

【災厄の母胎】

とりあえず、全員がまずは名前だけを名乗り合った。

次いで、最初に口を開いたのはやはりロイドである。

「先に言っておこう、

セナに向けられた追討軍はちょっと小細工して呼び戻させている。

お前らの仲間がどれだけ生き残ってるかは知らんが、これで最低限の安全は確保してやったと捉えてくれ」

ロイドはちらと横目でクリスを見た。

キョトンとした風に、少年はロイドを見つめている。

「この後しばらくは本人達の運に任せろ、お前が背負うもんでもないだろ、

どうしても言うなら明日にでも送ってやるから、今は俺の話を聞け」

クリスは少し考え込んだ様子を見せたが、納得したように頷いた。

歌鳥が困惑したような声で言葉を挟んだ。

「呼び戻させるって…、
どうやって……？」

「ウチには一流の詐欺師がいるんでな」

「誰が詐欺師ですか？」

ベッドのライズが弱々しく抗議の声をあげる。

歌鳥は首を傾げたが、ロイドは構わず話を続けた。

「歌鳥、

お前、レインという男に会ったか？」

「？、レイン…？」

「エツダの兄だ。

やたら人相だけはいい」

歌鳥は表情を凍りつかせて、1人の男の顔を思い浮かべた。

微かに、肩が震える。

「…会いました…、

あの人はレインというんですか……」

ロイドが頷き、

クリスは首を傾げている。

その様子に目を留めて、ロイドはクリスに向かい姿勢を直した。

「お前は知らんか」

「、ん」

「エツダ、もか？」

クリスが頷く。

ロイドは少し目線を泳がせ、どう説明すべきか思案したらしい。

そのわずかな沈黙を、ライズの声が断ち切った。

「エツダはセナ砦に壊滅的打撃を与えた張本人だよ。

覚えてないかい？

あの夜の地震と紅い風」

クリスが目を見開いて、声の方向を鋭く振り返る。

「…あれは」

ベッドに横たわったままの青年が、蒼穹の瞳でクリスを見る。

「ルビー・エーテルってのを使ってたね」

「るび ……? ……」

眉をひそめたクリスの隣で、

歌鳥が顔色を失ったまま胸を押さえた。

「それ…、何ですか？」

答えたのはロイドだった。

「ルビー・エーテル。

別名“死女神の吐息”」

面白くもなさそうに椅子の背もたれに腕を回す。

「数年後に、世界を滅ぼす最凶兵器だ」

「
…？」

クリスが首を傾げ、歌鳥とエレナが顔を見合わせる。
構わず、ロイドは続けた。

「見た目はただの紅い宝石だと聞く。

しかしそれに秘められる毒は、解き放たれると爆発を起こす。

爆発自体は大した問題じゃない。

それに伴う爆風の毒性に比べたら、な。

それにより発生した毒を吸い込むと、

人体に限らず大抵の生き物は肉体が紅い砂に変ずる。

人間を含め、95%の生物はその毒から逃れられない。

…セナ砦周辺は血の色の砂漠と化したらしいな」

ロイドの言葉に、クリスは微かに顔を伏せた。

瞳に僅かな悲哀が浮かぶ。

「そんな…」

歌鳥は口元を押さえた。

セナ砦が落とされた、とは聞いていたが、経緯までは聞いていない。

クリスマスもその惨劇までは語らなかった。

だから歌鳥は、ただ単に兵士達の戦いで攻め落とされたのだと思っていた。

「完成品ならセヴァルスタ諸島全域を紅い砂で埋め尽くせる代物だ。セナ砦で使われたのは多分試作品だな」

エレナが立ち上がった。
褐色の顔を歪め、

「何なんだ、それは…！」

と、声を洩らした。
血を吐くような声である。

ロイドは少女の顔に無感動な目を向けて、座るようにと片手で促した。

「…材料はゴーレムの血液に含まれる毒だ」

言って、声だけで薄く笑った。

「まあ、ゴーレムは人間の血で造るわけだから、人間の血液から出来る毒だとも言える」

「ゴーレムの屍体の毒？」

クリスが問う。

ゴーレムの屍体は、放っておくと気化して毒を吐く。

だから戦いの後はゴーレムの屍体を集め、火を放って灰にする事がどこの戦地でも決まりごととなっているのだと、

クリスはイリアスに教わった。

ロイドが軽く頷く。

「まあ、そうだな。

屍体じゃなくても抽出出来るらしいが。

更に言うなら、レインは人間の血液から直接その毒を造れるらしい。

ゴーレムという過程をすつ飛ばして、な」

「……あの人、造って……？」

歌鳥の声が揺らいだ。

……ああ、あの時の直感は正しかったんだ、やはりあの人は恐ろしい人だった。

「何の為に、そんな」

「ルビーは世界を滅ぼす、つつう事だけを俺達は聞いている。

だったら連中の目的は世界の滅亡なんだろう、

事情は知らん。

俺達はルビーの完成を阻む為に奴を追っている」

その言葉に、グレンとキリエが頷いた。

そこで、ふと歌鳥は顔を上げた。

「…地下牢の…」

「？」

クリスとエレナが、顔色を失くしている歌鳥を見た。

歌鳥はどこか絶えるような目でその2人に向き直る。

「この地下牢に、セナ砦から攫われてきた人達が捕まっていたんです、

リシアちゃんのお母さんにも会いました。

けれど私だけその人達から引き離されて屋敷の部屋に閉じ込められて……。

昨日、そこから抜け出して地下に行ったら、もう誰もいなくなっていて…

…代わりに………」

歌鳥は言葉に詰まる。

代わりにひしめいていた、“あれ”。

どう説明すべきか、歌鳥の表情が歪む。

「ドールになっていた。」

「そうだな？」

ロイドの声に、歌鳥が肩を揺らす。

「…ドール…」

「ルビー創作の為に血液を抽かれた人間の成れの果てだ。」

もしくは、ゴーレム創作の為に血液を抽かれた人間の成れの果て」

「…じゃあ、あの人達…」

歌鳥は血の気が引いた顔を蒼白にする。

エレナがその肩に手を添えて、心配そうに顔を覗き込み、
次いで顔を上げてグレン達に問いかけた。

「昨日のアレが…」

「セナから攫われた連中だったってのか？」

言い淀むグレンに代わり、ベッドに伏せたままのライズがそれに答えた。

「その辺りの事情は知らないけど、
アレの正体が元・人間だって事は知っていたよ」

「そんなっ…！」

「言いたい事はわからないでもない。」

俺たち躊躇なくアレを片付けていったからね、

その後でアレは実は元・人間でした、

って聞かされたら、普通の人間なら気分は悪くなるわな」

ライズがどこか自嘲めいた笑いを浮かべ、

キリエが軽く溜め息を吐いた。

「残留ゴーレムと同じ理屈よ。」

処理する以外に道はない。

元に戻す術はないわ。」

だって、奪われた血は既にゴーレムになっているか、
最悪ルビーそのものになっているのだから」

クリスが呟く。

「その為にさらわれた」

「そついう事かな…」

ライズがようやく身を起こした。

「この総督は、反乱軍の鎮圧にルビーの力を貸してもらおう代わりに、」

新たなルビーの材料を提供していたわけだな。

兵士達からゴーレムを召し上げて、
更には領地から人間を攫わせるのを黙認してた、ってこと」

額に当てていた布を片手に、ライズが薄く笑う。

エレナが齒軋りして、扉の方に目をやった。

「あの野郎……！！」

「言っておくが、報復はさせんぞ。」

奴を殺しては、面倒な事態になる」

粗雑な口調でロイドが言い放って、エレナを見た。

エレナが何か言おうと口を開きかけた時、
ライズの苦笑めいた声が掛かる。

「ごめん、エレナちゃん。」

ボスがそう言ってるから」

「名前で呼ぶなっ！」

反射的に振り向き、エレナは反射的にいつもの文句を口にした。

ロイドはその反応に対して特にコメントもなく話を続けた。

「数日したらセナ地方から呼び戻された兵士達がこの街に帰って来

るぞ。

その時に街の主たる総督が不在だった場合、何が起これると思う？

ハッキリ言つて、俺は考えたくねえ。

面白いことは何一つ起こらんど、絶対に。

混乱はセヴァルスタ全域に及ぶな。

しかも、それに対応できる反・総督勢力の旗印であるお前達のリーダーはすでにない。

セヴァルスタの平穩の為には、現・権力者には居座っていてもらい、少し灸をすえて、兵士達の抑止力になつてもらうのが一番いい」

エレナがほとんど睨むような眼でロイドを見、

「あの外道が、そう簡単に性根を入れ替えたりするもんか。

アイツがどんな風にこの土地を治めてきたか、お前ら知ってるのか？」

「誰が性根の話をした、

そんな親爺の改心なんざ、最初から期待してねえよ。

ちよつと脅して、好き勝手しないように監視役を置いて行く。

否とは言えまい、

頼みのレインに見捨てられた奴に、俺達から身を守る術はない」

「監視役、って誰を？」

訊ねたのはライズである。

「俺はやダよ？」

早く帰って、花壇の世話したいんだから」

「マリーに適切な人物を選ばせる。

別にただの監視だ、

戦闘力は然程必要ない。

その程度の役割ならこなせる同志は結構いるぞ」

ロイドの言葉から歌鳥は、彼らはそれなりの規模の組織に所属しているのではないか、と思った。

そう問うと、ロイドはぞんざいに、顔の前で手を振った。

「んな大層なもんじゃねえよ、万年人手不足だ。

…つまり、お前達にここでこんな長々と説明をしてるのは、勧誘でもある」

クリス、歌鳥、エレナの3人を見据え、ロイドは本題に入った。

「俺達はルビーの毒で死なない人間しか、同志として迎える事が出

来ない。

たとえどんなに腕の立つ者でも、ルビーやゴーレムの毒の前ではそんなもの何の役にも立たないからだ。

俺達は1人でも多くの仲間を必要としている。

お前達はセナ砦で生き残った事で、毒への耐性は証明されている。

だから同志として迎えたいと思っている。

ただ ……」

ロイドは卓に肩肘をつき、どことなく浮かぬ表情で言う。

「話は戻るが…、

お前達はルビーやゴーレムの毒で死ぬ事はない。

つまり、たとえ世界がルビーによって滅ぼされるとしても、

お前達は死なないわけだ。

極端な事を言えば、ルビーによって引き起こされる災厄は、

お前達には関わりないとも言える。

むしろ俺達と同じように、レイン達を追う立場になれば返って自身の寿命を縮める事になりかねん。

実際、レイン達を追い始めてから何人の同志が命を落としたか分からない。

つい先月も、お前達とそう歳が変わらない仲間が死んだばかりだ。だから積極的にはお前達に仲間入りを勧める事はしない。

セナに残ってやる事があるなら好きにしろ。

ただし、歌鳥」

名を呼ばれ、歌鳥は自然と背筋を伸ばした。

「はい…?」

「悪いが、お前だけは選択の自由を与えてやれん。

何故なら、

レインは必ず、

お前を狙ってくるからだ」

歌鳥の顔色が変わり、

クリスが微かに眉をひそめた。

エレナが、あつ、と声を上げる。

「そつだよ！

あのエツダってヤツ、最初カトリを狙って来てた！

アイツら、カトリをどうするつもりなんだ？」

歌鳥も戸惑ったような瞳で食い入るようにロイドを見つめた。

エレナの発した問いは、歌鳥がこの数日ずっと抱えていたものと同じだった。

ロイドは低い声を洩らす。

「詳細は後で俺達の仲間に聞いてくれ。

ただ歌鳥、

お前はレインによって呼び寄せられた、
と言っている。

…この意味が解るか」

歌鳥は目尻が裂けんばかりに目を見開いた。

「呼び寄せ…られた…？」

あの人に……？」

愕然と、歌鳥は言葉を失った。

怪訝そうに顔を窺ってくるクリスやエレナの視線にも気付かず、知らず呼吸が乱れてくる。

歌鳥は震える声で、

「ロイドさんは…」

…その意味を…？」

「知っている」

歌鳥の体が傾いた。

慌てて、クリスがその背中に手を添える。

「カトリ？」

「私……」

歌鳥は異界からここにたどり着いた。

その理由もわからぬまま。

しかし歌鳥はこの世界に来た事を嘆いてはいない。

ここで歌鳥は故郷で得られなかった絆を得た。

歌鳥にとってこの世界に来た事は、決して不幸ではなかったのだ。

(…なのに…これが、

あの人の…?)

そしてロイドは、歌鳥の出自、そして異界の存在を知っている。

呆然と、ぼんやりと、歌鳥は

追いつかれた、と思った。

歌鳥は目を伏せる。

捕まったのだ。

もう逃げられない。

歌鳥は背中を支えてくれた手の主に顔を向けた。

赤紫の瞳の少年は、何の感情の色もなく、ただ歌鳥の顔を見ていた。

無垢の無表情のまま、小首を傾げた様子が幼気で、なんだか笑みがこぼれた。

大丈夫です、と言って、歌鳥はロイドの顔を見た。

「教えて下さい。

なぜ、私はここに来たのかを。

私は、理由を知りたくなかったわけじゃない。

ただ、知る術がないように思えたから、

∴ 私は元いた場所が∴好きではなかったから、

ここに来た理由を知る事が、なんとなく帰る方法に繋がるような気がして、

私は避けていたんです。

でも、そんな理由で逃げていていい事ではなかったのですね、

もう目を逸らしてはいけないんですね、

そうなんでしょう?」

見据えた濃紺の眼が、儂げながらも覚悟の色を滲ませた

∴

*

【分岐】

…霧のように細やかな雨が、港町の朝を包む。

簡単な旅装に、肩に白銀の長槍を担いだクリスが総督府の玄関に立った。

見送りに、歌鳥はエレナと連れ立って建物の外にまで出て、淡い雨に髪を撫でられた。

「気を付けて」

「ん」

短く頷き、クリスはマントのフードを頭に被った。

クリスは、とりあえずもう一度セナ地方に戻り、南部の拠点にしていた村々を一回りしてきて、

その後で、ロイド達と共にセヴァルスタを出る歌鳥らを追う事になった。

砦は壊滅したが、反乱軍が全滅したというわけでは、実はない。

全員を皆に集めていたわけではなく、
連絡をとりあう為に各地の村に数名の同志を配置していた。

彼らを訪ねて回り、生き残った仲間達のことを辿るつもりだった。

せめてそのくらいはしないと、新たな道に進む踏切りがつかない。

エレナがクリスの肩を叩いて、声を掛けた。

「任せませ、

オレもついて行って一緒にドルやケイを捜したいけど、返ってオマエの足手まといになるだけだろうし、

歌鳥1人を会って間もない連中に引き渡すのは、何か気に掛かるし」

エレナに頷いたクリスが、

歌鳥に向き直って相も変わらず抑揚に掛ける声を掛けた。

「あとで」

「ええ、後で」

微笑み、歌鳥は雨に湿って乱れた髪を指で直した。

セナ地方へはグレンが送ることになった。

彼はクリスを下ろしたら、すぐに戻ってくる。

クリスは自分1人の身ならいくらでも守りようがあり、追討軍が去った後のセナなら、危険は少ない。

「仲間が生き残っているなら、いつか運次第で会えるだろう。」

死んでいたら、いくら捜したところで会えはせん」

諦めがついたら、さっさと気持ちを切り換える、

そう言っつてロイドはクリスを送り出した。

エレナは、クリスを送り出し、

その後は歌鳥と共にセヴァルスタを出る事に決めた。

けれど、ロイド達の仲間になるという事はまだハツキリとは決めていない。

未だ彼女にはイリアス達を慕う気持ちがあり、元いた組織への愛着も強い。

易々と乗り換えるような事は、気持ちの整理がつかなかった。

しかしロイド達が追っているレイン、エツダは仲間達の仇だ。

エレナはそれを思えばこそ、ロイド達について行く覚悟を決めた。

そしてクリスは。

「おれは、なぜ自分が戦っていたのかを知らない。

答えはまだハツキリとは出ていない。

ただ、もしカトリの言った通り、

イリアスといたたくて戦っていたというなら、

もうこのセヴァルスタで戦う理由はなくなったのだと思う。

おれはイリアスみたいに、国とか、会ったこともない大勢の人間を助けるために戦うことはできない」

言って、クリスは真っ直ぐロイドを見た。

昨夜、セナに戻るといふ意思を伝えに行った時の事である。

「もうここでやり残したことは、人をさがすことだけだ。

ドルサツクとケイヴィンは生きていると、イリアスは言った。

もしかしたら、おれを逃がすためについた嘘かもしれないとも思っただけだ、

カトリとエレナはその通りに生きていた。

だったら、あの2人も本当に生きてるかもしれない。

ドルサツクは強いし、

イリアスの代わりに村にいる仲間たちを上手くまとめられる男だ。

それにもし生き残っていたら、あの2人もるびーの毒で死なない人間ということになる。

同志、になれるかもしれない」

「一応、期待だけはしておく」

素っ気なく言って、ロイドはクリスの眼を見返した。

「で、仲間が見つかるにしろ、見つからないにしろ、その後オマエはどうする気だ？」

あのエレナって娘と同じく、仇を討つために俺達と共に来るか」

クリスは赤紫の瞳を微かに伏せる。

「……かたき、っていうのはよくわからないけれど、カトリが狙われているなら、それと戦う。」

カトリは大切だから」

当人が聞いたら赤面したであろう。

しかし、この時その場にはクリスとロイドしかいなかった。

ロイドは軽く眉を上げ、

「大胆な発言だな」

と言った。

「？」

クリスは首を傾げる。

その様子にロイドは初めて、

苦笑ではあるが顔に笑みを浮かべて見せた。

「ただのガキか…」

「？」

「まあ、どんな理由にせよ人手が増えるのは歓迎するところだ、オマエの仲間捜しが終わったら、こっちから迎えをやる。

区切りが済んだら、さっさとオマエの大切な歌鳥の所に戻って来ることだ。

他人の手に委ねるもんじゃない。

大切なら、な」

クリスは頷き、

部屋を出ようとして呼び止められて振り向いた。

「？」

「一言挨拶して出て行け。
最低限の礼儀だぞ」

たしなめるように言われて、クリスは首を傾げて頷き、再びお叱りを頂いた。

「返事は」

「はい」

「よろしい」

自分は傍若無人な振る舞いをするくせに、他人の礼儀には厳しい男である。

*

…港町の屋敷の正面、3人の元にグレンが下りて来た。

「行けるか？」

「はい」

昨夜のロイドとの会話を思い出していたので、つい折り目正しい返事がクリスの口から出た。

エレナが妙な顔をしてクリスを見、グレンも意外そうに目を丸くした。

歌鳥は、軽く嘖き出して、すぐにクスクスと笑った。

「…じゃあ、

本当に気を付けてね。

ケイクン、ドルサクさんに会える事、私も願っているけど、クリスくんの事も心配してるんですから」

「だいじょうぶ」

言って、クリスは歌鳥の顔を真っ直ぐ見た。

「カトリも気をつけて」

「私は大丈夫です」

「大丈夫かどうかは、
おれにはわからない」

キョトンと歌鳥はクリスを見上げ、困ったように微笑んだ。

「もう」

ちらりと、クリスの表情に悪戯めいた色が浮かび、
エレナはその様子を呆気にとられながら眺めていた。

【4】きみの答え（後書き）

次回、歌鳥がセヴァルスタを出ます。

セヴァルスタは日本の九州くらいの規模を想定しております。一応ね。

本土の方の規模はまだ未定です。

リーヴダリル以外にも国がありますし。

でもあんまりグローバルな話に繋がる予定はありません。

五木の表現力では收拾つかなくなると困るし。

だから内乱でゴタゴタしてる国に近隣諸国の介入がまったくないのは不自然かもしれませんが、大目にみてくださいね。

たぶん周りでも内輪揉めがあるんですよ、きっと。

では次回。

おまけ

音楽を聴くのが趣味です。

……というわけで、勝手ながらイメージソング（目指す雰囲気という意味で）などを。

【浪川 歌鳥】

『MY LITTLE LOVER』の

『ラビリンス』

【クリスタルニーム】

『MY LITTLE LOVER』の
『NOW AND THEN』失われた時を求めて』

ちなみに【1章】のイメージソングも『MY LITTLE L
OVER』で『音のない世界』です。

最初から決めていたわけではなくて、こんな空気感がいいな、と
思ったのがたまたま……。

ちなみに【2章】は『柴田 淳』で『虹』
今回の【4章】も『柴田 淳』で『月光浴』です。

『MY LITTLE LOVER』、
『Cocco』『柴田 淳』
『alian』『JUJU』……

以上の方々の曲を聴きながらイメージを固めながら執筆させて頂い
ております。

『陰陽座』とか『Acid Black Cherry』などの方
々もよく聴きますが、たぶん物語にはまったく影響できないでしょ
う。

ロック系大好きなんですけどね……。

【5】PHANTOM CODE

星々が集う揺籠の肌に
撫で擦る指が刻む軌跡
波に染み入る甘色の月は
孕む祈りに潤んで溶ける

【Prologue: Sister】

リーヴダリル帝国

帝都イザヴェルより遙か東

聖地ヴァナディースは砂の海に浮かぶ孤島である。

広大な砂漠に点在するオアシスの中でも最も大きく、
断崖に囲まれたその土地は聖職者達の修行の場として相応しいもの
だろう。

巨大な盆地の中央には巨大な湖が水を湛えており、
砂漠の真ん中でも渴きに苦しむことはない。

暑さに強い作物を育て、家畜を養い、
人々は豊かではなくとも、つましく穏やかな暮らしを送っている。

丘の上に建つ神殿には、約千人の神官、聖職者たちが暮らしており、

日々の祈りや学問、武芸の修行に励んでいる。

*

リーヴダリル暦410年現在この地を治めるべき神官の長、シスター・クローディアは不在であった。

4年前、クローディアの父である皇帝が死去し、その後継者争いに引つ張り出されてしまったのだ。

現在帝都にて第29代皇帝を名乗り御位に就くのは先の皇弟バルカシオン、クローディアの叔父にあたる。

彼が玉座に就くにあたり、諸侯13連名が激しく反発、クローディアの皇位継承権を主張した。

バルカシオンはそもそも、皇帝の子供として生まれたわけではなく、兄は婚姻によって玉座を得た皇帝であった。

元は数在る貴族の家に生まれたに過ぎぬバルカシオンよりも、クローディアの方が正統な皇族の血を引いている。

その主張でもって、聖地の長は砂漠の街から連れ出された。

*

その日、聖地ヴァナディースの神殿にはいつも通りの平穏があった。

神官長クローディアの不在を除けば、国の内乱など、この地には何

の影響も与えない。

ヴァナディースは天然の要塞である。

断崖に囲まれた街は、入江にも似た城門が唯一の出入口、
侵入者に対しては崖の上から矢を浴びせかければ事が済み、

しかもそもそも城門に到る迄には、灼熱の砂漠を横断しなければならぬ。

その上、クローディアが不在のこの地をわざわざバルカシオン派の軍が攻める理由はなかった。

*

… 白い石造りの神殿の廊下を、ひとりの女神官が、緩やかな足取りで歩いていった。

ふと、微かに耳に届いた機を織る音に足を止める。

… 穏やかな日常。

その象徴的な営みの音に、優しげに目を細めた彼女。

歳の頃は20代〜30代の半ばか。

砂漠に暮らす人間としては白い肌を、薄紗の長衣に包んでいる。

さらに長衣と同じ薄紗の布地を、緩く括った濃紅色の髪の上に被せていた。

顔立ちはどこか凜とした風情が強いが、それでいて他人に威圧感を与えない雰囲気を漂わせる。

むしろ優しげな、母性的ですらある瞳をしていた。

美人ではあるが、顔立ちだけならせいぜい10人並みの美人だ。

だが、彼女の纏う雰囲気や和かな知性が、彼女に類い稀な美貌を与えているようだった。

…刹那、何が彼女の心をよぎったものか、鮮やかな紫色の瞳が憂いに陰る。

そんな女神官の背後に声がかかった。

「シスター・ユーリン」

ふわりと髪を揺らし、女神官が振り向いた。

「…どうした？」

一礼した修道女が、手に携えた書簡を差し出す。

「シスター・クローディアからお便りが」

女神官は差し出されたそれをしばし見つめ、洗練されたように優美な所作でその手を伸ばした。

シスター・ユーリン。

シスター・クローディアから聖地ヴァナディースを預かる若き神官長代理。

受け取った書簡を懐に納め、彼女は薄藍に染まり始めたオアシスを見下ろした。

そっと、小さな溜め息を零した。

*

…そのしばらく後の事であった。

ユーリンは1人露台に出て、手元に届いたばかりの便りに目を通そうとそれを開きかけていた。

そこでふと、南の空からこちらに向かって羽ばたいてくる1つの影を見留めた。

眉をひそめ、ユーリンは立ち上がり、それを見守る。

その翼は弱っており、時折力を失っては落ち、意思の力で高さを取り戻す。

それを繰り返しながら近づいてくる姿 …

「…ラリー!?!」

ユーリンは目を見開き、ほとんど墜落するようにならざり着いてきた三つ目の鷹を抱き止めた。

ユーリンは悟る。
その意味を。

「……イリアス……！」

ラリーを抱き締めたまま、ユーリンは崩れ落ちるようにして膝をついた。

「……祈りを捨て、剣を取った挙げ句がこの末路か……、
なんて愚かな……！」

毒づくように言葉を吐いた唇はしかし苦痛に歪められ、瞳は一層強く悲哀の色に陰った。

「馬鹿者が……っ……」

ぐったりと力なく抱かれた鷹が見上げる、痛みに歪んだ白い貌。

その瞳から、清い雫が流れて落ちた。

【船出】

…蝉の音がする。

街路樹の影、アスファルトの灰色。

振り返る間に視線が撫でた景色は、
見覚えを云々言うには、あまりにも磨耗した記憶から探り当てなければならなかった。

…母と2人で暮らしたあの街だ。

認識したとき、足は勝手に歩みを進め、
錆びた手摺りの小さな橋を渡って、くすんだ看板の商店の前を過ぎた。

石の塀に囲まれた小路に入って、木造のアパートの階段を昇る。

目の高さにあるドアノブに小さな両手を掛け、ギシ、という音と共に淀んだ風が流れて、髪が揺れた。

玄関を入ってすぐに居間が覗き、窓際で外の景色に見入っている女の背中が見えた。

…おかあさん。

朝から晩まで働きながら、暇さえあれば、あの窓から外を見つめる。

母が見つめているのは、かつて家族3人で暮らしていたマンションだ。

父が帰って来ることを信じ、苦しい生活を耐えてこの街に踏み留まっている。

「おかあさん」

幼い声に、振り向いた母が淡く微笑った。

それに安堵して、ようやく靴を脱いで傍に寄る。

迎え入れた細い腕、

薬指に緩くなつた白金の指環をチェーンに括らせ胸元に下げている。

抱き締めてくれた母の体は温かく、柔らかな甘い匂いがした。

…おかえり。

愕然とし、体が強張った。耳元に囁かれた声は、女の声ではなかった。

*

…歌鳥カトリは小さな悲鳴を上げてベッドから跳ね起きた。

乱れた呼吸を静めるように胸を押さえ、汗で張り付いた髪を顔からはがすようにして梳く。

溜め息を吐き、歌鳥は未だ薄暗い部屋を見回した。

隣のベッドで寝返りをうちこちらを向いた少女が、目を開けて歌鳥を見た。

「…なに？」

「どうした？」

歌鳥は一瞬呆けた。

…誰だろう、という疑問が浮かび、しかしすぐに我に返って首を振った。

「大丈夫、何でもありません。

ごめんなさい、

起こしちゃいましたか？

ヴィヴィさん」

いや、と応えた少女は体を起こした。

グラリと部屋が揺れ、歌鳥はここが船の中だという事を思い出した。

「なんか寝づらくて」

呻き混じりの少女の声に、歌鳥は少し苦笑して頷く。

「私も船って初めてで、慣れないですね…」

言った歌鳥を横目に見て、少女・エレナが少し瞬巡した後、口を開いた。

「…確か、カトリってさ」

「はい？」

「…記憶喪失、って話だったよな？」

そう問われ、歌鳥の肩が強張る。

「…あの、…」

「船が初めて、ってわかるのか？」

歌鳥は目を逸らしたくなかったが、身の置き所がない気がして俯いた。

「私…」

「別に、責めてるわけじゃないぜ？
ただ…その、」

言い淀んだ歌鳥の様子に、エレナが慌てて言い添えて身を乗り出した。

「…違うん、だよな」

エレナの緑玉の瞳が窺うように見つめてくる。

ゆるゆると歌鳥は頷いた。

「そっか…」

「…ごめんなさい…」

「いや、いいんだ、
スッキリした」

言って、エレナはベッドから脚だけ下ろして歌鳥の方に向き直った。

「ロイドとの会話を聞いてて、そうかかって思って」

「……ごめんなさい、
騙したつもりはなかったけど、そういう事になったかもしれないで
すね……」

「いいよ」

エレナが苦笑して、

「最初の頃はさ、
オレ実は歌鳥のこと警戒してた。」

でも、今はもう何も疑ってねーよ。

アイツらのせいで、歌鳥もすげえ嫌な目に遭ったもんな。

なんかワケありなんだろう？

話してくれれば有難いけど、無理にとは言わねーし、

小難しい事、苦手だしさ」

歌鳥は顔を上げた。

エレナは照れくさそうに、そっぽを向いてしまっていた。

ふと、笑みがこぼれた。

彼女は本名をエレナ・ヴィヴィッドというが、
女らしい名前を厭うて周囲の人間にはエレナとは呼ばせない。

今着ている服も男物で、華奢な体には大き過ぎる感が否めない。

歌鳥は向き直り、エレナに向かって頭を下げた。

「必ずお話しします。」

でも今は、私にもよく分からないことが多過ぎて…。

まず自分が納得してから、必ずお話ししますから」

歌鳥の言葉に、うん・と素っ気なく頷いて、エレナは頭を掻いた。

少し間を置き、

「あのさ」

「はい？」

「……ヴィヴィでいいよ」

照れくさそうに、そう言った。

*

風に当たりたいと言って、歌鳥は部屋にエレナを残して甲板に出た。

空は朝陽の前の薄藍に染まり、波の音に揺らめくその色を歌鳥は仰ぐ。

先日まで日々を過ごしていたセヴァルスタの陸地は、水平線の向こうに稜線の形を残すのみ。

海鳥の声につられて視線を巡らすと、船端に佇む人影が目にとまった。

彫りの深い横顔、

均整のとれたずば抜けた長身を包む漆黒のロングコート。

淡く滲むような空と海を背景に、右手に煙管を持って遠くを眺めるその男の姿。

あまりに様になり過ぎていて、歌鳥は少しの間見入っていた。

視線に気付いたのか、男がこちらを向き、眼帯に覆われた右顔面が見えた。

「なんだ、早いな。
ガキのくせに」

横柄な物言いだったが、歌鳥は気にせずふわりと笑んでお辞儀をした。

「お早うございます、
ロイドさん」

「酔ってないか」

「はい、今のところは」

煙管から灰を海に落とし、ロイドは肘をつくには低過ぎる手摺りに太股をもたれかけた。

「……隣、行ってもいいですか？」

歌鳥の声に、ロイドはちらとこちらを見て無言で頷いた。

少しよるめきながら、歌鳥はロイドの隣に立って船端の手摺りに手をつく。

首を上げないと顔が見れない程に背の高い男は、

眼帯に覆われた面がこちらに向いていて、目は覗けない。

歌鳥がしばし声もなく見つめていると、

不意にその横顔が傾いて、琥珀色の隻眼が見下ろしてきた。

「なんだ？」

「あ、…いえ」

圧倒的な威圧感。

しかし歌鳥はそれを理屈として感じただけで、感覚的には特に動くものはなかった。

目を逸らさぬまま、真っ直ぐ見返してくる歌鳥を見て、ロイドは軽く眉を上げ、

「よくわからん娘だな。」

女子供は大抵、俺の顔を見ると竦むんだが。

妙なところで度胸がある」

歌鳥も不思議に思う。

自分が人見知りである事、他人と向き合うのが苦手である事は嫌というほど思い知っている。

なのに、前にも似たような事を言われた。

大抵の他人に怯えるくせに、なぜ誰もが怖れる少年には気安く接してられるのか、と。

歌鳥は改めて、ロイドを見上げて笑った。

「最初は怖い人なのかなと思いましたけど、今は怖くないです。ロイドさんは優しい人だと思いました」

少し、彼に似ている。

ロイドは少し目を細めて、歌鳥を見下ろした。

「…で、何か用か」

潮風に混じって煙草の匂いがした。

歌鳥は僅かに俯いて、

「…私、ここ人間ではないんです。この意味がわかる、と言いましたよね？」

「言ったな」

「…世界が、違つたということも？」

「知っている」

言つて、ロイドは再び煙管を出して、懐から刻み煙草の袋を取出して詰めた。

「その話は、もっと分かりやすく説明してくれる奴に会わせてやるからソイツに聞いてくれ。」

俺は気の利いた言い回しつてのが苦手なもんでな」

「…でも、知っているんでしょ？」

「知っているから説明したくない。」

…そうだな、1つだけ言えることがあるとすればひどくややこしいんだよ、オマエらは」

歌鳥は目を丸くしてロイドを見上げた。

「オマエ…ら？」

あの男の事だろうか。

その割に口調に温かみを感じたのが引つ掛かった。

*

船室から出て、エレナは軽く伸びをした。

次いで、船の内装を改めて見やる。

エレナは数回船旅を経験しているが、この船は今まで乗った中でも豪華なものだった。

ロイド達が半ば捕虜としたセヴァルスタ総督に手配させたものだ。

貴人用の船なのだろう。

乗員は水夫を含めても十数人、

乗り込んでから一泊、

見知らぬ人間とは未だ顔を合わせてはいない。

向こうから歩いて来る背の高い少女も、エレナの同行者といっている。

…ただし、エレナは彼女が苦手である。

「…よう…」

「お早いのね、カトリさんはまだお休み？」

「甲板。風に当たりたいんだってさ」

「そう。朝食はあと少しで出来るから、呼んでおいてもらえるかしら」

頷き、エレナはふと足を止めた。

「カトリだけでいいのか？ロイドとかにも声かけて来ようか？」

「結構よ。ボスも甲板においでだから、カトリさんに声を掛けて下されば事足りるわ。」

「ライズとグレンは船にいないし」

心なしが高飛車な物腰に辟易しながら、エレナは言葉の一部に首を傾げた。

「グレンも？」

「ライズが乗ってないのは分かってるけど、グレンは昨日、一緒に乗り込んだんじゃない……」

「昨夜の内に、自力で海を渡ったわ」

グレンという青年は、獅子鷲の姿に変化する能力があるので、エレナはその点に関しては疑問は抱かなかったが、

「なんで？用事？」

と問うた。

すると、目の前の少女・キリエはどこか苦々しげな表情を浮かべる。

「船に酔うからよ」

「……」

エレナが軽く苦笑した。

「……なに、あいつ意外とデリケート？」

「情けない限りだわ」

キリエの声は澄んで張りがあるだけに、吐き捨てるような色はより露骨に浮き上がった。

エレナは、この場にはいない青年に少し同情した。

【穢れなき困惑】

セヴァルスタ諸島南部
セナ地方。

甲冑を着込んだ騎影の群れが遠ざかるのを確認して、クリスは草むらに屈んでいた体を起こした。

愛用の長槍は布に包んでいるので、一見してそれとは分からないだろうが、
大きさが大ききさなので目立つ事は避けられない。

しかもクリスは残党狩りの兵士達に顔を覚えられている可能性がある。

街道は避け、森や獣道を選んで進んでいた。

ふと、風が微かに血の匂いを運んできた。

クリスは僅かに眉をしかめる。

血の匂い自体に辟易した訳ではない。

クリスは森で育ち、戦場にも幾度も赴き、血の匂いには慣れている。ただ、今それを不快に思ったのは、その意味を嫌でも思い出させられたからだった。

新しい血の匂いじゃない。

これは“あそこ”から運ばれてきた同胞達だ。

クリスは首を巡らして、廃墟と化した丘の上のそれを見やり、赤紫の瞳に複雑な色を浮かべる。

クリスは反乱軍にいた頃、特に周囲と馴染んでいた訳ではなかった。むしろ敬遠されていた。

クリスも特に周囲に馴染もうとも思わなかった。

それでも、失われた命は痛い気がする。その失われ方が無惨に過ぎただけに。

ひとつ頭を振って踵を返し、クリスは足を進めた。

*

クリスはイリアスが最期に残した言葉を頼りに、生存の可能性のある2人を捜していた。

ドルサツク、ケイヴィン。

どちらもクリスが親しくしていた、数少ない仲間だった。

ドルサツクはイリアスの補佐役、反乱軍においては副頭目と
いい。

発見できれば生き残った仲間達のみとめ役となつて、これ以上の無益な争いが起こるのを抑えてくれると期待できる。

セナ砦にいた仲間達はほぼ全滅したが、各地の拠点とした村にはまだ同志達が残っている。

クリスはそれらの仲間達を訪ね歩き、ドルサツク達の行方を求めた。村に残っていた仲間達は皆動揺していた。

クリスが訪ねてくると、砦で何が起きたのかを知りたがる。

口調が拙く、しかも婉曲な言い回しというのが苦手なクリスの説明で、

砦で起きた事を知った彼らは一様に絶望にも似た声を上げた。

中には、何故イリアスの亡骸をみすみす敵の手に渡すような真似をした、とクリスを責める者もいた。

数日かけて各村を回つても、ドルサツク達の行方は手掛かりさえ掴めなかった。

*

「元氣だ〜して」

「!？」

出し抜けに背後から掛かった陽気な声に驚き、クリスは振り向いた。

「あ・ゴメン、驚いた？」

草の上に腰を下ろしていた姿勢のまま背後を振り仰ぎ、クリスは自分を見下ろすようにして立つ夕陽色の髪 of 青年を見た。

「…らいず？」

「そう」

文句のつけようのない笑顔を見せ、ライズはクリスの隣に腰を下ろした。

クリスは首を傾げる。

「…むかえ？」

「いや、単に暇だったから様子見。
もう皆は船で島を出たよ」

無言で頷き、クリスは少し膝を抱えた。

「まだ見つからないみたいだね」

「…ん」

「まあ、見つからない＝死んでる・ってわけじゃないんだし、楽に考えれば？」

「…ん…」

食べる？と訊いて、ライスが懐から出した袋を差し出してきた。

「なに」

「胡桃」

頷いて、クリスは手を出して受け取った。

ライスが向き直ったとき、ふとクリスは呟くように零した。

「花のおいがする」

「そう？年中いじってるから染みついてんのかな」

「らいずのおい？」

「多分ね。けどそれにしても鼻いいな、キミ。」

クリス、だっけ？」

自分の服の袖を嗅ぎながら、ライスがからかうような口振りで続けた。

「そんだけ鼻が利くなら、仲間の人も匂いで捜せそうじゃないか」

「この辺りには、しない」

「したら捜せるの?」

呆れ半分の声で笑ったライズを見、今まで会った事のないタイプだ、とぼんやりクリスは思う。

明るい髪の色はそのまま持ち主の気性を表しているように見えた。

クリスは剥き身の胡桃を一粒口に含み、視線を前に移して軽く息をつく。

その様子に、ライズが首を傾けてクリスの顔を覗きこんできた。

「落ち込んでんの?」

「なぜ?」

「さつき、なんか責められてたでしょ?」

クリスはキョトンとして隣に座った青年を見た。

「…なぜ?」

「ああ、ゴメンゴメン、

キミに一匹くつつけてたんだ」

そう言ったライズが立てた指に、どこからか漆黒の蝶が舞い出て留まる。

「だから、見てた。

気い悪くした?

言い訳じゃないけど、居所とか常に把握しておきたかったからさ」

「ん」

あっさり納得して、クリスが頷く。

ライズはそれを少し興味ありげに見やり、

「あの人も気が立ってただけさ。

ちよっとキミに当たっただけだよ、気にするなって」

「気にしてない」

そういうことじゃない。

クリスはほんの少し俯いて遠くを眺めた。

「…みんな、イリアスが死んで悲しい」

ライズが軽く首を傾げた。

「うん」

「悲しくて、泣くのはわかる。

でも同じくらい、怒ったのも多かった」

クリスはそれが不思議だった。

「どうして、ひとが死ぬと悲しいだけじゃなくて、怒ることがあるんだ？」

ライズは微笑いながら、ますます首を傾げる。
妙な事を気にする子だ。

「ただ死んだんじゃないで、殺した相手がいるからだろ？」

病气や老いを憎むのは馬鹿馬鹿しいけど、この場合は相手がいるわけだから仕方ない」

「でもおれ達だって、人間を殺してきた。
仲間達は、みんな。

自分達がしてきたことと同じことをされて怒るのは、なんていうのか……」

クリスはそこで口籠もる。

上手く言葉に出来ない。

ライズは一層明るい声で、

「ま、人間の感情なんてのは理屈じゃないし」
と軽く返した。

クリスが呟く。

「おれには、よくわからない……」

イリアスが死んで、悲しかった。

けれど怒りはなかった。

理屈とか、そういうものがクリスの感情に働いたわけではないと思う。

クリスはそもそも怒りを知らない。

「そういう奴もいるさ」

ライズがあっけらかんと言っただけ。

「俺なんて、最近仲間が死んだんだけど涙も出さなくて、薄情な奴だっけ散々罵られたからなあ」

明瞭な声は笑いさえ含んで風に舞う。

クリスは首を傾げた。

「仲間？」

「うん。」

ちょうどキミ位の年頃の女の子。

結構いい子だったんだけどね、
いい子過ぎたのかな、
仲間を庇ってアツサリ」

言って、ライズが立ち上がる。

「……それですつと機嫌が悪いんだよな、アイツ」

ライズが低く呟いた。

*

【History of 2nd Land】

2泊を経て、歌鳥らに乗せた船はリーヴダリル本土の港町に入った。どことなく西洋風だったマラバルとは趣が異なり、建造物の様式や色彩の統一性のなさが印象的だった。

平たく言えば、ごちゃごちゃしていて、活気はあるがなんとなく居心地が悪い街だと思った。

同じような感覚を抱いているのか、船を降りてすぐ、ロイドはこの街に滞在するつもりのない事を告げた。

「用を済ませたいならさっさとして来い。
必要なものはグレンが買い揃えてある」

「ああ、
それで先にこの街に」

事情を知らぬ歌鳥が得心したように無邪気な声を上げ、それをちらと見たロイドは何も言わずコートの裾を払った。

エレナは控えめに笑いを堪えて、キリエは知らぬ顔であらぬ方向を見ている。

昼時に近い市場には食堂のテーブルが道にもはみ出し、人波をかき分けて歩くのに苦勞した。

ただ、どんなにはぐれそうになっても、ロイドの頭は見失いようがないのでそれは助かった。

加えて、道行く人々がロイドの風貌に少しばかり気圧されて、自然と歩みの妨げが減っていった。

石畳の坂道を進んで行くと、その先の広場に4頭立ての馬車が見え、その傍らに立っていた青年がこちらに気付いて手を振った。

「ボス！こちらです」

声を上げたグレンが、次いで馬車の御者らしき男に何やら話し掛けている。

その馬車は、一般民が利用するような木と布で作られたそれではなく、

無駄な装飾こそないが、どう見ても貴人用のそれだった。

エレナがそう言つと、ロイドは面白くもなさそうな顔をし、否定はしなかった。

「これに乗って、どこに行くんだ？」

「方角で言えば、アイーダウッド地方だ」

その答に、エレナが反応を見せた。

「聖女クローディア殿下のおわす？」

「別にその方角ってただけだがな」

歌鳥はその名前を記憶の中から探り出した。

確か、イリアスらが支持していた皇位継承問題の渦中のひとつではなかったか。

*

諸侯13連名の手により聖地ヴァナディースから連れ出された聖女クローディアが現在身を置くのは、

国土中央に位置する山岳都市アイーダウツドである。

難攻不落で知られるその城砦都市だが、この4年に及ぶ内乱中、そもそも戦端が開かれたことはない。

クローディアはれっきとした皇族である。

現皇帝派も、クローディアの皇位継承権を否定しているわけではない。

彼らの言い分としてはこうである。

“皇女クローディア殿下は聖地ヴァナディースに召された時点で、神の娘となられた方である。”

それを道理をわからぬ諸侯連名が俗世の御位に就けようなどと、神の許から強奪するも同然である”

この名目を掲げ、現皇帝派は聖女クローディアの身柄を要求しているのである …

*

「体裁のいい事言ってるけどさ、実際クローディア殿下の身柄が渡ったら、何だかんだ理由つけて害を加えるに決まってるわけさ」

吐き捨てるように言ったエレナの隣に座り、歌鳥は曖昧に頷いた。

「その…クローディア殿下って方は、どんな人なんですか？」

「オレは会った事はないけど、立派な方だって聞いてるよ。」

イリアスが会った事あるらしくて、めっちゃうちゃ尊敬してるみたいだった」

「イリアスさんが？」

あのイリアスが尊敬…。

歌鳥はその女性に想像を巡らした。

「あの、おいくつなんですか？その方」

「え？ええと…」

「確か50代にはなられていない筈ですわ」

斜め向かいに座ったキリエがエレナに代わり答えた。

「詳しいんですか？

キリエさん」

「実家が帝都にありましたので、そういう話が耳に入りやすかったです」

ニツコリ笑ったキリエは、礼儀正しさが返ってよそよそしい印象を与える。

エレナほどではないが、歌鳥も少しキリエの雰囲気苦手な気がする。

キリエの隣でロイドは窓に肘をついて何処ともなく外の景色を眺めていた。

グレンは外の御者台に座っている。

「…クリスくん、どうしているかしら…」

呟いた歌鳥に、エレナが首を傾けて顔を覗き込んだ。

「気になるの？」

「ヴィヴィちゃんは気になりませんか？

ケイヴィンくんやドルサクさんの事だっただけあるし」

「ああ、まあ…そこはね」

エレナは複雑な表情で頷いた。

正直を言えば、エレナは半分諦めている。

イリアスが残した言葉だって、クリスを励ますための嘘ではなかったか、という気がしていた。

生きていて、また会えれば勿論嬉しい。

けれど会えなくて、その死を確認する事になっても、改めて落胆することはしないであろう自分をエレナは知っている。

エレナは軽く頭を振り、ロイドに向き直った。

「目的地にはどのくらいで着くんか？」

クリスの奴が追いついて来るのに時間掛かるだろ？」

「ライズがついてるから、どうにでもなるだろ」

その答に、歌鳥が首を傾げた。

「ライズさん？」

「俺達が帰るまでヒマだ、とか言ってクー坊んところに様子見に行っただ。

あいつは自分のゴーレムのいる所にならダイレクトに移動出来るからな、

棲み処にも一匹残してるから自分の身ひとつならすぐに帰れる」

歌鳥は溜め息にも似た声を吐いた。

「便利なんですね…。」

…あ、

だから皆の時…。」

納得してひとり頷いた。

厳戒態勢だった筈のセナ砦内に突如現れた彼。

あれはそういう事なのか、と思った。

その横で、エレナが問う。

「変身するんじゃない？ そう聞いた気が…」

「少し違うな、

そもそも俺達は変身するんじゃない。」

自身の体を粒子化させて、ゴーレムに構成し直すから変身に見えるわけだな。

このキリエみたいに分離させて普通のゴーレムみたいに騎乗する事もあるが…。」

「騎乗するゴーレムは“普通の”ではありませんわ」

キリエが鋭く口を挟んだのを見て、歌鳥が少し目を丸くした。

目だけで軽く苦笑したロイドが、肩を竦めて、

「流行てのは時を追うことに変わるもんだ。

昔の主流ゴーレムは、今のゴーレムよりも主との繋がりが強く、むしろ、主って言い方がなかったらしい。

なにせゴーレムが死ねば、本人も死ぬからな」

ロイドの言葉に、歌鳥とエレナが顔を見合わず。

「……え？」

変身してなくても？」

「死ぬな。」

たとえばキリエが騎乗したゴーレムから転がり落ちたとする。

その後、ゴーレムだけに致命的な攻撃が加わったとして、キリエがまったくの無傷だったとしても、これも死ぬ」

「いやな例え話に引つ張り出さないで下さいます？」

「一番わかり易いだろ」

険を含んだキリエの眼差しも意に介さず、ロイドは続ける。

「このゴーレムの仕組みは他にもある。」

ゴーレムの身体を粒子化させて、持ち主の身体に構成し直す事が可能だ。

ライズが移動手段を選ばないのは、アイツの場合この特性が最大限に活かせるからだな。

なにせアイツのゴーレムは何体にも分裂出来る」

「反則ですわね」

呟いたキリエが、ちらと馬車内の隅に視線を向けた。

ひっそりと羽根を閉じていた黒い蝶が、からかうようにヒラリとそよいだ。

*

【常夜の天蓋】

…数日後、点在する村の宿と野宿を繰り返した馬車が辿り着いたのは、

一見して朽ち果てた石造りの遺跡だった。

「 ……ここだ」

言っただ降りたロイドに続いて外に出て、歌鳥達は目を丸くした。

「…何?」

草木も生息しない峡谷の底にあつて、打ち棄てられたかのように石柱が無数にそびえ立ち、横たわり、互いを支え合うようにしてアーチを形作っているものもある。

どう見ても、ここは廃墟にしか見えない。

「あの…?」

「ついて来い。」

ルートを間違つと決して入れない」

「入る、つて……」

どこをどう見回しても、建物らしきものは見つからない。

釈然とせぬまま、エレナと並んでロイドの後ろについて歩く。2人に続いて、キリエとグレンが後ろについた。

しばらくグルグルと歩き、歌鳥は首を傾げた。

(…このアーチ、3回くらいくぐつたような…)

そして、数回め。

「え?」

「は!?!」

歌鳥とエレナが目の前の方の光景に足を止めた。

石の柱が支え合つて造りあげたアーチ。

それを額縁にでもしたかのように、その向こうだけが夜空の絵画をはめ込んだように暗い。

ある筈の景色が覗けない。

瞬いている内に、ロイドが2人に振り返った。

「そういえば」

アーチの向こうに片足を踏み込んで、ロイドが言う。

「俺達の組織の名前を言っていなかったな」

*

思い切って石のアーチをくぐり、夜空の景色に身体を預けると、一瞬ふわりと足元が浮いた。

歌鳥は目を瞠る。

「綺麗……」

まるで、宇宙だと思った。

広がる闇に散らばって輝く光の粒と光の帯。

少しの間の無重力の後、降り立ったのは闇に浮かぶ半球の上だった。

大理石のように滑らかな床で、中央に祭壇に似たオブジェがある。

エレナもキョトンとしたまま辺りを見回す。

「すげー…、どうなってんだ？こじ……」

歌鳥も見回した。

すると、今立っている場所と同じような形のドームが幾つか闇に抱かれていたのが見えた。

なんだか、小さい頃に故郷で乗った観覧車を思い起こした。

夜空に浮かび、揺らめく籠の群れ。

ぼんやりと見上げている歌鳥を尻目に、ロイドが中央のオブジェに歩み寄る。

そのオブジェは大理石の蔦を幾重にも絡ませ形作られた台座だった。

鳥の巣にも似ているが、抱いているべき卵はない。

すると、足音を待ち兼ねたかのように、オブジェから細かい光の帯が無数に伸びて、数秒で幼い少女のかたちを作りあげた。

「…え！？」

驚いている間に完成された“それ”が、ニッコリ笑って優雅に礼をした。

『ようこそ、』

フロントム・コードへ』

言った少女の声は姿相応に幼かったが、その口調は妙に洗練されて大人びて、聞く側にちぐはぐな印象を与える。

姿は、年の頃12歳前後。

膝まで届く黒絹の髪、

赤を基調としたレースアップのドレスがひらひらと裾を揺らす。

顔立ち自体は人形のように整って、本来なら愛らしいのだと思う。

しかしそうと見えないのは紅玉の瞳のせいだろう。

ただ赤いだけでなく白眼が見えず、眼窩の中に本当に紅玉を丸々はめ込んだような具合だ。

表情に乏しく、不気味な異相に見えた。

『私はマリーエレメント。』

フロントム・コードの案内役の擬似知能。

創造主の代理人。

歓迎するわ、異界の乙女』

視線の窺えない瞳が自分に向けられている事を知って、歌鳥は僅かに身を固くした。

「…あ」

『お帰りなさい、

ロイド』オートリンク。

貴男も同席するのかしら』

歌鳥の反応を無視して、少女はロイドに向けて小首を傾げた。その様子はやけにあどけない。

ぞんざいな態度で、ロイドは否定の意思を示した。

「寝る」

『そう。ではそちらは？』

マリーエレメントが歌鳥の横に立つエレナを示す。

『一緒に案内しても？』

「いや、まずは歌鳥1人で事情を含ませた方がいいだろう。」

エレナ……、ヴィヴィは後でいいな？」

名前で呼ばれるのを嫌がるエレナの性質を思い出したのか、ロイドは途中で呼び直した。

その細やかさに意外なものを感じながら、エレナはゆるゆる頷いた。

『そう。』

では彼女を案内するわ。

さ、行きましょう。
『異界の乙女』

ふわりと、幻か幽霊のように歌鳥の前に近づいた少女が微笑んだ。

マリーエレメントが手を差し伸べる。

歌鳥は戸惑いながらもそれに手を伸ばした。

「これで…?」

『そう』

指が触れる。

感触は無かった。

「…!?!?」

触れられない。

『そう。でも大丈夫よ』

心の声を読んだかのように頷いたマリーを見返し、歌鳥の身体が平衡を失う。

耐え兼ねて瞑った目を再び開いた時、歌鳥とマリーはさっきまでとは異なる場所に立っていた。

*

…目の前で歌鳥達が姿を消したのを目の当たりにして、エレナが狼狽えて激しく瞬いた。

「…え！？何っ！？」

「心配すんな、行くぞ」

ロイドが軽くエレナの頭を小突く。

促されるまま後に続いた。

すると、ロイドがドームの縁を蹴って下方方向の籠に飛び移る。

覗き込んだ所、大層な高さだったが、ここでは重力の概念はあまり意味を成さないらしい。

事実、飛び降りたロイドは落ちる、というにはあまりに緩やかな速度で下に降り立った。

その様子を見下ろして、エレナはロイドが降りた先に立つ人影を見つけた。

何だか地味な男だ、と思っていたら、

「お兄さま！」

一言、そよぐような声音で叫んだキリエがエレナの横を擦り抜けて飛び降りて行った。

ポカンと口を開いたエレナが見つめる先で、

キリエの姿に目を留めた男が微笑んで、舞い降りてきた妹に手を伸ばした。

「お帰りキリエ、怪我はない？」

「ありません、お兄さま。わざわざ出迎えに来て下さいましたの？」

「うん、心配だからね」

「嬉しい！」

まるで別人のようなキリエの様子に開いた口が塞がらない。

ふと、後ろにいたグレンにその様子を示して、

「…ブラコン？」

とエレナが呟いた。

グレンが頷く。

「ブラコン」

「ブラコン…」

「重度の」

付け足して、グレンが薄く苦笑した。

*

【Phantom Code】

…歌鳥達が突然移動した先は、先程までいた場所とは少し風情が違った。

円形の劇場。

曲線を描いて壁を覆うのは半透明な虹色のカーテン、夜空の情景が透けて滲んで見えた。

部屋の中央、ゆるやかな傾斜の床を下った所に、四方を大理石の柱に囲まれた円形のステージがある。

四方に幕を降ろされて。

見回した歌鳥の横を擦り抜けて、宙を泳ぐ少女がそのステージを示して手招きした。

『こちら』

マリーに促されるまま部屋の中央に下り、歌鳥はそのステージを眺めやった。

天井は高すぎて見えない。

言うなれば、闇が天井だった。

柱とカーテンも、その闇の天井に吸い込まれるようにそびえ立つ。

それ自体が、この空間を支える巨大な支柱に見えた。

マリーが近付くと、その先で1つの面のカーテンが音もなく左右に開いた。

ステージの中が見えた。

ただ大理石に似た材質の床があるだけで、カーテンにコの字に囲まれた空間が晒されただけだった。

マリーが促す。

『上がってきて』

怪訝に思いながらも、言われるままステージにかかる段に足を掛け、歌鳥は幕の中に入った。

踏み込んだ直後、カーテンが閉じる。

一部屋程度の広さの空間に閉ざされ、歌鳥が少し不安げに胸元で手を組んだ。

マリーがふわふわと漂うようにして中央に向かった。

『名前を覚えてもらえるかしら、異界の乙女』

「歌鳥です」

『姓は？』

「浪川」

『カトリニナミカワ』

まるで機械的なやりとりだと感じた。

マリーの動作や口調には、姿から連想される無邪気さや幼さが一切ない。

微笑んだ顔もどこか作り物めいている。

「あの…」

『見て』

言いさした歌鳥を遮って、マリーは周りを示した。

見回すと、薄いカーテンの外側で、何かが煌めき、零れ落ちていくような情景が映った。

「なに？」

歌鳥は目を凝らす。

まるで電工掲示板だ。

闇に流れ落ちる無数の…、

「文字？」

歌鳥はこちらの世界の文字はわからない。

けれども、イリアスの部屋にあった本や、街中で見た看板から、こ

こちらの文字の特徴はなんとなく覚えている。

カーテンの外で、映画か何かのエンドロールのように文字の羅列が流れ落ちていく…。

「これは…?」

『歴史』

マリーが揺らめく。

『過去と、未来の。』

軸となるひとつの歴史』

「歴史…、…未来?」

『そう。未来』

マリーがある方向を指で指し示す。

『世界は紅き疫病により滅びる』

その言い回しに、歌鳥は、

「…予言?」

『そうとも言えるわ。』

疫病の名は

ルビー・エーテル。

ある男の手によってその病は世界に広まり、9割以上の生物が息絶えるの』

「病……なの？
でもあれは」

『言い回しの問題。』

ルビーは実際は兵器なのだけど、滅び逝く人々はそうとは知らぬまま死んでいくのだから』

釈然とせぬまま頷いて、歌鳥は

「この予言を元に、ロイドさん達はあの人達を追っているのね」「
と確認のように尋ねた。
マリーエレメントが頷く。

『そうよ。
この予言をファントム・コードと呼び、
そして私達の組織自体もそう名付けた』

「ファントム・コード……」
『そう。』

そしてあれが貴女を示した記述』

歌鳥は目を見開き、慌ててマリーが示した先を目で追った。

しかし、やはりと言つべきか読める筈もなく、どれがその記述なのかも判らなかつた。

「…私の事？」

「……何と書いてあるの？」

『虹姫』

歌鳥は首を傾げた。

「虹…？」

『その日、血の雨が降る。』

貴女の血によってルビー・エーテルが世界に蔓延するの』

「…！？」

『けれども雨を降らすのは貴女ではない。だから、貴女は虹。』

降らすのはその名を自ら戴く者』

脳裏によぎる一人の面影。

「…レイン…？」

マリーが頷く。

『そう。』

レイン＝ナイトメア。

彼が貴女を手に入れた時、ルビー・エーテルを宿すべき死女神が完成するの。』

“死女神の吐息”

…

ルビー・エーテルの別名。

「私が…何故？」

どうして私が関係しているんですか？

私が、この世界の人間でない事と何か？」

マリーは首を振る。

『貴女の血筋』

「血筋？」

『遠い昔、それこそリーヴダリルの建国される以前の頃に、

私達は貴女の祖先を異界に隠したの。

世界の破滅を阻む為に』

マリーの言葉に、歌鳥は目を瞠った。

「それ…どういっ…」

『死女神を創る為に必要なのは、ある血筋なの。』

貴女の祖先は、その血を引いていたわ。

だから異界に逃がした。

この時代にレイン＝ナイトメアの手に渡らぬように。

その先で伝えられた血筋の裔が貴女』

呆然として、歌鳥は立ち竦んだ。

「私の…祖先…？」

じゃあ、私は元々こちらの血筋を？」

『今や異界の人間としての血の方が濃いのは確かだけれど、確かに貴女の身体にはこちらの血が流れているの。』

そしてそれは、確実にレイン＝ナイトメアが求める力を未だに秘めているわ』

言った少女がふわりと浮かび上がる。

『ファントムはわかっていたの。』

歴史の軸を踏襲する限り、貴女がこちらに引き戻される事は避けられないと。

けれど、それを無視して大きく歴史を歪めてしまえばレイン＝ナイトメアを見失ってしまうわ。

だから貴女の血筋が消えた歴史を修正しながら、未来への軸を守ってきたの』

歌鳥はその言葉の意味を理解しかねて少し眉をひそめた。

マリーはそれを無視して、泳ぐように宙を舞う。

『けれどもそれも終わりが近づいているわ。

滅びの歴史は変えねばならない。

未来をなぞるのはあともう少しだけ。

決して貴女を彼の手には渡さないわ。

貴女だって、そう望むでしょう?』

歌鳥はマリーを見上げた。

一度に沢山の事柄を頭に詰め込まれて、軽く目眩を起こしかけたが、歌鳥はゆっくり頷いた。

少なくとも、ロイド達は信用できる。

…レインは、怖い。

その直感は、今聞いた話に関係しているのだと、歌鳥はなんとなくそう思った。

*

「ライズ君の庭を借りて、お茶にしようか」

…レックスと名乗ったキリエの兄が言った。

その言葉にキリエが頷く。

「すぐに用意しますわ、お兄さま」

「ああ、いいよ。

疲れてるだろう？キリエ。

僕がやるから」

ニツコリ笑った男は、どう見てもキリエとは似ていない。

妹の、はっきりくつきりとした顔立ちに比べ、

レックスは、どこかぼやけた印象を与える顔をしている。

彫りは深いが、目が細く、覗く瞳の青色は薄い。

キリエと並ぶと彼女の紺碧の髪と対比され、

くすんだ鉛色の癖毛が一層冴えない印象を助長する。

しかしその笑顔はいかにも優しげで、人好きのしそうな感じがする。

その点でも、どこかお高くとまって見えるキリエとはまったく違うと感じた。

エレナが、

「なあ、本当に兄妹？」

と、本人達に訊くのも憚られたので、隣を歩くグレンに小声で訊ねた。

「俺に訊くなよ、

本当の兄妹じゃないのか、違うとは聞いた事ないし」

「ふうん…」

レックスがこちらに振り向いて、エレナとグレンに手招きした。

現在立っている場所の縁から飛び降りて、ふわりと次に飛び移る。

エレナが見下ろしながら、

「いつもこんな感じの移動なのか？」

「ああ、階段や廊下はないからな。

この空間は、外の世界とは少し次元が違っんだ。

ドームがいくつか浮いてるだろ、

あれは“籠”っていつて、ひとつひとつが部屋みたいなものなんだ。

あの籠がボスの部屋。

今はお休みになってるから、天井も壁も閉ざして球体になってる」

グレンが指差した先には、確かに真ん丸い球体が浮いている。

夜空に浮かぶ月みたいだ。

「あれん中にロイドが居んの？

用がある時どうすんだ？

「ドアも窓もねえじゃん」

「あれはただの目隠しだ、視覚にしか影響しない。実際にはないも同じ、飛び移ればわかる」

「擦り抜けるの？
水みたいな感じ？」

「水より抵抗がないな。
幻みたいなものか」

「ふうん…、」

あ、じゃあさ、上に行く時は？
オレらさつきから降りてばっかじゃん、
上の籠に行く時はどうすんだ？」

「ここには呪力が働いているから、目当ての籠は必ず下に来る。
というか、降りた瞬間に自分が目当ての籠の上に移動してるんだ、
だから降りる以外の行動はしない」

「へえ、便利だな」

話し込んでいると、下の方から2人を呼ぶキリエの声がした。

その声に、少し慌てて降り立った籠は、色とりどりの花が咲く庭園
だった。

所々に果樹らしき木も見える。

よく手入れされた感じで、花壇や樹木、石畳や卓、椅子等の配置も

趣味がいい。

「へえ……、いい庭だな。」

陽が当たらないのに、よく咲いてるな、この花たち。ここ、ずっと夜みたいな所じゃねえの？」

「ずっと夜みたいな所なんだが、よく咲くな。」

ライズの奴が育ててる花達だ」

慣れた仕草で、グレン達が椅子に座った。

「居心地がいいから、ここが皆の溜まり場になっちゃうんだ」

言って、レックスが微笑った。

「ここ、ライズの籠？」

「うん、そう。」

彼が留守の間、花の世話を頼まれてて、好きに使っていいって言われてるから」

言って、レックスは樹木の陰にポツンと建つ小屋に入って行き、しばらくしてから茶器を持って出てきた。

「はい、おまたせ」

出された茶は、ハーブの柔らかな香りがした。

「ライズ君ほど上手く淹れられないけど」

「そんな事ありませんわ、お兄さま。」

キリエは、お兄さまが淹れて下さるお茶が一番好きです」

エレナは軽く吹き出しそうになったお茶を慌てて飲み込んだ。

お高くとまったキリエも苦手だが、今のよつに甘えた風の声を出すキリエも何やらむず痒い。

どっちにしろ、エレナは彼女と馬が合う気がしない。

それを知らず、レックスが

「女の子同士、妹と仲良くしてやって下さい」

と、エレナに笑って言ってきたのに生返事を返すのがやっとだった。

*

「…それで」

円形劇場のステージの上、幕が上げられたそこで、歌鳥は宙に浮いた少女を見上げて問い掛けた。

「具体的に、私は一体どうしたら…?」

マリーエレメントは、感情の揺らぎも見えぬ紅玉の瞳を向けてきた。

『今は、何も。』

しいて言うなら、少し血を鍛えて欲しいのだけど、今の貴女にはまだ厳しいものがあるわ。

だから、今は少し待って』

「血を…鍛える？」

眉をひそめた歌鳥の問いに、マリーはただ笑って頷いた。

『貴女の血には特別な力があるわ。』

さっきの予言だけを聞けばまるで破滅の力を秘めているように感じ
てしまいかもしれないわね。

けれど、そうではないの。

貴女の血には、マリオンやゴーレムらの力を増大させる作用がある
のよ』

「マリオン？」

『ゴーレムを得た人間の事をそう呼ぶの。』

元々は、原初型ゴーレムのそれだけをそう呼んでいたのだけど、
今は改式型ゴーレムの持ち主の事も、そう呼ぶわ。

今はそちらの方が主流だから。

このファントム・コードに所属するマリオンは、全員が原初型だけだ」

「変身できたり、とかいう…?」

そう、と頷き、マリーは言葉を続ける。

『貴女の血の力が貴女自身の意のままになれば、私達の戦力の増加にも繋がるかもしれない』

「私が役に立てるの?」

意表を突かれたように、歌鳥は知らず胸に手を当て、マリーを見返した。

「でも私、自分の力なんて何もわからないのに…」

『ええ。』

だから、今はまだ何もしなくてもいいわ。

いずれ時期が来るから』

「時期…」

ふと、歌鳥は頭に引っ掛かりを覚えた。

「…そういえば…」

私の、先祖ですか?

それに当たる人を、あの人の手に渡らないよう、異界に隠したって

言いましたよね？

異界なら、あの人は手を出せないという事？」

歌鳥の問いに、マリーが首を傾げる。

『ええ、

レイン・ナイトメアには異界に関わる力はないわ。
まだ、ね。

これからの事はわからないけれど。

…異界に戻ることで、身の安全を？

不可能ではないわよ』

「いえ、ただ…思っただけで…」

言い淀み、歌鳥は僅かに目を伏せる。

…戻りたくは、ない。

戻りたくないからこそ、歌鳥は少し後ろめたいのだ。

どうしても、自分はこの家から逃げ出してきたのだ、という意識から抜けられない。

『そうね、きっと戻っても貴女の居場所はないわ』

ギョツとして、歌鳥は目を睨りマリーを見上げた。

この少女は、歌鳥の故郷での暮らしや事情もお見通しなのだろうか、

と不気味にすら思ったが、彼女が次に口にした言葉はそれを肯定するものではなかった。

『既に歴史は修正されているのだもの。』

異界にはもう貴女の居場所はない』

「…どういう事？」

『修正されたの。』

貴女がこちらに引き戻された時に、異界における貴女の存在は修正された。

…確かめてみる？』

マリーの言葉は、歌鳥にはいまいち飲み込みかねた。

「確かめる、って？」

『異界の様子をしてみる？覗くだけなら、造作もないことよ』

「…」

歌鳥は瞳に翳りを見せた。

故郷の様子 …。

真っ先に頭に浮かんだのは伯母の志保子の顔だった。

こちらに来て、何度も繰り返し想像した、故郷のその後。

きっと周囲は噂話に事欠かなかっただろう。
警察にだって関わったかもしれない。
女子高生の失踪だ。

マリーの言う“修正”が、どういふものなのか分からないが、
歌鳥にはまだそういつた想像してきた伯母の顔を実際に目にする勇
気がまだ持てない。

「いいえ、…まだ…」

消え入りそうな歌鳥の声に対して、何の興味も反応も見せず、マリ
ーは、

『そう。』

では、戻りましょう。

…ああ、そうだわ。

貴女の部屋を用意するけれど、1人部屋でいいのかしら？

心細いのなら、慣れるまでの間だけでも同行していた彼女と同室で
もいいわよ
『よ』

「…え？」

ええと…、相談してみます………」

『そう』

*

「…ところで、エレナさんはここに入るの？」

「名前じゃなくてヴィヴィって呼んで」

レックスに問われ、エレナはいつもの調子よりは少し抑えた口調で返した。

彼の隣に座るキリエを意識して、である。

「この方、名前で呼ばれるのがお嫌いなんだそうですね、お兄さま」

「え？どうして？」

きよとんとして尋ねる彼に対し、エレナは、

「…名前、嫌いだから。」

「…で、何だっけ？」

「フロントム・コードに入るのか？って話だ」

隣の席でティーカップに口をつけていたグレンが応えた。

「入る…って事になるのかなあ…」

「レインを倒したってんなら、目的はほぼ同じだけだな。」

「…お前、反乱軍にいた頃何してたって言ったっけ？密偵？」

「そんなカンジ。」

主に情報集め」

それを聞いて、グレンらが顔を見合わせる。

「うちでは、そういうのはマリーとライズがやるからなあ……」

エレナはマリーがどういった役割を果たしているのかは知らないが、ライズの能力は知っている。

彼のゴーレムの性能と比べれば、自分の密偵としての実力や経験など、ここでは何の役にも立たないのかもしれない。

「剣くらいなら、扱えるけど」

「だとしても、お前に任務を任せるのは無理だ。後方支援に回るだろうな」

侮られたように感じ、少し気分を悪くしたエレナが何か言い返そうとするのを、キリエが遮る。

兄の前だからか、口調が普段より柔らかい。

「実力の問題ではないわ。貴女はルビー・エーテルの毒に耐性が無いのもの」

エレナがはっとして目を丸くした。

「この間、ライズに言われたでしょう？」

貴女は本来なら大多数の人間同様、ルビーの毒で即死する体質なのだ。

だからレイン・ナイトメア達を生身で相手にするのは、あまりにリ

スキーだわ」

「…ああ、確かにそんな事言われたな…。

そういえば、なんでオレは助かったんだろ…」

「その時、カトリさんの体に触れていたのでは？」

問われ、エレナは目を丸くして頷いた。

「手をつないで逃げてた気がするけど…、それが？」

「ルビーの毒に感染しない人間に触れていれば、

その体に流れる抗体を持つ血が、触れている人間も守ってくれる場合があるのですわ。

カトリさんの血の力は絶大な影響力を持っていた筈、だから貴女は、ライズの解毒が間に合う程の軽症で済んだのでしょう」

「カトリのおかげで助かったって事？…そう」

複雑な気分がしたが、別に嫌な気はしなかった。

けれど、

「……イリアスやクリスがルビーから助かったのは、どうしてだろう」

「ルビーは100%の人間に効く訳じゃねえ。

無傷なのは確かに珍しいが、不思議はない」

「そうか……」

僅かに俯き、エレナはふとグレンに向かって首を傾げた。

「どのくらい？」

「助かる確率か？」

無傷で済むのは1%くらいだったかな、

10%は即死はしないが、体が欠損したり、

それでもその傷口から毒が回る場合も ……」

「グレン」

たしなめるようなキリエの声に、グレンはハッととしてエレナの顔を見た。

少女は緑玉の瞳を伏せている。

「…いや、その、単なる確率の話だぜ？」

「わかってるよ」

決して高い確率ではない。

エレナは、思う。

ドルサック、ケイヴィン。

2人が2人共、本当にその少数派の側に入れているのだろうか。

…

【育むもの】

…セヴァルスタ諸島

セナ地方。

霧のような細やかな雨が、平原に立ち込める。

漁村の端、空家のひとつの軒下を借りて雨を凌いでいたライズが、村の中心から歩いて来る少年の姿を見留めた。

「お帰り〜」

暢気な声に無言で頷いて、クリスが同じ軒に入って来る。

「駄目だった？」

頷く。

クリスに気落ちした風情は見られないが、元々感情を顔に出す型の少年ではないので、内心は計れない。

執念にも近い執着を見せていたことを思えば、相当に落胆してもおかしくはないだろうが。

「まあ…、前も言ったけど見つからないからって、それが死んでる

ってことには直結しないわけだし、あんまりガツカリしないで」

「ん」

無表情のまま返事をしたクリスに頷き、ライズは空を窺う。

「止まないねえ……」

「ん」

「濡れるの気にする？」

首を横に振るクリス。

ライズが笑い、

「この程度なら構わないよねえ、行くっ」

頓着を見せずに足を踏み出したライズに続き、クリスが後を追いかける。

「カトリちゃんとエレナちゃんは、もう俺達のマジトに着いてるか」
「ら」

「…ん」

くすくすとライズが笑い出したので、クリスが不思議そうに首を傾げた。

「なに」

「ああ、ゴメンゴメン、
だって何かキミの返事、面白いから」

「？」

「変わってるって、言われた事ない？」

楽しそうなライズの様子に首を傾げながら、クリスは頷いた。

「おれは“森の仔”だから普通の人間とはちがうって言われた」

「“森の仔”？」

∴ああ、アレね」

夕陽色の髪についた滴を軽く払い、クリスを振り返って笑う。

「大変だったでしょ？」

「？」

「幾つくらいの時？」

俺は9歳くらいの時から1年間、似たような生活してたんだけどさ」

クリスが目を丸くする。

∴そういう人間には、初めて会う。

「にたような？」

「人里から離れて、独りで山に籠もってさ。」

まあ、俺の場合は家も畑もあったから“森の仔”とは言えないんだけどね。

アレは森の精霊に育ててもらった子供の事をいうわけだから

クリスが首を傾げる。

「どうして？」

「どうして、って？」

「らいずも捨てられたのか？」

「いや、

俺の親は盗賊に殺された。

住んでた村ごと。

その後、俺を拾って育ててくれた人がいたんだけど、その人も死んで、それで俗世間が嫌になって山に籠もった。

その人が残してくれた家と畑だったんだよね

「……」

歩きながら、クリスはライズを見た。

「らいずも、変わってるのか？」

「俺は変人だよ、

しかも性格悪いしねえ」

ケラケラと笑って、ライズがふと歩調を緩めた。

「…そうだ、

ちよつとヤボ用あるんだけど、キミも行く？」

「どこに」

「セナ砦、跡」

雨が伝う頬に、微かに感情の揺らぎが見えた。

クリスはライズの顔を探るようにつめる。

蒼穹の瞳は、柔らかに微笑んでいる。

…

「…灯りを、お持ちしましょうか？」

…夜更けの窓辺、

華奢な椅子に腰掛けて手紙を広げる兄に、そつと弟が尋ねた。

「ありがとう。

でも大丈夫ですよ、

月明かりがありますから」

碧を帯びた銀髪を揺らし、兄・レインが微笑む。

それに頷き、エツダは遠慮がちに近づいて背もたれに廻った。

「何と？」

「ルビーの成果の報告に対するお返事ですよ。」

セナ砦での功績を評価し、引き続き生産を支援すると共に、有事の際は提供を求める、と」

エツダが僅かに首を傾げ、

「ヴェルンド卿を捨て置いた事に関しては」

「何も」

微笑んで、レインが手紙を折り畳んでエツダに渡す。

受け取った方は特に興味もなさげにそれを懐にしまい、つと窓の外を見やった。

「ファントム・コードは彼に手を出さなかった様ですね。」

「…兄様はヴェルンド卿の死を望まれていたのではないのですか？」

エツダの言葉に、レインはふわりと笑って首を振る。

「特に望んではいませんでしたよ、」

そうなるのではないかと思っただけです。

確かにヴェルンド卿がおられなくなればセヴァルスタは混乱し、我々もルビーの材料を集め易くなります。

けれどセヴァルスタは少々遠い。

必要だった作業は済ませたのですから、もうあの島はよいのです。

お前もあそこに通うのは、大変だったでしょう。

だからもうセヴァルスタはいいんですよ」

エツダが、軽くレインの顔を覗き込むようにして首を傾けた。

「では、これから何を？」

「フィリオさんがルビーの精製法の簡略を何パターンか考案して下さったそうですよ。

幾つか完成品も仕上がっているとか。

受け取りがてら、ご挨拶に伺いましょう。

ここしばらくお顔を拝見していませんし」

「はい」

頷いたエツダの白い蛾にも似た顔を見、レインは気付いたように声を漏らした。

「…ああ、そういえば、食事がまだなのでは？」

エツダ」

「……」

「行つておいでなさい」

微かに蒼氷の瞳を伏せる弟に向かい、レインが柔らかく繰り返す。

「行つておいでなさい」

暖かみを帯びた瞳に見据えられ、エツダは憂いの表情のまま頷いた。

「……失礼します」

深く頭を下げて退室する背を見送り、レインは窓の縁に肘をつけて外を眺めた。

……淡い月が滲む。

それを愛でて目を細め、彼が椅子にゆったりと体を預けていると、先ほどエツダが出て行った扉からノックの音がした。

「失礼します、

もうお休みでしょうか」

若い女の声がして、レインは椅子から立ち上がり、おっとりとした返事をして扉に向かった。

「……どうしました？」

開いた隙間から、不安げな表情の少女の顔が覗いた。

レインが笑む。

その笑顔を見上げながら、少女が頭を下げた。

「ごめんなさい、

エイルの熱が下がらなくてどうしたものか、と……」

「おや」

「朝まで様子を見ようかとも思ったんですけど、不安がつてぐずるものですから……」

微笑んで、レインはそっと少女の頭に手をのせた。

「それは可哀想な事をしました。早く言ってくれば良かったのに。」

大変だったでしょう。
すぐに行きますから」

少女は安堵の表情を浮かべて、

「ありがとうございます、
神父さま」

と言った。

レインは頷き、少女の背中をやりわり押し出して廊下を送り出した。

一旦部屋に戻って、壁際の棚の抽斗をあけ、薬の入った箱を取り出

す。

棚の上には、小さな子供が作ったらしい粗末な布で出来た小さな人形や、木の実で作られた首飾り等が並んでいる。

レインはふと、それらを見て笑みを零し、優しい手つきで丁寧に位置を直した。

窓から射し込む月光が足下を照らす。

そうして薄浅葱の長衣を翻し、レインはその部屋を後にした。

…

【もうひとつの船出】

数年前、クリスはイリアスに連れられて本土からセヴァルスタに渡り、それから一度もその島から出たことはなかった。

今、数年ぶりに乗った船はあいにくの雨で景色は濁り、波の揺らぎはどこか苛立っているように感じた。

クリスは濡れるのも厭わず甲板に出て、薄靄で見えぬ水平線を眺めている。

緑の黒髪が艶やかに雨を含んで重い。

「お〜い、風邪引くよ〜」

闊達な声に振り向くと、手拭いを持ったライズが手招きしているのが見えた。

頷き、クリスは船端を離れた。

…

船は例によって、セヴァルスタ領主ヴェルンド総督に手配させたものだ。

彼は未だにセヴァルスタの領主として、諸島を治めている。

ただし、ファントム・コードから派遣された監視役がしっかりとついでいて、今までのような庄政は少しずつ改善された。

ヴェルンドにしてみれば、それしか生き延びる術がないのだ。

レインに見捨てられ、本土へ救済を求めることも出来ない。

少なくとも、ファントム・コードの人間の機嫌を取っておかねば命がない。

と、彼は切迫した思いに囚われている。

しかしライズらにしてみれば、そこまで脅したつもりはなかった。

あまり極端に統治のあり方を変えられてしまうと、彼を取り巻く臣下や兵士達に不審に思われてしまう。

あくまで自然に、少しずつ、きつかけなどなかったかのように緩やかに変わってもらわなければ。

…ファントム・コードは歴史の表舞台に出てはならない決まりなのだから。

…

船内での食事は全てライズが用意していた。

「だって自分で作るのが一番旨いし」

そう言つて、彼は厨房を借りて楽しそうに調理をしている。

クリスは食べ物の味の良し悪しなどわからないので、ライズの料理が旨いのか不味いのかもよくわかっていない。

出されたものを黙々と食べるだけだが、作つた方も別に彼の為に作つたわけでもない（自分の為だ）問題は何かないのである。

そのくせ、ライズは食事中には茶を淹れたり皿を片付けたりと、どうやら他人の世話を焼くのを好む性分らしかった。

その日の夕食どき、ライズが急に独り言を口にし出したのでクリスはキョトンと目を丸くした。

「…はい、何？」

部屋にはクリスとライズしかいない。

クリスは首を傾げて、食卓を挟んで向かいに座るライズを見た。

「…え？うん、元気っていえば元気だよ。

はい？ …え？ええ〜？」

しばらくの間、ライズは時々相づちを打ち、その後にクリスに視線を向けた。

「？」

「ごめん、クリス。

今アジトのボスと喋ってただけだよ」

「ボス……、ろいど？」

「うん、そつ。

で・さ、俺、任務入っちゃったんだよね。

だから本土に着いたら、真っ直ぐそっちに行くわ。

クリスは迎いの馬車で1人でもアジトに送ってもらえるけど、どうする？」

クリスは首を傾げた。

「ボスは仕事覚えさせるのもいいんじゃないか、って言ってるけど」

意図を汲み取り、クリスはコクンと頷いた。

「手伝ったほうがいいなら、行く」

「いいのかい？」

「しばらくお友達の顔見てないじゃない」

「安全なところにいるならいい」

そう、と言って、ライズはこの場にいない相手に向かって声を掛けた。

「行ってくて」

【姿なき預言者】

…偽りの夜空は薄く光の帯を揺らす。

ファントム・コードのアジトには昼はない。

常夜の空は、しかし完全な闇をもたらす事はない。

一面の星、オーロラ、点在して抱かれる“籠”は幾多もの月明かり。

開け放たれた天上を見上げながら、歌鳥は何度目かの感嘆の息を吐いた。

こうして、一人で夜の下で座っていると、あの日を思い出す。

こちらの世界に来る直前、
：祖母の通夜。

可愛がってもらったのに、葬式にも出られなかった。

直前に孫娘が行方知れずになって、式はつつがなく執り行われたのだろうか。

歌鳥は小さく溜め息をついた。

けれど、いずれにせよ、いつかはこちらに引き込まれる運命だったのならば、あのタイミングで良かったのかもしれない。

祖母が生きている間にこういう事になってしまっていたら、かなりややこしい事態になった気がする。

それを想像すると、いつもながら歌鳥は辟易する。

祖母を嫌っていたわけではないが、もっと周りを気にしてくれればいいのに、と歌鳥は思っていた。

いや、周りを気にした上であの振る舞いだっただが、歌鳥の気持ちも少しは汲んで欲しかった。

祖母は伯母と折り合いが悪かった。

それはどこでも起こり得る問題なので、仕方がないといえば仕方ないが、その嫁姑問題に自分を引つ張り出して欲しくなかった。

そのせいで、歌鳥と伯母の関係もこじれていた事に、祖母は気付いていたかどうか。

(自分のせいでもあるなんて思ってたんだろうな…)

自分の子供の出来が悪いから、出来のいい歌鳥を苛めている、くらいに思っていただろう。

実際、祖母は近所の人々にそういった内容の話を零していたらしい。

(…もっと皆の関係が良くなる方法があればよかったのに…)

ずっとそう思っていた。

けれど、歌鳥はその問題の当事者ではなかったので、どうしようもない。

間に入って何か出来るとも思えなかった。

何をして、何をしてこなかったのか、考えることには最早意味もない。

歌鳥はもう、あの場所には帰らない。

(…もう考えるのはやめよう…)

過ぎた事だ。もう。

頬にかかる亜麻色の髪を撫で、歌鳥は僅かに目を伏せた。

そこへ、背後からカッン、と音がして、歌鳥は振り向いた。

「よう、邪魔したか？」

「ヴィヴィちゃん」

ふわりと笑んで、歌鳥は首を振った。

エレナと同室にするか、という提案もあったのだが、結局は別々の部屋にしてもらった。

1人になりたい時もあるだろう、との互いへの配慮であった。

「隣、いいか？」

「うん」

エレナは歌鳥が腰掛けていた長椅子に並んで座った。

天井と壁がないことを除けば、ここはごく普通の部屋だ。

調度品も質素過ぎず豪華でもなく、居心地はかなりいい。

開けっ広げに過ぎる感はあるが、歌鳥はあまり気にならなかった。

隣に座ったエレナが、歌鳥に焼き菓子差し出してきた。

「もらった。食う？」

「うん。」

ありがとうございます

一口かじり、横でエレナが口を開いた。

「なあ」

「何？」

「異界って、どんな所？」

キョトンと、歌鳥はエレナを見返す。

「どうしたんですか？」

突然……」

「いや、なんとなく。」

ただの好奇心なんだけどさ……」

歌鳥は少し考える。

「どういう所……か……、

私が住んでいた所は、平和でしたよ。

戦争とか、危ない事には縁がなかったですし」

「ふうん……、

じゃあ、カトリは普通以上に色々キツかったんじゃないのか？

セナにいた時とか」

「そんな事ないですよ。

皆さん良い人ばかりだったし」

「だって、向こうでは危ない目に遭った事ないんだろ？」

「それはそうだけど…」

歌鳥は少し困ったような顔で微笑んだ。

「こちらの人達にはとても良くしてもらったから」

「あっちの人間は、優しくないのか？」

気遣わしそうな顔のエレナに、歌鳥は慌てて手を振った。

「そういう事じゃないの、ただ、ちょっといろんな事が重なって、私が周りに馴染めてなかっただけ。」

こちらでは、そういう事がなかったから。

人間は同じだと思う。

どうしたら嬉しいのか、とか、どうしたら悲しいのか、とか、そういうことは、向こうもこちらも変わらないから」

「ふん……」

エレナは僅かに首を傾げ、

「…カトリはこっちに来て良かったのか？
危ない目に遭っても？」

「うん」

「そっか」

エレナは軽く息をつく。
それを見て、歌鳥は淡く笑った。

「心配してくれたの？」

「…だって、さ。」

カトリは無理やり故郷から連れ出されてきたって事になるんだろ？

それって、どうなのかな、ってさ。

カトリはいつも笑ってたけど、本当は無理してたんじゃないか、って思ったら、なんか切なくなるじゃん」

「…ありがとう、」

私は本当に大丈夫です」

「なら、良かった」

歌鳥は微笑う。

気遣いが嬉しく、暖かい。

思わず目に涙が浮かびそうになって、歌鳥は慌てて顔を背けて、天井を眺めた。

…そこへ、男の声が降る。

『いいか？』

「ロイドさん？どござ」

歌鳥の返事の後に、上空からふわりと黒い人影が降りて来た。

ロイドは漆黒のロングコートを翻し、琥珀の瞳を向けた。

歌鳥は椅子から立ち上がり、男に向かって軽く頭を下げた。

頷き、次いでロイドは歌鳥の横のエレナを見やる。

「お前もいたか、ちょうどいい」

「何か、ありましたか？」

「ライズと連絡がついた。」

例の人探しは、結局徒労に終わったらしいな」

歌鳥の表情が曇る。

覚悟はしていたが、実際に聞かされると、やはり胸に痛い。

……それに。

「…クリスくん、大丈夫かしら…」

「…大丈夫だろ」

歌鳥の横で、エレナが小さく呟く。

「イリアスの死を乗り越えられたんだから」

「
…」

歌鳥はとりあえず頷く。

その様子を表情のない隻眼で見やり、ロイドが言葉を続けた。

「で、そのクリスだが、

ライズの任務に同行させる事になった。

こちらに来るのが、また延びたな」

「任務？」

歌鳥が少し眉を寄せながら首を傾げた。

「セドナという街で、キナ臭いことがあるらしい」

「らしい？」

「らしい、だ」

「何だ、らしい・って」

エレナの半ば呆れたような声音に軽く肩をすくめて、

「俺達の行動を決めるのはファントムだからな」

「ファントム？」

歌鳥は首を傾げる。

「ロイドさんが、その…、ボスなんですよね？
皆さん、そう呼んでいたし……」

「俺がそんな大層なモンかよ。
単に、1番歳食ってるってだけでガキ共のお守りを任されてるだけ
の話だ」

エレナが座っていた長椅子の上で体勢を向き直し、

「で、ファントムって？」

「ウチのトップだ」

歌鳥は思い当たって呟く。

「そういえばマリーちゃんが、そんな名前を口にしていました。

「この名前は、その方の名前から取ったんですね」

「まあ、多分そうなんだろうが…、

何せ、ファントムがここを創設したのは数百年も前って話だからな。

実際の所は、マリーにしかわからん」

「…、そういやスツカリスルーしちまってたんだけど、マリーっ
て何者？」

エレナの問いに、チラリと目を向けロイドが、

「ファントムの代弁者だ。

アイツだけが、創設時からいるらしい。

まあ、人間じゃないんだから、そこは別に驚くところでもねえが」

「いや、驚くトコだろ、

結局なに？

幽霊か何かなワケ？」

「んなトコじゃねえか」

「分からないんですか？」

歌鳥は小首を傾げる。

「分からんな。

第一、知る必要もない。

俺たちはファントムが示す予言に従って動けばいい」

「何者かも分かんねー奴らの言う事を聞くなんて、嫌にならないのか？」

ロイドは琥珀の隻眼を微かに細めた。

「いずれわかる。

…ファントムがどういう存在なのか」

…海をひとつ隔てただけで、風の匂いは変わる。

セヴァルスタを出航して数日後、クリスは本土の港町にいた。

降り立った埠頭、薄墨色の空を見上げて、息を吐く。

街中の賑々しい空気を感じながら、クリスは露店商と何やら言い交わすライズを見やった。

クリスより少し歳上の青年は、物慣れた様子で商店を渡り歩いて、当面の日用品や食糧を買い揃えていく。

「クリス、何か嫌いな食物とかある？」

「ない」

「そう」

すれ違う人が、時折クリスを振り返って、興味深げな視線を送る。

敵意はない視線なので、本人は気に留めていない。それを見て、隣を歩くライズが軽く苦笑した。

注目を集めているのは、クリスが担ぐ長槍だろう。

街中なので、流石に布に包んでいるが、クリスの様な小柄な少年が持ち歩いているのが問題なのである。

全身をスッポリ麻のマントで包んでおり、身体の線が見えないので見る人によっては少女だと思ったかもしれない。

そんな子が、自分の身の丈程の包みを片手で軽々と持ち直す。

隣を歩くライズが軽装な事も含めれば、一層奇異に見えたかもしれない。

もし、ここに同行していたのがグレンだったら、大層居心地の悪い思いをしただろう。

あの男は意外と周りの目というものを気にするのだ。

そう思うと、ライズは少し意地悪げな笑いが零れそうになる。

クリスが首を傾げた。

「なに？」

「何でもないよ。」

「…ああ、ここでいいか」

言って、ライズが見上げたのは、いかにも大衆向けの宿だった。

任務先の土地まで馬車で向かう段取りになっているのだが、その馬車がまだ街に到着していない。

この街は数日前ロイド達が素通りした港町で、あまり仲間内の受けが良くない。

ライズも別に好きではないが、滞在を厭うほど気になる問題点も見受けられないので、馬車の到着まで宿に泊まり込むつもりだ。

宿の良し悪しも問題にしていない。
連れもどつちやらそういった点には無頓着らしいので。

「いいよね？」

訊ねた相手は、予想通りの反応を見せる。

無言でコックリ頷く様が、やけに子供っぽい。

ライズはそれに、くすりと笑った。

*

「…クリスは、セドナって行った事あるかい？」

「ない。…と思う」

「ふうん」

「…らいずは」

「俺もない、とは思っけど……どうだったかな、
通った事くらいはあるかもしれない」

「……」

夕刻、街並みの向こうに見える水平線に陽が沈む。

寝台が2つ並んだ部屋で、ライズは窓から外を眺めながら陽気な声を出す。

「せっかくだし、屋台で夕飯食べよっかなあ、」

クリスはどつする？
「この食堂で済ます？」

クリスは首を傾けて、

「どちらでもいい」

「じゃ、一緒に行こう。
酒は飲まないよね？」

「飲まない」

ライズがケラケラと笑い、荷物から財布を出す。

「クリスはさあ」

「？」

「大人しいよね」

言われ、クリスはキョトンとしてライズを見返す。

「なにが？」

「いや、なんていうか、
からかい甲斐があるのか、ないのか……」。

まあ、面白いからいいけどさ」

クリスが首を傾げる。

……面白いと言われたのは初めてだ。

「ボスに色々聞いたけど、何かそういう風には見えないなあ」

「そういつ？」

「あの人が他人の戦い方を褒めるのは中々ないんだ。かなり腕が立つって聞いているよ。」

それに、根性？

血を吐くくらい何かを頑張る子には見えない」

「血は吐いてない」

「例えだよ、例え」

蒼穹の瞳が陽気に笑う。

「ちよつと口数が少な過ぎるから、グレンとかと馴染むのは苦労するかも」

「ぐれん」

「アイツ口下手だから。」

あと、キリエもか。

あの子はそもそも兄貴以外の人間には興味ないから、自分から歩み寄る、って事ないからなあ。

なんか君の友達も、あの子は苦手みたいだったし」

ライズの苦笑に、クリスが首を傾げ、

「ともだち？」

カトリ？エレナ？」

「両方。特にエレナちゃんかな。

キリエと喋る時、変な力オしてたよ、

初対面のときに、平手打ち食らったのもあるかも」

クリスがキョトンと目を丸くする。

そうして、改めてキリエという少女の顔を思い浮かべようとしたが、ほんの少ししか顔を合わせていなかったので、鮮明には思い出せなかった。

そう言うと、ライズは声を立てて笑った。

「キリエは結構覚えやすい顔してるんだけどなあ。

カッキリクツキリしてて。

逆に、アジトにいるキリエの兄貴の顔は覚えにくい。いい人なんだけどね。

俺の留守中、花壇の世話とか頼まれてくれるし。

レックス兄と馴染むのは、難もないだろうな。

あの人、子供好きだし」

「子ども？」

「ボスもああ見えて世話好きだからね、
キミみたいな子は放っておけなかったんだろ」

「おれ、子どもか？」

問われ、ライズは意外そうに眉を上げた。

「気に障った？」

クリスは首を振る。

僅かに目を伏せると、

「…少し前に、もう子どもじゃない、と言われたばかりだから」

「ああ、そっか。」

まあ微妙な年頃だよなぁ」

軽い調子の反応に、クリスは首を傾げた。

「そうなのか」

「思春期ってヤツだろ？」

「キミ幾つ？15くらい？」

クリスがコツクリ頷く。

正確なところは分からないが、多分そのくらいの年齢だろう。

「そのくらいの年頃は色々面倒くさいよな、

俺はその頃にはもうこんなだったけど」

「らいずは何歳なんだ？」

「俺？俺は19。」

ちなみにグレンは俺と同じ年で、
キリエは俺達の2つ下。

ボスの年齢は正確には知らないけど、40代半ばってところかな」

「ふうん……」

「…さて、お腹減ってきたし、さっさと食べて来ようか」

「え。……ああ、…」

言動のテンポが、やたらと早い青年だと思う。

ロイドと行動を共にしていた時もそうだったが、
クリスは自分が意外に他人に振り回されやすいことを自覚…は、
していない。

ただ、別に何の考えもなく大人達の後について回っているわけでは
なかった。

考えた上で、物事に頓着しない性癖ゆえに、クリスは素直で従順な
のだ。

だが本人は、そんな事すら気付いてもいない。

思ったのは、ロイドに比べて、ライズはちゃんとクリスが置いてきぼりにならぬよう心掛けてくれるらしい、という事だった。

*

…クリスとライズが滞在する宿に使いが来たのは、それから数日後の昼時の事だった。

すでに馬車が街の外に到着しているという事なので、2人で早々に荷物をまとめ、宿を引き払った。

往来を抜け、街の中心部から大分離れたところで、2頭立ての馬車を見つけた。

その御者台に座る顔を見、ライズが、おっ、という声を上げた。

「ワヤン小父」

声を掛けられた壮年の男が、ライズを見て軽く会釈する。

「珍しいな、久しぶり」

親しげなライズの声に笑って応えた男は、

「ちょうど別件でこの辺りにおりましたので。

その筋でマリー・エレメント嬢から連絡を頂いた。

ご健勝そつで何より」

と言った。

「小父も元気そうだね」

言って、ライズは後ろに控えたクリスを示す。

「これ、新入り。」

名前はクリスタル」

男が頷いた。

「聞き及んでおります」

「クリス、

こちらファントム・コードのサブメンバーで、ワヤン小父さん」

クリスが首を傾げた。

「さぶ？」

「ルビーへの耐性がない人とか、耐性はあるけど実働の任務に向かない人には、サポートに回ってもらうんだ」

クリスはワヤンを見、次いでライズを見て、コクリと頷いた。

*

山間に車輪と馬蹄の音が響く。

3人の乗る馬車は、幌を被せただけの簡素な代物で、御者台のワヤンとは容易く顔を合わせていられた。

「ワヤン小父は、セドナで何があるのか聞いてる？」

ライズの問いかけに、男が首だけで振り向き、

「いえ、詳しい事は。」

「マリーエレメント嬢は何も？」

と尋ね返した。

それに対してライズが軽く肩をすくめる。

「俺はマリーじゃなくて、ボスから指令を受けてるから。」

「でも、まあ、あんまり大きな任務でもないのかな、
たった2人で行かされるって事は」

「…先日は、レイン＝ナイトメアと遭遇したと聞きましたが」

「ああ」

ライズは、ちら、と馬車の中で横になって寝息をたてているクリスを見やった。

行動を共にするようになってから半月近く、

この少年はどつやら寝るのが好きらしい。

「……ライズ殿、

ファントムはセヴァルスタでルビーが使われることを予知しておられたのでござるつか」

「いや、そこまでは知らなかったんじゃないか？」

実働メンバーを総動員するくらいだから、大きな出来事になる事は分かっていたと思うけど。

ボスを出してきたタイミングから考えると、ルビーの発動が分かったのは、かなりギリギリの時だったんだと思うよ。

どこかでズレが生まれてたんだろう。

歴史の修正は、中々現実に追いついて来れないものらしいから」

ワヤンが微かに苦笑して、

「……予知を外す為に予言をする予言者は、ファントムくらいでござろうな」

と零した。

「きつと歴史上でもいないだろうね。

ファントムは自分をお持ちでないから」

…その部屋は関係者には“碑石の間”と呼ばれている。

初めて歌鳥がファントム・コードのアジトに入った時、マリーエレメントに連れられた円形劇場のような場所である。

幕の外で零れ落ちてゆく、文字の羅列が煌めく。

そこに、漆黒の装いをした男が訪れていた。

迎えた少女は、宙を泳ぎながらロイドを見下ろし微笑った。

「修正は済んだか」

『いいえ、まだよ』

「不確かなままでは困る。

…… 前回みたいなのは御免だ」

人ならざる少女が、小さく首を傾げた。

『セヴァルスタでのことを言っているの？

あれは確かに不測の事態だったわね。

ルビーが初めて使われる地はあそこではなかった筈だし、
時期ももう少し先の筈だったのよ』

ロイドが軽く片眉を上げ、

「過ぎた事ならば聞いても障りはあるまい、

本来の歴史では、ルビーは何時、何処で、初めて使用される筈だった？」

その問いに振り向いたマリーの赤いスカートの裾が、くると回って傘の様に広がった。

その唇が機械的に動く。

『聖地ヴァナディースよ』

「…なに？」

ロイドが眉をひそめた。

マリーは続ける。

『時期は今年の晩秋』

「……近々、それが現実になる可能性はないのか」

『修正中よ、まだ分からないわ。』

ただ聖地ヴァナディースの場合は、攻め落とされはしなかったの。

あそこは天然の要塞でしょう？

生き残った数百人で、援軍が来るまで持ちこたえる事が出来たのよ』

「という事は、セナの時と同様、ルビーで一次的損害を与え、次いで軍隊で追い討ちを凶ったわけか。」

攻め込んだのはバルカシオン派の勢力か」

『そう。』

セナの時とは事情がかなり異なるけれど』

「……という事は、レインはやはりバルカシオンと手を組んでいる……」

黒手袋の指を顎に当てて、ロイドが琥珀色の隻眼を伏せた。

マリーは闇の天井を仰ぐ。

『状況を見たならば、そう考えるのが妥当ね』

「なら、帝都に網を張れば奴の尻尾も掴めるのではないか？」

マリーは表情を変えぬまま首を傾げる。

『リスクが高過ぎるわ。』

規模が小さかったとはいえ、ルビーの完成が予定より早まったのよ。ならば他にも完成品があつておかしくない。

万が一レイン・ナイトメアを捕捉出来たとしても、追い詰めてセナの時のような事態になつては大事だわ。

大都市でルビーを発動させられたら、被害は前回の比ではないわよ。ルビーへの対処策が万全になるまでは、積極的に彼との接触を求めべきではないわ。

帝都にいるかもしれないなんて可能性は、他のメンバーにも伝えな
いで』

ロイドが肩をすくめ、

「俺が何か言わないでも、薄々は感付いてるだろ」

と答えた。

「分かった所で、考えなしに突っ走る馬鹿共ではない筈だ」

『感情は不確実なもの』

マリーエレメントの紅玉の瞳が煌めく。

『その不確実さが、歴史の軸を狂わせてきたの』

「説教なら、子供の姿を改めてからにしてくれ。
素直に聞く気が失せる」

ロイドの半ば辟易するような声音を意に介さぬ様子で、マリーはふわりと浮かび上がる。

円形劇場のステージ上を浮遊する少女を見ながら、壇下からロイドが訊ねる。

「…これはただの好奇心なんだが、

本来ならばセヴァルスタではルビーは使われなかった筈なんだな？

ということとは、軸の歴史ではセヴァルスタの反乱軍はまだ健在しているわけか」

『健在も何も、存在していないわ。』

過去も未来も、セヴァルスタで内乱は起こらない』

ロイドが軽く眉を上げる。

「…ほう?」

ロイドの脳裏に、やたらとあどけない赤紫の眼の少年の顔が浮かんだ。

「あのガキの育て親は動かなかったのか」

『そもそもイリアスⅡマツクールはセヴァルスタに渡っていない。

だから、セヴァルスタでは義勇軍が組織されなかったの』

ロイドが首を傾げる。

「……と、いうと?」

マリーが僅かに首を傾けてロイドを見下ろし、零れ落ちる文字の羅列の一部を指で指し示した。

ロイドはそれを目で追い、そして目を見開いた。

「おい……」

ロイドが少なからず動揺したのを見、マリーは頷く。

『この歴史の修正は容易ではないわ。

だから時間がかかっているの。

理解してもらえる?』

ロイドは複雑な色を隻眼に浮かべ、そして頷いた。

小さく、溜め息を吐いた。

…

【5】PHANTOM CODE（後書き）

さつき外出してきたら、CDショップに入った瞬間に警報器が鳴りました。

入った瞬間に、です。

何も盗んでないです。

入った瞬間なので。

だから見ないで〜。

……しょうもない話から始まりました。

ちなみに借りてきたのは柴咲コウのアルバムとUVERworldのシングルです。

五木はもっぱらレンタル派なので。

今回のお話は歌鳥たちに対するオリエンテーションみたいなものでしょうか。

では、次回。

おまけ登場人物設定

【ロイド＝オートリンク】

ファントム・コード 司令

42歳 / 198cm / AB型

黒髪 / 琥珀の隻眼 / 眼帯

豪放 / 横柄 / リーダーシップ / 偉丈夫

【ライズ＝ブロッサム】

ファントム・コード 実働

19歳 / 173cm / B型

夕陽色の髪 / 蒼穹の瞳

気さく / 気まぐれ / 虚無主義 / 器用

ライズのイメージソングは『BUMP OF CHICKEN』の『ハルジオン』もしくは『アルエ』です。
このアーティストも大好きでよく聴きます。

ロイドは…何だろう…。

まだ見つかりません。

大好きなパンクロック系の曲が似合うとしたらこの人でしょう。

キャラのイメージに近い曲があると、その人物がメインの話とか考えやすいし考えてて楽しいんですね。

【6】白い血の民

　　脛の下で渴きゆく海に
　　逆巻く血潮が声を枯らす
　　打ち棄てられたと哭く鷗
　　仰け反る背には翼は咲かぬ

（ …… 貴方の願いは当然のものです ）

…… その男はそう言った。

（ 裏切ったのは秩序の方なのですから ）

その、どこか甘やかでさえある声で。

（ …… そうでしょう？ ）

…… ああ、そうだ。

だから、こちらが背く事に何の躊躇が要るだろう。

【調和せざるもの】

…振動の変わる感触がして、クリスは寝呆けながら身を起こした。

さほど広くはない馬車の中、連れの青年は御者台の男と話し込んでおり、こちらに背中を向けている。

クリスは幌を上げ、ひよこ、と外を覗いた。

蒼穹の空。

こちらの雨季は過ぎ、夏に向かって日差しが鋭い。

石と砂利の山道を抜け出て、それなりに整えられた公道に入ったことで車輪の感触が変わったのだと分かった。

草の繁る平原は起伏が小さく、毛を刈り取られたばかりの羊達が放牧されているのが見えた。

青々とした匂いが風に運ばれてきて、クリスの黒緑の髪を揺らす。

ぼんやりとしていたところに、ライズの闊達な声が掛かる。

「おはよ、クリス」

クリスは少し目を丸くして首を傾けた。

ちよっとした昼寝のつもりだったのだが、おはよう、と言われるほど眠っていたのだろうか。

ライズはクスクスと笑う。

少しばかりの揶揄を込めただけに、随分可愛らしい反応をするものだ、と思っていた。

グレンとは違う意味でからかい甲斐がある。

「もうすぐ着くつてさ、

お腹空いてない？」

「ない」

そう、と言って、ライズは再び御者台に座る壮年の男に向き直った。

男はライズの方に振り向いて、少し申し訳なさそうな色を眼に浮かべ、

「先ほど申し上げた通り、私は目的地のセドナまでは一緒に出来ませぬ。

お2人をお送りした後は、別の用事に」

「OK、それ、マリーには伝わってるんでしょ？」

ワヤン小父。

なら俺達の帰りの足は、あの娘がどうにかしてくれてるさ」

ワヤンは頷いて、その後にクリスの方に視線を向けて一礼した。

「お気をつけて」

クリスは首を傾げたが、とりあえず小さく会釈を返した。

ワヤンが僅かに目を細めてクリスを見た。

*

セドナ地方は、牧畜を特産とする地域だ。

人間よりも、羊や山羊などの家畜の方が数が多い。

広大な牧草地帯に点在する畜舎と、それに寄り添う様にして建つ人間の家。

陽光の下、白い毛並み達を平原に放ち、羊飼いが棒を手にそれらを追う。

それが、セドナの風景だった。

峠を越え、宿場のある集落が見えたところでクリスとライズを下ろし、

ワヤンの馬車は元きた道に戻って行った。

軽く手を振ってそれを見送るライズの横で、

クリスは風に混じる匂いにふと周囲を見渡した。

「どうかした？」

というライズの声にクリスは首を振った。

「なんでもない」

気のせいか、と思い、足を進め始めたライズに続いて歩き出した。

*

家々のあちこちから、糸車を回す音がする。

開け放たれた戸口から家の中が覗き、なんともどかな歌声も聞こえてきた。

「平和だねえ……」

ライズが欠伸でもしそうな声で呟き、クリスマスもそれに頷いた。

何の問題もなさそうな村だが、なぜファントムは気に掛けたのだろうか、

とライズは首を傾げる。

通りを歩き、適当な宿を見付けて入り口をくぐった。

「泊まれる？」

ライズが出迎えに出てきた従業員に声を掛けている間、クリスマスは建物の外で立っていた。

すぐ隣に酒場があり、まだ昼間なのに、賑やかな声と酒の匂いがした。

この村に来て、初めて違和感を覚えた。

村ののどかな雰囲気こそぐわぬ野卑な響きを、その声に感じとった

からだ。

その違和感につられて、クリスはそっと、酒場の方を覗きこむ。

すると、道の向こうから歩いて来た男が、酒場のドアに手を掛けた所で

クリスに気付いて声を掛けてきた。

「どうした、入るのか」

問われ、クリスは首を振った。

男はまじまじとクリスを眺める。

クリスも男を見返し、この村の人間ではない、と判断した。

屈強な体つきや、風体を見て、兵士か何かだろうか、と思った。殺伐とした雰囲気も、この村にはそぐわない。

少しの間の後、クリスを見ていた男の目に、下品な色が浮かぶ。

「暇なら、一緒に飯でもどうだ？」

クリスは首を傾げる。

この時点で、一言クリスが言葉を発すれば、男の勘違いは解けたの
だろうが、

クリスは無言で対応してしまった。

クリスには少し疎い所があり、男の口振りから、自分が今、女だと

思われているのだという事に気付けなかった。

「な、行こうぜ」

重ねて誘われ、しかしクリスは首を振り、

男を無視して、再び道に面した窓から酒場の中を覗き込んだ。

「なんだよ、つれねえな。 ……中にいる奴らの中に知り合いでもいるのか？」

呼んできてやるうか？」

クリスは男が鬱陶しくなり、微かに眉をひそめた。

…が、この少年はもともと表情の変化に乏しく、男の目には何の変化も映らなかった。

なおもしつこく話しかけて来るその男に対して、クリスはどう対応すべきなのかさっぱり分からない。

勘違いされているという事に気付いていないことが、その状況をややこしくしていた。

その時、ライズの呼ぶ声がしたので、クリスは踵を返して、その場所から離れようとした。

その肩を、男が掴む。

「親切に声かけてやってんだろ、無視してんじゃねえよ」

明らかに苛立ちを滲ませた声を浴びせられ、クリスは一層眉間の皺

を深くして男を見上げた。

それが男の癪に障ったらしい。

男が拳を振り上げるのを見て、道を歩く村人達がギョツと息を飲んだ。

その、一瞬。

クリスが、顔に振り下ろされようとした拳を右手で打ち払い、

男の身体が払いのけられたその腕を追いかけるようにふっ飛ぶ。

さらにそれを追い、クリスは、左手に抱えていた布に包んだ槍を突き出そうとした。

その一連の動作は、まるで自然の流れであるかのように滑らかだった。

目にも止まらぬ、とはこのことだ。

しかしその一瞬を掻い潜り、クリスの腕を掴む腕があった。

「止しなさい、

こんな所で流血沙汰なんて、勘弁してよ」

振り向くと、苦笑を浮かべたライズの顔があった。

たしなめるような声の調子だったが、蒼穹の瞳に深刻な色はない。

ライズは倒れた男を見下ろす。
目を回してはいるが、さしたる怪我はないようだ。

通行人もいることだし、介抱する必要も感じなかったので、放っておくことにした。

ライズは軽く肩をすくめ、クリスの手を引いて部屋を取った宿に入った。

*

「なんだか外が騒がしかったけど、何かあったのかい？」

クリスがライズに連れられて入った宿の女将が顔を出して、訪ねた。

ライズが軽く笑う。

「連れがからまれただけ」

それを聞いて、女将が気遣わしそうにライズの後ろのクリスの顔を見た。

「まあまあ、災難だったこと、大丈夫だったかい？」

クリスが答える前に、

「大丈夫、大丈夫。」

「これでも一人前の男の子だから」

と、ライズがクリスを示してケラケラと笑う。

それを聞いて、女将が気が抜けたように軽く息を吐いた。

「あらあら…、」

まあ、危ない事には近づかないに越した事はないよ。

最近、変な連中が集まって来て、困ったもんだ」

うんざりとした風の女将の声色に、ライズが首を傾げた。

「やっぱ、ここ人間じゃなかったんだ、アイツ」

ライズもあの男に対して、クリスと同じ印象を受けたらしかった。

女将が、2人を部屋に案内しながら頷く。

「最近、国の情勢が怪しいだろ？」

この辺りでも治安が悪くなって、何かあってからじゃ遅いから、って、領主さまが雇い集めたのさ。

けど、それがどうもガラの悪い連中ばかりでね、

酒に酔って暴れたり、村の若い娘にちよっかい出したりで困ったもんだ」

「あれまあ」

「お客さん達は傭兵じゃないだろ？」

違う、と手を振り、ライズが笑う。

2階への階段を上がりながら、

「この宿にも居るの？」

その人ら

「いや、傭兵の連中は領主さまが用意なさった小屋に住んでるよ。安心しておくれね」

「そう、…よかったね」

からかい気味に、ライズがクリスの方に振り向いて笑う。

クリスは首を傾けて、とりあえずコツクリと頷いた。

よく分からないが、良かったと言うのなら良かったのだろう。

*

案内されたのは、大きな窓のある明るい部屋だった。

天気もよく、柔らかな風が入ってくる。

女将が出て行った扉を見やり、ライズが椅子に腰を下ろした。

「クリスはさあ、

反射的にやっちゃおうの？」

突然の問いかけに、クリスが首を傾げる。

「なにが」

「さっきのチンピラ。

殺そうとしてた？」

クリスはキョトンとして、ライズを見返す。

「……」

「殺したい、と思ったわけじゃないだろ？」

殺気とか、そんなものは何も感じなかったし。

なんて言うか、本当に条件反射って感じ」

少し考え込んで、クリスが頷く。

「殴られそうになった。

そう…、べつに払いのけた所までで良かったんだ、と自分でも思う。」

けど、身体が勝手に動く」

ライズが苦笑する。

「獣の本能みたいなものなのかな、勝手に動くんじゃない」

「仕方ないなら、いいのか……？」

クリスは窓際に立つ。

「ライズは、いいのか」

「何が？」

「おれが意味もなく人間を殺すのは」

「いいのか、て言われてもなあ…、別に俺は困らないし。」

第一、意味はなくはないだろう？
身を守る為だったわけだしさ。

まあ、過剰防衛だとは思っけど」

ライズが肩をすくめる。

「その反射神経があったから、キミは今日まで生き残って来られたんだろう？」

確かに、さっきの奴を殺っちゃってたら、行き過ぎだと思っけど、
実際は未遂で済んだんだしいいじゃない」

あっけらかんとしたライズの声に、クリスは1度は頷いたが、少し
後に目を伏せて俯いた。

見た目以上に、クリスは動揺している。

クリスは、戦場以外で他人に武器を向けた事は今までなかった。

イリアスに拾われ、彼に連れられて各地を旅し、
セヴァルスタにたどり着いてからは、彼の作った小さな教会で育っ

た。

その間、他人に敵意を向けられたことがなかった。

周りに同年代の友人がいなかったから、喧嘩もした事がない。

今になって思うと、もしもその頃に同じ年代の子供と一緒に過ごし、もしも喧嘩になって相手に手をあげられそうになったとしたら、

自分は今日と同じ反応をして、同じ行為をしようとしたのではないか。

そんな事を思い、クリスは暗澹たる思いに囚われる。

本当に、反射的にだった。

ライズに止められなかったら、本当に殺していたと思う。

そのつもりがなかったにも関わらず、である。

ここは戦場じゃない。

あの男は、クリスに対して敵意を見せたが、死によって返されるべき程の行為ではなかった。そのくらい、クリスにだってわかる。

(…… 正確に急所を狙えるなら、正確に外すことも出来ないか？)

イリアスの、たしなめる声が聞こえた気がした。

小さく、ため息を吐いた。

その様子を、ライズは興味深そうに眺めていた。

*

【闇夜と子ども】

…その夜。

クリスは何故だか、目を覚ました。

細く開けてある窓から流れ込む夜風の中に、なにやら胸を騒つかせる何かを感じた。

むくりと起き上がり、隣のベッドに目をやると、ライズはこちらに背を向けて眠っている。

クリスは再び窓に目を向ける。

ガラス越しに、淡い鈍色の月が見えた。

風に押されて、窓の木枠が軋む。

クリスは再び寝入る気にはならなかった。

なんだか落ち着かない。

そっと窓を開いて、クリスは静かに縁を蹴った。

少年としては小柄な身体が、小さな宿場の夜闇に舞った。

*

寝静まった通りを抜けて、クリスは集落の外れにある畜舎にたどり着いた。

中には、昼間の放牧から羊達が戻されている。

その内の数頭が、なんだかソワソワとして落ち着きがない。何か怯えているようにも見える。

クリスが近づき、その内の1頭の頭を宥めるように撫でた。

すると、羊達は少しずつ落ち着きを取り戻していく。

…クリスは実は、動物や子供にはやたらと懐かれる。

その羊に向かい、クリスは首を傾げてみせた。何かを訊ねるように。

すると羊は、何かを訴えるようにクリスの手のひらに頭を擦りつける。

クリスは頷き、その羊の首を軽く叩いて踵を返した。

畜舎の裏手に流れる川に向かい、クリスはキョトキョトと辺りを見回す。

濁いた夜風が舞う。

そこに、混じる何か、
予感のようなもの。

クリスはさわさわと騒めく胸を意識しながら、
砂利と石の川原を歩く。

何度目か視線を巡らして、クリスは闇の中に小さな人影を見つけた。

「？」

クリスは夜目が利く。

その赤紫の瞳に映ったそれは、
どうみても子供だった。

クリスは緩やかに駆け寄る。

それに気付いたのか、夜闇の中に佇んでいたその影が、
驚いたようにこちらを向いて、すぐに踵を返して走り去ろうとした。

クリスは呼び掛ける。

「待て。どうかしたのか」

持ち前の、柔らかく抑揚に欠ける声。

威圧や敵意は皆無の声音。

それにつられたか、逃げようとしていた子供
…、

12歳くらいの少女が、ゆるゆるとクリスの方を振り向いた。

ほんの少しの怯えを浮かべた視線を受け止め、

クリスは怖がらせないように小さく首を傾けた。

笑うのは苦手なので、

安心させるためには雰囲気だけでも和らげるしかなかった。

「どうかしたのか。」

こんな時間に、

親はどうした」

少女はまじまじとクリスを見つめた。

それは僅かに困惑の色を滲ませている。

「……お兄ちゃんは、

だれ？」

「クリス」

問われ、クリスは短く答えた。

少女は首を傾げる。

「クリス……」

クリスが頷き、

少女に近付いて顔を覗き込むように腰を屈めた。

不安のためか、少女の顔色はひどく悪い。

クリスは一層、声を和らげた。

「おまえは」

「わたしはシンリー」

少女がクリスの瞳を見返す。

「ラルゴの娘」

今度はクリスが首を傾げた。

「らるるじ？」

「こここの…セドナの領主」

言って、少女・シンリーは何うようにクリスを見上げた。

「クリスお兄ちゃんは、

“あれ”とは違うの？」

「？」

クリスは地面に膝を着き、

少女の顔より下に自分の顔の位置を下げた。

この姿勢で、クリスはシンリーを見上げるかたちになる。

「あれ」？

「わるいもの」

クリスが首を傾げる。

「わるいもの…？」

シンリーがこくりと頷き、クリスを観察するように見つめる。

「お兄ちゃんは、わるいもの？」

クリスは返答に困る。

「……、わからない」

「わからないの？」

頷き、クリスは視線を僅かに伏せた。

「戦争でひとを殺したりしたから、

そういう…殺した相手から見たら、わるいものだと思う」

子供相手に生真面目に答え、クリスは視線の先の自分の手を見る。

今日も、一歩間違えれば汚れていたであろう両手。

少女は俯くクリスをまじまじと見つめ、思索するように沈黙していたが、

何かに納得したように頷いた。

「……お兄ちゃんは、わるいものではなさそう」

「？」

「お兄ちゃんはこわくないもの。」

わるいものは、もっとこわいの。

だからお兄ちゃんはわるいものじゃない」

なんだか要領を得ない感じがしたが、クリスは、

「そうか」

と頷いた。

「シンリーは、ここで何をしていたんだ？」

夜にこどもが出歩くのは、よくない」

クリスの問いに、少女はふるふると首を振る。

「内緒なの」

「ないしょ？」

「お父さまとの約束なの。」

何をしているのか、誰にも言っちゃいけないの」

クリスは首を傾げ、辺りを見回した。

「父親が、近くににいるのか？」

しかし少女の返事を待つ迄もなく、

クリスは辺りに人間の匂いがない事を察知していた。

少女はクリスの予想を肯定するように首を振った。

「お父さまは、おうち。」

終わるまで戻ってはいけないの。

これも約束だから」

クリスはますます訳がわからない。

わからないが、

ふと、この少女の姿を正面にしている、何かしらの“違和感”を感じた。

クリスは改めて少女を真っ直ぐ見る。

ケイヴィンとほぼ同年だろうが、あの少年とは趣がかなり異なる。

男女という差は大きいだろうが、

それだけではない、

何か決定的な差異がある。

あどけない、その表情。

クリスはふと、その顔色を見、それが先程からまったたく変わらず蒼白なままである事に気付いた。

…そう、

言うなれば、子供らしさ……生命力の欠落。

まるで死体のように血の気がない、その頬、その肌。

クリスは微かに眉根を寄せた。

「具合でも、悪いのか」

気遣わしげな声に、少女は頷く。

「でも今は大丈夫」

その返答に、クリスが再び首を傾げる。

どうもさつきから要領を得ない。

しかし、

クリスは自分の感覚は常識的な感覚とズレているのだと認識しており、

この少女との会話の不自然さの原因がそこに（クリス自身）あるのだ、と解釈してしまった。

クリスは頷く。

理解出来ないのは、自分に他人とのコミュニケーション能力が欠けているからなのだろう。

クリスは立ち上がり、少女を見下ろして軽く肩に触れた。

「家に、おくる」

「大丈夫。」

それに、まだ駄目なの。
まだ終わってないから。

終わったら、お父さまが迎えに来てくださるから、
それまでここにいろの」

「……そうか」

クリスはとりあえず頷く。

気には掛かったが、大丈夫と言うのなら大丈夫なのだろう。

「暗いから、気をつける」

「うん、

ありがとう、お兄ちゃん」

頷き、クリスは踵を返して宿の方角に歩き出した。

しばらく歩いて振り返り、少女の姿が夜闇の中にまだあることに少しの不安を抱いたが、

当のシンリーは、クリスの視線に気付くと笑って手を振ってきた。

曖昧に手を振り返し、

クリスは歩み去る。

いつの間にか薄く雲に覆われていた空を見上げ、
騒つく感覚 … 本能を持って余っていた。

…

クリスは宿に戻った。

そこで隣のベッドに寝ているライズを見、
起こそうかどうかを思案した。

この不安の根拠は何一つない。

クリスは理屈ではなく感覚によって行動を決めるタイプの少年だったが、
他人にそれを強いることはない。

自分の不確かな感覚にライズを巻き込むのは気が引けた。

クリスは小さく息を吐く。

……とにかく、今夜はもう寝よう。

明日になったら話してみよう、
わざわざ起こしてまで訴えるようなこともない。

クリスはそう思い、
まだ自身の体温が微かに残っているベッドに戻った。

そうして浅い眠りに就くのに、それほど時間はかからなかった。

【白い血の民について】

常夜の天蓋の下、

歌鳥はレックスの畑仕事を手伝っていた。

厳密には“仕事”と言つのは正しくない。

その畑は、ライズが趣味で作っているものであり、
別にファントム・コード内の台所事情に、さして影響を与えるもの
でもないからだ。

歌鳥はトマトに似た実をつける作物に水をやりながら、少し離れた
位置で実を収穫しているレックスに目を向けた。

ボサボサのくすんだ藍色の髪。

いかにも温厚そうな顔は、同時にどこことなく冴えない印象を見る者
に与える。

キリエの兄だというが、ハッキリ言ってまったく似ていない。

風采のあがない感じだが、むしろそれが取っつきやすい人柄を前面に押し出している。

歌鳥の視線に気付き、レックスがにっこりと笑い掛けてきた。

いかにも屈託のない感じ。

歌鳥も笑い返し、じょうろを手にしたまま上体を上げた。

「ライズさんの留守の時はいつも？」

歌鳥の問いに、レックスは照れたような笑みを浮かべて、土に汚れた手で頭を掻いた。

「僕は外に出てやる仕事がないから」

「レックスさんは…」

「うん、戦えないんだ。情けないけどね」

自嘲するような言い種に、歌鳥は微笑って返す。

「それは私も同じですから…」

「僕の場合、妹が体を張ってるっていう負い目があるんだよね。

体が動かないんだから、仕方ないって言うてくれてるんだけど」

「動かない…んですか？」

歌鳥が少し表情を曇らせ、レックスは笑って頷く。

「若い頃に、ちょっと怪我をしてね。

それから、激しい運動は出来ないんだ。

キリエは…、妹は、それで僕を気遣ってくれている」

言って、レックスはその笑顔に少し困ったような色を滲ませた。

「僕に対してはとても素直でいい子なんだけど、

他の人に対してはちよつと物言いがキツかったりしてね……」

首を竦め、小さくため息を零した。

頷くわけにもいかず、歌鳥は曖昧に笑って返す。

レックスが歌鳥に向かって、困り笑顔のまま首を傾けた。

「無理には言わないけど、出来れば仲良くしてあげておくれね。

根はいい子なんだよ。

本当に」

「はい、」

歌鳥も、別にキリエを悪い子だと思っていたわけではないので、そこは頷いた。

なんとなく気圧されてしまうだけだ。

これは気性の問題だろう。

「エレナさんは、どうしても馬が合わなさそうだからなあ……。こればかりは相性だから……。」

「ヴィヴィちゃんも、別にキリエさんのことが嫌いなわけじゃないと思います。」

「うん、僕もそれはわかるんだけどね……。」

言って、レックスは表情を翳らせる。

「……やっと出来た女の子の友達を失ったばかりで、ちよつと心配なんだ。」

「え？」

いや、と言ってレックスが首を振る。

「カトリさんの友達……、クリスくん・だっけ、どんな子？ 男の子なんだよね？」

「はい。」

「ずいぶん腕が立つ、って聞いてるけど。」

そこで歌鳥が笑みを零す。

「はい。」

でも、見た目はそんな風には見えないと思います。

おとなしい、というのとはちょっと違うんですけど、なんて言うか、可愛い感じですよ」

「可愛い？」

「可愛いです。仔犬的な」

その言葉に、レックスが軽く吹き出す。

「…そう、会うのが楽しみだな。

…仔犬ねえ……」

「ライズさんと一緒に、
任務、らしいんですけど、どういう仕事をしてるのかご存知ですか？」

収穫した実を籠に積み上げながら、レックスは歌鳥の問いに顔を上げた。

「…多分“白い血の民”に関わる任務だと思う」

「白い…？」

復唱して、歌鳥はハツとして口元を押さえた。

かつて、その言葉を聞いたことがある。

あのひとの、イリアスの声で。

あの時は、その単語の意味を詳しく聞くことが出来なかったが

…

「それ、何なんですか？」

「うん、

…とりあえず向こうで座って話そうか」

レックスが、庭園の外れに置かれた椅子とテーブルを示して笑った。

*

「あれ？お茶？」

快活な声で、庭園に降りてきたエレナが、椅子に掛けたところだった歌鳥とレックスの元へ寄った。

「うん、一緒にどう？」

レックスの誘いに頷き、エレナが歌鳥の隣に座る。

テーブルに載せられた赤い実を見て、美味そう、と言い、手を伸ばした。

「あ、勝手に食ったら悪かった？」

「いいんじゃないかな、

持ち主が帰って来るのを待ってたら、食べ時を逃しそうだし。

熟してたら食べていいよ、って言われてるしね」

「ライズのか。」

「なら後で言えばいいか」

付き合いは短いが、あの青年の鷹揚さは熟知した。

エレナが機嫌良くそれを頬張り、レックスに差し出されたカップを受け取った。

先にカップを手にしていた歌鳥が、レックスが席に着くのを待つて口を開いた。

「…あの、それで、さっきの話の続きをお願いします」

ああ、と言って、レックスが顔を上げ、エレナが首を傾げた。

「何？」

「白い血の民、というものについて教えてもらう所だったんです」

エレナが、褐色の肌の顔に複雑な表情を浮かべる。

「なんだっけ、それ」

レックスが、穏やかに声を発した。

「どこから話せばいいのかな…、」

“白い血の民”というのは、民族とか種族ではなく、実際に白い血が体に流れているわけでもなくて…、

そう、話はゴーレムの起源にまでさかのぼってみようかな」

まるで教師か何かのように、人にものを教えることに慣れている風の口振りだ。

歌鳥が首を傾げる。

「ゴーレムが関係してくるんですか？」

「うん。」

…ゴーレムというのは、もともとは不老不死を求めた呪術から派生したものなんだ。

使い魔としての役割ではなくてね。

原初、ゴーレムとそれの主たる人間は一心同体の存在であり、片方が命を終えれば片方も死ぬ、運命共同体だった。

主の寿命がゴーレムの寿命だ。
通常ならば」

含みありげなレックスの言い回しに、歌鳥とエレナが顔を見合わせる。

「と、言うこと…通常でない場合が？」

うん、と言って、レックスはカップの茶を一口啜る。

「人間の寿命はせいぜい80年程度だ。」

ならば、ゴーレムの寿命が何年なのか知ってる？」

エレナが眉根を寄せる。

「人間の寿命がゴーレムの寿命なんだろう？」

「そうだね、

けどそれは言い方を変えれば、ゴーレムは固有の寿命を持たないという事だ。

もし、

ゴーレムが人間の寿命に合わせて死ぬように、人間の寿命をゴーレムの寿命に合わせる事が出来たとしたら …、

さて、どうなると思うっ？」

「どっ…って…」

歌鳥は返答に困ってエレナに視線を向ける。
それを受けて、エレナは肩をすくめた。

「んな事、出来るかどうかもわかんねーのに」

「うん、そうだね。

…ゴーレムには寿命はない。

だから、ゴーレムと本当の意味で同化することが出来れば、人間の寿命を無視する事が出来る。

ここ、ファントム・コードに所属するマリオンが持つゴーレムが原初型である事は知ってるね？

その能力に、ゴーレム化というやつがある。

聞いているかもしれないけど原初型ゴーレムのマリオンは、ゴーレム化している間は食べ物や水、睡眠を必要としない。

外からの危害が加わらない限り、決して死なないんだよ」

初耳であった。

聞いてたか、と歌鳥とエレナが互いの顔を見る。

「それって…、つまりそれが…」

「不老不死、てこと」

「不老も？」

「そう。ゴーレムに老いはない。

だから、ゴーレム化していれば、その間の時間は止まり、老いる事はない…」

その言葉に僅かにうそ寒いような感覚を覚え、歌鳥が困惑を声に滲ませる。

「つまり…その…」

ここにいるマリオンの方達は…」

いや、とレックスは首を横に振る。

「ここにいるマリオンは皆外見相応の年齢だよ」

ほっと息をついて、歌鳥はレックスを見返す。

「ちょっと安心しました」

「もし、不老不死の人間がいたら不気味？」

「え…と…、不気味というか…、……………」

「気味わりい」

エレナの言葉に、レックスが苦笑する。

「僕もそう思うよ。」

でもね、これは人によっては、すごく魅力的なオプションなんだ。

だからゴーレムの発明当初、それを求める人間は後を絶たなかったと聞く」

エレナが首をひねった。

「でも、原初型ゴーレムなんて今は全然、世間に知られてねーじゃん。」

そこまでスゲーもんなら、何で廃れちゃったんだ？」

「しばらくして、想定外の副作用が現れたんだよ」

レックスが、微かに表情を曇らせる。

「その副作用に冒された人間を、“白い血の民”と呼ぶんだ……」

…窓から射す陽光に顔を撫でられてクリスが目を覚ました時、隣のベッドにライズの姿はなかった。

瞬きして体を起こし、キョトキョトと辺りを見回すと、微かに宿の階下から聞き慣れた声が聞こえた。

ライズは既に起きだして、下で和やかに話し込んでいるようだ。

クリスは少し首を傾げた。

クリスはよく寝るが、普段の眠りは常にごく浅い。

“森の仔”時代に身に付けた習慣だった。

だから、すぐ隣で人が起き出して、身支度やらをして動く気配に気付かない程に寝入っていたなんて、
今まであまり覚えがない。

おそらくはライズがクリスを起こさないように気遣ってくれたのだろうが。

ライズの気配の殺し方が上手かったのか、

クリスの察知能力が衰えていたのか。

頭を掻き、クリスはベッドから足を下ろした。

着替えを済ませ、部屋から出て階段を降りると、先程よりも澄明に、ライズの話す声が聞こえてきた。

「…そう、それは出来た方だね」

「本当に良い方だよ、
この領主さまは」

予想通りライズの話し相手は宿の女将で、食堂に顔を出したクリスに気付いて、体ごと顔を向けてきた。

「あらあ、おはよう、
よく眠れたかい？」

こつくり頷き、クリスはライズの方に視線を向けた。

「おはよ、クリス」

「ん」

「おばちゃん、この子の朝ご飯、お願い」

「はいはい、ちょっと待っててね」

女将が奥に引っ込んで行くのを確認して、すぐそばの椅子を引き寄せたライズがそれをクリスに示す。

座れ、という意図を了解し、クリスが大人しくそれに従って腰を下ろした。

頷いたライズが向かい合う席に座り、呑気そうな色を出した。

「昨夜は遅くに、どこ行ってたの？」

その言葉に、クリスは目を丸くする。

気付いていたのか。

「起こしたか」

「いや別に。」

そこに対する文句ではないんだけど。

ただ、一人で夜に出歩くのは感心しないかな、

確かキミ“ドール”見えないんだろ？」

クリスはハタと顔を上げた。

……そうだった。

「もしこの村に“ドール”がいたら、キミ今頃攫われちゃってたかも」

「……ん、……」

…確かに、軽率だったかもしれない。

傍目にはわからないような、微かな反省の仕草を見せるクリスを微笑いながら見、

ライズは何か言おうと口を開きかけ、それを止めた。

女将が朝食を載せたトレーを持って、食堂に入ってきたからだ。

「…ま、食べなよ。」

俺は先に済ませたからさ」

*

宿は引き払わないまま、

クリスとライズは一度宿の外に出た。

クリスは昨日とは違い、体をスッポリ包むあのマントは着ていない。

体の線があらわになれば、いくらクリスが中性的な顔立ちをしていても、少女には見えない。

ライズの助言である。

“そういう勘違い”が起これると余計な面倒事を引き起こすのだという事を、

クリスはライズに教えられて初めて知ったのである。

「ずいぶん過保護に育てられたんだな」

と、半ば呆れたような声色で笑うライズに対し、

クリスは不思議そうな表情をしてみせた。

過保護、という言葉に少し違和感を覚えたが、わざわざ聞き返すほどのことでもない。

しばらく街道を歩き、村の外れの放牧区域にたどり着いたところで、ライズが足を止めた。

「この辺りでいいかな、

ここなら誰にも話を聞かれないだろう」

クリスが傍らの羊を指す。

その仕草に、ライズが声を立てて笑った。

「別にこの子たちには聞かれても構わないよ。

…さて、」

ライズは傍に立つ気の幹に背中を凭れかけた。

「俺たちは、レインで奴を追ってる訳なんだけど」

クリスは何を今更、というように首を傾げた。

まあ聞け、とライズが軽く手を振る。

「追っつて言ってもさ、

簡単な話じゃないんだよ。

わかりやすい手掛かりなんて残してくれる様な、可愛げのある連中じゃないし。

実際、ファントムの予言だけじゃ捜しきれない。

ファントムもわかりやすい言葉で予言をくれるほど親切じゃないしね。

そういう時、俺たちはまず任務先の土地で、

“人間の消失”が起こっていないかどうかを探る」

「セヴァルスタでの、

“かみ隠し”みたいなの？」

「そう。」

連中が“ルビー”を造る為にはゴーレムの …… 人間の血が必要だ。

しかもそれは、1人2人どころの話じゃない。

数万人の命を奪う兵器を造る為には、
それ相応の数が必要なんだそうさ。

だから俺たちはそういう話 …… 人間が不自然に大勢いなくなっている、って話がないかをまず探る。

まあ、連中も俺たちがそういう線から探ってくるのをわかっているから、

表立った行動はしないけどね。

アイツらは大抵、その土地の権力者とかに取り入って暗躍している。

セヴァルスタでの件は、まんまそのパターンを踏襲しているね。

山ほどの人間を穩便に集める為には、

権力という隠れ蓑があった方が都合がいいんだろう」

クリスは曖昧に頷いた。

権力、というものはクリスにはよくわからない。

だが、実際にそういうものが存在している事は知っている。

「…それで」

「ん？」

「それで、今はここで何か起こっているのか」

ああ、と言い、ライズは肩をすくめた。

「少なくとも、最近は何も村の人間は消えていない。

宿のおばちゃんにそう聞いたよ。

この地区の住民の顔触れに大きな変化はない。

「…ただ」

零すように呟いて、ライズは蒼穹の瞳を流した。

「顔触れの話をするならば、

あの傭兵たち」

クリスは首を傾げる。

「あの」

「うん。あの傭兵。」

朝、隣の酒場の主人に話を聞いて来たんだけど、あそこに入入りしている男たちはすぐに顔触れが変わるらしい。

領主が傭兵を雇い集め始めたのは半年前、

その当初から雇われている奴はもう1人もいない。

あの連中は、雇われて一月もせぬ内に辞めて行くらしいんだ。

もったいない話じゃないか？

ああいう仕事でも飽きちゃうもんなのかな。

昼間から飲んでいられるなんて、

中々いい待遇じゃない」

ライズの言葉にまじる皮肉にもクリスは気付かず、ただ頷いて素直に聞き入っている。

その様子に、ライズはふ・と息を吐いて微笑った。

一瞬だけ微笑い、

すぐにその瞳に伶俐な光が宿る。

「ファントムが気に掛けたのは恐らく“これ”だ。

ここで起きているのはあの傭兵たちの消失だろう」

ライズの断定するような声に、クリスが僅かに眉をひそめた。

「れいんが、いるのか」

「いや」

ライズが苦笑する。

「いたら話が早いんだけどね、多分いないよ。」

アイツはあんまり自分では動かないんだ。

この前みたいなのは、ほんとに稀。

実際に動き回ってるのは、アイツの弟のエツダとか、他の連中だ。

…でも、そうだな、

この村にはそういう連中もいなさそうだな」

「じゃあ“どーる”？」

ライズは再び首を振る。

「“ドール”は“ルビー”を造る上での副産物。

“ルビー”を造れるヤツがいなければ存在出来ない。」

しかも“ドール”って、
寿命はせいぜいひと月程度だからね、実は。

セヴァルスタではエツダがいたから、“ドール”を使って“ルビー”
の材料を集めていたんだらうけど、

多分、効率悪そうだから多用はしないだろう。

実際、俺が“ドール”を生で見たのは、
この前のセヴァルスタが初めてだ。

“ドール”でもない。

これは ……」

“シロ”だ。

ぽつりと零されたライズの言葉に、クリスが首を傾げた。

何か頭に引っ掛かった気がした。

「しろ」

「そう。」

… “白い血の民” ……

人間の生き血を糧にして、不老不死の肉体を維持している元・マリ
オンだ」

言って、ライズの瞳が冷ややかに光る。

クリスが眉根を寄せた表情でライズを見つめた。

「生き血…？」

「比喩みたいなもんだ。

実際は血液ってより、生氣 … 生命力に近いかな。

“シロ”にそれを奪われた人間は死ぬ」

クリスは苦いものを飲んだような顔色のまま、

「…マリオンは、人間だろう」

と問う。

ライズは頷いた。

「人間だね。

俺もマリオンで、人間だ。

ただ“白い血の民”になっちゃおうと、

“人間”という枠組みから外れざるを得ない。

寿命も何もかも、

生き物としての生命維持のシステムが根本から変わっちゃおうんだ」

クリスは困惑しているようだった。

クリスは常識に欠ける所があるが、

今のこの困惑は人間としての感覚以前に、

生き物としての価値観から生じたものだった。

クリスはライズの話の頭の中でもう一度反芻する。

人間が変異する。

やはり、あまりピンと来ない。

クリスは困ったようにライズを見た。

ライズがクリスの言葉を待たずに頷く。

「“白い血の民”は人類の歴史上最大のタブーだ。

不老不死 …、

他者を犠牲にしてもそれを欲しがる人間は、星の数ほど在るだろう。

あらゆる歴史の記録から、その存在は削除され隠匿されてきた。

当たり前前に生きてきた人間なら、何も知らなくて当然だし、簡単に受け入れられなくて当たり前だよ」

クリスはライズの鷹揚な笑みを見返す。

「どうして、そうなってしまっただ？」

人間が、どうしてそんなものになってしまう？」

ライズはどこか憂いを帯びた視線を伏せた。

「ゴーレム化 …、

あれを利用すれば、人間の寿命を超越出来る。

先人達はそう考えた。

それは一面では正しかったのだけれど、見通しが甘かったんだ。

確かに、ゴーレム化したまま本来の寿命を乗り越えた者が現れた。

本来ならばとつくに老い衰えて倒れている筈の年齢を越えて、ね。

けれど、駄目なんだ。

人間としての寿命を終えた時、

そのゴーレム達の体内では生きながら屍毒が生じたという」

クリスが首を傾げる。

ライズが皮肉げに笑った。

「本来ならば、ゴーレムの毒はゴーレムが死ななければ発生しない。

主が死んだだけなら、ただ暴走するだけ …

… まあ、それも結構な問題なんだけど、

ゴーレムが死なない限りは起こらない筈の現象がそのマリオン達に起こった。

その体内で発生した毒は、ゴーレムと同化していた主をも蝕んだ。

そのマリオンは、確かに食物や睡眠を必要としないが、代わりに

…」

「生き血？」

ライズが何に対してか嘲笑した。

「そう」

クリスは複雑な表情のまま、緩く頷く。

「“シロ”の餌食になった人間の肉体は紅い砂に変ずる。

これは“シロ”が獲物を仕留める時にその毒が犠牲者の体内に入っ
てしまい、感染するからだ。

ルビーの毒とまったく同じ症状だね。

そして、その“シロ”の中に流れる血からも“ルビー”の材料は採
取できる。

連中が“ルビー”の材料を集めるときには、
“ドール”よりもこちらの方を手段とするケースが多い。

というか、俺が今まで関わった任務はほぼソレ」

それを聞き、クリスがライズに問い掛けるように首を傾けた。

「その“シロ”が、この辺りにいるのか」

「いるねえ。」

おそらく領主さまとやらの近親者だ」

クリスは赤紫の瞳を見開いて、ライズの涼しげな顔を見返す。

「…なぜ？」

「言っただろう？」

今回の犠牲者は、おそらく領主が集めている傭兵たちだ。

こんなへんぴで平和な地域に、なんでそんなイキナリ兵力が必要なんだい？

ここ周辺で盗賊が現れたとか、すぐ近くで紛争が起きたとか言うなら、自然な流れだろうさ。

けれど、宿のおばちゃんやこの辺りの住民に聞いてみた結果、そういう具体的なキツカケは何もなかったらしい。

なんの前触れもなく、ただ突然集め出したんだ。

…多分、領主は“シロ”を養う為に集め出したんだろう」

「セヴァルスタの総督が、るびーの材料に領地の人間を集めてたみたいにな？」

ライズの瞳がクリスに向かってちらりと光る。

「まあ、近いかな。

ただ、セヴァルスタの総督さまとは違って、

こちらの領主さまは領民にとっても慕われている方だそうだよ」

ライズは低く笑った。

「 …… まあ、要らぬ情報だな。

クリス。

これからの事を説明するから、よく聞 …… 」

そこで、ライズは初めてクリスの様子がいつもと違うことに気付いた。

「クリス？」

「 …… シンリー」

呟くクリスの顔色が悪い。

「なに？ シンリーって」

ライズがクリスの顔を覗き込んで、
怪訝そうに首を傾げた。

…

*

【良心と天秤】

なだらかな丘陵の上、
その邸は建っている。

セドナの領主の住むその邸は、例えばセヴァルスタ領の総督府に比べれば遙かに小さく質素だ。

領主というよりも、村長と言った方がじっくりくるかもしれない。その男は。

セドナの領主はラルゴという中年の男だ。

中肉中背よりやや痩せぎすで、穏和な顔立ちはどこか疲労を滲ませている。

この日、領主の邸を訪れていた村人たちの目にはそう見えた。

邸の迎賓室に集まった面々は、宿場周辺の地区をまとめる重役的な立場にいる男達だった。

「なんとかして頂けませんかね、領主さま。
あの連中の事ですよ」

それは陳情であり、苦情だった。

“あの連中”とは説明するまでもなく、当然、領主が雇い集めた傭兵たちのことだ。

「昼間っから飲んだくれるばかりで、何の役にも立ちやしない」

「この前なんて、うちの倅が因縁つけられて、危うく鼻をへし折られる所だったんだ」

「戦なんて、そうそうこの辺りでは起きないでしょう、傭兵なんて雇う必要があるのかい」

「第一、あのヤクザどもにあんたが払っている金は、もともとは俺達が払っている税金じゃないか」

最後の男は、鼻息が荒い。

彼は続けて罵るように言葉を吐いた。

そういつた半ば雑言にも近い言葉の数々を受け止めている男は、淡々として視線を返した。

「聞き及んでいるとも。

済まないと思っている。

素行が著しく悪い者には、早々に出て行ってもらっているよ、だから少しでも辛抱してはくれないかね、

今のこの国の状態じゃあ、もしもの時にお上の庇護はあてにならないだろう、

各地で治安が乱れて、小さな村が次々と盗賊やらに襲われているらしいという話を聞くと、私や不安で仕方ないんだよ」

痛々しい表情でそう言って、ラルゴは目を伏せ、頭を下げた。

セドナの人間は、本来なら穏やかな気性の傾向があり、このように苦情を訴えに押し掛けてくる事はごく稀だ。

ラルゴはその最たる例だった。

慈愛深い領主 …。

頭を下げられて、村人達は少し怯んだ。

現状に対する不満も強いが、今までの善政への恩が勝る。

渋々といった様子で退室しながら、その内の1人が気遣わしげに振り向いた。

「でもね領主さま、

あんな連中に邸を出入りさせていたら、

お嬢様の教育にもよくないんじゃないんですかい」

その言葉に、ラルゴの瞳に胸を打たれたような色がよぎった。

半ば呻くような声色で、

「気にかけてくれて、ありがとうよ……」

と呟いた。

…

*

「 ……ふうん……」

クリスから話を聞いたライズの様子は苦い。

「その子、

どんな娘だった？」

「どんな…？」

「真っ白い顔してなかったかい。

色白ってより、むしろ蠟のような …、
屍体のような」

クリスは目を見開き、かなり躊躇った後に頷いた。

「そうか……」

ライズが軽く天を仰ぐ。

クリスは“その言葉”が返って来ないことを願った。

しかし、現実にはそれは叶わなかった。

…予想と違わずに。

ライズの低い呟きが聞こえた。

「 ……その娘が、

“シロ”だな……」

微かに、本当に微かにクリスの肩が震えた。

ライズにとっても喜ばしくない展開だった。

(そついう接触をしちゃったか……)

ライズの沈黙に、クリスが小さく声を零した。

「…どう、するんだ?…」

ライズがちらとクリスを見る。

「どづつて?」

「あのこどもが…、
シンリーが“シロ”で、
だったらどづするんだ?」

ライズがわざとらしく肩をすくめた。

「“ドール”と同じか」

「“どーる”……」

「…消すしか、ないよ」

今度ははっきりと、クリスが肩を揺らした。

「……消す、……」

それは、

茫然と黙りこくってしまったクリスを横目に見て、
ライズは小さく溜め息を吐いた。

出来れば、任務の対象との接触は極力避けさせたかった。

一度人間として認識してしまえば、
その後の“処理”に支障が出る。

この少年は人間を殺す事に慣れてはいるようだが、
どうも意味が違う。

クリスは敵意を持たない。

ただ反射的に、向けられた敵意を返す事でのみ積み重ねられてきた
殺戮。

自発的な敵意や戦意を持ったことはないのだろう。

だからこそ。

「…今回は、いいよ」

「？」

「巡り合わせが悪かった。

今回はキミは何もしなくていいや。

俺が1人で行ってくるから、

キミはここで待ってなよ」

それは、労りの意思を示していた。

クリスはまじまじとライズを見る。

そして弱々しくではあるが、はつきりと首を横に振った。

「いく」

「やめておきな。」

初めての任務としては、
あまり良い条件じゃない。

キミ、本当に大丈夫かい？

一度だけとはいえ友好的に話をした相手を、
つまり、殺す、ってことになるんだよ？」

ライズの視線は木漏れ日の下でもはつきりと濃い。

クリスはそれを受け止めながら、赤紫の瞳を僅かに伏せた。

「…ごどもを、殺したことはない」

「だろうね」

「殺すのは…、いやだ。」

でも、仕方ないってことはわかる。

今あのこどもをなんとかしないと、

あの男たちが殺されて、

そして“るびー”が出来上がってしまうんだな」

「そうだよ」

「なら …」

ライズが柔らかく声を掛ける。

「仕方のない事だ。」

けれどキミがそれに加わるのは、仕方のない事じゃない。

俺1人でも出来る事だ。

避けたっていいんだよ、

新入りの内は、庇ってもらっていいんだ。

もっと条件のいい時に参加してみよう。

今回はキミには酷だ」

「だから」

ライズの気遣う声にクリスは首を振る。

「だから…いく」

「クリス？」

「いやなことだ。」

けれど……」

クリスは思い出す。

昨夜の、あの少女のあどけない笑み。

「…この目で見ないほうが、きっとずっと辛い」

他人に任せ、

その結末を想像し続ける方が。

クリスの不安を汲み取り、ライズは僅かに蒼穹の目を細めた。

「そう。」

…キミは強い子だな」

零れた笑みは、何故だか自嘲の色さえ帯びていた。

ライズはふわりとクリスを見る。

「本番中は、俺の指示に従うこと。」

ただし、辛かったら無理はしなくていい。

いいね？」

クリスは子供染みた仕草でこっくりと頷く。

「ありがとう」

「いや、

こっちこそ、なんか悪かったね。

入ってまだ間もない子に、色々背負わせたみたいで」

クリスは無言で首を振る。

こちらが懸念していた程の負担は感じていなさそうだったが、それがライズには何となく心許なかった。

一概に測れない真意。

もしかしたら、周囲が思うよりも脆いかもしれないが、それすら判然としない、

…いくなれば、

“得体の知れなさ”。

(悪い子ではないんだけど…、
扱いにくいかもしれないな………)

今後は気を付けた方がいいだろう。

この少年に。

【L i m i t】

陽が落ちて、
領主ラルゴの屋敷に明かりが灯る。

宵闇に包まれた平原に点在する民家の明かりは、
地上に斑らな星空を写したかのよう。

実際、今夜の空は千切られたような雲がいくつも泳ぎ、
月と星の光を所々隠している。

自室の窓辺に佇んでいた領主ラルゴは、
落ち着きなくそこから見える夜の村を見ていた。

正確には自身の屋敷が建つ丘の下、
雇い集めた傭兵たちを住まわせている小屋を。

…そこへノックの音がする。

「旦那さま」

顔を出した老執事を見、
ラルゴが憔悴しきった目を伏せた。

「時間か……」

「はい……」

返事をした方も、疲れきっていた。
覇気のない声を漏らしてうなだれる。

ラルゴが一步踏み出した。

「シンリーを呼んでくる。
そろそろ起きだしているだろう。」

お前はいつも通り……」

いいさして、ラルゴはハタと顔を上げた。

「今……」

何か、音が。

そしてその後、
小さく悲鳴が。

…幼い、悲鳴が。

ラルゴの顔色が変わる。

「……シンリー!?!」

*

傭兵たちの耳にも、それは届いた。

未だ酒場から戻って来ていない者も多かったが、
小屋にいた者、
屋敷で警備にっていた者達が、
音の出どころを求めて走り出す。

元々この屋敷にいた衛兵達は悲鳴の主を即座に断定し、その少女の部屋に向かっていた。

「お嬢様！！」

彼らが部屋に飛び込んだ時、

その部屋には散乱した窓ガラス、裂けたカーテン。

倒れ伏す、小さな体。

そして、

大きな出窓に、月を背景に立つ人影。

“彼”が口を開く。

「時間だ」

その足が窓の縁を蹴り、

倒れこんだままの少女の傍らに降り立つ。

駆け付けた衛兵達が少女を守ろうと走り寄るが、

侵入者は事もなげに視線を寄越しただけで、

避ける動作も身を守る動作も見せない。

ただ膝を着き、シンリーの頭に手を伸ばす。

…その時、

1羽の蝶が舞う。

「！！！！」

男の顔色が変わり、弾かれたように飛び退いた。

殺到していた衛兵達が慌ててその手と足を止める。

蹲るシンリーに駆け寄って、その無事を確認した。

窓辺にまで飛びすさった男は、

小さく舌打ちして部屋の空白に向かって声を発した。

「もう来てたのかよ、

ファントム・コード」

「…シンリー！！」

そこへ、血相を変えて領主ラルゴが飛び込んで来た。

「シンリー！！」

ああっ、大丈夫か！？」

父親の声に、少女は放心したように虚ろな目を上げた。

「…お父さま」

「ああ、よかった、

怪我はないかい、

一体何が…」

言って、向けた視線の先に立つ男の姿を見、ラルゴは身を固くした。

男は嘲る色を隠しめせず、口の端を上げて笑う。

「怪我、ねえ。」

何かのジョークか？

その娘はもう ……」

「やめる！！！！」

ラルゴが叫ぶ。

それに呼応したかのように、

その部屋の既に割られていた窓 ……、

男が立つ背後の窓から、

2つの影が舞い躍るように飛び込んできた。

「わああっ!?!」

「今度は何だよ!?!」

驚愕と困惑の声が次々に上がる。

男は再び床を蹴り、部屋の隅に身を寄せた。

飛び込んで来た新たな侵入者の1人が、着地の時に伏せた顔を上げた。

その顔を見て、幼い声上がる。

「お兄ちゃん！」

呼び掛けられた少年は、
ひどく複雑そうな表情をしていた。

「……シンリー……」

その横で既に体勢を整え、一分の隙もなく立っていたライズが、
部屋を見渡して“彼”に目を留めた。

発した声は、凍み入る程に低く寒い。

「シグマ＝ラメッド」

「“夜胡蝶”」

「初対面だな」

「話には聞いている」

甚だ非友好的な会話は、
傍から見たら成り立っていないようにも見えたくも見えないが、
当人同士にはそれで充分、必要な確認を済ませることが出来た。

「…聞いてたよりも優男だな」

「誰に聞いたの、エツダ？」

どつせ悪口言っただけだからなんだろうけど」

「…軽口が多いってのは、話通りだな」

言っただけ、彼 … シグマはちらとクリスの方を見た。

「そっちは …、

知らねえな…、

新入りか？

まあいいや…、

関係ねえ…」

怠そうに頭を掻き、

シグマは領主ラルゴの腕の中で怯えきった少女に視線を向ける。

それに気づき、ラルゴが娘を抱く腕に力を込めた。

事情がわからぬなりに、

衛兵、傭兵らがその父娘の前に立ちふさがる。

「あ…、

面倒くせえなあ…、

さっさと“回収”だけして帰るつもりだったのによあ…」

クリスは、ライズの横顔を見る。

それに横目で頷いたライズが、目の前の男を指し示した。

「レインの仲間だ。」

結構な古株だな」

クリスはその言葉に頷いた、

……が、

その言葉に、ひどく動揺した人物がいた。

領主ラルゴである。

「…レ…イン…?」

驚愕の色を一面に浮かべた父親の顔を見上げ、
シンリーはその蒼白の顔をさらに青ざめさせる。

「お父さま？」

どうなさったの？

あの人はなに？

レインって、誰？」

あどけない口調の問いに、ラルゴは返答に窮した。

望まれぬ代弁を、シグマと呼ばれた男が始める。

「レインはお前の新しい“お父さま”さ、
オジヨーちゃん。」

お前に命を与え、

生きる術を与えたわけだから」

シンリーは怯えの表情に怪訝の色を混じえ、その男と父親の顔を見比べた。

「どろいという意味なの、お父さま？」

居合わせた兵達も、困惑したように動けずにいる。

呻くように、ラルゴが口を開いた。

「…やめてくれ……」

「なんだ？」

まさか当人にも話してなかったのか、

それでどうやって食わせたんだ？」

「やめてくれ……、

お願いだ……」

「…ハ」

吐き捨てて、シグマはライズ達に目を向けた。

外では空を覆っていた雲が途切れたのか、

細い月明かりが部屋に射し込み、そこに居る人々の顔を照らした。

その時に初めて、クリスはシグマの顔を、

光に当たったシグマの顔を見た。

…白蠟の肌。

この男も …！

クリスがライズの顔を見、ライズがその視線に頷いて返す。

苦々しい表情が、赤紫の瞳に浮かんだ。

クリス達とシグマの視線が噛み合った瞬間、

ラルゴがシンリーを抱き抱えて部屋から飛び出した。

「!?!」

「旦那さま!!」

あっけにとられてそれを見送ったのが数人、

慌ててその後を追い（おそらく職務を果たそうと）その後ろを守る

ように続いたのが数人 …、

そして、

「おいおい」

と呟き、億劫そうにそれを見送ったのが1人。

その呟いた男の動向を警戒したために、動かなかったのが2人。

「あゝあ……、
面倒くせえなあ……」

「なら、帰れば」

ライズが冷えた微笑を瞳に浮かべて、
顔をしかめたシグマを見やる。

「後は俺達が引き受けてあげるから」

「やめておくわ。」

面倒だが、これをやらんとナイトメアに義理が立たないんでね」

シグマが足に力を込めた、その一瞬。

駆け出そうとしたシグマの目の前にライズが躍り出、
その頭上に踵を落とそうと足を振り上げていた。

それを右腕で受け止めた男の表情が歪む。

衝突の瞬間、

鈴の叩かれる様な音と閃光が弾き出された。

(……?)

クリズが見たのは、
ライズの手足を覆った淡い光の膜。

あれは何だろう。

一瞬ポカンとその様を見守ったクリスが我に返って、
開け放たれたままの部屋の扉を見た。

…ラルゴとシンリーが出て行った扉を。

(…追わないと…)

束の間の、俊巡。

何かに引っ張られているかのように動きを引き止められる足を叱咤
して、

クリスは担いでいた長槍の布包みを解きながら走り出した。

ライズが内心に苦渋の思いを抱えたまま、
クリスの背中を見送った。

まさか、こんな展開になるとは。

ライズは打撃と蹴撃を駆使しながら、
シグマの顔色を探る。

「“回収”って言ったけど、
ずいぶんタイミングが早いんじゃないかい？

あの娘が血を集め始めたのは、せいぜい半年前だろう？

ノルマ到達ってのがまだの筈じゃないの？」

面白くもなさそうに、シグマが息を吐き捨てた。

「新システム導入なんだとさ」

「新システム、ねえ」

この先は企業秘密だ、
と言って、シグマは鬱陶しそうにライズの攻撃を捌いていく。

ライズは短く舌打ちする。

出来れば、この男の相手をする時間は長引かせたくない。

ろくな事にならないのだ、
想定外の出来事というのは。

しかし。

「あんまり時間かけてらんねえんだよ、
お坊っちゃん」

シグマの瞳が一瞬だけ鋭く光る。

ライズの攻撃を掻い潜り、突き出されたシグマの拳が目の前の青年
の鳩尾に打ち込まれた。

「…………ツ…………！」

ライズが呻き、膝を着く。

さらに追い打ちをかけ、伏せたライズの顔をシグマの靴が蹴り上げた。

仰け反り、ライズの体が吹っ飛ぶ。

それ以上は、シグマはしなかった。

踵を返し、クリスが出て行った扉に駆ける。

正確には、ラルゴとシンリーが出て行った扉に。

「…ち…っ……………」

ライズが切れた唇の端の血と、

突かれた胃から僅かに逆流してきた苦いものを吐き捨てた。

よろけ、立ち上がりながらもその間に息を整える。

(くそ…、油断したつもりはなかったんだけどな…、

流石は先代を殺した男…)

「……………クリス…！」

ライズが痛々しく呟いた。

*

…ラルゴは足を縛れさせながら、娘をその腕に抱えて廊下を駆ける。

不安そうな表情をその顔に張りつけたまま、シンリーが声を上げた。

「お父さま」

「大丈夫だ、大丈夫…、

大丈夫………」

誰に言い聞かせているのか、大丈夫、と繰り返す。

…奪われてなるものか、

今度こそ…、

しかしその時、おぼつかなかったラルゴの足がついに崩れた。

転倒しながらも、その腕はシンリーを放さない。

少女が短く悲鳴を上げ、

後に続いて走っていた兵達が慌てて主に駆け寄る。

「旦那さま！」

「だ、大丈夫だ」

兵の1人が、ラルゴの腕の少女を引き受けようと手を伸ばした。

その兵は屋敷付きの兵ではなく、

最近になって雇われた傭兵の1人だった。

それに気付いたシンリーがハッと息を飲み、

さらにラルゴが悲鳴染みた声を上げた。

「駄目だ！シンリー！！」

「触らないで！！」

シンリーが叫び、伸びてきた男の腕を噛む。

男は驚いて手を引っ込めた …、

が、遅かった。

「な、なんだよコレえ！？」

狼狽と、さらにそれは恐怖の叫びだった。

噛まれた傷、

そこから彼の腕は“紅い砂”に変じていく。

当人は恐慌し、

周囲は愕然として、

言葉もなくその現象を見つめた。

見つめる、しかなかった。

ドサ、と音を立て、男の手の先が落ちた。

床に落ちた指は、まだその現象を進行させたまま。

数秒おいて、完全に粒子になって崩れた。

そして、その指の持ち主の体も同様だった。

腕から肩へ、砂に侵食されていく …

「嘘だろ、嘘だ、

こんなの！こんな …、

い、いやだ！！

誰か助けてくれよ！

誰か！誰か！

だれ …」

砂化が喉にまで達し、男はその声と呼吸を失う。

その間に彼は、

父親の腕に抱かれたままで自分を凝視する“それ”を見、

「…ばけもの …」

…その一言を絞りだして息絶えた。

男の首が落ちる。

それを合図に、茫然自失として顛末を見ていた兵士達がパニックを起こしたように声を上げた。

複雑な、恐怖とも忌避とも拒絶ともつかぬ視線が、その少女の姿をした“それ”に向けられた。

領主ラルゴは顔色を失っている。

シンリーはというと、むしろ不思議そうな表情をしていた。

「お父さま」

見上げ、言う。

「どうしたの、お父さま。」

どうして皆、そんな顔をしているの」

…その時、

足音が1人分。

「…！」

お兄ちゃん」

駆け付けたクリスは、シンリーの呼び掛けに応える事も出来ず、床に散らばったその砂に目を奪われた。

クリスにとっては、

悪夢のひとかけら。

血の匂い。

乾ききっているくせに、やけに鼻と喉の奥に粘り着くその匂い。

目を睜ったまま、クリスが呟いた。

微かに、声が擦れた。

「これは …、」

未だ侵食は続いており、
人間の下半身がまだその姿を保っていた。

「これは、なぜ」

シンリーが父親の腕から身を乗り出す。

「“わるいもの”」

「わるい ……?…」

クリスは屈託のない少女の顔を見る。

「わるいものなの。」

だっってお父さまがそう仰ったんだもの。

だから、わたしがやつつけないといけないの。

わたしにはその力があるの、

そっお父さまが ……」

「シンリー!!」

あどけない娘の喋りを遮り、ラルゴはシンリーを庇うように抱きすくめ、覆い隠した。

そして、自身もその顔を伏せる。

今現在、自分たちに突き刺さっているであろう視線から逃れるために。

…露見してしまった。

もう駄目だ……、

もうこれ以上 ……

「なるほど、

そう言い包めてたってワケかい」

低い男の声がして、

クリスは鋭い動作で振り向き、

ラルゴはハツと怯えと絶望に満ちた顔を上げた。

シグマが嘲笑を浮かべて立っている。

クリスが珍しく刺のある声を発した。

「ライズは」

「殺しちゃいねえよ、

マリオンはなるべく殺すな、って言われてるんでね」

シグマが肩をすくめる。

「で、お前も俺の邪魔をするのかな」

冷やかな視線を向けられて、クリスは反射的に槍を構えた。

「やれやれ……」

シグマがいかにも面倒臭そうに息を吐き、
そして踏み込んだ。

クリスが構えた槍を突き出し、薙ぎ払う。

シグマはそれを避けるように仰け反って、
その反動を利用し、退いた片足に力を込めて床を蹴り上げた。

この動作でクリスの懐に潜り込む。

槍のように間合いが長い得物を相手にする時、
その間合いに入ってリーチの差を無効にする。

言うのは易いが、実践するのはかなり至難の業だ。

シグマはそれを易々とやってのけた。

目の前に迫った男の姿。

目の前に迫った少年の姿。

一撃を加えるつもりだったシグマ。

しかし次の瞬間、

予想外の反撃を受ける。

ゴスッ！！

と鈍い音がして、シグマの視界に星がちらつく。

クリスは平然としたまま、一步退いた。

シグマが呻く。

「っ痛っ…、

フツッ、咄嗟に頭突きが出るか？

…っとお！！」

言い終わらせないまま、クリスが踏み込んでシグマに迫る。

迷いなき一閃が宙を疾る。

それを避け、シグマは身を庇おうと翳した腕を、

クリスの槍の柄に叩き落とされた。

鈍く、その腕、その骨が軋む感触がした。

クリスは絶え間なく槍を振り回し、

そのどれもが明らかに計算ずくで、狙いを定めた動きであるとシグマは悟った。

（おいおい、マジかよ。

この俺が、

こんな子供に ……）

クリスは攻撃の手を緩めない。

それは、ただ単に手加減の“やり方”を知らないが故の戦法であつたからなのだが、

傍から見たら、容赦なし、と映つたろう。

だがクリスとしても、無意識的にだがいつもの余裕はなかつたかもしれない。

何故ならクリスは、敵と打ち合つた経験がない。

戦場で、クリスはいつも一撃で相手を沈めてきた。

槍の一振りですぐ倒れぬ敵に遭つたのは初めてだつた。

表には出さぬ。

おそらく意識にも出ぬ。

無意識のみが認識した、
強敵の出現。

それは騒めく血潮になって、クリスの体を奔つた。

…なぜだろう、

なんだか …

クリスは一息、吸い込んだ。

…きぶんがいい。

クリスの足が、床に円を描いて後方に退がる。

いや、その全身が大きく円を描いて回転する。

凄まじい速度で、

凄まじい遠心力で槍が振るわれる。

その小柄な体は、その回転の力にも軸を揺るがされることはなかった。

信じ難い威力の一撃がシグマの体に与えられる。

飛びすさったシグマは切り裂かれた腹を押さえ、

驚愕はしていたものの、

その時はまだ落ち着いていた。

(…このくらいの傷なら……)

しかし次の瞬間、

その顔に狼狽の色が奔る。

男の傷から流れ出る、

…砂。

クリスは目を見開く。

「…白……!?!?…」

シグマの体から流れ出た砂は、
純白だった。

(…まずい…っ！…)

シグマは自身の傷と、
クリスの手にした槍を見比べた。

白銀の刃。

その刃にうつすらと刻まれた、疵のような文字。

(…聖句か…！)

どうする。

激しく思考を回転させるシグマの耳に、後方から響いたあどけない
声が触れた。

「すごい、お兄ちゃん！

お兄ちゃんにも“わるいもの”をやっつける力があつたのね！」

はしゃいだようなシンリーの声で、場の空気が改めて凍りつく。

次の瞬間、

シグマがシンリーの方に振り向いた。

その形相に、シンリーは身を竦めて父親の腕に縋る。

シグマが駆ける。

シンリーに向かって。

「悪い、ナイトメア！
“使う”ぜ！！」

クリスの反応が遅れた。

床に零れた“白い砂”が、クリスの思考を僅かに停止させた。

その差、数秒。

シグマの手がシンリーの頭に届く …

その、一瞬。

「！！！！！！」

シグマの視界が漆黒の闇に覆われる。

いや、これは …

「ライズ！！！！」

シグマの顔を覆ったのは、無数の黒い蝶の群れ。

そして、虚空から躍り出た夕陽の髪的青年。

音もなく降り立ち、

父親に抱えられた少女の頭に手を置いた。

「 ……え」

「済まない、
…時間だ」

染みるほど静かな、ライズの声。

ライズとシグマの体越し、
クリスはシンリーの顔を見た。

目を見開いた少女が、
何かを求めるように手を伸ばした。

ラルゴが叫ぶ。

「やめてくれえっ！！！！」

ライズが僅かに目を伏せた。

さながら許しを施す聖職者のように。

ライズが呟く。

…唱える。

『…ラスト・コラール』

その言葉で、終わる。

シンリーが喘ぐように口を開き、
そして、凍りついた。

…その小さな、幼い肉体が崩れていく。

真っ白な、砂に。

ラルゴが絶叫し、号泣し、零れた砂を両手にかき集め出した。

「シンリー！！シンリー！！」

あああ！！！！！！」

ライズはそれを冷ややかに見下ろして一瞥し、背後で藻掻くシグマに体を向けた。

サンデイを全て振り払ったシグマは、起死回生の鍵が最早使えぬことに気付いて舌打った。

「夜胡蝶……！！！！」

「お生憎さま。

往生際よく消えてくれ、

シグマ＝ラメッド」

シグマの体が傾いていく。

砂の侵食が背骨にまで達しようとしている ……！！

「糞餓鬼どもが！！！！」

叫び、シグマの体が霧散する。

しかし、それは決着を意味しなかった。

『この借りは必ず返すぞ、

槍使いの小僧！』

どこからともなく、鼓膜に直接届いた捨て台詞。

「バックアップにゴーレムを分裂させていたか……」

自身をゴーレム化させずに、

ただ具現化させておいたゴーレムを別の場所に待機させておく。

そうすれば、もしも自身に危機が迫っても、

自身の体を粒子化させ、

ゴーレムの方に自身の体を構築させられる。

ライズもよく使う手段だ。

軽く息を吐き、周囲の兵士達の動揺と困惑を無視して、

ライズはクリスの元に歩み寄った。

「……………」

クリスは無言で、

食い入るように慟哭するラルゴを見つめていた。

「クリス」

「……………ん……………」

何に頷いたのか。

ただクリスは頷き、
目を逸らしたくなる衝動を抑え込み、

ラルゴの姿を、
散らばる“白い砂”を見つめていた
…

【Noise Endroll】

「…領主ラルゴの娘が不治の病に罹ったのは、今から一年と
少し前。

余命半年を宣告され、暗澹とした日々を送っていたところを、レイ
ンに目を付けられたらしい」

晴れ渡った初夏の空の下、
平原にぽつりと立つ木の陰で、ライズは一人、どこへともなく言葉
を発する。

返事は耳ではなく、
脳に直接響いた。

よく透るバリトンの声が。

『で、その男は』

ロイドの問いに、
相手に見える筈もない仕草だが、肩をすくめてライズは応えた。

「事態は完全に露見した。」

屋敷付きの兵にも、傭兵にも見られたからね。

噂はすぐにこの地域に広まるだろう。

領主ラルゴはバケモノと化した娘を養う為に人間を餌として与えていた、と……」

姿をくらますか、

それとも娘の後を追うか。

「俺はどちらでも構わないんだけど」

『……後者の方は一応止めておけ』

「ボスってガラ悪いけど、根は善良だよね」

『ガラは放つとけ。』

『……クー坊はどうしてる』

「クリス？」

……ああ、

なんか少し凹んでるよ。

無理もないけど」

通信の向こうで、ロイドが眉をひそめる気配がした。

『あいつが?』

「ボスと同じだよ。」

血も涙もないように見えて、性根は至って善良だ」

ライズはごく簡潔に、

クリスと今回の任務対象の予定外の接触を話した。

「どうも、性格と体がちくはくなんだね。」

なんていうか、性根が優しいくせに、

体の方は染み付いた野性に振り回されてる感じ」

声だけで苦笑し、ライズは薄く千切れた雲が遊泳する空を見上げる。

「まあ、そこが面白そうな子だけどね」

『お前が他人に興味を持つのは珍しいな』

「そんなことないよ。」

少なくとも、ファントム・コードの皆のことは面白いと思ってる」

掌を見、ライズは僅かに目を細めた。

心配だけで、ロイドはその様子を悟ったのか、その話題を続けようとはしなかった。

「で、この後は？」

クリスを連れてアジトに戻っていいのかな？」

「…ああ、

そうだな…」

なんだかその返事に引つ掛かりを感じ、ライズは首を傾げた。

相手には見えないのだが。

「なんか、不都合でもあるワケ？」

「…ない事はない」

「何それ」

「いや……、

まあ大丈夫だろう、

戻って来ていい。

ご苦労だったな」

「？ ……うん。

じゃ、後で」

*

クリスは領主ラルゴの屋敷から少し離れた河原にいた。

そこは少しだけ断層になっており、ごく小規模の渓谷を作っている。

その麓、小さな塚。

ゲツソリとやつれ果てた男がうなだれるその背中を、クリスは居心地悪くも、ただ見つめた。

掛ける言葉など無い。

けれど、今にも壊れそうなその男からは、なんとなく目を離せなかった。

そうしている内、虚脱しきった声で、ラルゴが呟いた。

「 ……秩序の方が、私達を裏切ったんだ……」

「 ……? 」

声は出さず、クリスはただ首を傾げた。

その様すら、背を向けているラルゴには見える筈もないのだが、ラルゴの方もクリスの返事を求めている訳でもないようだった。

ボソボソと、消えそうな声で言葉を零す。

「子が親よりも先に逝くなんて……、
そんな事があって良い筈がないんだ……。」

私はただ……、
正しなかったただ……。」

僅かに、クリスが目を見張る。

「ただす……？」

ラルゴは、クリスの声など耳に入らぬようにただ呟き続けた。

「シンリー……、」

お前が先に逝くなんて……、
そんな事があっては……。」

「……………」

クリスは見つめた。
その背中を。

胸に疼く“何か”が、
ひどく気持ちが悪かった。
…

*

「……………所詮、」

善悪の定義など多数決だ。

10の為に1が犠牲になる事は“正義”と呼ばれ、
1の為に10が犠牲になる事は“悪”と呼ばれる。

そこに個人の理想や信念など入り込む余地はない」

ライズが冷めた瞳で嗤う。

「あの娘を養うのに、あの父親は自分の領地の民を餌には選ばなかった。

ロクでもない連中を雇い集めて、それを餌とした。

それは自分の死を理解していなかった娘を欺く嘘の為であり、

娘を生かす為に良識を捨てた領主ラルゴの、

僅かに残っていた良心だったのかもしれない。

どうせ犠牲にするなら厄介者を・とね」

クリスがほんの少し、眉をひそめた。

その様子に、ライズはおどけて肩をすくめる。

「ロクでもない連中ばかり集めてたんだ。

君を女の子だと勘違いして、勘違いしていたにも関わらず手を上げようとした男みたいな、ね。」

そういう連中は、余所でもいらぬ面倒や迷惑を振りまいてきたんだ」

「ライズはそういう人間なら死んでもいいと、
そう思ってるのか」

クリスの口調に非難の色はない。

ただ、その抑揚のない柔らかい声に、疑問と困惑の色が滲む。

ライズはふ、と息を吐く。

「そ〜だねえ……」。

連中が周りにかかる迷惑、つても言わば“犠牲”だからねえ。

それを考えれば、あの娘が生きる為の“犠牲”は、
連中が生きる為の“犠牲”と比べてみたら、
少しばかり下回るんじゃないか、って気がするよ。

その経過の先に“ルビー”“エーテル”の完成つてもものがなければ、
だけどね」

「…」

クリスは黙り込んでしまった。

もともと無口な少年だから、口数ではその心情を測ることは出来な
いが、

それでもライズにはクリスの困惑が理解った。

「まあ、君には君の考え方があるさ。

君がイヤだと感じるなら、それが君の感性だ。

別に俺に共感する必要なんて全くないし、違和感があっても何も悪くない。

君と俺は違うんだから」

その言葉に、クリスは赤紫の瞳を上げる。

「……そう、だけど」

「そっだよ。

別に共感なんて必要ない。

必要なのは“ルビー”“エーテルの完成阻止”という同じ目的だけなんだから」

クリスは頷く。

けれどやはり何か胸に引っ掛かって、鈍く痛い。

(……)

クリスは目を伏せた。

なんだか歌鳥の顔を思い出した。

彼女なら何と言っだろう ……。

遠くを見るようなクリスの瞳に、

ライズのほんの少し困ったような笑みが映った。

「妙なわだかまりを与えちゃったならごめんよ。

俺は特別ひねくれてるから、こういう言い方しか出来ないんだよ」

クリスはキョトンとしてライズを見返した。

「ひねくれ？」

「はは。

性格悪い、ってコト」

クリスはますます首を傾げる。

「ライズは性格わるくなんかない」

「お？」

少しからかうような仕草で返事をしたライズに、
クリスは真っ直ぐに無垢そのものの視線を向ける。

「ライズはセナに種を蒔いてくれた。

だから、おれはライズは優しい性格だと思っ」

その言葉に、ライズが笑う。

初めて見せる、ほんの少しの淋しさを滲ませて。

「……別にあれは俺の始めた事じゃない ……」

…ライズの脳裏に、遠い日の一場面が蘇る。

…

*

（ ……どうして種を蒔くの？）

（ 寂しくないように）

（ 誰が？）

（ ここで死んだ人たちが。

…悲しい場所を悲しいままにしてしまつたら、誰もその場所に
来てくれなくなるだろう？

だから、種を蒔くんだ。

いずれここに沢山の花が咲けば、

ここをとても綺麗な場所にすれば、

いろんな人がここで立ち止まって微笑んでくれる。

そうすれば、ここは悲しい場所じゃなくなる。

寂しくなんか、なくなるさね）

（ ……うん、わかった。

そうだね。

おれも、蒔く。

おれにも蒔かせて

…

サンドラ

…

…

【6】白い血の民（後書き）

この物語の中において、作者と一番考え方が近いのはライズだと思います。

彼の口から出る言葉がもつとも作者の感性に近いというか、一番共感出来るというか。

だからといって、ライズと作者の性格が似ているというわけではないですが。

たぶん五木は虚無主義なのでしょう。

今、同郷の人々がいわれのない差別を受けている、と聞きました。

その一方で救済の手が差し延べられているのも聞きます。

きっとどちらも事実なのでしょう。

思うことは、迫害する側の人々の中に、本心から『それ』を恐れている人が果たしてどれほどいるのか、ということです。

さんざん報道され、多少の知識は皆あるのに何故『それ』を理由とした迫害があるのか。

本当に恐れているのなら正しい知識を得ているはずでしょう？

答えは、人間はただ単に悪意の矛先を探している ……、
ただそれだけの話だと思います。

理由など何でもいから、他人を貶めたい願望があるのでしょうか。
それにより自身の優位性を得たいのです。

子どもの頃、少し変わった名前だというだけでからかわれた記憶が

あります。

今になると何でもないとなのですが、それはあの子らのこの願望からきていたのでしょうか。

幼い子どもにすらある願望なのです。

だから仕方がない、と片付けるにはあまりに悪質だとは思いますが、元々この土地を出たいという願望はありませんでしたが、きっと私はこの土地から離れることはないでしょう。

まだ予定もないし、出来るかどうか不明ですが、同郷の人とでなければ結婚も難しいと思います。

五木はそういうものだと言いましたが、今現在『それ』を理由として未来をねじ曲げられた人々がたくさんいることが残念です。

正面から戦えないのなら、ただうずくまって時間が経つのを待つだけでもいいんです。

終わらない苦境はないはずです。

何もなくても明日はくるのですから。

ただ、逃げ方を間違えさえしなければいいんです。

私はそう思います。

【7】ささやかな予兆

…唄がきこえる

滲むほど淡く

霞むほど淡く

染み入るほどに甘い旋律

この唇に紡がれるのを

その唇に紡がれるのを

揺らめきながら待っている

私は未だそれを知らない

私は未だそれを放せない

託される日を

託すべき日を

私はただ待っているの

【Prologue: Emperor】

……管音が近づいていた。

初夏の風、

鮮やかなまでに濃い赤紫の空の下、

小さな村の酒場に数人の客がおり、
その中に軽い武装をした一団がある。

人数をいえば4、

そのいずれも、表情が明るいとはいい難い。

「…本当にぞつとしたぜ」

その内の1人がぼやくように呟く。

それに対し、仲間の男が苛立たしげに応えた。

「何回おなじ事を言っただよ、

もういいつつうの」

「だってよ、

とんでもねえ話だろ。」

俺たち、危うくバケモノの餌にされるところだったんだぞ」

わかってる、と言う仲間の声は昏く重い。

「うまい話には裏がある、って事だな。

いい教訓になったぜ、

………つたく」

吐き捨てるように言って、男は杯を仰ぐ。

「あゝあゝ…、

次の稼ぎ、どうすつかなあ……」

「結局、残りの報酬ももらい損ねたしな」

「近々戦争が起こるって噂だが、

それを待つより、いつそ国境にでも征つた方が正解かもなあ……」

この国は今、内乱の火種を抱えている。

皇位継承問題という、歴史的にもありがちな火種だ。

先代皇帝の実弟と、

先代皇帝のひとり娘。

対立の期間は長いが、

双方ともに積極的な動きは見せていない。

どちらも政治的な理由から、

相手勢力に対して明らかかな敵意を見せられないのだ。

「大々的に兵を募るのはいつになるか分からないし、

だったら国境警備に行った方が……」

「まあ、行ってくつてんなら止めねえが、

お前のウデじゃ何日生きてられるかな」

なに、と意気がつてみたものの、男は結局口籠もる。

近年不安定なりーヴダリルの情勢に、

近隣諸国が不穏な動きを見せているのは事実だ。

「あゝあ…、

どっか楽な働き口はねえかなあ…」

「甘いこと言ってるよ、

セドナの二の舞になるぜ」

「それだけは勘弁だな」

濁いた笑いが4人から洩れる。

そのとき、

彼らの卓に近づく影があつた。

それに気付いた1人が険を含んだ目を上げた。

「あ？…何だ、おまえ」

近づいてきた男はフードを目深に被っていた為、その顔は判らなかつた。

背丈はそう高くなく、

体格もそう逞しくない。

少なくとも、この場にいる4人と較べれば小柄で細身だ。

フードから垣間見える肌は滑らかで、

声さえ発さなければ女性と判断されただろう。

その唇から零れた声は柔らかく、妙に淡々としていた。

「……セドナという言葉が聞こえた」

「ああ？」

聞き耳立てていやがったのか？

だったら何なんだよ」

彼らは機嫌が悪く、そもそも所謂ガラが悪い男達だ。

他の地元の客は、彼らを避けてさっさと店を出、
入ってくる客も彼らを見て引き返した。

唯一残っていたのは衣装のこの男、

店の主人がハラハラとした目でこちらを窺っている。

「傭兵を募っていると聞いていた。

おまえ達が、そうか」

「だったら何なんだよ」

「まさか、お前も志願してきたのか？

だったら残念だったな、

もう募集はかけてない。

かけてたとしても行ったら行っただで命はなかっただろうよ」

声を掛けてきた男が怪訝な表情を浮かべた気配がした。

それを察したのかどうなのか、仲間の話を1人が遮る。

「どうでもいいだろ、
もうそんな話は。」

大体こんなのが傭兵な訳ないだろ。

男だか女だか判んねえような、なよっちい奴が」

違いない、と周りの男達も嘲りの色も露な笑声をあげる。

男には反応はない。

顔を隠しているのだから、表情など判らないのだが。

ひとしきり沈黙し、男たちの笑い声が引くのを待っている。

椅子に座ったまま荒んだ笑みを浮かべ見上げてくる男に、

「他人を蔑めるのだから、お前達は腕に自信があるのだな」

と、何の温度もない声で言った。

「ああ？」

不快げな顔を上げた男の、それが最後の言葉になるとは誰も予想出来なかつただろう。

…一瞬、だった。

仲間たちにも見えなかった。

その一瞬の後、

声を掛けてきた男の目の前に居た男の座高が縮んだ

…

いや、欠けた。

「…っ！！！！」

！？

う、うわあああっ！？」

悲鳴が上がる。

一秒あるかないかの後、

少し離れたカウンターにゴトンと鈍い音を立て、

男の首が落ちた。

店の主人が驚きと恐怖の叫びをあげて腰を抜かした。

その音をその場に居た人間が聞いた時、

首を失った身体から鮮血が吹き出した。

均衡を失って、倒れる。

「何だ！？何が起きた！？」

フードの男は身動きひとつない。

仲間の凄惨な、しかも不可解な死に男たちは恐慌している。

フードの男が何かしたとしか思えないのだが、
彼らはその男に動きを全く見出だせなかった。

服に赤い染みが付くのを見下ろして、彼はようやく足を動かし一歩退く。

「…なぜ避けない？」

腕が立つのではなかったのか」

零れた眩きはあくまで淡々としており、

しかしその内容はこの怪異が彼の手によって成されたのだという事を宣言するものだった。

「なに、を……」

フードの男の表情は見えない。

嘲笑に怒ったのかどうかすら判然としない。

男たちは戦慄する。

一瞬で勿ねられた首は蔑みの表情を凍りつけさせられたまま、虚ろな瞳を宙に向けている。

それは彼が自身に何が起こったのか、
そもそも何かが起こった事すら気付かぬまま命を奪われた事を意味した。

静かに佇むその男が、フードの下でこちらに視線を向けた気がした。

「ヒッ……」

悲鳴があがる。

卓や椅子が倒れる音が響いた。

酒場の窓を、おびただしい血糊が叩いた。

…

【破滅を求める2人の王】

『…次にルビーが使われるとしたら、やはり聖地ヴァナディースだと思う』

ファントム・コード、

“碑石の間”。

円形劇場にも似たその場所で“客”を迎えた少女は、実体のない体をふわりと宙に躍らせた。

その眼窩の全てを満たす紅玉が鮮やかに輝き、円形のステージで佇む漆黒の装いの男を見下ろす。

「確率は」

短く、そして鋭く言った長身の男はファントム・コード司令、ロイドだ。

琥珀の瞳が頭上の少女を見据える。

それを平然と受け止めた少女の名はマリーエレメント、

このファントム・コードの創造主“ファントム”の代弁者である。

彼女はそのあどけない唇であどけない声で、やけに大人びた口調で言葉を紡ぐ。

『高くはないわ。』

ただ、使われるとしたら、聖地ヴァナディース』

「また不確かだな」

『まだ起こっていない事ばかりだもの。』

でも場所はともかく、狙われる“人物”の予想はつくわ。前回はそう。

セナ砦で“ルビー”が使われたのは、バルカシオン派である総督ヴェルンドを支援する目的以上に、

セナにいた“彼”を抹殺する目的が大きかったのだと思うの。

“軸の歴史”で初めてルビーが使われた場所がヴァナディースだった時だって、ヴァナディースには“彼”が居た』

ロイドは軽く腕を組んだ。

「そうまでして、レインはバルカシオンを皇位に就けておきたいと？」

マリーがゆるく頷く。

『そうかもしれないわ。』

彼の今現在の政敵であるクローディアよりは都合が良いことは確かだもの。

どうせ滅ぼす世界だとしても、相当な準備期間が必要なのだもの。

クローディアは聖地ヴァナディースの長、

つまり彼女は“白い血の民”の天敵・聖職者の総元締めよ。

性質も潔癖、

ルビー創作の協力は期待出来ない』

ロイドは4つある柱の1つに背中を預け、劇場の外に瞬く常夜の星空に視線を向けた。

「……………ヴァナディースに誰かを派遣するなら、采配は？」

『貴男に任せるわ。』

ただ、レックスⅡジエラルディンに仕事の依頼がきているの。

彼は近日中にサンクレールに彼を向かわせて頂戴』

「仕事？」

ロイドが怪訝そうにマリーを見上げた。

少女が肩を竦めて見せる。

黒絹の髪がさらさらと揺れた。

『 ……そうね、

こっちには“彼女”を同行させてみるのがいいと思うわ。
頃合いだもの』

ロイドの目に、僅かに複雑な色が滲んだ。

「 ……わかった ……」

…

リーヴダリル歴410年、
初夏。

帝都イザヴェル。

壮麗な城壁に囲まれた商業都市である。

その中心部、深く広い濠に囲まれた皇城の威容

…

夕陽を背負ったその姿は、大陸諸国に於いても3の指に入る美しさと謳われる。

…そして今宵も、

陽が落ちる。

*

現在リーヴダリル皇帝を名乗るバルカシオンは今年で55歳、

その酷薄さばかりが伝えられ、世間からは悪相のイメージを抱かれているが、

実際には彼はかなり端正な顔立ちをしている。

若い頃は相当の美男であったことは、
語られるまでもなく今の彼の容貌から推し測ることが出来る。

堂々たる体躯、
均整のとれた長身。

この時は白いものの混じった黒髪を緩く束ね、ごく簡素な平服を着用していた。

当然といえば当然、

その場所は城内の彼の私室だったからだ。

その部屋の中でバルカシオンが切れ長の目を向けた先に、本来ならばあるはずのない人影がひとつ。

「 ……そなたか」

黄昏の闇に紛れた影がゆるやかに揺れた。

「はい。」

お久し振りです」

柔らかく笑んだ“彼”は、歳の頃20代半ばから30代半ば、

しかしその顔に浮かべた笑みはあどけなさすら滲ませて、彼の年齢を不詳に見せる。

碧を帯びた銀髪が微かに揺れた。

バルカシオンは面白くもなさそうに“彼”を見、しかしその存在など意に介さぬような動作で窓際の椅子に向かった。

「何の用だ」

「帝都に私用がありまして、その足でござ挨拶に」

「ついで、と申すか。」

不遜なやつだ」

「些末な事でございましょう?」

「ふん」

声だけで低く笑い、窓の縁に片肘をついたバルカシオンを眺め、

“彼”はほんの少し首を傾けた。

「ご機嫌が麗しくないようですね」

バルカシオンはちらと視線を寄越しただけで何も答えない。

“彼”はふわりと笑う。

「ヴェルンド卿からの“贈物”が、お気に召さなかったのですか?」

「そなたには関わりのない事だ」

「一枚くらいは噛んでおります。」

…ああ、だからこそ、お目障りでしょうか？

公にも情けというものがおありでしょうかから」

バルカシオンが不快そうに眉をひそめた。

「挨拶だけが用なら、もう済ませたであろう。」

さっさと下がれ。

目障りだという自覚があるならば」

“彼”が微笑う。

「では、失礼致します。」

何かありましたら、いつものように」

「わかっておる。」

下がれ」

一礼し、“彼”は衣を翻すような動作を見せて闇に消えた。

バルカシオンはその闇を見つめ、小さく息を吐いた。

…あの男が、気に入らない。

ささくれ立ったような独白は、聞く者もないまま、

胸の内から出る事すらないまま、

ただ一言、繰り返された。

……気に入らない ……

*

…帝都イザヴェルの大通りに夜の帳が下りる。

賑やかな声は酒場から。

裏路地に一步入れば表通りとは趣を意にする殺伐とした空気が流れる。

繋がれていた犬が吠える。

声を聞いた飼い主が何事かと窓を開けて、犬を見、路地の闇を見た。

何者の気配もない。

ただ、微かに生臭いような、そんな臭いを感じた。

*

…街の灯りの届かない闇のさらに奥で、微かに何か倒れる音がした。

それを聞き届ける者など誰ひとりない無人の路地裏、

“紅い砂”に埋もれた足元を見やり、青年は無言で一步退いて服の

裾を払った。

闇の中に、その灰白い横顔と長い白髪は灯りのように浮かび上がる。ふと近づく気配を感じて、彼は顔を上げた。

「兄様」

青年が碧い瞳の視線を向けた先で、碧銀髪の男が笑って立っていた。

「食事は済みましたか、
エツダ」

その問いかけに、エツダは僅かに目を伏せながらも頷いた。

兄・レインが苦笑に似た笑みを浮かべる。

「何も私の前でそんな申し訳なさそうな表情をしなくても良いのですよ、

いつも言っているでしょう?」

「はい。

……すみません」

「謝ってもらおう事でもありません、
これもいつも言っていますよ」

たしなめるような言葉、しかしそんな色は一切感じさせないレインの声音。

エツダは小さく頷いた。

「…はい」

微かに、息を吐く。

…そのとき、その場所にひとつの異変。

『…ナイトメア…』

レイン、エツダが同時に顔を上げた。

空気を介さず耳に直接届いた、消え入るような擦れた声。

「…その声は…
シグマさん？」

応えるように、闇が剥がれる。

裂け目から滑り出たのは、白い狼。

その腹部には傷が…、いや、傷とは言えないかもしれない。
そもそも腹部が陥没していた。

そして、そこから紅い血の代わりに流れ落ちる、白い砂。

それを見て、レインはおや、と声を洩らした。

「これはこれは…」

「お珍しい事ですね」

エツダもその白蠟の顔に何の揺らぎも見せぬまま、
よろめく狼を見下ろした。

『……ファントム・コードの連中にやられた ……』

苦渋に満ちた声は目の前の獣から。

「おやおや、

それはご災難でしたね」

レインの声は暢気を通り越して、いつそ愉快げだ。

癪に障ったものの、シグマにはこの男の他に頼るものがない。

『人間の“捕食”で補える損傷じゃない……、

“ルビー”、を……』

その言葉に、エツダが僅かに眉をひそめた。

「“回収”に向かわれた筈ではなかったのですか」

『それを邪魔されてこうなった』

屈辱に鼻面を歪め、シグマはエツダを見上げる。

視線を向けられた方はその碧い瞳をすぐ横に立つ兄に向けた。

レインは微笑み、シグマの目の前に膝を着いた。

「あいにく今は手持ちがありません。

ですので、私の血を少し差し上げます。

数日ならば保つ筈です」

それを聞き、エツダがぴくりと表情を動かした。

レインがシグマの腹部に手をかざす。

その手が淡く“紅い光”を帯びてゆく。

その光が靄のようにたゆたい、緩やかに流れてシグマの腹部に落ちる。

少しずつ、シグマの腹部の欠損が修復されていく。

少し楽になったのか、身を伏せていた狼が大きな息を吐いた。

『……………っはぁ……………、

……………くそ……………、

あの餓鬼ども……………』

悪態をつくシグマをよそに、エツダが傍らで膝をつくレインの背中を見た。

「どうかされましたか？」

レインはシグマの傷にかざしていた掌に、静かに見入っている。

「……」の気配……」

「……兄様？」

「この残り香……、

ファントム・コードの“ラスト・コラール”ではありませんね、

むしろとてもオーソドックスな感触がします。

聖職者の力の気配だ」

レインの言葉に、シグマが睨むような目を上げた。

「……2人組だった。

1人は“夜胡蝶”だ。

だが、俺がやられたのはソイツじゃない。

もう1人、情報にない餓鬼がいた」

「餓鬼？」

「化け物じみた餓鬼だ。

短身痩躯、一見すると男だか女だか判らんような顔をしていたが、とにかく腕が立つ……。

得物の槍の刃に、聖句が刻まれていた……。」

「ふむ……。」

レインはまだ掌を見つめている。
まるでそこから何かを読み取るうとでもしているように。

エツダが身を屈め、レインの顔を覗き込んだ。

「……何か気に掛かるのですか？」

「ええ、とても」

淡く笑んで、レインはようやく掌から目を離して管間に浮かぶ月を見上げた。

「……とても」

【ジェラルディンの憂鬱】

「……サンクレール……、
ですか？」

歌鳥は首を傾げてロイドを見上げる。
亜麻色の髪が揺れた。

ファントム・コード内部、
歌鳥にあてがわれた部屋（ここでは“籠”と呼ぶ）である。

この時はエレナも同席していた。

歌鳥とエレナは性格やタイプはまったく違うが、
どうやら馬が合うらしい。

また、同じ困難を乗り越えた仲間として結ばれた友情がある。

2人の少女を見下ろして頷いた隻眼の男は、いつもの様にどこか横柄な物言いで椅子にふんぞり返った。

「ファントムの …、
マリーの勧めだ。」

そろそろ外の空気を吸って来い」

「大丈夫なのかよ？」

口を挟んだのはエレナだった。
緑玉の瞳を向けて、

「レインの奴に見つかったらヤベえんだろ？」

と言った。

その言葉にロイドが肩をすくめる。

「そうそう頻繁に見つかんねえよ。
奴もそこまで神出鬼没じゃねーだろ……」

「セヴァルスタなんて田舎に現れた時点でじゅうぶん神出鬼没だよ」

エレナの言葉に、歌鳥は曖昧に笑って発言は控えた。

歌鳥は、セヴァルスタがこの世界においてどの程度の田舎なのかを知らないからだ。会った人間のほとんどが田舎だの辺境だのと評していたのは聞いたが。

「隠れているだけじゃストレス溜まるだろ」

そう言ってロイドがちらと歌鳥を見る。

歌鳥は笑んで応えた。

「大丈夫です」

「今はな。」

物珍しいからだろ。

しばらくしたら飽きるぞ、こんな穴蔵生活。

たまには陽の光を浴びて来い。

それに、まさか一生ここで暮らす訳でもないんだ。

少しずつでいいからこちらの外の世界を実際に見て、知っておいた方がいい」

歌鳥は少しだけ目を丸くしてロイドを見、そして頷いた。

「そう……ですね、

それはそうかも……」

隣でエレナが感心したようにロイドを見上げた。

「ロイドって意外と気が利くよな」

「年の功だ」

「ふうん、

な、オレも行っただい？」

「元よりそのつもりだ。

ここにいってもする事ねえだろうし、歌鳥がいなくなったら余計ヒマだろ」

「うん」

エレナが頷いたところで、歌鳥はロイドに向けて首を傾げた。

「それで、サンクレールってどういう所なんですか？

レックスさんの“仕事”っていうのも……」

「ああ、

サンクレールはここから南だ。

セヴァルスタから船で出て、最初に着いた港があるだろう、あそこから此処に来るまでに通った道を少し西に行った所にある」

歌鳥がエレナに向く。

「行ったこと、ある？」

「ない」

そう、と言って、歌鳥は再びロイドに向き直った。

「レックスさんと私とヴィヴィちゃんと、
あとは誰か？」

「グレンとキリエには別の任務が入っている。

行きはお前らだけだ。

帰りはライズ達と合流してもらおう。

セドナから帰って来る通り道だからな」

「ライズさんと、
クリスくん……」。

もう、任務、終わったんですよね？
怪我とか……」

「ないと聞いている」

歌鳥がほ……、と息を吐く。

エレナが少し身を乗り出した。

「それなら帰りはいいけどよ。
行きがオレ達だけ、って少し危なっかしくねえ？

レックスはあんまり体動かせられねえんだろ？」

昔の怪我がもとで身体を害なつたと聞いた。

ロイドが頷く。

「あいつはルビーの毒の耐性はあるが、戦いどころか運動も出来ん。息があがるような行動は駄目だな。心肺機能が悪いんだ。」

だから馬車に乗って行ってもらおう」

「ロイドは？」

一緒に来ねえの？

ロイドが一緒なら一番安全なんじゃん」

エレナが言いたかった事はこれである。

ロイドは軽く眉を上げて首を振った。

「俺は基本的に此処を動かない。」

ファントムを守らにやなんのでな」

「この前ははるばるセヴァルスタにまで行ってたじゃん」

「あれは特例だ。」

“ルビーの発動”と“虹姫の出現”は、
ファントム・コード創設以来の一大事だからな。

そういう事がない限り、此処を離れる事は出来ん」

ふうん、とエレナが椅子の背に凭れかかる。

「じゃあ何かあったらオレが頑張るしかねえの？」

一人で動くのは慣れてるけどさあ ……」

いや、と言ったのはロイドだ。

「行きは俺のゴーレムを護衛につける」

「ゴーレム、て……」

歌鳥が首を傾げた。

「ロイドさん、ゴーレム持ってたんですか？」

「俺も“マリオン”だと言った記憶があるが」

「……」

歌鳥は口籠もる。

歌鳥がその目で見た事があるファントム・コードのゴーレムは、グレンの“ガルダ”だけだった。

ライズの“サンディ”と

キリエの“デウス”はこういうものなのかエレナに聞いてはいたが、

ロイドのゴーレムは今までその話すらなかった。

聞いていたのは、ロイドの人間離れした豪勇だけだ。

だからロイドに対して、

彼はゴーレムなど必要としない、
そんなイメージを抱いていた。

ロイドはそれを察してか、まあ、と声を和らげながら口を開いた。

「俺のは少しばかり特殊なんだ、
ライズのサンディほどじゃないが」

「そうなんですか」

言った後、歌鳥は少し話を戻す。

「そういえば、レックスさんの仕事って何ですか？

レックスさんもゴーレムを持つてるとか？」

「あ、そっか、

本人が動けなくても、ゴーレムがあるなら ……」

納得しかけたエレナに、ロイドがさらりと否定を示した。

「あいつはゴーレムは持ってない。

それに、聞いてないか？」

「？」

歌鳥とエレナが顔を見合わず。
ロイドが柔く告げた。

「レックスはゴーレムを造る側 ……
“造獣師”だ」

*

「 …… “造獣”の依頼が来たと伺いましたわ、
お兄さま」

レックスの“籠”にキリエが訪れていた。

レックスは自身にまったく似ていない妹をふわりと笑んで見やる。

「うん」

「マリーエレメントの仲介と言うのなら、
妙な人間ではないのでしょうか……」。

宜しいんですの？

お兄さま。

お兄さまは本当は……」

普段は気の強いキリエだが、ただひとり兄の前ではしおらしくなる。

この時は一層、どこか不安げな表情を深緑の瞳に浮かべていた。

レックスは微笑み、キリエの頭にそつと手を乗せた。

「大丈夫だよ、キリエ。」

嫌だったら兄さんはちゃんと断るよ。

僕は大丈夫だ。

だから兄さんの事は心配しないで、お前はお前の事をきちんとさない。

任務が入っているんだろう?」

キリエがわずかに目を伏せる。

その仕草は、普段の高飛車ささえ帯びた彼女にしてはやけにあどけなく見える。

「ええ…、

だからお兄さまの方にはご一緒出来ないと……」

レックスが頷く。

「くれぐれも気を付けて行っておいで」

「はい……、

お兄さまも……」

うん、と頷いて、レックスはキリエの頭を撫でた。

…

… 出立はグレンとキリエが先だった。

2人を送り出した日も、見送った後、レックスはライズの庭で彼に代わり花や植物の世話をしていた。

手伝いに来ていた歌鳥が、レックスの顔を少し伺う。

「キリエさん達の任務って何なんでしょう」

さあ、と言ったレックスは困ったような笑みを浮かべる。

「マリーは、あまり先に任務の内容を詳しくは説明しないから」

「そうなんですか……」

「マリーというかファントムは、あまり予言を事細かには示されない。

変える為の未来だから」

「ファントム……」

歌鳥は呟く。

「ファントム……、て方は、その……、

ここにいらっしやるんですか？」

「ファントムはここにおられるよ。」

ただ、お姿はないし、声を聞く事もない。

でも、僕たちはファントムの正しさを信じてる。

ファントムは立派な方だ」

歌鳥が首を傾げる。

なんだかそれは、神社か何かで祀られている神様みたいだ、と思った。

「だから大丈夫だと思う」

どこか決然としたようなレックスの声に、歌鳥は顔を上げた。

彼は歌鳥が言わんとした事を察していたのだ、

キリエの任務がどんなものなのか判らないのでは心配なのではないか、と。

「ごめんなさい、

余計な気を回してしまったみたいで」

「いや、ありがとう。」

大丈夫だとは言ってもやっぱり少しは心配だから、余計な事ではないよ」

レックスは笑う。

「あの子は小さい頃から向こう見ずなところがあるから。

グレンくんもそんなトコあるけど、

まあむしろ大丈夫だろう」

「むしろ？」

「互いに相手の方が向こう見ずだと思ってるみたいだからだね。

ちゃんと抑え合っていけると思う。

だからしょっちゅう組まされてるんだろうな」

そういうものなのだろうか、と歌鳥は思ったが、
口にはせずにただ頷いた。

*

「…何しよぼくれてんだよ」

グレンが前を歩くキリエの背中に声を掛けた。

夏の陽、荒野の道行き。

遮るもののない地平に2人の姿が目立つ。

キリエが形の良い眉を吊り上げて振り向いた。

「誰がしよぼくれてるというの」

「お前だよ、お前。」

露骨に落ち込みやがって、

別に危ない目に遭うような仕事じゃねえってボスも言っただ
る」

「私は落ち込んでなんかいないわ、

お兄さまだって心配ないと ……」

「お兄さま”の事だとは俺は一言も言っただろ」

そのグレンの一言に、キリエの頬に朱が昇る。

それを見、グレンが気まずげに目を逸らした。

「ああいつ兄貴だし、お前が慕って心配するのわかるけどよ、

それでお前が自分の事を疎かにするようじゃ、

返って兄貴に要らん心配を掛けるだけだろ」

「そんな事、貴男に諭されるまでもないわ」

居丈高に言って、キリエは大地を蹴りつけるような足取りで進む。

グレンは軽く溜め息を吐き、後続く。

しばらく歩いて、キリエは肩越しに後ろに視線を投げて寄越した。

(貴男の方こそ …)

言いかけて、キリエはしかし口をつぐむ。

グレンはその様子に気付いてはいないようだった。

キリエは何も無い風に前を向く。

キリエはこう言いかけたのだ。

貴男の方こそ、いつまでも“あの子”のことを引きずっているではないか

…と。

歌鳥たちの出立は、

キリエとグレンがファントム・コードを発った数日後のことだった。

迎いの馬車が来たことを告げられて、

歌鳥はロイドやエレナ達に言われた通りに荷物をまとめた。

歌鳥は旅に慣れていない。

何が必要で何が不要なのかもよく分からない。

それに対し、エレナはセヴァルスタの反乱軍の密偵として各地に独りで飛び回っていたから要領というものをよく分かっている。

それが歌鳥には心強い。

レックスはレックスで既に準備を終えていた為、先に表に出ていた。出発の前に歌鳥たちはロイドとマリーエレメントの見送りを受けた。

「じゃ、行ってこい」

『ロイド＝オートリンクのゴーレムを同行させるから、何かあってもすぐにこちらに伝わるわ。』

遠隔操作でも戦えるし、いざという時はゴーレム化の構成変換で彼をあなたたちの元にすぐ送ることも出来るから、

心配しなくても大丈夫よ』

なんだか専門用語が多い台詞回しになっているが、歌鳥たちはとりあえず頷いた。

空中に浮遊する少女に、ロイドがげんなりとした視線を向ける。

「あんまりアテにさせるなよ、俺が出掛けたら此処は真正銘もぬけの殻になるんだからな」

「でもオレらがピンチになったら助けてくれよ？」

エレナの半ば茶化すような口振りを軽くあしらい、ロイドは目の前にいた歌鳥の頭に掌をのせた。

大柄なロイドはその手も大きい。

柔い重みに歌鳥の頭が頷くように弾んだ。

「まあ、無理はせずに物見遊山くらいの気持ちで行ってこい」

「え……、あの、

……はい」

歌鳥はロイドを見上げる。

琥珀の隻眼はどこか優しく見えた。

歌鳥はなんだか不思議と安心した気分になる。
にっこりと笑って、

「行ってきます、

ロイドさん」

と言った。

頷いたロイドがそのまま背を向け、おそらく自室に戻るのだろう、
“籠”の縁を蹴って下へ降りて行った。

*

…外に出ると、久しぶりの陽の光が目眩しかった。

ファントム・コードの入り口は荒野の峡谷、瓦礫に囲まれた廃墟にある。

先に出ていたレックスは、迎いの馬車の御者と何やら話し込んでいた。

顔見知りらしい。

歌鳥たちに気付き、レックスは軽く手を振る。

御者の会釈に応え、3人は乗り込む。

前側の座席にレックスと3人分の荷物、食糧や飲み水、後ろ側の席には歌鳥とエレナが並んで座った。

馬車が走り出してからしばらくして、エレナがレックスに向かいやや身を乗り出して話し掛けた。

「なあ、仕事ってゴーレム造り？」

「うん、そうらしいね」

レックスの返答はいつも通り優しげな声で、しかしどこか固い。

歌鳥は気付き、微かに首を傾げたが、

エレナはそれに気付かないまま言葉を続けた。

「オレ、ゴーレム造るのって見たことないんだよな。

邪魔じゃなかったら、そばで見てていい？」

エレナは普段はどこかぶっきらぼうだが、

気を許した相手には子供のようにはしゃいだり無邪気な一面を見せる。

レックスはそれを微笑ましく見返したが、

すぐに困ったような色をその笑みに浮かべた。

「それは僕よりも依頼人の判断だな…。」

それに、あんまり面白いものじゃないよ、
いっぱい血が出るし…。」

女の子が見るのはちょっと…。」

それを聞き、歌鳥の顔色が少しだけ青くなる。

エレナはお構い無しだ。

「血は平気だけど…、

そーだな、

自分が怪我するトコ他人に見られるのはいい気持ちしないよな。

やっぱり遠慮するわ」

エレナはあっさりと納得した様だった。

背もたれのクッションにボスン音を立てて座る。

「……、あのさ、
レックス」

「なに？」

「オレもゴーレムって持てるかな」

歌鳥が目を睨ってエレナに向く。

「ヴィヴィちゃん？」

「どうしたの、急に？」

レックスも首を傾げてエレナを見る。

エレナは少し俯き気味に、どこか決まり悪そうな表情を浮かべている。

「いや…、急につてワケでもなくてさ、

ずっと考えてたんだよな、

今のままじゃ、オレ何の役にも立たないだろ？

だったらせめてゴーレムくらい持てれば……って」

エレナの口調には真剣な響きがある。

それを聞くレックスも穏やかだが真っ直ぐに、どこか強さを秘めた眼差しでエレナを見た。

「…気持ちは分からなくもないよ、

僕も普段は何の役にも立てなくて、悔しい思いをした事が何度もある。

だから本当に君がそれを望むなら、叶えてあげたいとも思う。

けど、それによって君は危険に晒される機会がぐんと増す。

マリーやロイドさんと相談してからじゃないと、僕の独断では与えてあげる事は出来ない。

…僕は弱いから、君の命運を背負う覚悟が出来ないんだ」

言ったレックスは寂しげな表情で笑う。

それを見て歌鳥は思った。

もしかしたらレックスは、ゴーレムを造りたくないのではないかと。

この“仕事”にも、どこか乗り気でないような印象を受けた…。

歌鳥の視線に気付き、レックスは普段通りの笑みを返してきた。

歌鳥は気遣わしげな、不安そうな表情を濃紺の瞳に浮かべた。

【ささやかな予兆】

「…え？」

レックス兄、仕事？

じゃあ俺の庭の世話、誰がやってくれてんの？

ボス？」

セドナを後にしたクリスとライズは、

この時は徒歩で山道を歩いていた。

突然はじまるライズの“通信”に、クリスはもう慣れた。この一見して独り言にしか見えぬ行為。

横目でちらと見ただけで、何も気に留めず黙々と足を進める。

ライズが空に向かい、暢気な調子で喋り続ける。

「あゝ、よかった。

ありがとう、ボス。

一番出来が良かった実は、ボスにあげるからね。

え？ いらない？

あ、そっか。

ボス甘いの嫌いだもんね」

……話の内容まで暢気だ。

「……で？

うん、うん。

……よし、オツケ。

じゃあ、またね」

言葉を切り、ライズは視線を空から蝉の声が溢れかえる山道に戻した。

クリスは何も言わない。

口を開いたのはライズの方だった。

共に過ごした数日で、この2人にはこのパターンが定着している。

「サンクレールって街で、別の仕事に行った仲間と合流する。

キミの友達も一緒みたいだよ」

クリスはきょとんと赤紫の目を丸くする。

「エレナ？」

「両方」

「……カトリも?…」

クリスが僅かに眉をひそめる。

「あぶなくはないのか」

「大丈夫じゃない？」

残りのメンツがレックス兄だもん。

体が弱いから、危ないところに行かされる人じゃないしね」

「そうなのか」

「そうなの」

釈然とはしないまま、クリスは頷いた。

心配な気持ちはあるが、ライズが大丈夫だと言つなら信用していいと思う。

振る舞いは軽薄だが、この青年は一面では誠実だ。

もっとも、クリスはライズの振る舞いを軽薄だと感じる感覚はないのだが。

「…暑くなりそうだな」

ライズが木々の隙間から空を見上げ、呟いた。

…

…

（ ……かとり…… ）

…声が聞こえる。

（ か…り、聞……る？ ）

若い女の声、

むしろ少女に近い声。

（ ……とり…… ）

途切れ、霞んでよく聞き取れない。

それでも自分が呼ばれていることはわかった。

(……あなた、誰?)

(……り……)

途切れてしまう。

…

*

「カトリ」

ハツとして、歌鳥は目を覚ました。

覗き込んでくるエレナの顔が目の前にある。

「そろそろ宿を取る街に着くつてさ、
寝るならベッドの方がいいよ」

少しの間ぼんやりとした歌鳥だったが、すぐにエレナに焦点が合う
と笑って頷いた。

「うん、そうですね」

いつの間にかうたた寝してしまっていたらしい。
座ったままの姿勢だったので、首が少し痛い。

少しさすって、歌鳥は先程までみていた“夢”を思い起こした。

…自分を呼ぶ女の声。

(…お母さんの声じゃなかった…)

歌鳥の夢に出てきて歌鳥の名前を呼ぶのは、
いつも死んだ母、深優みゆだった。

さっきの夢で聞いた声は深優ではなかった。

歌鳥が覚えている、いつも夢にみる深優が歌鳥を呼ぶ声は、
甘く病的な、愛情と執着の内混ぜになった声だ。

さっきの声は違う。

歌鳥は目を伏せた。

なんだかやけに気に掛かった。

(…聞いたことがある気がする……、

でも、誰の…?…)

歌鳥を呼ぶ、若い女の声。

聞いた覚えがある、おそらく同年代の少女の声。

エレナではない。

けれどそうになると、歌鳥には心当たりがない。

こちらに知り合いはほとんどいない。

しかし歌鳥は、故郷にも歌鳥のことを呼び捨てにするような親しい友人を持ったこともなかった。

なら、あの声は？

(誰…?…)

考えこんでしまっている歌鳥の様子に気付き、
エレナとレックスが不思議そうに顔を覗き込んできた。

「カトリ？」

「どうかした？」

歌鳥は我に返って顔を上げる。

「あつ、いいえ、

何でもないです。大丈夫」

笑ってごまかしたが、胸の引っ掛かりを意識せずにはいられなかった。

(……私を呼ぶのは……

……誰?…)

*

中継地として選ばれたのはどこか牧歌的な街だった。

街並みの中に点在する柑橘類の果樹園から、爽やかな甘い香りが漂ってくる。

とつた宿は大部屋を1つ、

歌鳥とエレナの2人とレックスの間に

衝立てを立てての同室という部屋割りになった。

荷物をほどこきながら歌鳥はキョトキョトと部屋を見回す。

歌鳥は旅に慣れていない。

ここがどの程度の格式の宿なのかもよく分からない。

ただ、色々と物珍しい。

レックスが窓を開けて部屋に風を入れる。

その背中に、エレナが声を掛けた。

「依頼人でどんな奴なのか聞いてんの？」

レックスが微笑いながら首を振る。

「マリーの仲介だから信頼できる人物だとは思っただけど、

僕に頼むってことはいわゆるカタギの人ではないんだろうな……」

「？」

エレナが首を傾げた。

そばで聞いていた歌鳥も不思議そうにレックスに目を向ける。

「どうしてですか？」

「たぶん国の認可が下りない人で、普通の造獣師にゴーレムを造ってもらえないから僕に依頼がきたんじゃないかなあ……。」

もしくは、どうしても“原初型ゴーレム”が欲しいのか……、
その場合だって、原初型を知っている時点で一般的な人間ではないよ」

「……ああ、そっぴやライズ達のゴーレム造ったのってレックスなんだっけ？」

思い当たってエレナが声を洩らす。

“原初型ゴーレム”

“ゴーレム化”という異質の能力を備える。

「レックスは普通のゴーレムは造れるの？」

「“種子”があれば造れるよ」

「なに、シュシって」

なんとなく歌鳥はソファーに腰掛け、話を聞く体勢に入る。

レックスがエレナに頷いて答えた。

「今の主流のゴーレムは、大抵ふつ々の獣の姿をしているだろ？」

「うん、

まあ山とか森とかにいるようなヤツだよな」

「そして今の主流のゴーレムは、
ゴーレムが死んでも主は死なない」

歌鳥もうなずきながら話に聞き入る。

「今のゴーレムは、ゴーレムと主の命が分かたれているんだ。

本来ゴーレムは主の血のみを使って創造する。

けど今は“種子”と呼ばれる、獣の血から造った種を用いることで
主にかかるリスクを軽減させているんだね。

まあ、だからこそ“暴走ゴーレム”なんて不都合が起こるんだけど」

歌鳥は首を傾げながら、レックスに確認のように尋ねる。

「別々の命 ……、

でも主が生きている間は言う事を利くんですよね？」

「利くよ。

例えて言うなら、

今のゴーレムと主は“親子”みたいなもので、

原初型ゴーレムと主は“分身”みたいなものかな。

今のゴーレムは“種子”の素となった獣と同じ姿になるけど、

原初型にはそういう制限……て言うのもアレだけど、
まあ普通の獣以外の姿になることが多い。

キリエやグレンくんの場合は幻獣、
ライズくんの場合は血なんかない蝶の姿だろう？」

「幻獣？」

歌鳥は復唱する。

「こちらでは、その……、
ペガサスやグリフォンは普通の獣ではないんですか」

これに答えたのはエレナだった。

「ないない。」

あんなの伝承の中にしかないと思ってたよ」

そこは故郷の世界と似たような常識なのか、
と歌鳥は少し拍子抜けした気分になった。

レックスが苦笑する。

「まあ、実在してるのかどうかは僕も知らないんだけど、
“種子”を採れるほど一般的な獣ではないね

蝶々は一般的だけど、血なんか採れるわけない」

「そうですね…」

「原初型ゴーレムを所有するのはリスクが高い。

高いけど、今の主流のゴーレムよりずっと高性能だ。

ゴーレム化というのも、機能としてのみ考えるなら使い勝手はかなり良い。

ただ、前に言ったみたいに“白い血の民”に繋がりがねないシロモノだから、滅多な人には造れない」

レックスは言葉を切る。

「今回はマリーの紹介だから造るけど、僕は基本的によく知らない人には造らない」

言って肩をすくめたレックスは、どこともなく視線を流す。

「本音を言うと、キリエやライズくん達にも造りたくはなかった…」

【残り香】

…歌鳥たちが小さな村の宿に入った頃、

そのはるか西の空の下に、同じように小さな村に足を踏み入れた人連れがあった。

クリスとライズである。

「なんか変な空気だな」

ライズの呟きにクリスが頷く。

田舎の村というのは余所者に対し敏感ではある。

厄介者扱いされて冷遇されることもあれば、逆に金品を落として行ってくれる客人として厚遇されるなど、

その待遇はその土地柄で差はあるが、それにしてもこの村の余所者

…

クリスとライズに対する視線は穏やかではない。

「…余所者が余所者を殺したんですよ」

宿の給仕にそう教えられたのは、その日の夜のことだった。

「殺した？」

「ええ、

前の路を向こうの方に行った所に、酒場があるんですけどね。

そこで一昨日、殺人があつたんです。

セドナから来たっていう傭兵が4人、
八つ裂きみたいな、酷い有様だったとか」

セドナ、と聞いてクリスとライズが視線を交わす。

(あの連中か)

あの騒動の後、

クリスとライズは事後処理の為に2日ほどセドナに留まっていた。

その間、セドナ領主に雇われていた傭兵たちは蜘蛛の子を散らすように離散していった。

目の前で同僚が凄惨な死を遂げたことが堪えたのだろう。

ライズも彼らには何の用もなかったので、
その事は完全に問題にしていなかった。

だが、それによりそんな災厄に見舞われたと聞いたら流石に気に掛かる。

「店の主人には怪我はなかったんですけどね、

あれきり客足も途絶えちゃって、
もう店を畳むか、とまで言うほど参っちゃってるんですよ。

実際、そんな物騒な事件があつた店に行きたがる物好きも、そうそ
ういませんからねえ」

「ふうん…、

…気の毒にね。

で、その犯人は？」

給仕の若者が首を振る。

「役人に訴え出る暇もなく、煙みたいに消えちまいましたよ。

顔を隠していたというから、人相も判らないらしいし」

「ふうん……」

…

食事の後、給仕が部屋を出て行ってしばらくしてから、クリスがライズに声を掛けた。

「この前の男と、なにか関係あるか」

ライズは肩をすくめる。

「ないんじゃないの？」

“シロ”が関わってるなら、殺られた人間は例の砂になる。

グロテスクな屍体なんて残らないもの」

「……うん。」

クリスが頷く。

やけにあどけない感じの、素直な声音だ。

「だから、全然べつの事件だと思うよ。」

しかし、それはそれで同情するな。

せつかくセドナで餌にならずに済んだのに、
運が悪い ……」

ライズの言葉を無言のまま聞いていたクリスだったが、
少し考え込む様子を見せた後に立ち上がった。

ライズが首を傾げる。

「どした？」

「……少し、気になるから行ってみる」

「どこに」

「死んだところ」

例の事件が起きた酒場の事だとわかった。

「気になる…ねえ…」

ライズは少し意外に思った。

この少年はもつと淡泊で、物事にもつと無関心な印象を持っていた

からだ。

「んじゃまあ…、

クリスがそう言うなら付き合っけど」

「ん」

コックリと頷いたクリスが長槍の包みを手に取ろうとしたのを、ライズは柔い口調で止めた。

「多分いま、この村人たちは神経過敏になってるから、なるべく武器とかは持たない方がいいよ」

「…おびえさせてしまうから？」

「そんな感じ」

クリスが素直に頷く。

包みを置くと、そのまま部屋を出た。

ライズがそれに続きながら、奇妙に愉快そうな笑みを噛み殺していた。

(やっぱり面白い子だ)

*

話に聞いた店の周囲は静まりかえっていた。

扉に手を掛けてみると鍵はかかっておらず、難なく開いた。

中は暗く、灯りが無い。

「ごめん下さあい」

ライズの呼び掛けに応じる者もない。本当に、誰もいないようだった。

「参っちゃったのかな、マスター。」

まあいいや、
変にいじくらなきゃ問題ないだろ。

お

言って、ライズは軽く肩をひそめた。

木造の床や壁に、
拭き取った跡こそあるものの、
明らかな血痕がこびりついている。

それは暗がりの中でも露で、これでは本当にしばらく店は開けられないだろう。

「気の毒にねえ」

ライズの呟きに、
クリスはその背中越しに店を覗き込み、軽く鼻に手を当てた。

「血のにおい」

「ああ、するね。確かに」

「…」

クリスは店に一歩足を踏み入れ、キョトキョトと辺りを見回した。

「…なんか、変だ」

「何が？」

「よくわからないけど」

言って、クリスは店を出る。

「クリス？」

「…どこに行ったんだろう」

ライズは首を傾げる。

「犯人かい？」

「昨日の話だって言うからそう遠くには行っていないだろうけど。」

なに？捕まえたいの？」

「少し、気になる」

そう応えたクリスは夕闇の迫る空を仰いだ。

「血のにおいに混じって、なにか変なおいがする」

「変な匂い？」

「…なにか、ざわつく」

クリスの独特の言い回しに首をひねりながら、
ライズは軽く苦笑した。

「よくわかんないけど、
あんまり深追いするのは勧めないよ？」

俺達、なるべく早くレックス兄やカトリちゃん達と合流した方がい
いんだから」

「…ん」

頷きつつも、クリスはその表情に乏しい顔をどこともなく向ける。

ざわつく。

心の奥底を揺り動かす、
予感にも似たこの感覚。

（なんだろう …）

頭の中で、形になる前に霧散してしまっ。

（……………）

この感覚は、なんだろう。

…

【覚醒の兆し】

馬車の旅が4日を越えた。

その間に平原はすっかり夏の香りを色濃くし、
茂る緑は一層色濃かった。

歌鳥にとっては慣れぬ長旅だったが、苦はなかった。

エレナやレックスが気遣ってくれて、

特にレックスは歌鳥たちと同年代の妹がいるからか、本当に細かい
所まで気を回してくれる。

4日めに着いた街は、
歌鳥が見てきた街の中ではマラバールに次いで規模の大きい街だっ
た。

整えられた石畳と煉瓦の街並みが見事で、
露店も多かった。

中央広場の噴水が虹を作っていて、
思わず歌鳥は足を止めてそれを眺めた。

「きれい」

エレナが隣で歌鳥の視線に倣い、目を向ける。

「おー、すげーな。」

なんつーか、涼しげ」

頷き、歌鳥が微笑う。

道行く人々が、その少女に目を留めていた。

歌鳥は故郷の世界でも目立ってはいた。

しかし、こちらに来てからの方が表情が明るいぶん余計に目を惹くものがあるかもしれない。

絹にも似た亜麻色の髪が風に揺れる。

御者と共に路を進んでいたレックスが振り返って歌鳥たちを呼んだ。

そよぐような声で返事をし、歌鳥が早足で踏み出した。

そのときだった。

(…………と……り……)

「！？」

頭の中で呼ぶ声がある。

歌鳥は崩れるように膝をついた。

「カトリ!?!」

エレナが驚いてその顔を覗く。

(…なにっ…、

…これ…)

心臓の動悸が早い。

空気が肺に入ってこない。

(…か…とり…)

(…なに…、

…だれっ…?…)

(…おねが、

…き…いて…)

(きこえているわ、

あなたは…だれ…なの)

(…お願い…

…かと…

……を…たす…け…)

苦しい。

膝をつき胸を押さえる少女を心配し、

広場にいた人々が近寄ってきたり、気遣わしげな視線を向けてくる。

歌鳥はそれらに気付いてはいたが、それに対して何かしらの反応を返す余裕はなかった。

「カトリ！」

「カトリさん、

大丈夫かい!？」

エレナとレックスの声が遠い。

(ああ…)

目の前が白く靄がかかってきた。

気を失う。

そう思った。

「…あ」

広場にいた人々の合間。

道の向こう。

その人影。

(…クリスくん…?…)

歌鳥はそれをクリスだと思った。

顔は判らない。

距離があつたし、何よりその人物は頭からすっぽりとフード付きのローブを纏っていたから。

騒ぎに気付いたのだろう、

その人物がこちらに視線を向けた。

遠くからでも、目が合ったことがわかった。

その鮮やかな紅い瞳。

…そこで歌鳥の思考は途絶えた。

…

*

…目を覚ますと、見た事のない天井があつた。

「カトリ！」

エレナが心配そうに覗き込んでくる。

「ヴィヴィちゃん…？」

眩きのようにそう呼ぶと、エレナは安心したように息を吐いた。

それに気付き、その部屋に居たレックスも

歌鳥が横たわるベッドに近寄って来た。

「大丈夫？」

「レックスさん……、
わたし……?」

「うん、

昼間いきなり倒れたんだ。

覚えてる?」

歌鳥は仰向けになったままで部屋を見回した。

窓の外には赤みを帯びた藍色の空が広がっている。

「昼間……」

「ああ、

お医者さんに診てもらったけど、

疲れが溜まっていたんじゃないか、って。

気付いてあげられなくてごめんね」

歌鳥は慌てて目を上げる。

「いえ、そんな事」

違う。

疲れとか、そういう事じゃない。

そう言おうとして、しかし歌鳥は言葉に詰まった。

その先をどう説明すべきか困ったからだ。

(…あの声……)

夢に聞いた、あの少女の声だ。

哀しげな、というより、

どこか切迫したような色の滲む声。

(…あれは……)

そして。

(…クリスくんじゃなかった)

薄れかけた意識の中で見た人影。

(…似てたけど…)

背格好で勘違いしたのだろう。

けれど、クリスと似たような体格など珍しくもない。

それを思うと何故あの人物をクリスだと思ったのか不思議だが、

それ以外にあの人物をクリスと見間違える理由が思い当たらなかった。

(…変なの……)

歌鳥は心配そうに自分を見つめているエレナとレックスに、大丈夫だ、と言って笑った。

すると2人は、歌鳥に少し眠るよう勧めた。

頷き、歌鳥は枕に頭を預ける。

軽く、息をついた。

(…何だったのかしら…)

あの声は。

『たすけて』

そう言っていた。

(…誰を?…)

…あなたは、誰 …?

…

【Piece of Prologue】

リーヴダリル東方、
レイイエル峠関所。

岩山と荒れ地に囲まれたこの険しい山岳地帯に、
唯一存在する人工の建築物である。

関所と言っても実際は城砦に近い。

石造りの城壁に囲まれたそれは、
小さな街ぐらゐの規模の集落を抱え込んでいる。

中には国営の施設や、幾つかの宿が連なる宿場的な一角も存在する。

この砦に定住する住民や商人、旅人や兵士の姿の中に混じって聖職者の姿が多いのは、

ここが帝都イザヴェル方面から

聖地ヴァナディースの砂漠に続く唯一の道だからだ。

さらにそれを越えて東に行くと、旧国境地帯。

今はリーヴダルル国の情勢が不安定な為

国境を越えるには様々な規制を強いられるが、

それでもその唯一の道程の為に、

この砦に立ち寄り人々の足が絶えることはない。

その中に、一組の男女の姿があった。

「思ったほどではないな」

連れが零した小さな呟きに、隣を歩く背の高い女が顔を向けた。

「それは警備のことを言っているの？」

「ん？ …… ああ。」

まあ、ヴァナディースは今クローディア不在だしな」

そうね、と言った女は高く結った紺碧の髪をなびかせて颯爽と歩く。

「なぜ聖女クローディアが不在のヴァナディースが狙われる可能性を、

ファントムはお示しになったんだろうな」

「さあ。

考えても仕方ないわ。

答えが必ず出るとは限らないもの。

それがファントム」

「…そうだな」

任務で聖地ヴァナディースに向かっていた
グレンとキリエである。

通常ならばファントム・コードのアジトからレイイエルまでは徒歩
の旅でひと月はかかる。

しかし、この2人は毎夜“ゴーレム化”して空を飛び、
道程や地形を無視して進んで来たのだ。

この2人が選ばれた理由のひとつはこの点にある。

「バルカシオン派にしても、聖地を攻めては

ただでさえ強い民衆の反感を更に煽ることになるわ。

ヴァナディースには大した兵力もないだろうし、
勢力を割いてまで警戒する必要がないのでしょうかね」

城壁を越えて、くすんだ色の風が舞う。

砂漠から運ばれてきた砂の細雨だ。

肩に降るそれを不快げに落としたキリエの手が、
その横を抜けて擦れ違おうとしていた子供の顔に軽く当たった。

「！、あら！

ごめんなさいね」

振り返って声を上げたキリエに、
歩調を緩めないまま振り向いた少年が笑った。

「大丈夫」

言って、そのまま早足で歩み去る。

いかにも利発そうな少年だった。

歳は12と13といったところか。

旅装をしていたから、ここの人間ではないのだろう。

(あの歳で…)

少しの間その背中を目で追っていたら、
その子がいかにも世慣れた感じの傭兵風の男に駆け寄るのが見えた。

その親しげな様子から察するに、父子だろう。

（そうよね）

納得して、キリエは先を歩いていたグレンに並ぶ。

「さすがに疲れたわ。」

今夜は宿をとってゆっくり休みましょう」

*

「どうかしたのか？」

駆け寄ってきた子供に、
男が声を掛けた。

「何が？」

「さっき、あの嬢ちゃんとか喋ってたろ」

少年が明るく首を振る。

「別に。」

少しづつかっただけ」

「そうか」

男が青みを帯びた灰色の瞳を辺りに巡らす。

風避けのマントが裾を揺らした。

「で、どうするの？」

あっちにはいないよ？」

少年が首を傾げながら男を見上げる。

男は笑って肩をすくめた。

「たぶん先に行っちゃまったんだろ、
気が短いヤツだよな。」

どうせ検問で追いつく。

行こうぜ、ケイ

少年が元気よく頷く。

「うん、

早く行こう、ドル

…

【7】ささやかな予兆（後書き）

と、いうわけで予想はついていたと思いますが彼らは生きていました。

ただ、クリス達との再会はかなり先になります。

この物語はRPG風の世界設定のつもりです。

五木はゲームが好きなのですが、最近の新しいのは長くてややこしいので、もっぱら昔にプレイしていたのをリプレイしていますね。

今までハマったのは、

『ファイアーエムブレム』の『聖戦の系譜』と『烈火の剣』

『ドラクエ』のと

『ヴァルキリープロファイル』シリーズ

……などなど。

一部かなり古いものもあります。

何せスーパーファミですからね、ソフトもハードも限界です。DSか何かでリメイク熱望中。

では、次回。

おまけ登場人物設定

【グレン＝レイジング】

ファントム・コード 実働

19歳 / 178cm / A型

鳶色の髪 / 紫の瞳

生真面目 / 無鉄砲 / お人好し / 無愛想

【キリエ＝ジエラルディン】

ファントム・コード 実働

17歳 / 175cm / B型

紺碧の髪 / 深緑の瞳

気位 / 頑固 / 行動力 / 華麗

グレンのイメージソングは『FLOW』の『Answer』

キリエは『柴咲コウ』の『祈り』もしくは『冬空』です。

キリエがメインの話はすでに執筆済みですが、グレンはいつになるか……何げに地味ですからね……あの男。

【8】砂漠の聖地

白銀の空と黄金の大地が
陽炎の先でひとつになる

それは麗しき世界の果て

此処は聖地ヴァナディース

穢れを呑み込む灼熱の砂は
罪業を灰に帰す神の御手

【Episode:0】

「……」覽、

これが聖地に続く穢れなき砂の海ナスターシャだ」

男はその幼子を腕に抱えあげ、関所の望楼から純白の地平を示した。

「なにもない」

紅い瞳で砂漠に見入っていた子供が、あどけなく首を傾けた。

男がふわりと笑む。

「あるぞ。」

目に見えるものだけが在るものじゃない。

あの砂漠には幾多の信仰と祈りが埋まり、風に舞っている。

目に見えぬものこそ価値があり、

無こそがこの世で一番美しい」

流れるような口調で男がそう言うと、抱かれたままの子供がキョトンとして尋ねた。

「む」？

空白と無垢。

彼はそれを説明しようとはしなかった。

ただ無言で微笑んで、幼子の頭に頬を寄せた。

…ひとは“穢れ”というものがこの世に存在すると知った時に、初めて穢れるのだ。

男はそつと腕の中の子供を下ろした。

滑らかな黒髪を撫で、微笑みかける。

「聖地ヴァナディース。」

これからお前が暮らす土地だよ。

砂と日射しによってあらゆる穢れから護られた地だ。

そこでお前を、私が最も信頼する人物に預ける」

幼子が首を傾げる。

「いりあすは？」

男は膝をつき、幼子と視線を合わせて少し困ったような笑みを浮かべる。

「私も行くよ。」

けれど今までのように常に一緒には居られなくなる。

私には務めがあるからね。

色々な土地を巡って旅をしなければならぬ。

だから、まだ幼いお前を連れ回したくないんだ。

今のお前に必要なのは安らかな生活と正しい教育だ。

それを与えてやれるのは私よりも“彼女”の方が適任だと思っただ
「よ」

言って、彼は再び輝くばかりに光を弾く白い砂の海に目をやった。

「…でも、そうだね、」

もう少しお前が大きくなったら、一緒に様々な土地に行って、色々なものを見て回るよ。

さあ、あともうひと頑張りだ。

砂漠の道行きは辛いかもしれないが、堪えておくれ、

クリスタル」

子供は男を見上げてコクリと頷いた。

蒼穹の空が、抜けるほどに高い。

…

【依頼主】

「ファントム・コードの方々でよろしいか」

…面布を被った男が歌鳥達の逗留していた宿を訪ねてきたのは、歌鳥が体調を崩した翌々日のことだった。

対応したのはレックスだ。

宿の者に頼んで、もう一室を用意してもらい、来訪者を歌鳥やエレナから隔離した。

「それで、あなたが……」

「マリーエレメント嬢からご紹介を賜った者です。ゴーレム造りの依頼の件でお話が……」

レックスは頷き、男に席を勧めた。

顔は判らない。

声から察するに、それなりの教養のある中年の男。

レックスはいつもの人好きする笑みを封印し、固い表情で応じる。

「お名前と素性をお教え頂けますか」

「それは……」

「公式の造獣師ではなく、私のような者にゴーレム造りを依頼されたという事は、

それなりの事情があるのだらうとお察しします。

けれどだからこそ、お聞きしておきたい。

他言は決して致しません。」

我々はファントム・コードです。

秘密は必ず守ります。

ただ、我々はゴーレムというものに関してはかなり慎重にならざるを得ない。

その事情、少しは聞き及んでおいででしょうか？」

男が頷く。

レックスがそれに応え、続ける。

「マリーエレメントの仲介ならばこそ、お会い致しました。」

しかし、ゴーレム造りに関してからは私の仕事、私の領分です。

私が直にお会いして、私が信頼できる方にでないと、造る事は出来ません」

レックスは毅然とした態度で、卓を挟んで向かいに座る男を見た。

面布の中で、男がふ、と笑う気配がした。

「…なるほど、」

「？」

レックスが怪訝そうに首を傾げる。

男は声を低めて、

「依頼したのは確かに私、

しかし造って頂きたいのは私のゴーレムではありません、

レックス「ジェラルディン殿」

名乗ってもいないのに呼ばれ、レックスは軽く目を見開く。

マリーが話したのだろうか、

いや、それは考えにくい。

「…あの…？」

「いや、失礼」

言って、男が布を肩に落とす。

露になったその顔を見、

レックスは「あ」と声をあげた。

「あなたは……」

男はどこか決まり悪げに笑う。

「試すような真似をして申し訳ない。

私はファントム・コードメンバーとしての貴男の人となりは存じ上げていたが、

造獣師としての貴男は知らない。

ゴーレムを欲しているのは大切な御方ゆえ、

改めて確認しておかねば安心できなかったのです。

ゴーレム造りは、命を預ける大事ですから」

言って笑った男を、レックスはどこか茫然とした表情で見やる。

「はい、あの…」

「依頼人はお約束通りサンクレーンでお待ちしております。

共に参りましょう、
レックス殿」

ボサボサの頭を掻き、レックスがやっと笑った。

「よろしくお願いします、

…ワヤンさん」

…陽が昇るのとはほ同刻、
クリスは昨夜の寝床にした荒ら家を出た。

しばらく人里がない道程だったので、無人の家を借りたのだった。
旅の連れの青年はまだ眠っていたようだが、あまり気にはしていない。

…朝焼けが目染むほど鮮やかで、クリスは何かを揺り動かされる。

(…なんか変だ、おれ)

ごく最近になって、記憶の奥底を何か蠢くような感じがする。

セドナでの一件からだろうか、
それとも、その後に立ち寄った村である事件を聞いたときからだろ
うか。

ひどく胸の奥が騒ついて止まない。

クリスは屈みこみ、ぼんやりと地平を見つめた。

どうしてだろう。

この迫り上がる不安は何だろう。

これが“不安”だ。

……クリスはそう確信していた。

(……かとり……)

…ああ、まただ…

(…かとり、きこえる?……)

聞こえるわ、

貴女は誰なの?

(…か…り、きこ…る?……)

聞こえているわ、

貴女は私の声が聞こえていないの？

(…きこ…た…)

聞こえる？

(…ああ…、

きこ…た…、…

…つとどい…た)

聞こえるわ、

でもかすれてしまうの。

貴女には私の声は聞こえるの？

(…きこ…るわ、…

でもはっ…り…は…こえな…の…)

同じだわ…、

貴女も同じように聞こえているのね、

貴女は誰なの？

なぜ私の名前を知っているの？

(…たし…は…

…り…る…)

…

唐突に鮮明になった意識を自覚して、

歌鳥はガクンと頭を落とした。

「…あ…」

歌鳥は部屋を見回す。

先日体調を崩してから逗留している宿だ。

先ほど匿名の客が来て、レックスがその対応に出て行った。

エレナも部屋を出て行っている。

歌鳥はひとり部屋に残されて、しばらく外を眺めていたとき、突然に意識が遠退いた。

そして、あの声が。

（頻繁だわ…、

最近になってから、……）

しかし、今回は少し違う。

（…会話をした……

…やっぱりただの夢や幻聴じゃなかったんだ…）

動揺しつつ、歌鳥は妙に納得している自分にも気付いていた。

ここは、何でもありの世界だ。

歌鳥は感覚を研ぎ澄ましてみる。

自分の意思で“彼女”の声と通じないものかと思ったのだ。

しかし、いくら意識を探り当てようとしても“彼女”の声は聞こえなかった。

…呼び掛けるべき名前も知らない。

歌鳥は小さく溜め息を吐いた。

その時、部屋の扉が開く。

「カトリー!!カトリー!!」

大変だ!!!!!!」

駆け込んできたのは、こちらに来て初めて出来た親友の少女だ。

何やら慌てて、血相を変えている。

「ど…どうしたの、

ヴィヴィちゃん」

あがった息を整えながら、エレナは途切れ途切れに言葉をこぼす。

「さっ、き、来た客、

やっぱゴーレムの、依頼人、関係だっ、た、んだけどっ……」

「う、うん……」

「その依頼人、すげえ大物っ……」

「盗み聞きは良くないよ、
エレナさん」

突然背後から声を掛けられ、エレナは文字通り飛び上がる。

「レッツ、レックス！」

いつも通りの笑顔を浮かべたレックスの後ろに、

穏やかながらどこか威厳のある中年の男が微かに苦笑して立っていた。

歌鳥は首を傾げながら、とりあえず立ち上がってお辞儀をした。

「初めまして…」

生来の人見知りの為、声に僅かな緊張が滲む。

それを察してなのか、挨拶に応えた男の声はとても柔らかかった。

「初めまして、

私はワヤン＝テンペストと申す者。

ファントム・コードの方々には10年ほどお世話になっております」

歌鳥は少しキョトンとしてレックスに視線を向けた。

「お知り合いからの依頼だったのですか？」

「うん…、
そういう事だったみたいなんだけど、
ちょっと違うみたい…」

「？」

ワヤンが小さな笑い声を零した。

「私はただの仲介です。」

あいにく、私はもうゴーレムを持ってませぬので」

“もう”という部分が引つ掛かり、歌鳥は首を傾げてワヤンを見る。

彼は笑って頷く。

「昔、持っていた時分もあつたのですが失いましたので」

「そう…、ですか」

どこまで事情に踏み込んだものやらわからず、
歌鳥はただ曖昧に笑って見せた。

とにかく、この男はレックスと顔見知りのようだし、付き合いも長
いらしい。

歌鳥はようやく緊張を解いた。

「よろしくお願いします、
ワヤンさん。」

私の名前は歌鳥です」

頷き、ワヤンは次いで部屋の扉の陰に回っているエレナに顔を向けた。

「そちらのご令嬢も、是非お名前を」

エレナは狼狽したように「え!？」と声を上げた。

歌鳥が不思議そうにその様子を眺める。

「ヴィヴィちゃん？」

どうしたんですか？」

「だ…だって…」

「？」

ワヤンが明るい笑い声を立てる。

「そうお固くならずとも。」

私自身はただの元・軍人でござれば」

エレナは妙な表情を顔に張りつけたままヒョコヒョコと歌鳥の隣に移動して彼女の背に回る。

いつものエレナらしくない行動だ。

「本当にどうしたの？
ヴィヴィちゃん」

キョトンとしている歌鳥に、エレナがヒソヒソと耳打ちした。

「
…え？」

【砂漠の聖地】

夏になると、聖地ヴァナディースを抱くナスターシャ砂漠の暑さは過酷になる。

昼間の灼けるような日射しを避ける為に昼夜は逆転し、旅人も夜に歩く。

グレンとキリエもまた、月の浮かぶ夜空の下で砂の地平に向かい歩いていた。

2人だけで、ではない。

同じく聖地を目指す旅人達と隊列を組んで、徒歩で向かっているのだ。

遮るもののない砂漠の空を飛ぶのはあまりに目立つ。

2人は風避けのマントをすっぽりと被り、慣れぬ砂地に足元を遊ばれながら進んだ。

*

本格的な夏はまだとはいえ、砂漠の暑さは厳しい。

グレンたちが聖地に到着したのは正午前、
昼時だというのに街に人通りはない。

街並みは、道の上にも日除けのテントや天幕が多く、そのどれもが
砂を浴びてどこかくすんだ色をしている。

ただ、丘上の神殿の威容は見事だった。

「あれが…」

「ヴァナディースの
ノアトゥーン神殿」

言って、グレンは小さく息をついた。

「暑……」

無言のまま頷いて、キリエは街を見回した。

「とにかくまずは宿をとりましょう。

休息は必要だし、

何よりもまず人に会わなければ話にならないわ」

*

聖地だけあって、どここの宿を覗いても巡教者や礼拝者の姿を見る。

だが他にも旅人は多く、
彼らはどこか“難民”にも似た風情があった。

…リーヴダリルの情勢が、今は不安定であるという事を確認させられているようだ。

バルカシオン派の施政下にいた人々が圧政に堪えかねて逃げてきたのか、

反バルカシオン派の勢力下の民がバルカシオン派を恐れて逃げたのか。

グレンとキリエは表街道をしばらく歩いた後、
格式としてはかなり上等の宿に入った。

人の目や耳を気にするとそうならざるを得ない。

「昼間はみんな寝てんのかね」

2つとつた部屋の内、

グレンの寝室となる部屋にキリエが来ている。

ソファアに腰掛けたまま、キリエはグレンの眩きに対して軽く肩をすくめてみせた。

「寝ているかどうかは知らないけれど、

この暑さでは外での労働は無理でしょうね。

これでもまだまだ本番ではないというのだから呆れるわ」

「あんまり長い滞在は御免だなあ……」

卓の上の水差しを取り、グレンは2つのカップにそれを注いだ。1つをキリエに差し出し、もう1つを飲み干す。

「何か起こると思うか」

「何かは起こるでしょうね、
でなければファントムが私達をこんな所に寄越すわけがないわ。

ボスの言葉を借りるなら、私達は万年人手不足なんだから」

グレンが僅かに苦笑めいた表情を浮かべた。

キリエが腰を上げる。

「どうした？」

「とりあえず宿の人間に街の様子を聞いて来るわ。」

礼拝に出掛ける人達の姿も見たし、そういう場所なら人も集まっているという事なんでしょう。

そちらの方にも行ってみる。

貴男は寝ていて結構よ」

自覚があるのかないのか、キリエの高飛車な口調が少しグレンの癪

に障る。

「任務の内だ、俺も行く。」

「つか、外には俺が行く。」

お前は宿の連中と涼しい所で話してろ」

キリエの眉根が寄る。

結局のところ、この2人は似た者同士なのだ。

【白き王の下僕たち】

…帝都イザヴェルより北、
イアルビーズ市。

街の外れの運河に掛かる大橋の下に、隠れるようにして建つ家がある。

規模としては中流階級の民家と同じような外観だが、中は地下室がある分かなり広い。

もっともここに入出入りする者など数が知れており、少なくともこの街の住民の中に、この家の住人がどのような人物なのか知る者はいない。

陽も落ちて久しく、月が中天にさしかかる時刻、

石畳の路を1人の女が優雅な足取りでその家に向かっていた。

豊かな金髪を波打たせて、肉体のラインを強調した装いと、動作の一挙手一投足から強烈なまでの色香が零れる。

それらに逃えたように顔立ちには華やかで、鮮やかな紅を塗った唇が白過ぎる肌の上にやけに際立っている。

女は、古いがよく手入れの届いた扉に手を掛けた。

長い睫毛の下の碧眼を巡らせて、甘ったるい声を部屋の暗がりに向け掛ける。

「いるう？」

返事はない。

女は躊躇なく足を踏み入れ、呼び掛けを繰り返した。

特殊な道具や小難しそうな書物に溢れかえった部屋を進み、何度めかの呼び掛けで彼女はやっと応答を聞いた。

地下室の方からだに見当をつけ、歩調を速めて奥へ進む。

女がすらりとした足を組み、階段を上がって来る足音を待ち伏せた。

「こ・ん・ば・ん・はあ」

「くんばんは…」

のっそりと顔を出した男は歳の頃16〜18、少年と違っていいような容貌だった。

あどけなさすら残る顔立ちは表情が暗く、どこか卑屈な、内気そうな色を青銅色の瞳に浮かべている。

窺うように女を見上げ、手にした本を掲げて顔を隠すような仕草をしながら
その横をすり抜けた。

彼が頭を掻くと、ろくに櫛も通していないような藍色の髪が目元を隠した。

「ね〜え？」

ナイトメアはあ？」

女の媚びるような声音に、少年がちらと目を上げる。

「帰ったよ…」

「ええ〜？もうお？」

この辺りに来たって聞いたから顔を見に来たのにい」

「シグマなら来るよ…」

「あんなむさ苦しい男に用はないの〜、

ナイトメアに会いたいのぉ〜、

……、？、シグマ？

何で？」

少年はランプに灯りを点けて、ゴソゴソと机を探っている。

「なんか、ファントム・コードにやられて身体が結構欠けちゃったんだって…、

ナイトメアさんの血をもらって修復したけど足りないから、僕が……」

女が鈴を転がすような声で笑う。

「あっはははあ〜、
ざ〜まあ〜」

ちよつとあたし達より手柄を立ててるからって、
大きい顔をして調子に乗るからよん

…でもナイトメアの血をもらったってのは聞き捨てならないわねえ
〜、

なんかムカつく〜」

少年はちよこんと椅子に腰掛け、

埃の被った棚から瓶詰めの実を取り出して口に入れた。

「なんかあたしだけ、最近ナイトメアと会ってない感じだし〜、

もお彼の棲み拠まで押し掛けちゃおっかな〜、

でもエツダがいい顔しないのよねえ〜」

「…ベルローズがナイトメアさんの所の子をつまみ食いしようとするからでしょ…」

少年の呟きに、女・ベルローズが身を乗り出す。

大きく開いた胸元から質感に欠ける肌が覗く。

「だつてえ〜、

あそこ、美味しそうな若い子ばかりなんだも〜ん、

別にエツダのものでもないし、

少しくらいイイじゃない、

ねえ?」

「勝手に家を壊されていい気分する人はいないと思うよ……」

塵の浮いたグラスの水を頓着もなく飲み干して、少年が陰気な声を零す。

「それより、ベルローズも“仕事”あるんじゃないの…?」

「ん?、あるわよお。

でも“シャドウ”にやらせてるから大丈夫〜、

使えるコを造ってくれて本当にアリガトねえ、
フィリオ」

頭を抱き寄せようとするベルローズの手を払い、
フィリオと呼ばれた少年が不機嫌そうに顔を伏せた。

ベルローズが、あら・とそれを追って顔を覗き込む。

「怖がらせちゃったあ？

大丈夫よお、

フィリオのコトは食べたりしないから」

「そんなんじゃないよ…。

それより、もう帰ったら？

ナイトメアさんはいないし、シグマと鉢合わせするのモイヤでしょ
?……」

「別にいい？

凹んでる顔を拝んでやるのも愉快だわ、

でも、そうねえ、

その後が面倒そうよねえ。

わかった、帰るわ。

またねえ」

ひらひらと手を振り、女は優雅に踵を返して部屋を出て行った。

フィリオは小さく溜め息を吐き、木の実の瓶を片手に持ったまま再び地下室へ続く階段を降りた始めた。

【オアシスの少女】

…ところでグレンとキリエが聖地ヴァナディースに到着した頃、至極平穏に見えたこの地で、実はその裏で大きな事件が起きていたのだ。

…しかしそれは市街の民衆には報されていなかったため、グレン達の耳にも入らなかった。

*

…2人はこの街に着いてからは基本的に別行動をとっていた。仲が悪い訳ではないが、似た者同士であるが故に衝突しやすい。

それを本人達も不本意ながら自覚しており、必要に迫られない限りはあまり行動を共にはしないのである。

ただその割によく任務で組まされるのは、能力的な面で相性が良いからだろう。

この日グレンは、この土地の猛暑とあまり実りのない情報収集に辟

易しながらも、陽が傾き始める時刻を待って宿を出た。

キリエとはもちろん部屋は別々だが、宿に居る限りは顔を合わせていないとなんとなく互いに避け合っているようで気まずい。

だからと言って同じ部屋で顔を突き合わせているのも落ち着かない。

そもそもグレンは女子が苦手だ。
なのにやたらと女子と組まされる。

(……まあ、一番苦手なタイプとはあんまり関わらないで済んでるからいいか……)

内心で小さく呟いたところで、グレンはその“一番苦手なタイプ”に声を掛けられた。

「あの…、すみません」

「…？」

振り返ってみると、いかにも不安そうな表情をした少女が薄布を頭に被って立っている。

「あの…、6歳くらいの男の子を見かけませんでしたか？」

グレンは僅かに眉をひそめる。

グレンより少し年下だろう、

大人しそうな、素朴な風情の少女だ。

対してグレンは、見た目は少しガラが悪く見える。

こういった類の少女が声を掛けるには少し勇気がある筈だが、まだ人通りの少ない往来では、選択肢がなかったということだろうか。

グレンは出来るだけ雰囲気のを和らげた。

「男の子…？」

見てないが……

どうかしたのか？」

「いえ…、少し目を離れた隙にいらなくなって……。

ごめんなさい、

失礼します」

お辞儀をして、踵を返そうとする少女を、グレンは反射的に呼び止めた。

「あ、ちょっと……」

少女が少しびっくりしたような表情を見せた。

「はい…？」

「あ…、いや。

…どんなガキだ？

6歳くらいなんだな？」

「え、ええ……。」

「……あの……？」

「その辺りでひっくり返ってたらコトだろ、この暑さだし……、」

その、捜してやるよ、俺も」

グレンはこういう大人しそうな女子が苦手だ。

同時に、こういう大人しそうなタイプに弱い。

*

「……弟なんですけど……、」

あ、血は繋がってないから似てはいないです。

私、街の外れの孤児院のお世話になっていて……」

少女はそう言って身の置き場に迷うような仕草を見せた。

居心地が悪いのはグレンも同じだが、

根が善良なので放っておくのも気が引ける。

幼い子供に絡む事なら尚のこと。

「……ああ、あの……、」

私、サーシャといいます」

「、ああ、俺はグレン」

グレンさん、と口の中で呟いたサーシャは、再び辺りを見回して頭の布を被り直した。

明るい茶色の髪を首の後ろで緩く束ねている。肌は砂漠に住む人間としては白い方だろう。

この土地で生まれ育ったわけではなさそうだが、とグレンは見当をつけた。

「旅の方なんですよね…、

すみません、

面倒をお掛けして…」

「いや…」

言って、グレンは言葉の継ぎ穂を失ってしまふ。

連れ立って歩きながら、沈黙に耐え兼ねたのか、サーシャが控えめに口を開いた。

「うちの孤児院には子供達の世話をして下さる神父さまや修道士の方がいらっしやるんですけど、

巡教のために留守になさることも多くて……。

女子供ばかりでは何かと心細くなるのでしょっね、
幼い子たちは我儘になるんです……。

今日もイタズラをして…、
叱り過ぎたのかしら、

その後、他の子の面倒をみている隙に飛び出してしまったみたいで
…」

それを聞いて、グレンは少し眉をひそめた。

「じゃあ今、その孤児院には子供達の世話をする奴は？」

「あの…ええ、

一番年長の子に任せて…」

「いくつの」

「11歳の…」

「孤児院って、何人くらいいるんだ？」

「子供は7人です。

私も含めて」

グレンが気遣わしげな色を瞳に浮かべた。

「てことは、11歳の子供が1人で5人も面倒みてんのか？」

「いえ、4人です」

「え」と言つて、グレンが狼狽して指を折る。

計算違いに慌てるその様子に、固かったサーシャの表情が和らぐ。控えめに、くすりとだけ笑った。

グレンはひとつ咳払いをして、サーシャに向いた。

「ガ、ガキは俺が捜してやるから、

お前は戻った方がいいんじゃないか？

大変だろ」

「いえ……そんな」

「なんて名前のガキなんだ？

捜してやるよ、

それに、もう帰ってるかもしれないぜ、

この暑さだし」

サーシャは迷うように目を泳がせた。

捜している子供の事も心配だが、

孤児院の方も気に掛かるのだろう。

いかにも優しそうな、面倒見の良さそうな少女だ。

「……………じゃあ……………」

本当にごめんなさい、

お願いします、

孤児院は向こうの大通りを東側に曲がって、
用水路が右手に見えるようにしばらく歩くとすぐにわかります。

この辺りの人なら皆さん知っていますから、
どうしてもわからなかったら聞いてみて下さい。

子供の名前は……」

その時、

人通りの少ない往来に、けたたましい車輪の音と蹄の音が響いた。

何事かと目をやった先で土埃が舞っている。

「なんだ……？」

「まただわ……」

サーシャの呟きに、グレンが振り向く。

「“また”？」

「ええ……、」

最近、やけに忙しい様子で馬車が通るんです。

なんだか危なっかしくて……」

サーシャの表情が曇る。

そうして、はっとしたようにグレンに向かって深々と何度も頭を下げた。

「じゃあ…、

お願いします」

…少女が立ち去り、その姿が見えなくなってから、グレンは彼女の弟の名前を聞きそびれた事に気が付いた。

(…まあ…いいか、

…あの娘の名前は聞いているし)

見つけたら、本人にサーシャの名前を出して確認すればいい。

ひとり頷いて、グレンは街並みに視線を滑らせた。

*

この日、キリエは宿から少し足を伸ばして、聖地の象徴であるノアトゥーン神殿に向かっていた。

参拝者たちに紛れ、何かしらの情報が得られないかと思ったからだ。

本来なら、そういった調査等の任務はグレンやキリエの職分ではない。

性格的にも、能力的にも向いていないのだ。

しかしファントム・コードは万年人手不足、

状況に応じて、何でも出来なければならない。

キリエは陽避けの紗を頭からスッポリと被り、大聖堂への階段を昇った。

神殿は街を見下ろす高台にある。

砂漠からの濁いた風に吹き付けられて、キリエは額に滲んだ汗を拭いた。

同じような様子の参拝者や聖職者たちが、階段の上にちらほらと姿を見せている。

ノアトウーン神殿は夜間も開放されている珍しい礼拝堂だ。

この時期は、神官達も夜に日課をこなしている。

修道の為とはいえ、この猛暑の中を働くのはあまりに酷だからだ。

キリエは空を見上げた。

今宵は新月、

陽が落ちてからでは空からの灯りが乏しくなる。

ここに辿り着くまでに思ったよりも時間がかかった。

帰る頃には、今この砂漠を緋色に染めている夕陽は完全に地平に沈んでいるだろう。

そのとき、

階段の下で馬車が留まる音が聞こえた。

キリエは振り向き、同じように階段を昇降していた人々もそちらを見やる。

大聖堂の階段の下には兵士達がおり、両脇には門扉のようにそびえる煉瓦造りの塔が建っている。

そこから慌ただしく輿が運び出され、馬車の前に降ろされた。

その様子を見、階段にいた全ての人間が脇に寄って跪いた。キリエもそれに倣う。

どこの誰だかは知らないが、輿に乗って聖堂に入ろうというのだから相当に身分のある人間だろう。

こういう場合、庶民は道を開けて貴人が通り過ぎるのを待つしかない。

跪いたまま、キリエはさりげなくそちらに視線を向ける。

窺うようにして観察していると、馬車から降りてきた人物の姿が見て取れた。

キリエは息を飲む。

“その男”は紺青のローブを纏い、顔を隠すようにヴェールの付いた帽子を被っていた。

それが風になびき、一瞬だけ“その男”の貌を露にした。

ここにいる誰も、その一瞬では“その男”の顔など認識は出来なかつたろう。

そもそも、認識出来たとして“彼”が何者かなど解る筈もない。

キリエだから判ったのだ。

(…嘘でしょう…、

何故、こんな所に…!…)

*

…黄昏の路地を、1人の子供が歩いている。

どこかふてくされたような表情で、明らかに人目を避けるように道を選び、流れる汗を軽く拭った。

日陰に入り込み、しゃがみ込んだ少年が小さく鼻をすすする。

「…サーシャのバカ」

口の中で呟いて顔を伏せた彼の耳に、静かな足音が聞こえた。

それが目の前で止まり、少年は顔を上げる。

朱色の光をも弾く純白の長衣を纏い、白蛾の顔をした青年が、碧い瞳で少年を見下ろしていた。

「…あ、……………」

*

【僭王の末子】

…朱から青紫へと空の色が変わった頃、
グレンは自身を呼ぶ女の声を聞いた。

振り向くと、駆け寄って来る少女の姿が目映った。

「キリエ」

「大変よ、すぐに来て」

グレンは即答しかね、

「いや、今ちよつと…」

と言い差そうとしたが、
お構いなしにキリエがその袖を引く。

「神殿にとんでもない人物が姿を見せたわ」

「ちょ、ちよつと待ってくれ、

俺…」

「フラウンケル公子よ」

その名を聞き、グレンの思考がしばし止まる。

「それ……」

「皇帝バルカシオンの末の息子よ、

間違いないわ、

帝都に居た頃、何度か顔を見たことがあるの」

キリエの口調に合わされて、自然と足並みも速くなっていく。

「な、なんでそんな奴が、こんな時期にこんな所に来るんだ？」

聖女クローディアはここにはいないんだろ？」

「目的なんて知るわけないわ。

とにかく調査する価値は出てきたという事よ、

聖地で何かが起こる、

……いいえ、

もしかしたら、既に何か起こったのかも ……」

そう、

既に起きていたのだ。

…

皇帝バルカシオンには6人の子がおり、その内の3人が息子である。

フラウンケルはその三男で、6番目。

今年で24歳、

父親似の長身と、端正な顔立ちをしている。

父親ほどの悪評はないが、それは彼が軍人として国境地区などに遠征ばかりをしており、

そもそも帝都に寄り付かないからだ。

そのため結婚して8年になるのだが、未だに子はいない。

ちなみに彼の妻は、現在のセヴァルスタ総督・ヴェルンド卿の娘である。

*

ノアトウーン神殿、
貴賓室。

神官たちは突然の皇族の来訪に困惑し、
そして丁重に扱いながらも疑惑とほんの少しの敵意を滲ませた視線を向ける。

表向き …… 体裁としては、神殿と皇室は敵対はしていない。

敵対しているのはあくまで“バルカシオン公爵”と“諸侯13連名”なのである。

クローディアは神殿の長だがれっきとした皇族の一員、
フラウンケルは彼女の血縁だ。

…しかし全ては“表向き”の話である。

バルカシオン派は明らかにクローディアを政敵としているし、

先代皇帝の時代よりも、神殿への帝都からの寄進が減っている。

両者の関係は明らかに悪化している。

そんな中でのフラウンケルの密行。

密行である為、一軍も連れてはおらず、

公事ではないだろうが、

それ故に一層訝しい。

慌てて貴賓室に入ってきた初老の神官が深々と頭を下げ、跪いた。

「これはこれは…、

フラウンケル殿下…」

「長々とした挨拶はいい」

短く言い放ち、フラウンケルは立ち上がった。

「ここで起こった事が知りたい。

シスター・ユーリンは何処にいる」

顔を伏せたまま、神官は返答に詰まる。

何かを堪えているようにも見えた。

「ユーリンは……」

「シスター・クローディアの留守を守るのは彼女だった筈。

その彼女が私の来訪に顔を出さぬという事は、
やはり報告は本当だったのか。

シスター・ユーリンの所在は」

「…存じ上げませぬ…！」

血を吐くような声音であった。

「7日前に、突如お姿を消されました。

部屋は荒らされ、床には夥しい血痕、

兇事が起こったことのみが明らかであり、

シスター・ユーリンはその所在どころか生死すら ……！」

床に爪を立て、崩れるように額を床に付ける。

その神官の様子を見下ろして、フラウンケルは小さく歯噛みした。

(…遅かったのか…！…)

膝を着き、神官の肩を軽く叩く。

労うように、慰めるように。

「…この件は私が預かる」

神官がキョトンとしたように顔を上げて、フラウンケルを見た。

「殿下…？」

頷き、フラウンケルは立ち上がった。

迷いのない足取りで扉に向かう。

(…イリアス…マツクールに続いて、
シスター・ユーリン…)

…貴方に情はないのか…!!…)

内心の呟きを聞き届ける者はいないが、
それでも彼の苦渋の表情は幾人かの神官たちの目に留まり、心に留
まった。

勇み足で神殿の方角へ向かうキリエの肩を、
グレンが押し留めた。

「待てよ、キリエ！」

いくらなんでも考えなしに神殿に行っても、相手が相手だ、
簡単には接触は出来ねえぞ！」

キリエが、そんな事はわかっている、と振り向いてグレンを見る。

「それでも行けば何か分かるかもしれないじゃない、
少なくとも、本人に接触は出来なくても
本人に接触した人間には接触出来るわ。」

彼の妻はヴェルンド卿の娘、

“ルビー・エーテル”の精製に関わっていたヴェルンド卿の、よ。

その彼が、ファントムが何かあると睨んだ土地に姿を見せた。

それを軽視は出来ないわ」

「それはそうなんだが、
少し待ってくれ。」

今は俺ちよつと……」

そこで、キリエはグレンのどこか煮え切らないような態度に気が付き、
不審そうに眉を寄せた。

「何なの？」

いつもならグレンの方がいきり立ち、キリエがそれを押さえる、
というのが彼らのパターンだった。

今のような優柔不断な態度はグレンには珍しい。

グレンが軽く頭を搔く。

「今、俺ちよつと頼まれ事があって、

それを放ったままじゃ行けねえんだよ」

「頼まれ事？」

キリエが一層眉をひそめたところに、
澄んだ女の声が響いた。

「グレンさん！」

振り向くと、往來を駆けてくる小柄な少女の姿が見えた。

「サーシャ」

「ああ、よかった。

やっと見つけました。

ごめんなさい、

グレンさん。

弟ですが、先ほど戻りました。

怪我もなく、無事でした。

本当に、ご迷惑をお掛けして……」

頭を下げるサーシャを見、グレンは穏やかに息を吐いた。

「そうか、よかったな」

「はい。

ありがとうございました」

グレンを見上げて、サーシャが微笑む。

それにぎこちなく笑い返し、グレンは隣のキリエに視線を向けた。

「悪い、もう大丈夫だ」

キリエは先ほど眉をひそめた表情のまま、グレンとサーシャを見比べた。

「自身に課せられた使命を差し置いて、女性からの頼まれ事を優先させていたというわけ？」

明らかに刺のある物言いに、サーシャがびくりと肩を震わせ、グレンが僅かに不快そうな色を瞳に浮かべた。

「困ってる人間を放つてはおけねえだろ」

「もう結構よ。」

そういえば元々、私達は別行動をしていたのだったわ、忘れていた。

神殿には私ひとりで行く。

貴方の手は煩わせない」

踵を返し、キリエは颯爽と歩いて行く。

その背中を見、サーシャがおろおろとグレンとキリエを見比べた。

「あ、あの…」

「いい、気にすんな」

「でも、私達のせいだ…」

「あいつは気が短えんだ、いつもの事だ。」

それより早く帰ってやれ。

ガキ達が待つてるだろ？」

サーシャはまだ、小さくなるキリエの背中を見つめながらも
グレンの言葉に緩やかに首を振った。

「今は大丈夫です。」

ちょうど神父さま方が巡教から帰って来られたので」

「そうか、よかったな」

「ええ、

ですから、ご迷惑をお掛けしたお詫びに夕飯にご招待でも…と神父
さまが仰いまして…」

でもお連れの方がいらしたのですね、

ごめんなさい、

怒らせてしまったみたいですね……」

言って、サーシャは顔を上げてキリエの歩いて行った方向を見た。

「私、追いかけます。」

グレンさんは本当に親切で私の頼みを聞いて下さったんだという事をわかって頂かないと」

「いい〜って、いいって。」

アイツは頭が固いんだから、

返ってお前が嫌な思いをするだけだ」

「けれど」

「放つときゃいいんだ、

本当、このくらいの事はいつもの事なんだから。」

あと、メシもいい。

結局、何もしてやれてないからな」

「そんなこと」

「むしろ行ったらアイツの機嫌がますます傾くだろう、

だからいい、

悪いな」

言って、グレンは軽く手を振ってサーシャに背を向けた。

「あ、あのっ…、
本当にありがとうございました！」

背中越しに頷いて、グレンは少し足を速めてキリエを追った。

*

彫りの深い貌を不機嫌そうに歪めながら、キリエは地面を蹴るように歩く。

(懲りない男)

あの少女。

少し、ほんの少しだけ、
似ていた。

キリエではない。

エレナでもない。

…歌鳥なら似ている。

彼女を保護して数ヶ月、

グレンが極力、彼女を避けていた事をキリエは知っている。

歌鳥は“あの子”に少し似てるから。

(…引き摺っている自覚があるくせに)

ずんずんと歩いて行くと、夕刻同様キリエは神殿の階段下に辿り着

いた。

陽が落ちて数刻、
かなり暑さが和らいでいたので、
キリエは頭に被っていた布を肩に落としていた。

紺碧の髪と整った顔立ちが露になり、
しかもキリエは立ち振舞いもかなり目立つ。

ことに、今のように怒りに任せた足取りは。

周辺にいた人々の視線を一身に集めている事に気が付き、
キリエは少し頬を染めて紗の布を被り直した。

…そのときだった。

「…ジェラルディン…」

少し離れた場所から聞こえた、
その一言。

弾かれたように振り向いたキリエの目に、
1人の男の姿が映る。

食い入るようにキリエを見つめるその男は、
軽い武装をした軍人風の男だった。

しかと目が合い、
男が改めて呟く。

「ジェラルディン家の娘ではないか？」

キリエは後退さるような仕草を見せる。

「貴方は……」

「やはり、そうか。」

そなたは“神騎匠”の一族の娘だな、

覚えてはいないか？

私はそなたの父上にゴーレムを造って頂いたのだ。

その時、何度か会った事がある」

キリエは複雑そうに表情を変えぬまま、男を見つめている。

覚えていない、と、その反応が言っていたが、男はそれに気分を害した様子はなかった。

「無理もない。」

そなたは幼かったから。

しかし生きていたのだな。

“あの事件”以来、消息不明と聞いていたから気に掛かっていた。

健勝そうで何よりだ」

「…恐れ入ります……」

おそらくは、フラウンケルの従者。

キリエはそう見当を付けた。

…都合がいい、

この男はキリエに対して好意的だ。

この男からなら何かを聞き出せるかも

…

そう思い、キリエが口を開く前に、
男が言葉を掛けてきた。

「しかし、聖地で会うとはな。

「ご家族は君の安否を知っているのか？」

「…え？、え…ええ」

「そうか。

それなら良いのだが ……」

その後の彼の一言が

波乱を呼ぶ事となる ……

【渦中のひと】

…サンクレールは巨大な山の斜面を切り拓いた街である。

巨大な断崖を背に、扇形に広がる街は立体的で、坂道が多い。

林業が盛んで、街の至るところから木の匂いがする。

歌鳥たちを乗せた馬車はその街に入ったのは陽も落ちかけていた刻だった。

前の街で御者を代わったワヤンの案内でここまで来たが、いかにも物慣れた風の彼の様子は頼もしかった。

馬車の中から外を眺めていた歌鳥に声が掛かる。

「カトリ、平気？」

エレナだった。

歌鳥は顔を向けて微笑む。

「大丈夫ですよ、

心配かけてごめんなさい」

「なら、いいけどね」

2人の少女の様子を眺めながら、レックスも頷く。

「僕の“仕事”は数日かかるから、

その間はゆっくりしているといいよ」

歌鳥は少し申し訳なさそうに頷いた。

これは仕方ない。

何か手伝おうにも、専門的過ぎて出来ることは何もないのだから。

巨大な山岳の陰に位置するこの街は落日を迎えるより先に闇が降る。初夏にしては黄昏が早く感じられた。

もともと、常夜のファントム・コードのアジトで過ごしていた歌鳥たちにしてみれば、

季節による昼夜の差など、実感に欠けてきているのだが。

木材を積んだ牛車を引く木こりや、

道具箱を担いだ職人風の男たちとすれ違いながら、

馬車は道を進む。

街の中腹辺りに位置する一軒の宿に着くと、

ワヤンは馬車を厩に預けて来る、と3人に告げた。

「先に入ってらして下さい、

部屋をとって頂いた後に、主の元に案内致します」

その言葉に、エレナの顔が固くなる。

その様子を見、歌鳥が僅かに苦笑した。

「大丈夫？」

「お・おおう…、

…まあ、別にオレは顔出さなくてもいいよな？」

「主は皆様とお会いしたいと仰るでしょう、
ぜひ御同席ください」

と、ワヤンが言つと「え」とエレナが後退つた。

馬を引いていくワヤンの背中を見送りながら、
エレナがレックスに顔を向けた。

「レックスは平気？」

緊張しない？」

「うん……、」

多分、してるんじゃないかなあ」

「してる反応じゃねえよ」

「いや、実際に会つたら違つんだらうけど」

レックスが鈍色の癖毛を掻く。

歌鳥は宿の扉の前に立つて、街の風景を見下ろしていた。

起伏に富んだ山間に点る灯りは、歌鳥の育つた街に少し似ている。

歌鳥は少しぼうつとしてしまい、そんな少女の顔をエレナが覗き込む。

「カトリ？」

「
…あ、
うん、何でもない」

笑って言って、歌鳥はエレナと一緒に、レックスが手招きする宿のロビーに向かった。

*

…例によって大部屋を一つ取り、3人が荷を解いていた所だった。

狼狽した様子で、ワヤンが扉を開けて入って来た。

「申し訳ない、
主は数刻前に、宿を引き払っておいでです」

「え？」

レックスが僅かに眉をひそめ、
エレナが弾かれたように腰を上げる。

「それって」

「宿の下女に言付けを預けておられました。

街の外れの教会で待つ、と ……」

ほんの少し思案して、レックスが立ち上がった。

「行きましよう、
ワヤンさん。」

君たちはここに居て」

「レックスさん」

歌鳥が不安そうな視線を向ける。

「何かあったという事では……」

「だからこそ」

短く言つて、レックスが扉に向かう。

振り向きざまに、緩く笑つた。

「ロイドさんに通信してみるから、

じきにゴーレムを通して君たちにも指示がいく。

僕のことは心配しなくていいから、とにかく気を付けてね。

単独になつては駄目だよ」

「待てよ、レックス」

エレナが駆け寄り、レックスの袖を掴んだ。

「荒事になる可能性があるなら、オレが行く。

お前、動けねえんだろ？」

オレは色々ヤバい事とかも慣れてるし」

「エレナさん？
でも」

「ヴィヴィ、て呼べっつゝの」

エレナが荷から短剣を取出してベルトに差し込む。

「ドールとかに関係するなら遠慮するけど」

ワヤンに問いかけるように首を傾げるエレナ。

男は曖昧に首を振る。

「詳細は、何も。」

しかし“白い血の民”に関わるトラブルだったなら、
身を隠す必要はありませんでしょう。

主はその方面に通じておいでです。

…いいえ、

主の元へは私ひとりで参ります。

どうかお三方はこちらでお待ちを」

「いいよ。行こう」

ワヤンの言葉を遮り、エレナが先に立つ。

歌鳥がその背中に声を掛けた。

「ヴィヴィちゃん」

その声に振り向き、エレナは切なげな表情を見せた。

「行ってくるよ。」

“アイツ”もきつとそうする

歌鳥が僅かに目を瞠る。

そして、頷いた。

「うん。…

気を付けてね」

頷いて、エレナが扉を出て行った。

複雑そうな表情を浮かべたまま、レックスが耳に手を当てて目を伏せた。

「…ロイドさん、

聞こえますか？

…」

*

黄昏の街を、人影が2つ駆け抜ける。

家路につく市民の流れに紛れつつ、

先を行く人物の、辺りを窺うような仕草には微塵の隙もない。

劣るように背後の連れを振り返し、一言一言声を掛け、あらゆる物陰の闇に意識を向けている。

その人物の被っていたフードが肩に落ちた。

深紫の髪と、玲瓏な女の貌が露になる。

三日月のように切れ長の瞳が煌めくと、それはさながら刃のよう。

周囲に視線をもう一巡りさせて、彼女は連れ立つ相手の手を緩く取り、歩みを進めた。

*

…背後から追ってくるような足音を2人が聞いたのは、市街地を離れて民家の灯りも途絶えた頃だった。

前を歩いていた女が、弾かれたように後ろを歩いていた連れと位置を代えて、懐に手を入れる。

「アイラ」

闇から掛けられた男の声に、女が尖らせていた気配を緩めた。

夜闇に目を慣らしてみると、壮年の男が褐色の肌をした少女を連れて近づいて来る。

「父上殿」

女の声は凜として透った。

頷いた男 … ワヤンが背後のエレナを促しながら歩み寄る。

「何があつた？」

「いえ…、

些細な事かもしれないが、大事をとって。

手間を掛けさせて申し訳ない」

女の口振りはワヤンのそれに似ていて、
先ほどの呼び掛けを納得させる。

ワヤンは娘の姿越し、その後ろの人物に声を掛けた。

「とにかくご無事なら何よりです」

その声に頷いて返した人物が、
ワヤンの後ろに立ったエレナの視線に気付いて微笑んだ。

「そなたは？」

発せられた声は柔らかく、それでいて威厳に満ちた女の声だ。

エレナは思わず身を固くする。

…この女性が。

「…聖女…」

シスター・クローディア……」

…正直を言えば、半分は信じていなかったかもしれない。

まさか、これほどの人物がこんな平凡な街に足を運ぶなんて。

ファントム・コードのような組織に接触してくるなんて。

エレナはファントム・コードに入って日が浅く、

組織の規模を完全には把握していない。

けれど、それにしても。

「本当に……？」

この女性が。

食い入るような視線を受け止めながら、

女性はただ微笑んだ。

…聖女クローディア。

先代皇帝ヘルヴァルド5世のひとり娘。

聖地ヴァナディースの長。

今現在、この国の玉座を望まれている女性。

この女性を御位に就けるために、イリアスは剣をとった

…

夜闇の中でも、その女性の溢れるような気品は明らかだった。

衆知の年齢は48、
その容貌は年相応のものではあったが、それでも目を瞞るほどに美しい。

美貌と若さは必ずしも直結しないことを彼女は体現している。

若い頃は絶世の佳人と謳われたという話も有名だ。
いや、今でもその賛美は有効かもしれない。

それほどに、彼女は類稀な姿をしていた。

言葉を失って立ち尽くしている少女を見やり、
アイラがワヤンに視線を向けた。

「この娘は」

「ファントム・コードに所属しておられる」

「例の造獣師がいる？」

頷いて、ワヤンがエレナの肩をそっと叩いた。
その足でアイラとクローディアを促す。

「とにかく早くあの教会に向かおう。
話はそこで聞く。」

レックス殿などにも知らせを出さねば ……」

【Telepath】

…、

板張りの床を叩くような音がして、レックスは振り返った。

「カトリさん!？」

胸を押さえたまま、歌鳥は息を弾ませて蹲っている。

(…またっ…!…)

頭の中で声がする。

…とり

…かとり…

…歌鳥…!

…歌鳥…!!…!

『逃げて!!…!!…!』

そこには駄目よ!…!』

切り裂くような絶叫。

歌鳥は目を見開いた。

そのとき

『……………い…!』

「!?!」

突然降ってきた女の声。

弾かれたように顔を上げた歌鳥とレックスの視線の先に、

“それ”はいた。

「……?!?!」

「……なっ……」

レックスが呻き、

歌鳥が悲鳴を飲み込む。

決して高くない天井に張り付いて、

首を仰げ反らせた女が歌鳥を見下ろしていた。

顔を覆う黒髪のために、その顔は見えない。

肌は青ざめて、それが返って生々しい。

そして、おぞましきはその下半身。

「嘘っ……」

歌鳥は目が眩む気がした。

女の腰から下は粘液の滴る鱗に覆われた、
巨大な蛇だった。

のた打ち、天井一面を這い回る蛇尾。

艶のない髪の間隙から覗く紫の唇が動いた。

『…きれいな…、』

…あなた……………』

地を這うような、粘つくほどに淀んだ声。

一気に全身が総毛立つ。

そのとき歌鳥は脳裏に声なき声を聴く。

『逃げるの！！早く！！』

女の手が歌鳥を指して伸ばされる。

悲鳴を上げるより前に、歌鳥の足が動いた。

レックスもそれとほぼ同時に動く。

歌鳥の手を取ると、一目散に扉へと走った。

切迫した鼓動の中で、歌鳥は自分の体が自分以外の“何か”によって動かされているようにしか思えなかった。

思考より先に手足が動く。

レックスと並んで廊下を駆け抜け、

曲がり角で宿の下男とぶつかりそうになった。

「わあ!？」
「!?!」

慌てて足を止めた所に、後方から粘液が撒き散らされる音が聞こえた。

振り返った2人の目に、あの蛇身の女が天井から壁を這って追い纏ってくる光景が映った。

血の気が引くような思いでいたところに、歌鳥とぶつかりそうになった男の声が割り込む。

「どうかありませんか？
お客様」

歌鳥が濃紺の目を瞠る。

(見えてないの?)

以前にも、こんな状況があった。

あれは …、

(……ドール)

けれど。

(あれはドールじゃない)

女怪は真っ直ぐに向かって来る。

2人を、否、
歌鳥を目指して。

レックスが歌鳥の腕を引いた。

「行こう」

「レックスさん、
でも」

「大丈夫、
あれは君しか見ていない」

だから他人への配慮は不要だ、と、
根拠はないがレックスはそう歌鳥に言い聞かせた。

とにかくこの娘を逃がさなければ。

（この娘だけは）

それは、ファントム・コードに身を置く者の使命。

怪訝な顔をする下男を無視して、歌鳥とレックスは駆け出した。

レックスの示唆した通り、女怪もまた下男には目もくれずに、その
横をすり抜けて歌鳥たちを追って来る。

宿を出たところで、レックスが膝を着いた。

「レックスさん!？」

「…っは…、…はぁっ…、…っそ…」

歌鳥は今になって思い至る。

昔の怪我で心肺機能が害なわれたため、レックスは激しい運動が出来ないのだ、

そう聞かされていたではないか。

蛇身の女が迫り来る。

黄昏時、

街の灯りはまばら、
点在する灯りは返って闇を濃く染める。

宿の扉、棹に浮かんだ灯りの中から迫る女怪の姿は現実味に欠けて見えた。

「逃げなさいっ!！」

あがりきった息を絞り出して放たれたレックスの叫びにも、
歌鳥の足は動かなかつた。

あと数秒もない。

女の滑りを纏った腕が、
あと数秒で歌鳥に届く。

あれは私を見ている。
私が逃げればレックスさんは大丈夫。

…本当に？

むしろ今逃げたら、レックスさんはあれを足止めしようとするのでは？

私を … 『虹姫』を守るために。

『それが、
ファントム・コード』

…ならば歌鳥は逃げられない。
断じてレックスを置いて逃げることは出来ない。

刹那に近い数秒の中、
歌鳥は凍りついたように迫り来る女怪を見据えていた。

…もう、手が届 …

『体、借りるぞ』

突然脳裏に響いたバリトンの声。

(え)

狼狽する間もなく、
歌鳥の掌が握りしめられて拳を作り、真っ直ぐ前へと突き出された。

女怪の顔面に。

「ええ!？」

歌鳥が動揺の声を上げる。

拳をまともに顔に食らった女は派手に吹っ飛び、蛇の下半身が粘液を撒き散らしながら、のた打ち躍る。

その間にも歌鳥の体は勝手に動き、拳法が何かのような構えを取る。

歌鳥は呆然として自身の体を見る。

すると、いつの間にならうか、

歌鳥の両手は黒い手袋をはめていた。

それだけではない、

歌鳥の服もいつの間にか漆黒の装いに変わっており、ただの革靴だった足まで黒いロングブーツに変わっていた。

首から下が、全て黒。

この装い、

そしてさっき頭の中に響いた声、

裾が翻って、ほのかに煙草の匂いがした。

「…ロイドさん!？」

返答はなかった。

身を起こした女怪が、身の毛がよだつ奇声をあげる。

息を飲む歌鳥をよそに、

歌鳥の足が勝手に地面を蹴る。

腰を捻るようにして回転を加えた蹴撃が女怪の頭を正確に捉えた。

「なにっ……!？」

歌鳥の中に拒絶が生じる。

明らかに人間とは一線を期す生き物が相手だとしても、害を加えることが怖い。

歌鳥が口の中で小さく悲鳴を上げる。

それに気付いたように、漆黒の四肢が追撃を止めた。

身を翻し、レックスの元に駆け寄る。

態勢を直した女怪の視線を感じる。

宿の人間が何事かと顔を出して来て、
街の住民もこちらに視線を向けて来る。

彼らに蛇身の女は見えていない。

ただ、この女怪には実体がある。

その証拠に、彼女がぶつかった壁はヒビが入り、パラパラと破片を零した。

なら、おそらく人間にも触れられる。

歌鳥らにのみ有害なものだとは思えない。

漆黒に包まれた歌鳥の腕がレックスの肩を抱え上げようとしたが、力が入らず、引っ張られるようにして膝を崩した。

怪力になったという訳ではないらしい。

脳裏で、小さな舌打ちが聞こえた。

「そりゃそうだ」

今度ははっきり、鼓膜を通して明瞭に聞こえた。

一瞬。

歌鳥の華奢な体は、突然現れた逞しい腕に抱きすくめられていた。

そして、煙草の匂い。

「ロイドさんっ…」

「逃げるぞ」

短く言い放ち、

ロイドは片腕に歌鳥を、

もう一方の腕にレックスを抱えあげて地面を蹴る。

その跳躍で3人は夜の空に舞い上がる。

「ロイドさん！」

あれをあのままに……」

「ありやあインプットされた獲物しか襲わない」

その一言に、レックスが目を見開いてロイドを見た。

「やはり、あれは……」

「話は後だ、舌を噛むぞ」

街路を歩く人々が、ポカンとしながら宙を駆ける3人の姿を見上げていた。

「ごめん、クリス。」

ここからは1人で行ってくれる？」

いつものように独り言にも似た“通信”の後、

ライズがまったく悪びれもない笑みでクリスを見た。

声を掛けられたクリスの方は、そのとき焚き火に当てていた魚を手
に取ろうとしていたところだった。

首を傾げ、ライズを見る。

「？」

「なんかトラブルがあったらしくてさ、

ボスがカトリちゃん達の方に行っちゃったんだよね。

それでファントム・コードのアジトが今、完全に無人になっちゃってるんだ。

ボスはすぐには戻れなくなっちゃったから、俺が帰って留守番しないといけなくなっちゃった」

事情がわからないなりに、クリスが頷く。

「…とらぶる、って？」

「さあ？」

ライズが肩をすくめる。

何故なら、彼に連絡してきたのはロイドではなくマリーだったからだ。

…ロイドのゴーレムは“ブラック”という。

その姿は、実在するどの動物とも同じではない。ブラックに姿はない。

ロイドは常にブラックを纏っている。

漆黒のロングコート、手袋、靴に至るまで、それらは全てブラックが姿を変えたものだ。

ロイドから離れている時は地を這う影になっている。

そのようにして、ブラックは歌鳥たちを“護衛”していたのだ。

歌鳥に危機が迫り、ブラックは影から姿を変えて歌鳥の体に纏わった。

しかし、鍛え上げられたロイドの体とは違い、歌鳥の体は腕力も体重も乏しい。

そして、あの状況では歌鳥1人を逃がすことも出来ない。

やむなく、ロイドは「出来れば呼ぶな」という言葉を自身の判断で反古にした。

ゴーレム化の応用。

切り離れたゴーレムの体を分解させ、主の体に構成し直す。

ただし、一度その移動手段を使ってしまうと、元いた地点に戻る事は易くない。

ゴーレムの元に主が移動するにせよ、主の元にゴーレムが移動するにせよ、合流した後はその移動手段は使えない。

ひとつに戻った時点で、移動先を失うからだ。

だからゴーレムと合流したロイドは同じ手段ではアジトに戻れない。ロイドが出撃を渋った理由はここにある。

だからマリーはライズに連絡して呼び寄せた。

ライズのゴーレムは分裂可能の、特殊なゴーレムだ。

ライズは常に最低1体はアジトにゴーレムを残しているので、ゴーレムを自身から離さなくても移動が出来る。

あらゆる事態にも対応出来る、ファントム・コードのピンチヒッターだ。

「地図渡しておくから、頑張ってるね」

「……ん」

頷き、姿を霧散させて去るライズを見送って、クリスは無感動に焼き上がった魚の腹にかじりついた。

その肩に、黒蝶が一匹留まる。ライズが残していったものだ。

ああは言っていたが、こちらが何か困れば手を貸すなり口を出してくるなりしてくれるつもりらしい。

つくづく、マメな男だと思う。

闇に包まれた森を背後に、河原の砂利の上に座って焚き火を眺めた。クリスはその年頃の男児にしてはあまりものを食べない。満腹、という感覚が好きではない。

それは本能に属する感覚を鈍らせるからだ。

だから無意識の内に、クリスは食べる量をセーブしている。

年齢の割に小柄で華奢な体をしている原因はそこにあるのかもしれない。

焼いた魚を骨ごと飲み込み、クリスはその炎に見入る。

(……とらぶる、って何だろう)

無事ならいいけれど。

(…大丈夫だ。

ろいどがついてるなら)

炎から目を離さぬまま、クリスは心の中で呟く。

「…」

炎。

何だろう、

何かが揺らぐ。

暁の空もそうだった。

何かがクリスの中で蠢き始めている …、

(…むかしの、こと…)

イリアスに拾われる以前の、失われた過去。

…オヤハオマエヲナントヨンデイタ？

初めて会ったとき、イリアスはクリスにそう訊ねたのだ。

そしてクリスはその問いに答えた。

…そう、答えたのだ。

親のことなど、憶えていない筈なのに。

「…クリスタル…」

小さく呟いて、クリスは軽く額を押さえる。

「……親…？」

「……」

クリスタル、

クリスタル、

クリスタル、

クリスタル ……

頭の中に何度も呼び起こそうとしても、聞こえてくるのはイリアスの声だけ。

自分の過去など、今さら思い出す価値があるのかはわからない。

それでも、さわさわといつまでも胸の奥を支配されるのは御免だ。

思い出しさえすれば、きっとスッキリする。

クリスに感傷はない。

過去なんていらぬ。

ただ、この先に支障をもたらすのではないか、という懸念を払いた
いだけ。

追憶に苦痛は伴わない。

クリスは膝に顔を埋めて目を閉じた …

【神父さまの独白】

砂漠の街の空に月が昇る。

夜だというのに、道には子供たちの遊ぶ姿がある。

この街の場合、夜だからこそ、と言つべきか。

サーシャは日避けに被っていた布を肩に落とした姿で

灯りの零れる小路を歩いていった。

ほんの少し表情が曇った。

(…グレンさん、

あのひとと仲直り出来たかしら…)

自分が声を掛け、そして彼の厚意に甘えたばかりに、彼の同行者を怒らせてしまった。

(…綺麗なひとだったな……、
恋人かしら、

だったら余計に、誤解されないように弁明するべきだったんじゃないか……)
悶々と思案しながら、いつの間にかサーシャは自身が身を置く孤児院の前にたどり着いていた。

「ただいま、みんな」

扉を開けて入って来るサーシャの姿を見、子供たちが笑いながら「お帰り」と声を返した。

その中に、1人露骨に背を向けている子供を見つけ、サーシャは息を吐いた。

「いつまで拗ねてるの、
エイル。」

もうお兄ちゃんですよ、

ここにはあなたより小さい子がこんなにいるのよ、

お姉ちゃんも、いつまでも何から何まで面倒を見てはあげられないの」

「…そんなんじゃないやい」

呟いた少年が、逃げるように奥の部屋に駆け込んで行った。

サーシャは再び溜め息を吐き、エイルが走って行ったのとは違う廊下の奥に向かった。

さして長くない廊下で、

サーシャは目指す部屋から出て来た青年に気付いて会釈した。

「あの、神父さまは、今お時間ありそうでしたか？」

「おありだと思います」

返答は簡潔で、色や温度を欠いていた。その姿と同様に。

いつもながら、少しばかりの苦手意識を押し殺しながら、サーシャはその青年と真っ直ぐに向き合った。

「エイルのこと、

ありがとうございました。

あのまま放っておいてたら、あの子きつと熱射病にでもなっていました。

意地ばっかりは一人前なんだから」

出来る限りの親しげな口調も、ほんの少しの茶目っ気も、この白髪の青年には通じない。

「たまたま、通りすがっただけですから」

言って、彼はサーシャの隣をすり抜けて廊下を抜けて行く。

その背中に、サーシャは再び声を掛けた。

「本当にありがとうございました、

エツダさん」

返答はない。

エツダが廊下から姿を消して、やっとサーシャは体の力を抜いた。

(…緊張したあ…、
やっぱりいつまで経っても慣れないなあ……)

心の中で呟いて、

サーシャは改めて扉の前に立ってノックした。

「神父さま、

ごめんなさい、

少しお話させて頂いてよろしいですか？」

扉の中から、柔らかく明瞭な声がする。

「入りなさい」

「失礼します」

扉を開けて、サーシャはその部屋の窓辺に椅子に腰掛けた人物を見、ほっと息をついた。

「すみません神父さま、

旅から戻ったばかりでお疲れのところを」

「構いませんよ、

それで？

その親切な方は？」

穏やかに微笑み、首を傾げてみせるその男の姿に安らぎを覚えながら、

サーシャはふるふると首を振った。

「それが……、

結局お礼は出来ずじまいで……」

サーシャは肩を落としながら、事の顛末を神父に語る。

そう、と言った彼の声は淡いほどに優しくかった。

「それは残念でしたね」

「どうしましょう」

神父さま、

もし今日のことであの方とお連れの方の仲がこじれるような事にもなれば、

私、申し訳なくて……」

「大丈夫ですよ、

その方は親切な方なのですから、その事はお連れの方のほうに君よりもよくわかっておられる筈、

何かが少し気に障っただけで、本気でその方に怒ったりはしていない筈です。

大丈夫です」

にっこりと笑む神父に、

サーシャも弱々しいながらも微笑み返した。

「……そうですね……、

今日初めてグレンさんに会った私なんかより、

あの方のほうが、ずっとグレンさんの事をよく知っておられますよ

ね……」

サーシャのその眩きを聞いて、僅かにだが神父が「おや」という表情をした。

(…“ グレン”)

その思案は面には出さず、神父はふわりと笑んでサーシャを見た。

「さあ、

その親切な方とご相伴することが叶わなかったのは残念ですが、気を取り直して夕飯を作らなくてはね。

子供たちもお腹が空いてきた頃でしょう」

そう言って、椅子から腰を上げようとした神父を、サーシャが慌てて止める。

「休んでらして下さい、
神父さま。

夕飯の支度は私がやりますから。

最近フリックやプラムも手伝ってくれるようになって、だいぶ楽になってきたんです」

サーシャがそう言うと、神父は笑って頷いた。

「それは良い事ですね。

ではお言葉に甘えて、私はのんびり待つ事にします。

出来栄えを楽しみにしていますよ」

「はい、神父さま。

あの子たち、きつと大張り切りです」

嬉しげに言った少女が踵を返して部屋を出て行く。

微笑ましくその背中を見送って、神父は口の中で呟くように言葉を紡いだ。

(…しばらくその姿での外出は避けなさい、
エッダ)

数秒の後、
彼は脳裏に返事を聴く。

(どうかしましたか)

(ファントム・コードの方々がこの街にいらしてるようです。)

サーシャが“グレン”という人物と接触しました。

同名の他人という可能性もありませんが、
気をつける必要性はあるでしょう)

思念の先で、沈黙する気配がした。

しばしの間のあと、エッダの静かな声がする。

(分かりました、
気を付けます。

「ご注進ありがとうございます、
兄様」

姿の見えぬ“弟”に頷いて、神父 …… レインはそっと目を伏せた。
窓の外に視線を向ければ、防風林の向こうに白い地平と濃紺の空が
見える。

「 …… “此処は聖地ヴァナディース” …… 」
謳うように、彼は呟く。

「 “穢れを呑み込む灼熱の砂は
罪業を灰に帰す神の御手” …… 」

その独白はただ静かで、音楽的な響きを伴いながら、夜風に溶けて
消えた。

「 …… 無駄足を踏ませて申し訳ありませんが、

しばらくこの土地はこの姿のまま留めておくつもりですよ …… 」

遠い目を向けた先、
砂の地平は清いほどに白い ……

【8】砂漠の聖地（後書き）

年に2度、家庭内で五木が大活躍する行事（？）があります。

それは『扇風機の組み立てと解体』

なぜか五木は家族の2、3倍の早さで組み立てることが可能です。

……地味な特技……。

……では次回。

おまけ登場人物設定

【レックスII ジェラルディン】

ファントム・コード 後方

造獣師

27歳 / 180cm / A型

鈍色の髪 / 裏葉色の瞳

温厚 / 天然 / 責任感 / 地味

【マリーエレメント】

ファントム・コード エージェント

外見年齢12歳 / 140cm / 血液型無し

黒髪 / 紅玉の瞳

人工知能につき個性を持たない

マリーエレメントは映画『バイオハザード』に出てくるクイーンを意識しています。の方の。

映画はあんまり見ないんですけど、闘うヒロインものが好きなんですよね。

ヒーローが強くてカッコいいのは当たり前じゃないですか。
ヒロインが強いと、カッコいいだけじゃなくてやっぱり美しい
それに戻きます。

【9】鐘鳴りぬ

打ち鳴らせ
打ち鳴らせ

祝福に慄えふる
弔いに嘔びむせ

唄わすは
歡喜か悲嘆か
約束の音色

その旋律は
番つがう翅つばさの
胸に在る

【聖女クローディア】

… 巨大な山岳を背負うその街は初夏の熱気をその背後の断崖が
抱え込み、日が落ちても湿った空気が漂う。

その暖気を裂いて、宙を駆ける漆黒の影。

前述の通り、この街は断崖に抱えられている。

そのため、空からの灯りは遮られ、
夜は街の人工の光しか頼りにならない。

住民が家に灯りを点す間際、黄昏時にこの街は最も濃い闇に包まれる。

この時も、そうだった。

だから、巨躯でありながら漆黒の装いをした彼の姿は闇に紛れることが出来た。

屋根伝いに街の上空を駆け抜けて、
彼は市街地を離れて山林に食い込む奥地に舞い降りる。

そこでようやく、両腕に抱えていた2人を下ろした。

小柄な少女の方が、しばし息を整えた後、
さっきまで自分を担いでいた長身の男を見上げた。

男は少女を一瞥して頷き、
次いで、傍らで膝を掴むようにしてうなだれる男を見下ろした。

「大丈夫か、レックス」

灯りに乏しい林の中、
レックスと呼ばれた男が弱々しく笑って返す。

「…大丈夫です」

「歌鳥は」

「私も平気です。」

ありがとうございます、

ロイドさん」

不安そうな表情のまま、歌鳥はロイドを見上げて頷いた。

ロイドは視線を巡らして街の方角を見やる。

「ヴィヴィはどうした」

「依頼人の所です」

レックスの答えに、ロイドは表情を動かさぬまま、

「聖女クローディアか」

と呟いた。

その声に、歌鳥が顔を上げる。

「知っていたんですか、

ロイドさん」

「マリーに聞いた。

昨日か一昨日か」

黒いコートの裾を払い、ロイドは億劫そうに片眉を寄せた。

「とりあえずは合流した方がいいな。」

あのゲテモノのことも気になるが、
まずは歌鳥の安全と、クローディアの安全の確保だ」

ゲテモノ、というのは先ほど歌鳥たちを襲撃してきた半身大蛇の女
怪のことだ。

おぞましきその姿、思い起こすだけで鳥肌が立つ。

歌鳥は不安げに、知らず両腕で自分を抱きしめた。

「あれは……、

《ドール》？」

「違う」

独り言に近い歌鳥の問いに即答し、

ロイドは視線だけを歌鳥に寄越した。

「じゃあ…あれは」

「……………」

ロイドは無表情のまま、

レックスの青い顔を見やった。

(……………また歴史が繰り上がった……………)

琥珀の隻眼に、どこか苦々しい色がよぎる。

*

“外れの教会”という言葉を頼りに、街の外周を回るようにしてロイド達はその建物を捜し当てた。

中から外を窺っていたエレナがその姿に気付き、扉を開けて手招きする。

「カトリ！こつち！

…つて…、ロイド？」

来たんだ、と言ってエレナが駆け寄る。
ぞんざいに応え、ロイドは遠慮もなしに教会の扉をくぐった。

暗がりの中、礼拝堂の椅子に腰掛けていた3つの人影の1つが、ロイドに気付いて立ち上がった。

「オートリンク殿」

「邪魔するぞ」

男：ワヤンはロイドに頭を下げた。

次いで顔を上げ、後ろに座る女を示す。

「娘のアイラでござる。

そして…」

ロイドに続いて教会に足を踏み入れて来た歌鳥も、ロイドの体越しに顔を出した。

ワヤンが示した女の姿は、蝋燭の乏しい灯りの中でもその輪郭を露にしていた。

歌鳥は思わずそれに見入った。

(……………綺麗なひと……………)

中年と言つべき年代だろうが、そうと言つのはあまりに隔たりがある。

若くは見えない。

しかし、息を飲むほどに美しい。

ワヤンの声が教会の壁に小さく響いた。

「クローディア殿下です」

紹介された女が立ち上がり、ロイド達に向かって緩やかに歩み寄る。

威厳に満ち、しかし和かで暖かな雰囲気的笑みを浮かべていた。

「このワヤンから話しかねがね聞いております。

ファントム・コード司令、ロイド＝オートリンク」

ロイドは少しの気後れも見せず、クローディアを見下ろしたまま、

「こちらも噂はよく耳にしている。」

ファントム・コードは表舞台には出ないのがしきたりだが、その点は配慮して頂けるといふ事でこのレックスを派遣させた。食い違いはないな？」

と言った。

横柄な物言いに、笑みを浮かべたままクローディアは興味深げに口イドを見上げた。

ワヤンは僅かに苦笑にも似た表情を見せ、アイラはほんの少し眉をひそめている。

歌鳥がはらはらとした様子でロイドを見上げ、ちよんとその袖を引いた。

「なんだ」

「あの…、あんまりそういう…、その」

言い淀む少女を見て、クローディアが今度は声を立てて笑った。

「構いませぬ、

ファントム・コードは国家に属さぬ隔世の組織と聞いております故、

それに、妾も今回は皇族として参じたわけではありませんせぬ」

その言葉に、ようやく息を整えたレックスが控えめに口を挟んだ。

「皇族の方々は《ゴレム》を持たぬことを古来よりの掟としておられる筈です。」

「それでも、本当に今回、私に依頼をされて来られたのはクローディア殿下なのでしょうか？」

「妾です」

毅然とした様子で頷き、クローディアはレックスを見つめる。

その僅かな沈黙を遮って、ロイドが足を動かした。

「とにかく、どこか落ち着ける所に移動した方がいいだろう、」

奥にダイニングくらいあるだろ？」

確認した相手はワヤンである。

それに頷いた男は、

「ここを管理していた神父には事情は話せなかったものの、なんとか言い包めて少し席を外して頂き申した。」

この建物には我々しかおりませぬ。

ある程度は自由に使っても構わない、と」

言った。

ロイドは頷き、低い声で呟いた。

「赤の他人がいないのは結構なことだ。」

あのゲテモノが追い掛けてきても面倒がない」

「ゲテモノ？」

ワヤンが首を傾げる。

夜闇に包まれた教会は、神聖さよりもどこか陰鬱とした不気味さを孕む。

歌鳥はロイドを見上げた。

彫りの深い横顔は、眼帯に覆われた右半分がこちらに向けられているため、その表情を窺うことは出来ない。

*

「化け物に襲われたあ！？」

エレナが頓狂な声を上げ、ロイドがその頭を軽く小突いた。

「喧しい」

「いつてえ！！」

7人が大人数用の卓を囲って座る部屋は、南向きで窓も大きい。分厚いカーテンで部屋の灯りを閉じ込めたいところではあるが、今窓を閉めきってしまったえば室内の空気が淀む。

「どうせ人通りなんて皆無だ、開けておけ」

ロイドはそう言い、生欠伸を漏らして椅子に踏ん反り返った。

その両脇にエレナ、レックス。

エレナの横に歌鳥。

ロイドに向かい合って、クローディアがその両脇をワヤンとアイラで固め、端然と座る。

宿屋で起きた女怪の襲撃の話をロイドの口から聞き、クローディアがまあ、と口元を押さえた。

「それは …、
どう解釈すべき事なのでありましょうか？」

妾がこのアイラの判断である宿を出たのは確か …」

そこで、控えめにながらワヤンが口を開く。

「何故、宿を出た？」

アイラ」

父親の質問に、アイラは切れ長の目を向けた。

「建物の周りをうろつく人影を見ました。

些細な事かとも思ったのですが、昨日から続きました故、大事をとって」

「ふむ……」

ワヤンが顎に指を当てる。

ロイドは腕を組んだまま、ちらと歌鳥とクロードディアを見比べた。

「とりあえず、そいつが見たその人影つてのは、ウチの連中を襲ってきた奴とは別物だな。」

ちらとでもアレを見たなら、そんな反応じゃ済ませられん」

「そんな強烈なの？」

エレナが歌鳥の顔を見る。

歌鳥は曖昧に流した。

おぞましいと言えはおぞましいが、それが半分とはいえ人の姿をしている限り、

正直に嫌悪を露わに、他者にその姿を伝えるのは気が引ける。

歌鳥は居心地悪げに視線を泳がした。

その時、ふとクロードディアと目が合った。

ふわりと笑んだ表情が暖かい。

想像と違わない、と、そう思った。

イリアスが尊敬していた、と聞いてから想像していた人物像と。

…そういえば ……

歌鳥は思い立ち、口を開こうとしたが、それはアイラの凜とした声に遮られた。

「それでは、その異形は殿下を狙ったものではない、と？」

「そこまでは知らん。

だが、ウチのこの娘も、そちらのご婦人とは事情こそ違うが、重大さに於いては引けをとらない程の、狙われる理由がある。

ただ、こいつをピンポイントで狙ってきた、と判断するのもまだ早い。

アレは ……、

“シャドウ”だ」

その場に居たほぼ全員が聞き覚えがない、というような反応を見せる中、

レックスだけがその言葉を聞いて、僅かに肩を震わせた。

そもそも影の薄い男だから、その場に居た誰も、その様子を見留めなかったけれど。

ワヤンがロイドに向かい、ほんの少し身を乗り出して尋ねた。

「“シャドウ”、とは？」

「話せば少し長い」

ロイドはいかにも億劫そうに肩をすくめて見せた。

そして、

「“ドール”から説明せにやならん。

ワヤン、お前、

そちらのご婦人や自分の娘に、どれだけの情報を？」

ロイドの問いに、ワヤンは「何も」と答えた。

「ファントム・コードの一員として守るべき機密は、何一つ」

「律儀だな。

結構なことだ。

ただ今回の場合、それが少しばかりややこしいな」

そのやりとりを聞き、歌鳥が首を傾げる。

同じような反応を見せたエレナと顔を見合せた。

「…ワヤンさんって…、

ファントム・コードのメンバーで、

それでクローディア…さま？…の家来もしているんですか？」

おずおずと口を挟んだ歌鳥を見やり、ワヤンは何やら複雑そうな笑みを見せた。

「そういつことになりませう」

「どちらが本職……」

「どちらも」

言って、ワヤンは更に苦笑する。

「言ってしまうば、」

「どちらも副業でございます」

「まずまず首をひねる歌鳥らをよそに、ロイドが話を戻した。

「この場合、俺の独断になるが少し話をさせてもらおうか。」

「レックスに依頼を通した以上、ファントムはあんたに少なからず好意的だ」

「それは光栄なこと」

薄く紅を引いた唇が笑う。

その隣で、アイラが口を開いた。

「《ファントム》という者は、予言者だと聞いているが……」

「そうだ。」

それ以上は訊くな。

ファントムはウチの最高機密だからな」

言って、ロイドは卓の上に軽く肘をついた。

「そのファントムの予言に、

《世界は紅き疫病によって滅びる》

という記述がある ……」

【クリスの一人旅】

激しい雨脚と雷鳴に急かされて、クリスは山道を駆けた。

夏の雷雨、

灰色の空は重く、山の稜線にのしかかる。

鋭い雨粒に頬を打たれながら、クリスは走る。

たっぷりと水を含んだ緑の黒髪が艶やかに映えた。

しばらく走り続け、雨を凌げそうな巨木を見つけ、

その下に駆け込んだ。

雫の滴る裾を払い、

重くなった髪を振った。

クリスの髪は長い。

腰に届く長さを雑に束ね、その無頓着ゆえ、サイドや頭頂部は乱れている。

振り乱して水を払ったそれを解き、布か何かを絞るようにしてクリスはさらに水気を取る。
上着も脱いで絞り上げた。

少しの肌寒さを感じながら、クリスは荷物からマントを取出し、それを肌 directly 羽織った。

そのまま木の幹に背中を預け、腰を下ろす。

しばらくして、クリスは思い出したように再び荷物を探り、一枚の紙を取り出した。

ライズと別れた時に、彼に渡された、サンクレールへの地図である。

クリスはそれを広げ、
思案するように見入った。

「……………」

表情は変わらないが、実はクリスは困っている。

受け取ったときに言うべきだったと、
今になって思い至った。

クリスは地図が読めない。

「……………」

とりあえず、太陽の動きで東西南北の判断をつけてここまで来たが、

厚い雲がそれを隠してしまつた今、
クリスには行くべき方角が判然としない。

自分の現在地も判らなかつた。

クリスには独りで放浪した経験はあつても、
独りで目的地のある旅をした事がない。

そのせいもあるだろう。

ただ、ライズが置いていった彼のゴーレム・サンディに何の動きも
ない事から、

この道で合つてはいるのだと思う。

いくらなんでも見当違いの方角に進んでいるなら、ライズが何か言
つてくるだろう。

サンディがいるということは、クリスの様子はライズに伝わってい
る。

見ようによつては、プライバシーも何もないような状態だが、
クリスはそういう点に関しては無頓着だ。

クリスはただボンヤリと雨が弱まるのを待っている。

ウトウトと微睡み始めるのに、そう時間はかからなかつた。

…ふと、顔を上げた。

雨の匂いに紛れ、

“何か”

クリスは立ち上がり、周囲を見回した。

全身に駆ける、

“直感”

…ここは良くない。

クリスは雨脚が弱まるのを待つを諦め、
巨木の下から足早に出た。

泥水が撥ね、クリスの足にかかった。

*

クリスが休んでいた場所からそう離れていない位置に、その村はあった。

ごく普通の、どこにでもある農村だった。

ずぶ濡れのまま荷物を抱えて村に入ってきたクリスの姿を、

家の中から見つけた親切な農民の女が慌てて招き入れる。

少なくとも、クリスの容貌は他人に警戒心を与えないものだ。

女はタオルを出して来て、クリスの髪や服を拭った。

世話好きな女だったらしく、素直に大人しく、されるがままになっているクリスに対して好感を持ったらしい。

服が乾くまでの間、替えの服も用意してくれた。

「ありがとう」

抑揚のない、けれど柔らかいクリスの声に、女はカラカラと笑って応えた。

「この雨だ、

遠慮なく休んでおいき。

今、暖まるものを何かこしらえてあげるからねえ」

コクンと頷き、そしてクリスは頭を下げた。

拭ききれなかった髪から雫がポトリと膝に落ちた。

閉ざされた木枠の窓、

見えぬ外の景色を見透そうとするかのように、

クリスはじっとそちらに見入っている。

自分がやって来た方角、

その森を。

(……………)

しばらくそうしていると、女が器を載せた盆を持って戻って来た。

「こんなもんしかないけども」

クリスは再度、頭を下げる。

思い直して、女の顔を見てきちんと口を開いた。

「ありがとう」

「いいんだよあ、

大したものじゃないんだから。」

とにかく体を暖めて、風邪を引かないようにしないとね。

お兄ちゃん、何処まで行くつもりなの」

「さんくれーる」

どこか拙い口調に笑みを溢しながら、女は「そう、」と言った。

言って、女はクリスの姿を眺める。

「息子の服があれば良かったのにねえ、

女物でも似合ってはいるけども」

クリスはキョトンとして女を見上げて首を傾げた。

女が用意してくれた着替えは、くすんだ薄紅の一揃え、明らかな女物だった。

しかし、例によってクリスは頓着しない。

聞き留めたのは、女が口にした1つの言葉だった。

「むすこ」

「、ああ、

昔は一緒に暮らしてたんだけど、
ウチは旦那が早くに死んだもんで、

畑仕事だけじゃあ食っていけなくなって、
都のほうに奉公にやったんだ。

その奉公先が盗賊に押し込まれて、あっけなくさ。

貧しいのは嫌なもんだと思っていたが、
そんなの関係なかったね。

嫌なのはこの世の中さ、

今の皇帝陛下は、国の治安に無頓着みたいだから」

クリスはその表情に乏しい眉を僅かに寄せて、女を見上げた。

彼女の言う“今の皇帝”というのは、バルカシオンのことだろう。

世事に疎い（というより関心のない）クリスでも、その悪名は知っている。

なぜならクリスの育ての親・イリアスが、
あの温厚なイリアスが唯一その名を口にする時、

まるで憎んでいるかのような露骨な色を、いつもあの瞳に浮かべて

いたからだ。

クリスはその度に不思議に思っていた。

何がそんなに、イリアスの心を激しく揺さ振っていたのか。今になっては知る由もないだろうが。

クリスは労るような色をその赤紫の瞳に滲ませながら、目の前の女に言葉をかけた。

「ずっと一人で暮らしてるのか」

「まあね」

「大変か」

「今は皆こんなもんだろ。」

近所の連中も似たような生活してるしね。

まあ、困ったときに助け合える隣人達がいるんだから、どつぶり不幸な訳でもないさ」

明るく言って、女は椅子に腰掛けさせたクリスに向かい合う席に座った。

「お兄ちゃんの名前は？」

「クリスタル」

「クリスタル、ね」

「しりあいは、クリス、と呼ぶ」

クリス、と復唱し、女は笑った。

「クリスは何処の生まれだい？」

尋ねられ、クリスは緩く首を振った。

「知らない」

「おや……、」

もしかして、悪いこと聞いちゃったかい？」

「そんなことはないけれど、よくわからない。

なにも覚えていないから」

「おっ母さんの事も？」

クリスは頷く。

親と呼べるのはイリアスだけだ。

そう呼べるだけで、本当は正しくない。

「そう……、可哀想に」

憐憫を込めてそう言われ、クリスは首を傾げる。

「なにも覚えていないから、べつに悲しくはない。

かわいそう、ではないと思う」

「そうかい？

なら良いんだけど…、

でもやっぱり可哀想だ。

お前さんも、お前さんのおっ母さんも」

「お母…？」

言って、クリスはその唇に少し懐かしいような感覚を覚えた。

(……お母あ…？…)

クリスは首を捻る。

そう、

この感覚だ。

最近、クリスの心の奥を騒つかせ揺り動かすもの。

忘れていた記憶が、形のないまま汲み上げられて波を生じさせる。

クリスは母を覚えていない。

なのに、体は覚えているのだ。

確かにこの世にはその存在があつて、
クリスマスはその存在をその唇で呼んでいた。

(…何故……?……)

騒つく。

思い出さなければ、

そう急かす“本能”に近いクリスマスの中の血潮。

(…何か、大切なこと…、

いま…必要な……)

黙り込んだクリスマスの様子を違う意味に解釈した女が、少し気まずそうに腰を浮かした。

「新しいお茶、淹れて来ようかね」

【the Tradition Skill】

「…見事なものですこと」

朝靄の街外れ、

教会の窓から外を覗いたクローディアが穏やかな声で言った。

「妾も術式の分野には長く携わっておりますが、これは初めて見る形。

まこと世界とは広いもの、
知らぬことも多い」

クローディアは興味深そうにその膜に見入る。

その傍らに控えたアイラは、無言で窓の外と、部屋の奥の卓に座る長身の男を見比べた。

それを聞いたエレナが、
クローディアが外を見ている窓とは別のそれのもとに寄って
外の風景に目を凝らした。

しかし、彼女の目には何も見えない。
ただ当たり前の風景が広がって見えるだけだ。

少し不貞腐れたように顔をしかめ、すぐ隣にいた歌鳥に声をかける。

「何か見える？」

「え…、

はい、

蒼い…膜？みたいなものが……

天井みたいなものもあって …
星形？というんですか？

そんな形の光の筒がスツポリとこの建物を」

たどたどしく、しかし出来るだけ分かりやすいようにと努力して説明する歌鳥を微笑ましく見て、

クローディアが優雅な所作で椅子に掛け直した。

エレナはそれを横目で意識しながら、しかし顔は歌鳥に向けたまま。

「全っ然わかんね……」

《ドール》などと同じ理屈なのかしら、と歌鳥は思った。

これは《結界》だ。

《白い血の民》に属するものを“ある程度”拒絶する。

“ある程度”というのは、例えばレインⅡナイトメアやエツダのレベルの敵には対応出来ない。

これは昨夜に歌鳥たちを襲撃した女怪への対策だ。

今日から数日、この教会で“それ”が行われる。

扉が開いて、白装束を身に纏ったレックスが顔を出した。その後ろにはワヤンの姿も見える。

「準備が出来ました、クローディアさま。」

どうぞ」

顔を向けたクローディアが、威厳に満ちた微笑で頷いた。

「宜しくお願い致しますね、
レックスII ジェラルディン」

頭を下げたレックスの表情は、歌鳥たちが初めて見る、固く真剣なものだった。

そうしていると、普段はまったく似ても似つかぬ彼の妹の面影がよぎる。

部屋を出て行くクローディアに、アイラも続く。

そうして、部屋には歌鳥とエレナ、そしてロイドの3人が残された。

ようやく緊張が解けたエレナが息を吐いて、音を立てて椅子に座った。

そんな様子を見、歌鳥は苦笑めかして微笑んだ。
次いで、再び外の《結界》に見入る。

それを見て、エレナが首を傾げる。

「なに？そんな面白いの？

オレも見えたらなあ」

「え？、ううん、

別に面白いとかじゃなくて ……」

そこにバリトンの声が降る。

「気になるか」

懐から煙管と刻みタバコを出していたロイドが、歌鳥に琥珀の隻眼を向けている。

その視線に意味ありげな色を見て、歌鳥はこくりと頷いた。

「なんていうか……、

この空気…みたいな…、

どうしてでしょう、

懐かしい…、

そんな感じに近いものを感じます」

ロイドは煙管の先に火を点ける。

「…この術式は、

お前の祖先の一族が用いていたものをファントムが記し残しておいたものだ」

その言葉に、歌鳥は目を丸くした。

「祖先…って…、

大昔にファントム・コードが《異界》に隠したって…?」

「ああ」

歌鳥は気後れのない足取りで歩み寄り、ロイドの隣の席に座った。

「私の祖先って、どんな人達だったんでしょう」

「……」

ロイドは肩をすくめる。

「公の歴史には記述が残されていない。

ファントム・コードにも、おそろしく昔の記録が残されているのみだ。

そもそもお前の祖先を異界に隠した時点で、

こちらの世界に一族の血脈はほぼ途絶えている ……」

言って、ロイドは僅かに目を伏せる。

(“修正” くらいはあったかもしれないが……)

しかしそれは口には出さずロイドは言葉を続けた。

「特別だったのは確かだ、

古来よりその特別な力を権力に利用される事が度々あったため、俗世から身を引いたと伝え聞く。

いわゆる隠れ里の民、だ」

歌鳥は僅かに表情を曇らせる。

「特別な力……」

「それはわからない。

ファントムなら知っているだろうが、それは《世界の終焉》にまつわる大事、

決して余人に明かすことはないだろう」

「ロイドにも？」

エレナが眉を寄せ、卓に手を乗せてロイドに向かい身を乗り出す。

「なんでそこまで秘密にすることがあんだよ、

せめてカトリは知っておくべきなんじゃねーの？
当事者なんだし」

「俺に言うな」

言って、ロイドは少し視線を泳がせた。

歌鳥はその様子に、僅かだが怪訝な印象を受けた。

「ロイドさん？」

ロイドは煙草をふかしながら、あらぬ方向を見やり、呟いた。

「…すべてはファントムが決めることだ…」

その声に微かに滲む、どこか痛々しいような響きを、歌鳥は聞き留めた。

(…ファントム…)

*

…
教会の別室。

椅子に腰掛けたクローディアが、
手首を差し出すようにして卓の上に載せている。

それに向かいあって座るレックスが、
目の前の女性の二の腕に帯を巻きながら呟くように口を開いた。

「…これから数日間、
《ゴレム》の完成まで、貴女さまの御命を私に預けて頂くこと
になります。」

それに当たって、何か不安はありますか。

…、いえ、
あつて当然なのですが…」

どこか冴えない風の男の様子を見、部屋に控えていたアイラが僅かに眉をひそめた。

それを視線だけで咎め、ワヤンがレックスに向かって笑んだ。

「お人柄は私がよく存じております。」

《造獣師》としての腕前のほども、ライズ殿や妹御の《ゴーレム》を拝見させて頂いております故、

信頼出来る方と、私が殿下にレックス殿を推薦させて頂いたのでござる。」

笑んだままそのやりとりを聞いていたクローディアが、ゆったりと頷いた。

「それに、もとより妾はそなたの名は存じておりました。」

いえ、正確にはそなたの生家のこと ……」

それを聞き、しかしレックスは目に見える反応は見せなかった。予想していたのだろう。

クローディアはあえてレックスとは目を合わせぬようそれを伏せたまま。

母子ほど歳離れた依頼人との会話。

レックスは話を変えた。

「 ……バルカシオン派の刺客の暗殺に備えて、護身の為に《ゴーレム》を欲しておられるのでしょうか。」

クローディアの返答を待たず、部屋の隅に立っていたアイラがピシヤリと口を挟んだ。

「口が過ぎよう、
ジエラルディン殿」

その声に苦笑いを溢し、ワヤンが間に割って入る。

「ファントム・コードは国の情勢には関わらぬ。

下手に勘ぐるな、アイラ」

父親の嗜める声音にアイラは一瞥のみで応え、再び壁に背を寄せた。

いつでも動けるよう、その姿勢には一分の隙もない。

レックスにも、この女性がただの付き人でないことくらい察するに容易い。

だが、だからこそ、クローディアが新たに自分自身の力を欲していることを少し怪訝に思う。

身を守るためだというのなら、このアイラがいる。

《ゴーレムの創造》というリスクを背負ってまで、クローディアは何を求めているのだろうか。

そもそも《ゴーレム》は、創造、所有ともにリスクが高く、

だからこそ古来より、どこの国の王族も《ゴーレム》を持たないことが暗黙の了解になっている。

今現在、バルカシオンとの皇位継承問題を抱えているクローディアがゴーレムを得ることが知れたら、

その事はマイナス材料になりはしないだろうか。

もつとも、レックスにゴーレム造りを依頼してきた時点で、この事を公にするつもりはないのだろうかとは推察出来るが。

レックスは、煮沸して酒に浸けて消毒していたナイフを手を取った。

「
… それでは、始めます」

【あなたをその手にとりもどすために】

… 通り雨の後、

結局クリスは雨宿りをさせてくれた女の家に宿を借りた。

時刻的にも、距離的にも、サンクレールはおるか次の人里には日が高い内にはたどり着かないだろう、

と、その女に言われて勧められたのだ。

その翌日、クリスは宿代を金銭で受け取ることを固辞した女に対し、その代わりに労働力を提供した。

薪割りと水汲み、そして柴刈りである。

急ぐ旅ではあるが、クリスはそういう事を断れない。

無垢ゆえか、少しばかりお人好しな所があるのかもしれない。

農村の朝は早く、

鍬や鋤を担いだ男女に混じり、

棒切れや鞆を持った子供達の姿も見えた。

担いだ籠に柴を入れ、

クリスはふと顔を上げた。

村を貫く公道を、4頭立ての馬車が通る。

(…あの印章……)

見覚えがあつた。

確か、セヴァルスタで戦っていた頃、

その時の敵兵の鎧によく刻まれていた印章だ。

貴族や役人など、国政に携わる身分にある者などが使うし

…

その時、悲鳴があがる。

クリスの目にもそれは見えた。

馬車の行く手に、転がる鞆を追い掛けた子供が飛び出したのだ。

反射的にクリスは駆けけた。

疾風のように子供のもとに駆け寄り、かっ攫うかのように抱き抱え、道の脇に転がり落ちた。

飛び出してきた影に驚いた馬がバランスを崩し、道の脇の側溝にはまり転倒する。

馬車はかろうじて横転を免れたが、

中からいかにも傲慢そうな顔をした、高貴な身なりの男が顔をひきつらせて降りてきた。

「無礼者!!」

脂ぎった肌を陽に照らし、男は子供を抱えたままつづくまるクリスに指を突き付けた。

「何ゆえ、我が進路を妨げたか!!」

危うく車ごと転がり落ちるところであったわ!!
ひとつ間違えば命に関わったのだぞ!!

平民風情が、この儂に!!」

癪性の喚き声に内心で眉をひそめながら、クリスは腕の中で泣きじゃくる子供の背中を撫でつつ、

男に向かって顔を上げた。

「ごめんなさい」

クリスにしてみれば、最大限に丁寧な謝罪の表現。

しかしその男は頭に血が昇っているらしく、全く耳に入っていない様子だった。

後に続いて出てきた従者たちにも目もくれず、

倒れた馬を起こそうとしていた御者から鞭をひったくり、

斜面を降りつつクリスらに向かいそれを振り上げる。

予測していなかった。

それでも普段のクリスなら、それを払うなり、避けるなりの反応が出来た筈だった。

ただ、この時は子供を抱えて、泣きじゃくるその子を宥めていた。

そちらに意識を向けていた分、少し反応が遅れた …、

というより、反応の選択肢を持てなかった。

避けることも、払うことも、クリスはしなかった。

クリスは子供を抱え込み、男が振りかざした鞭の前に無防備な背中をさらした。

ヒュッ…、と空を切る音がした。

それを見ていた農民たちの間から、悲鳴に似た声があがる。

打ちすえられた背中の中の服が、弾けるように小さく裂ける。

男は何度も鞭を振りかざし、クリスの背中に打ちつけた。

耳元をかすめ、頬をかすめ、皮膚を裂いて血が吹き出す。

腕の中で、子供は火がついたように泣き叫び始めた。

それが一層、男の苛立ちを煽るらしかった。

「ええい、やかましい小童め！

これへ出せ！

その童から性根を叩き直してくれる！」

男は真っ赤になった顔色で、肩で息をし、ようやく手を緩めた。

しかし、それは男の気が済んだ、という事を意味しない。

先の台詞通り、男はクリスの腕の中で泣いている子供を要求しているのだ。

自身の血で汚れた顔を上げて、クリスは真っ直ぐ男を見上げた。

「…なぜ」

クリスは真っ直ぐに男を見る。

赤紫の瞳に宿るのは、
非難でもなく、反感ですらない。

ただクリスは問う。

「なぜ、ごどもを？」

男は逆上している。

「生意気な！」

儂に口答えをするか！」

「なぜ、そこまで怒るようなことがあるんだ？」

口答え、と言われてもクリスにはわからない。

人間と人間のあいだに言葉が交わされて、
何がおかしいのか。

何を考え、何を思ったのか、
言葉でしか伝えられないのに。

伝えた内容に怒るならわかる。
けれど、伝えたこと自体がなぜ怒りに繋がったのか。

第一、「なぜ子供を要求するのか」というクリスの問いに対し、
なぜこの男は答えもせずそれを“口答え”と断じたのか。

この男はクリスの理解を越えている。

視線が交わったまま、
男は再び鞭を振り上げた。

真正面からの“敵意”

今度は違う意味で、クリスには反応の選択肢がなかった。

目の前の男は小肥りで、明らかに武器の扱いに慣れてはいない動き方だ。

クリスは素手で、容易く鞭を払いのけた。

そのまま流れる動作で踏み込み、
男の首元に腕を突き出す。

襟首を掴み、そのまま突き倒して馬乗りになる。

造作もなく男を制圧したクリスの目に、
驚愕し、次いで怯え、そして激昂する男の表情の移り変わりが見えた。

「ぶ、無礼者が！！」

クリスは、はっ・として我に返る。

流れるような動作は、実際クリスの反射的な反応、
考えた末の行動ではなかった。

またやってしまった、

という気がした。

しかし男はそんな事を知るわけもなく、
また、知ったとしても何の変わりもないだろう。

男はクリスに組み敷かれながら、慌てて駆け寄ってくる従者たちに
向かって喚き立てる。

「何をしておる、お前達！！」

早よう儂を助けよ！

此奴を斬って捨てい！！」

男の声に、従者たちが剣を抜いてクリスに駆け寄ってくる。

クリスは、自身の背後で泣きじゃくっている子供に、肩越しに目を
向けた。

…どうしよう。

このまま、この男やその従者たちを相手に抵抗するのはクリス1人
なら容易い。

けれど子供が。

クリスにとっては、この子を連れて逃げることも、また容易い。

しかし、

かつてセヴァルスタで瀕死のイリアスを庇いながら追っ手を振り切
った時とは事情が違う。

この子はクリスの“何か”ではない。

守るためとはいえ、

抱えこんでここから連れ去るのは何かが違う気がしてならない。

数瞬の思考。

クリスの目に、男を押さえつけている自身の手が映った。

その手は血で汚れている。

男が振り下ろした鞭を払いのけた時に素手だったため、傷がついたのだろう。

…手。

手の傷。

クリスの中で何かが迫り上がる。

…

こども農村さげぶこえ赤い空てのひら赤い村

赤い …

…

（ ……いいじゃん、

みんな殺っちゃえよ）

頭の中で声がする。

凍みるほど冷ややかな笑みを含んだ声 …

（なあ、

クリスタル …）

クリスはしばし自失する。

聞こえた声は、クリスの知る1人の青年のものによく似ていた。似ていたが、それを受け入れ難いほどの邪気。

茫然としたのは数秒、

しかし、それは生死にすら関わる数秒だった。

クリスが我に返ったとき、男の従者が振り下ろす白刃が目の前にあった …

【鐘鳴りぬ】

…サンクレールでの2度目の朝。

歌鳥はロイドに連れられ、街の市場に来ていた。

エレナも一緒に、淡い朝靄が残る街を和やかに歩く。

「シャドウ」は夜にしか活動しない」

結界を張った教会を出るにあたって歌鳥が示した懸念に対し、ロイ

ドは短くそう答えた。

「シャドウ”に限らず、“ドール”もだ。

“白い血の民”に属するものは、夜にしかその力を使えない」

「そついや、イリアスも似たような事を言ってたな」

と、エレナが零す。

その言葉に、歌鳥も思い当たる。

……もうずいぶん昔の出来事のような気さえする。

「力を使えないだけで、眠っているわけでも活動停止をしているわけでもない。

活動はしている。

ただ“シャドウ”や“ドール”の場合、

力を使えないことは、実体化することが出来ないということだ。

多分今頃、獲物を捜してうろついてるんだろうが、

陽が高い内は連中は手を出せん。

見つかったら、尾けられるくらいのはされるかもしれないが、夜になる前に《結界》の中に戻りゃあ問題ない」

そう言われて、歌鳥とエレナは顔を見合わせる。

「じゃあ、今この辺にいるかもしれないって事ですか？」

「いんじゃねえのか？」

何かしてこれるわけじゃねえんだから、いないも同じことだろ」

ロイドはぞんざいにそう言って、本人にすればかなり緩めた歩調で2人の先を歩く。

ロイドは背が高く、つまり足も長く歩幅があるので、普通に歩いては歌鳥たちを置いてきぼりにしてしまうのだ。

初夏のこと、

ロイドの漆黒の装いは人目を引く。

歌鳥は出店の並ぶ道を進みながら、先ほどのロイドの言葉に少し動揺したものの、

時折に足を止めて、悠然と店頭の野菜などを品定めする男の様子を見、安心感を得る。

(不思議なひとだなあ……)

と、歌鳥は内心で呟く。

ぶっきらぼうで、姿や振る舞いこそ見るものに威圧感を与えるが、慣れてしまえば彼の発する雰囲気は居心地がいい。

あらゆるものから守られるような感じ。

人柄なのだと思う。

ロイドがつと歌鳥を見下ろした。

「オマエ、こちらの料理は慣れたか？」

「え？」

「少しは違うだろう」

歌鳥は一瞬キョトンとし、故郷である《異界》の話を読まれているのだと気付いて、すぐにロイドを見上げた瞳に笑みを浮かべた。

「大丈夫です。」

あまり食べ物に好き嫌いはないので

「そりゃあ何よりだ」

その会話に、エレナが割って入る。

「なあ、異界の料理ってどんなの？
今度作ってよ」

「え……、それはいいですけど……、

私あんまり上手じゃないですよ？」

「え？そーなの？」

だってよく料理してんじゃない？」

「してないですよ、
いつも出来る人のお手伝いしてるだけです」

実際、歌鳥は故郷にいた頃も台所に立ったことは殆どない。

祖母は歌鳥に関しては過保護だったので家事をさせなかったし、

歌鳥を疎んでいる伯母と並んで台所に立つなど、歌鳥には出来なかった。

一度、中学生の頃にたまたま伯母も祖母も留守にしていた事があり、歌鳥が気を利かせて家族の分の食事を作ったことがあった。

祖母はそれを大喜びし、歌鳥のことを褒めそやした。

それだけなら良かったのだが、
祖母が例によって「それに比べて理彩と博巳は……」などと言いだしたため、

伯母が機嫌を悪くして、そのあと大層気まずい食卓を囲む羽目になつてしまい、

それ以来、歌鳥は家の台所で包丁を握ることを極力避けるようになった。

…と、こういった事情までは語らず、

歌鳥は「故郷では料理をする機会があまりなかった」とだけ語った。

エレナはふうん、とだけ返し、

ロイドは視線だけを歌鳥に向けながら黒手袋の両手で茸の重さを比

べている。

それを見ながら、エレナが言う。

「ていうか、ロイドが料理出来るのも意外だったな」

「適当だ」

「いや、イリアスのより美味いぜ。
意外にも」

歌鳥が首を傾げる。

「イリアスさんもお料理なんてなさってたんですか」

「昔ね、」

でもあんまり上手くなかったから、ドルが来てからは任せっきり」

「ドルさんも？」

「ドルは上手かったぜ、
意外にも」

…そんな他愛ない話をしていたとき。

歌鳥とロイドが、
足を止めた。

「…？」

「…！！」

突然、
頭の中に鳴り響いた。

「…鐘…？…」

…ファントム・コードのアジト、
常夜の天蓋の下。

このときライズは自身の《籠》の庭園で、久々の趣味を満喫していた。

植物の世話の代わりに頼んでいたレックスやロイドは、それぞれ中々マメな男達のだが、

なにぶん専門知識に欠けるため、手の届かないことも多い。

ただの趣味のこと、いちいち指示や口出しをするほどの大事でもないので、

ライズも自身の植物の世話が行き届いていないことに文句はない。

器用な男なので、その世話と並行してクリスの様子を見守ることも難ではなかったが、このときはたまたま作業に没頭していた。

このとき、というのは、

クリスがある農村で貴族の男との揉め事に巻き込まれていたときで

ある。

その朝、
朝陽の届かぬ庭園で、ライズは土を指で擦り合わせ、その感触を確かめていた。

もともと常に微笑を浮かべているような青年だが、

このときは普段のそれとは少し違い、どこか優しく、安らいだ表情をしていた。

ライズはこの時間が一番好きだった。

独り、草木や花に触れる時間が。

…ライズは屈んでいた膝を伸ばし、軽く欠伸をした。

この朝ライズがクリスに意識を向けていなかったことには理由がある。

行動を共にしていた間、朝はいつもライズがクリスを起こしていた。

だから、クリスがライズよりも早くに起きて働いていたなどと予想し得なかったのも無理はない。

ライズがクリスに付けていた《ゴレム》のサンディは意思を持たない。

ライズからアクセスしなければ、サンディの方からライズにクリスの異変を知らせることは出来ない。

クリスのトラブルなど知る由もないライズが水を汲みに井戸に向かおうと踵を返したときだった。

星屑と虹の瞬く天蓋の下、
鳴り響いた鐘の音。

「……………!!!!……………」

ライズは鋭い動作で顔を上げる。

貫くような音色。

澄んだ余韻。

揺らめく旋律。

ライズは蒼穹の瞳を睜り、呟く。

「

…
クライスト・アラーム
《主の警鐘》……………!?

…まさか……………!!!!」

ライズは珍しく取り乱した風情で駆け出した。

躊躇なく《籠》の縁を蹴り、

「マリー!…!」

と叫びながら《その籠》に降り立つ。

「マリー……！」

その籠は、かつて初めて歌鳥たちがこのアジトを訪れたときに、最初に降り立ち、マリーと対面した場所である。

中央に置かれた、鳶の絡まる鳥の巣にも似た台座。

ライズは駆け寄りながら、マリーを呼ぶ。

そのよく透る声すら掻き消さんばかりに、鐘の音は鳴り続ける。

「マリー……！」

出て来い、

これは何の鐘だ？」

『ライズ＝ブロッサム』

姿を見せるより先に、少女の声が空中に響く。

「これは何だ、

《主の警鐘》なのか？」

一体《誰》が……」

『違っわ、

ライズ＝ブロッサム。

これは《主の警鐘》ではないわ、

これは……』

そのとき、ライズの足元が揺らぐ。

「っ……………!?!?…」

『ああ、引き戻されてしまう、
歴史の軸が ……また ……』

感情を持たぬはずのマリーエレメントの声に、嘆きにも似た色が滲む。

「何だ……………」

…これっ……………!?!?…」

ライズが狼狽の声を漏らした。

彼の足元は、光の膜に覆われながら、
その爪先から《ほどけて》いく ……

『運命はその形を保とうとしているわ ……』

私達の介入を絶えず拒んでいる ……

《歪み》の存在を《修正》しようとしているのだわ ……

だから ……』

ライズは声を張り上げた。

「何を言っているのかわからない、

マリー、
一体なにが起こって ……」

『これから一時、
《歪み》を隠すの ……」

ファントムの存在を保つには ……それしか ……』

…それきり、

ライズの意識からマリーの声は途切れた。

鐘の音が鳴りわたる。

いつまでも、
いつまでも ……」

歌鳥とロイドが共に突然足を止めたことに、エレナは怪訝な表情を見せた。

「どした？2人とも」

歌鳥は頭に手を触れた。

(…なに…これ…)

頭の中で、頭蓋を割らんばかりに鳴り響く鐘の音色 ……、

ロイドも同様に額に手を当て、眉を寄せている。

「《主の警鐘》……？」

…いや……これは……」

「……っ……！！……、」

ロイドさんっ……！！！」

歌鳥が示した足元、

光輝く膜に、ほどけていく2人の体が吸い込まれてゆく

…

ロイドは琥珀色の隻眼を見開く。

「やはり

《これ》か ……っ……！！」

狼狽する2人の傍ら、ただならぬ歌鳥たちの様子に動揺するエレナがただ立ちすくんでいる。

「何？

2人とも、何が ……」

歌鳥は愕然とする。

織物の糸をほどくようにして、消えゆく歌鳥たちの体 ……、

異変はもはや歌鳥の腰の高さにまで到っている。

エレナにはそれが見えていない ……

「歌鳥！！」

太いバリトンの声に振り向き、歌鳥は大きな掌を伸ばしてくるロイドを見た。

反射的にその手を掴み、引き寄せられるままに感覚のない足で駆け寄る。

「《飛ばされる》！！

《失う》な！！！！」

ロイドの声を頭上に聞きながら、

歌鳥は何が何やら解らないままただ強く目を瞑った。

光が弾ける。

辺りを包んだ閃光はしかし、

残された誰の目にも映りはしなかった。

刹那の後、

亜麻色の髪少女と黒ずくめの偉丈夫の姿は消えていた。

ひとり市場の真ん中に残された褐色の肌をした少女が、キョトンとして辺りを見回す。

「…あれ？…」

エレナは茫然として呟く。

「オレ……、
何でこんな所にいるんだ……？」

今まで、《誰か》と一緒にいたような気がするのだけれど
…

【望まざる帰還】

…朝靄の農村。

振り下ろされる白刃。

瞬きもなくそれを見上げるクリス。

…ああ、

これは避けられない。
反応が少し遅過ぎた。

自身の平静さに自身で呆れながらも、
クリスは《その後》のことを考えていた。

多分この一太刀は致命的な傷になる。

だが、自身の生命力を過信するならば即死するとも限らない。

もしくは昏倒するとも限らない。

意識さえ保っていられたなら、自身の足でここから逃げるくらいは

…、

刹那の思考。

しかし、

すべては無駄になる。

突然、クリスの視界が白濁した。

(……!?)

クリスが異変を察し、それを理解しようとする前に、クリスを包んだ光が、クリスの意識ごと弾け飛んだ。

振り下ろされた刃が、音を立てて地面に叩きつけられた。

少年の姿はない。

男たちは顔を見合わせる。

何に刃を振り下ろしたのか。
なぜ刃を振り下ろしたのか。

村人たちも顔を見合わず。

自分たちは何を見ていたのか。
何故あの男たちはあんな所に群がっているのか。

子供もポカンとして顔を拭う。

どうして涙を流したように、目や頬が熱いのか。
声が枯れたように喉が痛むのか。

…訳もわからず立ちすくむ。

朝靄は晴れ、

澄明な光が村を照らそうとしている …

…光の激流の中。

覚えのある感覚。

(…ロイドさんっ……)

掴んだはずのロイドの手の感触を失い、
歌鳥は動揺と困惑の中でひどく心細く、細い腕を泳がせた。

これに似た感覚を知っている。

しかしそれを知覚する前に、ただただ歌鳥は心細かった。

(どっ?)

『じじよ』

突然、歌鳥は自分の手を握った手の感触に気付いた。

「
…あ
」

歌鳥の周囲にまわりついていていた流れが緩んだ気がした。

『ここにいるわ』

目の前に。

「
…あなた…」

歌鳥は呆然と、
手を握った相手を見る。

『やっと会えた』

《彼女》は笑う。

屈託のなさそうな笑顔で。

年の頃は歌鳥とほぼ同年代、
背格好も歌鳥と似ている。

肌がきれいで、
くりくりとした蜂蜜色の瞳がとても可愛らしい。

淡い象牙色のショートボブの髪型が、
その明るい雰囲気笑顔によく似合う。

明るくて、優しそうで、歌鳥が今まで会ったどんな女の子より女らしく、魅力的だった。

そして、その声。

「あなた……、

あなたが、ずっと私に声を……」

『うん、そう。』

やっとまともに話せて良かった』

歌鳥はぼうつとしてしまふ。

「……あなた……誰……？」

『あたしは

エアリアル＝テラ』

歌鳥は少女を見つめる。

「エアリアル……さん？」

その声に、エアリアルは笑う。

『いいの、

さん付けなんてしなくて。』

あたしはもう、歌鳥の中にしかいられないから』

歌鳥は怪訝な表情で首を傾げた。

「中……って……」

『うん、
今はまだわからないと思うし、
わかってもらえるように説明するには時間がないの。

だから、これだけは伝えておくね』

少女・エアリアルは歌鳥の瞳を真っ直ぐに見つめる。

『これから先、いろいろ大変なことがあるけど、
歌鳥は歌鳥のままでないきゃ駄目だよ、

あたしの《存在》に負けないで。

あたしはもう歌鳥の中でしか存在出来ないのに、
逆に歌鳥があたしに飲み込まれてしまうと、
あたし達2人も消えてしまうの。

ちゃんと歌鳥があたしを飲み込まないと駄目だよ。

強い気持ちでないと駄目、

ちゃんと《歌鳥》でないきゃ駄目。

《歌鳥》でいる意味、

ちゃんと考えて、

ちゃんと自信を持っていてね』

「待つて、

何が何だか

……」

歌鳥が身を乗り出そうとしたとき、
ふいにエアリアルが霞んだ。

光の激流が戻ってきた、
そんな感じ。

「！

エアリ ……」

2人の手が離れる。

歌鳥を攫う、空白の流れ。

手を差し伸べた姿勢のまま、エアリアルは名残惜しそうに歌鳥を見
送る。

『あたしのは ……り ……て ……呼ん ……』

その声まで霞んでしまう。

歌鳥は手を伸ばした。

「待って ……まだ ……」

*

「 ……とり ……」

耳に届いた男の声。

歌鳥ははっとして目を開いた。

気がつけば、雑木林の中、歌鳥は地べたに座り込んだロイドの膝の上に倒れこんでいた。

「ロイド ……さん…?」

「大丈夫か」

無表情でそう問われ、

歌鳥は呆然としたままロイドを見上げた。

「私…?」

ロイドは無言で歌鳥の頭をひとつ撫で、のけるよう促した。

歌鳥は自身の姿態に気付いて赤面し、慌てて身を引いた。

「う、ごめんなさい!」

「別に軽いもんだ」

身体を離して、初めて歌鳥はロイドの姿の異変に気付く。

「ロイドさん…?」

その服……」

ロイドは無言で立ち上がり、服に付いた土や葉を払い落とした。

歌鳥は困惑しながらそれを見る。

ロイドの装いが、普段と比べてやけに軽装になっている …。

「……途中で、ブラックが剥がれたらしいな」

普段のロイドは、顔以外の肌を漆黒の装いに包んでいる。

しかし今はノースリーブの黒い短衣、黒いズボン、黒い靴……、
それらがロイドの身に付けるすべてだった。

「ブラック……って……、」

ロイドさんの《ゴーレム》の？」

「ああ」

言って、ロイドは辺りを見回す。

歌鳥もそれにならって立ち上がろうとし、
その時ふと、ロイドの手が目に入ってきた。

…指輪 …

普段は黒い手袋に包まれていて、目にする機会もなかったが、

ロイドの大きな手、

その指にひとつだけ、

細く煌めくものを初めて歌鳥は見た。

(…左手の…薬指……)

何か重大な発見をしてしまったような気がして、
歌鳥は思わずロイドの顔を見つめた。

「…、何だ？」

「あつ…！、いえ……」

指輪 ……、

左手の薬指に……。

その意味は。

(……こつちの世界でも、同じ意味だったりするのかしら……、
だとしたら……)

尋ねてみようか、どうしようかと歌鳥が瞬巡している内、

意外な声が2人の元に届いた。

「…ボス！」

カトリちゃん!？」

「…ライズ…!？」

ロイドと歌鳥がその声のした方を振り向くと、
夕陽色の髪 of 青年が駆け寄ってくるのが見えた。

「お前……!？」

ロイドは瞠目してそれを見つめる。

その隻眼には、何かしらに衝撃を受けたような色があった。

それに気付かぬまま、歌鳥がライズの方に一歩進む。

「ライズさん」

「驚いたな、キミも？」

ていつか、何が起きた？

俺に起きたことと、

そつちに起きたことって同じことかな？」

歌鳥はゆるゆると首を横に振る。

「私も何が何だか …、

ここ、どこなんでしょう」

「さあ？」

ライズはこんな状況でも、鷹揚な雰囲気崩さない。

それがなんとなく心強く感じられた。

歌鳥はロイドを振り返り、ライズもまたロイドに目を向ける。

「アジトの鐘が鳴ったよ、

ボス。

ただ《主の警鐘》ではない、とマリーは言ってたけど …」

「……そうか」

ロイドは僅かに目を伏せた。

そこで初めて、歌鳥とライズはロイドの心情の微かな揺らぎを感じ取った。

「ロイドさん？」

「何？」

ボス、何か …」

その時、
比較的3人の傍、

林の中にガササツ！！という音がした。

歌鳥たちは弾かれたようにそちらを見る。

「何……？」

ガサガサ、と、草を掻き分けるような音。

そして、

「 ……えっ？」

「あれっ？」

「……お前……」

三者三様の反応の先、

草木の中からヒョッコリ顔を出したのは、
クリスだった。

「……カトリ……？」

「……」

「……」

クリスは訳がわからない、といった表情で首を傾げている。

久々の対面に、訳も何も考える前にただ顔をほころばせた歌鳥だったが、

クリスの姿をよくよく見、顔色を変えて駆け寄った。

「クリスくん！」

どうしたんですか、

その怪我は……」

歌鳥の言葉にキョトンとしながら、クリスは自身の頬を撫でた。

鞭で打たれて肉が弾けた傷は、思いのほか目立つようだった。

「これは……」

「これは？」

「……………」

クリスは、心底心配そうな歌鳥の顔を見る。

その顔を見、クリスはなんとなく、自身に起きた事をありのまま語る事がはばかられるような気がした。

初めての思考だった。

誰かに何かを《知らせたくない》という。

しかも他の誰でもない、

歌鳥には …

「……………だいじょうぶ」

「大丈夫って……………」

「へいきだから、

心配しなくていい」

嘘は、つけなかった。

クリスにそういう思考まではない。

ライズが軽い足取りで駆け寄り、クリスの顔を覗き込む。

「これ……………」

……まあいいや、

とにかく早く手当てしないと痕になりそうだな」

ライズのその反応は、何かを察したようにも見えた。

しかしライズもクリスマスもそれには触れない。

「……ああ、駄目だ。

いきなりだったから、応急袋もってないや」

「いきなり……?」

そこでようやく、クリスマスはこの状況の異常さに気が付いた様子だった。

「……なんで、みんないるんだ?」

歌鳥が頭を振る。

「わからないの。

私とロイドさんは、こうなる直前まで一緒にいたからわかるんだけど、

どうして遠い所に別々にいたクリスマスくんやライズさんも同じ所にいるのかしら」

「何だろね、この面子は。

とにかく、ここが何処なのか、

よく把握してから ……

そのときライズの目に、見慣れぬ造形物が映った。

「……あれ、何だろう」

「え？」

歌鳥もライズの視線をなぞり、

そして ……

(……え……！？……)

木々の葉が形づくくる粹縁、

そこから真つ直ぐ天を指してそびえる骨組みの塔。

あれは ……

(…鉄塔……)

ふと、クリスが怪訝そうに辺りを見回す。

「どした？、クリス」

「…へんなおとがする……」

意識してみれば、確かに聞こえる。

「……何だろ」

ライズの眩き。
歌鳥は口元を手で押さえた。

「……………どうして……………」

「カトリ？」

クリスがキョトンとして、そんな歌鳥を見やる。

歌鳥は決然と、しかしフラフラとした足取りで林を抜けるべく足を
進め始めた。

クリスが戸惑いながらも、心配そうにそれを追う。

その2人を見送るように立ちながら、ライズが隣のロイドを見上げ
た。

「……………で、

これは何？」

ボス、何か知ってるの？」

なんかそんな感じだけど」

「……………」

琥珀の隻眼で無感動な一瞥をライズに向け、
ロイドは歌鳥たちを追うように歩き出した。

返答のないことに特に気分を害した様子もなく、ライズもそれに続
く。

…歩みを進めるにつれ、その音は近くなる。

クリスは歌鳥の後を追いながら、顔をしかめた。

(…いやなおとだ)

歌鳥は追い詰められたような顔色をしている。

(…これ…やっぱり、

…でも、どうして…)

唐突に、林の木々が途切れた。

「…!?!?!」

「……?」

なんだ、これ……」

…鉄線の柵。

灰色の斜面。

その下を…

「…自動車……、

…これ…、高速道路…!?!」

驚愕の声を洩らし、歌鳥は立ちすくむ。

エンジン音と排気ガスに満ちた、巨大な側溝にも似たアスファルト

の道。

その向こうに稜線を描き広がる緑の山。

その麓に点在する建物たちは、黒い糸と灰色の線で繋がれている。

あまりに見覚えのある、

その風景。

「 ……ここは ……」

「 《異界》だ」

出し抜けに聞こえた、ロイドの声。

歌鳥が振り向き、呆然とロイドを見つめた。

「 ……そうです……、」

ここは ……」

そこは、

歌鳥が育った《あの街》に違いなかった。

…男は唐突に顔を上げた。

碧がかつた銀の髪が、彼の瑠璃色の瞳を揺らめき隠した。

「……これは ……」

彼 …… レインは僅かに眉をひそめて耳元に指を当てた。

(…鐘の音…?…)

彼の住まう街は巨大な礼拝堂を丘の上に仰いでいる。

鐘の音には馴染みがある。

しかし、今、彼の聴いた音は鼓膜ではなく、
直接頭の中に響いてきた ……

いや、むしろ頭の中に鐘が在り、それがけたたましく鳴り響いている。

……そんな感じだ。

レインはひとつ頭を振り、声なき声でエツダを呼ぶ。

数分の後、現れた弟の顔色は、窓から差し込む朝日に照らされて一層白い。

「どうされましたか、
兄様」

「ええ、少し出掛けます。

少しばかり予定が狂いそうなので《相談》に」

「相談……ですか？
どなたに……」

怪訝な表情を浮かべたエツダに向かい、レインはにっこりと笑う。

「ちょっと

《お母上》の所まで。

しかし、出迎えて頂けるものか分からないのですが」

邪気の無い笑みで言い、レインはヒラリと裾を翻す。

「すぐに戻ります。」

子供たちにはうまく言い繕っておいてください」

「かしこまりました」

エツダの一礼を見届けず、レインはするりと風景の中に溶けて消えた。

【9】鐘鳴りぬ（後書き）

先日初めてボーリングに行つて来ました。
今まで友達と遊びに行くとなるとカラオケ一択だったので。

時間がなかったので1ゲームだけ。

で、出したスコアはなんと……48……。

いやいや初心者だし。

……でもやっぱり低過ぎるかなあ。

次回は頑張る。

【10】歴史の修正

積み 崩し 崩し 積み
童の戯あそびに
宿命は散らばる

その手が欠片を掴むとき
零れる雫石に君は知る

こうして全ては嘘になる

【故郷】

… 呆然と、

歌鳥は蒼穹と緑の稜線を見つめた。

何かに隔てられたように、遠く、

もう懐かしくさえなっていたエンジン音が耳に届いてくる。

目の前のフェンスの下を通るのは、十数年前、歌鳥が母を失う年と前後して

この街に開通した高速道路だ。

この道を伯父の車に乗せられて、歌鳥は北原の家に引き取られた。

言葉を失って立ちすくむ。

山間の村、

民家の配置、

張り巡らされたアスファルトの道 …、

明確に思いだせる、《帰り道》

ここからならば1時間もかからない。

《あの家》に。

(… 覚悟はしてた筈よ……)

突然引き込まれた《異界》

ならば引き戻されるのも、きっと、突然 …

「カトリ？」

柔らかく耳に触れた、抑揚に欠ける声。

歌鳥は、はっとしてその声の主を見た。

「… クリスくん…」

感情の窺えない表情の少年、

その肩越しに見える、送電線を繋ぐ鉄塔。

あまりに不調和な光景が、返って現実味を加える。

「……ごめんなさい……、
……少し……、びっくりしてしまっ……」

クリスは首を傾げる。

「なんで謝る？」

「あ……、そう、ですね。

ごめ……、

……大丈夫……」

歌鳥は、自身が自覚している以上に動揺している自分に気付いた。

(……こんな……、
帰ってきたくなかったみたいな……)

実際、歌鳥は帰りたくないのだが、それをハッキリと自覚することを無意識に避けてきた。

それは歌鳥が《あの家》に不満があったということ ……、

歌鳥が《あの家》を非難している、ということと同義だ。

それが、歌鳥は怖かった。

「大丈夫……」

そう言って、歌鳥は次の言葉を継げない。

クリスが初めて僅かに眉をよせ、表情らしい表情をその顔に浮かべる。

「……………これ……………」

鉄線を編んだ柵を隔てて、クリスもこの景色を見る。

そして視線を滑らして、自分たちの立つ断崖の下を走る無数の《塊》を見た。

「あれ、何だ？」

その問いの返答を、歌鳥は迷う。

「それは自動車というものだ」という説明をするのが、なんだかひどく億劫な気がした。

まず歌鳥自身の気持ちを落ち着かせ、整理しないことには ……

そこで、歌鳥ははっとしてクリスの服を掴み、慌てるような風で雑木林の中に引き戻した。

「カトリ？」

「ちょっとだけ、

ちょっとだけ下がって」

歌鳥は、高速道路を走る車のドライバー達の目につかぬよう、クリスを引っ張って木々に隠れる。

この姿だ。

服装は《あちら》にいたときのまま、
どう解釈してもらっても、《こちら》で一般的なファッションとして
通用するものではない。

事態が不明の今、
人目を集めるのは、要らぬ面倒を呼ばないとも限らない。

無垢そのもののようなクリスの困惑を目の前にしながら、
歌鳥はそして途方に暮れてしまう。

(…ああ……、
もう何が何だか……)

歌鳥が頭を抱えそうになった時、
いつの間にか2人から離れて辺りを散策しに行っていたロイドとラ
イズが戻ってきた。

「いや、なんか珍しいものが沢山あるねえ」

暢気な声を出したのはライズである。

「でもまあ、思ってたより普通だな。
《異界》って。」

まあ元々、どんな所なのか想像もしたことなかったから、
“思ってた”も何もないんだけど」

ケラケラと笑うライズの様子を見て、

歌鳥はなんだか拍子抜けしたように肩を落とした。

この場合、ライズのマイペース振りが返ってありがたい。

ようやく、歌鳥は大きく息を吐いて気持ちを落ち着かせた。

「山ひとつ越えればだいぶ違いますよ」

ここは山間の田舎だ。

信号機の数も両手の指で数えられる程度、

高速道路が村の端をかすめているが、

村道自体は住民以外の車が通ることは稀、

バスも電車も1時間に一本あるかないか。

そついう田舎だからこそその世間の狭さゆえ、
噂はすぐに周辺に広がる。

伯母があんなにも外聞を気にしていたのも、そついった事情があつたのだ
…

「山？」

「はい。」

この辺りは、まだ《あちら》に似た感じの街並みですけど、
あの山の向こうに行くと、景色はだいぶ変わります」

「詳しいな」

ライズが首を傾けて歌鳥の顔を覗き込む。
それを避けるようにして、歌鳥は僅かに目を伏せた。

「……この町は、
私が育った所なので」

へえ、とライズは改めて歌鳥を見、
クリスは不思議そうに歌鳥の屈托を見つめた。

ロイドは感情の色を消した視線を周囲に滑らしている。

「じゃあ家この辺り？」

「……はい……」

「なんかイヤそうだな。
あんまりお家好きじゃないの？」

「え！？、え……あの……」

「まあいいや、
とにかく今は状況を整理しようよ。」

カトリちゃんのお家に挨拶に行くか行かないかは、後で検討することにしてさ」

あまりの話の回転の速さに、歌鳥はしばしポカンと目を丸くした。

クリスはライズのそういうテンポにすっかり慣れて、素直に頷き、先ほどそのライズにいい加減な処置をしてもらった顔の傷を少し撫でた。

ロイドは不機嫌そうに立ったまま、近くの木の幹に背中を預けている。

「あ、ごめん・ボス。
勝手に仕切っちゃって」

「別に構やしねえよ、
進めなきゃ進めろ」

どうやら《こちら》に飛ばされたときに煙草を失くしたようで、手持ちぶさたらしい。

普段の漆黒に包まれた威容が剥がされてみると、ロイドの印象はだいぶ柔らかく見える気がする。

「そう？
じゃあ勝手に進めるけど」

言って、ライズは自身の上着を脱いで木の葉や石の転がる地べたに敷き、

歌鳥に向かってその上を示した。

「まあ、立ち話もなんだから」

「え!？」

い、いいです、そんな…」

「いいから、いいから。」

俺が、自分がフェミニストだと気分がいいの」

わかるような、わからないような理屈を言うライズに対し、歌鳥は迷いながらもコツクリ頷き、おそろおそろその上着の上に座った。

その横でライズも腰を下ろし、クリスも何の頓着も見せずに地べたに座った。

*

とりあえず、4人は自分達が《こうなる》その直前の状況をそれぞれ説明し合った。

それによって判ったことは、クリスだけが他の3人とは少し違うかたちだったということだった。

「……かね？」

しらない。きいてない」

クリスは拙い口調でそう言った。

ライズが膝を立てながら座る姿勢で、クリスに視線を投げて寄越す。

「……考えてみたら、

やっぱり変な面子だよな。」

ボスやカトリちゃんも聞いた《鐘》は、タイミングから言って、俺が聞いたアジトの鐘の音と同じだろう」

「アジトに鐘なんてあったんですか？」

歌鳥が首を傾げる。

数週間あの場所で生活していたが、鐘の音など一度も聞いたことはない。

「うん、あるの。」

ただ、不吉な時にしか鳴らない鐘だから、聞いたことがないってのは幸せなことだよ」

「不吉な時？」

ライズはちらとロイドを見やる。

腕を組んだままのファントム・コードのリーダーは、儼然としたふうのままにその視線をライズに返す。

「ファントム・コードに所属する《マリオン》が死んだときに鳴る鐘だ……」

どこか溜め息混じりにそう言って、

ロイドは歌鳥の反応を待たぬまま次の言葉を足した。

「多分、これはファントムの《歴史の修正》で《誤作動》^{エラー}が起きた

影響なんだろ……」

「エラーって……、
そんなことあるの？」

俺、初めてだけど。

ていうか、やっぱりおかしくないか？

俺とボスとか、カトリちゃんならまだわかるけど、
クリスはファントム・コードにまだ一度も行っていないだろ？

ファントムの力が及ぶ道理がないじゃないか」

ライズが首を傾げてロイドとクリスを見比べる。

途中で話について行けなくなったクリスは、上の空で辺りを見回していた。

ライズが苦笑いして、クリスの頭を軽く小突いた。

「こりゃ、クリス。

ちゃんと話を聞きなさい」

「……ん」

その様子がなんだか微笑ましくて、歌鳥は小さく笑みを零した。

(なんだか兄弟みたい)

その横で、ロイドが小さく息を吐く。

「まあ、その辺りは帰ってからマリーに訊けばいい」

「帰ってからって …、

どうやって？」

ライズが首を傾げ、

歌鳥も心許なさそうな表情で頷く。

「マリーが何とかするんだろ」

ロイドが短く答え、

「他力本願？」

とライズが揶揄する。

「他に仕様がねえだろが。」

《ゴレム》も《あっち》に置き去りだし」

「え？」

あ・ホントだ、

サンデイに繋がらない」

言って、ライズはひょいと立ち上がる。

「じゃあ、待つ他には何もすることないわけ？」

「そうなるな」

「じゃあせっかくだから、《異界》ってのをよく見ておこうかなあ」

楽しそうなライズの口調に、歌鳥が弾かれたように顔を上げた。

「ええっ!?!」

「だって中々見れるものでもないし」

「そ、それはそうでしょうけど、それはちよつと……」

慌てたような歌鳥の様子に首を傾げ、ライズは思い当たったようにケタケタ笑った。

「大丈夫だよ、面倒は起こさないようにするから。」

ただ見て回るだけ」

「あの……、でも、

その格好はちよつと目立つし……、」

「そうなの？」

まあ、なるべく人目に触れないようにするよ」

「そう……ですけど、

ああ、でもやっぱり……」

歌鳥の心配そうな様子を見、ライズは苦笑にどこか面白がるような……、
少し意地悪そうな色を浮かべる。

「そんなに心配なら、一緒に来て案内してよ」

「ええ!？」

「俺、こここの辺りの事よくわかんないし、面倒起こさないように面倒みてくれる?」

いかにも無邪気、子供染みだ笑みと勢いに押し負けて、歌鳥はつい頷いた。

「あ……、あの、はい……、

……、……え?」

少女の困惑を、ライズは楽しそうに眺めている。

その様子を不思議そうに見るのはクリス、
無表情で小さく欠伸を洩らしたのはロイドである。

歌鳥が助け船を求めようにも、当てになりそうになかった。

*

「……お前は行かないのか?」

ライズと歌鳥が雑木林を出て行った後、
中に残ったクリスに対してロイドが訊ねる。

クリスはこくりと頷いた。

「いいのか？」

「なにが？」

クリスは心底不思議そうにロイドを見返す。

クリスの歌鳥に対する感情を、ロイドは掴みかねている。

「まあ…、別にいいが」

「？」

「オマエは興味ないのか？」

《異界》には「

「……ない、とおもつ。

よくわからない」

「またそれか」

クリスは頷き、木の幹に預けていた背中を丸めた。

「なんか、いやなおとがたくさんするし、
いやなおいもする。」

少し、きもちわるい」

そう言われてよく見てみれば、確かにクリスの顔色が少し悪い。

「……………変なところで

デリケートだな」

半ば呆れ顔で、ロイドが呟いた。

*

道路添いの防風林の木々に隠れるようにしながら、歌鳥はライズを伴い歩く。

「あれ、何？」

「はい？」

「あの石柱に結ばれてる黒い紐。

何かに使うにしても、ちょっと位置が高過ぎない？」

「ええと、あれは《電線》です……………」

「なに、デンセンで」

ライズはまるで歩く好奇心である。

歌鳥は訊ねられるままに、たどたどしく説明をする。

正直をいうと、改めて他人に訊かれると答えられないような質問もあったが、

ライズはそれに関しては「ふうん」と流し、追及はしてこない。

その点では、楽な相手だ。

それにしてもよく考えてみれば、歌鳥にとってライズは、ファントム・コードの人間の中で最も付き合いの短い青年である。

初めて接触したファントム・コードでもあるのだが、

彼は歌鳥がファントム・コードに保護されたのとほぼ同時にクリスと行動を共にし始めた為、
言葉を交わした回数も数えられる程度だ。

「あの……、ライズさん」

「何？」

「ええと、その……、

私も少し、

お話、いいですか？」

ライズは首を傾げて歌鳥を見る。

その子供染みた仕草にも関わらず、表情はやはりどこか大人っぽい。

年上なので、当然といえば当然だが。

「なに？」

「はい、あの…、」

フロントム・コードでは、ライズさんの留守中お庭をお借りして
いました。

ありがとうございます」

歩きながら、ちよこんと頭を下げる歌鳥を見、
ライズは声を立てて笑う。

「何だ、

真面目な顔して何言うのかと思ったたらそんなこと？

いいよ、いいよ。

きれいに使ってくれてたみたいだし」

ライズはどこまでも鷹揚な雰囲気を持っている。
夕陽の色をした髪に、その笑顔はよく映えた。

（ああ…、そうだ、

服だけじゃないわ、

ライズさんは絶対、髪も目立つわよね。

…というか、この辺りを歩いてたら、
私、知り合いに会わないかしら……）

歌鳥の表情にふっと影がよぎる。

(…どういづことになったのかな……、
私がいなくなったこと……。

警察とか、……普通はそうなるよね……)

ただ、頭をよぎるのはマリーの言葉である。

(…… 貴女の存在は
修正されたの……)

………どういづ意味なのだろうか。

歌鳥がしばし黙りこんでいると、ライズがその顔を覗き込んできた。

「どーした？」

「えー!？」

い、いえ、何も……」

「そっ?」

ならいいけど、キミずっと浮かぬ表情してるよね。

あんまりここにいい思い出ないのかな」

「……!」

いえ……、あの……」

「そっならそっと言っていいんだよ?」

別に俺は関係ないし。

ついた方が楽な嘘もあるけど、
キミの場合、嘘つきの下手っていつか何か苦しげ」

さらりと言って、ライズが歌鳥の前に出る。

草分けが踏まれる音が、湿気を含んでやたら鈍い。
それを意識しながら、歌鳥の気持ちも沈む。

「…なんか、嫌な気分になりませんか？

育った所を…その…、
悪く言うみたいで…」

その言葉に、ライズはあっさりと

「いや〜？

ハッキリ言って、俺は自分が住んでた所、キライだしなあ」
と返した。

歌鳥はどう反応したもののか、言葉を失っていたが、
ライズはそんなことはまったくお構い無しだ。

「キミとクリスは
少し似てるね」

「え？」

「価値観の違い、

ってやつかな。

クリスやキミみたいな子と話していると、
やっぱり世の中は色んな人間がいるんだな、
って思うよ。

いい意味でね」

最後の一言を強調して、ライズはくすりと笑いを零す。

そのときに、歌鳥は初めてライズという青年の複雑さを感じた。

「…」

そのとき、林を隔てた先の道路を軽トラックが通る。

それを見て、ライズは顎に指を当てて呟いた。

「…やっぱり気になるなあ、
アレ」

「え？」

「分解とか、色々して調べられない？」

「そ、それは危険かも…」

「動く理屈が知りたいなあ…、
見たところ人力じゃないだろ？」

…ん？」

ふと、ライズの目に、草むらに置き捨てられた自転車が映る。

「あれは何？」

…ああ、ちよつと待って、

自分で考えるから」

ライズは軽い足取りでその自転車に歩み寄る。

歌鳥は妙な気分でその後続いた。

(…不思議なひと…)

小さく唸りながら、自転車の車輪やハンドルを調べるライズ。

そんな様子に気を取られて、歌鳥は辺りへの注意を怠っていた。

車輪の音がして、ようやく歌鳥は人間の接近に気付いた。

(…!)

「あ、そういうことか。

やっぱり」

歌鳥の狼狽をよそに、

ライズは先ほどまでの自身の興味の答えを得て、声を上げた。

アスファルトの歩側帯を、制服姿の高校生が自転車をこぎながら通り過ぎていった。

草むらに立つ歌鳥たちには一瞥もなく。

(…………え…?)

歌鳥は思わず振り返って、その背中を見る。
みるみる遠ざかるその高校生は、
近所に住む歌鳥の同級生だったはず
…

「こんな見通しのいい所にいたのに…」

まったく気付かれなかった。

この道は、歌鳥もよく通っていた。
だから道路側からこの草むらがどう見えるのか、よく知っている。

少し斜面になっていて、道路からは見下ろすかたちになっている。
雑木林からこんな所に出て来てしまったのは、こちらからは道路が
見にくかったため、
向こうからの見通しをつい失念したからだ。

「絶対目立つのに…」

歌鳥は困惑して呟く。

ライズの髪は、草むらの中で浮いて見えた筈だ。
歌鳥だって長い亜麻色の髪だ。
そもそも知り合いならば、余計に目についた筈、

しかも歌鳥は
…

(…あんまり騒ぎにならなかったのかな……)

……とは思えない。

顔見知りには、あそこまで素通りされるとは。

拭いきれぬ違和感に歌鳥が首を傾げていると、
ライズがそれに気付いて声を掛けてきた。

「なに？」

……歌鳥は、自分が感じたその違和感をライズに打ち明ける。

それを聞き、ライズも首を傾げてみせた。
そして、

「ちょっと表の方に出てっってみる？」

と言った。

「え!？」

「だってこんな所で悶々としても仕方ないだろ？」

さっきの子はただ俺たちを見落としただけかもしれないけど、

マリーが言った《修正》が何か関係してるのかもしれない。

面倒が起きたら、なんとかしてあげるから」

「なんとかかって……」

「よし、じゃあ行ってみよう」

ライズが軽やかにガードレールを飛び越える。

歌鳥はかなり躊躇ったが、ライズの手招きにつられておずおずと進み出た。

「こっちで頼りになるような人、いないの？」

ライズの問いに、歌鳥は首を振る。

「あまり…、人と関わっていなかったの……」

「そうなの？」

意外だな」

「ごめんなさい……」

「いや俺に謝ってもらおう事でもないけど」

ライズはアスファルトの感触を確かめるように軽く足を鳴らす。

「じゃ、どっつする？」

カトリちゃん。

今からキミのお家行ってみようか？」

「 ……えっ… 」

「 なに、その死刑判決受けたみたいなのカオ 」

「 そ、そんなこと… 」

「 ちょっと遠くから様子を見るだけでもしてみたら？ 」

この際、気になる事はスツキリさせちゃおうよ
「 」

歌鳥はライズのテンポの速さに、もう少しで放心しそうだった。

【 齟誤 】

… リーヴダリル帝国
サンクレール。

ワヤンニテンペストが異変に気付いたのは、
街に立ち込めていた朝靄が晴れ、空に青みが増してきた頃だった。

街の朝市に、食材を買いに行ったロイド達がまだ戻らない。

遅い、と初めて感じてから半刻が経っていた。

隠れ家としたこの教会に残るのは、
ファントム・コードの造獣師レックスと、
彼の主クローディア。

そして、彼の娘アイラ。

レックスとクロードディアは《ゴーレム》の創作のため、一室に込もりきり。

アイラはクロードディアの護衛のため、そのそばを離れない。

ワヤンはしばし考える。

レックスは今、手が離せない。

離してもらっては困る。

ことはクロードディアの命にすら関わるのだから。

ロイド達に何かあったのでは、という事を彼の耳に入れ、その集中力を削ぐのも気が引けて、

同室しているクロードディアやアイラにも相談出来ない。

(……何かあったと決まったわけでもないが…、
あまりに帰りが遅過ぎる……)

ワヤンは立ち上がり、扉に向かいそれを少し開け、
辺りを探るように視線を滑らしてから影のようにするりと抜け出した。

*

事態の異常さに気付くのは早かった。

ワヤンは朝市の賑わいが収まりかけ、昼に向けて準備を始めている

市場に向かい、

ロイド達の行方を訊ね歩いた。

ロイドはあの身長だ。

しかもあの季節外れの黒コートはそうでなくても相当目立つ。

“黒コートの眼帯を着けた大男”と尋ねれば一発でわかる筈だった。

それなのに、誰に尋ねてみてもそんな男は見えていないという。

それだけならまだわかる。

問題は、市場の人間が口を揃えて

「そんな男は一度も見たことがない」と言うことだ。

ロイドは昨日も出歩いていた。

街中にも足を運んでいる。

ならば昨日、確実にロイドに目を留めた人間がいるはずだ。

何度でも言うが、ロイドの風貌はかなり目立つ。

なのに、それがない。

もしかやと思い、ワヤンはレックス達とこの街に初めて来た時に逗留しようとした宿に向かった。

この宿には、ロイドは立ち寄りなかったが、

歌鳥がレックスと共に数刻だけ部屋をとっていた。

歌鳥（らしき少女）を見た、という声も市場では聞かれなかった。

歌鳥の場合は違う意味で人目を引く容姿だが、必ずしも目立つ、というほどでもない。

小柄だし、服装も地味でありきたりな部類に入る。

ただ、この宿の人間なら、歌鳥を覚えていなければおかしい。

ハッキリと顔を合わせた筈だし、

被害は受けなかったものの、騒ぎを起こして飛び出して行った客なのだから。

…しかし。

「男の方と、女の子の客？」

ああ、いましたね。

でも女の子はすぐに出かけて行かれました。

その後、お連れの方も何やら慌てたご様子で部屋を引き払ったんです。

宿代は先に受け取ってたから …、

…え？

その女の子？

確か、肌が黒くて、

明るい茶色って言うか、黄色って言うか、そんな色の髪の娘でした

よ、

すごく短い髪の毛」

それは歌鳥ではなく、
エレナだ。

同様に、市場ではエレナを見た、という声だけがあった。

エレナも目立つ容姿ではある。

けれどエレナが目についていて、同行していた善のロイドや歌鳥を覚えていない、というのはやはりおかしい。

…尋常でない

何かが起きている …

ワヤンは顔色を失いかげながら街中に戻り、エレナを捜し始めた。

*

褐色の肌を持つ少女は、その時すでにサンクレールの街を出ていた。

（まったく…、

何が何だか……）

困惑は苛立ちを生じさせ、エレナの足を急き立てる。

なぜ自分はこんな街にいたのか、エレナにはまったく思い出せない。

断片的な記憶が頭の中で渦を巻き、

あまりに大量の《何か》が欠落していた。

それがエレナの歩調を乱れさせ、何度目かの突然の停止をさせる。

「何なんだよ……」

焦燥感があつた。

振り返り、この街を離れてはいけない、という感覚に捉われる。

けれど。

(……セナに……
戻らないと……、

イリアス達が……、

でも……何か……)

頭を抱え、エレナはその場に座り込んだ。

「何これ？」

「何なんだよ……」

わけがわからない。

エレナは《イリアスの死》を覚えている。

しかし悲しみは既に磨耗し、エレナの中で受け入れられている。
その事実が、エレナを更に混乱させる。

《何か》が足りない。
確実に、明らかに、
《何か》が足りない。

「……くそっ……!!」

土を蹴りつけ、エレナは呻きにも似た声を漏らした。

【歴史の修正】

「……おい、」

うつらうつらし始めていた耳に、低くバリトンの声を聞き、クリスはキョトンと顔を上げた。

「……？」

呼び掛けてきた相手を見、首を傾げた。

ロイドは琥珀色の隻眼でクリスを見ている。

「少し聞きたい事がある。」

オマエ、ここに飛ばされる直前に何があったのか濁したろうっ」

クリスは僅かに目を丸くして、それからこっくり頷いた。

「何があった？」

その傷も何か関係しているのか」

「…」

クリスは少しだけ目を泳がせ、ぽつぽつと拙い口調で語り始めた。

宿を借りた農村、

そこで遭遇した、貴族らしき男との争い。

ロイドは微かに眉をひそめる。

「…で？」

「斬られそうに、なった。

たぶん斬られていた。

この……、こちらに来ることがなかったら」

その言葉に、ロイドは口元に指を当て、何か考えこむような仕草をしてみせた。

「ろいど？」

「…、ああ、
気にするな。

少し思うところがあるだけだ、

それがはっきりしたら話してやる」

そう言われ、クリスは素直に頷いた。

クリスはどこまでも素直で無邪気だ。

それは微笑ましいと同時に、
どこか危うい。

「 ……クー坊」

「？」

「オマエ、最近何か気になる事はないか？」

妙な夢を見る、とか」

クリスは瞬き、赤紫の瞳を丸くする。

「 ……ゆめは、見ないけど、へんなかんじはする」

「変な感じ？」

「なにか、覚えてない何かを思い出しそうになる」

「 ……どんな」

「わからない。

ただ、イリアスに会うまえのことだと思っ。

森で暮らしはじめるのよりも、まえだ。

たぶん、おれが本当のおやといたころの

クリスは《森の仔》と呼ばれる …、
そう、分類される。

幼い頃に人間社会の外に捨てられて、森の精霊に育てられたといわれる子供のことだ。

ロイドはその事情については詳しくは知らない。

ただ、クリスの身の上に少しの興味を示した。

「親、っていうのは何か覚えているのか」

クリスは首を振る。

「いたとは思う」

「そりゃいただろうよ」

「おぼえてない。

ただ …、」

「ただ？」

クリスはほんの少し、目を伏せた。

「おれのことを

クリスタル、と呼んでいたのはおぼえてる。

だから、おれはイリアスに名前をきかれたときに答えることができ
たんだ」

ただ、そこから記憶を引き出そうとすると、
上書きされた記憶に遮られてしまう。

クリスはもう、自分を呼ぶ《親》の声はイリアスのものしか思い出
せない。

「 ……クー坊、」

「?」

「いずれオマエをファントム・コードのアジトに連れて行くことにな
るが、

本来ならそのときに、マリーという奴に聞かされる話がある。

だが、多分オマエにとっては少しでも早く聞いておいた方がいい」

「?」

ロイドは改めて膝をずらし、クリスに向く。

「ファントム・コードは、《ある予言》によって動かされている。

それをもたらすが

《ファントム》だ。

《個》を持たぬ

《絶対意思》」

クリスは首を傾げる。
わからない、とその表情が言っていた。

ロイドはそれを承知しながら、しかし話を続けた。

「ファントムの《予言》というのは、
《ひとつの歴史》という形を取っている。

〇〇歴〇年、〇〇で〇〇〇が起る、
という記述の羅列だ。

その中にある …、
その終着点にある

《ルビー・エーテルによる世界崩壊》
というものを阻止するために俺達は戦っている。

これは前に話したことだが、
そのために具体的に何をしているのかと言つと、

つまりその《ひとつの歴史》にある事柄を少しずつ変えて行く事で、
その終着点を変えようとしているわけだ。

その度に《歴史》は変わる。

俺達が行動する度に、
ファントムの《予言》は《修正》される。

《現在》を変えれば、

変える前の《歴史》が変わり、
その《歴史》の延長にある《未来》も変わる。

その理屈はわかるか？」

クリスは曖昧に頷いた。

ロイドは続ける。

「その中で、

《歴史》の中に《歪み》が生じることがある」

「ゆがみ？」

「どうあっても辻褃が合わなくなる事が出てくるわけだ。

《歴史》は本来の形を保とうとしている。

欠けた《存在》や《事件》を、

違う形で補おうとする事がある ……」

そこでロイドは少し瞬巡する様子を見せる。

「 ……たとえば、

歌鳥のことだ」

「カトリ……？」

「この際だ、

戻ってきたなら本人にも話す。

多分そろそろ、その兆候は出ているはずだ。

歌鳥は《虹姫》という存在として《予言》に記されている。

ただ、その存在は《ルビー・エーテルの完成》という記述と直結していた。

だからファントムは《虹姫》の直系の祖先をこの《異界》に隠した
…、

《消去》ではなく《隠蔽》という道を選んだのは、

あまりに《歴史》に《変化》を与えてしまうと、

その後の《歪み》の《修正》の皺寄せの規模が予測出来ないからだ。

ルビーの完成を阻止する為、短絡的に行動を起こすなら《虹姫》の誕生そのものを阻めばいい。

だが、その手段はファントムは取らなかった。

どうせそれを阻止したところで、

《歴史》は辻褃を合わせるために《修正》を行う。

それにより起こりうる齟齬とズレに、おそらくファントムの《予言》の《修正》は間に合わない。

だからファントム・コードは、ある程度その《滅びへの歴史》を踏襲してきた。

《虹姫》の血脈を失った《歴史》の《軸》を《調整》しながら「

クリスは徐々に眉間の皺を深くする。

元々が表情に乏しい少年だけに、こつも感情を露にされるとロイドもつい苦笑を溢してしまう。

「小難しい話なのはわかってる。

とりあえず、流して聞け。

細かいことは、その時々に変更して説明してやるから」

「……ん……」

「《調整》は何百年と重ねられてきた。

こちらで失われた《虹姫》の《血筋》、その辻褄を合わせながら。

生まれるはずだった《軸の歴史》における重要人物達の穴埋めをしながら。

今回の歴史で ……、

こちらに《虹姫》は生まれなかった。

そして《歴史》はその穴を埋めた ……」

その言葉を口にしたとき、ロイドの表情に微かに苦いものがよぎるのをクリスは見た。

*

歌鳥は半ばビクつきながら、アスファルトの道を歩いた。

ライズのいっそ軽い足取りに何だか居心地の悪さを感じてしまう。

山間の田舎町、通勤通学の時間が過ぎてしまえば人通りは少ない。皆無と言ってもよかった。

少し歩くと見晴らしは拓け、田畑を貫く村道に2人の姿はあまりに露だ。

歌鳥は落ち着きなく辺りを見回す。

遠くに畑を耕すトラクターの姿を見つけ、かなり身構えてしまった。

ライズがその視線を追い、

「何？」

あれ、何か危ないの？」

と訊いてきたくらいだ。

「だ、大丈夫です」

「そう？」

「…知り合い？」

「…………顔くらいは…………、
知ってる…………」

毎日のように通っていた道だ。

向こうも当然、歌鳥を覚えているだろう。

歌鳥はこの辺りでは噂話の種だったのだから。

かなり躊躇ったが、ライズの歩みに続いて歌鳥もアスファルトの道を進んだ。

怪訝に思ったのは、顔がハッキリと判るほどの距離に近づいても

そのトラクターに乗った中年の男は歌鳥たちに一瞥もくれない、そのことに気付いた時だった。

「……なんか変だな」

ライズの指摘に、歌鳥も戸惑いながら頷く。

「……」

歌鳥は意を決し、おそるおそる、その畑に足を踏み込んだ。

「……あの……」

男はその声に気付かぬまま、前方から目を離さない。

「……あのっ……!!」

「……すいませ……」

そのとき唐突に、ライズが歌鳥の体を引き寄せた。

急に方向転換したトラクターのタイヤに、歌鳥が巻き込まれるとこ

るだった。

「きゃっ……!!」

「危なっ」

それでも何事もなかったように、男はハンドル操作を続けたまま、トラクターに乗って行ってしまった。

歌鳥とライズは顔を見合わせる。

「……もしかして……」

「うん、

あれは……見えてないね。

俺達のこと」

歌鳥は茫然と、山から届く蝉の声に溢れた畑の上で立ち尽くした。

「……《修正》って……、

こういう事……!?!?……」

「どづいつ理屈なんだ？」

なんだか自分が《ドール》にでもなった気分だな」

歌鳥は、ライズのその言葉に振り返った。

「《ドール》…………」

不可視の存在。

……それに近い理屈なのだろうか。

「この分だと、もしかしたら《こっち》の人間の殆んどは俺達が見えないんじゃないか？」

あの小父さんといい、さっきの…ジテンシャ？、に乗ってた子とい
い、

そういう事なんじゃ」

弱々しく、歌鳥は頷く。

そういえば、マリーが言っていた。

…もう《異界》に歌鳥の帰る場所はない、
様子を覗くだけならば可能だ …

(……こっちいう事…?)

歌鳥は頼りない足取りで、アスファルトに再び歩みを戻す。

…そういえば。

「全然…暑くない…」

「ん？」

「さっきからずいぶん歩きましたよね？」

こんな……日陰もない道を……ずっと」

道路の先に目をやれば、遠くに逃げ水が揺らめいている。

「私、確かに慣れた道だけど……、この天気で、汗もかかないなんて」

「……そういえば俺も気になる事があるな。

実は俺、朝ご飯まだだったんだよね。忘れてた。

でも何か、全然お腹減ってないや」

歌鳥も頷く。

それは歌鳥も同様だったからだ。

「何だか……、本当に、自分が人間じゃない何かになったみたい……」

やけに体が軽い気もした。

「……ふむ」

ライズが何か考え込み、ポンと手を打った。

「よし、周りに俺達の姿が見えてないっていうなら、もっと堂々と好きにしていいな」

「そこですか!?!」

「けど見えてないっただけで、実体はあるみたいだよね？、俺達。さっきジテンシヤに触れたしさ。」

どんな風になるのかなあ、

俺が何か持ったら、浮いて見えるとか？

こっそり何か持ち帰ったりとかは無理かな」

「それ泥棒……」

「あ、この畑って何を作ってるの？」

「……ライズさん……」

そのテンポ、

ついて行けません。

*

ライズが興味を示したので、2人は商店街に入って行った。

商店街と言っても規模は知れている。

10あるかないかの店舗と、小さなスーパーマーケットがひとつあるだけだ。

それでもライズには物珍しい。

はしゃいだりはしないが、興味津々だ。

さすがに店の並んだ往来、人通りはまばらにだが皆無ではない。

中には歌鳥もよく見知った顔もあったが、やはりその誰もが歌鳥たちの姿が見えていないようだった。

とはいえ、ライズのように堂々と歩き回る度胸は歌鳥にはない。

ひよこひよここと物陰に隠れるようにしながら歩いて行くので、先を歩くライズと距離が開きがちになる。

その度に、ライズが振り返って鷹揚に笑い、手招きしてくる。

「だあいじょぶだって」

「は……はい……」

なぜ《こちら》の人間ではないライズにリードされているのか首をひねりたくもなるが、

それは歌鳥とライズの気性の違いだろう。

なんだか、どつと疲れた。

身体的にはなく、精神的に。

身体の調子は信じられないくらい好調だ。

歌鳥は小さく溜め息を吐き、なんとなく辺りを見回した。

ふと目に入ったのは古びた店の並びから少し距離をおいてちょこんと在る駐在所だった。

その前には掲示板が立っており、防災ポスターや指名手配などが張り出されている。

…その中に。

「…………え…………？」

歌鳥は目を疑う。

慌てて駆け寄り、食い入るように《それ》に釘付けになった。

その様子に気付いたライズが、首を傾げて近づいてくる。

「…………何…………これ…………、」

…………どうして…………？」

…

【この人を探しています】

【浪川 歌鳥】

…

想像しなかったわけではない。

突然姿を消した歌鳥を、誰も探さないと言うことなどあるわけもない。

テレビにまでは扱われなくとも、張り紙くらいはされて不思議はない。

……でも。

(この写真)

歌鳥は呆然と立ちすくむ。

張り紙に載せられた、

【浪川 歌鳥】として載せられた写真。

けれど。

(これ……、

……私じゃない……!!)

これは

「……この娘……!!？」

背後から聞こえた、動揺も露なライズの声。

歌鳥は弾かれたように振り向き、ライズの瞠目する顔を見た。

「ライズさん……？」

この娘、知って……？」

この少女は ……

「……アーリー……!!……」

その一言に、歌鳥は少しの外した気分になった。

歌鳥は …

(…この娘は…)

「エアリアル＝テラ」

ライズが被せるようにその名を口にした。
そこで歌鳥は目を見開く。

「エアリアル……」

「……ファントム・コードのマリオンだ……、

キミが来る前に、レインに殺された ……」

…

(あたしはもう歌鳥の中でしか存在出来ないの)

…

「エアリ…アル……」

その意味するところは。

【グレンとキリエ】

「 ……先ほどマリーエレメントから『報せ』が入りました。

それは《ファントム・コード》の《誤作動^{エラー}》によるものだそうです。「
紅黒く汚れた手袋と白衣を脱ぎながら、レックスはそう言った。

扉の入口では、疲れきった風情のワヤンが立ち尽くしている。

「エラー……？」

「はい」

普段は樫鈍にさえ見えるレックスは、その穏やかさを少しも失わな
い。

「大丈夫です。

今マリーが急いで《修正》を始めています。

それより今は、消えてしまったロイドさんやカトリさんよりも、
残されたエレナさんの方が心配です。

多分エレナさんは今、記憶の不整合に混乱してしまっているはずで
す。

2人との関わりが深かっただけに、その齟語はお嬢さんの比ではな
いでしょう」

レックスが言った“お嬢さん”とは、アイラの事だ。

…クローディアのゴーレムの創作作業中、ふとした話のきっか
けから、

レックスはアイラがロイド達に関する記憶を失っていることに気付いた。

不審に思ったところに、ファントム・コードのマリーから《通信》が入り、

レックスは何が起こったのかを知らされた。

その後、困惑しきつたワヤンが戻ってきたのである。

「わかりました …、
すぐに捜してまいります。」

ところで、クローディア殿下の方は……」

「つつがなく終了致しました。
治療も済んでいます。」

しばらくは貧血で御気分が優れぬこともあるでしょうが、
落ち着くまでは責任をもって私が治療にあたります。
ご心配なく。

では

言い残し、レックスは別の一室へと向かう。

これから《ゴーレム創作》の本番なのだ。

自然、レックスの表情が引き締まる。

しかし一旦立ち止まり、一言付け加えるように、

「クローディア殿下はロイドさん達の事を覚えておいででした。

やはりあの方も“こちらの方面”に属しておいでなのようですね」

と言った。

*

閉めきつた一室、

レックスの持ち込んだ私物や、この街で買い込んだ品々が乱雑に並んでいる。

それらが散らばる卓上に、小さな糸車。

巻かれているべき糸は無く、

その下に置かれた盆の中に鮮紅色の液体が張られている。

レックスは椅子に腰を下ろし、静かな動作でその液体の表面を指で叩いた。

それは鍵盤を叩く動作に似ている。

5本の指を不規則に動かし、小さな滴と波紋を刻む。

しばらくそれを繰り返した後、レックスが《つまみ上げた》のは《紅の糸》

それは躍るように宙に舞い、レックスの指に引かれるままに糸車に繋がれる。

そうしてレックスは糸を紡ぎ始める。

(……抵抗が少ない。

これなら大丈夫そうだな)

レックスはカラカラと糸車を回す。

その作業に集中しながらも、レックスには気掛かりがあった。

…マリーからの報せである。

(……キリエ………)

…

『これは《誤作動^{エラー}》とは関係のない事なのだけれど、貴男には伝えておくわ、

レックス⇨ジエラルディン。

先程この事を別任務についているグレン⇨レイジングとキリエ⇨ジエラルディンにも連絡しようとしたのだけれど、

向こうから接続を拒絶されたの。

調べてみたら、数日前から2人はファントムとの《回線》を断っているわ。

《クライスト・アラーム主の警鐘》は鳴っていないから、

命に別状はないみたいだけど、詳細は不明よ。

考えられるのは故意に接続を断ち切り、

独断で何かをしようとしている、ということ』

…

「どっして……」

レックスはつい呟く。

手元に狂いが生じぬよう、しっかりと意識は集中していたが、それでも…

「キリエ……、

まさか……」

… ナスターシャ砂漠、

聖地ヴァナディース。

「… グレンさん？」

澄んだ少女の声に、青年は振り向く。

「サーシャ」

少女はぱつと表情を明るくし、軽やかに駆け寄ってきた。

「こんにちは、
グレンさん。」

まだこの街にいらしたんですね、
よかったです」

「……ああ、まあ……」

言葉を濁すようにして目を泳がした青年は、日除けに被っていた布で表情を隠すような仕草をした。

サーシャは少し首を傾げる。

「グレンさん……?」

何かあったんですか?」

「いや、何も」

「……そう、ですか?」

……とにかくまたお会い出来て良かったです。

ろくなお礼も、ご迷惑をおかけしたお詫びも出来ずじまいだったか
ら……」

砂漠の街に熱を含んだ風が舞う。

サーシャが被っていた布が揺れ、屈託のない表情がよく見えた。

それを見て、グレンは僅かに目をそらす。

「グレンさん、何だか元気がないみたい …、
熱中症ですか？」

「いや、全然。
気にすんな」

「何か街に御用ですか？」

でしたらお手伝いさせて下さい。

私の方が、この街には詳しいですから」

「いや、大丈夫だ」

そこでサーシャは、グレンに避けられている、という感じを受けた。
それに対し、少しばかりのショックを受けたが、その心当たりを探
り、

「 … お連れの方とまだ仲直り出来ていないのですか？」

と縋るような目を上げた。

その言葉にグレンが動揺したように見えて、サーシャは確信を抱く。

「そうなんですね？」

「い、いや、違 ……」

「本当にごめんなさい、
私のせいだわ。」

私がグレンさんのご厚意に図々しく甘えたばかりに……。

私、やっぱりお連れの方に謝ります。

ちゃんと一から説明を」

「本当に違うんだ、

サーシャ。」

それにキリエは …… 連れのアイツは、もうこの街にはいないから

……」

「破局なさったんですかっ!?!」

サーシャの顔色が変わる。

「ああっ!?!、

本当にごめんなさいっ!?!

私、なんてお詫びしたら」

「違う違う違う!?!?!?!」

ただちよつと用事があつて別行動になつただけだ、

ていつか破局て!?!

そんな関係じゃねえから!?!」

「そ…そうなんですか？」

サーシャはまだ半信半疑の表情でグレンの顔色を窺っている。

グレンはそれを宥めるように、ぎこちなく笑った。

「大丈夫だ、

心配してくれてありがとうな」

「……なら、いいんですけど……」

言って、サーシャは伏せた瞳を僅かに泳がせる。

「……あの、グレンさん」

「？」

「グレンさんは、いつまでこの街におられますか？」

「いつまで……って ……」

まあ、しばらくは「

その答えにサーシャの表情が少し明るくなった。

しかし頭に被った布のために、グレンの目には映らなかったが。

「よろしかったら、どちらの宿にお泊まりなのか教えて頂けませんか？」

この間のお礼を是非。

お食事にお招きするのは、お連れの方のこともあるので憚られるでしょうから、

せめて別の形で何か……、

そうだわ、

私お弁当を作ってお届けします」

「いや、そんな……、

大したことしてねえし」

「そうさせて下さい、

たくさん御迷惑をおかけしましたから」

サーシャの一所懸命な訴えに押し負けて、グレンは自身の逗留先の宿を教えた。

それを聞いたときにサーシャが見せた嬉しげな表情に戸惑いながら、グレンは手を振って去っていく少女を見送る。

「……はあ……」

ややこしいことになった。

いや、既になっているのだが。

「……くそ……、

……何でこうなったんだか……」

…グレンの脳裏に、甲高いキリエの声が蘇ってきた。

…はなして

*

「放して!!」

…数日前、この街で。

大聖堂に続く通りの上で、グレンがキリエの腕を掴み、引き留めていた。

「馬鹿言っつな、
自分が何言っつてんのかわかってんのか!？」

そんなもん、明らかに命令違反だろうが!!

ファントムの指示も、ボスの許しもなく、
この街を離れて何かあったら …!!」

「わかっているわよ!!」

キリエの声が鋭い。

振り向いた表情、眼光まで尖って見えた。

砂漠の街、その夏の夜は昼と同義、
人通りが多い。

何事かと視線を送ってくる住民たちを意識しながら、とにかくグレンはキリエを宥めようとした。

「とにかくまずは確認が先だろ!？」

アジトのマリーに連絡して、それから ……」

「嫌よ!！」

そんな事したら、お兄さまの耳にも入るわ、

私はお兄さまに知られる前に、全てに片を付けたいのよ」「

「私情じゃねえか!！」

キリエはキツとグレンを見上げる。

貌が整っているだけに、眼力がより強い。

気圧されそうになりながらも、それでもグレンも引き下がらない。

「そうよ、私情よ!」

私はそのためにファントム・コードに入ったの!

お兄さまより先に、全てを終わらせる為だけに!

そのためなら今ここで、ファントムのマリオンである事を放棄した
っつていい。

そうすれば、貴男だって私を止める理由もなくなるでしょう!」

「何言っつて ……」

「もう沢山、

貴男の屈託がずっと鬱陶しかったのよ。

“あの子”が死んでから、ずっとそう「

キリエの言葉に、グレンの顔色が変わる。

それでもキリエは真っ直ぐに視線を逸らさない。
まるで射抜くように。

「いったい何を守ろうとしているの？

私や他の誰かを守って、貴男は何を払拭しようとしているのよ。

貴男がずっと引きずっているのは、

自分を庇って“あの子”が死んだことじゃない。

“あの子”が貴男を ……」

「やめろっ！！！」

グレンの声が割れる。

キリエはそれを痛々しいほど冷ややかな瞳で見た。

「貴男がそのことを乗り越えるために何かをするのは勝手だわ。

だけど、

私の邪魔をしないで。

中途半端な薄っぺらい仲間意識は要らないの。

貴男が過去を払拭する為の何かにはなりたくない」

「そついう事じゃねえだろうが!!」

お前、自分が何を言ってるかわかってるか!？」

「わかってるわよ!!」

キリエはグレンの手から振りほどいた腕を、胸に当てた。

「私を止めないで。」

貴男が守ろうとしているのは、
ファントム・コードの理念でも、
世界の平穩でもない。

ましてや私や他の誰かでもない。

貴男のエゴに、私のエゴを止める資格があるの?」

グレンは返す言葉を失う。

キリエの言葉に、何か衝撃を受けたわけではない。

ただ、キリエの激情に何かしらの違和感を感じ取ったからだっただ。

「貴男の何にも、

私は止められない」

それは“誰”に
言ってるんだ？

「……わかった……」

グレンは息を吐きながら、呟いた。

キリエが初めて気まずそうに目を伏せる。
長い睫毛がその瞳に深い影を落とした。

「勝手にしろ……、
もう、いい」

「……」

キリエは無言のまま、グレンの横を擦り抜ける。

その歩調を速めようとしたときに、グレンの声を聞いた。

「ただし、俺も共犯だ」

「……え？」

キリエは振り返る。

グレンはキリエの方を見ていなかった。

ただ、零すように言葉を紡ぐ。

「2人での共同任務の途中なんだ、

本当なら、この時点でファントムに報告するべきなんだろうが、お前が途中で任務を投げ出したってなれば、その責任はお前と組んでた俺にも及ぶ。

…任務は俺が1人で続ける。

お前の命令違反はしばらく黙認してやるから、さっさとやる事をやって来い。

さっさと済ませて、さっさと戻って来い。

口裏を合わせて、別行動は無かった事にするんだからな」

不機嫌そうな言い種に、しかしキリエは何かが軽くなった気がした。

ふわりと、息をつく。

「…ありがとう」

「さっさと行けよ」

「そうするわ。」

……グレン」

「…なんだよ」

「……言い過ぎたわ。」

「ごめんなさい」

そこで、やっとグレンは笑みをこぼした。
苦笑ではあったが。

「……………行け。
………それで絶対戻って来いよ。」

お前がファントム・コードを捨てたとしても、
レックス兄はファントム・コードに残ってるんだ、

お前が戻って来なかったら、俺が兄貴に合わせる顔がねえ」

その言葉に、キリエも微笑う。

「わかっているわ」

………そうして、
足音が遠くなった。

………

「………ったく………、
面倒臭い事になったぜ………」

溜め息を洩らしながら、グレンは頭の布を直した。

我ながら、何故キリエを行かせてしまったのか、
今になって後悔していた。

あそこは絶対に、止めるべきだった。

その方が後々の面倒は無かった。

(…止めて聞くような奴じゃねえが……)

「……はあ」

日陰に入り、日射しと砂埃を避ける。

太陽の出ている間は、人の通りが少ない街だ。

こう見えてグレンは人目を気にするタイプなので、堪えられる暑さならば、この時間に出歩く方がいい。

そこでサーシャに会うとは思わなかったが。

「……別にいいけどよ……」

何だか訳もわからないままモヤモヤする。

… 貴男は何を …

キリエの声が耳に残っている。

… 貴男が引きずっているのは …

(… 俺は……)

引きずっている自覚はあった。

けれど。

(…そういう事じゃねえよ……)

……キリエや、他の連中が思っているような事じゃない。

「別に、好きだった訳じゃない ……」

だから、そういう理由で引きずっている訳ではない。

グレンは自分に言い聞かせるように、呟いた。

【歴史の修正…2】

「エアリアル……、

……アーリー……？」

歌鳥はライズのことを復唱した。

そのライズは《その貼紙》から視線を離さない。

その眼差しから、重ねて声を掛けるのが憚られる気がする何かを感じ、

歌鳥はそんなライズを見守っていた。

ゆっくりと、ライズが口を開いた。

「……カトリちゃん、」

「……はい」

「これ、絵にしてはリアル過ぎない？」

「……」

……

……はい？」

見当外れの発言に、歌鳥はガツクリと肩を落とした。

「あの……、ライズさん」

「コレ、まんまアーリーなんだけど。
ビックリするよ」

「これは絵じゃなくて写真って……、

ああ、もう……、

今はそんな事いいじゃないですか？」

「そっか」

あっけなく納得し、ライズは頷いた。

歌鳥は溜め息をこらえつつ、もう一度《その貼紙》に視線を戻した。

「この子……、

どうして、この子が私に……？」

「？」

アーリーがカトリちゃん？

何の話？」

ライズの反応に、歌鳥は彼が《こちら》の文字を理解できないのだと気付いた。

当然といえば当然だろう。

歌鳥も《あちら》の文字が読めなかった。

歌鳥は、ライズが“アーリー”と呼んだ少女の顔が、

この紙面で“歌鳥”として扱われているのだという事を説明した。

「えあ？、何それ？」

「どついつ事なのかしら……、
それにこの子……」

歌鳥は言い淀む。

なんとなく、この少女を既に知っている、という事を言い出しにくい。

ライズがこの少女を“現実”に知っているらしいだけに。

歌鳥の場合、彼女と顔を合わせた事実の現実味が乏しい。

しかも、彼女は既に ……

「……もう、

亡くなって……? ……」

「ああ

ライズは普段に比べれば少し低い声音で短く応えた。

「……いつ頃……? ……」

「いつ、って ……、

まあ、わりと最近。

今年の春頃かな。

任務中にレインと出くわしたんだ、

それで

「 ……今年の…春

歌鳥は記憶を手繰る。

「 ……私が…《あちら》に《呼ばれた》のも…、
その頃……」

「え?

……ああ、そうか。

確かにそう聞いたな

「私を呼んだのは……」

頭に浮かび上がる、面影。

優しげで、穏やかで、どこかあどけなさすら滲ませる笑み。

しかし、歌鳥は

《彼》が恐ろしかった。

(…これは…何…?)

《彼》に呼ばれた《歌鳥》

《彼》に殺された《彼女》

その意味するところは？

歌鳥は背筋を這う寒気に震えた。

《彼女》の顔に見入ったまま、言葉を失う。

「顔色悪いよ？」

カトリちゃん。

一旦ボス達の所に戻る？」

蒼穹の瞳に顔を覗き込まれ、歌鳥はゆるゆる頷いた。

*

「…そして、今回のファントムの《誤作動》の原因は、

おそらくお前だ、
クリスタル」

ロイドの言葉に、クリスは怪訝な表情をした。

「…………おれが、なに？」

「お前が死にかけたって事が《誤作動》の原因だ」

「……………」

……………

……………なんで？」

完全に予想外に矛先を向けられて、クリスは困惑を表情に出すこと
も忘れていたかのようだ。

何の感情の色もない赤紫の瞳が、真ん丸く睨られる。

「ライズの言った通り、

本来ならファントムと接触したことのないお前が、
ファントムの《誤作動》に巻き込まれる道理はない。

なら、何故だ？

答えはひとつだ。

お前はそもそもファントムの関係者なんだ。

過去か、それとも未来か。

とにかく、お前が失われると今後の《歴史》に大きな影響が及ぶとファントムが判断し、

ファントムがお前を《こちら》に隠した。

かつて《虹姫》の血筋を隠したように「

クリスはポカンとした様子で、

「じゃあ、ずっと戻れないのか？

カトリの祖先が、ずっと《こっち》にいたみたいに「

「いや、

《虹姫》の場合はそもそもそのつもりで《こちら》に送りこんだんだ、

今回は違う。

お前が死にかけた事は、ファントムやマリーにとっても不測の事態だったんだろう。

だから俺達まで巻き込まれたんだ。

お前を守るために《異界》に隠すのに、俺達は必要ない「

そう言って、ロイドは小さく息を吐く。

「 …… 実を言うと、

俺はかなり早い段階から、お前がファントム・コードの《何か》だと報されていた」

「？」

「セヴァルスタで初めて会った時のことを憶えているか。

俺はライズ達とは別行動であの島に入っていた。

ライズ達に《虹姫》の方を任せ、俺は《お前》を捜していたんだ。

始めからな」

その言葉に、クリスはキョトンとしたままロイドを見返した。

そういえば、その時は不審に思わなかったが、今になるとその時のロイドの行動は少し不可解だったかもしれない。

《ルビーの発動》と

《虹姫の出現》は、

ファントム・コードにおける最重要事項だと、ロイドは言った。

なら《ルビーの発動》が終わったあの時、

ロイドにとって最も優先されるべきは《虹姫》の保護だったはず。

ファントム・コードは俗世に関わらないと言っておきながら、力なき民を守るために奔走していた。

それは善意だったのかもしれないが、ロイドはそれだけの理由で《最重要事項》を差し置くような男ではない。

しかし、ロイドの目的がクリスを見つける事だったと言っのなら

…

「だから、あんなところにいたのか」

「そついう事だ。」

《お前》がセナ砦の反乱軍の関係者であろう事はマリーに聞かされていたから、

あとはその残党狩りの連中の行く手に先回りしながら、あの辺りをずつとろついていたわけだ」

「そうか、

ありがとう」

「……あ？」

ロイドが不審そうにクリスを見た。クリスはあどけない風の無表情で、

「あのときは、ただの親切だと思ってお礼を言ったけど、

ほんとうはちがってたなら、もう一回言う方がいい」

「よくわからん理屈だが、
まあ、

“ドータシマシテ”」

ロイドは少し肩の力が抜けて、軽く頭を掻いた。

「それで」

クリスが口を開く。

その声は普段通り、静謐で抑揚がない。

「“それで”？」

ロイドを見るクリスの瞳に、どこか真剣な色が滲む。

「おれは、

《なに》なんだ？」

それを示す言葉を。

クリスは自身が何者かを知らない。

その答えを《ファントム》が持っているというのだろうか。

【その者は絶望を司る】

…待ち焦がれていた夜の帳に、男は小さく息を吸った。

石畳の街道、男の足元に落ちた影が闇に霞む。

その男は、平均よりも少しだけ背が高く、平均よりも少しだけしっかりとした体格をしていた。

顔立ちも平均より少し整っている程度、
人目を引くような、特筆すべき特徴はない男だった。

……その顔色を除いては。

「…………ちっ……」

不機嫌そうに小さく舌打ちしたその男は、蠟のように白い肌をしていた。

体つきや足取り、仕草がいかにもたくましく、健康的ですらあるために、

その肌だけがあまりに不似合いで、彼の印象に違和感を持たせる。

…彼の名を

シグマ＝ラメッドという。

ファントム・コードの宿敵の1人。

そして、《白い血の民》に属する男。

《白い血の民》は、陽の光の下でその異端の力を発揮することが出来ない。

ただの人間と同じ能力しか残らないその時間を、
シグマは一種の屈辱感を抱きながら過ごしている。
足止めされている気分だ。

*

（ ……昨日、ベルローズに貸してた《シャドウ》が、
ファントム・コードと接触したみたいだよ…… ）

……そうシグマに告げたのは、《人間》のまま仲間として受け入れられている少年・フィリオだった。

フィリオにしたら他意はなく、ただ話の継ぎ穂に出した話ではあったのだが、
その話題はシグマの神経を大いに刺激した。

「何処でだ」

「サンクレール、って言うってた……、」

別件で征かせてたやつに、たまたま引つ掛かっただけみたいだけど
……」

少年は身に染み付いているらしい陰気な視線を伏せたまま、
手元の《紅晶》を磨いている。

窓を閉めきった部屋には、弱々しいランプの灯りだけが唯一の光だった。

その室内で、一際の存在感を醸す《紅い》煌めき。

シグマは壁ぎわ、書物や専門器具が乱雑に置かれた長椅子に隙間を見つけ、そこに座っていた。

いかにも不機嫌そうな表情は、未だ本調子に戻らぬ自身の体調のせい、

また、つい先日受けた“精神的負傷”のためだった。

「サンクレール……………」

シグマの呟きに、フィリオがうつすらと隈の浮いた目を向ける。

「…………シグマがセドナで戦った相手かどうかは判らないよ……………」

「“視て”ねえのか？」

「“視ない”」

言って、フィリオは気が済んだのか、手にしていたものを丁寧な所作で卓の上のクッションに載せた。

「興味、ないから ……」

「なら俺に“視”せる。」

…いや、いい。

行った方が早い」

フィリオが怪訝そうに顔を上げ、腰を浮かせたシグマの方を見た。

「行くつて……、
サンクレールに？」

早いわけないじゃないか……」

「早えさ。

どのみち《あの餓鬼》に借りを返すには、ファントム・コードに近づくのが一番手っ取り早い。

サンクレールに居るのがあの餓鬼でなかったとしても、
ファントム・コードの連中を潰して行けば、いつかはヤツに突き当たる」

「……そう……」

フィリオはもうそれ以上の会話を放棄するように、シグマから視線を逸らした。

その眼にはどこか呆れたような色さえ滲んでいたが、シグマはそんな事は気にしなかった。

シグマにとって、フィリオの思惑など取るに足りない事だ。

そのまま椅子から立ち上がり、フィリオが座る卓の前まで歩み寄る。

仄暗い室内、白く質感を欠いた腕が伸ばされる。

フィリオが制止する間もなく、シグマは卓の上の《紅玉》を手に取った。

「シグマ」

「貰って行くぞ」

「まだ試作品だよ……」

「丁度いいじゃねえか、

どんな具合だったかは、後でちゃんと報告しに来てやる」

フィリオは小さく溜め息を吐き、前のめりになりかけていた上半身を椅子の背もたれに戻した。

諦めたような表情で、

「半月以内だよ……」

と呟くように言った。

「ひと月後に、ナイトメアさんがエツダさんが取りに来る予定なんだから……」

それまでに、微調整とか、色々やることあるんだからね……」

「まだ数はあるだろ、
神経質になるなよ。」

「じゃあな」

言い残して、シグマは扉に向かい、そしてこの家を出て行った。

フィリオはそれが習慣になっているのか、客が帰った後に大きな溜め息を吐き、瓶詰めの子葉を頬張り始めた。

*

…そして、今シグマは目指す人物がセドナからサンクレールに向かうと読み、それに当たって通るであろう道筋を予測し、それに沿った旅をしていた。

整備された街並みの美しいそこで、シグマはついと視線を滑らす。

…《食事》を。

《白い血の民》は、常に体内に《朱い血》を補充していなければならぬ。

そうしなければ、自身の体内で作られる《屍毒》に冒されてしまう。

彼らはそれで死ぬことはないのだけれど、自身の毒に冒される苦痛はひどく耐え難く、壮絶なものだ。

だから、その苦痛が追いついてくる前に《食事》をしなければならぬ。

ただし前述の通り、彼らは陽の下ではごく普通の人間と同じ能力しか持たない。

《白い血の民》 本来の身体能力も半減する。

《食事》 は陽が落ちてからだ。

そして《獲物》は、姿を消しても騒ぎになりにくい人間がいい。

レインに常々言われていることだ。

シグマは騒ぎを怖れはしないが、日の出の時刻まで騒ぎが長引いても面倒だ。

《食事》をする《能力》は夜の身体でしか行えない行為だから、日の出の後は《補給》が出来ない。

昼間は普通の人間並みの身体能力とはいっても、

シグマはその時間帯でも男10人相手くらいなら難なくこなせる程度の力はある。

それはシグマが《人間だった頃》に身につけた力だからだが、面倒は避けるに越したことはないだろう。

そうして、シグマは薄暗くなった往来に《獲物》を捜した。

そんな時、

目についた人影。

運河に掛かる石橋の上に佇む、いかにも独り旅の装いの長衣。

姿勢や雰囲気から男だと判断したが、確証はない。

その雰囲気、シグマが憎むある少年に似ていた。

おあつらえ向きだ、と思った。

少しも気が晴れるとは思わないが、闘志を再確認するにはいい獲物だ、と。

シグマはさりげなくその人物の様子を探る。

やけに軽装だとは思ったが、旅人には間違いないだろう。

ただの町民とは明らかに空気が違う。

その中にふと感じた、

違和感。

フードに隠れた瞳がこちらを向いた気がした。

その視線。

(……!?)

シグマは総毛立つ。

一瞬で、全身から汗が滲み出る感触がした。

反射的に後退りそうになる足を堪えたのは、自尊心からだった。

(……この…俺が…！？…)

フードの《彼》はシグマに視線を向けたまま、
何やら観察しているようだった。

敵意は感じられず、ただ物珍しげな視線。

それでもシグマを威圧するほどの《何か》。

言うなれば、

《得体の知れなさ》。

その《彼》が、シグマに向かって一歩踏み出した。

シグマは身体が強ばるのを自覚したが、あえてそれを無視した。

気圧されている自分を自覚することは、シグマにとってこの上もなく屈辱的なことだったからだ。

足音も闇に溶けるほど静かな足取りで、

《彼》はその滑らかな肌が見てとれるほど近い距離にきた。

女のように柔らかい線の顎が動き、静かで淡々としたような声が零れる。

「…犬……」

その眩きは、他に聞く者がいたなら何の事か、と首を傾げたるう。

しかしシグマはわかった。

というよりも、自身の内にある《それ》を見抜かれた事に驚愕した。

「なに……!?!」

「はじめて見る……、」

《白い血の民》か……」

その直後、シグマは視る。

《彼》の手が動き、真っ直ぐシグマの喉元を目指すのを。

それは刹那の動作、

シグマだから視えた動きだった。

鋭く仰け反ってそれを躲し、シグマは滑るよう後ろに飛び退いた。

《彼》はそれを感慨深げに眺める。

「やはり、違うな……、」

《人間》とは……」

「ああ!?!」

「《白い血の民》……」

独白のように呟いて、

《彼》は再びシグマに向かって《何か》仕掛けようとする素振りを見せる。

シグマは身構え、しかし、空気だけで自身の不利を悟っていた。
それがひどくシグマのプライドを傷付けた。

シグマにはレインが集めた《白い血の民》の《同志》達の中でも、
自身が“最強”だという自負があったから。

レインの右腕であるエツダすら、戦闘力においてはシグマには及ば
ない。

自他共に認める実力と実績が、シグマの自尊心を増長させていた。

しかし、今は …、

(… この野郎は……)

目の前の《彼》。

(あの餓鬼とは違う)

ただただ、感情の色のない動き、仕草。

得体の知れぬ不気味さ。

《彼》の腕が宙を裂く。

間一髪で飛び退いたシグマは、その感触から改めて目の前の男の危
険性を感じとっていた。

「いきなり何しやがる！」

「……何だと思う」

何の感情の色もなく、《彼》は再び腕を振る。

滑らかな手が見えた。

武器は、何もなかった。

（素手で）

シグマは気を取り直して、力を込めた腕を振りかざした。

《彼》の腕を、シグマの腕が受け止める。

高く、金属音に似た音が高く響いた。

道行く住民が、何かと2人の立つ石橋を見る。

自身の腕の軋む音を間近に聞いて、シグマは露骨に顔をしかめた。

「てめえっ……！」

何者だっ ……!？」

「それを知りたい」

「ああ!？」

《彼》はシグマの腕を弾き、腕を振り上げた。

ロープの裾が翼のように舞い上がる。

闇夜にそれは、無気味なほどに美しかった。

振り下ろされる《彼》の腕が、真っ直ぐシグマの胸を目指す。

シグマがその手を弾き返した。

間髪いれずに《彼》が腕を振るう。

その度に袖から覗く織手。

拳手の応酬に、その度にけたたましく金属音が鳴り響く。

それはさながら琴線の旋律のように、音楽的な響きさえ伴う。

そのためか、2人の様子を見守っていた人々は、その間に流れる不穏な空気を感じとれずにいた。

シグマは内心で舌打ちした。

(殺気も何もなく、

こんな …)

凧いだように、静かに。

息ひとつ乱さぬ《彼》

その動作にすら、鋭さの中にも静謐が在った。

幾合か撃ち合い、初めて感情の滲む声を《彼》が発した。

「……強いな」

その感嘆の声が、シグマの癪に障った。

その言葉はその意味に反し、《彼》の余裕を表していた。

「なめるなっ!!」

シグマが懐に手を入れる。

取り出された

《ひとかけら》

宙を舞い、月の灯りに真紅に煌めく。

…シグマの腕ごと。

「…な、…っ!？」

シグマは瞠目する。

質感のない肌から、元々乏しい顔色が失われたように見えた。

《ルビー》を掴んだままの腕を一瞬で斬り飛ばされ、シグマはよろめく。

その数秒で、石畳に転がり落ちた腕。

その指から紅晶が零れ落ちた。

遠巻きに見ていた人々の間から、悲鳴に似た声があがる。

それに何の頓着も見せずに、《彼》はその紅い石に興味を示した。

「……何だ？」

それは「

シグマは答えず、鋭く踏み込んで《ルビー》を拾おうと残された方の手を伸ばした。

フードに隠された眼でそれを追い、しかし《彼》はシグマの行為を止めようとしなかった。

シグマの腕が《ルビー》を掴む。

ほんの少し首を傾けて、《彼》は口を開いた。

「それで、

何かが変わるのか」

「うるせえっ！……！」

苛立ちはもはや沸点に到達していた。

あとはもう、向けるべき矛先に注ぐだけ。

シグマは拾い上げた紅晶をおもむろに口に放り込み、噛み砕いた。

その瞬間に、弾けたように周囲に満ちた強烈な《血の匂い》。

…気付いたのは、
シグマを除いては《彼》ひとり。

…真紅の閃光が、
街の通りを貫いた。

【10】歴史の修正（後書き）

歌鳥の家は、東北と関東の中間辺りにある設定です。

作者が育った土地と近い方がいろいろ都合がいいんですよね。言葉とかが。

うっかり方言とか出ちゃったりしても言い訳できそうだし。

まだ歌鳥は方言は出てないとは思っけど……。

ちなみに作者自身は一応標準語のつもりですが、数年前に亡くなつたお祖父ちゃんにはメチャクチャなまってました。孫が聞き取れないくらい。

【11】示す名を

その先に手を伸ばすなら
お前はお前を示す名前を
失うだろう

【殿井 岳】

…枕元に転がる目覚まし時計。

無意識に止めてしまったタイマーは、沈黙を守ったまま。

その針が示す数字を重い瞼の下の瞳で見て、彼は苦々しく呟いた。

「……………とうとう、
やっちゃった……………」

体を起こし、カーテンの引かれたままの窓を見た。

差し込む日射しは鋭いほどに明るい。

…^{がく}岳の家族は父と姉の2人。

朝早くに出勤する父とは、小学生の頃から平日に朝食を共にしたことはない。

昨年までは姉と2人で朝食を摂っていたが、今年になって大学に進学した姉は、

同じく今年に高校に入った岳とは家を出る時間の差が大きくなった。

岳は電車通学、それは姉も同じだったが、距離は倍以上違う。

父も姉も、岳が寝ている間に家を出る。

去年までは姉に起こしてもらっていた。

今年になってからは、目覚まし時計の力を借りながら自力で起きだしていたのだが、

とうとう本日、寝坊してしまった。

「これは完全に、遅刻とかのレベルじゃないな……」

確実に、1時限目の授業には間に合わない。

2時限目も怪しい。

ここまで来ると開き直って、慌てたりする気にもならない。

「どっしょ……、」

もう、休んじゃおうかな……、

……いや、駄目だな。

バレたら姉ちゃんにぶっ飛ばされる……」

ぶつぶつと呟き、岳はダイニングに向かった。

テーブルの上には、ラップのかけられた朝食。
テレビのスイッチをつけ、冷蔵庫から牛乳を出した。

朝食の横には、出しっぱなしの新聞。

岳はそれを開き、最近の習慣だが、テレビ欄よりも先に地域ニュースのページを開いた。

「……何も載ってない、

……か……」

*

…何をそんなに気にしてるのよ？

と、姉に訊かれたのはこの前の日曜日だ。

「最近あんた、やたらとニュースとか見てるわよね」

「べ、別に……」

「今まで見向きもしなかった週刊誌とか買ってまで。

もしかして《あの子》に気があったの？」

姉の言葉に、岳は激しく首を横に振った。

「ち、違うよ！

そんなんじゃない」

「かわい子だったもんねえ、」

でもあんた、あの子とは別にそんなに仲良くなかったよね？

話にも出てきた事ないし。

家は近いけど」

「だから、違っつて言っつてんじゃん」

そっついう事じゃない。

けど、

言っつても分からない。

きつと、誰にも。

*

「気になって気になって、眠れなくて、
だから寝坊したんだな…」

情けない声色の独り言を零して、岳は炊飯器の蓋を開けた。

*

「あら岳ちゃん、
今頃ご出勤かい？」

隣家の女に声を掛けられて、岳は苦笑して返した。

「寝坊しちゃった。」

姉ちゃんとお父さんには内緒にして」

女は声を立てて笑い、指でOKサインを出した。

「暑いから、気を付けるんだよ」

岳の家から駅までは1時間かかる。

自転車は盗まれたことがあるので、通学に使うのを父に禁止されてしまった。

駅に向かう道路は田んぼの真ん中を突っ切って、日射しを遮るものは何もない。

遠くに見える逃げ水が、岳をさらに辟易させる。

「あゝあ……」

溜め息を吐いて歩いていると、後ろからエンジン音がして、岳は路肩に寄った。

追い抜いていった車の車種と、視界の端に見えた運転手のシルエツトに、岳は「あ」と小さな声を出した。

同級生の姉だ。

その同級生は、中学を卒業してから見かけないが。

家が近く、小学生の時分は一緒に遊んだりもしたが、中学に上がった頃から相手の素行が悪くなり、

岳の方からさりげなく、やんわりと縁を切った。

向こうでも、趣味の合わない岳と居ても面白くなかったのだろう、付き合いが悪くなった事を非難するような事はなかった。

中学3年の時はクラスも違ったし、

岳は部活の朝練などがあったので登下校の時間も重ならなかったから、
本当に顔を合わせることは稀になった。

問題を起こして、決まっていた高校の入学を取り消しになったことも、近所の噂話で聞いたくらいだ。

その同級生だけでなく、その家は近所では噂話の種だった。

特に《彼女》は。

「……………」

岳は《彼女》とはあまり話したことがない。

小学校と中学校で5回ほど同じクラスになったことがあり、

《彼女》の住む家にも遊びに行ったこともあるが、

それは同居する《彼女》の従弟の部屋に行ったのであって、

《彼女》とは一緒に遊んだこともない。

あまり他人と馴染もうとしない子だった。暗い、というのとは少し違う気がする。

《彼女》は大人しく、目立たないように終始縮こまっている、そんな感じの子だった。

しかしそんな《彼女》の振る舞いに反し、《彼女》はとても目立つ存在だった。

…そんな彼女が、
《失踪》した。

「失踪……」

初めて聞いた時は、家出ではないのか、と思った。

とうとう耐えられなくなったのではないかと。

唯一の味方であった祖母が亡くなり、先の生活に不安を抱いたのだろう、

というのが当初近所の人々の推量だった。

ただ、目を追うにつれ、どうやらそうではないらしいという事が判ってきた。

部屋はそのまま、荷物も金銭的なものも何も、家から持ち出した形跡がなかったらしい。

今どきの女子高生には珍しく、携帯電話を所有していなかったため、家出の協力をしてくれるような人間関係もありそうにない。不可解な失踪。

それでも最初は、その騒ぎは岳にとって対岸の火事のようなものだった。

しばらくして、《彼女》の失踪はテレビや週刊誌などのメディアに取り上げられるようになった。

《彼女》は顔かたちの綺麗な少女だった。ぽっと出の女優やアイドルなんかより、ずっと可愛かった。

その容姿とその境遇から、《彼女》はまるで悲劇のヒロインのように報道されていた。

そういう職業の人々にとっては、恰好の《素材》だったのだろう。

しかし、そうやって初めて岳は大きな衝撃を受けた。

報道される内容に対して、ではない。

(……もう何が何だか……)

さらに愕然としたのは、岳と同じ衝撃を共有できる人間が周りに一人もいない、という事だ。

(指摘すればするほど、頭おかしいヤツだと思われるし……)

だから岳は口をつぐんだ。

「……ん?……」

岳は足を止めた。

緑の平面を貫いて、真っ直ぐに伸びる灰色の道。

アスファルトの道の下、農作業用の畦道に、やけに不自然な2人組を見つけた。

第一印象は、ヤンキーのカップル。

しかし、よくよく観察するにつれ、岳は立ちすくむ。

(……あれは……)

見覚えのある、長い亜麻色のストレートヘア。

「……え」

岳は目を疑う。

立ちすくんだまま、その後ろ姿から目が離せない。

その視線に気付いたのか、男の方が振り返ってこちらを見た。

やけに派手なオレンジ色の髪をしたその青年は、外国人のような青い瞳をしていた。

足を止めた連れの青年に気付き、その視線をなぞるようにして《彼

女』が振り返る。

岳の姿を見て、『彼女』がその紺碧の瞳を見開いた。

呆然と、岳は呟く。

『彼女』は …

「 … 浪川さん？ ……」

【浪川 歌鳥】

「 … ライズさん、

『あの子』って …… どんな子だったんですか？」

緑の穂がそよぐ平らな景色、

ライズには物珍しいアスファルトの路。

跳ね返される陽光は目に眩しく、しかし体温には触れない。

後ろを歩く歌鳥の問いに、ライズは振り向いて蒼穹の瞳を向けた。

「 いい子だったよ」

「 いい子 ……」

「 可愛かったし、

性格も良かったかな、

明るくて、誰にでも優しくかったし」

「……そう、ですか」

何故だか心の奥がそわそわして落ち着かない。

「まあ、気になるよね」

「え？」

「なんか、どうもキミ、

アーリーと何か関係ありそうだもんな。

どんなのかはわからないけど」

歌鳥は返答に窮し、視線を泳がせた。

……アーリー、

…エアリアル＝テラ。

ファントム・コードに所属していたマリオンの1人。

もういない。

死んでしまった。

その死と前後して、歌鳥は《彼女》のいた世界へ …、

……《彼女》がいなくなった世界へ引き込まれた。

そして、こちらの世界で、《浪川歌鳥》は《彼女》になった。
写真の上では。

まるで入れ替わったかのようなようだ。

そして歌鳥には、まだライズにも、誰にも話していない事がある。

歌鳥は《彼女》と面識がある。

現実にはではない。

しかし夢や幻と片付けるには、あまりに実感に満ち満ちていた。

夢の中で、

《彼女》は言った。

(あたしはもう歌鳥の中でしか存在出来ないの)

「……」

歌鳥は歩きながら、目を伏せて声なき声で呼び掛けようとした。

(…エアリアル……)

返答はない。

(…お願い、

応えて……、

エアリアル、

一体、何がどうなっているの？

あなたは誰？

私とあなたは
一体《何》なの？)

…ふと、ライズが足を止めたのを視界の端に捉え、
彼の隣で歌鳥も立ち止まった。

「?、

ライズさん……?」

「……あの子」

「?」

首を傾げ、歌鳥は後ろを見るライズの視線の先を辿った。

…その先に、

こちらを食い入るよう見つめている少年。

…つい先刻、こちらの世界に引き込まれた歌鳥達は、

数十分の観察で、こちらの人間には自分達の姿が見えていないのだ
ということを確認していた。

理屈は不明だが。

しかし、道路の先で立ちすくんでいる少年は明らかに歌鳥達を《見
て》いる。

ライズはその視線を特に気にした様子はない。

敵意を感じなかったから。

むしろ向こうが激しく動揺し茫然とした風情なのを、どう判断すべきか思案していた。

…そして、動揺していたのは歌鳥も同じだった。

その顔色に気付き、ライズが歌鳥の見開かれた紺碧の瞳を覗き込む。

「カトリちゃん？」

「
殿井とのいくん……」

歌鳥の呟きとほぼ同時、

約30メートル離れた位置で、その少年が

「浪川さん」

と呟いた。

…距離を置いたまま、茫然と立ち尽くし見合う2人。

各々の「なぜ」という思いで、2人とも互いに二の句が継げない。

…その沈黙を破ったのは、ライズだった。

「知り合い？」

弾かれたように顔を上げて、歌鳥がライズに向かって頷く。

「……はい……」

「そう。」

…おい、

キミ、つつ立ってないでこっちにおいで〜」

「え」

「え」

異口同音に、こっちと向こうで困惑の声が洩れた。

「固まっても埒が開かないじゃない」

そう言って、ライズは陽気な笑顔で岳に向かって手招きした。

おそろおそろ、岳が歩み寄る。

それを微笑みながら見やり、ライズはポンと手を打った。

「よし、

まずは状況を整理しよう。

初めまして、俺はライズ。

キミは？」

岳はポカンと口を開けて、ライズを見る。

見たところ大学生くらいの年頃の青年、

派手な髪色、質素な服装、顔立ちはかろうじて日本人に見えるが、瞳の色は明るい青。

見れば見るほど奇妙な青年だった。

ん？、と微笑みながら促してくるライズに、岳は

「と……殿井……岳……です」

と答えた。

「トノイ？」

「あ、あの、ライズさん。」

こちらでは名乗るとき、名前が姓の後にくるんです。

だから、彼は殿井というのが姓になって……」

控えめに口を開いた歌鳥に頷いて、ライズは

「じゃ、ガクが名前？」

と本人に訊ねた。

半ば放心しながら、岳は頷く。

「そう」

「あ……あの……」

「何？」

首を傾げるライズと、その隣で所在なげに佇む歌鳥を見比べながら、

岳はどう反応したら良いものか分からない。

「……あの、」

……浪川さん、

だよな……？」

歌鳥が怯えたように肩をすくませる。

「……う、うん……」

「……本当に浪川さん？」

そこで、歌鳥は初めて怪訝な表情で岳の顔をまっすぐに見た。

「……どうして？」

「いや……、だって……」

岳は言い淀み、

「浪川さんがいなくなってから……、
けっこう大きな騒ぎになってただけど……、

僕は、その……、
僕だけ何か……、

ああ、何て言ったらいいのかな………」

その様子に、歌鳥ははっと息を飲む。

「もしかして……、
あの写真？」

岳は顔を上げた。

「写真……、
何か写真、見たの!？」

「う、うん……。」「
駐在所の前で……。」

私の名前になってたけど、あの写真は………」

「違ってたよね!？」

岳は縋るような目で歌鳥を見る。

「ああ、良かった!
ようやく話が通じるよ。」

誰も言わないんだもん、
“あれは浪川さんの写真じゃない”って。

もう何が何だか解んなくて、卒業アルバムとか見直してみても、それも全部浪川さんだけが顔が変わっちゃってて ……」

「そんな物まで？」

歌鳥は驚いて声を上げた。

「みんな、それが浪川さんだって言っただよ。

僕が“何か違くない？”って言っても、誰も同意してくれなくて、

……もう頭がおかしくなりそうだった………」

興奮したように話し続けた岳は、ようやく息を吐き、肩を落とした。

「ふうん………」

顎に指を当て、ライズが呟く。

「理屈はわからないけど、俺達の姿が見えることといい、キミは少し特別な子みたいだね」

「は？」

見え……、なんですか？

ていつか、あなた誰……？」

もっともな疑問である。

「うん、まあそれは追々。

それよりどーする？

カトリちゃん。

「応この子と詳しく話してみようか？」

「……………え、あの……………」

……………はい……………」

「そう。じゃ、どうする？」

立ち話も何だし、ボス達の所に戻るうか？

それともいきなり色んな人に会わせるのもビックリさせちゃって可哀想だから、この辺りに座る？」

「え、ええと……………」

「あ、そうだ、

キミの家、近い？」

「僕っ？

は、はい、まあ……………」

「じゃあお邪魔していいかな？

お茶とかはいいから」

困惑している2人を置いてきぼりに、トントンと話をまとめていく
ライズ。

結局ライズの提案通り、3人は岳の家に向かうことになった。

*

…その道中で、岳はライズの言った言葉の意味を理解した。

道行く誰もが、歌鳥達に気が付かない。

こんな田舎に、ライズのような青年が歩いていれば否応なしに目立って仕方がないはず、

しかも、歌鳥は今この街を騒がせている渦中の人だ。

もっとも歌鳥の場合、今のこの街の人々がこの《歌鳥》を《歌鳥》と認めるかどうか不明だが。

だとしても、やはりそれでも歌鳥の容姿もライズに劣らず人目を引くだろう。

にも関わらず、誰も2人を気にする様子がない。

「あら、岳ちゃん。

どうしたの？」

と、隣人の女が声を掛けてきたが、後ろに続く2人には全く気付かない。

「ちょ、ちょっとね。

ちょっと…頭が痛くて…」

「あらあ
」

「大丈夫、だけど、
やっぱり今日は休むことにした」

ごまかしながら、岳は自宅の玄関を開けて歌鳥達を先に入れ、滑りこむようにして家に入った。

(なんだコレ……)

岳は混乱していたが、取り乱しはしていない。
混乱し過ぎて、放心している。

「殿井くん……、
大丈夫？」

控えめな声に、岳は振り返った。
気遣わしげな瞳の歌鳥が見つめていた。

「ごめんね、なんか……」

「い、いや……、大丈夫。」

ちよっと色々、面食らっちゃって」

「うん……、」

あ、ライズさん駄目です。

靴は脱がないと」

土足のまま家に上がろうとしたライズを、歌鳥が引き留める。

「？、そうなの？」

「はい」

「へえ」

素直に頷き、ライズは靴を脱ぐ。

岳は、人々に姿が見えていない人間の靴を土足というのは大した問題でもない気がしたが、

歌鳥の言葉は善意ではあるので、口は出さなかった。

「ええと…、

ウチ、親と姉貴は夜まで帰って来ないから、その点は気にしないで…、ください」

敬語を付け加えたのは、ライズを意識しての事だ。

「とりあえず、茶の間…」

「あ、あの……、
殿井くん」

歌鳥が口を開いた。

「さっき言ってた、卒業アルバム……、

見せてもらっていい？」

「え？、…あ、うん。
わかった。

すぐ持ってくる」

言って、岳は二階の自室に向かう。

その背中を見送りながら、ライズが歌鳥に訊ねた。

「親しかったの？」

「え？」

あ……、いえ、話した事はほとんどないですけど、
どうしてですか？」

「いや、だってキミ、

クリスマスにすら敬語使って話するのにあの子には完全にタメ口だから」

「ああ……」

歌鳥は「同級生だから」という説明が果たしてライズに通じるのか、
と迷い、

返答はせずに言い淀んだまま口をつぐんだ。

ライズも特に返答がない事を気には止めなかったようだ。

珍しそうに家の中を見回し、支障のなさそうな範囲で（自己判断）、
家具に触れたりしている。

「ふうん……、面白いね」

「そうですか？」

「うん。」

見たことのない物が沢山ある」

歌鳥はライズの微笑む横顔を見る。

こうして見ると、ライズの漂わす知性は、歌鳥の知っていた1人の男性に似ている気がした。

もういない、あのひと。

クリスにとつととても大切だったあのひと。

(そういえば、気が合うみたいだった……)

クリスとライズ。

なんとなく胸の中が暖かくなった気がして、歌鳥はふ、と息をついた。

そこに、階段を降りてくる岳の足音が聞こえた。

「あ、あの、

こちら、どうぞ」

岳は畳の茶の間を示し、座布団を直しながらテーブルの上に厚い冊子のアルバムを置いた。

見覚えがあった。

あつて当然、まったく同じ代物を歌鳥も持っている。

…持っていた、と言うべきか。

あれはまだ北原の家の歌鳥の部屋にある。

まさかまだ処分はされていないだろうが、歌鳥にしてみれば手放したも同然の品だ。

(…私の部屋…、
どうなってるだろ…)

少しぼんやりしてしまった歌鳥に、岳の控えめな声がかかる。

「あの……、浪川さん。

それで……、

一体なにが起きたのか、

良かったら聞かせてもらえる……？

僕、本当にわけがわからなくて」

「…え？

あ、うん、そうだよね…。

私も…上手く説明出来るかどうかわからないけど…」

そう言つて、歌鳥はライズの顔に視線を向けた。

少しも深刻そうでないライズの微笑みが、なんだか心を軽くした。

*

…歌鳥は掻い摘んで、歌鳥が置かれた状況だけを語った。

巻き込まれた《あちら》での情勢に関わる事件や、築いた人間関係は省いた。

語る必要性を感じなかったからだ。

岳はその話を半信半疑、困惑の表情で聞いていた。

「…なんか、すぐには信じられないような話だけど……、」

もう色々、信じられないような事が起きてるし……、

信じるしかないみたいだね……」

岳は小さく息を吐いた。

「それでも、やっぱり写真が変わってる理由ってというのは、浪川さんにもわからないの？」

「うん、

でも私の代わりに写真に写ってる子は、ライズさんの知ってる子らしいの」

そう、と言って岳が視線を向けた先、

ライズは頬杖をついたまま岳が持ってきたアルバムを開いていた。

形の整った指先がページをめくり、ふとその動きを止めた。

「……いた。」

「え？」

歌鳥がそのページを覗き込む。

するとそこには。

「……まただわ……、

本当に、私があの子になってる……」

クラス写真。

【浪川歌鳥】の欄に載っていたのは、やはり《彼女》

「……いや」

ライズが小さく呟く。

歌鳥は首を傾げた。

「ライズさん？」

「うん……、

確かに顔はアーリーなんだけど、なんていうか雰囲気が違う。

…これとか、笑った表情がアーリーのとは違うんだよね。

この笑い方、どっちかっていうとやっぱり……」

そう言われ、歌鳥は改めてアルバムに視線を戻した。

…そう、

確かに違う。

誰にも言っていないことだが、歌鳥はアーリーと会ったことがある。

その時に会った《彼女》の明るく、屈託のない笑顔。

アルバムに写る《彼女》の笑顔にはどこか影がある。

これは …

「私、ですね……」

この笑い方は歌鳥だ。

誰にも心を開けず、他人の目ばかり気にしていた、
そんな自分が嫌いだった頃の歌鳥 …

「顔は確かに変わってるけど、
表情はそのままです。」

これは私です。

顔だけが変わって、本質は変わってない」

ライズは頷き、

岳は首を傾げた。

「どじいつ……？」

「さて、ね……。」

とりあえず、ここで思案してても答えは出そうにないな」

ライズは顎に指を当てる。

歌鳥も考え込むように黙り込んだ。

岳が居心地悪そうに、視線を泳がせる。

「あの……、

やっぱりお茶か何か……」

「あ、いいよ。

喉渴いてないし」

ライズが軽く手を振る。

浮かせかけた腰を下ろして、岳が再び目を泳がし始めた。

その様子に、歌鳥は ……

「…あの、殿井くん、」

「あ、な、何？」

「……私がいなくなって、北原のお家……どうなったのかな？」

お祖母ちゃんのお葬式とか、ちゃんと……」

「え？」

…ずっと気にはしていた事だ。

知ろつとする勇気がなくて、先延ばしにしてきた。

けれどもう、この辺りがいいタイミングなのかもしれない。

岳は、歌鳥の家庭事情の複雑さを知っている。

少し言いにくそうに、

「え…と…」

聞いた話だと、浪川さんがいなくなった事がわかったのは、お通夜の日の内だったみたいで……」

そう言って、岳は少し言いよどむ。

「その日の中には警察には届けなかった、って」

「…そう。…それで？」

「お祖母さんのお葬式が終わってから……警察に届けて、

それで、そのあと調べが進む内に大騒ぎになった、って感じ」

「大騒ぎ……」

眩き、歌鳥は目を伏せた。

ライズが首を傾げ、

「お家のひと、心配してるんじゃないの？」

「……ええ、

それは……きっとそうなんでしょうけれど……」

歌鳥の表情は暗い。

岳が言いにくそうに、口を開いた。

「あの……、それで……」

「……？」

「僕、あの貼り紙とかニュースとかで、浪川さんの顔が違う事に気付いてから……、

気付いたから、その、色々……そういうニュースとかに敏感になっちゃって」

「……？、うん……、

それはそうだと思うわ」

岳が言おうとしている事がわからず、歌鳥は首を傾げた。

「それで……、

週刊誌で読んだんだけど、浪川さんの……

お父さんも……

似たような失踪だったんだって……？」

「 ……え? 」

歌鳥は目を丸くする。

その反応に、岳は慌てて言い繕おうと口を開いた。

「う、ごめん!! 」

やっぱり触れられたくない話題だったよね! ?

しかも僕みたいに、ぜんぜん親しくもなかったような奴に……………」

はっとして、歌鳥は首を振る。

「ち、違う、違うの。」

ただ、私も知らなかったから ……」

「え? 」

「私も……………お父さんがいなくなった時のこと……………、
詳しくは知らないから」

……歌鳥の父親は、歌鳥が生まれて一年も経たない頃にいなかった。
った。

その経緯や理由を歌鳥は知らない。
誰もそれを教えてはくれなかった。

母は、夫の失踪で精神的に不安定になり、そのせいで亡くなった。

晩年は重度のうつ病にかかっている、ひとときも歌鳥を離さなくなり、仕事にも出られなくなり、生活が破綻した。

そのため、治療を受けさせようとする周囲のすすめで、母の兄である伯父が一旦歌鳥を預かることになったのだが、

それが母の病状を悪化させた。

歌鳥を傍においていた事でかろうじて保っていた正気の最後の砦は、歌鳥を引き離されたことであつたという間に崩れた。

…歌鳥はそんな母親を持つ娘だ。

だから周囲は、歌鳥もまた母親ほどではなくとも心の弱い娘なのではないか、

危うい均衡の精神を持つ娘なのではないか、と思い、その目の前では両親の話はしなかった。

たまに口さがない人もあつたが、その際には歌鳥は席を外させられていた。

徹底的ともいえる隔離があり、歌鳥は両親のことを詳しく知る機会がなかった。

ことに、父親に関しては。

…岳はその事情は知らなかったが、複雑な表情を浮かべた。

「そ…そうなんだ…」

「…」

歌鳥は、何か胸に引っ掛かるのを感じた。

（…失踪…、

私と同じ…）」

歌鳥は顔を上げ、岳に向いた。

「その記事、どんな内容だったか覚えてる？」

「え？、…あ、うん…」。

ていつか…」

岳は何故だか申し訳なさそうな、罰の悪そうな表情をした。

「部屋に…あるけど。」

「ごめん、なんか…」

「見せてもらっていい？」

岳の屈託など意に介した様子もなく、歌鳥は言った。

気圧されたように頷いて、岳が再び部屋に戻る。

今まで黙ってアルバムを眺めていたライズが、視線だけを歌鳥に向

けた。

「何かよくわからないけど、気になる事があるみたいだね」

「……はい」

動悸がする。

マリーエレメントの言葉が脳裏に蘇った。

…

『貴女の血筋』

『異界に逃がした』

『その裔が貴女』

…

どうして今まで思い至らなかったのだろう、

血筋というのなら、歌鳥の両親のどちらかもまた《異界》の血を引いていたという事だ。

（ ……それは ）

母親ではない、という気がした。

もし母親ならば、伯父や祖父母のどちらかもそういう事になる。

けれど何故だか、違うという確信に似たものがある。

それに、岳の話の聞くと …

（お父さん……、

……失踪……）

もしかすると。

（……お父さんも……？……）

胸に迫る、

甦る、母親の声。

（あの人は帰って来る）

けれど、母の生きている間には戻って来なかった父。

その後も、

何年も音沙汰もなく。

けれど。

（……血筋……、

……失踪……、

……お父さん……）

頭の中で巡る言葉たち。

しばらくして、岳が週刊誌を片手に戻ってきた。

それを受け取り、歌鳥はおそろおそろ、ページを開いた
…

【～某週刊誌より抜粋～】

静かな山間の村で何が起きたのか。

〇〇県〇〇村、溪流をのぞむこの村で、1人の少女が姿を消してひと月が経つ。

突如、忽然と姿を消したのは浪川歌鳥さん（15）、今年の春に地元の高校に進学したばかりだった。

その日は歌鳥さんの祖母のお通夜が営まれていた。

近所の住人の話によると、亡くなった祖母は歌鳥さんを大変かわいがっており、仲良く買物に出掛ける姿などがよく見られていたらしい。

そんな祖母が数ヶ月の入院の末に亡くなった翌日、歌鳥さんは姿を消した。

当初、その失踪は本人の意思によるものではないかと思われたらしい。

その根拠は、歌鳥さんの育った家庭環境の複雑さにある。

*

歌鳥さんは、5歳の時に母親が亡くなり、その兄夫婦の家に引き取られた。

そのA宅には歌鳥さんの伯父夫婦の他、祖父母、伯父夫婦の子供2人がおり、

実質的には、歌鳥さんの世話は当時は健在であった祖父母がしていたようだ。

伯父夫婦との折り合いは悪かった、と近所の住人は証言している。

「A宅はとにかく、お祖母さんとお嫁さんの仲が悪かった。

それが、お祖母さんがかわいがっていた歌鳥さんに対する態度にまで表れていたんです」（付近住人）

そのためか、歌鳥さんは幼い頃から肩身の狭い思いをしていたようだ。

「小さい頃から、何かと大人しい子でした。

挨拶はきちんとするし、気持ちの優しい子だという印象があります
が、

口数は少なかつたし、友達と遊んでいるとか、そういうのは見た事がないです」

そんな中、歌鳥さんが中学に上がる頃にお祖父さんが病気で亡くなり、

その頃から歌鳥さんを取り巻く環境が変わっていったという。

「A宅のお祖父さんは厳しい人でした。

歌鳥さんは大人しいし素直だったから、叱られたり、そういう事はなかったようだけれど、

同居する伯父夫婦の2人の姉弟、特に弟の方には跡取りの男の子と
いうこともあって、特に厳しかった。

この男の子は歌鳥さんと同じ年ですが、少し乱暴なところがあった
ので仲は良くはなかった様です。

お祖父さんが亡くなってから、余計に手が付けられなくなったみた
いで、

今年の冬に地元の高校に進学が決まっていたんですけど ……」

歌鳥さんのその従弟が同級生や知り合いに『ある写真』を売り付け
ていた、というのだ。

校内で教師がそれを発見し、発覚したという。

それは、その男子生徒の同居する従姉 ……、
つまり、歌鳥さんの盗撮写真だったというのだ。

「歌鳥さんはそのルックスから、男子には人気があったと聞いてい
ます。」

悪い友達に頼まれたのか、どういう経緯かは知りませんが、

とにかくその写真を見た教師はすぐに男子生徒の保護者を呼んで、
 当人達を交えて話をしたそうです」（同校生徒保護者）

本来なら警察に届け出が出されるような写真だったらしいが、
 加害者と被害者の保護者が同一という点で、そういった措置は取ら
 れず、

男子生徒は嚴重注意という処分だけで済んだ。

しかし、その問題行為は男子生徒が進学予定だった高校側の知るところになり、入学取り消しという顛末に至った。

「歌鳥さんはその事件について、伯母さんに口止めをされたみたい
 です。」

お祖母さんも、同じ家の中で起きたことですからね、
 騒ぎ立てることは出来なかったのでしょうか。

歌鳥さんは泣き寝入りだったんじゃないですか」

この一件は当時は警察には届け出されなかったが、
 今回の歌鳥さんの失踪の捜査で明らかになった。

これらの事情から、歌鳥さんの失踪は家出ではないか、と周囲は判
 断したのである。

しかし、そうと断定するには不可解な点も多くあった。

捜査関係者の話によると、歌鳥さんの部屋は失踪直前の様子と変わらず、荷物や着替えが持ち出された形跡はなかったらしい。

このことは歌鳥さんの伯母が証言している。

また、歌鳥さんは家の中で自由に使えるお金は持っていなかったという。

祖母の口座からお小遣いをもらうだけで、自身の口座は持っていない。

通帳やカードも渡されておらず、持ち出された形跡もない。

携帯電話も所有していなかったため、行動範囲も狭く、人間関係もかなり希薄だったらしい。

「毎日決まった時間に登下校する姿を見掛けました。

寄り道とか、遊びに出掛けるとか、そういう姿は見たことがないです。

行くアテなんてないでしょうね。

ただの家出ではないと思いますよ」

そう証言した近所の住人も、歌鳥さんの失踪の理由に首を傾げる。

さらに調査を続ける内、驚くべき事実が明らかになった。

歌鳥さんの父親もまた、同じように不可解な失踪を遂げていたというのだ。

当時の警察関係者に話を聞いた。

*

〇〇年〇月、

中学校教諭 浪川響平さん（当時27歳）が、突如自宅マンションから姿を消した。

浪川さんの妻（当時26歳）の話によると、

その日の午後9時過ぎ頃、

浪川さんは当時住んでいたマンションのベランダに煙草を吸うため出たきり、姿が見えなくなったという。

生まれたばかりの長女（歌鳥さん）に気をとられていた浪川さんの妻は、

夫がいつまで経っても部屋に戻らないことを不審に思い、ベランダを覗いたところ夫の姿が見えない事に気付いた。

最初は転落したのではないかと慌てて下を覗き込んだらしいが、夫の姿はどこにもなかった。

気付かぬ内に外出したのかと玄関に出てみたが、靴は全て揃っており、

それでも家を出て近所の店などを探してみたが見つからず、翌日になって捜索願が出された。

警察は浪川さんのマンションの監視カメラを調べてみたが、浪川さんらしき人物がその時間にマンションを出て行く姿は写っていないかった。

浪川さんは煙のように忽然と姿を消したのである。

関係者の話によると、浪川さんの周囲にトラブルはなかったという。

… 浪川さんは当時結婚3年目、妻とは大学で知り合ったという。家族はおらず、児童養護施設で育ったという生い立ちも明らかになっている。

生後約8ヶ月で置き去りにされたという経緯から、実の両親については何一つ手掛かりはなかったという。

2代に渡る、肉親との縁の薄さ。そして不可解な失踪。

これは何かの因果なのか。

浪川さんが姿を消してからまもなく15年、歌鳥さんが姿を消してからもうすぐひと月。

この父娘の行方は、ようとして知れない。

【歌鳥の父】

…記事を読み終え、歌鳥はひとつ小さく息を吐き、
そしてそこに載せられた小さな写真を見た。

（ …お父さん… ）

白黒の、小さな小さな写真だった。

歌鳥は父親の顔を知らなかった。

名前は知っていたが、写真など、そういうものは母・深優^{みゆ}の死後ど
うなったのかわからない。

歌鳥の目に触れない場所に保管してあるのか、
それとも既に処分されてしまったのか。

歌鳥の祖父母は、深優の夫である響平を良く思っていなかった節が
あった。

響平の失踪が深優の死の原因であることを考えれば、無理はないと
は思っ。

（ …このひとが…、

…お父さん… ）

歌鳥はどちらかと言えば母親似だと言われてきた。
この写真を見る限り、その指摘は正しいと思っ。

ただ、歌鳥は日本人にはあり得ない色の髪と瞳を持って生まれた。

それは父親の方に外国人の血が流れているからだ、と幼い頃から言われて来たが、記事を見る限りはその真偽は不明だろう。

父親は歌鳥とは違い、正真正銘、天涯孤独の身だったのだ
：

歌鳥はまじまじと写真に見入る。

(私、似てない……)

だが、外国人の血が入っているというのは根も葉もない話ではなさそうだ。

少なくとも、父親は日本人離れした彫りの深い顔立ちをしていた。

「誰？、それ」

歌鳥が熱心に見入っている顔写真を覗き込み、ライズが訊ねる。

歌鳥は、

「私のお父さん、
だそうです」

と言った。

「へえ、格好いいじゃん」

「若い写真ですもの」

そう言いつつ、歌鳥も実はそう思っていた。

たしかに美男だ。

それがなんだかくすぐったく誇らしい。

「……で、何て？」

ライズは、彼にしたら見た事のない文字の羅列を示して首を傾げた。

歌鳥は複雑そうな表情を浮かべ、

「……私の父は、私が生まれてすぐに姿を消しています。

その事は、私も知っていました。

理由や経緯は誰も教えてくれなかったから、私もあまり触れないようにしていたんです。

もしかして、母と私は……捨てられたんじゃないかって……、思っていたから」

そう、初めて歌鳥はそれを口にした。

長年歌鳥の胸の奥で燻っていた疑惑。

だから父親の事は気にしないようにしてきた。

……けれど。

「でも、もしかして……」

歌鳥と同じなら。

歌鳥と同じように自身の意思とは関係なく、突然に …

「引きずり込まれた……」

だとしたら。

「お父さんは……、

《あちら》にいる……？」

… 歌鳥の声が僅かに震えた。

【たずねびと】

… 欠落している。

陽が照り返す白土の道、

少女は何かを追われるかのように早足で歩いていた。

記憶にぽっかりと空いた空洞。

虫食いのように、蝕まれるように。

少女は振り返り、遠くなった山岳の麓の街を見る。

「 … 」

緑玉の瞳が揺らぐ。

混乱したまま、あの街を飛び出した。
荷物もなければ、軽装のままだ。

そもそも何故自分がああに居たのか、
エレナはどうしても思い出せない。

混在する記憶の断片は、どれが一番新しいものなのかも判らない。
褐色の肌に日差しが刺すように照りつける。

「さすがにマントくらいないと駄目だな……、

わけわかんねえけど、やっぱり一回あの街に戻るう……。

なんつったっけ、

……サンクレール？」

エレナは首を傾げつつ、汗の滲み始めた額を拭った。

「……で、あとセヴァルスタに戻る為には、
どっかで辻馬車でも拾わないとな。
地理がまったくわかんねえし。」

……金、ねえんだよな……、
どうすっかなあ……。」

ふと、頭をよぎった

“ある思考”

それを思ったのと同時、
たしなめる男の声が耳に蘇った。

…盗みはよくない。

…昔、身寄りを失ったエレナは生きて行く為に盗みを生業としていた。

石を持って追われたこともあれば、大の男に何度も殴りつけられたこともある。

そんな生活を数年続ける内に、エレナの心は荒んでいった。

《彼》に出会ったのは、そんな日々の最中だった。

(…イリアス…)

初め、エレナは彼が聖職者だとはわからなかった。

出会ったのは冬の初め、

彼は毛織の長いコートに体を包んでいたから。

隙をついたつもりで、その荷物を取って逃げた。

しかし《誰か》にすぐに追いつかれ、腕を掴まれた。

その《誰か》は荷物を奪い返しただけでエレナに危害を加えたりはしなかったが、

逆上したエレナは《誰か》に掴みかかり、そして《誰か》の振り返りに遭い、地面に押さえ付けられた。

それを押し留めて現れたのがイリアスだった。

穏やかな瞳で、エレナに手を差し延べた彼。

（ものを盗むのはよくないよ）

エレナはその言葉に激しく怒り、イリアスに向かって罵詈雑言を撒き散らした。

イリアスはエレナの剣幕にどこか苦笑するような表情を浮かべていたが、

盗みを止めると言うのなら他に生きる術を寄越せ、
それをして来なかった大人が今さら何を言う、

というエレナの言葉に頷いて、

（ならば一緒に暮らそうか？）

…イリアスはそう言ったのだ。

耳を疑った。

まるで気負いなどない様子で、イリアスはエレナの手を取った。

今まで誰も与えてはくれなかったものを、イリアスは当然のような顔をして、エレナに与えてくれたのだ。

（生きる術を持たない子供にそれを与えることは、

大人の義務だからね)

そう言っつて。

…胸に去来する、せつなさとしみがない交ぜになった感情。

そこでふと、エレナは足を止めた。

(…あれ?…)

欠落している。

(…イリアス…と…)

その傍らに。

(ケイ?…)

違う。

(ドル)

違う、

ドルサクと出会ったのは、エレナがイリアスのもとで暮らすようになってから更に数年後のことだ。

この記憶の中にいるのは、もっと違う《誰か》

イリアスの隣、確かに居た《誰か》

…《誰か》

記憶の中で霞がかかるその面影。

「……駄目だ、
わかんねえ……」

照りつける日差し。

額の上に手を翳し、エレナは小さくため息をついた。

暑さと混乱で目が眩む。

「これは駄目だ、
一旦休もう……」

呟き、エレナは周囲を見渡して公道から少し離れた位置に雑木林を見つけた。

日陰がいかに涼しげに見えて、エレナは足早に駆け込んだ。

肌に薄く滲んだ汗を拭い、陰に目を慣らすようにして瞬きをしながら瞼をこすった。

草を踏み分けて歩きながら、ふと、エレナは足下に違和感を覚えた。

「？」

サク、という感触。
草や土とは違う。

「砂……?」

雪のように純白の砂。

細やかな粒子がエレナの足に蹴られてサラサラと舞い上がる。

「なんでこんな所に?」

明らかに、もともと此処に存在していたものではなさそうだ。

湿りを含んだ土と草の上に不自然に撒かれた異物。

それは白い大蛇のように、林の奥に続いている。

なんとなく、エレナはその砂の軌跡を辿ってみた。

薄暗い木々の間を抜けながら、エレナはその奥に“何か”の気配を感じた。

なぜか警戒する気は起きなかった。

近づいてみてその理由がわかった。

「……?、子ども?」

森の奥、白い砂の軌跡の先に一際高く積まれたそれを覗き込むようにして立つ幼子が2人。

性別はわからない。

年齢は5歳前後か。

よく顔は見えないが、それでもその2人が瓜二つであることが窺える。

その双子は近づいてくるエレナに気付かぬ様子で、ひそひそと話している。

「これ、あれだね」

「あれだよね」

「誰かな」

「誰だろうね」

エレナは首を傾げながら、その子ども達に近づく。

「……なあ、お前ら何してんだ?……」

その声に、子ども達が同時にぐるんところちらに首を向けた。

少々不気味な感じがしてしまい、エレナは少し気圧される。

正面から顔を見、やはり2人はまったく同じ顔をしていたことがわかった。

(双子か?、初めて見た)

「お前ら、親はどうした」

エレナが膝を曲げて双子と視線の高さを合わせる。

双子はきよとんと首を左右対称に傾げた。

「だれ?」

「だれ？」

「お？、おお……、

オレはエレナ＝ヴィヴィッドっつうんだけど……」

「えれな」

「えれな？」

「そうそうエレナ……、

……まあいいや……」

普段は女らしいファーストネームを嫌って他人にそうとは呼ばせないのだが、相手が幼子なので妥協すべきだろう。

「で、お前ら親どこ？」

「おや？」

「おや？」

「何だろう」

「何だろうね」

そうしてひそひそと話し合う2人。

エレナは困ったように頭を掻いた。

どう見ても、保護者なしにこんな場所にいるべき子ども達ではないのに。

エレナはキョロキョロと辺りを見回した。

人の気配はない。

その時、子ども達がひよこひよこことエレナの周りを歩き回り始めた。

「お！？、な、何だよ？？」

「するね」

「するよね」

「は！？」

「これ、そっだよね」

「そっだね、あれだね」

「何の話 ……」

「レイン」

「レイン」

双子が同時に口にした言葉。

エレナが眉をひそめた。

「レ ……？？」

ズキン、と頭が痛んだ。

エレナは咄嗟に押さえる。

(レイン……？……)

「あと、末っ子の匂い」

「末っ子の匂い、するね」

「末っ子……?」

「末っ子と仲良いよね」

「仲良さそうだよね」

「待て待て、」

さっきから一体なんの話してんだよ、お前ら。

わかるように説明してみろ?

つか、お前らマジで何?

どうした?」

「探してるの」

「探してるの」

双子はエレナを囲ってぐるぐると歩き回る。

「探してる、って何を」

「末っ子」

「末っ子」

「末っ子って……、」

「どの家の?」

「お母上」

「お母上の末っ子」

まったく意味がわからない。

エレナは困り果てて双子の片方を捕まえた。

「とりあえず、お前らは何なのか言ってみて？
名前は？」

「ラピ」

「ラズ」

「お前がラピで、

お前がラズな？」

（見分けつかないけど）

で？、ラピとラズはどこから来たの？
父ちゃんか母ちゃんはどっち？」

「お母上は狭間にいる」

「狭間から出ないの」

「狭間？」

また迷宮入りしそうな単語が出てきた。

「その ……お母上ってのは誰？」

双子は嬉しそうに笑う。

「女王」

「女王」

「 ……はい？」

「拒絶の女王」
「拒絶の女王」

言って、双子はエレナの腕を両側から掴んだ。

「末っ子いないの」

「匂い、追い掛けてきたのにいないの」

「消えちゃった」

「いなくなっちゃった」

「探さないと駄目なのに」

「大変なことになるの」

「えれなも末っ子さがしてるの？」

「えれなは末っ子の友達なの？」

「いや“末っ子”の意味が全然わからん」

困り果てたエレナは手を引かれるままぐるぐると独楽のように回る。

だが、この要領を得ない感じが何故かエレナの中に既視感を生む。

「…その、末っ子の名前は？」

双子は顔を見合わせる。

せーのと言わず、まったく同じタイミングで

「クリスタル」

「クリスタル」

と言った。

【故郷との決別】

「……それじゃあ、長々とお邪魔してごめんね。

色々ありがとう、

殿井くん」

玄関に続く廊下で、歌鳥は岳を振り返ってぺこりと頭を下げた。

「学校も、休ませちゃったね」

「あ……、気にしないで。
もともと遅刻だったし。」

それにずっと気になってたことが、ほんの少しだけど判ってよかった。

「……ホントにほんの少しだけど。」

正直まだ混乱はしているが、
少なくとも自分の頭がおかしくなったわけではないと判っただけ
も、

足下を見つけたような安心感がある。

「きちんと色々なことが分かったら、きっと説明に来るから」

言って、歌鳥は弱々しく微笑った。

その笑顔を見、岳はなんだか意外な印象を受けた。

「…なんか変わったね、
浪川さん」

「え？」

「なんていうか、前は少し近寄り難かったけど」

「そ…、そう？」

言って、歌鳥は思い返してみる。

「…そうかもしれないね、
少し前までは…、誰とも関わりたくなかった。

親しくなる事より、
嫌われない事の方がずっと大事だったの。

誰とも関わらなければ、少なくとも嫌われる事はないって思ってた
から」

傍らに立っていたライスが、歌鳥の言葉に興味ありげな視線を向けた。

岳は、あえてその言葉に対してではない感想を口にした。

「あと、浪川さんが意外に神経が太かったことにびっくりした」

「？」

「こんなSFみたいな状況あっさり受け入れられるなんてさ」

「あっさりではなかったのよ？」

「そうなの？」

「そりゃそうですよ」

軽く笑って、歌鳥は小さく手を振った。

「じゃあ、行くね」

「うん。……浪川さん」

「何？」

「……お父さんに、」

会えるといいね」

歌鳥は淡く笑み、

ありがとう、と呟いた。

*

「まあ確かに、その可能性はあるな」

ライズは歌鳥に向かって呟く。

「『運命はその形を保とうとしている』 ……」

「え?」

「マリーが言っていた。」

意味はわからないけれど、今回の事が関係しているのは確かだろう。

そのままに解釈しようとするのなら、

ファントム・コードが変えてきた歴史を、元々の歴史に引き戻そうとする《何らかの力》があるんだな。

キミを《あちら》に引きずり込んだように。

その《何らかの力》がキミに作用した理由がキミの血筋だと言っ
たら、

キミの親御さんに同じ力が及んでも不思議はない」

歌鳥は頷く。

「お母さん……、」

お父さんのことを、ずっと待っていたのに……」

アスファルトの照り返しに目を細めながら、歌鳥は足を止めた。

「ファントム・コードは、《虹姫》は捜しても、その父親までは捜しはしなかったという事でしょうか」

ライズは、さあ、と肩をすくめた。

「まあとりあえず、キミに勝る優先事項ではないね」

「マリーちゃん、

何か知っていたら言ってきましたよね」

「さあ。

それはどうか」

言って、ライズは意味ありげな視線を滑らした。
歌鳥がそれに首を傾げる。

「どうしてですか？」

「マリーは人格じゃない」

かつてマリーエレメント本人が言っていたように。

「擬似感情プログラムだ。

ハッキリ言って、気の利かなさは驚異的。
融通きかないし」

「そうなんですか……?」

「ああ。」

だから知りたい事があるならこっちから訊かないと、
向こうから進んで教えてくれるって事はないよ」

どこか苦笑にも似た表情を浮かべるライズ。

「まあ、知ってる事を訊かれたらきちんと答えてはくれるから、
戻れたら訊いてみるといいよ」

「はい」

頷いて、歌鳥はふと足を止めたまま顔を上げた。

見つめる先にある道。

その意味を知らないライズが歌鳥の顔を覗きこむ。

「カトリちゃん？」

「ごめんなさい、

少し……いいですか？」

「？、別にいいけど何？」

「行っておきたい所があるんです ……」

*

あまりに見慣れた道。

アスファルト添いの竹藪が影を落とす坂。

歌鳥は一步一步確かめるようにして歩いていく。

緑の鮮やかな山の稜線と、溪流のせせらぎ。

ガードレールに指を触れて、なぞるように滑らした。

振り向いた先、

一軒の家。

門柱の表札には【北原】

【浪川】の文字はない。

… 始めから、歌鳥はここが自分の居場所ではないとわかって
いた。

それは歌鳥の思い込みだったかもしれない。

けれど歌鳥はこの家を自分の居場所だと思つことがどうしても出来
なかった。

好きだったとはとても言えない。

嫌いだったとも言えない。

ただ、好きと言えない理由とは違う意味で。

良心も建前もかなぐり捨てていいのなら、嫌いだったと言つたろう。

その原因は家人にもあつたけれど、歌鳥にも確かに少しはあつた。

今になってそう思う。

たとえ何かが狂うことになっていたとしても、歌鳥は自分の気持ちを誰かに伝えておくべきだった。

何が好きで、

何に不快を覚え、

何に悲しみ、

何に喜びを感じるのか。

誰かに知っておいてもらえれば。

岳に借りた週刊誌。

あれに書かれた中に、歌鳥はいない。

書かれていたのは確かに歌鳥についてだが、

あの中には歌鳥の気持ちや歌鳥の想いは何一つなかった。

あれが歌鳥が《こちら》で築き、残したもの。

あまりに希薄、

あまりにも。

(やり直しは利かないけれど)

歌鳥はその家を見上げた。

この時間帯でも、おそらく留守ではあるまい。

伯母の志保子は仕事に行っているかもしれないが、
従弟の博巳は多分いる。

全ての窓にぴったりとカーテンが引かれた様は、以前と何も変わらない。

拒絶と、閉塞。

歌鳥は無言で、
深く深く頭を下げた。

そうしてそのまま踵を返し、坂道の下で待つライズの元に足早に下りて行った。

一度も振り返ることなく。

【示す名を】

「…引き金がお前なら、鍵もお前だ」

向かい合う男の言葉に、クリスは釈然としない表情のまま頷いた。

「マリーの奴が俺達を連れ戻す手筈を整えていることは間違いないが、

お前からアクセスも接続した方が多分話が早い」

「あくせす」

首を傾げたクリスに頷いて見せて、ロイドは話を続けた。

「ライズがよく、同じ場所にいない俺と話をしていたのを見ていたろう。」

俺達はファントム・コード本部にいる仲間とならばゴーレム無しで《通信》が可能だ。

ファントムがおられるからな。

ファントムを通して本部に居る仲間と話が出る」

「……………」

「ん」

理屈はわからないが、まあ出来るといふのなら出来るのだろう。

実際にそれをしている《らしい》場面は目にしているわけだし。

クリスは頷いた。

「どつすればいい」

「お前が無事である事がファントムに伝わればいい。」

俺の予測が正しければ、お前の思念は《こちら》と《あちら》の境を越えられるはずだ。

呼び掛けてみる。
補助は俺がする」

「よぶ……、だれを？」

「ファントムを」

「おれはふぁんとむを知らない」

「それでもいい。」

ファントムは人格を持たない《絶対意志》だ。

ただ、お前という存在が《あちら》に伝わればそれでいい」

よく理解できない言い回しだと思ったが、クリスはこっくりと頷いた。

「……やってみる」

クリスは静かに目を伏せた。

座り込んだ姿勢のまま、ゆっくりとうなだれてゆく。

「寝んなよ？」

ロイドがポツリと声を掛けた。

…

（ … ）

クリスは呼ぶ。

(……ふぁんとむ・?)

声なき声すら拙いのは、見^ず知らずの誰かを《呼ぶ》という行為に、未だ釈然としていないからだ。

(……呼ぶ……)

クリスが呼ぶもの。

(誰を)

ファントム

(おれが)

呼ぶものは

(クリスタル)

その声で

(クリスタル)

最も多く呼んだ名を

(クリスタル)

…

……次第にクリスの意識が遠退いていく。

眠りに落ちていくのとは違う気がした。

ただ沈みゆく意識の中、

全身がふわりと解放されたような感覚がした。

(……ここにいます)

クリスは呼び掛ける。

(おれはここにいます)

………大丈夫だから

クリスは意識の中で、探るように手を伸ばした。

ああ、そういえば、

こうして ……

(手を)

クリスは伸ばした手の甲を《視》た。

夢のように暗い視界、

灰白く浮かび上がるクリスの手。

なのに。

(手を)

貫いて。

(血が
…)

滴り落ちる。

クリスが目を見開いた瞬間、
唐突に闇が剥がれた。

燃え盛る、燃え盛る、
その光景。

クリスは凍りついた。

何かが記憶の奥底から引きずり出される。

(ここは)

燃える家々。

逃げ惑う村人たち。

野卑た声を上げながら、人間を狩る人間たち。

夕暮れ、炎、血飛沫。

何もかもが朱色に染まっていた。

そしてクリスの掌は

(地面に)

縫い留められて

(……ナイフ……)

血溜まりすら出来ぬほどに、きつく縫い留められた両の掌。

痛みをこらえ、迫る狂宴の声に怯えを感じながら、ナイフの柄を歯でくわえて引き抜いた。

両手から滴り落ちる赤い雫が地面を叩く。

若いクリスは辺りを見渡し、捜した。

痛みでか、

それとも別の理由でか、

若い頬を涙が伝う。

(……だめだ)

これ以上、

思い出しては。

(これ以上は)

…
その先に手を伸ばすなら
お前はお前を示す名前を
失うだろう

…

【再会】

翳した掌に闇が透ける。

祈るように掲げたそれを、《彼》は小さな溜め息と共に見つめた。

「まだ無理だったか」

色彩のない、無明の視界。

重力もなく、浮遊するようにして《視》えない壁に額を寄せる。

「聞きたいことがあったのだけれど……、」

他者に頼るな、ということでしょうか？

《お母上》「

淡い笑みを唇に浮かべ、泳ぐように振り向いた。

長い裾を払い、無重力の上を滑りながら《どこか》へ向かう。

ふと、何かに気が付いて《彼》は顔を上げ、辺りを見回した。

「……何か《在》る？」

首を傾げ、目を伏せた。

意識を辿る。

見えない糸を手繰り寄せ。

「こつちか ……」

《彼》は手を伸ばした。

触れた闇、

漆黒が剥がれ落ちる。

長い指でそれを振り払い、開けた視界の朱色に目を射られた。

悲鳴と怒号が飛び交う小さな村。

燃え盛る丘。

その稜線。

醜悪な祭りに温度のない視線を向けながら、《彼》は事もなげに歩き始めた。

殺戮の傍らをすり抜け、すぐ横で村人が頭を叩き割られても、

《彼》は一瞥もくれることなく進んでゆく。

《彼》はもとよりこの光景が現実のものでないことを知っている。

記憶と思念に作り上げられただけの映像だ。

歩みながら、その《出処》を捜した。

「 ……何処にいる？

出ておいで」

よく通る、しかし柔らかな声で呼び掛けながら歩く内、

《彼》はうずくまる1人の《子供》を見つけた。

「 ……おや………」

その声に、《子供》が顔を上げ、透明な赤紫の瞳を向けて来た。

濡れた頬と頬があどけなく、しかし無垢の美しさが際立っている。

視線が交わり、

《彼》は微笑んだ。

「 ……ああ、

ここにいたのかい？

クリスタル」

その名を口にしたとき、

《彼》の声がほんの微かに震えた。

…まるで歓喜のようじ。

*
*
*

【11】示す名を（後書き）

今回は、改編前とは大きく変わった箇所があります。それはエレナが遭遇する人物です。

改編する前の話でエレナが出会ったのは幼い双子ではありませんでした。

変更した理由は、エレナがその人物と出会っても物語の中で特に意味を持たないことと、

その人物は次回クリスと遭遇することになるのですが、それは物語の中では今回と同じ日にちなんです。

同じ日にエレナとクリス両方と遭遇するのはあまりに時間的に無理がある、と思って変更になりました。

これは完全に五木のミスと言って良いでしょう。書く前に気付きなさい。

ただ、これによって命拾いをした人物もいます。それは追々。

ところで今回は日本サイドから始まりました。殿井くんです。

彼は日本での歌鳥の状況をわかりやすく説明するために登場したキャラクターです。

歌鳥とは遠過ぎず近過ぎずな関係ですかね。

家は近いです。

では、次回。

おまけ登場人物設定

【殿井 岳】

高校生

15歳 / 163cm / A型

黒髪 / 黒瞳

真面目 / 控えめ / マイペース / 地味

再登場はまったくの未定です。

【12】Father

【Episode:Crystal】

…夕刻だ。

果実の色に似た光に照らされた農村、

広場で遊んでいた子供達が、畑仕事を終えた父母の呼び掛けに笑顔で応え、その傍らに駆け寄って行く。

クリスはその様子を目で追った。

そして、視線を滑らして、目の前にある“その掌”を見た。

見上げた顔は真っ直ぐに前を向き、クリスには一瞥もない。

クリスは少しためらいながら、おそろおそろ小さな手を伸ばし、

“その掌”に、その指に触れようとした。

あの子供達のように、

あの親子のように、

クリスの手を引いてはくれないだろうか。

伸ばした指は“その掌”に触れる寸前、

体温のみ触れ、しかし肌が触れ合うことはなかった。

故意か、否か、

クリスの指を避けるように離れた手を、
クリスはほんの少し傷付いた表情を浮かべながら見つめた。

再びその小さな手を伸ばすことはなかった
…

【邂逅】

… 火の粉と土埃が舞う夕刻の農村。

悲鳴と怒号が飛び交う中で、頬を濡らした《子供》が顔を上げる。

優しげな瞳で見下ろしてくる《彼》がいた。

「… ああ、

ここにいたのかい？

クリスタル」

名前を呼ばれた《子供》がキョトンと《彼》を見上げる。

純白のローブに細めの長身を包み、秀麗な貌にかかる少し長めの銀髪は淡い碧を帯びている。

夕陽と炎の逆光で朱色に染まった影。

そのシルエットの中で、煌めく瑠璃色の瞳がとても綺麗だと思った。

「…………だれ」

《子供》が呟く。

見覚えはない。

なのに何故、自分の名前を知っているのだろう。

《彼》は微笑み、そして答えなのまま《子供》の両手に目を留めた。

「おや…………、

怪我をしたんだね、

可哀想に」

《彼》は膝をつき《子供》の小さな手を取った。

《子供》の血で《彼》の白い袖が汚れる。

「この傷はどうしたの？」

優しく問われて、《子供》は小さくしゃくり上げ始める。

「…………お父うが」

零れるような口調。

柔らかく笑んだ《彼》が、慰めるようにして包んだ小さな掌をそつと撫でた。

「お父さんが？」

「…………お父うが、

…もう一緒にいられない、って……」

《彼》は微笑んだまま、首を傾げる。

《子供》の言葉を促すでもなく、ただただ愛しむような視線を注いでいた。

それに包まれている内、さらに泣けてきたのかポロポロと涙を零す《子供》。

《彼》はその頬をそっと撫で、片手をつないだまま立ち上がった。

「ほら、もう泣かないで。

《王族》の子が簡単に泣いてはいけないよ。

さあ、帰ろう」

「かえる…………？」

《彼》が笑う。

「そう。帰るんだ。

ここは《現実》の世界ではなく、

お前の《記憶》によって作り上げられた世界だよ。

気付いているだろう？」

今の《お前》が《お前》ではないことに

言って、《彼》は《子供》の腕を引き上げる。

瞬間、辺りの景色が潤んで弾けた。

水のように零れ、弾ける朱色の景色。

水銀に似た雫をまとわせながら目を開いたとき、

気付けば辺りは淡い闇に包まれていた。

掌を握る手を見、

顔を上げた。

目の前に、先ほどまでと何も変わらぬ《彼》の姿。

泣いていた《子供》はもういない。

…クリスは不思議そうに、目の前の《彼》の顔を見た。

…似てる。

(…イリアス……?)

…その生涯で最も多く口にしたであろう名前を呼ぼうとして、
しかしクリスは口を閉ざした。

……似ているだけだ。

しかも雰囲気だけ。
顔立ち自体は見間違えるほどでもない。

しばしクリスはまじまじと目の前の《彼》の顔に見入った。

「…………誰だ？」

無遠慮なほどに真っ直ぐに問われ、《彼》は笑む。

「さて…………、何者という事になるのだろう。」

「ここは《狭間》の世界だから」

「？」

クリスは首を傾げる。

不思議な男だ、と思った。

それに、どうやらこの男はクリスを知っている。

それでふと、クリスは首を傾けたまま次の問いかけを口にした。

「…………ふぁんとむ？」

その言葉に、《彼》は僅かに眉を上げた。
和かな声で問い返す。

「ファントム？」

「ちがうのか」

「違うね」

小さな笑みを零した《彼》は手を伸ばしてクリスの頬にそっと触れた。

「何故そう思った？」

《彼》が問う。

クリスが答える。

「おれを知っているみたいだから」

「ファントムはお前を知っているのかい？」

クリスが頷く。

「ろいどがそう言ってた」

「そう」

「ふぁんとむが、おれを助けるために何かして、だからおれたちが《別の世界》に飛ばされたらしい」

拙い説明に聞き入っていた《彼》が得心したように頷いた。

「ああ、なるほど。」

ファントムなら《狭間》の《境界》を越えられるわけだね。

“おれたち”と言うと、他には誰が飛ばされた？」

《彼》がやけにこちらの事情に明るい事に特に不審も抱かないまま、
クリスは、

「カトリと、ろいど。」

あと、らいず」

「そう。」

うん、予想通りだ。

確認出来てよかったよ、
ありがとう」

「？」

クリスは首を傾げる。

あどけない風情に《彼》は目を細めながら、愛しそうにその髪を撫
でる。

クリスはそれを不思議には思ったが、不快ではなかったので特に振
り払ったりはしなかった。

「あんたは、誰なんだ？」

なんでおれを知ってた？」

「……さてね。」

今は名乗らないでおくよ。

ここは《狭間》の世界、

私はここで名乗るべき名前を、すでに自ら放棄している。

だから《あちら》で会う時までには私のことなど忘れていて構わない」

「あちら」

「そう。

さあ、お行き。

何かすべき事があって、ここに降りて来たのだろうか？

クリスタル」

言って《彼》はやっぱりクリスの背中を押した。

クリスの足元から、闇が剥がれていく。

《彼》の姿ごと。

「待 ……」

言いさすクリスの声を笑みで断ち切り、

《彼》は一步下がる。

その瞳にはどこか名残惜しそうな光が滲んでいた。

「大丈夫」

その言葉にどのような意味があったのか、この時のクリスには全くわからなかった。

…伸ばした手の先に、もう闇はなかった。

代わりに現れたのは、ごく普通の街並み、道行く人々の装いに、クリスは目を丸くした。

「……………もどってきた…？」

クリスは感覚を研ぎ澄ました。

その穏やかな空気に、クリスはここが自分の本来の世界だと確信する。

先ほどまで居た《異界》には、クリスを不快にする音や匂いが溢れていた。

山間の雑木林の中でさえそうだったのだから、おそらくクリスは《異界》に向いていない。

「……………ろいど、」

クリスは呼び掛けてみた。

正直返事は期待していなかったのだが、いい意味でそれは裏切られた。

『出られたか』

頭の中に突然響いた、よく通るバリトンの声。

「……ん、もどれた」

『そうか。どこに出た？

お前が最後にいた所か』

「ちがう」

クリスはきよときよとと辺りを見回した。

《異界》に飛ばされる直前、クリスがいたのは小さな農村だ。

今クリスが立っているのは、建物が整然とたち並ぶ市街だった。

「知らない街だ」

『そうか……、

お前、少しその辺りを歩き回ってみろ。

縁も所縁もない土地に出るとは思えない。

近くに何か“在る”はずだ』

「ふぁんとむ？」

『そんなすぐには直結しねえよ』

少しだけ呆れたような色の滲んだ声を脳裏に聞きながら、クリスは頷いて言われた通り歩きだした。

太陽の位置や街の人々の様子を見るに、昼時らしかった。

大通りを行き交う人々の間をかき分けながら、クリスはキョトンと足を止めた。

「……………」

『どうした』

その様子が見えたわけでもないだろうに、何故かロイドはクリスの異変に気付いて声を掛けてきた。

「なんか、変だ」

『何が』

「おれ、なんだかやけに体が軽い。
足音もしないんだ」

クリスは改めてトントンと足の爪先で地面を叩いた。

叩いた感触は確かにあるのに、音が聞こえない。
辺りはそこまで騒がしくもないのに。

ロイドはあっさりとそれに答えた。

『そりゃ、お前が今そっちでは思念体だからだ』

「？、しねんた……？」

クリスは首を傾げる。

『お前の本体は今も俺の目の前にいるぞ』

「え」

クリスは目を丸くして、辺りをせわしく見回した。

… 雑木林の中で、草や木の端を踏み分ける音が聞こえてきた。

ロイドは地べたに胡坐をかいたまま、その音の方向に琥珀の隻眼を向ける。

早足で近寄って来る、見慣れた男女。

「ロイドさん！」

長い亜麻色の髪を揺らす少女が、声を弾ませた。
その様子を見、ロイドは眉を上げる。

「… なんだ、
どうした」

「あの、実は私 ……」

ロイドのすぐ傍にまで歩み寄った歌鳥がふと言葉を途切らせた。

ロイドの向かいでグッタリとうなだれたまま身動きもないクリスの姿に気付いたからだ。

「クリスくん ……?…」

「寝てる。

で?

何かあったのか」

ロイドは短くそう返した。

本当の所を伝えなかった意図は、この時点では不明である。

「あ……、……はい」

歌鳥はクリスの様子を気に掛けながらも、ロイドに向かって頷いた。

「さつき……、

家に行つて来ました」

「そうか。

家族には会えたか」

「いえ……、

それに、きつと顔を合わせたところで ……」

「無駄だろうな、

こちらの人間には俺達の姿は見えない」

歌鳥が弾かれたように顔を上げた。
その後ろで、夕陽色の髪 of 青年が首を傾げる。

「なんだ、
ボス、知ってたんだ。」

なら最初から言ってくれば良かったのに」

「百聞は一見にしかず、って言葉を知ってるか」

「面倒くさかっただけじゃないの？」

揶揄するように笑って、青年・ライズはクリスの横に座った。

ちらとその寝顔を見、単なる昼寝とは違うと気付いたが、ライズは何も言わなかった。

ロイドが触れなかった事なら、ライズも触れるつもりはない。

「……で？」

その様子だと、ただ意気消沈して帰って来ただけ、というわけではなさそうだが？」

ロイドの視線に、歌鳥はハツとして緩く頷いた。

「私……、向こうに戻ったら、どうしてもマリーちゃんに聞きたい
ことが出来たんです」

ロイドが怪訝そうに首を傾げた。

【遭遇】

…背後の山岳に抱かれた都市、サンクレール。

町外れの小さな教会の扉が開いて、どこか冴えない顔色の男が顔を出した。

「まだ見つからないのかな……、ひよっとしたら街から出ちゃったのか？」

呟きながら、男は癖の強い鈍色の髪を掻いた。

レックスIIジエラルディン。

ファントム・コードの造獣師である。

「行動力はキリエと同じくらいありそうだったから……」

彼が心配しているのは、仲間の1人の少女。

ファントム・コードのアジトでトラブルが起き、数人が《異界》へと飛ばされてしまった。

それにより、一部の人間を除いては、その飛ばされてしまった彼らの存在が、人々の記憶から消えてしまったのだ。

今レックスが気に掛けている少女・エレナも、おそらくは多数の人

間に含まれ、飛ばされてしまった歌鳥達のことを忘れている。

エレナがファントム・コードと接触し、身を置くようになったのは、歌鳥の存在があったから。

歌鳥の存在が記憶から消えてしまえば、それに繋がるファントム・コードの記憶も無くなる。

多分、レックスと顔を合わせても誰なのか思い出すことは出来ないだろう。

見覚えくらいはあるだろうが。

(でも、放っておくわけにはいかないし……)

ワヤンに頼んで捜しに行ってもらっているが、ずいぶん時間が掛かっているようだ。

レックスはここを離れられない。
大切な仕事の最中だから。

外を覗いていたレックスの背中に、凜とした声がかかった。

「休まれよ、ジェラルディン殿。
気掛かりは理解するが、我が父が必ずその娘を連れ戻すゆえ」

「あ…、すみません、
アイラさん」

愛想のない様子で頷いた女はアイラ＝テンペスト。
ワヤンの娘である。

「貴殿に倒れられては困るのだ。
クローディア殿下の御身に関わる」

「そうですね…」

レックスは人の良さそうな笑みで、大人しく奥に入って行った。

しかし、気掛かりは他にもある。

(ロイドさんがいなくなって、結界も消えた …)

歌鳥と、クローディアを守るためにロイドがこの教会に張った結界。

先日、歌鳥を狙ってきた(と思われる)異形のことを寄せ付けぬた
めのもの。

今歌鳥はここにはいない為、結界などなくなっても構わない、とは
レックスは思わない。

ここにはクローディアがいる。

あの異形は本当に歌鳥を狙ってきたものなのかも判然としない。

狙われる理由なら、クローディアにもあるのだ。

レックスは肩越しに背後に立つアイラを見た。

(おそらく、彼女にはアレは見えない …)

父親と違って、彼女には“ある方面”の力が欠けている。

(もしアレがここに来たら …)

レックスに戦う術はない。

数年前に怪我で身体を害ない、運動の出来ぬ身体になった。

アイラの実力の程は知らないが、アイラには“アレ”が見えない可能性が高い。

(頼りになるとしたら、クローディア殿下だけれど)

あの異形は“不浄”に属する。

レックスはそれを知っている。

ならば聖職者の術が有効、

クローディアは聖地の長、専門職と言っている。

しかし彼女は今“ゴーレム造り”の後遺症で体調が万全ではない。

(どうしたものかな……)

レックスは作業部屋に戻り、壁際のソファーに突っ伏した。

「……キリエ……」

一番気に掛かるのは、妹のことだった。

突然連絡を絶ち、行方の知れなくなった妹。

……理由に心当たりがないわけではない。

(お前がそこまでするといふことは ……)

レックスはその顔に苦い表情を浮かべる。

「参ったな……、」

心配する事だらけだ……」

…空を見上げながら、ワヤンの表情に焦りの色が濃くなっていた。

じき日が暮れてしまう。

エレナはまだ見つからなかった。

(そろそろ戻らねば……)

レックス同様、ワヤンにも歌鳥たちが襲われたという“異形”のものに対する不安があった。

「街を出てしまわれたのか……？
どうしたものか……」

人通りの多い場所に出て、ワヤンは再び聞き込みを始めた。

幸いエレナは特徴的な容姿をしている。

見かけた人物さえいれば、手掛かりはある。

「失礼、この辺りで、肌の黒い15歳くらいの少女を見なかっただろうか。」

髪が黄銅色で短く、背丈はこのくらいで ……」

道行く人を捕まえては訊ね、その度に首を横に振られる。

焦りの混じった溜め息を吐いたワヤンは、何度めか空を仰いだ。

…そのときだった。

「……？」

ふと、道の向こうに見えた人影。

足を止め、こちらに視線を向けている仕草に目が留まった。

すっぽりとローブを被り、顔貌は判然としなない。

ただ、纏う雰囲気“何か”を感じた。

しばし見合い、ワヤンはもしやと思いそちらに足を向けた。

「失礼、人を捜しているのだが ……」

…フードの奥の紅い瞳と目が合った。

その瞬間、

「!!!？」

危険を察したワヤンが咄嗟に飛び退いた。

反射的に腰に下げていた刀を抜き払い、目の前に迫った“何か”を弾く。

あまりに突然のことに、ワヤンの息が軽く弾んだ。

「なに……」

目の前の人物は、白い掌を虚空に仰がせた。

ワヤンの刀にぶつかった筈の手には傷ひとつない。

（手……？、素手だと？）

そう、ただの手だ。

目の前の人物の腕には何も無い。

なのに、あの一瞬の危機感は。

「……何を……」

ワヤンは何を言えば良いものかわからない。

ただ、目の前の人物が細い顎を動かした。

「……ほう」

それは、感歎の声だった。

「近頃は、当たりが多い」

その眩きに、ワヤンが眉をひそめた。
構えを解かぬまま、目の前の男をじっと見据える。

「いったい何を言っている……?」

「……何だと思う?」

囁きのような声音に圧倒される。

得体の知れない何かが吹き荒び、ワヤンに迫る。

目の前の男が身動くのを知覚しつつも、ワヤンはそれに反応しきれない己を自覚した。

その刹那にワヤンの脳裏によぎったものは“死の予感”に他ならぬい。

(……!!)

白い指先が、ワヤンに迫る ……

しかし、

……!!!!

その指先は、ワヤンに届く前に

……目の前を真横に走った閃光に似たものに払いのけられた。

数瞬遅れて、視界の外で衝撃音が響いた。

人々の驚きの声があがる。

弾かれたように、ワヤンはその方角を見た。

木造の建物の壁に、生々しい破壊の痕跡。

パラパラとこぼれ落ちる木屑の下に倒れ伏したローブの男。

そして、その傍らに立つ、見覚えのある小柄な少年。

「……！！、」

「クリスタル殿っ！？」

ワヤンの呼び掛けに、その赤紫の瞳に困惑の色を滲ませたクリスが振り向いた。

*

【惹き合う先で】

…数分前、まだクリスは今現在自分のいる街の名前すら知らぬまま、ただ歩いていた。

ロイドによると、今のクリスは“思念体”という状態にあり、実体を持たないらしい。

常人には姿を見ることは叶わず、クリスが意志を持って触れようとしたものでなければ触れることも出来ない。

すれ違う通行人に肩がぶつかりそうになったことがあったが、何かのようにクリスの肩が潤んで溶けたのが見えた。何の感触もなかった。

不思議な感じだったが、前もって聞かされていたためか動揺はなかった。

しばらく見慣れぬ街並みを見回しながら歩く内、クリスはふと、足を止めた。

「……………」

胸の奥が、騒つく。

ライズと2人で旅していたときから、度々感じていた“何か”

残り香に似た気配、
存在の予感。

…記憶の底に沈殿していた何かが舞い立つ。

クリスはどこか浮かない表情で辺りを見回した。

(近よらない方がいい)

本能の警告。

(けど)

得体が知れないからこそ、確認しなければならぬ気がした。

ロイドは、ここに何かがあると言った。

ならば、気に掛かるものがあるなら、それを確認しなければ …

クリスは“その気配”の元へ、本能の拒否を押さえつけながら足を向けた。

…そして、

クリスが見たものは……

*

「……わやん」

クリスは自分を呼んだ男の顔を見た。

見覚えがある。

ファントム・コードの1人だ。

そして、クリスは倒れ伏した男を見下ろしながら、滑るように離れた。

ワヤンがクリスに駆け寄って来る。

「クリスタル殿！

いつサンクレールに」

その言葉に、クリスは複雑な表情で顔を向けた。

「わやんは、おれが見えるのか」

「？」

クリスの言葉の意味を取りかねて、ワヤンが首を傾げる。

どういう意味だ、と表情で問うワヤンを無視するかたちで、クリスは“あの人物”に意識を向けた。

…あの人物だ。

ずっと、クリスがその気配を感じていたのは。

忌避しつつも、どこか惹かれざるをえない“気配”

(ざわつく……)

“彼”がむくりと体を起こした。

頭を覆っていたフードが、パサリと肩に落ちる。

露になる、黒髪。

その貌。

紅の瞳がクリスを捉えた。

「……！！」

クリスは目を瞠った。

その隣で、ワヤンは“彼”の顔に釘付けになる。

(…似て…いる…?)

そうしてクリスの横顔に視線を向けて、“彼”と見比べる。

…クリスの唇が僅かに震えた。

「……お…」

「……？」

クリスの姿を見、“彼”はほんの少し目を丸くした。

「……お前は…」

……！！……！！

その声に

…

オヤハオマエヲナントヨンデイタ？

…

クリスの脳裏に蘇る声。

唇に蘇る、ひとつの言葉。

「……お…と…う…？」

こぼれ落ちる。

ワヤンは弾かれたようにクリスを見た。

「……………今、何と……………？」

クリスは応えない。

ただ“彼”から目を逸らせないまま、顔から血の気が引いていく。

“彼”は軽く眉を上げた。

「……………なるほど？」

時は永く、世界は広く、

とはいえ私を『父』と呼ぶのはただ1人 ……」

緩やかに立ち上がり、ローブの裾を払う“彼”

「生きていたか、

クリスタル」

その声に温もりはなく、ただひたすらに抑揚を欠いた静けさだけがある。

クリスはびくりと肩を揺らした。

…記憶の奥でひどく激しく渦を巻く“何か”

「……………お父っ……………」

……………どっして……………」

【Father】

…クリスの動揺。

その傍らで、事情を知らぬワヤンもまた、どうすれば良いのかわからない。

クリスの様子を見る限り、どうやら当たり前の父子の再会とは判断し難い。

しかもクリスが父と呼んだ男はどう見ても20代前半、クリスのような少年の父親にしてはあまりに若い。

確かによく似ているから、血縁に関してはすんなり信じられるが、だとしたら兄にしか見えない。

(ippitai …どういう …? …)

クリスに事情を訊ねる空気でもない。

クリスはワヤン以上に呆然としている。

《父》は顔色ひとつ変えぬまま、ただまじまじとクリスの姿を眺めた。

「……………」

何かに気付いたように軽く眉をあげた《父》

その彼の元に、騒ぎを見ていた町衆の1人が近付いた。

「ちょ……、だ、大丈夫かい？、あんた……」

いつの間にか集まっていた街の住人たち。

その視線は、壁に叩きつけられながらも平然としている男と、抜き身の剣を手にしているワヤンを行き来する。

…近寄ってきた男に、《父》が目線だけをちらと向けた。

……その片手がぴくりと動く。

それを見て、ワヤンは目を見開いた。

咄嗟に危険を察した。

自身の身の危険ではなく、彼の傍に寄った男のだ。

しかし反応出来なかった。

…次の瞬間、

上がった轟音。

「!!!!!!」

ワヤンの視界から、刹那、あの男が消えた。

一瞬間の間を置いて、腰を抜かしている町民が目映り、

その向こうにしゃがみこんだクリスの背中。

その、少年にしては華奢な身体に押し倒され、押さえつけられた《父》の足が見えた。

「クリスタル殿っ ……」

ワヤンは反応出来なかった。

その傍らで、クリスは反応し、そして間に合った。

《父》の首を掴み、胸元を膝で押さえつけたクリスはその表情を歪めたまま《父》を見下ろす。

「今……なにを……」

《父》は涼しい顔をして、クリスを見上げる。

「なんだ、その顔は」

ひどく抑揚を欠いた、温度のない声音。

クリスは動揺も露に、悲痛の色さえ赤紫の瞳に浮かべる。

「今、殺そうとしたのか」

「それがどうした」

「どっして……！！！！」

「……お前の口からそれを聞くとはな。クリスタル」

そう言って、《父》は白い掌をクリスの腕に掛けた。

「！！！！！」

クリスは反射的にその掌を払いのけ、そのまま側転して《父》から離れた。

《父》は飛び起き、地を蹴ってクリスに向かって跳んだ。

ワヤンは動けないまま、ただそれを見守るしかない。

その耳に、町民の声が届いた。

「あの人、なに一人で飛び跳ねてるんだ？」

(！？)

ワヤンは驚愕しながら町民達の顔と、クリス達を見比べた。

その言葉の意味を確かめようにも、ワヤンには何をどうしたらいいのか全くわからない。

(いったい何が …)

……木造の壁を突き破った先は、木材の積まれた工房だった。幸いにも、そこは無人だった。

《父》が踏み込む足元で木屑の粉が舞う。

クリスは目の前に両腕をかざして十字に組んだ。

愛槍は《異界》に飛ばされた際に、最後に居た村に置いたまま。

まったくの丸腰だったが、それは《父》も同じだ。
だが、それ以前に。

「お父う……っ……、
なんで、こんなことっ……」

「“なんで”？」

《父》は無感動なままの目をクリスの顔に据える。
そのまま身を翻して、回し蹴りをクリスに浴びせる。
クリスの身体が吹き飛ぶ。

「……っ……!……」

衝撃に顔をしかめながら、クリスは受け身を取りつつ《父》から目を逸らさない。

その姿に、《父》は何かしらの感銘を受けたらしい。

「なるほど、我が子であるだけの事はある」

「……お父う……」

「しかし、妙なものだな。」

いくらなんでも、「ここまで異質な存在ものになるとは……」

その言葉に、クリスは戸惑いつつ目を丸くした。

「いしつ」……」

「クリスタル、

お前、その身体はどうした？」

その問いかけに、クリスは乱れつつあった息を整えながら、

「からだ……？」

と返した。

「生身の肉体とは言い難いな。

どうも“匂い”が妙だ」

「おれは……、

おれのからだは今“異界”にあるから ……」

「“異界”……？」

《父》は軽く眉を上げた。

「“異界”か。

なるほど？」

やはりお前は顔こそ私に似たが、
その本質は母親譲りだな」

「！」

クリスは目を見開く。

「…………お母あ…………」

「なんだ？」

忘れたわけではあるまい。

私を憶えているのだから」

「…………おれ…………」

クリスはゆるゆると首を振った。

「わからない。

お父う、おれは…………昔の事よくおぼえてない。

お父うのことがわかったのは、顔を見たから思い出しただけで…………、
おれ…………、

おれ、お父うとどうしてはなれたのかとか、ぜんぜんおぼえてない。

お父うは、おれを捨てたのか？」

クリスはどこか縋るような瞳を《父》に向けた。
視線の先で《父》が僅かに眉をひそめた。

「“捨てた”…………？」

その反応に ……

「……ちがう、のか…?」

クリスの声が僅かに揺らいだ。

かつて、ずっと、クリスは自分が親に捨てられた子どもだと聞かされてきた。

《森の仔》

…

「お父う、

お父うはおれを ……」

「……なるほど」

《父》の呟きとほぼ同時、様子を見に来たワヤンが崩れた木材や瓦礫の影から顔を出した。

「やたらと言葉が拙く聞こえるとは思ったが、つまりお前は“あの後”に汚されたのだな」

どこか溜め息の混じった呟きに、クリスが眉をひそめた。

「お父う?」

「“捨てたのか”?

子どもが自分で生きられるまで育ったら手を離すのが当たり前だろ
う。」

それを“捨てられた”などという、汚れた思考を持つようになるとは。

少なくとも、幼い頃のお前にはなかった筈の思考だが …」

《父》がその唇を歪めた。

笑みと呼ぶにはあまりに色味のない表情 …

「不憫だな、クリスタル。

やはりお前を母親から離れたのは間違いだった」

クリスは赤紫の目を瞪る。

「どういう …」

「外の世界に出すべきではなかった。

いかにこの世が汚れているか、お前の母親は知らないのだ。

あれは“汚れ”というものがこの世に存在することすら知らぬ女だった。

外に出られぬ自身の代わりにお前に世界を与えてやってくれ、と私にお前を託したが、

結局お前の本質は父親の私よりも母親に近い。

この世のすべては、お前達にとって《拒絶》でしかないというのに、

それを無理矢理に飲み込んで、どうやって生きて行くの？
クリスタル」

それは問いかけでありながら、独白だった。

クリスの反応など待たず、《父》は言葉を紡ぎ終わると片足を退けた。

「興がさめた。

どこへなりと行くがいい」

「！、まって、お父う、

おれは ……」

言いかけて、クリスは唐突に足を止めた。

…

まって

いかないで

…

幼い声がする。

記憶の奥の、深い深いところから。

…

おとう、いかないで

…

悲鳴、怒号、
血と煙と鉄の臭い。

朱色の逆光を背に、見下ろしてくる紅い瞳。

（聞き分けがないぞ、
クリスタル。

父の教えた通りにいけば、生きられる）

（怖いものがいっぱい来るよ、お父う。
クー1人じゃ逃げられないよ）

（生き残れぬ筈はない。

もし今日これしきの些事に屈したとしても、そんな柔弱者は我が子
ではない。

どこへなりと行って、野たれ死ね）

…“あの日”…

温度のない声で辛辣な言葉を吐き捨て、《父》はなおも縋るクリス
の手を払いのけた。

立ち去ろうとする背中を追いかけ、足がもつれてクリスが転ぶ。

泣いて《父》を呼ぶクリスの声に、振り向いた顔。

その無感情の瞳は、クリスではなく、クリスの後ろで野卑た声を発

しながら刀を振りかざす男に向けられていた。

ひとつつ地を蹴り、その男の目前にまで跳んだ《父》が白い手を真横になく。

その一振りりで、男の身体が刀を翳したまま上半身と下半身の2つに分かれた。

《父》と、その足元に伏したクリスの体に鮮血が降り注ぐ。

立ったままの男の下半分の身体、その腰元に提げられたナイフに目を留め、

《父》は躊躇なく血に塗れたそれを抜き取った。

そしてそのまま、それをクリスの掌に突き立てた。

「……ッッ……!!?!?!?!」

声にならぬ悲鳴をあげたクリスの幼い頬に、《父》は汚れた手で触れる。

「生き残れ。

そして父に教えてくれ。

お前は“何”で、

お前をつくったこの父が“何”なのか、

生き残って父に教えに来ておくれ、

クリスタル」

…それが最後に聞いた《父》の声、
最後に見た《父》の背中だった。

（そして）

そして、その後 …

（そのあと、おれは……）

…

唐突に、クリスの膝が崩れた。

「！、クリスタル殿っ！？」

その様子を見、慌ててワヤンが飛び出して、クリスの元に駆け寄った。

「どうなされたか！？」

「……っ……あ……っ！！」

クリスの顔色が悪い。

地面を見たまま見開かれた赤紫の瞳が、激しい動揺を映す。

「クリスタル殿」

「……あ……、っ……！！」

そのまま頭を抱えてしまったクリスの背中に、ワヤンが触れる。

そしてワヤンは、その様子に一瞥もくねることなく踵を返した《父》を見た。

「待つ ……、待たれよ、

父御ではないのか、

この様子の御子息を捨て置かれるとは、あまりにも ……」

軽い非難の色を含んだワヤンの声に、《父》は感情のない紅い瞳を向けた。

…否、その瞳に微かに滲んだ嘲りの色を、ワヤンは見た。

「…己の力で生きられるならば、もはや子は子ではない。

道を説く相手を違えるな、

《色無き血の民》」

そう言って、《父》はしばしワヤンを眺める。

「我が手を凌いだ力を見れば、只者でない事は察せられるが、お前もやはり私とは違う。

……触れるに値しない」

「……?」

「“それ”を連れて、どこへなりと行くがいい」

そう言つて、《父》はマントを翻して姿を消した。

【Link】

…ワヤンは呆然と、クリスの《父》が消えた方角に視線を捕らわれていた。

(……………いつたい……………)

すると、手のひらの下で、クリスの背中が震える感触がした。

「！、クリスタル殿」

クリスの耳に、ワヤンの声は届いていなかった。

《父》が立ち去った事にすら気付いていない。

「……………おれは……………」

消え入るような弱々しい声音。

(……………あのとぎ……………)

《父》の背中。

掌のナイフ。

歯で抜き取り、燃え盛る村の中で《父》を捜した。

耳障りな笑声、

振り向いた先、
血塗れた刃をかざす男。

（おれは …）

そのとき

（あのとぎ）

刃は振り下ろされた。

クリスは目を瞠る。

そう、あの刃は振り下ろされた。

そしてクリスは …

「……………あッ……………！！！！！」

追憶を、何かが拒絶する。

真っ青になったクリスの顔を心配そうに覗いていたワヤンが、突然
驚きの声をあげた。

「クリスタル殿！」

クリスの身体が、足元から“ほどけて”ゆく。
光の膜に包まれて、ほどけたそれが吸い込まれてゆく …

ワヤンの手が、宙を搔く。

戸惑っている間に、クリスの姿は溶けて消えた。

…気が付けば、辺りは見覚えのある淡い闇に包まれていた。

クリスは崩れた膝を浮かす感触に身を任せた。

一瞬、思考が真っ白になった。

虚脱したように視線を泳がせていると、鈴を転がすような少女の声が聞こえた。

『やっと見つけたわ』

クリスはきょとんとして辺りを見回す。

すると、どこからか伸びてきた光の筋が一点に集まり、編み上げられながら1人の少女の姿を作り出した。

『搜したわ』

「……………？、お前は……………」

普通の少女ではない。

白い肌、黒い髪、

そして、白眼のない紅玉の瞳。

何より異様なのは、目の前にいながら気配をまったく感じられない事だった。

『私はマリーエレメント』

「……まりー……」

聞き覚えがある。

『ファントム・コードの代弁者よ。』

覚えておいて頂戴、

クリスタル「アーム」』

クリスはまじまじと、闇に浮かぶ少女の姿を見た。

「……お前、どこかで……?」

『いいえ、貴男と私は初対面よ』

「……そうか」

言って、クリスは僅かに伏せた目を再び上げた。

「おれや、カトリたちを《異界》に飛ばしたのはマリーか?」

『そうよ。』

正確には《ファントム》の《絶対意思》が』

「……?、」

……よく、わからないけれど ……、
ろいどが、ふぁんとむはおれを助けるために“そう”したのだと言
っていた」

『その通りよ。』

ロイド「オートリンクはさすがに察しが良いわ。」

貴男が《狭間》や《こちら》を行き来しているのも彼の指示ね？

おかげで捜す手間がとても省けたわ。」

私単体の力で《異界》にまで手を伸ばすのは、とても大変なの』

クリスは神妙な表情でマリーを見つめる。

「……………」

やはり、どこかで会ったような気がしてならない。

「 ……おれが大丈夫だと、ふぁんとむがわかれば、おれも他の3
人ももどれる、って」

『それは少し違うわ。』

貴男の無事は確認するまでもなく承知している。

ただ《異界》から《こちら》に彼らを引き戻すために、貴男の力が
必要なの』

「 ……? ……」

クリスは首を傾げる。

「おれの……ちから？」

「そう。」

濁流に石を落とすのはとても簡単だけど、それを探して拾い上げるのは簡単ではないでしょう？

だから貴男の力が必要なのだ」

「……よくわからない」

クリスタルが呟くようにそう言ったのを聞き、マリーは微笑う。

「ええ、まだわからないと思うわ。」

《虹姫》同様、時間をかける必要があるの。

でないと貴男の心は壊れてしまいかもしれないから。

本当は私と接触するのも、もっと先延ばしにするつもりだったのだけれど、

《歴史の軸》が戻りかけてしまったから仕方ないわ。

《フロントム》を維持するために、貴男を失うわけにはいかない」

「？、

ふぁんとむが、なに？」

『それはまたの機会にお話ししましょう、

貴男の力を貸して頂戴、
クリスタルⅡアーム。』

早く彼らを《こちら》に戻してあげないと、本人達も周囲も途方に暮れてしまうわ』

そう言われ、クリスは

「……そうか」

と素直すぎるほど素直に頷いた。

これがクリスの個性であり、ある意味長所であり短所である。

ともあれ、クリスは自身の疑問の解決より、マリーの「周囲が困る」という意味の言葉の方を重視した。

「どうすればいい?」

『貴男の力と、私の意識を《接続^{リンク}》するわ。』

それも含め、すべて私に任せてくれて大丈夫よ』

「そんな、かんたんでいいのか?」

『ええ。』

これも貴男の役得というものよ』

「？、……わかった」

クリスの返事に、マリーが頷く。
ふわり、と重力を感じさせない動きでクリスの目の前に降りた。

幼さの漂う両手を伸ばし、マリーはクリスの頬を包んだ。

『《接続》のときに、私の中にあるファントムの記憶が、貴男の中に逆流する可能性があるわ。』

出来る限りの抑制処理を行うけれど、記憶が混濁する恐れがある』

「こんだく……？」

首を傾げるクリスの額に、マリーは自身の額を寄せた。

『だから貴男には《こちら》に戻る時、他の彼らとは違うルートを経由してもらおうわ』

「？」

『先ほど貴男は《お父様》の気配に惹かれてサンクレールにたどり着いたようだけど、』

あのひとは貴男の心の拠り所にはなり得ない。

あのひとは一度貴男を“壊した”張本人だもの。

あのひとの言った通り、あのひとは貴男を手放す時期を誤ったの。

“遅すぎた”のよ。

中途半端な記憶のせいで、貴男は貴男自身が何者なのかを思い出せ
ずにいる。

いいえ、思い出すことを拒否しているのね。

今はそれでいいわ、

けれどずっとそのままでは駄目よ。

貴男が貴男自身をしっかりと自覚しなければ、ファントムを保てな
くなる。

よく覚えておいて、

クリスタル＝アーム。

貴男はファントムにとっても重要な存在なの。

今はその意味を教えてあげることが出来ない。

貴男が貴男に戻れない限り、それを伝えたら貴男は壊れてしまつか
もしれないから。

貴男が貴男を思い出し、そして貴男であることを受け入れられた時、
私は貴男とファントムを引き合わせましょう。

そうして私達の《悲願》のときは近づくの『

「……………ひがん……………」

『……………たあ、』

始めましょうか』

クリスの瞳の前で、マリーの紅玉の瞳が白い瞼に閉ざされる。

つと、クリスは意識が遠退く感覚をおぼえた。

…突如頭の中に鳴り響いた鐘の音に、歌鳥は座ったままよろめいた。

「これっ……！」

「きたか」

耳に手を当てて、ロイドが呟く。
ライズもまた耳元に掌を寄せた。

そのとき、うなだれていたクリスが出し抜けに顔を上げ、一同を見回す。

その表情がどこか普段と違う気がして、歌鳥は目を丸くした。

「クリスくん？」

クリスの唇が静かに動く。

□ ……《接続》を正常に完了、
これより《誤作動^{エラー}》の修正を開始する。

時間軸誤差 4 . 9 4 ……」

その唇から発せられた声は、クリスのものではなかった。

その声は ……

「マリーちゃん…!？」

驚愕した歌鳥が、口元を手で覆う。

「どろしてっ…!？」

「いや ……」

口を開いたのは、歌鳥ほどは動揺していないながらも、珍しく驚きを露にしているライズだった。

「マリーじゃない………」

確かに似ているが、それでもマリーの声とは何かが異なる。

そんな歌鳥やライズの反応をよそに、クリスは一点を見つめたまま、唇だけを動かす。

まるでからくり人形のように。

『座標を修正、誤差 6 . 2 6、許容レベル到達。』

これより

ロイド＝オートリンク、

ライズIIプロツサム、
カトリIIナミカワ
以上3名の

《ダブル・コード》の転送を開始する。

5、4、3……」

「うお!？」

なんかカウントダウン始まってる!？」

「ク、クリスくん!？」

「やれやれ……、

やっと帰れるな……」

ロイドだけが平然とした様子で、座ったまま頭を掻いた。

「ロイドさん？」

「掴まれ」

ロイドが歌鳥に向かって手を差し出した。

『……2、1、………』

瞬間、

歌鳥たちの足元が鈍く輝いて円を描いた。

「!」

輝いて、滲む。

平然としているロイドの手に縋りつつ、歌鳥は不安げな視線をクリスに向けてた。

一見すると普段と変わらない。
感情の見えない表情は常からだ。

けれど、

「クリスく …」

名前を呼び終える前に、彼の姿が潤んで消えた。

*

【歌鳥とロイド】

次の瞬間、

歌鳥の視界は霧か何かに包まれた赤紫色一面になっていた。

浮遊感の後、唐突に落下する感覚 …

「……!、きゃあぁっ!?!」

下を見下ろし、歌鳥は自身を包んでいたものが霧ではなく、雲であったことを悟った。

平衡を失い、落下する風圧で体勢が崩れる。

空に泳がせた細い腕を、大きく逞しい腕が掴んだ。

「！、ロイドさん！」

落下する、空気の激流の中で引き寄せられる間に、歌鳥は辺りに視線を巡らした。

「クリスくとライズさんは …」

「おそらく“あちら”に飛ばされる前に最後に居た地点に戻されている。

下を見てみる、
サンクレールだ」

「……」

巨大な山岳に抱えこまれた街が、遙か下方に見える。

「これっ ……、
落ち ……」

「舌、噛むなよ」

言ったロイドの身体が一瞬霞む。

次の瞬間、ロイドの身体は漆黒の影になって歪んだ。

そして、その影が歌鳥の身体にまとわって、大きく膨らみながら膨らんだ。

ブラックだ、と歌鳥は理解した。

ロイドのゴーレム。

しかもロイドは、自身の肉体をゴーレム化させる術がある。

歌鳥の手足を固定しつつ球体を形作ったそれは、漆黒の隕石のようにサンクレールの街外れに墜落した。

墜落の瞬間、歌鳥は息を詰まらせたが、あの高さから落下してこの程度なら信じ難いほどに軽い衝撃だ。

泡が弾けるようにして、ブラックが解ける。

漆黒の膜は速やかに長身の男の姿を取り戻した。

「怪我は」

「あ……、いえ・ありません。

ありがとうございます」

「そりゃ何よりだ」

短く言って、ロイドは手を取って立ち上がらせた歌鳥の服の埃を払い落としてやった。

「あ、ありがとうございます……、すみません」

無言で頷き、ロイドは辺りを見回した。

「教会とは逆側に落ちたな ……」

「え？、 ……あ、

そうみたいですわね………」

「まあいい。

とりあえずここから離れるぞ。

俺達が落ちるのを見た街の住人が様子を見に来るかもしれん」

面倒は御免だ、と言外に言うロイドに頷き、歌鳥はその背中に続いた。

こちらに戻って、黒いロングコートの姿をしたブラックを纏ったロイドの背中は、やはり独特の存在感がある。

歌鳥はふと、ロイドの手に視線を向けた。
今は黒い手袋に包まれたそれ。

しかし、その下にある、この男には不似合いの指環を歌鳥は見た。

(……)

歌鳥は少しためらいつつ、口を開いた。

「あの……、ロイドさん」

「何だ」

「……………」
ロイドさんは、どうして《ファントム・コード》に入ったんですか？
」

その問いに、ロイドが意外そうな表情で振り向いた。

「……………」何だ、いきなり

「じめんなさい、

その……………」いきなり気になったので……………」

しりすぼみになる歌鳥の言葉に、ロイドはただ琥珀の隻眼を少女に向ける。

「《ルビー・エーテル》で世界が壊れるのを防ぐため、っていう《ファントム・コード》全体の理念は解るんです。

でも《ファントム・コード》と接触するきっかけか何かはあったわけでしょう？

表には出ない組織なのに、って……………」少し気になって

「……………」

ロイドは僅かな沈黙の後、静かに口を開いた。

「……………」《ファントム・コード》のメンバーはファントムの《絶対意思》によって選定される」

「ファントム……?」

歌鳥の呟きに、ロイドが軽く頷く。

「《ファントム・コード》の予言には、ルビーによって滅んだ世界の歴史も記されている。

そこから、ルビーの毒で死ななかった人間をピックアップして、経歴・人格・能力などを考慮した上で、

ファントムやマリーがメンバーにふさわしい人間を選んで、迎えを出すんだ。

エレナのように、巻き込まれて成り行きで入ってくる人間もいるがな」

「…ロイドさんは?

選ばれて?」

「……半々だ」

歌鳥が首を傾げた。

そうして、気が付いたように瞬く。

「あの、もしかして私、すごく失礼なこと訊いてますか?

訊かれたくない事だったでしょうか?……」

「そういう事じゃない。

ただ、長い話になるから面倒なだけだ。
たぶん話し終わる前に教会に着いて、話が切れるからな」

「はぁ……………」

曖昧に頷き、歌鳥はロイドの背中を見た。

……………嘘ではないと思う。

嘘ではないと思うが、それだけではないような気がした。

けれども、それ以上の追及をする気にはなれず、歌鳥は話を少し変えた。

「……………さっきの……………、
クリスくん？………が言っていた《ダブル・コード》って……………どういう
意味なのかしら……………」

その歌鳥の呟きに、ロイドの歩調が少し緩む。

「何か知ってます？

ロイドさん」

「……………」

無言で、ロイドは再び歩調を元に戻した。

(……………そう、

それが問題だ ……)

内心で、呟く。

(《ダブル・コード》…、
…なんでアイツが)

琥珀の隻眼が宙に泳ぐ。

(まさか……)

胸の中に湧きあがる、不安に似たもの。

「…さつさと戻るぞ」

落ち着いて考える時間が欲しい。

ロイドはそう思った。

【蛇眼を伏せる刻】

…夕陽の射し込む窓辺、ベッドから身を起こしながらクロード
イアは外を眺めていた。

少しばかり顔色が悪いのは、ゴーレムを得る為に血液を使ったため
に、貧血気味だからだ。

彼女が小さくついたため息を聞き留め、ちよつど同室していたレッ
クスが顔を向けた。

「何か飲み物でもお持ちしましょうか？」

劣るような声音に、クローディアが口元をほころばせて微笑った。

「まだ大丈夫です。」

先ほどお茶をいただいたばかりですから」

クローディアは若くは見えない。

にも関わらず、非の打ち所のないクローディアの美貌が、レックスには不思議な気がした。

母ほど歳の離れた女性がふわりと笑ってレックスを見る。

「……そなたは幾つになりますか？」

クローディアの突然の問いに、レックスが首を傾げる。

「歳 ……ですか？」

今年で27になります」

「そう ……、

その若さで既に一人前以上の造獣師だというのは、立派なこと」

「え……？、あの……、

……いえ……」

予想していなかった贅辞に、レックスは照れる前に戸惑ってしまふ。

クローディアが、ふ、と息をついた。

「妾の立場を配慮して、事情を詮索しないでいてくれる事には感謝していますよ、ジェラルディン。」

けれどもゴーレム造りの過程で妾はそなたに一度命を預けた身、もう少し砕けた話をしても構わないと思っています。

お目付け役もおらぬことですしね」

アイラは今は父親の帰りを待ち、教会の表に出ている。

そのことを少し茶目っ気を含ませた口調で言ったクローディアに、レックスは少し気が抜けた。

クローディアが再び笑う。

「あの娘は少しばかりそなたに手厳しいようですが、悪く思わないで下さいね」

「いえ、平気です。」

むしろなんだか親しみさえ覚えますね。

アイラさんは私の妹に少し雰囲気似ていますので」

「あら」

「十も歳が離れているので、妹というより娘に近い感覚になるんです。」

妹のほうも幼い頃から私にとってもなついてくれて。

大きくなったら離れてしまうのだろうと思っていたのですが、変わらぬ今も慕ってくれています。

ただし人見知りで、他人にちょっとキツイ態度をとってしまうんです。

その時の感じが、なんとなくアイラさんに似ている。

なんだか妹が成長した姿を見ているような気分になります。

……なんて言ったら、アイラさんに失礼かな

ちらと扉の方を見やりながらそう言うレックスを見、クローディアがコロリと笑った。

「いえいえ、存外、的を射ていますよ。

あの娘もあまり社交的な娘ではありませんからね。

性質は良い娘で、よく気のつく娘なのですが」

「ええ、わかります」

「ワヤンはある愛情を持って育て上げたのです。

それはどんな教育よりも大切なこと ……

そなたもそう思つてしょう？

「ジェラルディン」

美しい視線がピタリと自分の顔の上に止まるのを感じ、レックスは少し気圧されつつ、

「え……、ええ」

と応えた。

戸惑いが滲んだのは、クローディアの声にどことなく憂いに似たものを感じ取ったからだ。

「そなたやアイラのような年頃の若者を見ると、まずそんな事を考えるようになってしまいました」

憂いを秘めた瞳が、窓の外に視線を向ける。

その姿を見て、レックスは思い当たる。

衆知の事実であるが、クローディアは若い頃に一度結婚している。

それはレックスが生まれる前のことなので、彼は当時のことを知るわけではないが、

相手は当時の隣国の王族だった。

“当時の”というのは、すでにそこは亡国になっており、今は《旧国境地帯》と呼ばれているからだ。

滅ぼされたのだ。

他ならぬ、クローディアの父親である先のリーヴダリルの王によって。

クローディアは皇都が攻め込まれる前にリーヴダリル軍側に和平の

交渉に遣わされていた。

その間に皇都は落とされ、クローディアの夫も含めた王族のすべてが討ち死に、もしくはは自害した。

クローディアを除いて。

そんな過去を持つ女性。

そして今は皇位継承問題の渦中に身を置く女性。

ごく当たり前の娘に生まれていたらならば、今頃はレックスやアイラくらいの年頃の子どもがいておかしくない。

…そついう意味の言葉なのだろうか。

それを思うと、目の前の女性は《聖女》や《殿下》という、ひどく隔たりのある世界の住人ではないのではないだろうか。

レックスはそう思った。

陽が落ち、街並みのシルエットが色を濃くしてゆく。

アイラはその方角に視線を向けながら、隙のない佇まいで教会の扉の前に立っていた。

深紫の髪がオレンジ色の光を鈍く弾く。

アイラが覚えていない少女を捜しに出て行った父。

それを複雑な気分待ちながら、アイラは微かにため息を洩らした。

…父親が得体の知れない組織に入ったのは10年以上も前のことだ。

その頃には既にアイラはクローディアの付き人をしていた。

父親は昔から各地を巡り歩いていた。

アイラが幼い頃はなるべく家を空けないようにしてくれていたが、

アイラが大きくなってからは、年の半分以上留守にするようになっていた。

その間に、いつの間にか父親は《ファントム・コード》と接触し、そこに所属するようになった。

アイラにすら、その組織に関する情報は最低限のものしか教えてはくれない。

そういう父親の律儀に口の固いところや真面目さは、アイラが尊敬しているところではあるが、

やはり釈然としないときはある。

しばし辺りを見回し、アイラは踵を返して教会の扉に手を掛けた。

そのときだった。

突然、アイラの背筋に奔った悪寒。

弾かれたように振り向いた先には、ただただ穏やかな夕暮れの街と
畦道があるばかり。

…なのに。

(何だ……?)

まがまがしい気配。

そんなものを感じながら、アイラは辺りに視線を滑らした。

何か“在る”

それは確かな直感だった。

アイラは腰に下げた短剣の柄に手を掛ける。

“不可視の危険”

気のせいだとは思わない。

《白い血の民》に属す不浄の存在の中には、普通の人間の目には見
えないものもいる事をアイラは知っている。

「…何処にいる、

出て来い！」

凜とした声でそう言ったアイラの頬を、生ぬるい風が擦り抜ける。

(……ね ……いね ……)

「…!?」

耳で聞こえた、かすれながらも地を這うように粘つく女の声。

瞬間、アイラは反射的に身を引いた。

空気が流れる。

先ほどまでアイラの頭があった位置を、確実に“何か”が通った。

間髪入れず、アイラは腰の短剣を抜き払った。

その刃には聖句が彫られており、不浄の存在に対しても威力がある。

確かな手応えがあった。

次いで、耳元にまで届いた空気の振動。

それをアイラは“悲鳴”だと感じた。

(当たった)

ならば終わりだ。

聖句の刻まれた刃は不浄の存在にとっては猛毒、傷口から浸食されて“白い砂”と化す。

ゆえに《白い血の民》と呼ばれるのだ。

…だが。

「……………」

突然、アイラの肩に衝撃が走った。
突き飛ばされ、吹き飛ばされる感触。

完全に想定外のこと、アイラは受け身を取り損ね、無防備に壁に叩きつけられる。

「っは……っ！」

詰まった息を吐き出した刹那、迫る“圧力”を知覚した。

目の前の景色が一部霞む。

“何か”が

(来る ……！)

ドン、という衝撃。

それに混じった、グシャ、という音。

数瞬おいて奔った激痛に、アイラは呻いた。

「…っあ……っ…！」

そのとき、

「アイラさん……！」

聞こえた男の声。

レックスだ、とすぐにわかった。

「ジェラル、デイ……」

いつの間にか開け放たれていた教会の扉の前に立つ男の姿に、アイラは切れ切れに言葉を発した。

「殿下……を……」

…レックスは視る。

アイラのすぐ目の前に、身を仰け反らすようにしてうごめく“もの”

「この前の ……!」

激しい物音とあの身の毛もよだつような悲鳴を聞きつけたときから、レックスは何が起きたのか予感していた。

あの女怪。

あの夜以来、姿を見せなかったものの、いずれは遭遇するであろうと思っていたから。

クローディアと歌鳥の安全を優先し、《退治》を後回しにしていた事がここに至って仇となったか。

肩を潰されたアイラの姿に、レックスは胸を痛めた。

（あの出血 ……、

早く処置しないと……）

しかし、目の前のあの女怪が。

数日前と変わらぬ異容。

青ざめ、ぬめって光る上半身、
艶のない黒髪が全身に絡みつき、顔は判然としない。

そして、粘液の滴る下半身は鱗に包まれた大蛇。

…吐き気がする。

(あれが、《シャドウ》)

痛々しい表情を浮かべたレックスと、その女怪の目が合った。

しかし、女怪はすぐに視線を逸らして再びアイラを見下ろす。

『…きれいなね…、
あなた…』

震え、淀む声で女はそう言った。

『きれいな…い…』

虚ろな、感情のない声。

女怪の腕がアイラに向かって伸ばされる。

「アイラさん!!」

アイラは目の前で起きていることが何も解らなかったが、レックスの切迫した声音で、自身に迫る危険を察した。

「く……っ……」

何が起こっているのか解らない。

そんな状況の中でこのまま“終わる”のかと思うと、あまりにやりきれない。

アイラは目を見開いたまま、ただ前を見据えた。

せめて心だけは、何があろうと屈しはしない。

見えない腕が、アイラに届く ……

そのとき

「下がちなさい

ジェラルディン！！！！」

凜とした女の声がして、レックスの横を人影が擦り抜けた。

「！、殿下！」

その後ろ姿だけを見れば、50を前にした女だとは誰も思わないだろう。

颯爽と駆ける姿に躊躇う様子は微塵もなく、その手には刀と呼ぶには少しばかり短い剣を携えていた。

その刃には、やはり聖句が刻まれている。

クローディアの髪が彼女の動きを形づくりながら流れる。

弧を描いたクローディアの剣が、女怪の首を斬った。

紫色の唇から、おぞましいほどの悲鳴があがる。

その声を聞くことの出来ないアイラですら、雰囲気だけで鳥肌が立つほどだ。

「……!」

クローディアが目を見開いた。

斬り払ったはずの女怪の首筋、血の代わりに吹き出す白い灰、

しかし、見る間にその白い灰が傷口に吸い込まれるようにして、元の姿に戻るうとする。

「これは」

「殿下!」

レックスが叫ぶ。

「駄目です、殿下!」

《シャドウ》は《ドール》の集合体です!

部分的な攻撃ではすぐに修復してしまう!」

そのレックスの声とほぼ同時、

女怪の蛇尾がのた打ってクローディアに向かって振り上げられる。

それを見留めて、クローディアは飛び退いた。
高貴な地位にある女性とは思えない身のこなしだ。

剣を手にしたまま手早く長衣の裾を結び、顔にかかった髪を振り払った。

(術を施す時間さえ稼げれば)

そうクローディアが考える先で、女怪は再びアイラに目を向ける。

他のものにはまるで無関心だ。

アイラは身動きが取れないまま、クローディアの方を見た。

「殿下…お逃げ下さい…」

弱々しくなる声に、クローディアは視線を向ける。

無言のまま、再び剣を構えた。

クローディアが踏み込もうとした、その刹那

「!!!」

突然肩を引き戻されて、クローディアは後方に押しつけられた。

彼女と身体的位置を入れ替えて立ちはだかった、漆黒の人影。

「オートリンク!」

押しつけられて体勢を崩したクローディアを、背後から支えたか弱い手。

「大丈夫ですか

クローディアさま！」

「ナミカワ……」

「下がってる、女共」

短く言い放ったロイドの強靱なばねのような脚が地面を蹴り、女怪に迫ったのは一瞬よりも短い間のようにさえ見えた。

漆黒の脚が女怪の上半身を蹴り飛ばす。

飛ばされた上半身に引きずられて、蛇の下半身がのた打ちながら跳ねあがる。

悲鳴にも似た呻きにも眉ひとつ動かさぬまま、ロイドはその大蛇を脇に抱え込み、そして豪快に投げ飛ばした。

「建物から離れる

レックス！！！！！」

よく通るロイドの野太い声に弾かれて、レックスは慌てて走り出した。

そんなレックスとすれ違うようにして教会の方に飛ばされる女怪。激しい音がして、壁を突き破る。

それと前後して、ロイドの纏う漆黒が剥がれた。影のように宙を滑り、真つ直ぐに女怪を目指す。倒れ伏したままのアイラが呻き声を洩らした。そのとき、彼女の身体を抱えた腕。

「 …… 父上殿 …… 」

「 喋るな 」

どこから、いつの間に現れたのか、見上げた父親の表情は痛々しく歪められていた。

「 さつさと離れる 」

ワヤン、

娘ごと巻き添えを食うぞ 」

「 それは困ります 」

重傷を負った娘の身体を気遣いつつも、ワヤンは速やかにロイドの背後に走って回り込んだ。

教会に空いた穴の向こう、土煙の中に垣間見えた女怪の姿。

粘着性の闇によって地面に張り付けられているように見えた。

無論、その闇とはロイドのゴーレム・ブラックのことだ。

ロイドは仁王立ちのまま、その方角に向けて腕を突き出した。

「『白き衣』 『翻りて』
『囁きと息吹を喰らえ』」

唄うような、朗々とした、
それは《詠唱》

その声に応えるかのように、教会の周りを光の帯が囲ってゆく。

それは、ロイドが《異界》に飛ばされる前にこの教会に張っていた
《結果》とほぼ同じ姿をしていた。

ただし、そのときの、歌鳥やクローディアを護るためだったそれとは違う、

何か禍々しいような空気を歌鳥は感じた。

ロイドの詠唱は続く。

「『中立の使者』

『旋律の孤児』
みなしこ

『墓守りの虚栄』

『幾重にも泡沫を囲う四季』
うたかた

『散在する失望の澱』

『今宵、咲き狂え』

『苦悶と偽りを甲いに代えて』」

指を鳴らす。

「『ロスト殲』」

それを合図に、教会を囲っていた光の中に蒼白い火柱が上がった。

獣のような絶叫が火柱の中から聞こえてきて、歌鳥は反射的に耳を塞いだ。

教会を半壊させるほどのその爆発は、数秒で幻のように消え去った。

倒れ伏した女怪の姿が見える。

身体中、無惨に焼け焦げて身動きもない。

「……やった…？」

歌鳥が呟く。

「まだだ」

ロイドが言う。

「あの《シャドウ》の《憑依よりしる》になっている《白い血の民》を引き剥がす。

サンプル検体としてアジトに送ろうとも思ったが、生憎その手段がない。

《屍毒》を発する前に処分する」

淡々とした口調で語りながら、ロイドはずかずかと女怪に向かって歩き出した。

それをレックスが追う。

「待ってください、
ロイドさん。」

初の《シャドウ》の検体です。

せめて少しだけ僕に“視させて”ください。

何かがわかるかもしれない ……」

真剣なレックスの表情に、ロイドは冷ややかな隻眼を伏せた。

「いいだろう、

ただし油断するなよ。」

まだ《シャドウ》としての《ドール》に対する引力は有している」

「わかってます」

言って、レックスは女怪の傍らに膝をついた。

おそるおそる、歌鳥も窺うように近づく。

ロイドがそれを見て、

「あまり近寄るな、

アレにインプットされた獲物にはお前も含まれてるみたいだからな」

「は、はい……」

そう言って、歌鳥は心配そうな視線をアイラの方に送った。

“インプットされた獲物”

それにアイラも含まれていたのだろうか。

クローディアに対しては全くの無関心だったことを思えば、そう考えられるが……。

「……爆発のショックで、《憑依》からかなりの数の《ドール》が剥がされています。

これなら《ラスト・コラール》も効く……」

レックスの声にロイドが顔を向けたとき、女怪の腕がピクリと動いた。

一瞬で緊張し、ロイドがレックスの肩を掴んで引き寄せようとした。

その視線の先で、女怪が顔を上げる。

纏れて顔に絡みつく黒髪の間隙に、初めてその貌が見て取れた。

歌鳥が軽く口元を押さえた。

焼け焦げた女の顔。

血の気のない顔色を除けば、それはあまりにも凡庸で、ごく当たり前の顔立ちをしていた。

それだけに、今の無惨な姿があまりにも哀れなものに見えた。

痛々しさに胸を詰まらす歌鳥。

…しかし。

…歌鳥以上に、狼狽した声が上がった。

「…………レベツカ…!?!?…」

え、と顔を上げたのはレックス。

驚愕に隻眼を見開いたロイドの顔を見上げる。

「ロイド…さん？」

動揺するレックス、歌鳥。

その視線を集めるロイドは、女怪の顔に目が釘付けになっている。

今まで見たことのない、ロイドの表情。

激しい狼狽と衝撃。

その視線に叩かれたかのように、女怪は上げた顔をさらに反らせてロイドを見上げた。

『…………ロイド…………?』

地を這うような、血を吐くような女の声。

その声に、さらに一同に衝撃が走る。

(今、なんて…………)

ロイドを見上げた女怪の黒ずんだ頬、紫の唇。歪み、引きつったような笑みが浮かぶ。

『ロイド……、

ああ……、ほん、と……に……、ロイドなの……?』

這う指、地面に食い込む爪がひどく歪む。

ズル、ズル、と女怪はロイドの足元のにじり寄る。

『ロイ、ド……、

逢い……た、かった……、

捜して、……た……の……、

ずっと、ずっと、ずっと……と……』

わななく指が、ロイドの黒いブーツを掴んだ。

茫然と、ロイドは声もなく足元の女怪を見つめる。

おぞましい女怪の顔に浮かんだ笑みには、どこか恍惚とした色が見えた。

『ロイド……、ロイド、

ロイド、ロイド、

ロ……イ……ド……』

掴んだ指の震えが止まり、ズル、と落ちた。

それと同時に、女怪もガクリと顔を伏せてしまった。

「……………」

無言のまま、ロイドは足元を見つめていた。

歌鳥もレックスも、あまりに突然、かつ予想外のことと言葉を失う。

「……………ロイドさん……………？」

ようやく歌鳥が溢した声に、ロイドが振り向いた。

「……………大丈夫だ……………」

呟いた声は低かったが、いつもと変わらぬ表情がそこにあった。

「もう平気だ。

こいつは……………もう、動かない……………」

そう言いながら、口元に寄せられた指に動揺の名残がある。

「……………俺が処分する。

レックス、お前はアイラの傷を診ろ」

困惑しながらも、レックスは頷いた。

「……………分かりました」

立ち上がり、立ち去るレックス。

それを視界の端に捉えながら、歌鳥はロイドの背中から目を逸らせなかった。

(ロイドさん)

足元の女怪。

(ロイドさんの名前を呼んでた)

漆黒の背中。

(ロイドさんが名前を呼んだ)

……《レベッカ》

瞬間、日没の刻。

炎の色の光に照らされていた景色が暗く沈む。

それがとても不吉なもののように思えて、思わず歌鳥はロイドの服を掴んだ。

ロイドが振り向く。

「……どうした」

その言葉に、歌鳥は応える言葉を持たない。

ただ、ひどく静かなロイドの声が優しげに聞こえた。

それは少しクリスの声に似ていた。

不安げに見上げてくる歌鳥に、ロイドはほんの僅かに微笑んでみせた。

「……大丈夫だ」

「ロイドさん……」

何を言えればいいのだろう。

ただ、微笑んだロイドの表情は、今まで歌鳥が出会ってきた中で、一番優しい表情だと感じた ……

「……はい」

頷きながら、何故だか歌鳥の瞳が潤む。

全く理由の分からない痛みを顔を伏せ、歌鳥は声を詰まらせた。

事情なんて何も知らないのに、ただただ哀しくて仕方がなかった。

【12】Father（後書き）

こんにちは、五木萩です。

なんか色々詰め込んだ回になりましたね、
わかりにくかったら申し訳ないです。

ややこしくなった一因（てか大部分）はクリスとお父うの絡みなわけですが、タイミング的にここしかなかったんですよね、

ほっといたらクリスに会わないまま、どっか行っちゃいますからお父う。

ちなみに前回、改編がなければエレナと遭遇していたはずの人物と
はこのお父うです。

でも直すに当たって、その出会いはとりあえず無しにしました。
このタイミングじゃねえだろう、と。

前に読んで下さった方にはややこしくなって大変申し訳なく思います。
す。

今回はロイドが主役です。
では、また。

【13】黒き益荒男

貴方を待つだけの季節は過ぎて
夢を醒ます冬が来る

朽ち縄の身は未だ朽ちぬ

限り無き愛を此の身にと
尽きぬ執着を此の身にと

濡羽珠に咲く花は我であれ

【Episode: Black】

…抜けるような高い空は飽くほどに蒼い。
ある年のある初秋の風景。

夏の名残を残す温い風が撫でるその場所は、平原と呼ぶには陰鬱な
風情が漂っていた。

その一因である今にも傾きそうな廃墟と化した建物は、
かるうじて教会の姿を保っている。

それを眺め、彼は目の前の塚を見下ろした。

…墓標である。

花も持たず、ただそれを見下ろして男は静かに佇んでいた。

彼は普段はそのずば抜けた長身を黒いロングコートで覆っているが、この日は季節に相応の薄手の服を着用していた。

しかしそれもやはり漆黒で、手袋、靴に至るまで黒で統一している。

彫りの深い顔は、その右半分を拳大の眼帯で覆われていた。

それでも隠し切れぬのか、そもそも隠すつもりがないのか、眼帯からは傷痕がはみ出している。

「…兄さん？」

踵を返そうとした背中に声が掛かり、

男 … ロイドは振り向いた。

草が茂る斜面の下、

片手に花の束を下げた男が、どこか複雑そうな顔をして見上げている。

「…来てたんだ」

「…ああ」

低い声で頷き、ロイドはその弟を見下ろした。

今年で30歳になるのだったか、まだ若く見えるが。

人の良さそうな、柔らかい雰囲気の良い顔立ち。

ここから街までは数時間の距離、
徒歩で来たらしい彼の腰には護身用の剣が下げられている。

…不似合いの装備だ。

弟はしばしロイドを見上げ、複雑な色を浮かべたままの顔で微笑んだ。

「去年は来てなかったから、どうしたのかと思って」

「仕事だ」

短い返答に目を伏せ、彼は斜面を上がった。

墓前に花を供え、目を閉じて祈るように膝をつく。

しばらくそれを黙って見ていたロイドだったが、
弟が組んだ手を下ろしたところで静かに声を掛けた。

「…仕事はどうだ？」

「うん、何も問題ないよ。」

「教え子は皆いい子ばかりだし」

「そうか」

どこへともなく視線を滑らすロイドを見上げ、
弟は少し目を泳がせて口を開く。

「…もうすぐ、」

子供が産まれるんだ」

つと、ロイドが視線を下ろした。

「この前会った時に言ってた相手か」

「うん。」

…去年の秋に式を挙げた。

本当は兄さんにも出席して欲しかったんだけど、
連絡先がわからなくて……」

「それは、悪かった」

「ううん、」

…まだ、仕事であちこち？」

ああ、と頷くロイドを見、弟は少し切なそうな表情を浮かべた。

「これから、家に寄って行ける？」

母さんも兄さんの事、気にしてるんだよ」

「…いや、仕事がある。

すぐに戻らないと」

「 ……そう」

やや俯いた弟の表情には、困惑のような迷いがある。

「 ……兄さんは、まだ独り身なの？」

その問いに、ロイドは目だけで弟を見下ろし、感情の窺えない琥珀色の瞳を向けられた弟は目を伏せた。

「せめて、身の回りを世話してくれるひとか…」

「 ……たあ」

「さあ、じゃなくて…」

思い切ったように、顔を上げてロイドを見上げる瞳。

「心配なんだよ、

……兄さん顔に似合わず無茶するし……、

その顔の傷痕だって、そういう事なんじゃないの？

まだ兄さんは……」

彼は目を伏せ、傍らの墓標を見下ろした。

「 ……去年、兄さんは来なかった。

病気とか怪我とか、

……他の心配もいろいろしたけど、

どこかで安心した気持ちもあった。

「……兄さんは、やっと新しい人生を歩き始めたのかもかもしれない……つて」

「……」

「もう17年だよ、兄さん」

風が撫でる。

淡く、秋の匂いがした。

「もういいよ、義兄さん。」

義兄さんが姉さんを忘れて違う幸せを選んでも、姉さんはそれを責めないよ……」

俯く弟の肩が、
微かに震えた。

そうだな、と言いつつ、

ロイドは踵を返して夏の終わりの空を仰いだ。

弟は、その黒い背中を見つめていた。

草の茂る稜線にその姿が消えるまで、ずっと。

【ロイド＝オートリンクのエピソード】

…サンクレールの街に夜の帳が落ちる。

夕刻、街の外れの教会で原因不明の爆発が起きた。

市民からの報告ですぐに役人が向かったところ、建物は半壊していた。

しかし怪我人はなく、それどころか人の姿すらなかった。

この教会を管理していた牧師が1人いたはずなのだが、彼は数日前から他の教会に身を寄せていた。

その理由を、彼は黙して語らなかった。

その例の教会の周辺の住民によると、その教会に出入りする余所者の姿を度々見かけていたが、

爆発のあった日、役人がそこを訪れたときには誰もいなくなっていた。

その日の夜、

サンクレールの中でも最も格式の高いであろう宿のひとつを訪れた団体客があった。

その中に1人怪我をした女があり、その女性のための一室、

さらにその中の女性1人（目深に被っていたため顔は不明）のための一室。

その他にも大部屋を2つとるといって、滅多にない景気の良い客である。

用があれば呼ぶからと言いつつ、その客は各々部屋に引きこもっていた。

…その一室。

「…容態は？」

ベッドに横たわる女、

そのベッドの傍らに立つ男に向かって、壮年の後半と見られる女性が訊ねた。

ベッドの傍らの男が女性の方を振り返った。

鉛色の癖毛の、一見して風采のあがない男だったが、口振りは世間慣れた風でしっかりしていた。

「命に別状はありません。

ただ、肩の関節が潰されています。

全治にはかなりの時間がかかると思っています」

「手間をおかけした、

ジェラルディン殿」

言って頭を下げたのは、女性の後ろに控えた中年の男だった。

ベッドに眠る女の父親で、ワヤンという。

娘のアイラを見る目には押さえこんだ痛々しさが窺える。

「……して、オートリンク殿は？」

その名前に、ジェラルディン …… レックスが僅かに目を伏せた。

「部屋で休んでおいでです。」

…… 思っているところがあるよつで………」

「 …… あの女怪のことでござるか」

「………」

アイラに重傷を負わせたのは《シャドウ》と呼ばれる不浄に属すもの。

詳細はワヤン達には分からないが、ただ、元は人間であったものだということは聞いていた。

…… しかし

「 よりにもよって …… 」

“ あれ ” は、オートリンク殿の縁者であったのでござろうか？ 「

「 …… 分かりません。」

あのひとは何も語りませんから………」

レックスは窓の外に視線を向けた。
夜の闇がひどく深い。

不吉な何かを孕んでいるようにさえ見えた。

*

扉をノックする音がした。

くわえていた煙管をはなし、ロイドは琥珀色の隻眼を扉の方向に向ける。

「……………何だ？」

まるで誰が訪れたのか、訊かずとも分かっているような口振りだった。

その声に応えて、扉越しに澄んだ少女の音がした。

「あの……………、歌鳥です。」

少し、いいですか？」

「……………入れ」

その答えに、控えめに開かれた扉の影からどこか不安げな少女が顔を出した。

「……………ごめんなさい、
お邪魔します」

「適当に座れ」

長椅子にふんぞり返ったままの、いつもと変わらぬロイドの様子に、歌鳥は複雑な表情を見せた。

「…………あの」

「何だ」

「…………ヴィヴィちゃんの事なんですけど」

「ああ」

ロイドは懐から刻み煙草を取り出して煙管に詰めた。

「ワヤンの奴が見つけれなかったという事は、かなり丁寧に痕跡を消しながらこの街を出たと見ている。」

元・密偵を名乗るだけはある。

いきなり訳もわからなくなって、いきなり見も知らん街に居たんじや、混乱するのも警戒するのも無理はない。

ただ、今はもうきつかけさえあれば、お前の事もファントム・コードの事も思い出せるはずだ。

そつすりやヴィヴィの方から戻って来るなり、何かしらアクションがある」

「大丈夫でしょうか」

「もちろん、こっちもほつたらかすつもりはねえ。

捜しに行つて、顔を見せる事以上に効果的な“きっかけ”はないかな。

ただ、それはお前の安全を確保した上で、その後の話だ。

何度でも言つが、ファントム・コードの最優先事項はお前を守ることだからな」

歌鳥は僅かに目を伏せた。

何かを憂うように。

しばしの沈黙が流れる。

先に口を開いたのはロイドだった。

「話はそれだけか？」

「…」

歌鳥の迷うような表情に、ロイドは小さく苦笑を洩らした。

「んなわけねえか」

「じめんなさい」

歌鳥は顔を伏せたまま、小さく呟いた。

「べつに謝ってもらうこともない」

「だって私、何も知らないのに」

「何も話してねえんだから、何も知らないのは当然の事だ」

口調こそぶつきらぼうだが、ロイドの言葉の端々には歌鳥に対する
気遣いが感じられた。

それが返って、歌鳥には痛い。

「……誰にだって他人に話したくない事があるはずです。
私だってそうなもの。」

……そして、今日の……あのことは、ロイドさんにとってそん
う種類の事なんじゃないか、って……、私はそう感じたのに。

なのに、どうしても……、気になってしまって、それを隠す自信も
なくて。

モヤモヤしたまま、このままロイドさんと一緒にいる事は出来なく
て……」

歌鳥は顔を上げてロイドを真っ直ぐに見た。

「私、ロイドさんといるとすごく安心します。
ファントム・コードの皆もきつとそう。」

話したくない事なら、そう言ってください。
それなら私は訊きません。」

ただ、ロイドさんの気持ちを探りながら一緒にいる事はしたくない。拒絶さえされずに、ただモヤモヤと気にし続けることは嫌なんです。正直を言えば、歌鳥はむしろ話してもらわない事を望んでいたかもしれない。

自分が他人に苦痛を強いることはしたくない。

ただ、ロイドに対して語った言葉も、間違いなく歌鳥の本音だった。

ロイドの内心を伺いながら一緒にいる事は出来ない。

歌鳥がロイドといて安心出来るのは、ロイドには嘘偽りのないままでいられるから。

それは、ロイドは歌鳥の何を知っても、決して歌鳥を嫌ったり、蔑んだり、拒んだりはしないことを信じさせてくれるからだ。

心を探る必要がないから。

…一服した後、ロイドは琥珀の隻眼を歌鳥に向けた。

そこには、ただ穏やかなだけの表情がある。

「……長い話だが、まあ、他人ごとだと思っただけを楽に聞け」

その言葉に、歌鳥は思わず背筋を伸ばした。

ロイドは煙管を軽くくわえながら、頬杖をついて窓を眺めた。

「……リーヴダリルの西の方に、まあ……そこそこ発展した街があるってな……。」

名前をイルマーテルというんだが……」

……ロイドはオートリンクはイルマーテルの都立図書館管理官の一人息子として生まれた。

父親はいわゆる公務員、暮らしはそれなりに裕福だった。

母はロイドが3歳のときに亡くなったため、父親はよく仕事先の図書館に若い息子を連れて行った。

図書館の隣には学習塾もあり、時折ロイドはそちらにも預けられた。

幼い頃から書物に囲まれていたロイドは、その好奇心旺盛な生来の気質もあり、博識で利発、聡明な少年に育った。

大人達の中にあってもハキハキと物怖じせず口を利き、年下の子供達の面倒もよく見た。

そんなロイドが15歳の時、唯一の肉親である父親が病気で他界する。

だが父親の残した財産のおかげで、ロイドは無事に成人の年まで何となく生活を送ることが出来た。

*

成長したロイドは、幼い頃から出入りしていた学習塾の教師になった。

世話好きな性格と豊富な知識から、子供たちには尊敬され慕われた。充実した生活を送っていたある日、ロイドは学習塾の学長からある話を切り出される。

「イルマーテルから少し離れた小さな村に行ってみないか」

その農村には塾どころか医者もなく、字の読める大人もほとんどいないという話だった。

学問を知らぬ子供は、大人になっても就ける仕事は限られる。

その村に生まれた者は、生まれ育った村から出ることなく大人になり、老人になる。

中には確かにそれを不満に思わない者もいるだろうが、大半は不満を抱いたところでどうにもならない現実に諦めてその村で一生を終えるのだ。

貧しく苦しい生活の中、子供たちは幼い頃から畑に出る。

知識さえあれば悪どい商人に作物を買い叩かれることもなく、生活も楽になるだろう。

学長はぜひぶん前から、一度訪れたことのあるその村のことを気にかけていたらしい。

しかし、その村に行くことを承諾してくれる者はいなかった。

イルマーテルで学問を積んだ者は、大抵役人や都に上って身を立てることを目指している。

そんな辺境の村に行きたがる者はいなかった。

「私が行ければいいのだが、あそこの生活は過酷だ」

学長は足が不自由だった。

老年に至り、身体も丈夫ではない。

「お前は教師としても優秀だし、知識も申し分ない。身体も頑丈だ。

引き受けてはくれんかね」

ロイドは二つ返事で頷いた。

別に慈愛の精神や、学長に対する報恩の意思からではない。

ただ単に彼は博識であるがゆえに、自身の知らないことに興味があった。

農村の現状は話には聞いていたが、実際に目にしたことはない。

直にそれを目にして、それを改善することに興味があった。

生徒達や同僚に惜しまれつつも、ロイドは何も気負うことなく数日で荷物をまとめて出立した。

*

派遣された村で、ロイドはかなり早くそこに馴染んだ。

生来の飾らない気質と世話好きでおおらかな性格が、どこか排他的な村でも受け入れられやすかった様だ。

村から借り受けた小さな家に住み、ロイドは村の畑仕事を手伝いながら、

空いた時間で子供達を集めては文字や算数を教えた。

時には神話や童話を語り聞かせてやった。

ロイドは病気や薬の知識も豊富だったため、彼の家は村人の出入りが絶えなくなった。

その村では大人達も文字や計算を知らなかったため、子供に混じって“授業”を受けに来る大人の姿も少なくなかった。

その中に“彼女”はいた。

*

ロイドの家に最も多く出入りする少年がいた。

名前はアンディといい、利発で好奇心旺盛な少年だった。

アンディはロイドを慕い、最もロイドの“授業”に熱心だった。

少しでも分らないことがあればすぐにロイドに聞きに行き、ロイドの家に入り浸って彼の持つて来た本に読み入った。

そんなアンディをいつも迎えに来るのが“彼女”だった。アンディの姉である。

アンディとは年が離れており、身体が弱く病気がちな母親に代わって幼い頃から弟の世話をしていた女性だった。

物静かだが面倒見が良く、村の子供のほとんどが“彼女”になっていた。

弟のお迎えでロイドの家を出入りしているうちに“彼女”もロイドの“授業”に興味を持ち、

度々アンディと並んでロイドの話の聞いたり、文字を覚えて弟と本を読んだりした。

そうしてロイドの家を出入りしている内、“彼女”はロイドの身の回りに気を遣うようになっていった。

ロイドは男性にしてはマメで、掃除や洗濯など、家の中は自分でよく整えていたが、

畑仕事や、病人や怪我人の世話がある時などはさすがに行き届かなくなる。

そういう時の“彼女”の厚意を、ロイドはありがたく受けた。

ロイドは、控えめだが素直な気性の“彼女”に対して好感を持っていたし、

“彼女”もロイドの人柄や、頼りになるところを尊敬していた。

ロイドがその村に移り住んで1年後、

ロイドは“彼女”に結婚を申し込み、“彼女”はそれを受け入れた。

村人は皆それを祝福したし、1番喜んだのは言うまでもなくアンディだった。

…

「兄さん！、早く早く！」

「おいこら、転ぶぞ、
アンディ！」

その夏の日、イルマーテルの通りを駆ける少年と、それに続いて歩く2人の男女がいた。

初めての都会にはしゃぐアンディを微笑ましく思いつつ、ロイドはその腕を軽く引き寄せた。

「迷子になったら、お前どうしたらいいかわかんねえだろ」

「そうよ、アンディ。
ちゃんと先生の言うことを聞きなさい」

「先生じゃないもん、
兄さんだもん！」

頬をふくらませ、アンディはロイドの隣を歩く姉を上目遣いに見た。

「姉さんだって、いつまで兄さんのこと“先生”なんて呼んでんの？」

ちゃんと名前で呼ぶか、それがもう“アナタ”とかって呼べばいい
じゃん」

弟の言葉に、姉は顔を真っ赤にして、

「べ、別にいいでしょ!？」

呼び方なんて!」

「え〜?」

「いいからお前は前見て歩けよ、
本当に転ぶぞ」

ロイドがアンディの頭を軽く小突く。

アンディはそれに対して、嬉しそうに笑った。

……イルマーテルはロイドが生まれ育った街だ。

だが、ロイドの肉親はこの街にはいない。

ただ、せめて父親の同僚だった図書館の職員や学習塾の人々にくら

いは結婚の報告をするべきだ、ということになり、

ロイドは“彼女”と都会に出た事のないアンディを連れて久々の里帰り、というわけである。

「ああ、緊張する……、
私、なんて挨拶したら」

「別に親つてわけでもねえんだから気負うなよ」

「だって、結婚式には呼ぶ方達なんでしょう？」

「まあな。

けどそんだけだろ。

この先ろくに付き合いがあるとは思えないしな、お前には」

結婚を機に、ロイドはこの街から“彼女”の村に籍を移すつもりでいた。

肉親のいないこの街に“彼女”を連れて戻るより、
“彼女”の家族と暮らす生活を選んだのだ。

ロイドの感覚でいうと、それが当然だった。

「年に1回も会わないぞ、きつと」

「でもでも、やっぱり礼儀は守らないと」

「普通にしてれば大丈夫だっつの」

ロイドのぶっきらぼうな態度の中に滲む苦笑。緊張しきっている“姉”をからかうアンディ。

…このとき、

幸福だった。

本当に。

けれど、ロイドは気付いていなかった。

…すぐ傍らにまでできていたのだ。

《 《は。

…

式の会場に選ばれたのは、イルマーテルと“彼女”の村の、ちょうど中間地点にある小さな教会だった。

イルマーテルに住むロイドの招待客を村に呼ぶには時間も費用もかかる。

村の“彼女”の縁者をイルマーテルに招待するにも、彼らには畑仕事があるため、日帰り出来ない土地に大勢は招けない。

そういう事情で選ばれた場所だった。

夏の終わり、

穏やかな空模様、

…悪夢の日。

その日、教会には祝福の音が溢れていた。

正装した新郎は、代わる代わる掛けられる祝いの言葉と冷やかしの言葉に返事をしながら、祭壇の前で花嫁を待った。

…遅い、と思った。

しばらくして、同じように式場にいた招待客らも怪訝に思い始めた。

招待客がざわつく中、アンディが席を立った。

「見てくる。

何してんのかな、もう」

先に式場に入っていた母親の心配そうな様子に、アンディはおどけた口調でそう言って、

花嫁の控え室にあてがわれていた部屋へと向かった。

…悲鳴が聞こえたのは、そのしばらく後の事だった。

すぐにアンディの声だと悟って、ロイドは真っ先に駆け出して悲鳴の元へと向かった。

そしてロイドは、血の海と化した部屋と、そこに転がる花嫁の残骸

を見たのである。

…

…ロイドの語り口は淡々としており、歌鳥は静かにそれに聞き入っていた。

しかし話が“その出来事”に至ったとき、さすがに歌鳥は動揺を見せ、口元を押さえた。

「……そんな」

ロイドは煙管で煙を吹かしながら、眼帯の上から軽く顔を搔いた。

「……どうして ……、

そんな ……」

歌鳥は驚愕に目を見開き、その目尻に涙を溜めた。

その様子からあえて目を逸らしたロイドは、煙管から灰を器に落としながら口を開いた。

「 ……誰かに殺された。

それは間違いなかった。

当然役人も出て来て、いろいろと調査が始まった。

その段階になって、気になる事があった」

「気になる事……?」

「式に招待したはずなのに、来なかった奴がいた。

そしてそいつは、その日から失踪していた。

名前は

レベツカ「アンダーソン」

歌鳥が息を飲む。

ロイドは淡々と続けた。

「……幼なじみだ」

…

初めて会ったのは、ロイドが12歳の時。

その時レベツカも12歳、

口数が少なく、大人しい少女だった。

ロイドが出入りしていた学塾の生徒で、成績は良かったが、他の生徒とはあまり馴染んでいなかった。

元々は騎士階級の出身だったが、伯父が汚職事件を起こして称号を剥奪されたという。

その事と、その気質から、レベッカは周りの子供達から浮いた存在だった。

そんなレベッカが唯一同年代で親しくしていたのが、ロイドだった。

ロイドはレベッカに対しても、他の同年代に対しても分け隔てなく接していた。

ただ、1人になりがちなレベッカを気に掛けて何かと声を掛けていたから、たぶん同年代の中ではよく話していた方だろう。

だからこそ、ロイドは自分の結婚式に彼女も招待したのだ。

“彼女”とアンディと3人でイルマールに帰った日、ロイドはレベッカとも久しぶりに顔を合わせた。

レベッカは図書館の書記として働いていた。

その職場にはロイドの父親と親交のあった人々もまだ働いていたから、

皆ロイドの訪問を喜び、ロイドの結婚を祝福してくれた。

ロイドは後々に至っても、そのときのレベッカの様子を思い出すことが出来なかった。

元々口数が少なく、感情表現に乏しい女性、
交わした言葉も多くはなかった。

彼女が何を思っていたのか、

何を感じたのか。

…後になって、知った。

*

花嫁の変死後、

ロイドは躍起になってその犯人を捜し始めた。

何故こんな事が起きたのか、

誰がこんな事を起こしたのか、

追求せずにはいらなかったのだ。

役人に混じって調査をする内に、たどり着いたのがレベッカだった。

ロイドは結婚式当日にレベッカの姿が見えない事には気付いていた。

その事について、ロイドは彼女の上司であり父親の元同僚であった招待客に「どうかしたのか」と訊ねもした。

分からない、その内来るだろう、というのがその招待客の答えで、ロイドもそれきり気に掛けなかった。

レベッカの他にも、仕事の都合などで欠席した者もいたから、式当日の多忙に紛れて忘れてしまったのだ。

式の後、あの悪夢の後、

調べている内にロイドはレベッカの失踪を知った。

そして彼女の家を訪れたとき、妙に整えられた部屋と

壁一面と床一面に血糊で描かれた“何か”の図形を見たのである。

…

「調べたところ、それは《白い血の民》に属する呪術の法陣だった。

レベツカは図書館で働いていた。

魔術に関する資料を集めて研究するのは容易い。

実際、部屋からはそういう類の書物も多数見つかっている。

だが、知識だけでは魔術は行使出来ない。

それ専門の師について、数年単位の修業が必要だ。

レベツカは素人だった。

だから、部屋で見つけた法陣には魔術としての効力や意味はなかっただろうと思われた。

ただ、そこに至って初めてレベツカの心の中に“闇”が存在したことが明るみになり、

ひとつの可能性が浮かび上がったんだ」

すなわち、

「……レベツカ…さんが、ロイドさんの奥さんを……殺した。」

ロイドさんの事が、好きだったから」

ぼつり呟いた歌鳥の声に、ロイドは頷くことはしなかった。

だが、否定もしなかった。

「……だが、“あれ”は女1人で出来る所業ではなかった」

花嫁の亡骸は原型を留めてはいなかった。

花嫁が1人になり、アンデイが様子を見に行った、

その間数分、

その間にそれだけの事をするのは人間技ではない。

それが事件直後の役人らの見解だった。

犯人がゴーレムでも所有していれば話は別だが、

そもそもゴーレムを持てるのは正式に諸公階級に仕える軍人など、限られた人物だけだ。

そんな人物に“彼女”が殺される理由はない。

小さな農村で育ち、村からろくに出た事もない娘なのだから。

「調べれば調べるほど、不可解な事件だった。

3ヶ月後、役人は調査から手を引いた。

悪い言い方をすれば、1人の村娘を殺した犯人を追うよりもすべき

事が山ほどあったんだろう。

厳密に言えば、その村はイルマーテルの領地ではなかったしな」

「そんな」

「現実はそのまんまだ」

役人が手を引いた後も、ロイドは犯人を捜し求めた。

単身での調査、手掛かりはない。

あるのは、ひとつの気掛かり。

…レベツカ。

(なぜ姿を消した)

失踪の時期、

部屋に残された呪術の痕。

それらは偶然だろうか。

ロイドはレベツカを友人だと思っていた。

無口で愛想のない女ではあったが、決して心根の悪い娘ではないと。

友人としての絆を、ロイドは信じていた。

…けれど。

(… レベッカ、
お前なのか？)

その疑念を払うことが出来ない。

レベッカが“彼女”を殺した犯人なら、動機は。

レベッカは感情を表に出さない女だった。

そんな彼女が自分に対して恋情を抱いていた可能性を、ロイドは確かに否定は出来ない。

レベッカは何も言わなかったが、それは彼女がロイドに対して友情以外の感情を抱いていなかったという証にはならない。

もしレベッカが“彼女”を殺した犯人ならば、その動機は“嫉妬”だ。

そして、それならばただの村娘であった“彼女”が殺される理由になり得る。

… けれど。

(レベッカが …)

疑念と信頼の狭間でロイドは揺れた。

“彼女”を殺した犯人は必ず見つけ出す。

けれど、それはもしかしたら、ロイドにとって更なる喪失をもたらすかもしれない。

だが。

「見つけ出す。真実を」

ロイドは手掛かりを求め、村を出た。

そして、まずレベッカの行方を捜し始めた。
不本意だが、それしかなかったのだ。

「…迎えに来た。」

ロイド「オートリンク」

そう言って“使者”が現れたのは、ロイドが旅立って1、2年ほど経った頃だった。

「……誰だ、お前」

「…」

《ファントム・コード》「」

ロイドの問いに、相手は短くそう答えた。

その返事に、ロイドは目を丸くし、そしてすぐに唇だけで笑った。

「そうか。」

「…会いたかったぜ」

レベツカを追い、ロイドは其中で《白い血の民》についての研究もしていた。

そしてその名を知った。

《白い血の民》の歴史を徹底的に調べあげれば、その名は幾度か現れる。

《ファントム・コード》

俗世間にはその名を知る者はない。

《白い血の民》の昏き歴史に触れた者にのみ、その名は現れる。

「君が我々との接触を望んでいたことは知っている。

ファントムは君の求める真実を与えるだろう。

ただし、その代償として君には“罪”を背負ってもらおう

「“罪”？」

「運命を改竄する罪だ。

そして、同時に君はその罪に対する“罰”を運命づけられるだろう。

それでも構わないというのならば、我々と共に来るがいい」

そう言った“使者”は、聞くまでもなくロイドの返事を分かっていた節がある。

そして、ロイドは頷いた。

「真実以外に興味はない。」

この身で払えるものならば、どんな代償でも払ってやる。

この身で払えぬものなら、どこから奪ってでも払ってやる。

俺に真実と力を寄越せ」

…そうして、ロイドは《ファントム・コード》の一員になった。

もう20年近く昔のことである

…

【13】黒き益荒男（後書き）

ロイドのエピソードには、まだ続きがあります。

それはこの物語にとても大きく関わるので、まだ語れることはないかな……。

ちなみにロイドの奥さんの名前は話の中に出ませんでした。特にそれは伏線でも何でもなくタイミングがなかっただけです。

決めてた名前はあります。

イリーナです。

レベツカのキャラは、能楽の題材とかにもなってる『道成寺』の清姫をモチーフに作りました。

叶わぬ恋に狂って蛇の化身になった女性ですね。

ロイドとレベツカの話とは趣は違いますが、ロックバンド『陰陽座』の曲の中に『道成寺蛇ノ獄』という曲があって、歌劇のような構成がすごく好きです。

興味のある方、ぜひ。

【14】ロゲクロートの遺臣

その日はじめて足をつけたその土には
確かに誰かが与えた名が在った

絆という根に繋がれて
僕らは幾度も振り返る

名を持つ大地
その上に立つものに
同じ名前を与えた大地

悼みと共に振り返る

名を喪った^{なをこぼした}
亡国の土

【ファントムの記憶】

…混濁していた意識が形を取り戻してゆく。

重い瞼を上げて、クリスは目を覚ました。

眠りから覚めたのだとして、今なぜ自分はしっかりと立っているのか。

不思議に思わなくもなかったが、とりあえずクリスは頭をひとつ振った。

そして辺りを見回す前に、鼻についた“匂い”に顔色を変えた。

（ ……血のにおい…！？）

慌てて顔を上げたクリスの目に映った光景。

「 ……え……？」

クリスが立っていたのは、草木もまばらな丘の上だった。

辺りに人里はなく、立ち枯れた木々の、骨のようなむき出しの幹と枝が目寒々しい。

そしてその全てが、遠くに見える山の稜線すら、なにやら靄がかっている。

……紅の靄に。

まるで薄紅のレンズを通して見たような世界。

頬を撫でる風が、また粘るような生臭い匂いを運んできた。

胸から迫り上がる嫌な感覚に、クリスの記憶が揺さ振られる。

この光景は“ルビー・エーテル”によって潰滅した直後の、セナ砦の様子にあまりによく似ていた。

雲さえ紅く、世界すべてが淡く紅い。

そして何より。

(…何の気配もしない…)

クリスは表情に不安げな色を僅かに滲ませた。

けたたましく早鐘を打つ鼓動で胸が痛い。

(なんだ…、…これ)

クリスは一步を踏み出し、そして思い出したように口を開いて声をあげた。

「…まりー!

…、ろいど!?

きこえないのか!?

いないのか、だれか!?!」

嫌でも頭に浮かぶあの悪夢が、クリスの声を慄^{ふる}わせる。

地平は霞み、空気は淀み、漂う血の匂いは腐臭にすら近い。

……吐き気がする。

風に舞う紅。

濁いた大地を踏みしめて、クリスは乱れた自分の息遣いを意識する。

荒涼とした丘を歩きながら、クリスはふと、マリーの言葉を思い出した。

…

…私の中にあるファントムの記憶が、貴男の中に逆流する可能性が…

…

クリスは首を巡らせて辺りを見回した。

…ルビー・エーテルによって滅んだ世界。

“それ”があるなら、

“これ”が“それ”だ。

予言者ファントムが“予知”したという、
ルビー・エーテルによって滅んだ世界。

歩けど歩けど、人里はおろか、獣の気配も、空を飛ぶ鳥の影もない。
足を止めて、クリスは立ち尽くした。

「……だれもいないのか……？」

滅んだ世界。

何の気配のない地平。

…天にも地にも、自分がたったひとつの命。

クリスは孤独は厭わない。

幼少期をたった1人で生き抜いてきた。

だが、これは孤独の意味が違う。

(なにもない)

冷やかな痛みが魂を擦る。^{さす}

凄絶なほどの孤独。

「……だれもない」

幼い子どものようなあどけない口調で呟いたクリスが、そっと胸を
押さえた。

そのとき、

唐突に世界が“剥がれた”

乾いた膜を引き裂くように景色を裂いて、
また違う光景が現れる。

(……!)

現れたのは、石造りの建物の廊下だった。

*

「……どこだ？」

クリスはキョトンと周囲を見渡した。

鋭い日差しが、白い石の床に手摺りの影を模様のように刻みつける。
淡く白い風が景色を霞ませる。

「……街……」

クリスは手摺りに歩み寄り、下を見下ろした。
今クリスがいる建物は高台に建っているらしい。

下には黄土色の建物が多く建ち並ぶ、
紛れもなく人間の住む“街”が在った。

クリスが立つ回廊に人影はないが、人の気配は感じられた。
話し声や、何かの作業の音が洩れ聞こえてくる。

回廊から街へ視線を滑らして、クリスはさらに街の向こうの地平を
見る。

(白い……)

青い空の下の、白金の地平線。

… 砂漠。

クリスは砂漠を知らない。
ただ不思議そうに、見入られたようにそれを眺めた。

(…… 1111……)

なんだろう。

先ほどまでの痛みが緩やかに癒されてゆく。

クリスはふ、と息を吐く。

人の気配を感じたのは、そのときだった。

クリスは足音のした方に目を向け、こちらに歩いて来る人影を見た。

薄紗を被った女だった。

白い長衣の裾を翻す足取りはどこか凜として、外に向けた視線はどこか優しげだった。

きれいな女性だと思った。

それに、どこか …

(なつかしい…?…)

クリスはぼうつと彼女の顔に見入った。

その彼女が、クリスの方に向かって歩いて来る。

だが、彼女はクリスの視線にも姿にも気が付いていない様に見えた。

クリスは「またか」と思った。

彼女にはクリスの姿が見えていないのだろう。

さっきの、サンクレールの人々のように。

自分はまだ肉体をどこかに置き去りにしたままなのだろうか …

「ユーリン！」

そよぐような女の声がした。
いや、少女の声だ。

その声に、クリスは聞き覚えがある気がした。

回廊を歩いていた女が足を止めて、声のした方を振り返る。

「どっした？」

玲瓏な、かつ暖かみのある声が女の唇から零れた。

クリスは彼女の身体越しに、駆け寄ってくる少女の姿を見た。

そして、

「……まりー？」

と呟いた。

ユーリンと呼ばれた女、

そのユーリンを呼んだ少女は、長く艶やかな黒髪と紅玉の瞳を持ち、

そしてその貌は、つい数分前までクリスの目の前にいた少女に酷似していた。

ただ、マリーエレメントの瞳には白眼がなく、表情に乏しい不気味さがあったが、彼女はごく当たり前の、つぶらな瞳をしていた。

紅い瞳といえば、マリーほど不気味ではなくとも、一般的にはあまり好ましくは見られない。

この世界には様々な色の髪や瞳を持つ人間がいるが、紅い瞳は珍しく、しかし、それはどこか不気味な印象を周囲に与える。

クリスだってそうだ。

クリスの場合は真紅ではなく、紫の混じった紅だが。

しかし、クリスの視線の先にいる少女の瞳は真紅だ。

だが、彼女にはそういった不気味な印象はない。

明るくあどけない表情、見るからに天真爛漫な笑顔が、瞳の色など何の問題にもしない。

年齢はクリスと同じ、あるいは少し年下だろう。

身長は、見たところ歌鳥やエレナよりも低い。

少女は片手に持っていた布地を女に示した。

「これでいい？」

もっと濃い色の糸の方がいいかな」

「どれ」

女が少女の手から布地を受け取る。

どうやら刺繍の話らしい。

「うん、きれいに出来ている。」

色はこのままでいいけれど、少し太さを変えた方がいいかもしれな
いな」

「もらって来ていい？」

ついででもらって来る、と言って女が微笑った。

「本番は何に縫いつけるのかな？」

「え？」

マントとか……、それか鞆とか……、
でも、ハンカチとかの方が簡単かな？」

「ハンカチなんて持つような繊細な奴らではないぞ」

「うーん……」

悪戯ぽく笑った女の声に、少女は腕を組んで空を仰いでみせた。

「次はいつ帰ってくるかなあ……」

「さっ」

「それまでに上手くなればいいよね？」

「手伝おうか？」

「やだ」

少女が上目遣いに女を見上げて舌を出した。

「自分でやるもん」

女が軽く吹き出して笑う。

「そうか、分かった。

じゃあ頑張って練習するんだよ。

分からないところは、いつでも聞きにおいで」

「うん！」

少女が満面の笑みで頷く。

…ふと、少女の視線が留まった。

その視線が、

クリスの顔に。

クリスは軽く目を丸くし、しかと目が合っていることを感じた。

少女もまた、目を丸くしてクリスを見ている。

少女の口が、何かを言葉にしようとか開かれる。

ほぼ同時にクリスの唇が動いた。

…しかし。

「！」

再び景色が剥がれ落ちる。
喉を越えかけた声を置き去りにしたまま、クリスは世界に振り落とされた。

【再会：2】

唐突に、クリスは何かに背中を押されたかのようによめいた。

「！」

突然のこと、
目の前に木の幹があったことに気がついたのは、したたかに鼻をぶつけてから後だった。

「~~~~つ……、」

……いたい……」

軽く視界に星が飛ぶ。

クリスは蹲り、ジンジンと痛む鼻をさすりながら辺りを見回した。

黄昏時だ。

太陽は既にその輪郭の一部を山の稜線に飲み込まれている。

果実に似た色の光に目を細めて、クリスはどさりと先ほど自分がぶつかった木の幹に背中を預けた。

「……………」

ひとつ息を吐く。

なんだかどつと疲れた。

(……………みんなは、ちゃんともどれたのか?……………)

マリーがクリスの頬に触れ、それきり途切れた意識。

次に気がつけば、あの悪夢のような光景。

そして、次はあの他愛もないひとつの光景。

クリスの知らない2人の会話。

あれらは一体何だったのだろうか。

あれらがマリーエレメントの言っていた“マリーの中にあるファントムの記憶”だろうか。

……………ふと、遠くに車輪と蹄の音がした。

馬車だな、と思い、そしてなんとなく複雑な気分になる。

今朝の災難を思い出したからだ。

しかしクリスが視線を向けた先、街道の向こうから闊歩して来る2頭立ての馬車は、

今朝クリスが遭遇した貴人用の馬車とは違い、荷台のようなものに厚布を張った粗末なものだった。

庶民向けの乗り合いの馬車だ、と判断した。

クリスもかなり昔に乗ったことがある。

クリスはそのまま街道脇の木の幹にもたれかかり、ぼうっと近づいて来る馬車を眺めた。

その馬車がクリスの座る場所の前を通りかけたとき、緩やかにその歩みが止まった。

御者が身を乗り出し、クリスの方を窺う。

その男は善良そうな顔をしていた。

「どうした？、ぼうや」

心配そうに問われ、クリスはキョトンとして首を振った。
男が首を傾げてクリスを見る。

あまりに軽装、荷物も見えない。

しかもよくよく見てみれば、顔に生傷があった。
今朝がた受けた傷である。

「おいはぎにでも遭ったのかい？」

クリスは首を傾げ、そして首を振った。

「だいじょうぶ。

「…あ

「？、どうした？」

「…どうした？」

と、クリスが男に問い返した。

どうやら男にはクリスの姿が見えているので、完全に戻って来たと考えていいだろう。

ならばすぐに現在地を把握して、仲間と合流しなければ。
とりあえず向かうべきは当初の目的地、サンクレールだろう。

クリスの問いに、御者の男は心配そうな表情に怪訝の色を浮かべた。

…そのときである。

突然に馬車の荷台の幌から少年が顔を出したのは。

「…クリスッ！……！」

……それはあまりに突然で、クリスは理解に数瞬の間を要した。

自分の名前が呼ばれた。

その声は、とてもとても聞き慣れていた声 ……

「……ケイ… ヴィ…？」

子どもが馬車から飛び出して来る。

その姿、

見覚えがあるどころではない。

数年を同じ屋根の下で過ごしてきた。

駆け寄って来た子どもがクリスに勢いよく抱きついてきた。

「クリス！、クリスだ！

クリスが生きてた！

クリスが生きてたよお！」

涙まじりに声を上げて、ケイヴィンはクリスにすがりつく。

何をどう反応したらよいものか、言葉を失っているクリスの耳に、再び、今度は違う聞き慣れた声が聞こえた。

「マジかよ？」

その台詞の軽薄さとは裏腹に、声音には感嘆とも歓喜ともつかぬ色が濃い。

クリスは顔を上げ、馬車の荷台から顔を出している男を見た。

「ドルサック……！」

「お前、こんな所で何してんだ？」

言いながら、荷台から滑り降りる。

大股で歩み寄って、ドルサックはクリスの頭を掴むような手つきで撫で回した。

「よく生きてたなあ」

鷹揚に笑うドルサックの表情に、クリスも微笑みかけた。

長年共に過ごしたケイヴィンとドルサックでさえ、クリスの笑顔は見たことがない。

だから、初めて見せる表情になるはずだった。

しかし、クリスはふとドルサックの姿を改めて見やり、その表情を強張らせた。

「ドルサック……!？」

……腕……」

「ん？、 ……ああ、」

ドルサックは事もなげに、クリスの頭を撫でた方とは違う腕を上げた。

正確には、腕の残肢を。

包帯の巻かれた腕は肘から下が無かった。

「ちよつとな」

ドルサックは軽く笑った。

クリスは眉をひそめる。

長い付き合いだ、利き腕くらい知っている。

ドルサックは右利きだ。

そして、失われていたのも右腕だった。

「あのときか」

どのときだ、とはドルサックは訊き返さなかった。ただ、どこか苦笑するように頷いた。

「よく……ぶじで」

「そりゃあこっちの台詞だぜ。

あの状況だ、

はつきり言っつて、お前のことは諦めてた」

「おれは2人をさがした。

イリアスが死んだ後、仲間のいる村をぜんぶ回って ……」

「そりゃ悪かったな ……」

言いかけて、ドルサックは「そうだ」と声を零した。

それとほぼ同時、派手に鼻をすする音が、クリスの胸に埋められた
ケイヴィンの顔から聞こえた。

ドルサックが苦笑する。

「おいおい、ケイ。

気持ちはわかるが、やっと会えた仲間の服に鼻水つけてやるなよ」

「だって、だって、俺、俺……、クリスは先生と一緒に……」

あの気丈な少年の泣きじゃくる声に、ようやくクリスは淡く微笑った。

「イリアスは……むりだったけど、

カトリとエレナはぶじだ。

ちゃんと生きてる」

ケイヴィンが弾かれたように顔を上げてクリスを見上げた。

「本当!？」

「マジかよ、おい!」

2人の声に、クリスが頷いた。

そうして事の経緯を話そうとしたとき、

「何事だ?、ドルサック」

馬車の方から、どこか凜とした女の声が出た。

「ああ、悪い。

顔見知りなんだ、こいつ」

気安げなドルサックの声。

その相手の顔に目を向け、クリスはキョトンとした。

荷台の幌から顔を出している女は見たところ20代の終わり、

質素な服に身を包みながら、紅の髪と紫の瞳によって飾られた貌はどこか華やかだ。

だが、それ以前に、クリスは彼女に見覚えがある。

たった数分前に見た顔だ。

ファントムの記憶（推定）の中で、マリーエレメントに似た少女と話していた女。

彼女はクリスとドルサックを見比べ、

「とにかく戻りなさい。

いつまでも馬車を停めては、他の客に迷惑だ」

「それもそうだ。

とりあえず一緒に来いよ、クリス。

話は街に着いてからにしようぜ。

悪いな、すぐ行く。

ユーリン「

ドルサックのその呼び掛けに、クリスはさらに目を丸くした。

「やはり」という思いと、「なぜ」という困惑。

彼女 … ユーリンもまた、クリスの視線に気付いて不思議そうな表情をした。

無遠慮に真っ直ぐ向けられた視線。

しかしその赤紫の瞳には、幼い子どものそれに似た色があまりに強かったため、特に不快には思わなかったらしい。

ユーリンはふわりと笑ってクリスを見返した。

その表情がとても優しげで、同時になぜかとても懐かしい気がした。

*

…その馬車が小さな街に着いたのは、陽も落ちて月が夜空によく映える時刻になってからだった。

4人は古びた小さな宿に入った。

諦めていた再会に、話したい事は山ほどあったが、馬車の中では他の客があったため、クリスもドルサツクも言葉は交わさなかった。

ただ、その間もケイヴィンはクリスの服の裾を掴んで放さなかった。まるで、放せばまたクリスがいなくなると思っているかのように。

部屋に入ってようやくケイヴィンはクリスの裾を放し、縋るような目を向けた。

「ヴィヴィ姉とカトリは？
どこにいるの？」

その問いに、クリスが口を開きかけたとき、ドルサツクが「まあまあ」と間に入ってきた。

「それも気になるし大事なことだが、まずは初対面の奴らを紹介しておこうぜ」

そう言ってドルサツクは、窓際のベッドにローブを脱ぎ捨てたところのユーリンを見やった。

「ユーリン、

こないだ話したろ？
こいつがクリスだ。

イリアスのお気に入りだった」

その言い回しにクリスが首を傾げる。

そのあとけない仕草に、ユーリンは口元に微笑を零した。

「そうか、その子がイリアスの …」

「ユーリンは、イリアスの知りあいなのか」

どことなく拙い口調のクリスに、ユーリンはまた微笑う。

「あ奴とは共に聖地ヴァナディースで育った仲だ、

私はユーリンとウィルバー、

聖地ヴァナディースの修道女をやっていた」

「ヴァナディース……」

クリスが呟く。

耳に蘇る、

イリアスの最期の言葉。

…

… 聖地ヴァナディースで待っている …

…

ユーリンが小さく息を吐く。

どこか切なげな風情があった。

「あ奴が聖地を出た日が今生の別れだった。

聖職者として、神の教えと慈悲を伝え広める使命を帯びて旅立ったはずが、

かくも不似合いな最期を遂げるとはな……」

その声に滲むのは、悲哀のような、悔恨のような、嘲りのような

…

そしてユーリンはクリスの表情に気が付き、苦笑を洩らした。

「すまなんだな、

未だに腹立たしくて仕方がないんだ。

君もまた、あ奴と共に命を張って戦っていた身、

私が君たちの戦いをどうこう言うのは筋が違つとは思つ。

けれど、やはり私はあ奴が祈りを捨てて戦いを選んだことが憤ろしくて仕方がない。

むざむざと死に急ぎおつて ……」

ユーリンのその独白に、クリスは彼女のイリアスに対する想いの深さを感じた。

クリスは無垢なままの足取りで、ベッドに座り込んだユーリンの目の前に近づいた。

「イリアスはおれの背中で死んだ」

その言葉にユーリンは顔を上げて、鮮やかな紫色の瞳を睜った。

ケイヴィンが小さく息を飲み、ドルサツクが眉をひそめる。

「聞いてほしい。」

イリアスがどうやって死んだのか。

そのときどんな気持ちだったのか …、
おれは …… 分かってないかもしれないから。

イリアスのこと ……、ユーリンの方が知ってるなら、おれの知らないイリアスの気持ち、分かるかもしれないから」

無垢、そして真摯な目。

ユーリンはしばし見つめ、そしてゆるりとクリスの頬に手を伸ばした。

「 …… ああ、

聞かせておくれ。」

君の口からなら、何を聞かされても心が乱れることはなさそうだ ……」

抑揚に欠けた、静謐ささえ帯びて静かなクリスの声。

ユーリンは微かに笑んだ。

…地上の遺跡のアーチをくぐり、ライズは常夜の天蓋の下へと降りた。

「は〜あ……、

やっぱ我が家が一番だわ」

暢気な一言を呟いて、そして、どこともしれぬ宙に声を掛ける。

「マリ〜、ただいま〜」

『お帰りなさい、

ライズ』ブロッサム』

偽りの夜空の下に、少女の姿が現れる。

傘のように広がる真紅のスカートがひらりと舞った。

「あれ、早いお出ましじゃん。

もしかして待ってた？」

『ええ。

知らせておく事があるの、

ライズ』ブロッサム。

至急、行方を調べてほしい人物たちがいるのよ』

「人物……“たち”？」

ライズが怪訝そうに首を傾げた。
マリーが頷く。

『1人はエレナ＝ヴィヴィッド。』

ファントム・コードの《誤作動^{エラー}》の際に記憶が狂った可能性が高いわ。

1人でどこかへ消えてしまったらしいの』

「記憶が狂った？
なにそれ」

『《異界》に飛ばされた貴男たちの存在が、記憶から欠落してしまつたのだと思うわ。』

彼女はファントム・コードに来て日が浅い。
貴男たちの存在が欠けたことで、ファントム・コードに関する記憶も丸々消えてしまったのだと思う』

「俺たち、もう戻って来たじゃん。
思い出さないの？」

ライズが夕陽色の髪を掻いた。
マリーがふるふると首を振る。

『きっかけさえあれば思い出すと思うわ、今ならね。』

けれどきっかけがないと思ひ出さない。

その間に何か危険な目に遭わないとも限らない。

彼女はレイン＝ナイトメアとの面識もあるし。

ただ、彼女の場合は行方が知れなくなつて間もないし、ロイド＝オートリンク達のいる街からそう離れていないと思つたら、優先順位は低い』

「ああ……、

そついや、さつき“たち”つつたつげ。

あとは誰？」

『グレン＝レイジングと
キリエ＝ジェラルディン』

「2人？」

ライズが呆れたような表情で眉をひそめた。

『今日判つただけど、数日前から《通信》を拒否している。

どうやら独断で何かをしようとしているみたいね』

「呆れた……」

ライズが自身の庭を目指しながら、小さなため息を吐いた。
宙を泳ぐようにマリーが続く。

『貴男のゴーレムで搜索してほしいの』

「なに、ペナルティか何かやるの？」

『ファントムの力の及ばない所で、マリオンに死なれては困るの』

「へえ」

含みありげにマリーを見上げ、ライズは形の良い指を軽く振った。

花壇の影から、漆黒の蝶がヒラリ舞う。

「その2人、今も行動を共にしてると思う？」

『わからないわ。』

『《通信》を切る直前の情報が何も無いから』

「別行動だよ」

ライズはキツパリと断言する。

「そんで、主犯はキリエの方だな。

間違いなく」

マリーがまるで本物の少女のように不思議そうに首を傾げた。

『なぜ？』

「どんな理由があるんだか知らないけど、グレンがファントム・コードの任務を放棄するとは思えない。」

だいたい、キリエが黙ってグレンに付き合っわけないだろ。
普通は止めるよ。

で、グレンは正論で説得できる男だから、こんな状況にまではならない。

それにグレンはあれで任務第一主義だからね。

ちよつとよそ見するくらいの事はあっても、ファントムやボスに後ろめたい事は普通ならしないよ。

だから主犯はキリエ。

キリエがこうと決めたら、グレンじゃ止められないだろ。

グレンと違って正論は通じないから。

あの娘の場合、ファントム・コードは最優先事項じゃないからねえ」

そう言っつて、ライズは苦笑する。

「グレンはああ見えて融通の利いちゃう奴だし情に弱いから、キリエに付き合っつてやっっちゃってんだろ」

『そう。』

では、キリエ⇨ジェラルディンを先に搜索してもらえるかしら？

2人が別行動をしているということは、グレン⇨レイジングの方は、まだ聖地ヴァナディースで本来の任務についていると考えてもいいの？』

「と、思うよ。」

後で口裏でも合わすつもりなんだろう。

思慮の浅いことだ。

俺ならもっと上手く立ち回れる」

『それは困るわ、

ライズ』ブロッサム』

冗談だよ、と言ってライズは笑った。

「……ただいま、

エツダ」

十字架を掲げた小さな祭壇を壁に置く一室、

闇を剥がして現れた兄の姿に、エツダは白蟻の顔を向けた。

「お帰りなさいませ、

兄様。

お早いお戻りでしたね。

《お母上》には？」

温度のない弟の声に、兄・レインは微笑んだまま緩く首を振った。

「まだ時期ではなかったようです。」

残念ながらね」

その言葉とは裏腹に、レインの表情に晴れやかな色が見える。

もともと常に微笑を浮かべているような男だが、その笑顔の微妙な変化をエツダには見抜ける。

「何か良い事でも？」

ずいぶん機嫌がよろしい様ですが」

「ん？」

レインは窓辺に寄って、白い月の光を背負いながら笑った。

「……クリスタルに逢えました」

瑠璃の瞳が煌めく。

それを聞いて、エツダが僅かに首を傾げた。

「クリスタル……、

《お母上》の所に？」

「いや、

その“玄関先”で。

健やかそうで、何よりでした」

「そうですか」

エツダは壁際の棚の水差しからグラスに水を注いだ。

「それは良かった」

「ええ」

レインは満足げに頷きながら、椅子に腰掛けた。

エツダがそこに丁寧な所作でグラスを差し出した。

それを受け取りながら、レインはエツダを見上げ、

「何か変わりは？」

と訊ねた。

エツダは「何も」と言いかけて、気が付いたように言葉を切った。

「ひとつ」

「何か？」

「サーシャ＝ガーランドが『獅子鷲』と接触しています」

その言葉に、レインはふわりと笑んだ。

「困りましたね」

「向こうは我々と彼女に接点があるとは知る由もないでしょうが…」

…」

レインは困ったように肩をすくめて見せた。

「ちっ……、

何が目的で此処にいらしたのかは存じませんが、あまり長く滞在されて、サーシャと懇意になられては少しばかり都合が悪い。

……ふむ」

何かを思案するように顎に指を当てたレインを見ながら、エツダが再び口を開いた。

「《獅子鷲》と共に《盾乙女》もいたと聞きましたが……」

「ああ、サーシャがそう言っていましたよ。話の内容から察するに、彼女でしょう」

「今日、少し探ってみたのですが、この街に彼女の気配はありませんでした」

「おや」

レインは興味深げにエツダの方を見た。

「それはそれは……、どうなさったのでしょうかねえ。」

たかが仲違いでそこまでの行動に移るとは思えませんし、違うお仕事でも入ったのでしょうかね。

まあ、いない方のことは放っておきましょう。

問題は《獅子鷲》さんとサーシャです」

「あまり表立つては動けませんね。

我らの棲み処が知られては厄介です」

「そうですねえ……、

しかし、再び“巡教”と称して此処を空けるのも心許ない。

…いや、……」

レインがふつと宙に視線を泳がせた。

「たしか彼 ……《獅子鷲》は ……」

「？」

首を傾げたエツダの視線の先、レインがふわりと笑った。

「まあ、大丈夫でしょう」

【グレンが出逢う神父】

… 聖地ヴァナディースの夜が更ける。

砂漠の街に住む人々は、昼間は日差しの下での労働を避け、暑さの和らぐ夕刻を待って営みを始める。

グレンは風避けの布で頭から肩までを包み、日射しの熱の残る渴いた道に足を踏み出した。

薄明かりの空の下、高台にそびえ建つ、夕暮れの赤紫を背負う威容の神殿を見上げる。

聖地ヴァナディースにおいて、信仰の中枢たる大聖堂『ノアトゥーン神殿』

数年前までは聖女シスター・クローディアを頂き、その直接統治を施す領主館としての役割も担っていた。

そのシスター・クローディアが皇位継承問題に引つ張り出され、アイダウッドという土地に所在を移されてからは、

神官長代理としてシスター・ユーリンという人物がノアトゥーン神殿を預かっているらしい、

ということを、グレンは宿の従業員や市場の商人、または巡教にこの土地を訪れた旅人などから話を聞いて知った。

昼間、口約通りに弁当を届けに宿まで来てくれたサーシャからも話を聞くことが出来た。

「シスター・ユーリンですか？」

ええ、知ってます。

勿論、面識とかはないですけど。

年始の折、聖堂にて祭典を執り仕切るお姿を遠目から拝見したくら

いで。

そうですね、

お若い方でした。

それにとてもお綺麗で。

シスター・クローディアの後継者として、幼少の頃から修行をなさっていたとかで。

普段は神殿にいらっしやって、街に下りて来られることはありません。

シスター・クローディアもそうでしたから」

…そうサーシャから話を聞いた。

厳密にはグレンが知りたいのはシスター・ユーリンの情報ではなく、キリエがノアトウーン神殿に入ってゆくを見たという、フラウンケルという皇族の動向である。

クローディアの政敵である、現在皇都イザヴェルを治めるバルカシオン公の末の息子。

バルカシオンはクローディアの叔父に当たるため、フラウンケルはクローディアの従弟になる。

そのフラウンケルが、密行で聖地ヴァナディースに姿を見せた、と言う。

クローディアが不在の今、神殿に入って行った彼を歓待した者はシスター・ユーリンだろう。

グレンはフラウンケルの動向が知りたい。

ファントム・コードは俗世の権力や政権には関与しない。

しかしルビー・エーテルが絡めば話は別である。

先だって起きた、初のルビー・エーテルによる災禍。

セヴァルスタ諸島に起きた内乱を鎮めるといふ名目で使用され、その詳細は隠ぺいされた。

その主導者・セヴァルスタ総督ヴェルンドは、フラウンケルの義父に当たる。

自身の娘をフラウンケルに嫁がせて権力を得たヴェルンドが、バルカシオンから賜ったのがセヴァルスタ諸島だった。

その縁から、ルビー・エーテルとフラウンケルの関与を疑うのは決して見当違いではない。

まして、今グレンが聖地ヴァナディースに滞在しているのは、ファントムがこの土地で“何か”が起きる、と予知したからだ。

その“何か”とフラウンケルが無関係だとは思えなかった。

(せめてまだ神殿の中にいるのかだけでも判ればなあ……)

参拝者に混じって神殿に入るまでは容易い。

しかし、一般の参拝者が立ち入れるのは礼拝堂まで。
当然ながら、神官長らが住まう奥の敷地には踏み込めない。

かつてはシスター・クローディアが住んでいた。
テロ対策のために警備は厳重だ。

グレンはライズと違い、隠密行動には向かない。
性格以上に、能力面の問題で。

警備を掻い潜り、奥にまで忍び込む手段はない。

かと言って、正面からフラウンケルの動向を探ろうというのは無茶な話だ。

シスター・ユーリンも、ただの参拝者ひとりが面会を申し込んで、簡単に目通り出来るわけではない。

(何か伝手でもない限り、無理だよなあ)

内心で呟きながら、グレンは揺れた荷物に固い感触を感じて

「おっと……、
忘れるところだった……」

と呟いた。

雲ひとつない夜空の月と星と張り合うような、街の灯りが零れる路を歩き、グレンは騒めきから少しずつ離れた。

*

…街の外れ、孤児院も兼ねているという教会。

洩れ聞こえてくる子供の声に、ふ、と気を緩めながらグレンはその扉の前に立った。

いきなり開けてもよいものか、まずはノックでもするべきか少し迷っていたところに、

「お客さまですか？」

と言う幼い声が背中から聞こえた。

振り向いた先に、薪の束を抱えた11歳くらいの少年が1人と、その後ろに9歳くらいの女の子がいた。

「ああ……、え、と」

あまり子供に馴染みがない上、自分の風貌が子供向けするものではないとわかっているだけに、グレンは少し態度に迷う。

教会の窓から洩れる弱々しい灯り。

それに照らされたグレンの手元を見、少年が首を傾げてみせた。

「それ……、サーシャちゃんのお弁当箱……」

「あ？、あ、ああ」

「もしかして、グレンてひとですか？」

「ああ……」

「あ、やっぱり。」

「ちょっと待ってください、」

「サーシャちゃん呼んできますね」

「あ……、うん、」

「わ、悪いな……」

やけにハキハキとした少年と、その影からいかにも内気そうにグレンを窺うような素振りの女の子。

丸みのある目元や癖のある髪が似ているから、おそらく兄妹だろう。

少年が扉を開けて中に入って行き、女の子がそれに続く。

1分と待たずに、慌ただしく扉が開けられてエプロンを着けたままのサーシャが顔を出した。

「グレンさん！」

「こんばんは、どうしたんですか？」

「いや、これ」

グレンが差し出した弁当箱を見、サーシャは

「まあ、わざわざ持って来てくださったんですか？」

「明日にでも、私取りに伺いましたのに」

「いや、俺けっこう宿空けるから、行き違いとかになったら悪いと思ってる」

「本当にごめんなさい、わざわざこんな所まで」

いや、と言ったグレンは、少し何うように教会の窓を見た。

サーシャは受け取った弁当箱を手にながら、首を傾げてグレンを見上げた。

「ご用事はまだ？」

「ん？、ああ……」

「ずいぶん大変そうですね……」

勿論グレンはサーシャに自分の“用事”の内容については何も話していないが、

聞かされていないなりに、サーシャはグレンの連日浮かぬ表情を気遣っているようだった。キリエのこともある。

「何か私にお手伝い出来ることがあったら、言ってくださいね」

「ああ……、ありがとう……」

そう言って、ふとグレンは目の前の建物を見上げた。

掲げられた、十字架 …

「 ……サーシャ」

「はい？」

「確か、ここ……、

孤児院つてだけじゃなくて、教会でもあるんだよな」

サーシャは不思議そうに首を傾げながら、頷いた。

「はい。」

と言うか、教会の方が本当はメイン……て言いますが、本来の……」

「管理してんのは」

「神父さまです。」

……それが、何か？」

「 ……」

グレンは考え込むように顎に手を当てた。

……聖職者。

「その、神父さまって、ノアトゥーン神殿に出入りしたことあるかな」

「え？、 ……多分……。」

ヴァナディースで修行と洗礼を受けた方だそうですから。

……それが何か？」

不思議そうに見上げてくるサーシャの表情から、グレンはしばし思索するために目を逸らした。

(……………)

そうして、グレンは意を決したように顔を向けた。

「その神父さまって、今、いるか？」

ちよつと聞きたい事があるんだよ」

*

その小さな教会は、いかにも慎ましやかな質素な内装をしていた。微かに鼻についたのは、祈りのときに焚かれたらしい香の匂いと、食べ物を煮炊きする匂い。

「もしかして、料理中だったか？」

グレンが前を歩くサーシャに話しかけた。サーシャが肩越しに振り返って笑う。

「あとは煮込みだけの段階だから、少しくらい離れても大丈夫です。

仕上げだけなら、さっきの子がやってくれますから」

「ああ……、さっきの」

弱々しい明かりを灯された廊下をサーシャに案内されながらグレンが歩いていると、

一室から小さな男の子が顔を出して、グレンの姿を見てあからさまに不審そうな表情をした。

生意気そうだな、とグレンが思ったとき、サーシャが咎める声を出した。

「こら、エイル。

お客様に会ったらまずはコンニチハでしょ」

その言葉に、子供は不服そうに唇をとがらせ、ボタンと扉を閉めて引っ込んでしまった。

サーシャが小さくため息を吐いた。

「ごめんなさい、グレンさん。

失礼しました」

「いや、別に……」

「もっ……」

ふと、グレンはさっきの子供に思い当たった。

「もしかしてさっきのが、こないだ捜してた弟か？」

「え？ ……あ、はい。
そうです。」

「まだまだへソを曲げてて」

「長えな……」

「私が不満なのかも……」

それはグレンに対して言ったていつより、独り言に近い声音だった。
グレンが怪訝そうに首を傾げる。

「不満？、なにが」

「！、あ……、いえ……」

……ほら、私、言ったでしょう？
私とあの子、本当の姉弟じゃないんです。

…昔、もう1人いたんです。
きょうだい同然だった子が……」

「エイルは私よりも、どちらかと言うと、そのもう1人の方になついていたから。」

「だから、私だけが残ったことが不満なのかもしれないわ……」

その声に混じる悲しみに似た色を感じて、グレンはなに言葉も返せないまま、ただサーシャの話聞いていた。

事情も聞かなかった。

他人が触れるべきではないと感じた。

何より、聞いたところでグレンにはその後どうすればいいのかわからない。

人との会話は苦手なのだ。

話すのも、聞くのも。

幸い、沈黙は長く続かなかった。

目当ての部屋に着いたからだ。

サーシャがその扉を軽くノックする。

「失礼いたします、

神父さま。

お客様がおみえです。

神父さまとお話がしたいとか。

お時間、ございますか？」

すると、中から涼しげな男の声がした。

「構いませんよ、

入りなさい」

…その声に、グレンは目を丸くする。

サーシャが「失礼します」と言って、ドアノブに手を掛けた。

ギィ、と開かれる扉。

小さな質素な部屋が覗き、さらに窓辺の椅子に腰掛けていた男が立ち上がる姿が見えた。

(……………！……………)

グレンはきよとんとして、その男を見た。

彼もまた、そんなグレンの顔を見てしばし眺めるような視線を向けていたが、
すぐにふわりと微笑んだ。

「こんばんは」

穏やかな、聖職者らしい柔らかな声。

呆気にとられたようでさえあるグレンの様子に、サーシャが振り向いて首を傾げた。

「どうかしました？」

「あ、……………いや……………」

グレンがサーシャと男を見比べるようにしながら、一言、

「……………若いな、
……………」
……………と思って「……………」

「？」

「いや、俺、勝手に爺さんみたいな神父さんを想像してたから」
そう言つて、グレンは改めて部屋の奥の男に目を向けた。

…年齢は20代後半〜30代前半だろう。
穏やかな笑みを浮かべた顔は端正で、かつ知性を匂わせる。

背が高く、線は細いがしなやかで健康的な立ち姿に見えた。

それがグレンには意外だったが、巡教の旅に出掛ける事が多い、というサーシャの言葉を思い出して納得した。

確かに、グレンが勝手に想像した中年以上の神父では、そうそう長旅には出られまい。

グレンの言葉に、神父は軽く声を立てて笑った。
感じの良い笑いだった。

「若いと言ってもらえると嬉しいですね。
これでもいい年齢なので。」

…それで？
何のお話でしょうか？
若き友よ

いかにも聖職者らしい口調でその声を掛けられ、グレンは自然と姿勢を正した。

「え、と……」

「ああ、そうだ。」

まずはお互いに名乗り合いましょう、友よ。

私は

クオーツⅡグリムリバーと言う者です」

そう言いながら、クオーツはグレンに対して入室を促す。

グレンはそれに従って部屋に入りながら、

「グレンⅡレイジング」

と答えた。

その答に、クオーツが「おや」と零した。

「確か“グレン”とは、サーシャが話していた親切な方のお名前でしたね。」

そのグレンさん？」

後半はサーシャに対する問いだった。

サーシャは笑って頷く。

クオーツが、ふわりと笑ってグレンに向いた。

「子供たちがお世話になりましたね」

「いや、俺はなにも」

事実である。

「実際に何かなさったのかは問題ではないのですよ。

貴男は困っている者に手を差し伸べた。

それだけでも賛美に値する美德です」

クォーツは微笑んだまま、部屋の長椅子をグレンに示し、サーシャに向かって

「お客様にお茶を淹れて差し上げて」

と言った。

はい、と返事して、サーシャがいそいそと部屋を出て行く。

促されるまま椅子に座ったグレンに向かい合って、クォーツも腰を下ろした。

「…それでお話とは何でしょう？」

「……ええと……」

グレンは言葉に詰まる。

ほとんど思いつきで来てしまった。

まさかいきなり「ノアトウーン神殿に忍び込みたい」なの、

「中にいるかもしれないフラウンケル公子の動向が知りたいので、協力して欲しい」などと言えるわけもない。

話を切り出せずに居心地悪そうなグレンの様子を見、クォーツは首を傾げた。

「……、」

……まさか、サーシャをお嫁にもらいたいとか、そういうお話ではないですよね？」

「違いますっ！……！！！」

弾かれたように否定したグレンの反応を、クォーツはクスクスと笑った。

本気で言った質問ではなかったらしい。

空気を和らげようとしてくれたようだ、とグレンは感じた。

話しやすそうだ。

とつつきやすい雰囲気もある。

(……なんか……、

刺のないライズって感じだな)

少し肩の力が抜けて、グレンは息を吐いた。

頭に浮かんだ馴染みの顔も、ある意味で落ち着かせてくれた。

「あの……、もしも、の話なんすけど」

「？、はい」

「この聖地ヴァナディースには、今シスター・クローディアは不在じゃないスか？」

「ええ、今はアイダウッドにおわしますからね」

「て、事はその……、
政敵のバルカシオン派の誰かが此処に手を出してくるって事は……」

クオーツが首を傾げる。

グレンは慌てて言い添えた。

「も、もしもの話っスよ」

「そうですね……」

クオーツはその蒼い視線を宙に泳がせた。

質問に対して、真摯に答えようとしている。

「手を出してくる、という表現がどのような事象を差すのかはわかりませんが、

戦になる、もしくは攻め込まれる、という事態にはならないでしょう。

この聖地には、領土としての価値はありません。
政略的価値もありません。

信仰としての意味があるのみです。

ゆえに、前皇帝陛下はこの地にシスター・クローディアを任されたのです」

押しつけた、の間違いだろうと思ったが、グレンは口を挟まなかった。

クオーツは続ける。

「つい先年 …、
シスター・クローディアがアイダウッドに移られる以前は、検問もかなり神経質になっていた記憶はありますがね。

バルカシオン公の息のかかった、聖職者を装った刺客がありはしな
いかと、身分確認はかなり厳しかった。

私も何度も身分証や荷物を検められました」

そう言つてクオーツが苦笑する。

「はあ……」

「ところで、そんな事を気になさるなんて …、
もしかすると、グレンさんはバルカシオン公の派閥の土地から逃げて来られた、とか……？」

「え！？、あ、いや別にそんなじゃな …」

否定しかけ、グレンははたと言葉を途切れさせた。

(……………そういうことにしといた方がいいのか?)

その様子に、クォーツが

「……………まあ、人には色々と事情があるでしょうから……………、
詮索はいたしません」

と言って笑った。

そのときノックの音がして、トレイに茶器を載せたサーシャが入ってきた。

その少女に礼を言つて、クォーツは

「まだお話がありがたいのようですから、君たちは先に食事にしていなさい」

その言葉に、グレンが慌てて腰を浮かした。

「あ、いや。

ならもう俺はお暇して ……」

「いえ、構いません。

実はまた旅に出る予定があるものですから。

日にちまでは決めていませんが、機会を逃せばもうお目にかかる事もなくなるかもしれませんから」

そう言われて、グレンは少し迷いながらゆっくり腰を下ろした。

サーシャが退室していくと、クオーツは茶器に唇をつけた。それに向かい合って、グレンがポツリと呟く。

「やっぱり此処は勢力争いからは除外されるもんなあ……」

（マジで何しに来たんだ？
フラウンケル公子。

つか本当に来てんのか？）

グレンが困ったように頭を掻く様子を見て、クオーツがふっと顔を上げた。

「……勢力争い、ですか？」

独り言を聞き留められて、グレンは少し慌てた。

「あ、いやいやこつちの話……」

「……土地自体はそうですね……、

けれど……」

クオーツが何やら言いあぐねるように口元に指を触れている。グレンは首を傾げた。

「……何か？」

「……先ほど貴男が仰った、“手を出してくる”という表現 ……。

ヴァナディースに、ではないのなら、思い当たる節があります」

グレンは腰を浮かせて身を乗り出した。

「それ、どういう ……」

「バルカシオン公の政敵はシスター・クローディア……」

言わずと知れた事実を呟いたクオーツが、僅かに視線を泳がせた。

「噂程度ですが、まことしやかに囁かれた話です」

「噂？」

「ええ」

クオーツがカタン、と茶器を卓に置いた。

「シスター・クローディアには御子がおられた。

その御子は聖地ヴァナディースに匿われているのだ、と ……」

【ドルサックの秘密】

「 ……そうか」

言って、ユーリンはひとつ息を吐いた。
座ったままの姿勢で、白い指の手を胸元に当てる。

育て親の最期を語り終えたクリスは、真っ直ぐとユーリンを見下ろしたまま。

そんなクリスの肩を柔く叩き、ドルサツクが傍に寄せた椅子を示した。

… 労るような表情で。

ユーリンの隣のベッドに腰掛けていたケイヴィンはうつむいたまま、伏せた顔から微かにすすり泣きが洩れた。

「……イリアスは、穏やかな心で逝ったのだな」

頬にかかった、緩やかに波打つ紅色の髪が揺れる。

「……あ奴が聖地を出立するとき、
私にこう言った」

ユーリンは視線を滑らせて窓の外の夕闇を見た。

「いつ戻れるか、

あるいは生きて聖地に戻れるかはわからない。

もしも旅の途中で自分が倒れたら、そのときはラリーを訃音の代わりにお前に寄越す …、と」

「……ラリー」

クリスが呟く。

ラリー。

イリアスのゴーレム。

三つ目の鷹。

ラリーと共に故郷に帰る。

最期にイリアスはそう言っていた。

…主を失ったゴーレムは処分せねばならない。

法律でも何でもない、

それは暗黙の掟だ。

主を失くしたゴーレムは理性も失い、人に害をなす。

主の死に様が悲惨であるほど、主の無念が強いほど、その傾向は顕著だった。

(そのときが来たら、俺はお前にラリーを滅してもらいたい)

出立の日、イリアスはユーリンにそう言った。

(たとえどのような最期を迎えようとも、俺は必ずお前の元に戻ってくる。)

どんな姿になろうとも、ラリーの姿を借りてでも。

肉体が死した後に遺るゴーレムは、俺がこの世に生きた最期の証だ。

ならば俺はそれを、お前の手で終わりにしてもらいたい。

他の誰でもない、
お前の手でだ。

…ユーリン)

真っ直ぐに見合った蒼い瞳を、ユーリンは思い出す。

送り出した背中、
白く輝く砂の地平に霞んでゆく背中を思い出す。

あのと看、それが今生の別れになることを、ユーリンは心の何処かで悟っていた気がする。

別れの日、静かな心の奥底で凍りついていた、痛み。

そしてやはり“そのとき”は来てしまった。

「先月か、それより少し前か …、

ラリーが砂漠を越えて私の元にたどり着いた……」

弱りきつた翼で、遥かな旅路を経て。

「主を失ったゴーレムが、それほどの道のりを真っ直ぐに辿ってきた……」。

それだけで、イリアスがどれほど穏やかな気持ちで眠りについたか

わかる。

最期の最期までラリーは理性を失わぬまま、私の手で消えるまで、とても静かな目をしていた。

……本望だったのだろう」

涙はあの日に枯れたと思っていた。

憤りに慄^{ふる}えるだけだった胸に、再び熱いものが迫り上がる。

頬を伝った、一筋。

嗚咽は零れなかった。

ただ静かに、涙だけが溢れて流れた。

その頬に触れる指。

伏せていた紫の瞳を上げて向けた先、

無垢そのものの表情でユーリンの顔を覗くクリスの顔があった。

子ども染みだ慰めの手は、ユーリンの頬に笑みを刻ませた。

自分の頬に触れたクリスの手をそっと包み、ユーリンはそのままその手でクリスの頬に触れた。

潤んだ視界の真ん中で、ただ無表情に見つめてくる少年。

胸に満ちる、愛しさに似たもの。

彼が育てたという、少年。

…彼が生きた証。

その幼い優しさが、ひどく愛しい。

「……よく顔を見せて」

優しく静かにそう言われ、クリスは緩やかにユーリンの手に引き寄せられるままに、その目の前に膝をついた。

慈しむように見つめられて、クリスは少し首を傾げた。

その様がまた無邪気であどけない。

ユーリンが目を細めて、クリスの髪を撫でた。

その感触。

その視線。

頭の中で霞んで消えた、
ひとりの面影。

「…ありがとう、」

クリスタル」

「？」

「イリアスのこと」

暖かな笑みと口調。

クリスはキョトンとした表情を見せたが、少しの間を置いて頷いた。

……そんな2人の様子を、ドルサックはどこか微笑ましく眺めていた。

その視線に気付いたクリスが、ふと首を傾げた。

「……どうしてドルサックはユーリンと一緒になんだ？」

ユーリンはヴァナディースに居たんだらう？」

「お、もっともな疑問。

お前らしくねーな」

茶化するようなドルサックの口調に、ユーリンがたしなめるような声を出した。

「きちんと答えてあげなさい」

「へいへい。

そーゆーとこ、やっぱりイリアスに似てるぜ、お前」

眉をひそめるユーリンに向かって軽く手のひらを振って、

ドルサックは先ほどクリスを座らせた椅子に腰を下ろした。

「……実はだな。

俺にはイリアスにも話してない秘密があった」

「……ひみつ？」

ユーリンの膝元で床に座ったまま、クリスは首を傾げてドルサックを見上げた。

不敵にさえ見える表情で笑ったドルサックが、ふてぶてしく足を組む。

「さて……。

何から話したもんかな……。

あんまり1からだど、お前混乱しそうだから……。

そうだな、

まずは俺とケイがあの夜、どうやってセナ砦から逃げ延びたのか、から話すか」

それはクリスも気になっていたので、素直に頷いた。

ユーリンがクリスの肩を軽く叩き、床の上から立ち上がらせて自身の隣に座らせた。

ケイヴィンが、なんとなくといった様子で、さらにその隣、クリスの横に移動した。

壁のランプの灯りが揺らめく。

「あの夜 ……、
すげえ地震があつたろ。

あのおとき俺とケイヴィンは砦の中の階段にいた。

中庭から露台にいたヴィヴィ達の様子がおかしい事に気付いて、そこに駆けつけるつもりだったんだ。

そしたらあの地震だ。

まあ、天井やら壁やらの瓦礫が降ってきた事はまだマシだった。

地震が収まってすぐだ。

俺の手が崩れてきたんだ」

びくり、とクリスが肩を震わせた。

それは《ルビー・エーテル》の毒に冒されたものの症状だ。

クリスの動揺を、ドルサツクは少し浅く解釈した。

「…………で、だ。

最初はそれが指先だけだったんだが、みるみる内に掌にまで広がってくるじゃねえか。

こりやマズいってんで、まあ…………、

こういうワケだ」

そう言つて、ドルサツクは肘から先のない腕を軽く上げた。

クリスの表情が微かに歪んだ。

痛ましく。

そんなクリスに向かって、ドルサツクはへらへらと笑った。

「幸いそれで何とか、その現象は止まった。」

だが、メチャクチャ痛えし血はドカドカ出て止まんねえしで、ケイを抱えて階段を降りたところで気を失っちまったんだな。

ついでに言うと、地震のときに降ってきた瓦礫で背中の骨にヒビ入ってたから、いわゆる満身創痍だったワケだ」

「それでよく生きて……」

戸惑うクリスの隣で、ケイヴィンが声をあげた。

「ドルのゴーレムが、助けてくれたんだ」

その言葉に、クリスは目を丸くしてケイヴィンとドルサツクを交互に見た。

ドルサツクとは長い付き合いだが、彼がゴーレムを所有していたなど初耳だった。

ドルサツクが左手の人差し指を立てて自身の口元に当てた。

「それが“秘密その1”ってワケだ」

そう言って、ドルサツクは指を鳴らす。

それに呼ばれたかのように、床からスルリと灰銀の毛並みの狼が現れた。

狼といつても、大きさは虎や豹なみに大きい。
それがドルサツクの足下に寄り添い、うずくまった。

「ラケシスだ」

クリスは無言で、ドルサツクの足下の獣を見た。

たくましい巨躯、見るからに強靱な。
纏う雰囲気でもわかる。

「……強そうだな」

「まあな」

「……どうして」

「ずっと黙ってたのか」ってか？」

クリスは頷く。

ゴーレムは一頭でもいれば大きな戦力になる。

セヴァルスタで結成された反乱軍の殆どは、戦いに慣れぬ農民出身の男たちだった。

同じ軍に、これほど立派なゴーレムが一頭でもいれば、さぞかし頼もしかったろうに。

クリスでもそう思う。

口には出さなくとも、それは表情に表れた。

それを横目に見ながら、脛でラケシスの首筋を撫で、ドルサックが左腕で頬杖をついた。

「ゴーレムってのは、普通の奴は持てねえんだ。

金もかかる、

国の許可も要る。

俺はただの傭兵として在^いなけりやいけなかつたんだ。

ただの傭兵でゴーレム持つてる奴なんかそうそういねえから、黙ってた」

クリスの表情はまだ釈然としていない。

ドルサックが苦笑した。

「俺は素性を詮索されなくなかつたんだ。

ただの傭兵として、ただの偶然としてイリアスに近づきたかった。

アイツを守るためにな」

「……?……」

「俺はイリアスを守るためにセヴァルスタに渡った」

普段のどこか軽薄な笑みに、淋しさとも自嘲ともつかぬ色が滲む。

「結局、その“使命”は全う出来なかつた……」

「……シメイ」

それは ……

「お前は知らねえだろうなあ……、俺もガキだった頃だから……」

「？」

「聖地ヴァナディースの砂漠を越えてさらに東に行くと、

旧国境地帯と呼ばれる土地になる。

その向こうにあった国の名前が、

……《ログクロート》

俺の祖国だ」

…

明らかにピンときていないクリスの表情に、ドルサツクは苦笑した。

「まあお前は、国がどうかはよくわかんねえつつってたもんな。

俺もぶつちやけ、祖国つつつても大した思い入れもねえ。

なんせ国が滅んだ時、俺はまだ4、5歳くらいだったからよ。

ただまあ、親父がな……」

「お父う？」

「“おとう”？」

なんか可愛い呼び方するな、お前。

まあいいや、

その、俺の親父な、

ログクロートの軍人だったんだよ。

くたばって20年になるけどな。

その親父が死ぬとき、言ったんだな。

頼む、って」

クリスは首を傾げた。

「……イリアスを？」

「イリアスと、」

言って、ドルサックはクリスの隣を示した。

「ユーリンを」

「ユーリン？」

クリスはさらに首を傾げ、視線をドルサックから隣に座るユーリンに移した。

ユーリンはせつなげに、目を伏せた。

「 ……私とイリアスは……」

膝の上で組んだ指に力がこもる。
微かに震える。

「私とイリアスのどちらかが、
ログクロート皇家の血を引いているらしい」

……未だにクリスはピンときていない。

ユーリンはそんなクリスに、ふわりと笑んだ。
とても切なそうに。

「 ……つまりな、
私とイリアスのどちらかが、
かつてログクロートの皇太子妃であらせられた、
シスター・クローディアの御子だと言うのだ」

【イリアスとユーリン】

… 砂漠の街に夜の帳が下り、幾つもの密やかな営みの息吹きが、
くすんだ灯りに閉じ込められる。

街の外れの小さな教会、
クオーツの部屋に夕食を運んできたサーシャが首を傾けて訊ねた。

「グレンさんとはどんなお話を？」

クオーツとの話を終えたら、グレンは挨拶もそこそこに教会を後にした。

何の話をしていたのかを、サーシャは聞かされていない。

クオーツは和かな笑みを零した。

「相談者のプライバシーに関わりますから、お話し出来ません」

聞きようによつては冷たい言葉だが、クオーツの口から出ると刺も嫌みも感じない。

サーシャは「あ、そっか」と呟いて困り顔で笑った。

「なんだか少し慌てた様子に見えたから、……ちょっと気になって」

クオーツは食器を手に取りながら、少しうつむきながら部屋に立つサーシャを眺めた。

「気になりますか」

「……え？、……ええ」

「そっ」

クオーツはふわりと笑んで、サーシャの姿を眺めた。

サーシャが首を傾げたとき、開け放してあった戸口に白い人影が現

れた。

「あ、エツダさん。

どちらにいらしてたんですか？

捜したんですよ、

ご飯、まだでしょ？」

サーシャが身を翻して部屋を出て行くことするのを、エツダが静かな声で引き止めた。

「どうかお気遣いなく」

「いいんですよ、

すぐですもの。」

こちらにお持ちしますね、

よろしいですよね？

神父さま」

「ええ」

にっこりと笑って、クォーツが頷く。

エツダが、静けさのみを湛えた瞳で部屋の中に視線を向けた。

「失礼します、

…神父さま」

そう言って、部屋に入る。

白い肌と白い髪が部屋の灯りに照らされて、鮮やかなほどに浮かび上がる。

廊下を早足に駆けてゆくサーシャの足音を聞きながら、クォーツがふふと笑みを零した。

それに気付き、エツダが首を傾げる。

「……どうかなさいましたか？、兄様」

…呼び掛けられた男の、碧を帯びた銀の髪が揺れる。

「……奇妙な縁だと思ひましてね」

「……《獅子鷲》と彼女ですか？」

頷いたクォーツ……否、

レインが視線を廊下に向ける。

「落ち着いた話を面と向かってしたのは、今日が初めてでしたからね。」

どのようなひととなりをしているのかは存じ上げませんでした」

「……それで？」

エツダはレインの向かい、つい先ほどまでグレンが座っていた長椅子に腰を下ろした。

レインがくすりと笑う。

「良い青年でしたよ。
物慣れぬ風情がとても微笑ましかった。

ああいう若者とは、もっと違う形で出会いたかったですね」

「出会ったのではないですか？」

無感情の蒼い瞳を向けられて、レインは肩をすくめてみせた。

そうして、細めた目を窓の外に向ける。

「次にお目にかかる時は、“レイン”ですよ」

エツダがわずかに首を傾げる。

「《修正》がすでに済んでいても、ですか？」

「彼にとっては“レイン”としての私の方が記憶の中で深く濃い。

今日は、まさかここで私に会うとは思っていませんでしたからこそ、

《修正》が彼の中にも働いたようですがね。

他の土地で顔を合わせた場合は、おそらく“レイン”としての私の方が先に浮かぶ …

もうここで彼に会う機会はないでしょうから、あれが“クォーツ”
と彼の、最初で最後の会話です」

言って、レインが食器を置いて立ち上がる。
それを見上げて、エツダが

「 ……では」

と静かに口を開いた。

レインが頷く。

「彼はじきに神殿で起きた変事にたどり着き、彼女の行方を追って
聖地を出立するでしょう。」

そう仕向けておきました。

その後、我々も次に駒を進めるとしましょうか」

「 ……かしこまりました」

頷いたエツダは、しかし何かを問うような視線を兄に送った。

レインが窓から差し込む月明かりを背にしながら、笑った。

「 運命はその形を保とうとしている ”

……か ……」

独白は音楽的な響きさえ伴って、レインの唇から流れ落ちる。

レインは窓を開けた。

涼やかな風が通り、レインの、エツダの髪を揺らして頬を撫でた。

「 ……大丈夫 ……」

呟いた声は、その風に溶けて消えた。

「くろーでいあ」

…拙い口調で、クリスが復唱する。

…聞き覚えがある。

聞き慣れた声で、親しみと温もりに満ちた口調で。

「……イリアスが、たまに話をしてた。

この国のほんとうの“おう”になるひとだ、って」

その言葉に、ユーリンが複雑そうな表情を浮かべる。

「奴は私以上にシスター・クローディアを尊敬していたからな……、

この話を聞いて、さらに心酔したようにも見えた」

“この話”というのは ……

「イリアスが、ユーリンが……」

「どちらかが、シスター・クローディアの御子だ。

リーヴダリル王家、
そしてログクロート王家の2つの血を引いている」

ユーリンはふ、と小さく溜め息を吐いた。

「
… 30年近く前、

ログクロート王国は、先代皇帝ヘルヴァルド5世の軍勢に攻め込まれて、滅亡した。

その時の総司令官が、あのバルカシオンだ。

… 当時は大將軍筆頭の地位にあつた。

シスター・クローディアはその時すでにログクロートの皇太子妃として、ログクロートの皇族に名を連ねておいでだったが、

リーヴダリル軍の侵攻の折、和平交渉の使者として、バルカシオンの陣営を訪ねている。

その際にシスター・クローディアは身柄を拘束され、その間にログクロートの皇都は攻め落とされた。

それからシスター・クローディアの身柄がリーヴダリルの皇都イザヴェルに移されるまで、

ログクロート王室からの離籍などといった手続きがあつたために、1年と少しの“軟禁”期間があつたらしい。

元々はリーヴダリルの皇女だったとはいえ、その時点ではログクロー

ートの、つまり敵国の皇族だからね。

…そして、その軟禁の期間に、シスター・クローディアは御出産あそばされた、…らしい」

ユーリンが、ちらとドルサックの方を見やる。

視線を向けられた男は、軽薄そうな身振りで肩をすくめた。

「らしい」な。

俺も当時の事は直接は知らねえ。

だが、シスター・クローディアの出産は事実らしい。記録としては何ひとつ残っちゃいねえがな。

もしそれが明るみに出れば、その子どもは亡国の皇族として、ログクロートの遺民たちを刺激する。

ゆえに、シスター・クローディアはその御子を匿った …、

当時“軟禁”されていた、聖地ヴァナディースの修道院にな」

ユーリンが頷く。

「…その当時、その修道院には身寄りのない、産まれたばかりの子どもが数人保護されていた。

私とイリアスはその中の1人として、ただの孤児として育ったのだ。

しかし、数年後、聖地ヴァナディースにシスター・クローディアがお移りになり、

修道見習いだった私たちにノアトウーン神殿務めの話が舞い込んだ。
否やはなかった。

第一、断れるような立場でもなかったしね。

そうして私とイリアスと、他に2人ほどが同じようにノアトウーン
神殿に修業に入った。

我々は聖女シスター・クローディアの身の回りのお世話も仰せつ
かった。

そうして……、1年と少し経った頃か、

私とイリアスはシスター・クローディアに呼び出されて、先ほどの
話を聞かされた……。

即ち、私とイリアスのどちらかが、シスター・クローディアの御子
である、と」

「どうして“どちらか”なんだ？」

クリスが首を傾げる。

「母親なら、どちらがそうかわかるだろう。

どちらも男だというわけでもないのに」

幼げな口調の問いかけに、ユーリンはどこか苦笑に似た表情を浮か
べた。

「そうだな、
私たちもそう思った。
だから聞いたよ。」

それによると、シスター・クローディアはかなりの難産だったらしく、出産の際には生死の境をさまようような重態に陥ったらしい。

産まれる御子はすぐにその身を修道院に匿うと、出産の前から決まっていたから、

その御子は一度もシスター・クローディアの腕に抱かれることなく、御母堂から引き離された、と。

出産のときの重態からシスター・クローディアが快復された時には、すでに御子は修道院に移されていた。

シスター・クローディアの出産はごく一部の近臣しか知らぬこと、

さらには出産に立ち会ったのは産婆を努めた侍女がただ1人。

その侍女が産まれた御子を修道院にお連れしたため、つまりは御子の性別を知るはその侍女ひとりだけだった」

「俺の叔母だ」

軽い調子で話に入ったのは、ドルサツクの声である。

「え」と声を零したクリスを黙然し、他人事のようにドルサツクは続ける。

「あんまり顔合わせた記憶はなーけどな。

けどまあ、そのシスター・クローディアの子どもを取り上げたのは俺の叔母で、

修道院に隠したのも俺の叔母ちゃんだ。

子どもの性別を知っているのはその叔母ちゃん1人だったが、

叔母は、子の性別は誰にも伝えず、ただその子どもの“しるし”だけを書いて残して死んだ。

…コトが起きた時に、自分からクローディアの子の事が洩れぬよう、自ら命を絶ったんだ」

ドルサツクのその台詞に、クリスは眉をひそめた。

俗世の外で育ち、国や忠義などとはまったく無縁…というか、それそのものの存在すら知らなかったクリスには理解出来ない経緯だ。

ドルサツクはその困惑を承知で、軽く笑んだ。

「そういう人種もいるんだ。

イリアスだって似たようなモンだったろ、他人の為に命を張るって点では」

「……………ん」

「お、懐かしい返事」

ドルサックが吹き出して笑った。

ユーリンがそれをたしなめつつ、しかし表情はどこか柔らかい。

…そうしてユーリンはドルサックから隣に座る少年に目を向けた。

「クリスタル、君はイリアスの背中を見たことがあるか？」

唐突に問われ、クリスはキョトンとして首を傾げた。

「せなか」

「背中というか、正確には腰だ。」

この……、

……見た方が早いな」

そう言つてユーリンはクリスに背を向けて、短衣の裾を捲り上げた。

細くくびれた腰、背骨の右側に、皮膚が引きつれたような赤痣がひとつ。

それはまるで火箸か何かを当てた火傷に似ていて、十字を刻まれていた。

年少のケイヴィンですら遠慮してあまり目を向けないところを、クリスはまじまじとその痣を見る。

「……………」

クリスは首を傾げたまま、記憶の中から今日にしているものと同じものを探している。

「……見たこと……ある、……気がする」

「そう」

そう言って、ユーリンは服の裾を下ろして整えた。
ドルサックが複雑そうな表情で、

「俺も同席してんのに若い娘が肌だすなよ」

「もう30も目前だ。」

その割には見苦しいものでもなかったろう」

「……さんじゅう……」

クリスが呟く。

「イリアスと、同じ?」

「先ほどそう言ったろう」

「……わかく見える」

「あら嬉しい」

ユーリンがころりと笑う。

その様子に、ドルサックも軽く笑った。

「お前もそいつが気に入ったみてえだな。同じメシ食って育つと好みも似るのか」

「茶化すな、ドルサツク」

ユーリンが眉をひそめてドルサツクを睨む。ドルサツクが軽く肩をすくめた。

「……で、つまりその痣が“シスター・クローディアの子ども”の“しるし”なわけだ。

それと同じ痣がイリアスにもあった。

多分、どっちは叔母ちゃんが仕込んだダミーだ」

「なんで？」

クリスが首を傾げた。

即座に出た質問に、ドルサツクは苦笑する。

「だから言つたろ？」

シスター・クローディアの子どもの存在が明るみになると、ログクロートの遺民を刺激する。

復興を望む強硬派とかが動き出せば、その子どもを担ぎ上げて、テロも起きかねない。

だから、たとえその存在が明るみになっても、それが誰なのか判ら

なければ …

つってもまあ、偽物とかでっち上げられちまう可能性もあるんだが、それでも本物が誰なのか判らなければ、とりあえずログクローフト復興を望まない勢力が本物に危害を加える確率は低くなる。

そういうことだ」

「……」

クリスは釈然としない表情を浮かべた。

「……でもそれだと、本物のほうはいいかもしれないけど、

本物じゃないほうは、ないはずだった危険をせおうことになる」

「……おう」

ドルサツクは少し意外そうに頷いた。

正直、彼はクリスにそこまでのことに思い至る思考はないと思っていたからだ。

侮っているのとは少し違う。

ドルサツクはクリスの無垢をよく知っている。

だから、俗世の感覚を必要とする思考回路には欠けていると思っていた。

それは実際にそうなのだが、それでも今のクリスは、明らかに数ヶ

月前のクリスとは違う。

「……なんか、少し変わったな。
お前」

「？」

「……まあいいや、
それは後で聞く。」

先に、なんで俺達とユーリンが一緒にいるのか、だったな」

そうだ、元々はその話の為の前振りだったのだ。
クリスは頷いた。

ドルサツクの表情に、僅かに苦いものがよぎる。

*

「……あの日、
セナが壊滅した後、

なんとか混乱と闇夜に紛れて、ラケシスが俺とケイを連れて逃げ延
びることが出来た。

ただ、言い訳みたいになるが、その時は俺は傷のせいで意識がなく
て、動ける状況になかった。

お前やイリアスの消息を調べるところまで手が回らなかったんだ。

これは謝っておく。
悪かった」

頭を下げるドルサックに、クリスはふるふると首を振った。

それに頷いて、ドルサックはケイヴィンと視線を交わした。

応えるように、ケイヴィンがクリスを見上げて口を開く。

「ドルの傷はホントに酷くて、命に関わるんじゃないかってくらい酷かった。」

最初は山の中の洞窟に身を潜めて、先に目を覚ました俺が手当てしてただけど、全然よくならなくて……

そんなのが2日くらい続いた頃に、ラケシスがドルサックの仲間を連れてきてくれたんだ」

「なかま……？」

クリスの疑問符にドルサックが答える。

「俺の死んだ親父の仲間……、つまりログクロートの遺臣仲間だ。」

セヴァルスタで起きた内乱やイリアスの動向についてコッソリ連絡をとってた。

それで、なんかセナ砦に軍が向けられる前にその情報を掴んで、セヴァルスタに渡ってきてたらしい。

結局それには間に合わなかったんだけどな。

ラケシスはその仲間の気配を覚えていたから、すぐに探し当てて俺らの所に連れて来た。

で、その仲間の手当ても加わって、俺はようやく目を覚ましたってワケだ。

イリアスの死は、その仲間から聞いた。

…そこで、俺は俺の役目を果たせなかったことを知ったんだ。

けどイリアスが死んだことで、俺達はユーリンにも危険が迫っている可能性に思い至った。

セナ砦に起きた“あの惨事”は尋常じゃねえ。

ただの田舎の内乱ひとつを鎮めるために、あんな常識はずれな“何か”が使われるなんて、何か臭う…

俺達はそう思った。

セヴァルスタ総督・ヴェルンドはバルカシオンの派閥に属している。

もしかしたら、政敵であるシスター・クローディアに子どもがあったことが知られ、

その候補であるイリアスを殺すために、あんな手段が取られたんじゃないか……ってな。

だとしたら、同じシスター・クローディアの子ども候補であるユーリンも命を狙われるかもしれない……、

そう思っ、俺はユーリンの居る聖地ヴァナディースに向かった。

ケイも一緒なのは、まあ成り行きだ。

置いていくワケにも行かなかったし、第一置いていくべき場所もねえし」

「ユーリンは先生にとっても大事なひとだっ、ドルが言ったから。なら、俺だっ、守る手助けがしたい」

ケイヴィンの熱のこもった発言に、クリスは少年とユーリンの顔を交互に見た。

……その想いは、理解出来る。

「……イリアスの死をラリーの訃音で知っ、しばらくした頃だ」
ユーリンが静かに口を開いた。

「その時、私とて気が付いていた。

イリアスが死んだというなら、その理由にシスター・クローディアとの関係が関わっているのではないか、と……」。

私も近く命を狙われるかもしれない、と。

そしてその懸念は杞憂ではなかった。

それからしばらくして、私は自室で何者かに襲われたのだ」

*

【砂漠の聖女】

…その日、ユーリンは日課の祈祷と勤行を終えて自室に戻った。

イリアスの最期を知って以来、ユーリンは常に暗殺に備えている。

神殿の警備は嚴重だが、洗練された刺客は、そんなものいくらでも擦り抜けてくる。

ゴーレムを使って潜り込んでくる可能性もあった。

どんな時も気は抜けない。

特に、今のように独りになる時間は。

ユーリンほど位の高い神官にもなれば、身の回りの世話をする修道見習いの1人や2人は傍に侍らして当然なのだが、

もし刺客が襲ってきた時に巻き込んでしまうことを厭い、ユーリンは自分の身の回りにそういう人間を置くことを避けていた。

ユーリンがシスター・クロードディアの御子候補であることは、一般神官どころか幹部すら知らないことだった。

だから、事情を明かさぬまま護衛をつけるというのは大袈裟で、ユ

ーリンは自分の身は自分で守るしかなかった。

その覚悟だった。

そして、その夜。

ユーリンは灯りのない部屋に戻り、見慣れた闇の中に“違和感”を
覚えた。

「
…」

ユーリンは懐の短剣に手を忍ばせる。

緊張しながら、部屋に踏み込んで壁の燭台に火を灯そうと近寄った。

その時、

擦ったマッチの火が不自然に揺れ、反射的にユーリンは身を引いた。

「
！」

その直後、石の壁に衝突する“何か”

腕に当たった破片の感触に、ユーリンはすぐに周りに目を凝らす。

抜き払った短剣を構えながら、壁に背を向けて背後を塞ぐ。

声をあげて助けを呼ぼうかとも考えたが、この時間、この棟で人を
呼んで最初に駆け付けてくるのは中年の女神官だ。

この事態にはなんの役にも立たないだろう。

返って危険に巻き込むだけである。

ユーリンは息を殺して部屋の隅々に視線を巡らせる。

瞬間、空気が流れる。

とっさにユーリンは横に飛んで、動きの邪魔にならぬよう手早く長衣の裾を裂いた。

布を裂く高い音に紛れ、鈍い音が先ほどまでユーリンが背中を預けていた壁から聞こえた。

壁を滑るように移動して、ユーリンは部屋の扉近くに身を寄せる。

無言の悪意の出所を、

侵入者の姿を探すために、窓からの月明かりの向かい合う。

その直後、月影によぎった“塊”を見て、ユーリンは身を固くした。

人間ではない。

おそらくは、ゴーレムだ。

大きさは人間の子ども程度、通常の（軍人などが所有するような）ゴーレムの形ではない。

五感を研ぎ澄まし、ユーリンは視線だけで部屋の中を見渡す。

ゴーレムの刺客は厄介だ。

言葉も情も通じない。

ただ機械的に、任務だけをインプットされた獣。

ユーリンはしゃがみこみ、暗闇の中に視線を探る。
短剣の柄を握る手に力をこめて、月影の明かりに敵意を探した。

視界の外で、ガタン、という音が聞こえて、ユーリンは鋭くそちらを見る。

…が、

「……」

ドン、という衝撃は背後から。

ユーリンは仰け反り、突き飛ばされた。

ユーリンが聞き付けた物音は、ヒビの入っていた壁の破片が遅れて床に落ちた音だったのだ。

「痛い……っ……っ」

息を詰まらせ、ユーリンは態勢を立て直す。

パタ、と床を叩いた響。

背中を伝う生ぬるい感触。

衝撃の瞬間に、反射的に背中を仰け反らせた為か、傷自体は深くはなさそうだ。

だが、

(施術の暇が …)

相手がゴーレムなら、通常なら聖職者であるユーリンの敵ではない。

主を失った《暴走ゴーレム》の《消去》は聖職者の職分、

術者の法力が対象のゴーレムの《格》より優れば、たとえ主が健在のゴーレムでも《消去》は容易い。

《格》というのは、そのゴーレムの《完成度》、もしくは所有者の法力に左右される。

そして、ユーリンの法力の及ばないほどに《格》の高いゴーレムなど、そうは在らない。

まがりなりにも、ユーリンは聖女シスター・クローディアの後継者なのである。

だが、法力だけでは乗り切れない状況というものがある。

こつ暗くては、対象の位置も何も掴めない。

所在も何も判らない存在に対しては、何の術もかけられない上に、

そもそも術というものは、剣を振るうほどに簡潔な所作で施せるものではないのだ。

(せめて少しでも足止めが出来れば)

焦りと背中の鈍い痛みで冷や汗が浮かんだ。

ガタガタ、という音。

鋭く意識を向けた先、闇に慣れはじめた目に丸い影。

身を屈め、こちらに飛びかかるタイミングを窺っている。

ユーリンは息を殺して待った。

向こうからかかって来るのなら、狙うべきタイミングはそこしかない。

ユーリンは剣を構えた。

闇の中に充満する緊張感。

…次の瞬間。

「!!!?」

突如、向かい合っていた“塊”の足下を突き上げた白い影。

けたたましい叫びがあがり、突き上げられたゴーレムが天井に衝突し、

床から滑り出してきた白い影が、ユーリンを守るように間に降り立った。

「ゴーレムっ……!!?」

目の前に降り立ったのは、灰銀の毛並みをもった巨大な狼。

出現の特異さから見ても、間違いなくゴーレムだ。

ユーリンが困惑していると、突然背後の壁から、ズツ、という石がずれる音がした。

「!?!」

ガゴン、と重い音がして、人一人分の大きさを石の壁がずれて、さらなる闇を露呈する。

(隠し扉……!?!)

普段、自分が起居していた部屋にこんな仕掛けがあることをユーリンは初めて知った。

突如その口を開けた壁の空洞から、ぼんやりと浮かんだ人影。

一瞬、ユーリンはあり得ない幻を見た。

しなやかに背の高い男。
長い髪。

…イリアス。

「お!?!」

壁の隠し扉から部屋の中に踏み込んで来た男が、思いの他すぐ近くにしゃがみこんでいたユーリンに気付いて足を止めた。

その反応に、ユーリンは僅かながらに落胆する。

イリアスではあり得ない。

その声も、口調も、仕草も ……

……それが当然なのに。

「無事か？」

見下ろしてくる。

ユーリンは困惑のまま男を見上げて、緩く頷いた。

その視界の外で、再び何か倒れる騒音と、獣の叫びが聞こえた。

反射的に振り向いたユーリンの肩を、突然現れた男が引き下からせる。

「！」

窓から差し込む月明かり。

それに照らされて、先ほどユーリンを救った狼が、鈍色の毛並みの猿を押さえつけ、その喉元に牙を突き立てているのが見えた。

「頼む」

男にそう言われて、ユーリンは「何を」とは訊き返さなかった。

無言で頷き、ユーリンはその織手を躍らせる。

段階的に印をむすび、毅然とした所作で、真っ直ぐに先ほどまでユーリンを襲っていた猿を指し示した。

「『消釈』！」
イレイヌ

凜とした声と同時に、
悲鳴をあげる間もなく、狼の前脚の下で、刺客の猿の身体は霧散した。

指を突き出した姿勢を硬直させたまま、ユーリンは息を切らせる。

「……おお……、流石。」

詠唱ナシで発動させられんのか」

どこか軽薄な声は頭上から。

ユーリンは我に返って、弾かれたようにそちらを見上げた。

「お前は……誰だ……!？」

「あれ?、前に会った事あったんだけどな。」

忘れちゃった?」

その言葉に、ユーリンは眉をひそめて暗闇に浮かぶ男の顔を見つめた。

男はその均整のとれた長身を、砂除けのマントで包んでいた。

闇の中でも、その貌の彫りの深さは見て取れる。

美男と言うほどではないが、整った顔立ちと言って障りはないだろう。

その姿をまじまじと見やり、ユーリンは眉をひそめて記憶の中を探った。

そんなユーリンを横目にしながら、

「…まあいいや。」

話はあとだ。

傷は平気か？」

男にそう問われ、ユーリンは今さらになって背中 of 痛みに呻いた。

「くっ……」

「まずは手当てだな。」

そう深くはなさそう ……」

言って、声を途切れさせた男が鋭く部屋の中を見た。

「ラケシス！」

声とほぼ同時、

床を蹴った狼が、カーテンの影に踊りかかった。

低い男の悲鳴があがる。

「！？」

「やっぱり近くにいやがったな」

ユーリンの困惑と、

男の眩き。

ズル、と狼の牙でカーテンの影から引きずり出されたのは、僧服を纏った男だった。

「なっ………？」

ユーリンには見覚えがない男だ。

男は肩口を咬み裂かれながらも、意識を失ってはいなかった。

「殺すなよ、ラケシス。」

「一応窮命しとかねえとな」

引きずり出された男が、呻きながら顔を上げた。

「ぐ………」

「こんな時間に女の部屋に潜んで、何してた？」

「た……他人の事が言えた立場か……」

「はは、そりゃそうだ」

笑った男が、ちらとユーリンを振り返る。

「傷は平気か？」

お前からコイツに聞きたいことは？」

「……………」

肩で息をし、ユーリンはよろめきながらも2人の男のそばに歩み寄った。

「貴様……、
バルカシオンの手の者か」

襟首を狼にくわえられたまま、男はユーリンを見上げた。

少しでも不用意に動けば、この狼は躊躇なく男の喉を咬み裂くだろう。

肩の傷から、ボタボタと床に血が落ちる。

「……………」

ユーリンの問いに、男は答えない。

その様子を見下ろしながら、ユーリンは背中の中の痛み表情を歪ませたまま、小さな息を吐いた。

「それとも、事情までは聞かされていないか。
ならば答えなくとも構わない。

だが、代理とはいえ神官長の私室に潜み、神殿内では禁じられているゴーレムを使って他人に傷を負わせた罪は重いぞ。

その上、素性を偽って神殿の中に入りこんだ疑いもある。

それ相応の裁可を覚悟 ……」

ユーリンが言い終えるより先に、男が唐突に呻き声をあげて吐血した。

驚愕して目を瞠ったユーリン、
狼ゴーレムの主である男が眉をひそめた。

しゃがみこみ、刺客の身体を仰向させる。

うつ伏した身体の下に隠していたらしい短剣で、深々と自身の胸を刺しつらぬいているのが見えた。

「自害したか……、

まあ今死んでおいた方が、楽っちゃ楽か。

こういう連中は、拷問にかけても口割らねえしな」

飄々と言って、息絶えた刺客を見下ろした男が、その傍らに立つ狼の毛並みをひとつ撫でた。

それを合図にしたかのように、その狼は登場したのと同じように、スルリと床に潜りこむ。

それを見て、ユーリンは複雑な表情で男を見た。

「……《原初型ゴーレム》……か」

「お？、よくご存知で」

「ご存知も何も。」

こんな奇怪な登場をするのは幽鬼でもなければ、それしかあり得な

い。

普通のゴーレムとは気配も違うしな。

……それで？

お前は結局、何者だ？

刺客ではなさそうだが」

「ああ」

気がついたように頷いて、男が軽く口笛を吹いた。

それに応じて、刺客の屍体の下から再び仄白い毛並みの巨狼が姿を現す。

屍体を背負い、主である男の傍らに寄り添った。

その頭を撫で、男が、

「一応、イリアスの奴には

ドルサツクハシー

って名乗ってた」

「……！！」

耳に馴染んだ、しかし意外な名前に、ユーリンは傷の痛みも忘れてドルサツクに詰め寄る。

「どづいつ ……」

「ま、簡単に言やあ、ログクロートの関係者だ。

お前を守りに来た。
納得したか？」

ユーリンは身を固くした。

「ログクロート」と小さく呟き、ドルサックを見上げる。

「それは …、
やはり次は私が狙われる、と？」

「恐れはある。
ただ、難しい所だな。」

つか、イリアスが死んだ事は既に知ってるのか」

複雑な表情でユーリンが頷く。

「ラリーが、報せとして寄越された」

「なるほどな、

…しかし実際、奴が死んだのがログクロート絡みの秘密を知った勢力のせいなのかは、いまいち判然としねえ。

それに、敵方がイリアスを“本命”と断じていたか、とか、

もしくは、もう1人の候補がお前だという事も知られているのかも、
分からん」

「……そう」

息を吐くように呟いて、ユーリンはよろめいて壁に背中を預けた。

「その隠し通路……、」

シスター・クローディアから？」

弱々しい声音で問われ、ドルサックが頷く。

「直接じゃなくて、人伝手にだけどな。

……とりあえず傷の手当てをしようぜ、

どうする？

誰か呼ぶのか？」

その問いに、ユーリンは首を横に振った。

「事態がここに至った以上、余人に事情を明かさぬまま神殿に居座ることは出来ない。

それに……」

「“それに”？」

僅かにうつむかせていた顔を上げて、ユーリンはその紫の瞳に決然とした色を浮かべた。

「座して待つのは、もう飽いた。

シスター・クローディアにお会いする」

「あ？」

「シスターもイリアスの最期をお聞き及びのはず。

本当にシスターはご自身の御子が私なのかイリアスなのか、ご存知
なかったのか ……

思うところがある。

シスターご本人に確かめたい。

ログクロートの関係者だと言うのなら、ついて来い」

「はあ ……」

気圧されたか、呆気にとられたか。

ドルサツクは気の抜けた返事をし、軽く頭を掻いた。

「んじゃ、俺らが手当てしていいわけか？」

「俺“ら”……？」

「ああ、出口に待たせてる仲間がなんだ」

「そつ。

では、この通路はどこに繋がっているのだ？
手当てはその先でいい」

「ああ、これの先は街の外だ。

城門を抜けずに砂漠に出られる」

「……そう」

「しかし、信用早えな。
俺ってけっこう善人面？」

「たわけ」

ユーリンが冷ややかにドルサックを見上げた。

「思い出したただけだ。
確かに以前会った、とな」

夜闇の中、重い音を立てて石の壁に空いた空洞が閉ざされた

：

*

「……ってわけだ」

ユーリンとドルサックは2人で語り、最後はドルサックが締めた。

「納得したか？」

そう問われ、クリスはこくと頷いた。

「なんとなく」

「なんとなくかよ」

「ドルサックとユーリンがいつしよにいることに不思議はない、っ

てことはわかった」

「んじやいいわ」

くつくつと笑い、ドルサツクはクリスの無垢そのものの顔を見る。

「……話が長くなったな、
飯にすつか。」

お前の方の話も聞かせてくれや。

ヴィヴィとカトリは無事なんだな？」

クリスが頷く。

「今は、さんくれーるという街にいる」

「サンクレール？」

そこまで言っつて、クリスはふと言葉に迷う。

元々が寡黙な少年だから、ドルサツクはその沈黙を不審にも思わず、
給仕を呼びに立ち上がったって部屋を出て行った。

…クリスが迷ったのは《ファントム・コード》のことだ。

ドルサツクやケイヴィンは、クリスにとっては旧知の仲だが、
《ファントム・コード》のことをどこまで話したら良いのか、
その線引きはクリスには出来ない。

(ろいどにきかないと…)

しかし、今はそのロイドと連絡を取る手段がない。

いまクリスは本当の生身であり、この状態でロイドと思念が繋がる
とは思えなかった。

《ファントム・コード》のメンバーにはそういう手段があるらしい
が、

クリスはまだ正式に《ファントム・コード》のメンバーではない。

繋がるとしたら …

「！」

クリスが立ち上がる。

その両脇で、ケイヴィンとユーリンがきょとんとして少年を見上げ
た。

「ど、どうしたの？」

クリス「

「……ん。

……すこし、外にいつてくる」

「どうかしたの？」

どこか心細そうなケイヴィンの表情を見、クリスは安心させるよう

に、ほんの少し微かに笑んだ。

その表情に、ケイヴィンは目を丸くする。

そしてクリスはそのままケイヴィンの頭をひとつ撫でて部屋を出て行った。

その背中を見送るケイヴィンに、ユーリンが声をかける。

「どうした？」

「……うん、

なんか……、クリスにこういう事されたの初めてだから」

撫でられた頭に触れながら、ケイヴィンが呟いた。

…

宿の表に出ると、街のまばらな灯りと星が降るような空が見えた。

クリスはその灯りと闇の中に“それ”を捜す。

「……さんでい」

小さく呟き、続けて

「らいず」

と呼び掛けた。

サンデイ …、
ライズのゴーレム。

彼のそれはかなり特殊で、分裂し複数を使役することが出来る。

ライズはそれを仲間との通信や自身の移動用に、各地に散らばらせていた。

クリスとの2人旅から別行動になったときも、ライズはクリスを気にかけてか、サンデイを置いて行った。

しかし《異界》に飛ばされた際に、ゴーレムの主たちはそれと繋がらない、などと言っていたから、

戻ってきたときにどうなったのかはクリスにはわからない。

まして、クリスは《異界》に飛ばされる前と戻って来た後の場所が違う。

「……やっぱりいないか」

諦めに少し情けない声を出して、クリスは宿の中から自分と呼ぶドルサツクの声に気付き、踵を返して戻って行った。

空に浮かぶ淡く甘い色の月が、その背中を見送っていた。

【14】ロゲクロートの遺臣（後書き）

真夏日が続いております。

我が家の愛犬（柴、1歳）は室内飼いなのですが、外の日射しを知らずに真っ昼間から散歩をねだってきます。

その度に五木は「無理だよ！、まだ無理だよ！、死に行くようなもんだよ！、アンタの為に言ってるんだよ！」と諭しています。

実際、涼しくなったかな？って頃に連れ出してもへばるんですよ。奴ら毛皮着てるんで。

最近夕方にならないと近所の子どもも外で遊んでないですね。少し前までは違う理由で外で遊ぶ子どもを見ませんでした。今日は川で釣りをしてる小学生を見ました。

ちなみに五木と両親は大騒ぎされている時分でも無防備で犬の散歩をしてましたが。

でも水道水を飲むのはやめました。

犬は飲んでますけど。

だって犬に数十年後の健康被害なんて関係ないし。

インターネットとかだと過激な情報とか載ってるみたいですね。うんざりするんで見てないです。

てか、五木は基本アナログ人間なのでツイッターとか2ch？とかの仕組みとか見方もよくわからないんですよ。わかんないから見る気も起きない、と。

ネガティブになる情報は仕入れないに越したことはないです。
結局、当事者じゃない人達の発言なんて無責任ですもん。

では、これにて。

おまけ登場人物設定

【ユーリン＝ウイルバー】

聖地の神官長代理

29歳 / 165cm / A型

紅の髪 / 紫の瞳

凜然 / 母性 / 理知的 / 気品

【ケイヴィン＝アンジェラ】

元 反乱軍メンバー

12歳 / 150cm / O型

黒赤の髪 / 黒緑の瞳

利発 / 一途 / 楽観的 / 働き者

ユーリンのイメージソングは『東京エスムジカ』の『月衣』もし
くは『One Thousand Words』です。

砂漠の女です。

ドルサツクはまだ秘密があるので設定は載せません。

ケイヴィンには特に隠れた設定はまだないですが、もしかしたら後
々何かを付け加えるかもしれないので、あえて白紙にしておきます。
まあ、クリスの生き別れの弟、とかいうのはないですが。

【15】神騎匠の一族

その力は神を貶める

…創造されし獣、

《ゴーレム》

主の血液をもとに培養され、思念が主と繋がっているため、通常の獣と違って調教の必要がない。

その歴史は永く、しかし直接関わる者は数少ない。

ゴーレムの創造を《造獣》といい、それを生業とする技術者を《造獣師》というのだが、

まずその《造獣師》の数が世界には少ないのだ。

《造獣》は呪術に属すが、原材料に人間の血を多量に要するため、医学的な事にも精通しなければならない。

今は造獣と治療を別々の人間が行う形式のゴーレム造りが盛んになってきてはいるが、

その場合の造獣師は業界内では一人前の《造獣師》とは認められない。

主とゴーレムは繋がっている。

主の造獣師への信頼は、そのままゴーレムからの造獣師への信頼に直結し、完成までの数日の調整に影響する。

主とゴーレム双方のケアを1人で満足に行えなければ、ゴーレムの出来不出来に左右する。

呪術や医学などの専門的な技術に加えて、人間性も問われるのが《造獣師》という職業だ

【キリエの思い】

…キリエがとある街道沿いの宿場町に着いたのは、明朝になつてのことだった。

夜は《ゴーレム化》し、空を飛翔して地形や道程を無視しながら旅をしているが、

空が明るくなつてからそれをするのはあまりにも目立ってしまう。

陽が出てから人里に下りて宿をとって休み、

陽が沈んでから宿を発つ。

それがキリエの《外での任務》の際にとる移動手段だった。

聖地ヴァナディースまではグレンと一緒にだった。

ヴァナディースを出立してから、今は独りだ。

若い女の一人旅、

しかも夜のみの道行き。

宿の人間や街の検問には不審がられたが、キリエにはどうでもよい事だった。

空が白み始める前に森に降り立ち、街には徒歩で入った。

日の出前の早朝のこと、

人通りが少ないだけにただでさえ人目を引く容姿のキリエはかなり目立った。

高く結った紺碧の髪を揺らしながら颯爽とした足取りで、一軒の宿の前で足を止めた。

特に理由はなかったが、これといった特徴のない風情になんとなく惹かれ、キリエは門をくぐった。

朝方の掃除をしていた下男がその姿に目を留め、小走りに出迎えに来る。

部屋は空いているか、と訊ねようとしたキリエだったが、出迎えの男が先に口を開いた。

「お待ちしておりました、
お連れ様がお待ちです」

「……は？」

意表を突かれ、キリエは怪訝そうに整った眉をひそめた。

そんなキリエの耳に、聞き慣れた声が届いた。

「おい、こっちこっち」

「!?!」

思わず肩をすくめ、弾かれたようにキリエは声がした方向に身体を向ける。

宿のロビー、ソファアールから立ち上がってこちらに向かい手を振る青年。

その明るいつ陽色の髪。

「ライズ……!?!」

見開いた瞳の刺すような視線をまったく意に介さぬ様子で、ライズはキリエのそばに軽やかに歩み寄った。

「や」

「何故っ……」

キリエの動揺を、ライズはふ、と不敵に微笑う。

「部屋とつてあるから、話はそこで」

顎で宿の奥を示しながら、ライズが軽くキリエの手を引いた。

呆然とした風のキリエの表情に、ライズは小声で

「早くおいで。」

宿の人間に変に思われるだろ？」

と言った。

…

ライズが先に取っておいたという部屋には、形ばかりの荷物が置いてあった。

広間の両脇に房がある部屋で、中心に置かれたテーブルの上の茶器には、見慣れた色合いの紅茶が淹れてある。

……完全にキリエの到着を、キリエの行動を見透かしている。

キリエは諦めたように小さな溜め息を吐いた。

「……何故わかったの」

「フロントムとの《回線》を切っただろ」

言って、椅子に腰を下ろしたライズはキリエに茶器を差し出す。

キリエはそれを受け取り、静かにライズに向かい合って椅子に座った。

「切ったわ。」

だから“何故”と訊いているのよ」

何故、キリエの居場所がわかったのか。

その問いに、ライズは人が悪そうな微笑を浮かべた。

「昔、君の怪我を治療するためにサンディの鱗分を使ったことがあったろ」

キリエが僅かに眉をひそめる。

サンディというのは、黒蝶の姿をしたライズのゴーレムだ。

「サンディは俺の血から創られたゴーレムだ。サンディの鱗分も俺の血をもとにしている。」

そして、昔の治療で使ったサンディの鱗分が君の体内に微量にだが残ってる。

それを辿れば、君の居場所を捕捉するのは容易い。

一番近い位置に“蒔いて”あるサンディを一片搜索ひんかくに出せばいい話だからね」

「蒔いてある”って…」

キリエは呆然とした風にライズの台詞のひとつを復唱した。

「貴男いつたい、どれだけ自身のゴーレムを分裂させているのよ。

その全てが全て、正常な機能を保ったまま待機しているというの？

そんなこと ……」

そんなことが出来たからこそ、今こうしてライズはキリエを見つけた訳なのだが、

そうとはわかっていてもキリエには信じ難いことだった。

ライズは軽く茶をすすり、笑った。

「そんだけキミの兄さんの腕がいいってことだろ。

いつもみたく胸張れば？」

「 ……」

ライズのゴーレム、サンディを創ったのはキリエの兄・レックスだ。

キリエは兄を慕っている。

造獣師としての才能も能力も正しく尊敬している。

……だが。

「 ……貴男のゴーレムは

“異質”だわ」

「そお？、ま・いいや。」

とりあえず、俺からマリーにキミの無事だけ伝えておくから」

その言葉に、キリエの顔色が揺らいだ。

「ちよっ……………」

「そりゃそっでしよう。」

じやなきや俺が来た意味ないじゃん。

今だって、無人のアジトにサンデイを一片置いて全接続フルリンクしてんだからね？

どんだけ気力使うと思ってるの？」

「それは……………だって」

言って、キリエははたと顔を上げた。

「無人のアジト……………？

え？、だってボスは？」

そういえば、そもそもライズだって別の任務中のはずだ。

ファントム・コードに加入予定の少年と行動を共にしていたはず。

「あ、ボスは出張中。」

ちよっとカトリちゃんの方にトラブルがあつて」

「……………！！！！！！！！」

キリエの顔色が変わった。

「カトリさんの方って……、
じゃあお兄さまは」

……キリエのその言葉に、ライズは皮肉めいた笑みで彼女を見据えた。

「ホントにキミはファントム・コードのマリオンにはなりきれないんだな」

「……っ」

ライズはその蒼穹の瞳に冷やかな色さえ浮かべ、

「今んとこウチの人間は皆無事だよ」

と告げた。

そのまま足を組み、長椅子の背もたれに身体を預けて溜め息を吐く。陽光の差し込む部屋の床に、窓枠の模様が刷りつけられていた。

キリエは僅かに目を伏せて、小さく自身の体を抱きしめた。

ライズが口を開く。

「事情は察しがついてる。

キミがここまでするってことからね。

けど、だったら尚更レックス兄に心配かけるような事しちゃ駄目じゃないか。

バレないとも思ってたわけ？」

「それは ……」

「大体さあ、

キミにはファントム・コードに責任があるだろ。

一時的のつもりなのか知らないけど、だとしても勝手に抜けるのは無責任にも程があんじゃないの？

キミを救うために、ファントム・コードはマリオンをひとり失ったんだよ？」

ライズの言葉は口調こそ軽快だったが、内容は辛辣そのものだった。

キリエは表情を歪めて顔を伏せる。

「……相変わらず、容赦なく痛いところを突いてくるわね」

「命令違反者に遠慮する必要ないでしょ」

ライズは平然として言う。

「グレンがヴァナディースに残ってる？」

「ええ」

「そう。」

まあ、そうだろうとは思ってたけど。

……で？

キミがここまで勝手な行動をしてるって事は、ヴァナディースで噂話でも耳にしたかい？」

身を乗り出して自身の膝に頬杖をつきながら、ライズが首を傾げる。

キリエは弱々しく目を逸らした。ライズが軽く息を吐く。

「黙ってたって無駄だよ。」

さっきも言った通り、フロントムとの《回線》は切る事が出来ても、キミは俺からは逃げられない。

嘘をついても、すぐにわかる。

それに、もしキミがこんな事をしている理由が、俺やマリーの予想通りなら、ますます放ってはおけない。

白黒だけはつけておかなきゃね」

キリエは答えない。

ライズがその顔を覗きこんだ。

「弟の所に向かってるんだろ？
キミの家を滅茶苦茶にした弟の」

その指摘に、キリエの肩が肯定するように震えた。

「世間ではキミの家は、暴走ゴーレムのせいで潰滅したと思われるけど」

「……あの子は……」

「生きてたわけか。」

で、ヴァナディースで情報が得られるくらいだから、たぶん何食わぬ顔で前のような暮らしをしている。

そういうことなんだろう？」

「……」

しばしの沈黙の後、キリエは重い口を開いた。

「……本家は、父の教え子だった人が引き継いでいるらしいわ。」

元々ジェラルディン家は、血脈よりも実力や人格を重視する傾向にある。

あの子に本家を継ぐ器量がないことは幼少の頃にとくにわかりきっていた。

……

……ヴァナディースで、父に造獣を世話されたという軍人に会ったの。

彼は私を憶えていて、弟のことも憶えていた。
あの子の今の消息も知っていた。

今は皇都に近い街で、細々と暮らしているそうよ。

……でも、違う。

周囲にはそういう風に見せていても、あの子が独りでまっとうに暮らしていける訳ない。

必ず後ろ楯がいる」

そう言つて、キリエは額を押さえた。

「……レインだと思つ」

「なぜ？」

「なぜも何も……。」

ファントム・コードの予言の中にあるじゃない。

《ルビー・エーテル》の完成にはジェラルディン家の者が貢献することになる、って。

だから10年前、ファントム・コードはお兄さまを連れて行つたんじゃない」

その言葉にライズが苦笑する。

「人さらいみたいない言い回しをするもんじゃないよ。

大体レックス兄がファントムにスカウトされたのは、兄が家を出た後だろ」

たしなめるように言われて、キリエはどこか拗ねたような、淋しげな表情を浮かべた瞳を逸らした。

「……あの家に生まれた事は私の誇りだったわ。けれども私はあの家が嫌いだったの。」

あの家では、あのままでは誰ひとり幸せになれなかった。

お兄さまも、

あの子も……」

【パトリス＝ジェラルディンの記録】

ゴーレムの造獣に携わる者なら一度は耳にする名がある。

『ジェラルディン』

造獣師にも、流派や名門が存在する。

ジェラルディン家はそれらの筆頭だった。

分家も多いが、皇都に居を構える本家、特に代々その当主を務める者は、

常にその時代の最高の造獣師だといわれる。

本家への弟子入り志願者は毎年軽く3桁を超えるが、適性に人格をも問う造獣師の世界では、分家に入門することすら難しい。

…

キリエの言葉通り、ジェラルディン家は代々、家督の相続に血統を重視しない。

その時代の造獣師として最も優秀だと認められなければ、たとえ当主の子であったとしても、周囲がそれを認めない。

だがしかし、ジェラルディン家に生まれた者は、幼少から造獣師となるべく育てられる。

それだけでも、入門から始めなければならぬ他の造獣師志願者とは、まずスタートラインが違う。

始めから優位にいるのだから、それ相応の努力をすれば、大抵は他の造獣師と一線を画した力をつけることが出来る。

それもまた、ジェラルディン家が造獣師の最高流派であり続けられる由来だ。

先代のジェラルディン家当主の名は、パトリスといった。

彼は当主の三男としてジェラルディン家に産まれた。

ジェラルディン家は家督に血統を重視しないため、当然年功序列も関係ない。

むしろ、兄らの前例による試行錯誤の後の教育と指南を受けて育つため、

代々のジェラルディン家当主を継いだ者の中には末子も多かった。

パトリスもまた、兄らを凌ぐ資質をもっていたため、次期当主として囑望されて育てられた。

*

そんな彼だが、16歳の時にひとりの娘と恋に落ちた。

名前はアルマ。

ジェラルディン一門の造獣師の娘だった。

性格は優しく、母のいない家庭で弟妹たちをよく世話するしっかり者だ。

パトリス本人は真面目な性格だったが、末っ子気質というのか、少しばかり抜けた所があり、世話好きなアルマとは相性が良かったらしい。

周囲も2人の仲を祝福し、婚約までは何の問題もなく話が進んだ。

…だが、その数ヶ月後に事件は起きた。

アルマの父親の造獣の仕事で、依頼主が急死してしまったのだ。

死因は、失血死。

造獣のために血液を採取した後の処置に過失があったものとされた。

依頼主は貴族出身の軍人で、このことはジェラルディン一門にとって大きな打撃となった。

アルマの父親は破門。

それだけでなく、遺族への慰弔金として財産のほとんどを納めたため、生活は困窮した。

アルマとパトリスの縁談も破談となり、一家は都を出て行った。

パトリス本人はアルマを愛していたから、周囲の反対も押し切って結婚するつもりがあった。

だが他ならぬアルマがそれを固辞し、家族と共に行く先も告げず都を離れてしまったのだ。

パトリスはアルマを諦めざるを得なかった。

…

しかしその数年後。

ジェラルディン家の次期当主としてパトリスが正式に立てられようとしていた頃に、

アルマの家族の消息が聞こえてきた。

その頃パトリスは豪商の娘との縁談がまとまりかけていたのだが、

その報せを聞くや、すぐにアルマの元へ向かった。

一家の消息と共に、アルマの父親の訃報も届いていたからだ。

数年ぶりに再会したアルマは、財産もなく、たったひとりで弟妹たちを抱え途方に暮れていた。

パトリスは決断した。

彼女と共に生きること。

そのためなら、ジェラルディンを捨てることも厭わなかった。

駆け落ち同然でパトリスは生家を出奔し、アルマとその弟妹たちと共に小さな村に移り住んだ。

今回はアルマもパトリスを拒まなかった。

アルマとて、パトリスを愛していたのだ。

数年前は、彼の立場や外聞を慮って身を引いたに過ぎない。

長い年月を経て再会し、互いに変わらなかった想いを確認した。

さらに、パトリスを拒めば女手ひとつで弟妹たちを養わなければならない厳しい現実がある。

パトリスの愛情はわかっている。

だから、アルマはそれに甘えることを自身に許したのだった。

小さな村で、パトリスは造獣師の修行で身に付けた医学の知識で医者としての暮らしを始めた。

造獣師時代にパトリス個人が貯めた資産も多少はあったので、裕福ではなくとも食べるものには困らない生活を送ることが出来た。

アルマも畑仕事や日雇いの仕事で小金を稼ぎ、パトリスとふたりで、弟妹たちを成人まで育て上げることが出来た。

その頃には、パトリスとアルマは事実上夫婦だった。

パトリスの消息がジェラルディン家に伝わる可能性を憂いて、籍こそ入れてはいなかったが、

ふたりの間には子供も生まれていた。

その長男がレックスだ。

*

レックスが7歳のとき、

母親であるアルマが病に倒れた。

若い頃の苦勞がたたったのか、風邪をこじらせてのあっけない最期だった。

突然に妻を失ったパトリスの嘆きは深かったが、周囲の支えもあって立ち直りは早かった。

医者としての暮らしは安定していたし、成人した義弟妹たちも職に就き、あるいは所帯を持っている。

生活には何の憂いもなく、アルマを失った空洞はあっても、パトリ

スは幸福だった。

レックスは少々おっとりとした気質が色濃く、一見すると露鈍な印象を与える子どもだったが、

この子が内に秘めた聡明さを、パトリスは父親として正しく察していた。

幼いながらも父親の仕事に興味を持つレックスに、パトリスは家にある医学書を読み聞かせたり、薬草の採集に同行させたりした。

この辺りの教育は、ジェラルディン家に生まれ育ったパトリスらしいところだ。

自分がそうして育ったものだから、教育とはこういうものなのだろう、という、やや偏った考えがあったのかもしれない。

本人にその自覚はなかっただろうが。

こうして育てられたレックスは、医学の知識だけなら田舎の町医者に匹敵するような少年になった。

*

そんな頃だった。

パトリスの消息を掴んだジェラルディン家の使者が現れたのは。

都から遠く離れた村、

造獣とはまったく縁のない田舎のこと、ジェラルディン家の噂など耳にしなくなつて久しい。

義弟妹たちを除いては、パトリスが造獣師だったことを知る者はこの村にいなかった。

完全に縁は切れたと思っていた。

だがジェラルディンはパトリスを捜し当てた。

このときにパトリスは、使者の口から数年前に父親が病死したことを初めて知らされた。

そして、ジェラルディン家を引き継いだ次兄が危篤であること。胃の病だという。

「ご当主は次の家督を貴男に譲ることを望んでおられます」

「なぜ」

「残念ながらご当主には御子がおられません。

お弟子の中から次のご当主を、ということも今は」

そこでパトリスが不審に思ったのは、実家に残っているはずの長兄の名前が出ないことだった。

「兄はどうされた？

兄も亡くなられたのか？

それとも具合が？」

使者は苦々しげに首を横に振った。

パトリスの長兄は、実力は2人の弟に及ばなかったものの、一流の

造獣師ではあった。
だが。

「兄君は数年前に依頼者と契約トラブルを起こして以来、造獣師として信用を落としてしまわれました。」

それからというもの兄君はすっかり変わってしまわれて ……

酒に溺れ、遊興に溺れ、ジェラルディン家の資産を湯水のように……

ご当主が病に倒られたのも、それらの不始末の対応に追われていた心労のせいだろうと、皆申しております……」

その話にパトリスは胸を痛めた。

少なくともパトリスが家を出た頃は、兄は2人とも敬愛に値する人物だった。

ジェラルディンを省みずにパトリスが出奔出来たのも、
「自分がいなくなっても優秀な兄が2人もいるのだから大丈夫」という意識があったからだ。

けれどもパトリスは自分が生まれ育った家の、どこか住む者を蝕むような暗澹とした空気を知っている。

期待とプレッシャーに重苦しく埋め尽くされた家。

だから長兄の近況を聞いても、パトリスは特別驚いたりはしなかった。

それも無理はない、という気がしたのだ。

家督が弟に譲られ、自分は弟よりも劣っている、と決定づけられた。それは事あるごとに長兄について回ったに違いない。

…パトリスは実家に戻ることにした。

家督を譲り受けるためではない。

次兄の臨終の前に一目会っておきたかったし、迷惑や心配をかけた者たちも多いから、これを機会に、顔を見せておくべきだろうと思ったのだ。

…それに、長兄にも会いたい。

幼い頃は自分をかわいがってくれた兄。少しでも立ち直るための力になれば

…

そう、思った。

*

パトリスは故郷・皇都イザヴェルに、数年ぶりに我が子を連れて戻った。

幼い頃のパトリスは末っ子気質のかわいがられ上手な若君だったから、
ジェラルディン一門の歓迎ぶりは熱烈だった。

危篤と聞いていた次兄はいくらか回復しており、床を離れることは

出来ない状態ではあったが、パトリスの顔を見ると大いに喜んだ。

「よく戻った、良かった、元気そうな顔が見れて本当に良かった」

「いろいろと心配をかけてすみませんでした」

「いや、もういいんだ。

もう過ぎたことだ。」

お父さんも怒ってはいなかった。

お前が本当にあの子に惚れていたことはわかっていたからな ……」

そうして次兄は、パトリスの連れられた子どもを見ると嬉しそうな顔をした。

「ああ、本当によく似て」

次兄との再会は始終穏やかで、楽しいものだった。ただ、長兄に同席してもらえなかったのが心に重かったが。

「兄さんはどこに？」

「さあ、近頃はちつともこの家に寄りつかない。

細君に先立たれてからは、どこぞに女を作り、そこに入り浸っているようだ」

「お義姉さん、亡くなられたんですか」

「4年前だ。

兄さんが造獣の依頼内容で依頼主ともめて、仕事がなくなって荒れ

始めてから、苦勞していたようだから」

次兄の声には暗い溜め息が混じっていた。

その様子に、パトリスは寂しさを禁じ得なかった。

次兄の表情には、長兄を見放したような色がある。

諦めのような、非難のような。

かつての兄弟の情は、長い年月で磨耗してしまったかのようにだった

…

…

その数日後に、パトリスは長兄に直面する機会を得られたが、

次兄の反応とは対称的に、長兄のパトリスへの態度は冷ややかなものだった。

言葉数も少なく、パトリスを見る眼も濁っていた。

かつての面影はなくなっていた。

次兄の諦めが理解出来た気がした。

… 悲しいことに。

それでもパトリスは、昔と変わらぬ態度で長兄に接しようとした。

それによって、「貴男は何も変わっていない、ほんの少しつまづいただけであって、必ず立ち直れる」と伝えたかったのだ。

だが長兄はそれを明らかにけむたがった。

元々パトリスの帰郷前から実家とは疎遠になりつつあったらしいが、パトリスと顔を合わせるようになってからますます足が遠退いたようだった。

パトリスはジェラルディン一門を後継するつもりがなかった。

もう何年も、パトリスはゴーレムに関する全てから遠ざかっている。

それに引き換え、依頼が絶えて久しいとはいえ長兄は現役の造獣師、それを差し置いてジェラルディン一門を引き継ぐなど出来ないと、パトリスは思った。

次兄の快復を見届け、すぐに義弟妹の待つ村に戻ってもよかったのだが、周囲に引き留められてズルズルと逗留は長引いた。

結局、パトリスが実家に滞在している間に次兄の容態が急変し、彼は残念ながら当初の予定通りに兄の死を看取ることとなる。

そして、パトリスは望まぬ家督を継ぐこととなり、ジェラルディン家の当主となったのだった ……

【レックスの思い】

…レックスは赤黒く固まった血に汚れた包帯を、床に置いた袋の中に落とした。

未だ意識の戻らないアイラの額に、水を絞った布を載せてやり、枕元に痛み止めの薬を置いておく。

彼女の父親であるワヤンは今、別室のロイドに何か報告があると言つて席を外している。

彼らの主であるクローディアも体調を崩し、今は別室で休んでいる。決して若くはない彼女にすれば、ゴーレム造りのために多量の血を採取した後の運動は身体に堪えたらう。

（大変な日だ……）

やることは山積みだ。

歌鳥とクローディアの安全の確保、

エレナの搜索、

そして、クローディアのゴーレムの完成と、
アイラの傷の治療。

前半の2つは他の人間に任せればいいが、後半の2つはレックスでなければならぬ。

（ライズくんを呼べれば、アイラさんの治療は任せられるんだが……）

おそらくライズはアジトを離れられまい。

サンディを分裂させた上での移動は可能だろうが、ライズが他人を

治療する際はそのサンディの“本体”を使う。

その上でアジトに置いた控えのサンディとの接続リンクを継続させるのは、ライズ自身への負担が大き過ぎる。

それに、もしかしたら。

(…キリエの方に行っているかもしれないな……)

一方的にファントム・コードとの回線を切り、独断で動き始めたという妹。

その話を聞いたときから、レックスには嫌な予感があった。

(……あの子なのか……)

キリエの弟。

勿論、レックスにとっても血の繋がった弟だ。

…幼い頃から内向的で、他人と上手く話せない子だった。

ジェラルディン家にとって、造獣師となる者にとって、その社交性の低さは致命的だった。

周囲はそれをなんとか改善しようと、幾つかの学塾を掛け持ちさせたり、あらゆる職場に出入りさせたり、様々な人間と接触させて慣れさせようとしたのだが、

周囲が手を尽くすほど《あの子》は萎縮して、ますます殻に閉じこもるようになってしまった。

そうして《あの子》がわずか6歳のとき、言い方は悪いが周囲は《あの子》を見限った。

《あの子》にジェラルディン一門を背負う器量は期待できない、と……。

（たった6歳……）

そのときの事を思うと、レックスはいつもながら暗澹とした気持ちになる。

名門と呼ばれる家に生まれ、才能を、人格さえも一方的に強要され、

そして周囲の判断で一方的に見切りをつけられた。

自身の意志とは関係のない、期待と失望。

ジェラルディン家に生まれさえしなければ与えられずに済んだ劣等感。

それが幼い弟に深く深く刻みつけられたのを、レックスは目の当たりにした。

胸が痛んだ。

それは遠い日に見た伯父の影を見た気がしたから。

…そう、

《あの子》は伯父に似た貌立ちをしていた。

そのことが一層、周囲の失望を煽っただけだった。

レックスも幼心にその伯父が嫌いだった。

…憎んでさえいた。

けれどそれと弟は別だ。

弟が産まれる前に伯父は死んだ。

レックスの父・パトリスが後妻を迎える前のことだ。

弟と伯父に接点は何ひとつない。

死んだ人間、面識もない人間の悪い風聞を引き合いに出されて貶められた弟。

それが、ただ内気でしかなかった《あの子》の心に狂気にも似た歪みを生み出したに違いなかった。

…レックスはアイラが眠るベッドの傍らの机に肘をつき、祈るよ
うに組んだ腕に額を埋めた。

「……………どうか……………、
違っていておくれ……………」

この数年、どれだけ切に祈ってきただろう。

……………けれど、それがあまりにか細かい願いであることを、レックスは
知っている。

…そのとき、背後でカタン・と音がした。

弾かれたように、レックスが振り返る。

見ると、いつの間にか開かれていた扉に寄り添うように立つ歌鳥の姿があった。

「……カトリさん」

「……あ……、
あの、すみません。

ノックはしたんですけど、レックスさん、気付いてなかったみたいで……」

いつものレックスらしからぬ鋭い反応に驚いたらしい歌鳥が、なんだか申し訳なさそうに胸元で組んだ指をよじらせる。

それに気づき、レックスは表情を和らげて微笑んだ。

「いや……、ごめんね。

ちよっと考え事してて、全然気付かなかった。
なに？」

「あの、朝ご飯なんですけど、レックスさんは……」

「ああ……、」

言って、レックスはちらと背後のアイラを見やる。

「だいぶ容態は安定してきたし……、
誰か代わりにアイラさんを看ててくれれば、席を外しても大丈夫か

な……。

カトリさん、お願いしていい？

君がご飯を済ませたら、交代で食べるよ」

歌鳥が頷いた。

「はい、わかりました」

そのとき、ふとレックスは歌鳥の顔を見、

「……あれ？

どうかしたの？」

と言った。

歌鳥が首を傾げる。

「何がですか？」

「目が、赤いけど」

その指摘に、歌鳥は一瞬キョトンとした表情を見せたが、すぐに慌てたように手を振った。

「あっ、だ、大丈夫です！

ちよっと昨日眠れなくて……少し夜更かしになっちゃって……」

「昨日 ……、」

言って、レックスは思い至る。

「……大変だったしね」

とだけ呟いたレックスに対して歌鳥が頷く。

「……はい」

「……うん、……」

何に対してか、レックスが頷いた。
歌鳥は首を傾げる。

「レックスさん？」

「やっぱり耳に入れておいた方がいいだろうな……」。

ロイドさんはまだワヤンさんと話してる？」

「……？、はい……」

「そう。」

じゃあ、後で僕も話があるって、顔を合わせたら伝えておいて欲しい。

僕たちの弟に関する話だ、って言えばわかるから」

その言葉に、歌鳥が目を丸くした。

「弟……って……、」

レックスさん、弟さんがいらしたんですか？」

「うん」

“たち”とは、レックスとキリエのことだろう。

「3人きょうだいだったんですか」

「いや、」

レックスは短く

「4人だよ」

と言った。

【その者は嫉妬を司る】

…数日後、

帝都イザヴェルより北に位置する、とある街にライズとキリエは訪れていた。

例によってゴーレム化しての道行き、

街の城門をくぐったのは、暁の差す前の時刻。

「JJJJ?」

君の実家の目と鼻の先じゃない」

「この街だ、とフラウンケル公子付きの衛士が言っていたの。
それに心当たりがあるわ。」

この街にはジェラルディン家所有の家があるのよ。

昔、私たちの伯父が使っていたらしいの。
私たちが生まれる前に亡くなった方だから、面識はないのだけど。
持ち主が亡くなってからも処分しないでいたと聞いていたから、多
分そこに暮らしているんだわ。

あの子があまりジェラルディン家の近くにいると、一門にとって目
障りなんでしょう」

「ひどい言い種」

ライズの呟きに、キリエが鋭く睨む。

「そついう家なのよ」

「名門てのは大変なんだねえ……」

ライズの声に、微かに皮肉が滲む。
キリエは苦々しげに深緑の目を伏せる。

それをあえて無視して、ライズはキョロロと辺りを見回した。

「で？、その家が何処にあるのか覚えてるの？」

「覚えてるも何も……、
知らないわ。
一度も行ったことないんだもの」

「あれま」

「でも、きっと誰かに聞けばわかるわよ。
年配の方とかに ……」

弟はともかく、伯父のことを覚えている人がいるかもしれない」

「けっこう広そうだよ？
この街……」

「いいわよ、
貴男は何もしなくても。」

私1人でも捜し出してみせるんだから」

言って、キリエはずんずんと先に行く。
肩をすくめたライズが、緩やかな足取りで続いた。

結局、日が出て日が暮れるまで聞き込みをして回ったが、めぼしい
情報は得られなかった。

*

「 ……ていうかさ、
君の実家にいる誰かに聞けば早いんじゃない？」

夕刻、ライズの指摘にキリエの肩が揺れた。

「む……無理に決まってるでしょ!？」

私、生死不明ってことになってるんだから!」

「ああ、そうだったけ？」

だから顔を隠してんのか」

「貴男わかってて言ってるでしょ!」

この街に着いてから、キリエはずっと外套に着いたフードを深く被っている。

聡いライズがそれに気付かぬはずはない。

「まあまあ、

今日はもう人通りもなくなってきたし、宿をとって休もうよ。

生身で1日中歩き回って、疲れたろ？」

「……………」

本音を言うと、まだキリエは粘りたかったが、確かに人通りはまばらになってきており、こればかりは仕方がない。

「……………わかったわ」

キリエは渋々頷いた。

*

キリエとライズが2人で宿に連れ立って入ると、無理もないが若い夫婦か恋人に思われるので、1つの部屋を勧められる。

ライズは外間をまったく気にしないので、経費削減と言わんばかりにそれに乗っかる。

これがグレンなら、むきになって否定するところなのだが。

「大丈夫、大丈夫。」

夜は俺、外に出るから」

ゴーレム化して街中を散歩してくる、と言う。

キリエは納得して頷いた。

「そう。ならいいわ」

ゴーレム化している間は、疲労にも空腹にも睡魔にも襲われない。食事や睡眠はまったく必要なくなるのだ。

ライズのゴーレムは小さな黒蝶、夜闇に紛れるのは容易い。

キリエは外套を脱いで部屋のソファに座りこんだ。

窓を開け、ライズが振り返って笑った。

「じゃ、行って来るね。」

おやすみ」

「……おやすみなさい」

闇夜に溶けるライズを見送って、キリエは小さく息を吐いた。

毎度のことながら、グレンとの旅とは勝手が違う。

かなり楽ではあるが、なんというかしっくりしない。

結局、キリエもグレン同様ライズが苦手なのだろう。

嫌いという訳ではないが。

ふとそんなことを思ったとき、キリエは昔交わしたひとつの会話を思い出した。

…

（ …… キリエはライズが好きじゃないの？）

明るく、屈託のない声。

思い出すとせつなくなる。

（別に嫌いなわけじゃないわよ。

あのひとちょっと読めないところがあるから）

（ふうん？）

（貴女は好きなの？）

（好きよ？

だって優しいもの）

…

嬉しそうに笑った彼女。

初めての女の子の友人。

明るくて優しく、何より素直な子だった。
とても可愛い子。

(…)

キリエはひとつ頭を振り、立ち上がって浴室に向かった。

*

寝静まった夜の街中、
黒蝶の姿をしたライズは、ヒラヒラと闇を泳ぐ。

(さすが帝都の近隣都市は整備されてるな)

任務の傍ら、物見遊山である。

(でも、緑が足りないな。

もっと街路樹の配置とか、いろいろあると思うんだけどなあ ……)

ライズは自分にセンスがあるものだから、よそのセンスには辛口である。

そんなとき、ふと、ライズの耳に(蝶に耳はないが) 異様な音が届いた。

カツンカツンという音。

石畳を叩く ……

(靴?)

今は深夜、
人通りなど皆無の時刻。

それでもただの靴音ならば違和感はない。
だが、これは ……

(女物の靴……、
しかもダンス靴とか、そういう型)

ライズはふわりと気配を消して、靴音の響く方へと飛んだ。
なるべく間に溶け込むようにして、小道を抜けて橋をくぐる。

そして ……

(!)

…靴音の主の姿を見、ライズは息を飲んだ。

(あれは)

夜闇に浮かぶ白い人影。
予想に違わず、ヒールの高い靴を履いた若い女。

豊かな金髪を揺らし、身体のラインを強調するようなドレスを身に纏う。

どうやら身分の高そうな装いだ、たった一人で夜道を歩いている

のが訝しい。

だが、ライズの驚きは違うところにあった。
ライズはその女に見覚えがある。

(…ベルローズ＝ロベリン……！
これは……)

当たりを引いた、かもしれない。

ライズはその漆黒の羽根をそよがせた。

模様にも似た一對の瞳。

それが静かに瞬きをして、脱皮のようにもう一匹の蝶を産む。

今や2体に分かれたその蝶の1体がそのまま夜道を歩く女を追い、
もう1体が身を翻して、もと来た道に戻って行った。

*

宿に戻ると、キリエはもう寝入っていた。

ぐっすりと眠っている顔を見ると起こすに忍びない気もしたが、起
こさなかったらきつともものすごく怒るだろう。

ライズは蝶の姿のまま、キリエの枕に留まった。

(…キリエ、キリエ)

「……………」

(キリエ、ごめん、
ちょっと起きて)

…ようやくキリエが身動きする。

「……………何…?……………」

(ごめん、すぐ起きて支度して)

「何なの……………?」

キリエがのろのろと起き上がる。
ライズがその肩に止まり、

(ベルローズが歩いてた)

と告げた。

「ベル……………?」

言って、キリエは目が覚める。

「ベルローズって……………!」

(うん、間違いない。

俺、遭遇したことあるし。

今サンディを分裂して尾行させてる)

「すぐ行くわ」

キリエがベッドをひっくり返さんばかりの勢いで飛び起きた。

(外で待ってるから)

ひらりと舞って、黒蝶が窓から出てゆく。

キリエは急いで着替えを始めた。

「いるう〜?」

…甘ったるい声が薄暗い室内に投げ掛けられる。

しばらくして、うんざりしたような顔色の少年が出て来た。

「最近、頻繁に来過ぎじゃない……?」

「いいじゃない、

だってヒマなんだものお」

そう言って、女は長い髪をかきあげながら長椅子に歩み寄る。

埃や、どことなく漂う黴臭さには慣れっこで、気にする様子はない。

「それよりさあ、

あたしの“シャドウ”、新しいのまだあ?」

「まだ。」

忙しいんだもん……。

別に困らないでしょ？

「1体くらい消えたって……」

「そうだけども………」

言っただけで女はふてくされる。

「消されちゃった子はお気に入りだったからあゝ」

「“シャドウ”なんて、みんな同じじゃない」

少年の言葉に、女がとんでもない、と目を剥いた。

「同じじゃないわよあ、

元になるのが違うんだから。」

こないだ消されちゃったあたしのお気に入りちゃんは、スッゴく可愛い子だったんだから。」

もあゝ内面がドロドロしてて」

「それ、可愛いの………?」

「可愛いじゃなあゝい」

ベルローズが紅の濃い唇に笑みを浮かべる。

「人間の汚い感情つてのは、人間らしさの象徴でしょ？」

“水清ければ魚棲まず”とはこのことだわ。
清廉潔白なんて大嫌い。

あたしはね、キレイな外面を被ってる子からその仮面を剥ぎとってあげるのが大好きなの。

我慢なんてしてたら溜め込んだ不満で醜く肥っちゃっわ」

「なんでもいいけど……」

陰鬱に呟き、少年はあくびを漏らした。

「剥ぎ取られて“シャドウ”になる側からしたらいい迷惑……」

「何よぉ、」

あたしが拾ってきた子を加工するのはフィリオじゃない」

「本当、よくそついうのを見つけれられるよね……、
ベルローズもナイトメアさんもさ……」

「だって“匂い”がするものぉ、
ドロドロした感情つてのはさ、」

だからフィリオだって見つけれられたのよ？」

「……あつそ……」

呟いて、フィリオは乱雑した書物や器具に埋もれた戸棚から干菓子

の瓶詰めを引っ張り出した。

「だるいんだよね……、
シグマとかベルローズとかが夜にばかり来るもんだから、すっかり夜型になっちゃった……。」

僕まだ成長期なのに「

「あ、シグマっていえばさあ、
くたばったって本当？」

ベルローズの疑問に、フィリオがむっつりと頷いた。

「らしいよ」

「だっさあゝい。
なになに？」

「ファントム・コード？」

「わかんない」

応えたフィリオは不機嫌そうだ。

「……リトル・ルビー持ち逃げされた……。」

「リトル、って……」

ああ、例の？

シグマが持ってたの？「

苦い表情で頷き、フィリオはもぐもぐと干菓子を頬張る。

「試作品のひとつを勝手に持ってって、そのまま」

「あらあゝ、可哀想にゝ。
作るの大変なのにねえゝ。

でも何？

あいつ、ルビー持ってて負けたわけ？」

ベルローズが首を傾げた。

フィリオは肩をすくめる。

「知らない……、

……？、……」

瓶の中身を確認するようにシャカシャカと振っていた手を止め、
フィリオは怪訝な表情を浮かべて辺りを見回した。

「……ベルローズ」

「なに？」

「今日“どうやって”ここに来た？」

「どう、って……、

“このまま”」

ベルローズが不思議そうに首を傾げる。
フィリオが軽く頭を抱えてうつむいた。

「最悪……………」

「？」

「尾けられてんじゃん…」

フィリオの呆れたような低い呟きに、ベルローズがキョトンとして薄暗い室内を見回す。

…ランプの鈍い灯りに照らされた砂色の壁、
そこによぎった一片の影。

…漆黒の蝶。

「げ」

「ああもう……………」

そのの意味するところを、2人は知っている。

激しい音がして、その家の扉が押しあけられた。
淀んだ室内の空気が逆巻いて流れる。

「あツちやあゝ……………」

「勘弁してよ……………」

開け放たれた扉、

月明かりに藍色に染まる空と、家々の漆黒の影を背負う人影が2つ。

「……………フィリオ!!」

激情に慄えながらもよく透る声。

…名前を呼ばれた少年が、訝しげに目を凝らして扉の方を見や
った。

立っているのは2人の男女。

背丈はほぼ等しい。

男の方の体型は至って平均的に見えるから、女の方が長身なのだろ
う。

長い睫毛の下で深緑の瞳が鋭く煌めく。

整い過ぎているほど整っている眉が険しい。

高く結び上げた紺碧の髪が夜風に舞う。

少年は小さく呟いた。

「……………キリエちゃん?……………」

「やっと見つけた……………!!」

歯ぎしりさえ聞こえそうなキリエの声音。

フィリオはキョトンとした表情のまま、キリエを見つめた。

「ああ……………、そっか。」

今は“盾乙女”って呼ばれてるんだっけ?……………」

うすばけたような反応に、キリエがその頬に朱を昇らせた。

「 ……よくもそんな呑気な口が利けたものね!!
他に言うことはないの!?!?」

「いきなり押し掛けてきて、何を言ってるの? ……」

不機嫌そうに、フィリオは初めて感情をその顔に浮かべた。

「フィリオ……、

あんた……!!」

「今さら叱られる謂われもないよ……、
わかってたんでしょ?

僕が“こつち側”にいることくらい ……」

言って、フィリオは乱雑した室内を見渡しながら立ち上がった。

「ベルローズ」

「なにいく?」

「これ、あげる」

言って、フィリオは机の引き出しから小匣を取り出してベルローズに渡した。

ベルローズは「あら」と小さく零す。

「いいのぉ?」

「いいよ。
その代わり……」

フィリオの言わんとすることを汲み取って、ベルローズは紅の唇を歪めた。

「OK」、

元はといえば、あたしの無用心のせいだものねえ、

ここはお姉さんに任せて、早く逃げなさい」

少年が女と位置を入れ替えるようにして部屋の奥に向かう。

キリエが声を上げた。

「!!、待ちなさい!!」

フィリオ!!」

駆け出そうとした刹那、キリエは突然肩を掴まれて後ろに引き戻された。

詰まる息を飲んで、肩を掴むライズに抗議の声をあげようとした瞬間、

鉤爪にた切っ先がキリエの前方をかすめた。

「っ!!」

「ああん、残念……」

甘ったるい香りと共に漂う声。

薄暗い室内の真ん中で、妖艶なドレスを纏う女がゆらりと立ってキリエらを眺めやる。

「もお少しでその綺麗なお顔を切り裂けたのに……」

「悪趣味」

ライズの声に、ベルローズが短く笑う。

「ああ、久しぶりい〜、

《夜胡蝶》……」

キリエはベルローズの背後を視線で追う。

「フィリオ!!」

叫びとほぼ同時、キリエの姿が輝いて溶けた。その直後、閃光となって部屋を横切ってフィリオの行く手に降り立つ。

ゴーレム化した、

天馬の姿で。

フィリオがその足を止めた。

「……原初型ゴーレム……」

眩き、しばしキリエの姿を眺める。

「……それ、あの人の？」

その問いかけに、キリエはどついう意味かを聞き返すことはしなかった。

『そうよ。』

お兄さまにお願いしたの』

「……………」

キリエの答えに、フィリオは不機嫌そうな眉にさらに深い皺を寄せた。

「……………ずるい……………」

『?……………』

まったく予期していなかったフィリオの呟き。
キリエの怒りが揺らぐ。

『なに……………』

「結局、何もかも独り占めなんだ、

あの人は ……」

独白が終わるとほぼ同時、フィリオの足元の影が沸騰したように見えた。

湧き立つ黒い影が触手のようにフィリオを囲う。

それは ……

『！！、「ドール」！？』

だが、これは ……

キリエの驚愕をよそに、フィリオはその触手に軽く手を触れた。

流動体だった影が確固たる形状を作り上げてゆく。

出来上がったのは黒い鱗の肌をした1頭の馬だった。

よく調教されたそれのように頭を下げ、その馬はフィリオに騎乗を促す。

『フィリオ……！？』

まさか、それ……あなたのゴーレム……！？』

「違うよ」

不愉快そうにフィリオが応える。

「これを作ったのは僕だけど、これはゴーレムじゃない。

これは“シャドウ”

… 神騎匠の家の子なのに、それくらい見てわからないかなあ…

…でも仕方ないよね、

キリエちゃんは女の子だから、ゴーレム造りなんて勉強する必要な

「かったもんね……」

陰鬱に言っ、フィリオは昏い瞳でキリエを見た。

キリエは言葉を飲み込みかける。

だがすぐに、フィリオが動くのを牽制しようと声をあげた。

『 ……それは認めるわ。』

あなたと私じゃ、確かに立場が違った。

家の中での重圧やストレスは比べるべくもないでしょう。

けど、だからってやっていいことと悪いことがあるでしょう!?

そこまで家が憎かったというの!?

なら何故言ってくれなかったの!?

あの頃、少しでもあなたが胸の内を明かしてくれたなら、私は味方になってあげられた……!!』

「嘘ばかり……」

言っ、フィリオは馬に騎乗する。

「ならどうして、今キリエちゃんはそんな姿してるの?」

『 ……?…?』

「結局キリエちゃんだって、あの人の味方ばかりじゃない」

『ファイ……』

「小っちゃい時から“お兄さま、お兄さま”って。

お父さまだって結局あの人のことが1番大切だった。

愛情も才能もみんなあの人が独り占めしてるんだ」

『ファイリオ……！！』

「キリエちゃんがここに来たのだって、あの人のためなんですよ。

……キリエちゃんだって、あの人の1番にはなれないのにさ」

その言葉に、キリエの気配が揺らいだ。

それを狙ったかのように、キリエの馬の脚が固まったように動かなくなつた。

『！？、なに！？』

「悪いけど僕、武闘派じゃないから」

言つて、ファイリオは軽く馬の腹を蹴って走らせた。

『……、待ちなさい……！！』

キリエはゴーレム化を解いた。

不可視の拘束から逃れ、なお追いつがろうとするキリエの身体を、再び目に見えぬ“何か”が絡めとる。

「フィリオ ……!!」

伸ばした手の先、玄関とは反対側の壁が消し飛び、その穴から騎乗した弟が走り去るのが見えた。

「フィリオ! ……!!」

痛々しいほどに張り上げられた声が響いた。

キリエは自身の身体を検める。

「なんなのっ ……!!」

手足や胴体に食い込む線を見て、キリエは身をよじらせて背後を見る。

「ベルローズ ……!!」

名を呼ばれた美女が、わざとらしく眉を上げた。

「あらあゝ ……!!」

自己紹介もまだなのに、初対面のお嬢さんに呼び捨てにされるなんて ……!!」

心外だわ、と言ってベルローズが髪をかきあげた。

その仕草に連動して、鉤爪に似た何かキリエに向かう。

「 ……!! ……!! ……!!」

鉤爪がキリエを串刺しにする、
その寸前、

その間に割って入ったライズがその切っ先を蹴り落とした。

「ライズー!!」

「どうしたもんな」

ライズの呟きに、キリエが叫んだ。

「フィリオを追って!!」

「お願いよ!!」

「そうしたいのは山々なんだけどさ……」

ライズが苦い表情でベルローズを見やる。

ニッコリ笑い、女が艶めかしく身体をくねらせた。

「ダメよ、

貴男達の相手はこのあたし……」

キリエの耳元を、シュルシュルとかすめる音。

それは“糸”だった。

キリエの身体に巻き付いたそれもまた同じような糸。

細い細い“それ”が絡まりあって織り上げられてゆき、その室内に
繭を作り上げて自身とライズらを包みこんだ。

「逃がさないわよ？」

メキメキ、と耳を塞ぎたくなるような音がして、ベルローズが背中を丸めた。

「……………！！！」

キリエが目を見開きながらそれを見守る。

ライズは隙を見せぬように宙吊り状態のキリエから離れない。

ベルローズのドレスの大きく開いた背中から、生えてくる“足”

それは

「蜘蛛……………！！！」

4本の巨大な白い足が、ベルローズの美しい背中からおぞましく蠢く。

「ああ……………、このカンジ、久し振り……………」

どこか恍惚とした声を洩らして、ベルローズがその身を仰け反らす。

「ああ、いいわ……………」

あの子のドロドロした感情がまだ残ってる……………。
いい感じ……………」

瞬間、ベルローズの周囲に無数の糸が舞う。

「!!」

ライズが咄嗟に両手をかざした。
対抗するかのように、無数に舞う漆黒の蝶。

迫る白銀、
防ぐ漆黒。

空中で相殺されて散らばる無数の塵。
それに紛れて身を翻した影2つ。

背中に生えた4本の足で壁と天井を自在に這うベルローズを追って、
ライズが跳んだ。

全身を回転させての蹴撃がベルローズを襲う。

しかしベルローズの蜘蛛の足が、それを受け止めて糸で絡め取る。

「!!」

「ライズ!!」

キリエの声を耳にしながら、ライズの身体がベルローズの目の前に
引き寄せられた。

ベルローズは甘ったるい声で舐めるようにライズに語りかけた。

「あんまり暴れないで。」

フィリオがこの街を出られるまでここにいてくれさえすればいいの。

何もあたし、あんたを取って喰おうってわけじゃないんだから。

ナイトメアから“マリオン”はなるべく殺さないように、って言いつけられてるし……」

女の白く柔らかな腕が、ライズの首に絡みつく。

「あなたはあたしのタイプだから、乱暴なことしたくないの」

「香水くさい」

吐き捨てて、ライズはするりとベルローズの腕からすり抜ける。

ゴーレム化して蜘蛛の拘束から抜け出したのだ。

そしてすぐに“構成”し直して、元の青年の姿を取り戻す。

「あん、残念……」

ベルローズが唇を舐めた。

キリエはなんとか拘束を解こうともがくが、細いだけでおそろしく丈夫なこの糸はもがけばもがくほど身体に食い込むばかり。

…ライズが軽く右手を上げた。

それに呼応し、足下から立ち上る漆黒の蝶の群れ。

それはライズの手元に到達した先から結合し、1本の剣を造り上げた。

…柄も鍔も、刃すらも漆黒の剣。

「じついつの、苦手なんだけどな……」

眩き、ライズはその剣を振った。

ブツブツと音がして、ガクン、とキリエの拘束が解ける。

断ち切られた糸が躍る中、キリエは着地をライズに支えられた。

「あ……ありがとう」

「どーいたしまして。

でもゴーレム使えば自分でなんとかなったでしょ？」

「……あ」

拘束の外にゴーレムを召喚し、その上で身体を構成変換してゴーレム化すればよかったのだ。

まったく年頭に浮かばなかったことを恥じるキリエに、ライズが

「少し頭を冷やした方がいい」

とやわくたしなめた。

「フィリオを……!!」

「わかってる。

けど、まずこっちだ」

苦手だと言いなながらも、慣れないはずの剣を構えるライズの動作は流れるようで、かつ隙がない。

その隣に立つキリエが、懐からペンダントを取り出した。

指先で躍らせると、それは輝いて一瞬の後に片手サイズの盾となる。

キリエの二つ名“盾乙女”の由来。

「時間はかけられない」

キリエの言葉に、ベルローズが不愉快そうに眉を上げた。

「生意気な小娘……」。

可愛いフィリオと血が繋がってるとは思えない」

「時間はかけられないと言っているのよ!」

ベルローズの言葉に憤慨したかのように、キリエが跳躍した。

振り上げた盾は鋭い軌跡と重い音をたててベルローズを狙う。

ベルローズが嘲笑った。

「ああいいわあ、

その、ドロドロした感じ」

キリエの打撃を躲し、ベルローズの背中の脚が繭の天井を這う。

それを見、キリエは気付かなかったが、ライズがその微妙な異変に気付いた。

(動きが冴えた……?)

ベルローズが手を仰ぐ。

それに呼応してベルローズの周囲に数十本の糸が舞った。

それらがキリエを捕らえようというのか、囲い込むようにして迫る。

キリエは左腕の盾を振るった。

その盾に触れる先から糸が焼き切られてゆく。

「あつらあ〜、

聞いてはいたけど、本当に特別製なのねえ〜」

ベルローズの感歎は、裏を返せば余裕の表れである。

それがキリエの神経を逆撫でする。

「この……!!」

キリエが力を込めて盾を振るう。

それにより生じた衝撃波がベルローズに向かった。

その衝撃波が思いの外規模が大きく速度があつたためか、

ベルローズは避けようとはせず自身を無数の糸で包み込んで繭を作りあげた。

不可視の刃が白繭を襲う。

切り裂かれた繭が破け、破裂して散らばる。

中に女の姿はない。

「……！」

目を見開いて足を止めたキリエの背中に、ライズの声がかかる。

「キリエ……！、足下……！」

「え………」

見下ろした一瞬、キリエは足下を這う小さな白い蜘蛛を見た。

直後、キリエの視界が白濁する。

幾百か幾千本の白銀の糸がキリエを捕らえ、押し固めるようにして繭を作り上げた。

「今度はちよつと頑丈よ」

クスクスと笑いながら、繭の足下から編み上げられるようにしてベ
ルローズの姿が現れる。

「呼吸くらいはさせてあげるから、死にはしないわ」

「………」

ライズは黙って繭にもたれかかるようにして立つ女を見た。

「あら、冷静ね」

「………まあね。」

正直、その子取り乱し過ぎだと思ってたから、殺されないで引っ込んでいてくれるなら有難いかな」

「うふふ」

嬉しそうに笑って、ベルローズがライズの姿を眺めやる。

「いいわね、

あんたのそくゆうトコ、好きよ」

「悪いけど俺は年上は興味ない」

「あら、残念。

…あア、そうか。

確かあんた“偽姫”と良い仲だったんだっけ？」

その言葉に、ライズが微かに眉を寄せた。

「なに、ニセヒメって」

「あのダミーよ。

ナイトメアが“虹姫”だと思って手元に置いてた子。

結局それは違ってて、ファントム・コードが持ってたじゃない。

まあ、ちょっと前にナイトメア自ら処分したって聞いたけど」

その話の内容から、ライズは1人の少女を思い浮かべた。

(……………アーリー…?)

「“虹姫”のダミー…？
初耳だな」

あら、とベルローズが口元を押さえる。

(……あれ、これって秘密だったっけ？)

失態だったか、という思考の一瞬。

ベルローズの周囲に突如、黒い霧が吹き上がる。

「……！！」

見れば、いつの間にかライズの手から黒剣が消えている。

「キリエを守ってくれてありがとう、ベルローズ。

ついでに無駄話で時間を稼いでくれて助かったよ。

これ、準備が大変なんだ」

ライズ達を閉じ込めていた白繭のドーム内を漆黒の闇が埋め尽くしてゆく。

…昏く重い、大量の水に飲み込まれるようにして、白い繭が闇に満ちた。

【偽リニ咲ク花】

…重い音を聞いた気がした次の瞬間、
キリエは息が詰まるほどの衝撃を感じた。

唐突に圧迫してくる繭の拘束から解き放たれ、耐えかねたようにその身を弾き出された。

衝撃に倒れ伏し、咳き込みながら辺りを見回す。

「何……?…?」

辺りに漂う埃と黴の臭いに混じって、どこか甘い花の香りがした。

…覚えがある。

ライズの庭に咲く花々の香りによく似ている。

「…ライズ、どこ!？」

部屋を覆っていた白繭は消えている。

辺りに散らばるその残骸に目を移しながら、それらの上にはまばらに撒かれたような黒い細かな粒子を見つけた。

ライズの蝶の鱗粉だ。

「ライ ……」

呼び掛けようとして、キリエはすぐに散乱した部屋に蹲る青年を見つけた。

「ライズ!！」

よるめきながら駆け寄って、キリエはライズの傍らに膝を着いて彼の顔を覗き込んだ。

「大丈夫？」

「……大丈夫……」

そう応えつつ、薄暗い室内でもわかるほどにライズの顔色は悪い。

無理もない。

ライズはサンディの本体をファントム・コードのアジトに待機させている。

ただ置いてあるわけではない。

異変があればすぐにわかるよう、常に接続リンクをして活動させているのだ。

ライズが一体なにをしたのか、繭に閉じ込められていたキリエにはわからないが、辺りの様子を見るからにかなりの無茶をしたのだろう。

キリエはライズの肩に触れた。

「ねえ、本当に大丈夫なの……？」

弱々しく訊ねるキリエに、ライズが微笑った。

「……大丈夫だよ、

なに、情けない声だして。

キミらしくもない」

「だって」

そうしてキリエは周囲を見回した。

「ベルローズは……？」

「押し潰した……」。

でもどうか……、

連中のしぶとさは半端ないから……」。

それよりキリエ、

キミは早く弟を追いなよ。

今ならまだ追いつけるかもしれない……」

その言葉に、キリエはフィリオが消えて行った壁の穴とその向こうの黒い街並みを見やった。

かなり迷っている風にその方角とライズを見比べる。

ライズが目で頷いた。

「行きな。」

「じゃなきゃ色々、無駄になるだろ」

∴ フィリオに会うためだけに、ファントム・コードの任務を放棄した。

それによってどんな被害が起こり得るのか、考えなかったわけじゃ

ない。

ファントム・コードの任務は、それ全てが人命に関わるものだ。

それらを投げ出した。

それをグレンは許してくれた。

ライズはグレンとは違ってキリエの勝手の全てを許してくれたわけではないけれど、

それでもキリエがもっとも優先したいことをわかってくれている。

…そう、今フィリオを逃がしたら、その全てが無駄になる。

「……ありがとう」

低く呟いて、キリエは瞬いて天馬の姿に変わる。

流星のように夜の闇に駆け込んでゆく姿を見送りながら、ライズは深く息を吐いた。

鈍く痛む胸を押さえる。

「っ痛……」

そうして部屋の中を見渡した。

ここであった騒ぎを差し引いても、元から乱雑していたであろうことが窺える。

(……血筋か……)

レックスがゴーレム造りをする際の部屋の状態によく似ている、と

思った。

普段は几帳面なくせに、ことゴーレム造りになると器材や道具を雑然と困って作業をする男なのだ。
レックスは。

この部屋を見る限り、どうやらそれはフィリオにも当てはまりそう
だ。

胸とみぞおちをさすりながらライズは立ち上がり、部屋を歩き回り
始めた。

乱れた息を整えながら、傾いた机に手を置いた。

「……?……」

ふと、乱雑する床の器材や瓦礫の隙間に落ちる小匣が目に入った。

フィリオがここを立ち去る際にベルローズに手渡していたものだ。

ライズはそれを拾い上げた。

掌大の小さな桐の匣。

しげしげと見やり、ライズは蓋を開けた。

(……!!!!)

中に入っていたのは、赤い赤いひとかけら。

「これ……ルビー……!!?」

「そつよ」

肯定する声はすぐ背後から聞こえた。

ライズは弾かれたように振り返る。

そこには、美しい肢体の端々を無惨に潰され、ひしゃげさせたベルローズの姿があった。

顔の半分は歪んで赤黒い血に塗れた金髪に覆われている。

ライズが息を飲む。

「……我ながら酷いことをしたな」

「あら、優しいのね」

「酷いとは思っけど、間違っただとは思わない」

「ふふ」

常人ならばすでに死に至っている重傷を負いながらも、平然と笑うベルローズの姿は凄絶を極めた。

「痛そうだね」

「ええ、とつても」

「……ばけもの人妖」

「あなただって似たようなものじゃない」

口元に伝う血を舐めて、ベルローズが不気味に歪んだ指で自身の髪を撫でた。

「なんであたしが、ルビーも使わないでまだ立っていられるかわかる？」

突然の問いに、ライズは眉をひそめた。

「わからないでしょうね……」。

あなたのおかげなのよ。

あなたのドロドロした心のおかげ」

「……キミはよくその“ドロドロ”っていう単語を使っよね……。何、それ」

「つぶつぶ……、言葉のまんまよ?……」。

心の中にある……怒りや憎しみや嫉妬 ……

その感情が ……あたし達の生命になる……」

ベルローズがライズに向かって指をさした。

「あなたの中にはとつても大きな憎しみがある。

……あるいは怒り……?」

心の奥に押し込んで隠しても、わかるヒトにはわかるのよ。

あなたは世界を憎んでいるわ。

…あのナイトメア以上にね……」

その指摘に、ライズが ……笑った。

「俺がいつ世界への憎しみを“隠した”？」

ライズはルビーを懐に入れ、空になった小匣を床に落とす。

「俺は一度たりとも『世界を救いたい』なんて口にしたことはないよ」

「 ……なら何故あたし達に敵対するの？」

傷のせいか、ベルローズの声が囁くように細い。

「たとえルビーによって世界が滅ぶとしても、あなたは死なないじゃない。」

あなただけじゃないわ。

あなたに近しい人間はファントム・コードにしかないんですよ。

だったら、あなたに近しい人間もルビーの毒で死にはしない。

あなたは何を守るためにナイトメアと戦うの？

……」

そう言って、ベルローズが小さく咳き込む。

その拍子に、紅の唇から赤黒い血が溢れた。

弱々しく、擦れた声が漏れる。

「ああ ……、駄目ね ……、残念だけど ……
これ以上は ……無理 ……」

そう言って、ベルローズの姿が織物がほつれるようにして崩れてゆく。

「また会いましょおね ……、坊や ……」

そうしてベルローズの姿も、気配も消えた。

緊張の糸が切れたかのように、ライズが膝から崩れ落ちた。

「 ……逃げたか ……」

仕留め損ねたのは悔やまれるが、大人しく引き下がってくれたのは何よりだ。

あの傷ならばすぐに回復は出来まい。

少なくともキリエの方を追っていく余裕はないはず。

なんとかごまかしきれたが、正直ライズも立っているのがやっとの状態だった。

ベルローズがそれを見抜き、捨て身で迫っても来られたら本当に危なかった。

もつとも、マリオンを殺すつもりはないという言葉を信じるならば、必然ともいえる結末だったのかもしれないが。

…それに収穫もあつた。

ライズは懐から“それ”を取り出す。

「……………ルビー・エーテル……………」

鮮やかに輝く紅の水晶。

まるで生命を宿しているかのように脈打ちながら煌めく。

…ドクン、ドクン、

……………

ライズはそれを掌に感じながら、僅かに苦い笑みをその唇に浮かべた。

「……………なんだよ、

何がそんなに嬉しい…？」

その鼓動を、ライズは歓喜だと感じた。

「俺が味方に見えるのか？」

“世界を滅ぼす最兇兵器” ……」

血の通わぬはずの小さな石が、どこか熱を帯びた輝きでライズの掌を撫でた。

*

【フィリオの狂気】

夜の街、

先ほどまでフィリオがいた家の方角から轟音がした。

何事かと窓を開ける住民たちにも目もくれず、フィリオは馬を駆る。

… どうしてこうなったのだろう。

頭をかすめたそんな疑問を振り払い、フィリオはただ一点、目の前の闇だけを見つめた。

どうせ、もう引き返せない道だ。

フィリオはそういう道を選んだのだ。

石造りの街並みを抜けて城壁を飛び越え、市街から出た。

そのまま夜の闇に駆け込もうとしたフィリオの行く手に、突然流星にも似た何かが墜落した。

驚いた馬がいなくな。

大地に食い込むようにして突き立っていたのは白金の盾だった。

眉をひそめながら、フィリオが振り向く。

夜空の月をその背に負って天馬を立てる女の姿。

… キリエ。

「ベルローズ……、
しくじったの？……」

何の感情も窺えぬフィリオの声音に、キリエが苦々しさの色濃い顔を向けた。

味方を気遣うという気さえないのだ。

……どうしてそんな風になってしまったのか。

「……逃がさない」

「……結局、キリエちゃんは僕をどうしたいの？」

謝って欲しいの？

それとも死んで欲しいの？

だったら最初からあの盾を背後から投げるとき、僕の行く手じゃなくて僕の後頭部を狙えば良かったのに」

そのセリフに、キリエは天馬のたてがみを握る手に力を込めた。

「……死んで欲しくはないわ。

肉親なのなもの。

けれどあなたが自分のした事を少しも省みるつもりもなく、

これからもレイン＝ナイトメアやルビー・エーテルに関わるつもりなら、

それも仕方のないことだと思ってる。

……私はね」

「……何、その付け足し」

キリエが何かを堪えるように深緑の瞳を滲ませる。

「……お兄さまは、そうは思っていないわ。

何かなんでもあなたを救おうとするでしょう。」

たとえそれが叶わなくとも、お兄さまはあなたの命を諦めることを決断できはしない」

…だから。

ずっとキリエが決めていたこと。

レックスよりも先にフィリオに接触すること。

当たり前前の感情として、レックスはキリエとフィリオならば、自分を慕ってくれるキリエの方が“より”可愛いだろう。

だが比較など意味はない。

それはレックスがフィリオを愛していないことを意味しないのだから。

レックスがフィリオを可愛く思っていることをキリエは知っている。

だが、キリエはフィリオを可愛いとは思っていない。

姉と弟とは言っても、キリエとフィリオは双子だ。

そう言った感情を抱くには無理がある。

生来の性格もあるだろうが、対等の関係である限りキリエは、レックスのような寛容な気持ちでフィリオを愛することは出来ない。許すことが出来ない。

肉親としての情はある。

けれど …

「これ以上、家族の手によって家族を失うのは嫌」

レックスにフィリオは殺せない。

だが、フィリオは容易くレックスを殺すだろう。

肉親殺しは既にフィリオが犯した罪。

実の両親の命を容易くレインに捧げたこの弟は、自身の劣等感の象徴ともいえる異母兄の命になど何の執着も見せないに違いない。

「私がおあなたにお兄さまを殺させないわ」

フィリオの馬の前に墜ちた盾が、輝きながら溶けて吸い寄せられるようにキリエの手元に帰る。

キリエはそのままそれをフィリオに向けてかざした。

「あなた次第なのよ、
フィリオ。」

おとなしく捕虜になって頂戴。

レインに組することをやめて、ルビーの創造に関わったことを悔い改めて。

あなたがしてきたことは決して許されることではないの。どうかそれを分かって。

私はあなたを許せない。

けれどあなたに死んで欲しいと思ったことはないわ。

お願いよ、フィリオ。

お兄さまはあなたを愛しているわ。

私だってあなたをまだ家族だと思っているの。

あなたに罪を償うつつもりがあれば、私達はそのために何でもする。

…けれど、あなたが少しの罪の意識もないというのなら、これ以上の罪を犯させないために私は何でもする」

揺るぎないキリエの瞳。

それを見返すフィリオの眼は昏い。

「それはお願いじゃなくて脅しって言うんだよ、キリエちゃん」

「何だって構わないわ。

おとなしくしていて。

抵抗するなら力づくであなたを捕える」

フィリオは自身を“武闘派ではない”と言った。

たとえ抵抗されたとしても、キリエにかかれれば捕縛は容易いだろう。

「……ああ、嫌になるなあ……もう……」

フィリオが呟く。

まるでふてくされたような、子ども染みだした声。

「同じ年なのに、姉さん面してさ……」。

自分の持論の正しさをまったく疑ってない、って感じだよな……。
腹立つ……」

「フィリオ」

「『善悪の定義』なんて、ただ単に大多数だっただけの側の人間が決めたものでしかないのにさ。」

そんなのを誇らしげに振りかざしても、そんなのキリエちゃんの主観でしかないだろ。」

キリエちゃんも所詮、過半数側の人間っただけなんだよ」

「……それは、レインの入れ知恵なの？」

フィリオはぴくり、と眉を上げた。

「……そうだよ。」

ナイトメアさんが言ったんだ。

『正義』ってのは数の上で上回った『勝者』っただけで名乗れる称号なんだよ。」

『悪』のレットルはいつだって少数派の『敗者』が背負うんだ」

だから、とフィリオは続ける。

「人間を減らして、僕達が過半数側になる。
そうすれば僕は『悪』じゃない」

その瞬間、フィリオの昏く沈んでいた瞳によぎった狂気の色に、キリエは背筋をあわ立てた。

…心酔している。

フィリオのレインに対する感情が、ここまでのものになっているとは思っていなかった。

「フィリオ……！！
あなた……！！」

「だからその為に、僕はルビーを造らなきゃいけないんだ」

たとえ何を犠牲にしても。
どうせ引き返せない道だ。

フィリオが懐から小さな瓶を取り出した。

木の実か干菓子を詰めたものだ。

…いつもならば。

フィリオは慣れた手つきでその蓋を開ける。

上向いた顔の上で、開けた口の上でそれを逆さに回した。

不審に思いつつもそれを傍観“してしまった”キリエの視線の先で、

フィリオの掲げた瓶の口から『それ』は零れ落ちた。

…煌めく紅水晶。

「…ルビー!？」

フィリオっ!？」

絶望に似た悲鳴。

キリエが叫ぶ。

制止の間も与えぬまま、フィリオは『それ』を飲み込んだ。

……ド……ク……ン……!……!

「……はッ……はぁッ……」

フィリオが馬上で呻き、胸を押さえ込む。

呼吸が荒い。

キリエは目を離せないまま、身動きも出来なかった。

…これは何。

何が起きようとしている？

何が“起きてしまう”の？

「……ッ……あ……」

…フィリオの呼吸が整ってゆく。

(……やめて)

その顔を上げないで。

その顔を見せないで。

その罪を見せないで。

…声なき懇願は月光の下で消える。

フィリオが顔を上げる。

キリエはそれをしかと見据えてしまった。

明かりとしては乏しい月の光でも明らかかな、フィリオの顔色。

元々白い顔ではあった。

だが…

「フィリオ……」

……うそでしょ……」

明らかに、フィリオの顔色が変わった。

それはまるで白蛾のような…

「どうせ、いつかこうするつもりだったんだ……」

白い唇でそう言ったフィリオの声は陰鬱として、よどんだ瞳には生氣がない。

「……なんてことを……」

もう取り返しがつかない。

本当ならば長い時間を経て変異するはずだ。
体内で発生するゴーレムの屍毒により変異するはず。

だが、ルビー・エーテルはゴーレムの屍毒により造られる。
もしくは、人間の血液によって。

それを直接体内に入れることによって ……

「《白い血の民》に……」

「……もうこれで、説得なんて馬鹿馬鹿しくなっただろ？……」

蒼白の貌。

嘲笑を含んだ声。

…なぜ。

「どうしてそこまで……」

キリエの瞳が渗む。

「どうしてそこまで私達を拒むの……！？……」

涙が一筋、頬を伝った。

……もう取り返しがつかない。

「僕は悪くない……」

…フィリオは呟く。

何もしていない。

ただ“向いていなかった”というだけで、フィリオを罵った母。

彼女は夫の連れ子であるレックスにだけは家督を継がせたくなかったのだ。

…ただそれだけ。

その証拠にレックスが家を出奔してからは、フィリオを罵ったりしなくなった代わりに、一切の関心を示さなくなった。

彼女は造獣師の世界に興味がなかった。

レックスさえいなくなれば、無理にフィリオを当主に据える必要がない。

そして母は、将来貴族との縁組みをさせようと、キリエの教育に熱心になった。

…そうしてフィリオは打ち棄てられた。

「二度と僕の前に顔を見せないでくれる？……」

フィリオがキリエを見上げた。

その視線をなぞったかのように、月影から黒い触手が現れて空中のキリエに向かう。

茫然自失としていたキリエは、それに何の反応も出来なかった。

天馬の足元をまともに突き崩されて、弾かれながら落下する。

高さをいうならば、キリエのいた位置は落下したところで死にはしない高さだった。

だが、生身のままで受け身を取り損ね、キリエはその衝撃に息を詰まらせて起き上がれない。

「う……ぐっ……」

口の中に血の味が滲んだ。

すぐそばで土が踏みしめられる音がした。

キリエは倒れ伏したまま、やっとの事で顔を上げる。

「フィリ……オ……」

蒼白の顔で、黒馬の上からキリエを見下ろすフィリオの姿が見えた。その目は凍み入るほどに冷たくて ……

「フィリオ……」

キリエの流した涙が土に落ちた。

フィリオの黒馬が、キリエの頭上で蹄の脚を振り上げた。

…鈍い音が、

夜空に響いた。

…

*
*
*

【15】神騎匠の一族（後書き）

ようやくジェラルディンの話です。

まだ続きはありますが、とりあえず今回はここまで。

レックスとキリエは異母兄妹でした。

だから似てないんです。

さらに言うとキリエ達の母は、パトリスがアルマと駆け落ちする前に縁談があつた豪商のお嬢さんです。

だから余計にレックスが憎かつたわけです。

この辺りのドロドロは、横溝正史の小説に影響されている……つもり。

では、次回。

おまけ登場人物設定

【フィリオ＝ジェラルディン】
造獣師

17歳 / 160cm / AB型

藍色の髪 / 青銅の瞳

卑屈 / 人見知り / 客観的 / 陰気

【ベルローズ＝ロベリン】

白い血の民

外見年齢25歳 / 163cm / B型

金髪 / 碧眼

蓮っ葉／奔放／酷薄／妖艶

初の敵キャラ設定です。

ベルローズはこの物語内では少し特殊な女性キャラとして描いています。

下品なくらいなお色気を想定してください。

フィリオはキリエとはとことん正反対に、不健康でネクラな男の子に。

体格も大柄なキリエとは反対に小柄に。

人付き合いが苦手って所だけ共通、かな？

【16】王を巡る考察

神は思想の具現

思想は願ひ

願ひは渴き

渴きは虚無

虚無は、わたし

【Episode:0】

…黄金色の地平が彼方で揺れる。

抜けるような蒼い空に君臨する太陽は、この日も容赦のない日差しを大地に落とした。

聖地ヴァナディース、

高台にそびえる石造りの神殿。

白い威容はさながら信仰の象徴のようだ。

その神殿の、とある一室。

「…聖地は変わらず穏やかで、安堵しました」

開いたバルコニーから簾越しに風が入ってきた。
穏やかに笑んだ女性の髪が揺れる。

その女性は年の頃40の半ばか。
しかしながら年齢を超越した美貌をたたえていた。

その女性に向かい合って座るのは、薄い紗を頭にかぶった女神官だった。

「7年ぶりの砂漠越えはさぞお辛いものでしょう、クローディアさま」

「そうね、でもあと10年くらいは通えそうよ。
わたくし妾もまだまだ若いみたいですよ」

茶目つ気を含ませたクローディアの言葉に、「まあ」と女神官が笑う。

「帝都はもう落ち着かれました?」

「ええ。」

陛下の葬儀もつつがなく。

まだまだ波乱はありそうだけれど、じきに収まるでしょう」

「そうですか」

そう言って、女神官が水差しからグラスに水を注ぐ。

柑橘の皮を削いだものを浮かべてあり、砂糖で薄く味をつけたものだ。

「そなたはますます美しくなりましたね、ユーリン」

突然の賛辞に、女神官・ユーリンが目を丸くした。そしてすぐに自嘲したように笑う。

「いやですわ、

お気を使われては」

「本心ですよ。

そなたは自分が思っているよりずっと美しいわ。

前に会ったときよりもさらに。

何かあったのかしら」

「もう、おやめ下さいまし、クローディアさま」

頬を薄く染めてユーリンが困ったように笑う。

そのとき、クローディアの視線がユーリンから横にずれ、ユーリンの背後の方に注がれた。

首を傾げ、ユーリンは振り返ってクローディアの視線をなぞった。

「あ」

白い石柱の影からこちらを覗きこむようにして立つ子どもがいた。ユーリンがするりと立ち上がって歩み寄る。

「どっしした？」

起きてしまった？」

膝をつき、ユーリンはその子どもに視線を合わせる。
目をこすりながら頷いた子どもが、ユーリンの袖を握った。

そのあどけない仕草に、クローディアが「まあ」と声を零した。

「なんて可愛らしい」

その声に、ユーリンが苦笑しながらクローディアに顔を向けた。

「失礼をいたしました、
クローディアさま。」

後ほど紹介をしようと思っていたのですが、この時間は昼寝をさせていたので……」

「ええ、この暑さでは昼間に外へは遊びにも出せませんからね。
それにしても、なんて愛らしい……」

…その子は？」

ユーリンの袖にしがみついたその子どもが、クローディアの方を窺うように覗きこんだ。

その子の頭を撫でながら、ユーリンが微笑う。

「半年前にイリアスが連れてまいりました子でございます。
どこぞの森で拾ったとか。」

あれには巡教やら務めがございますゆえ、わたくしに預けてゆきま
した」

「イリアスが？」

クローディアは首を傾け、ユーリンが目の前に連れてきた子どもの顔をまじまじと眺めた。

すべらかな黒髪、

真紅の瞳は射るほどに強い色のくせに浮かべる表情があまりに無垢で、つい笑みがこぼれてしまう。

「お名前は？」

クローディアが微笑みながら訊ねる。

しかし子どもはユーリンにすがりついて顔を隠してしまった。

「あらあら」

「ご挨拶なさいな、

眠たいの？」

ユーリンが子どもの髪を撫でる。

「すみません、クローディアさま」

クローディアは笑って首を振る。

「構いませんよ、怖い夢でも見たのでしよう。

かわいそうだから、寝かしつけてきてあげなさい」

「ええ……、それではお言葉に甘えて……。」

大変失礼ながら、少し席を外させて頂きますわ」

「大丈夫ですよ、
気にせずに行ってらっしゃい」

困ったような笑みでユーリンがお辞儀をし、そして子どもの小さく
柔らかい手を取った。

部屋を出て行く2人の背中を見送りながら、クローディアは得心し
ていた。

…そういうこと。

「そうね……」

静かな、眩き。

「本来なら美しいものなのだわ……」。

『母親』というのは「

*

「あのひと、だれ？」

石造りの廊下を手を引かれながら歩く子どもが、手を引く女を見上
げて問うた。

ユーリンがふわりと笑んで見下ろす。

「あの方は聖女クローディア。

昔ここで私にいろいろな事を教えてくれたひと。

次に会ったら、ちゃんとご挨拶するんだよ」

そっとユーリンが子どもの頬をつつく。

しかし、子どもはさすがのような目でユーリンを見た。

「……あのひと、こわい」

「え？」

「……こわい」

子どもが拗ねたような目を伏せた。

もじもじと裾を握り、ユーリンの服に顔を近づめる。

ユーリンは困ったような複雑な表情を浮かべた。

なぐさめるように子どもの頭を撫でる。

「お前がそんなことを言うなんて初めてだね……、

どうしたの？

クリスタル」

子どもは答えないうまま、ただユーリンにしがみついて息をひそめた。

…

【Route】

「……で、

ヴィヴィとエレナは今どこで何してんだ？」

とある宿場町、

その一軒の宿の一室にて。

窓枠から覗く月が淡い。

給仕の者が夕食を円卓に並べ終えて部屋を出て行ってから、ドルサツクが口を開いた。

ユーリンが大皿の炒め物を小皿に取り分け、それを両脇のドルサツクとクリスの前に置いた。

向かいのケイヴィンの分はドルサツクに渡して回してもらおう。

ドルサツクと正面に向かい合う席についたクリスが、その間に簡潔に答えた。

「さんくれーる」

「サンクレール？」

「どこだ？、それ」

ユーリンが匙を持つ手を止めた。

「ここから西にある林業都市だろう。」

アイーダウツドの北だ」

「ほお？」

クリスはそのユーリンの言葉に、少しキョトンとしてしまった。

この土地に飛ばされる前、クリスはサンクレールを目指して“東”へ向かっていたからだ。

いつの間にか通り過ぎてしまっている。

そんなクリスの様子に気付かないまま（クリスは元々表情に乏しい）、ドルサツクは残された左手で器用に匙を扱いながらクリスを見た。

「そこに2人がいるわけだな？

どういう経緯でそうなったんだ？

セナ砦が壊滅した後、どうやって合流した？

お前、しばらくはイリアスと一緒にいたわけだろ、

ヴィヴィとカトリはどうやって助かったんだ？」

あの未曾有の大惨事から。

ドルサツクにはそれが疑問だった。

クリスはただどどしく、口を開く。

「……助けてくれたひとがいた」

「助けてくれた？」

「エレナはそうやって助けてもらった。

カトリは、助けてもらっ前にさらわれてた」

その言葉に、ドルサックとケイヴィンが息を飲む。

あの日、あの惨事が起こる直前に見た光景。

中庭から見上げたバルコニーに、見知らぬ背中とエレナの叫び声。

「カトリ」と。

「あのときに、砦の中に侵入者がいたわけか……、
やられたな……」

クリスは軽く頷く。

「エレナを助けてくれたひとは、元々はカトリを助けに来た。

けれど、カトリがさらわれてしまったからエレナを助けて一緒に助けに行こうとした、って言うってた」

「ん？、ちよつと待て。

そのエレナを助けた奴は、そいつもあのときに砦の中にいたのか？」

「そう」

「侵入して、か？」

それとも元々砦の中に紛れて？」

「あの日しのびこんでた、って言うってた」

ライズの話だ。

彼のゴーレムの特性を考えれば、まったく不思議な話ではない。

だがドルサツクはそれを知らない。
クリスも説明すべきか迷っている。
ファントム・コードは秘密主義だからだ。

ドルサツクは匙を持ったままの手で頭を掻いた。
作法の悪さに、ユーリンが軽く眉根を寄せる。

「まいったな、そんな何人も侵入者を許してたのか。

…で、そいつは最初はカトリを助けるつもりだった？」

クリスがこくりと頷く。

「カトリの知り合いか？」

「そのときはちがう」

「？、要領を得ねえな。

……そういえば、カトリが攫われた、って言ったな？
なんでまた？」

「……よく知らない」

事実である。

クリスはその理由を詳しくは理解していない。

ルビー・エーテルやファントムに関わることを話せないとすると、
こう答えるしかなかった。

ドルサツクはクリスが嘘偽りを口にするなどと露ほども思っていない

いので、そうか、とだけ返した。

「どこのどいつだ？」

そのカトリを攫った奴は。

タイミングから言っつて、マラバール関係か」

「そう。……だと思っつ。」

さらわれた先が、マラバールの領主府だから」

「……………」

ドルサツクは考え込んだ。

歌鳥の素性について、改めて何か思い始めたようだ。

それに対して何か伝えようにも、クリスも歌鳥の事情を説明出来るほどよく理解していない。

『虹姫』という呼び名は聞いているが、それはファントム・コードに関わるもののような気がして、迂濶に口に出出来ない気がした。

クリスはドルサツクの沈黙を破るように口を開いた。

「おれは、イリアスが死んでからしばらくドルサツク達を探してた。

そのときに、カトリを助けに行ったひとの仲間に来て、手伝った」

「手伝った？」

カトリの救出か」

「ちがう。

反乱軍の、残党狩り？ってというのがいろんな村で起きてて、そのいろんな村を守る手伝い」

それを聞き、ドルサツクが眉間に皺を刻んだ。

残党狩り、という単語に嫌悪感を抱いたようだった。

クリスは続ける。

「おれは最初、カトリがさらわれたこともエレナが誰かと一緒にいることも知らなかったけど、

手伝え、と言ったひとが後でいろいろ教えてくれた。

それでそのひと達のおかげで、おれとカトリとエレナが一緒になれた」

「……ふ……ん、

で、今は“そのひと達”とヴィヴィとカトリが一緒にいるわけか？」

「そう。

先にセヴァルスタを出た。

おれはしばらく残ってドルサツク達を探してた。

でも見つからなくて、おれもセヴァルスタを出た。

それで、いろいろあって、カトリやエレナとさんくねーるで合流する予定になった」

クリスの話が一旦途切れ、ドルサツクが軽く息を吐いた。

「いろいろ……ねえ。」

「そっぴゃお前、なんでこんな所にいたんだ？」

「セヴァルスタとそのサンクレールじゃ、ここら辺はまったく通り道でもねえだろうに。」

「つか、なんで荷物も何もねえんだ？」

「槍はどうした？」

「……あ」

「言っつて、クリスは途方に暮れた。」

「置いてきたままだ。」

『異界』に飛ばされる直前に居た農村に。」

「……どうしよう」

「あ？」

「……置いてきた村があるけど、わからない」

「……??？」

「……忘れたのか？」

「どこの村だよ」

「せどなとさんくれーるの間」

「ユーリンが首を傾げる。」

「セドナ……？」

西の畜産地域か？

サンクレールの更に向こうだぞ？」

クリスは頷く。

「そう」

「そう、って……」

わけがわからない。

ドルサツクは軽く頭を抱えた。

クリスが嘘やでたらめを言うわけがないので、何かの勘違いが起きているとしか思えない。

ドルサツクが席を立ち、荷物の中から地図を取り出して来た。それを円卓の上に広げるのを見て、ユーリンが顔をしかめた。

「食事中だ」

「まあいいじゃねえか。

え〜と、いま俺らがいるのがここだろ？

で、俺らの目的地のアイーダウッドがここ、

クリスの目的地のサンクレールがここ、か……。

ちっとばかり遠回りだな」

隣でおとなしく食事をしていたケイヴィンが身を乗り出してドルサツクが広げた地図を覗きこむ。

「このくらいなら、大丈夫じゃないの？」

俺、ヴィヴィ姉とカトリに会いたいなあ……、
駄目？、ユーリン」

「席に座りなさい、
お行儀が悪い」

そう言つてユーリンが指でケイヴィンの立ち膝を示した。
少々罰の悪い表情でケイヴィンが素直に席につく。

それを見て頷き、ユーリンが笑む。

「よろしい。

…私がかまわない。

たいした寄り道にはならないだろう。

それに真つ直ぐにアイダウッドに向かうよりも、返つてルートが
異なる方が良くかもしれないな。

ヴァナディースで遭つた刺客には仲間がいたかもしれないわけだし、
だとしたら追つ手を欺ける」

ドルサツクが頷く。

「だな。

俺もクリスやヴィヴィが世話になつたつう連中に礼を言っておき
たいし。

イリアスに代わつてな」

「じゃあ、決まりだ！」

ケイヴィンが嬉しそうに笑った。
クリスが首を傾げる。

「なにが？」

「なになに……」

ドルサックとケイヴィンが呆れてクリスの顔を見た。
話の流れでわからないか。

「一緒にサンクレールに行こう、って話だよ」

「なに聞いてたの、クリス……」

クリスはキョトンとして、しばらくして頷いた。

「そうか」

その様子に、ユーリンがくすくすと笑った。

【Another Communication】

林業都市 サンクレール。

とある宿の一室で、女が横たわるベッドの枕元に腰掛けながら、窓の外の真昼の騒めきに耳を傾ける少女がいた。

歌鳥である。

ベッドに眠るアイラの意識はまだ戻らない。

1日2日で治るような怪我ではないので、眠っていた方が本人は楽かもしれないが。

医者代わりにレックスは、午前ロイドに話があると出て行ったきりまだ戻らない。

家族に関する話だ、と言っていた。

レックスにはレックスで、どうやら複雑な事情があったらしい。

それとは関係しないが、歌鳥には歌鳥で気がかりがある。

(ヴィヴィちゃん……)

事後的に記憶を失い、姿を消してしまった友人。

先ほどアイラの父・ワヤンが搜索に出てくれたが、おそらく昨日の時点で街を出てしまっている。

あてもなく探して、見つかるものだろうか。

(ヴィヴィちゃんなら、どこへ行く……)

歌鳥は考える。

しかし歌鳥には、ヴィヴィがどの程度の記憶を失ったのか判断する材料がない。

セヴァルスタに戻ると考えるのが一番妥当だろうか。

だが、ヴィヴィはセヴァルスタで起きたことを憶えているだろうか。

歌鳥のことを忘れてしまっている。
それはまだいい。

問題はクリスのことを忘れてしまっているらしいということだ。

クリスは歌鳥ほどヴィヴィと仲良くはなかったようだが、付き合いが長い。

親しくはなかったが、近しい人間だった。

そんなクリスを忘れてしまっているというのは、ヴィヴィの記憶にとつてかなりの欠落だろう。

それによって起こる混乱が歌鳥には予測出来ない。

(無事でいて……)

祈るような気持ちで、歌鳥は小さなため息を吐いた。

…そのとき扉をノックする音がして、歌鳥は顔を上げた。

「はい、どうぞ」

歌鳥の声に、静かに扉が開く。

顔を出したのはクローディアだった。

「御苦労様。

アイラの具合は？」

「あ、はい。

昨日よりはだいぶ良いみたいです。

痛む様子もないですし。
まだ目は覚めないようですけど……」

「そう」

言って、クローディアは部屋に置いてあった椅子のひとつに腰掛けた。

「クローディアさまは、お加減はいかがですか？」

歌鳥の言葉に、クローディアがふわりと笑む。

「ええ、大丈夫ですよ。

ありがとうございます」

「よかった」

歌鳥も笑んで返した。

歌鳥はこの国の人間ではない。

生まれ育った異界では、貴族や王族といった身分はまったく別世界の仕組みだった。

そのためか、クローディアに対しても“偉い人”という認識はあっても、過剰な崇敬の念は湧かない。

ましてクローディア本人が親しげに声をかけてくれるので、歌鳥も自然と打ち解けた態度になる。

ただ、年齢を不問とする美貌には少し気圧されるが。

歌鳥はつと、ベッドに眠るアイラの顔を見た。

アイラに重傷を負わせたのは『シャドウ』と呼ばれる異形の妖。その“元”となったのは、かつてロイドと近い関係にあった女。

…レベッカ。

ロイドへの想いが叶わず、嫉妬のために道を踏み外した女。『シャドウ』と呼ばれる妖に墮ち、“インプット”された獲物を狩っていた。

その“インプット”された獲物の中には、歌鳥とアイラも含まれていた。

レベッカはクロードディアには興味を示さなかった。

今になって思い至る。

レベッカが狙った獲物。

それはロイドの花嫁になりうる年頃の女たち。

今現在なら歌鳥たちよりもクロードディアの方がロイドと年齢が近いが、

レベッカの時間は20年近く前に止まってしまっていたのだろう。

レベッカは歌鳥やアイラを見て「きれい」と言った。地を這うように病的な、それでいて甘ったるい声で。

美しさを言うならば、クロードディアだって美しい。

しかしクロードディアは若くは見えない。

若々しい、という表現は出来るが、年齢相応の美貌である。

レベツカがクローディアを無視した理由は、彼女が憎んだロイドの妻とクローディアは年代が異なりすぎたからだろう。

異形に堕ちてなお消えぬ執念に、歌鳥は背筋が凍る思いがした。

クローディアが首を傾げて歌鳥を見た。

「どうかしましたか？」

その声に、歌鳥ははっとして顔を上げた。

「いえ、大丈夫です。」

いろいろ考えてしまうことがあって ……

「そう。」

…そうでしょうね

頷いたクローディアの髪が揺れる。
今度は歌鳥が首を傾げた。

ふと、何かを思い出しかけた。

初めてクローディアに会った日に ……

そうして歌鳥は「あ」と小さく声を零した。

「あの……クローディアさま」

「何か？」

「イリアスという人を憶えてらっしゃいますか？」

…その言葉に、クローディアの瞳が揺らいで見えた。

「……イリアス」

「はい。」

あの、私……セヴァルスタでその人のお世話になったものだから

クローディアは静かに、ただしげしげと歌鳥を見やった。

「…そう。そうでしたね。」

そなたはセヴァルスタにいたのでしたね。

ワヤンに聞いていたのを失念しておりました」

「ワヤンさん」

「ええ。 ……」

言って、クローディアは小さく息を吐いた。

「イリアス……。」

あの子のことはよく憶えておりますよ。

昔、妾めかけの部屋付きとして修行していましたからね。

とても聡明な子でした。

ずいぶん不似合いな最期を遂げたと聞きましたが

…」

「……はこ」

伏せた睫毛が歌鳥の濃紺の瞳を陰らせる。
クローディアがわずかに目を細めた。

「そなたはイリアスとは親しかったのですか？」

歌鳥は緩く頷く。

「たぶん……」。

素性の知れない私にとっても親切にして下さいました」

「そう」

「それに……」

言って、歌鳥は少し言葉に迷う。

「私の…友達が、イリアスさんのこと大好きだったから」

「友達？」

はい、と歌鳥は頷く。

「イリアスさんが育ての親なのだそうです。
とても慕っているようでした。」

イリアスさんを看取ったのも彼です。
それを聞いて、私、どう慰めたらいいのかわからなかった……」

歌鳥はクリスの拙い嗚咽を思い出す。

今でも刺すような細い痛みを、そっと胸を押さえた。

クローディアがわずかに目を伏せた。
感情の色を隠すように。

「……その子は、イリアスを愛していたかしら」

その言葉に、歌鳥は顔を上げた。
まっすぐに見たクローディアの表情は、どんな感情を湛えているのか判断がつかぬほど複雑に見えた。

歌鳥は答える。

「…はい、きっと。」

クリスくん……、彼だけじゃありません。

セヴァルスタにいた、イリアスさんと共に戦っていた人たちは皆、イリアスさんのことが大好きだったように見えましたもの」

「…そう」

呟くように言って、クローディアはついと窓の外に目をやった。

「イリアス……か……。
懐かしいこと……」

その声音に滲む、哀しみとも淋しさともつかぬ色に、歌鳥はただクローディアの横顔を見つめた。

「クローディアさま……」

ふ、と息を吐き、クローディアは微笑んで歌鳥の方を見た。

「……ここは妾が看ていきましょう。」

そなたは少し休みなさい」

「……え、でも……」

クローディアはアイラの穏やかな寝顔を見やる。

「この様子ならば誰がついていても同じこと、

妾とて、ただ1人で部屋にこもるよりも意義がありましょう。」

そなたには今、気がかりなこともあるでしょうから」

歌鳥は迷うように視線を泳がせたが、しばし思案してコックリと頷いた。

「はい……、じゃあ、あの……、

よろしく願いします……」

ぺこりと頭を下げる歌鳥に、クローディアがにっこりと笑いかける。

そうして懐から小さな手帳くらいの大きさの本を取り出した。

表紙には題名が書かれていたが、歌鳥の知らない神話か何かのようだった。

(……聖書みたいなものかしら)

そう思い、部屋を出たところで歌鳥は違和感に気が付いた。

(…………あれ…………?)

何かがそぐわない。

歌鳥は立ち尽くしたままモヤモヤと思考を探る。

(何…………?、何か…………)

そうして

(…………!?!…………)

歌鳥ははつと口元を押さえた。

(私…………どうして!?)

先ほどクローディアが読み出した本の表紙。題名。

歌鳥はそれを ……

(読めた…………!?)

いや、読めたというのは正しくない。

正確には“理解した”

…そんな感じ。

歌鳥はこの国の文字を知らない。

異界からこちらに飛ばされて、必要に迫られなかったので文字を学んだこともなかった。

いずれは誰かに学ばないと、とは思っていたし、
イリアスの居室やレックスの作業部屋に置かれた本を見たことはあ
るが、それがどういうものなのか理解は出来なかった。
なのに。

(どうして……?)

歌鳥はこちらの文字がわからない。
なにか書け、と言われても無理だろう。

だが、歌鳥は先ほどのクローディアの本の題名を“理解”した。

書けはしない。
しかし、理解る。

記号の羅列から、それが何を意味しているかが理解出来た。

歌鳥はクローディアが取り出した本をなにかの教本だと思った。
そういう感じの“題名”だと。

正確に口に出してその“題名”を答えることは出来ない。
読めてはいないのだ。

しかしその“題名”が何を意味しているか ……、
言うなれば“雰囲気”、
それを感じた。

しかも歌鳥はそれに対して一片の疑いもなく確信的だった。

歌鳥はその感覚に激しく動揺する。

(なに、これ……)

歌鳥は踵を返す。

向かったのは、宿の1階のロビー。

確かチエックインの時に本棚があったのを見た記憶がある。

そのまま真っ直ぐにそこに向かい、その背表紙の列を眺めた。

(……理解る……)

読めはしない。

だが理解出来る。

この感覚を何と説明すれば良いのか。

犬を見て動物だと理解するように。

林檎を見て果物だと理解するように。

知識としての理解ではなく、感覚としての理解。

歌鳥はその中から適当に一冊を抜き取り、ページをめくり始めた。

それは詩編だった。

それが理解出来た。

(………)

目で追う文字はただの記号でしかない。

しかしそれらの組み合わせ、羅列。

それが歌鳥の頭にその意味を訴える。

季節の移ろう美しさを、
恋の喜びを、
大地の上の営みの素晴らしさを、
幸福への祈りを
…

(……理解る……)

これほどまで具体的に。

歌鳥は呆然としながらも静かに本を閉じた。

(……どうしよう……)

これは何。

これをどう理解すれば良いのだろう。
いったい自分に何が起きているのか
…

こんなことを誰かに訴えたとして、歌鳥はこれをどう説明したら……

「歌鳥？」

呆然と立ち尽くしていた歌鳥の背に、聞き慣れたバリトンの声が掛かった。

「ロイドさん……」

弱々しく絞り出した声。

振り向いた先に、背の高い漆黒の装いを見て何故だかほっとした。

ロイドは歌鳥の手にある本を見、眉を寄せた。

「……それ、読めるのか」

歌鳥はふるふると首を横に振る。

そして僅かに目を伏せた。

「……でも」

「理解するのか」

歌鳥ははっとして顔を上げた。

ロイドの声には何某かの確信のようなものが滲んでいる。

歌鳥はじっとロイドの顔を見つめた。

「なにか、知ってるんですか？」

その言葉に、ロイドの表情に苦いものが過った。

「……早いな……」

「えっ？」

「いや……」

ロイドはつかつかと歌鳥の傍に歩み寄り、その手から本をすっと取り上げた。

「詩編だな」

「はい。」

この詩は、恋の詩だと思えます。

……合ってますか」

「……ああ」

「文字はわからないんですけど……、意味はわかるんです。どうしてでしょう」

動揺はおさまり、歌鳥はただ困惑気味な声を発した。

ロイドは黙ってその本を棚に戻した。

「ロイドさん」

「……ちよつと来い」

そう言って、ロイドは歌鳥に軽く手招きをした。

素直に頷いた歌鳥が、階段を上がるロイドの背中を追う。

「お前、“こちら”に初めて来たときに不思議に思ったことはないか」

「不思議、ですか……？」

あの……正直に言つと何もかも不思議だったんですけど……」

その答に、ロイドが軽く苦笑する。

「そりゃそうだ。」

言い方が悪かったな。

俺が聞きたいのは、言葉の話だ」

「言葉……?」

廊下を歩きながら、2人は先ほど歌鳥が出て来た部屋の前にさしかかった。

中からレックスの声がしたから、アイラの容態を診ているのだろう。

そうしてロイドは、今は無人になった部屋のドアノブに手を掛ける。

「お前はこの国の人間ではない。」

それどころか、この世界の住人ですらない。

なのにこの国の人間とまったく同じ言語で話せているのは何故だ?」

かつん、と何かが頭に引つ掛った気がした。

「言語……」

「この世界には様々な国がある。」

文化も言語も異なる国々がな。

このリーヴダリル国の公用語は、ウィルカナス語という。

この言葉を使っているのはそのウィルカナスとリーヴダリル、あとはもう滅んだログクロートという東の国だけだ。

大陸においてはあまりメジャーな言語じゃない」

歌鳥は思い出した。

セナにたどり着いた直後の頃、イリアスとドルサツクの会話を立ち聞きしたことがあった。

そのとき、イリアスは歌鳥の名前とその意味について「東方辺りの民族の古い言語かもしれない」と言っていた。

その推理はまったく違ったが、歌鳥はその会話から、この世界に複数の言語があるのだということは理解していた。

（日本語じゃないんだ）

考えてみれば当たり前のことだ。

人々や土地の名前だって、まったく日本とは違う。

なのに。

「私、ずっと日本語で話してます」

「お前はな。」

だがこの国の連中は誰ひとりとして、お前と同じ言語で話してはいない」

「じゃあ、どうして」

扉を開けて、ロイドは雑な足取りで部屋の中央のソファーに向かった。

それと卓を挟んで向かいに置かれたもうひとつのソファアを歌鳥に示す。

頷き、歌鳥がそれに腰を下ろした。

「兆候は出ているだろうと思ってはいた。

だが少々ペースが早えな。

それだけ“お前ら”の存在構造が近いということか」

「？」

歌鳥が首を傾げる。

ロイドは懐から煙管を取り出した。

「お前の中に、

誰か“いる”か？」

唐突な問いかけに、歌鳥は目を見開いた。

「……………え？……………」

「いるはずだ。

お前がこちらの言語を理解したのも、こちらの文字が理解出来るようになってきたのも、お前自身の知識や感覚じゃない。

お前の“中”にいる奴の記憶なんだよ」

歌鳥は見開いたままの濃紺の瞳で、呆然とロイドを見つめた。

【ある教会のある1日】

東方ナスターシャ砂漠
聖地ヴァナデイス。

その外れに位置する小さな教会。
孤児院も兼ねるそこでは、遅めの朝食の支度が始まっていた。

「フリック！」

これお皿に盛り付けておいて」

声の主はこの孤児院で最年長の少女で、名前をサーシャという。
この孤児院では母親代わりに子ども達の面倒をみている。

サーシャの声に頷いた少年が鍋の傍に皿を運ぶ。

「プラム、神父さま呼んで来て」

「はい」

幼い少女が台所から駆けて出て行く。

残りの子ども達が食堂に集まってくる内に、幼女に手を引かれて僧服の男が入ってきた。

「おはようございます、
神父さま」

「おはようございます」

にっこりと笑って挨拶を返した男がこの教会を管理している神父、
名をクォーツといった。

「今日も暑くなりそうですね」

「ええ、本当に」

クォーツが席につき、食卓を囲んで置かれた椅子がそれぞれ子ども
達を迎える。

その中に、埋まらぬ席があった。

「神父さま、エツダさんは……」

表情を曇らせたサーシャに、クォーツが困ったような笑みを向けた。

「食欲がないようです。」

暑気負けかもしれません」

「また……ですか？」

エツダさん、ただでさえ食が細いのに……」

心配そうな表情で、サーシャが扉の方を見つめた。

「スープだけでも」

「そうですね、

部屋に運んでやってください。

今は休んでいるので、後でね」

頷き、サーシャは席について手を合わせた。
子ども達がそれに倣う。

全員が、上座に座ったクォーツを見た。

視線を受けて、クォーツがふわりと微笑んで手を合わせる。

「 …… それでは、地上の恵みと神の慈悲とに感謝を述べて」

「 頂きます」

「 頂きます」

肅々と、子ども達が食卓に一礼した。

…

食事を終えて、幼い子どもらは片付けもそこそこに広間の方に行ってしまった。

フリックとプラムが残って手伝うのを、クォーツが留める。

「 遊んでいらっしやい」

「 でも」

「 大丈夫、

小さい子らの面倒をみておやり」

そう言って2人の背を柔く押す。

皿をさげていたサーシャがそれを見て微笑んだ。

…ここに来てよかった。
本当に。

「神父さまもお部屋にどうぞ。
あとは私が」

サーシャの言葉に、クォーツが笑う。

「2人でやる方が早いでしょう」

当たり前という言葉に、サーシャがくすくすと笑った。

「……そうですね。
じゃあ、一緒に」

優しいひとだ。
とても。

「今日も出掛けるのですか？」

そう問われ、サーシャは一瞬キョトンとした。

「え？
…あ、……いえ」

ここ最近、サーシャは数日前に一度世話になった旅人の泊まる宿に、お礼とお詫びにと弁当を届けていた。
それによって彼の宿代も数食分は浮くはずだ、と。

だが …

「あまり続くと、返ってご迷惑みたいでしたので…」

「 ……おや？」

何かありましたか？」

いえ、とサーシャは首を横に振る。

遠慮をされるのは毎回のことだった。

迷惑だ、と言われたわけでもない。

……けれど。

「いつ聖地を出立するかもわからないから ……、

それがいつになるかは本当に未定だから、お弁当が無駄になると悪い……って」

「そうですね」

サーシャは少し落胆したように見える。

クオーツはそれを興味深げに見守った。

「出立の前にご挨拶でも出来たら良いですね」

「 ……はい」

食器を片付けた卓の上を布巾で拭きながら、クオーツがサーシャを見た。

「……では今日は久し振りに、少し相手をしてもらいましょうか」
サーシャが振り向き、「ああ」と頷く。

「本当、久し振りですね。
私、忘れちゃったかも」

「憶えているところからで構いませんよ。
私もしばらく弾いていないので、感覚が戻るか分かりませんし」

「手入れは一応定期的にしておいたんですけど……、
念のため、弦を張り直しておきましょうか」

「それは私が先に準備をしておくので、エツダの食事を頼めますか」
サーシャが頷いた。
いくらか機嫌が良くなったようにも見える。

鍋に向かうサーシャの背中を見送って、クォーツは重ねた皿を桶の
水に浸した。

そうして納戸に向かうと、子ども達が顔を出した。

「神父さま、なにをするの」

クォーツが微笑む。

「語り謡ですよ。」

久し振りにサーシャに謡ってもらおうかと思って「」

「サーシャちゃん、うたうの？」

プラムが嬉しそうに笑う。

クオーツが頷いた。

「だから琵琶を出そうと思ってね」

「きいてていい？」

子ども達の問いかけに、クオーツが笑った。

「勿論」

…

片手にスープを載せたトレイを持って、サーシャは扉をノックした。

「エツダさん、具合はどうですか」

中から物音がしたので起きている、と判断してサーシャは扉を開けた。

「…あら？」

「エイル、ここにいたの？」

カーテンを閉めた薄暗い室内、ベッドの足元に座り込む子どもが一人。

サーシャの義弟だ。

ベッドには体を起こして本を開いている青年がいる。
顔色が悪いのは常のこと。
表情が冷ややかなことも常のことだった。

「ごめんなさい、エツダさん。」

体調が悪いのに、お邪魔じゃなかったですか」

「いえ、さほど」

答えた声も感情の色を欠いて、とっつきにくい。

だが、どういうわけかエイルはこの青年になついているようだった。

近頃この子は反抗期気味で、サーシャに対してやたらと突っ掛かる。
しかもそれはクォーツに対しても言えることだった。

だがどういふわけかエイルはエツダにだけはやけに素直で、気がつ
けば彼のそばにいたがる。

……サーシャはそれに対し複雑な思いを抱いていた。

サーシャはエツダのことが苦手ではあるけれど、嫌いではない。
態度は冷淡だが、別に何か嫌なことを言われたり、されたりするわ
けでもない。

だが、なぜだろう。

エツダの傍にエイルがいることが、何か正体のわからない不安を呼
び起こす。

何故こんなにもそわそわと落ち着かない気分になるのだろう。

サーシャはぎこちなく笑ってエツダを見た。

「スープお持ちしました。
食欲がないということだったので……」。

少しでも召し上がってくださいね。
体力つげなきゃ」

「……ありがとうございます」

蒼い瞳を本から離して、エツダが一礼した。
ベッド脇の卓にトレイを置き、サーシャがエイルを見下ろす。

「……あんまりお邪魔しちゃ駄目よ」

その言葉に、エイルがぶいとそっぽを向いた。
サーシャは溜め息を押し殺す。

……一体なにが気にいらないのか。
サーシャにはまったくわからない。

【クローディアの出立】

「……それではお二人とも、行かれるのですか？」

サンクレールの宿の一室、未だ意識の戻らないアイラのための部屋。

長椅子に座るレックスと向かい合いながら、ワヤンが深く頭を下げた。

その傍らには端然とクローディアが座っている。

3人の座る2つの長椅子と卓から少し離れて、

窓際の椅子2つに2人の男女がレックス達のやりとりを見守る。

ロイドと歌鳥だ。

ワヤンが苦々しく口を開いた。

「誠に申し訳ない。

ジェラルディン殿には本来の依頼に加え、娘の治療までも請け負って頂いた。

しかしながら私は私に出来る限りの務めを果たすべきであったのも関わらず、結局エレナ殿の発見にも到らなかった」

“異変”のあった日から数日、ワヤンやロイド（そのゴーレムの必死の捜索にも関わらず、エレナは発見されなかった。

ロイドも首をひねる、見事に何の痕跡もない失踪だった。

いくらなんでも忽然とし過ぎている。

ゴーレムを所有しているのならまだしも、エレナは騎乗する馬も、あの時点では所持金もなかった。

金銭をどこかでどうにかして調達した形跡もない。

「^{わたくし}妾からもお詫びを。

妾や妾の身内のために人員を割けずに捜索がおろそかになったとい

うのに、それを半端に出立をしようなどと、さぞや良識を疑わしく思うでしょう。

けれど、これ以上は「

「アイーダウッドを留守にするわけにはいきませぬゆえ」

苦々しい表情で、ワヤンがクローディアから言葉を引き継いだ。

「これ以上、殿下の不在を隠し通すことは困難かと ……」

「それは ……、ええ」

今までどういう手段でごまかしていたのかは知らないが、確かにいつまでもこのままではいられまい。

クローディアは今現在、この国の最重要人物だ。所在不明などあってはならない。

レックスもその事情はなんとなくだが理解出来た。

「では …… アイラさんは我々がお預かりする、ということだ」

「大変恐縮ながら、そうして頂くことに。」

アイーダウッドへの帰還はかなりの強行手段をとることになります故、動けぬ者を同伴は ……」

「僕たちは構いませんが。」

ワヤンさんは兼任とはいえ正式にファントム・コードのメンバーで

すからね。

仲間の身内は身内みたいなものです。
何ら支障はありませんよ」

レックスが微笑してベッドに仰臥する女を見やる。

「ですが僕たちに預けられたとしても、お嬢さんの安全は保証されませんよ」

「……承知の上。」

お邪魔になることも承知の上でござるが、恥を忍んでお頼み申す」

そうしてワヤンが深々と頭を下げる。

レックスは困ったように部屋の隅に同室していたロイドに視線を向けた。

「構わない……ですよね」

「怪我人の世話はお前の仕事だ、俺が口出しする領分じゃねえ。
お前がいいなら、好きにしろ」

レックスが苦笑にも似た表情で笑った。

「じゃあ……そういうことで。」

アイラさんは責任を持ってお預かりします」

「かたじけない」

ワヤンは再び、深々と頭を下げた。

*

その翌日、クローディアはワヤンのみを伴ってサンクレールの街を出た。

顔と身分を隠して乗り合いの馬車に乗り込んだ2人を見送り、往來の真ん中で歌鳥は傍らに立つロイドを見上げた。

「……クローディアさまは、王になられるのでしょうか」

「さて、な……」

「ファントム・コードの予言には何も？」

ロイドがちらと歌鳥を見下ろした。
なかなか鋭いところを突いてくる。

「……知りたいのか？」

「……興味があります。」

ルビー・エーテルに世界が滅ぼされる前にこの国はどうなるのか」

「……クローディアは即位しない」

ロイドのその一言に、歌鳥の表情が曇る。

「……それって」

「歴史の修正がまだ追いついていないから何とも言えないが、少なくとも『軸の歴史』ではクローディアが女帝としてこの国を治

めるといふ記述はない。

『軸の歴史』ではクローディアは、今年の秋に失踪してそれきり歴史に名前が出てこないからだ」

「…………失踪…!？」

しい、とロイドが人差し指を立てて辺りを憚った。
歌鳥が慌てて口を塞ぐ。

「…………それって大事件なのでは…………」

「いや、そうでもない。

その半月後にバルカシオンが何者かに暗殺されるからな。
それに比べたら騒ぎは小さい」

「あんさッ…………」

歌鳥はくらりとめまいがした。

「…………なんだかあまりにもあっさりと大変なことを聞いてしまった
ような…………」

「ただの“予定”だ。

俺たちは未来を変えるために動いている。
それによっていくらでも未来は変わる」

言い放ったロイドは真っ直ぐに前を向いた。
歌鳥はそれを見やる。

「……変えるための未来……」

歌鳥は馬車が走り去って行った方角を見つめた。
もうその影は見えない。

「……他人の未来に、口出しするべきではないですよ……」

あくまでも“予定”だ。

未来は決まっていないからこそ『未来』と呼ばれる。

「……ああ」

ロイドが低く頷いた。

彼は歌鳥の言わんとすることを理解している。

“未来”は“今”の延長上にあるものだ。

クローディアに起き得る変事も、現在起きている“何か”によって
引き起こされるもの。

それはクローディア自身の意志が通う“今”でもあるだろう。

ファントム・コードの目的はルビー・エーテルによる世界崩壊の阻
止。

その為だけの予言。

どんな理由があろうと、他の目的のために利用されてはならない。
個人の感情の為に“未来”を変えるきっかけになってはならないの
だ。

（クローディアさまを助けたいと思うのは、ただの個人的な感情）

その為にファントムの予言を聞いて何かを働きかけるのはただの私情だ。

ファントム・コードに護られる立場にある歌鳥にそんなわがままは許されない。

けれど。

「祈るくらいなら……」

かまわないですよね」

密やかな歌鳥の声に、ロイドは応えなかった。

けれどそれは否定ではない。

歌鳥にはそれがわかった。

*

…昨日、出立が告げられた夜にクローディアが歌鳥を訪ねてきた。

「そなたが話してくれたイリアスと親しかった子……クリス、といいましたか。

その子に会ったら、伝えて欲しいのです。

……ごめんなさい、と……」

歌鳥は首を傾げた。

その意味を問おうとしても、クローディアは微かに哀しげに微笑んだだけで何も言わずに立ち去ってしまった。

…どういう意味だったのだろう……
歌鳥にはわからなかった。

*

宿に戻る道行き、往来の真ん中でロイドが唐突に足を止めた。
歌鳥が不思議そうに振り返る。

「ロイドさん？」

「……」

片耳に手を当てながら、ロイドの表情が徐々に険しくなっていく。

大柄で黒ずくめのロイドはただでさえ目立って仕方ないのに、そんな姿で佇まれてはますます人目を引いてしまう。

歌鳥は少し辺りを見回しながら、不安げにロイドを見上げた。

「どうかしたんですか？」

「……のバカが……！」

苦々しい呟きが洩れる。

びくり、と肩を震わせた歌鳥の背中に、ロイドが柔く手を添えながら足を速め始めた。

ロイドの珍しい急かし方に戸惑いながら、歌鳥が小走りになる。

「ロイドさん？」

苛立ちの濃い琥珀の瞳が、歌鳥に向けられないままで

「キリエがやられた」

と短く言い放った。

歌鳥が痛々しいまでに目を見開いた。

【グレンの考察】

東の砂漠、
聖地ヴァナディース。

中央に巨大な湖を湛えたオアシスの街にある宿の一室で、グレンは
1人思案にふけていた。

(……シスター・ユーリンが聖女クローディアの実子……)

あくまでも噂だ、と神父クオーツは言った。

だが、調べてみればみるほどそれは真実味を増してくる。

クローディアの嫁ぎ先であるログクロート皇家。

そこから離籍するための手続きの際の、一年の空白。

軟禁状態にあったという彼女と接触した人物は極めて限られるだろ

う。

その間にクローディアの出産があったとしてもおかしくはない。

もしクローディアに実子がいたとしたら、これは大変なことだ。

今、本人の意思はともかくとして、クローディアは叔父であるバルカシオンと皇位を争っている。

血筋においてはクローディアの方に正当性がある。

バルカシオンは元々は一貴族の出に過ぎない。

しかしながら、バルカシオンの兄は間違いなく先帝から皇位を授かった正当な皇帝なのだし、

そもそも大抵の貴族は皇族との縁組みに関わっているから、バルカシオンがまったくの皇位に不当というわけでもない。

何より、バルカシオンには子どもが6人もいる。

これは大きい。

何故ならクローディアは50代を目前にした婦人、

聖地を治めて30年近い。

子はいない。

いないとされてきた。

それがクローディアが皇位に就くに当たって最もネックになるであろう点であった。

クローディアが女王として即位したとして、その後継者をどうするか。

またもその問題が起こる。

今からクローディア自身が出産をすることはほぼ不可能と断言している。

有力貴族の誰かと婚姻してその子ども（連れ子）を後継者とするか、養子を迎えるか、という話になるが、

それならばバルカシオンが皇位を継ぐことと大した違いはない。

実質、皇家の正当な血筋など既に絶えているのだ。

だが、クローディアに実子がいたとなれば話は違う。

（もしそれが事実なら ……）

その可能性があるならば、確かにシスター・ユーリンが“それ”である可能性は高いだろう。

彼女は聖地を治めるにあたってのクローディアの後継者だが、クローディア本人から直に修行と教育を受けた数少ない人物だ。

そして、さらにグレンは数日の内の調査で得た情報に驚愕した。

もう一人、ユーリンと共にクローディアの薫陶を受けた人物。

（……イリアス＝マツクール）

確かセヴァルスタの内乱の主導者だった人物だ。

ルビー・エーテルによる事件にも関わっている。

（たかだか辺境の内乱を鎮圧するためのルビーの使用……。

だが、もしそれがイリアス・マツクールを危険視したがゆえだったら）

クローディアが皇位に就けば、神官の地位が一層高くなることだろう。

それは『白い血の民』にとって都合の良いことではあるまい。聖職者は彼らの天敵だ。

聖地の人々にはイリアスは記憶に薄い人物であるらしい。無理もない。

彼は名を成す前に巡教僧として聖地を出てしまっている。

シスター・ユーリンがクローディアの実子である噂はあっても、イリアスについての噂は少なかった。

遠く離れたセヴァルスタでの聖地出身者主導による内乱は、この地の人々にさしたる衝撃を与えなかったらしい。

しかし、グレンにとってその情報は大きな意味を持つものに思えた。

（もしかしたら、イリアス・マツクールはクローディアの実子である可能性があった……？

だからレインはその殺害のために貴重なルビーを提供した）

そしてファントムは、次はこの聖地で“何かが起こる”という可能性を示した。

聖地ヴァナディースに政略的な価値はない。

(……………)

グレンはため息を吐き、卓上に置いてあった水差しに手を伸ばした。

そのとき、扉をノックする音がした。

聞こえてきたのは、宿の下男の声だった。

もう数日同じ部屋に滞在しているので、聞き慣れている。

「お客様にお会いしたいという方が」

その言葉に、グレンはそれをサーシャかと思った。

聖地で出会った孤児院に暮らす少女。
縁あって、度々グレンを訪ねて来る。

だが、扉を開けたグレンの目に飛び込んできたのは、まったく予想していなかった人物だった。

「おっ久し振り〜！

グレさんっ！」

「ルル！？、お前っ……………」

「まあまあ話は後、後」

陽気な挨拶で部屋に押し入って来たのは、ファントム・コードのサポーターメンバーの少年だった。

名前をルル＝ファルセットという。
年齢はグレンより1つ下の18歳。

「いや〜、暑かったあ〜。

砂漠越えは何回やっても慣れないっすね〜。

あ、これもらっていい？」

返事を待たずに、卓上のグラスの水をあおる。

グレンが扉を閉め、複雑な表情をしながらそれを追った。

「久しぶりだけど、お前」

「マリー嬢から連絡があつてさあ、

グレさんと連絡が取れないから伝令に行つて欲しいって。

いやいやキツかった〜。

まさかヴァナディースに使いに出されるとは思つてなかつたもんだから」

「……………」

グレンは対応に困る。

アジトとの“通信”を切ったことはいつかバレるだろうと思つていたが。

「……………」、伝令つて何だ」

「あ、うん。」

「なんか、キリりんがやられちゃったみたいですよ」

「キリエが!？」

ルルの言葉に、グレンの顔色が変わる。

それを見、ルルはひらひらと手を振った。

「あ、命はありますけどね？」

でもかなりこっぴどく重傷みたいよ？

ライズつちも、怪我はないみたいだけど消耗がひどくて絶対安静みたいっす」

「……………ライズ？」

グレンが眉を寄せる。

「なんでライズ？」

「あ、グレさんと別行動してたキリりと合流したんだって。お目付け役、みたいな。」

グレさんの方は真面目に任務についてるだろうからほっといてたらしいけど、事態が事態になっちゃったからねえ。

だからボクが伝令に来たってわけ」

「……………」

これはどうやら、完全に行動を見透かされていたと見える。

グレンは罰の悪い顔をしながらため息を吐いた。

「……悪かったな。」

マリィとの回線、戻す」

「それがいいですよ。」

あ、そんでね、

ボクこの流れでグレさんを補佐することになったんで、よろしく」

「あ？」

ルルは能天気部屋置き菓子を見つけてそれを頬張り始めた。
グレンが複雑な表情でその向かいに座った。

「いや、俺は助かるけどよ……。」

お前、いいのか？

もし、この土地でルビーの災難が起きたら、お前、死ぬぞ」

ルルにはルビー・エーテルの毒の耐性がない。
だからサポートメンバーとしての所属なのだ。

その指摘に、ルルはへらへらと笑った。

「それを起こさせないために来てるんでしょ？
なに言ってるんだか？」

「いや、それはそうだけだよ」

「ボク1人の身を案じてどおするんすか、
ここには山ほどルビーで死ぬ人達がいるんだから、身内だけの心配
してる場合じゃないっしょ？」

そう言っつてポリポリと菓子を食べる。
グレンは脱力して椅子にもたれた。

「……まあな」

この街には沢山の住人がいる。
グレンにとっては、親しくなった人間もいる。

今になって、グレンは自身の背負った“任務”というものの重さに
思い至った。

(俺も大概、視野が狭いな……)

キリエを行かせるべきではなかったのだ。
妥協すべき事柄などありはしなかったのに。

「で、今は何をしてるトコロっすか？、グレさん」

ルルが身を乗り出してグレンの顔を覗き込む。
それに苦笑しながら、グレンは口を開いた。

…

「ほうほう、なるほど」

仰々しく頷くルルに水を注いだグラスを差し出しながら、グレンは続ける。

「なんか引つ掛かるんだ」

「うん、確かに。」

偶然にしてはアレっすね。

確かレインって、バルカシオン鼻肩って話っすよね？

だったらシスター・クローディアが即位するのに有利になる事は消したくなりますね」

グレンは頷く。

今までの事例から言って、レインがバルカシオンに組していることは明らかだ。

正確にはバルカシオン派の貴族、諸候らの土地で、それらの庇護を得て活動をしていた、という例が最近では目に付く。

とりあえず、クローディア派ではないことは確かだろう。

天敵の長を応援するはずがない。

「クローディアに実子がいたかどうか、その真偽はともかくとして、それが明るみに出れば確実にクローディア即位への後押しになる。

バルカシオン派にしたら面白くないだろうな」

「しかも、もし本当にそれがシスター・ユーリンだったらますます

ですよ。

だってシスター、人格者って噂だもん」

グレンが頷く。

それはグレンも話に聞いていたから。

「イリアスっていう男も、なかなかの人材だったらしい。

セヴァルスタでレジスタンスを指揮したって話だが、そのカリスマ性やリーダーシップは高く評価されていい。

もしそれがクローディアの実子だった、って話になったらスゲー箔が付くな。

英雄的な扱いで担ぎ出されておかしくない。

そうなる前に始末をつけたい、と思った奴がバルカシオン派の中にもおかしくない。

そういう線で、レインがセヴァルスタ領主にルビーを提供した……」

「そっぴやそのセヴァルスタ領主って、今ファントム・コードの手の内じゃなかった？」

吊し上げたら吐くんじゃないの？」

ルルが首を傾げる。

グレンが肩をすくめた。

「尋問する時間がない」

土地を治める一領主に、まったく独りになる時間など限られる。

プライベートな時間ですら、使用人が複数ついているのが普通だ。

セヴァルスタ領主ヴェルンドは今、確かにファントム・コードの監視下にある。

しかしそれは公表されていない。

ファントム・コードは表の歴史に関与しない。

監視者は数多い使用人に混じってヴェルンドを見張っている。

レインが再び接触してきたり、ヴェルンドのセヴァルスタ統治が悪化したりすれば、すぐにファントム・コードの中枢に伝わることをヴェルンドは知っている。

緩やかにセヴァルスタの圧政を改善させるのも監視の目的のひとつだ。

治安の悪さはルビー創造の助けとなってしまう。

しかし、ファントム・コードは表舞台に出られない。

ヴェルンドを表立って諫めることはしないし、目立つ接触も出来ない。

一時期はライズのゴーレムの“催眠能力”によって領主館全域に暗示をかけ、ヴェルンドを拘束したが、ライズのその能力には持続性がない。

ライズが去った後は、暗示にかけられていた人々のそれは解けている。

その状態でヴェルンドに大きな異変があれば、不審に思われる。

それに。

「レインは呪術に精通している。
ヴェルンドに対して、余計なことを漏らせば“自動消去”される術
がかけられている可能性もある。」

実際、昔にその前例もあるらしいしな」

「ほお〜？」

ルルは神妙な顔つきでグレンの説明に聞き入っている。

その後で、グレンが付け加えるように神殿に現れた皇族の話をした。

「フラウンケル？、

ああ、旧国境地帯の駐屯地に行ってる」

「情報、あるか」

「ああ〜、あるある、

任せてぴよん」

ルルは荷物の中に詰まった書物の山から「そこそこ」と目当てを探る。

「あった、あった。」

フラウンケル「ヴォル」アスタリスク、
24歳っすね。

バルカシオンの6番目の、末っ子になります。

妾腹で、同じ母親の兄妹はいません。

もつとも、バルカシオンには正妻はいませんから、末っ子だからって相続争いに不利、ということもないみたいよ？

母親の家柄は、バルカシオンの他の妾らの家柄とおつつかつつみただいだから。

成人してからは政治にはあまり関わらず、軍事面で手腕を振るってますね。

剣の腕前がかなりのものとか。

これは父親譲りなのかな、

バルカシオンも若い頃は国軍の総指揮官を務めたくらいの武闘派だから。

性格は真面目みたいです。

なんか父親とは疎遠みたいっすね。

バルカシオンの子らの中で皇都から離れてまったく寄り付かないのはフラウンケルだけっす。

おかげで結婚8年目の奥さんも皇都にほったらかし、当然まだ子はいません。

ちなみにその奥さんが、例のセヴァルスタ領主ヴェルンドの娘さんっすね」

「ふむ……」

グレンは顎に手を当てた。

人物像はまだはつきりとはしないが、彼が居を置く旧国境地帯は、聖地ヴァナディースに位置的に近い。

クローディアとの縁も深い土地だ。

あるいはそれが今回の密行に何か関係しているのか。

「……もう少し調べてみよう。」

ルル、神殿の方頼めるか」

「はいはい」

明るく返事し、ルルが荷物の中を探る。

「聖地に来るから、ちゃんとう意してますよん」

言っただけでルルが取り出したのは、最もスタンダードなデザインの僧服だった。

グレンが苦笑する。

「本当に準備がいいよな」

【ルビィの意思】

帝都イザヴェルより北、

イアルビーズ市。

そこは都の近隣都市らしく街並みは整い、設備も充実していた。

市街地からやや外れた所にだが、病院があるのも都会ならではだ。地方都市では、大抵は医師が往診する。

しかしこの街では入院設備がある病院が設立されている。

その一室に、彼はいた。

「ブロッサムさん、お加減はいかがですか？」

部屋に入ってきた看護婦の声に、夕陽色の髪をした青年がベッドの上で顔を向けた。

「ええ、だいぶいいです。

ありがとうございます」

爽やかを絵に描いたような笑顔に、若い看護婦のテンションが上がる。

「お熱計りましょうね」

うきつきと体温計を差し出す看護婦。

ライズは同じ病室の中、カーテンの引かれた一角に視線を向けた。

「あの子はどのくらいかかりそう？」

脈を計ろうとライズの手首を取っていた看護婦が、

「そうですね……、

何しろ頭を強く打っていらっしやるから……」

「そう」

ベッドに横たわり、ライズは看護婦に手を取られたまままで目蓋を閉じた。

…フィリオとベルローズとの一戦から4日が経っていた。

あの夜、ふらつく足でキリエとフィリオの後を追ったライズは、街の外で無惨な姿で倒れていたキリエを発見した。

頭と肩から流れた血で大きな血溜まりが出来ていた。命があるのが不思議なほどだった。

ライズはふらつきながらキリエを抱えて真夜中の城門を叩いた。門番は2人の姿を見て驚き、急いで病院まで運んでくれた。

ライズはただ衰弱していただけだったから回復は確実だったが、キリエの傷は深かった。未だに意識が戻らない。

…もしくは身体の傷よりも、心の傷が …

ライズがそう思うのは、負傷により気絶していたキリエの表情のせいだ。

ひそめられた眉、閉じられた瞼から流れていた涙。

実の弟から受けた傷が、キリエにとってはショックだったのか。それとも攻撃を受ける前に何かしらのやりとりがあり、それによってキリエの心を傷つける何かがあったのか。

キリエの意識が戻らぬ以上、推測の域を出ないが。

「窓、開けてもらえます？
風が欲しいな」

ライズの希望に頷いた看護婦が窓に歩み寄る。
カーテンが揺れ、ライズの髪が揺れた。

…

看護婦がいなくなった病室で、ライズは小さくため息を吐いた。

フロントム・コードに置いてきた控えのゴーレムとは《接続^{リンク}》を継
続させたままだ。

異変があつたらすぐに戻らなければならない。

ベルローズとの戦闘で無理をし過ぎた。

ここまで消耗したのは本当に久しぶりのことだ。

とりあえずマリーエレメントにキリエの保護にサブメンバーを派遣
してくれるよう要請した。

それが到着したらライズはアジトで療養兼留守番の任務に戻る。

アジトからなら各地に散った仲間との通信が可能になるから、ライ
ズ自身の口から状況の説明が出来るし …

(シャバでこんなモン、いつまでも持つてたくないしなあ)

ライズは枕元に置かれた棚の引き出しから布に包んだ“それ”を取り出した。

一般人の手に触れないよう肌身離さずここまで持つてきたが、やはり落ち着かない。

(……ルビー・エーテル)

初めて入手した実物。

収穫としては大きい。

これを調べることで何かしらの対処策が練られるかもしれない。

(………)

ライズはゆっくりと布をほどいた。

姿を見せる、煌めく“紅”

発動した際の規模は知れないが、この街ひとつくらいは容易く滅ぼすだろう。

発動方法が不明だから、あまりこうやって無闇に触れることも本当なら危うい。

しかし何故だか、ライズには“これ”が御せる気がした。しかも確信的に。

(……なんか……)

光に透かした紅の晶。

危ういほどに、とても美しい煌めき。

鼓動のような、意思のような煌めき。

(……………)

…ルビー・エーテル。

世界を滅ぼす最凶兵器。

この兵器には、

(……………意思がある)

しかもそれは、子どものように無邪気だ。

すり、とライズは指で“それ”を擦った。

“それ”はライズの指に応えるように、嬉しそうに輝きを強める。

ライズは“それ”を再び布に包み、そつと引き出しに戻した。

「おめでとつ、

これで晴れて正真正銘本物の家族ファミリイだわ、

フィリオ」

薄暗い室内、厚いカーテンの隙間から差す細い真昼の光。

大きなベッドの上で身を起こしていた少年が、満面の笑みを浮かべる女性をジロリと見やった。

「ベルローズのせいだ。
もっとちゃんと準備してから“飲む”予定だったのに、ベルローズが足止め出来なかったから」

「それは本当に悪かったと思うわあ、
ゴメンね〜」

フィリオが露骨に顔をしかめる。

「相性のいい《シャドウ》が見つかったからにしようと思っただのに。」

《捕食》なんて面倒くさいこと、したくない」

「ああ〜、大丈夫よ、

あたしがちゃんとお世話してあげるから。

可愛いフィリオのためだもの〜」

そう言っただけでベルローズがフィリオの頭を撫でる。

「フィリオが自分の《シャドウ》を早く造れるように、その間はあたしがフィリオの獲物を用意してあげるからね」

「……………まったく……」

フィリオが頬をふくらませた。
ベルローズがそれをなだめる。

「大丈夫よあ〜、

フィリオなら少し我慢すれば相性のいいのが見つかるわ〜。
エッダやシグマとは違うんだから」

「……エツダさんとシグマをひとくりにしたら失礼だよ」

「あら、そうかもね」

言って、ベルローズがペロリと舌を出した。

「シグマに《共感》がないのはただの自己チューだけど、エツダは違うもんね。

まあ、ナイトメアはエツダのあぁゆうトコロが気に入って傍に置いてるんだろあけど」

「……………」

フィリオは首にからまるベルローズの腕を軽くほどいた。

「ていうか、ベルローズがルビーを使っていれば良かったんだよ。そうすれば足止めなんて簡単だったじゃん。

使わなかっただけならまだしも取られちゃうし。

持っててくれれば、それを返してもらってボクはそれで持ち堪えられたのに。

シグマといいベルローズといい、もっとルビーを大事にしてよね」

「シグマとひとくりにしないでくれるう？」

ベルローズがフィリオの頬を軽くつねった。

「仕方ないのよ、
アレはルビーの“意思”なんだから」

「？」

「ルビーはあの子が好きなのよ。
あの子はナイトメアにそっくりだもの」

薄明かりの部屋の中、ベルローズが紅の唇に笑みを浮かべた。

「ルビーはナイトメアのものなんだもの」

「……？」

どういう意味だ、とフィリオが訊こうとした時、扉をノックする音がした。

ベルローズがするりとフィリオから離れる。

「なに？」

ベルローズの声に、扉が緩やかに開く。
顔を出したのは執事風の紳士だった。

「奥方様、お客人のお加減は」

「だいぶ良くなつたみたいよ」

「それはよろこびました」

紳士はフィリオに視線を向け、会釈した。
フィリオはそれに形だけ返してベッドにもぐる。

ベルローズが優雅な足取りで扉に向かう。

「何か御用？」

紳士が深々と一礼する。

「旦那様からお手紙が。」

近々屋敷に戻られるそうでございます」

「あら、そう」

執事が差し出した手紙を受け取り、ベルローズが手入れのされた爪先でそれを撫でた。

「せいぜいおめかしして、お出迎えしなきゃね」

呟いた声は廊下を歩み去ってゆく執事の耳には届かなかった。

ベッドの中からフィリオがもぞ、と顔を出したが、すぐに再びもぐりこんでしまった。

【イリアスとユーリン：2】

…夏の雨が近い。

クリスは太陽を陰らす黒い雲を見つけた。

馬車を降りて立ち寄った宿場町。
入った宿をふらりと抜け出し、クリスは町の外れの巨木の枝に座っていた。

人里が落ち着かないのは幼少からのクリスの性だが、ずっと生死不明だった彼が姿を見せなくなるというのがどういふことか、クリスにはそういうことにまったく気が回らない。

「クリス」

名を呼ばれて、クリスは木の下でこちらを見上げてくる女を見た。

「ユーリン」

「ここにいたのか」

ふわりと笑ったその顔がきれいだと思った。
クリスは首を傾げる。

「なに？」

「ケイヴィンが心配している。
黙って出て行っただろう」

「心配………？」

「ずっと離れていたから不安なんだよ。
しばらくは気を使っておやり」

そう言つてユーリンがクリスに手招きをした。
クリスは素直に頷いて木の枝からするりと下りた。

「降りそうだな」

ユーリンが曇り始めた空を見上げる。
クリスが頷いた。

「もうすぐ」

「そう。」

なら濡れる前に迎えに来て良かった」

そう言つたユーリンに並んで立ち、クリスは頬に当たる風の心地よさに軽く目を伏せた。

「……雨はすきだ」

囁きのようなクリスの声に、ユーリンが顔を向けた。

「そう。」

……確かにきみは火よりも水だな」

「?」

クリスが首を傾げる。
あどけなさが先に立つその仕草に、ユーリンの口元に笑みがこぼれた。

「心が洗われる …」

「雨が？」

くすり、とユーリンが笑った。

「雨もな」

そうやってユーリンは紅の髪を撫でた。
湿気による髪の軋みを指に感じる。

「私は生まれてから聖地を出たことがほとんどないから、雨にはあまり馴染みがないけれど」

「聖地…… ヴアナディース？」

「そう」

ユーリンがわずかに睫毛を伏せた。

「灼熱の砂の海。

ヴアナディースはそこに浮かぶ陸の孤島だ」

「雨がふらない？」

「そうだね、滅多にない。

だから水はとても大切なものだし、雨はとても慕わしいものだ。

そういう気候に合わせた生活が根付いているから、ある程度は雨が降らなくとも支障はないが、それでもやはり慕わしい。

信仰と同じだな。

なくとも生きてはゆける。

けれどもあればこそ、それは命の糧となる」

「……………」

ふと、ユーリンはクリスの乏しい表情の中に複雑な色を見出し、苦笑した。

「すまない、

難しかったかな」

「……………すこし」

「ごめん、説教くさくなるのは癖だな。

聖地ではそういうことばかりをしていたから」

「いろいろ、教えたり」

「うん」

「刺繍とか？」

「刺繍？」

藪から棒に出てきた単語に、ユーリンが怪訝な表情を見せた。

「いや……………まあ……………」

得意というほどではないけれど教えることは出来るが……………」

どうした？

クリスは刺繍なんて興味あるのか？」

ふるふるとクリスは首を振った。

ユーリンが首を傾げる。

歩きながら、クリスはユーリンの顔を見た。

「聖地で女のこに刺繍を教えたことがある？」

「女の子？」

「……いや、ない……と思うが……」

ユーリンはますます首を傾げる。

質問する声は静かだが無邪気な調子が強いため不快ではないが、なにせまったく要領を得ない。

「何の話？」

「……ん……」

クリスが何か思案するように空を仰いだ。

そのとき、パタパタと軽い足音が2人に近づく。

「クリス！いたあ！」

もう、黙っていないくならないですよ！」

ケイヴィンが駆けてくる。

それを見て、クリスが表情を変えないまま

「じめん」

と謝る。

やけに素直な調子の声音が微笑ましくて、ユーリンはくすりと笑った。

*

…その日の夜。

「不思議な子だ」

子ども2人が寝入クリスとケイヴィンってから、ユーリンがドルサックにそうこぼした。

グラスに酒を注ぎながら、ドルサックが笑う。

「面白えだろ」

ユーリンが頷いた。

「イリアスが入れ込んだというのがわかる。

……奴はいつも渴いていた ……」

そこでドルサックがどこか軽薄だった笑みをしまう。

ユーリンはドルサックに差し出されたグラスを指で遊ばせながら頬杖をついた。

「イリアスは普段は穏やかに振る舞ってはいたが、内には危ういほどの烈しさを持っていた。

それが私には怖かった。

何をしでかすか分からない、……そんな危うさ。
実際にそれはセヴァルスタで実現したわけだが」

愁いを漂わせた表情のユーリンを眺めながら、ドルサックがグラスをあおる。

「意外だな。

お前とイリアスの関係ってもっと……何っーか……」

「言いたい事はわかるよ。

もっと馴れ合いというか、そういう近しくて血の通い合ったような関係だと思っていたんだろう。

それは半分正しいと思う。

きょうだいに近い感覚はあったし、同じ特殊な境遇に置かれた絆みたいなものはあった。

けれど、なんていうかな、

そう ……“温度差”……

そんなものが私たちにはあったんだと思う。

イリアスがセヴァルスタでレジスタンスを立ち上げたのだって、そ
うだ。

そのきっかけである圧政への反感の根っこには、バルカシオンへの

憎しみがあつただろう。

奴はログクロートを滅ぼす軍を率いたバルカシオンを憎んでいた。

シスター・クローディアの御子が奴であつたとしても私であつたとしても、それは関係ない。

奴はシスター・クローディアに悲劇を強いたバルカシオンを憎んでいたんだ。

…とても烈しく。

イリアスは炎だった。

穏やかに暖かい灯りを点しながら、それは時に烈しく燃え上がって何もかもを焼き尽くす」

「……まあ、共感するところはあるな。

けどその話し振りだと、お前はイリアスとは考えが違つてたわけか？

たとえばバルカシオンに対する感情とか」

「……」

ユーリンは窓の外に目を向けた。

室内の明かりが玻璃に反射して、ユーリンとドルサツクの姿をはつきりと映している。

「世間並みに反感はある。

けれど……憎しみというほどの感情はない。

直接顔を合わせたこともないし、伝え聞く悪評や醜聞にも心を動かされたことはない。

なんというか、見えないんだ。

バルカシオンという人物像は……。

確かに先帝の悪政に忠実ではあつたらう。

けれどそれは他の諸公らにだって言えることだらう？

即位してからだって、確かにその統治に苦しむ民衆がいることは聞いているけれど、それはバルカシオンの統治というよりも先帝の統治の延長だ。

バルカシオンは即位してから新しい政策を何一つ打ち出していない。彼個人の意思を何一つ感じないんだよ。

だから私はバルカシオンに対しては憎しみを抱く前に不可解さに首をひねってしまう。

お前の前でこれと言うのは何だけれど、ログクロート滅亡の件に関しても怒りはない。

それは国家の存亡だ。

話の規模が大き過ぎて個人の私事に出来るほど私は思い入れられない。

正直を言うと ……」

ユーリンは一息を吐いた。

「ずっと、私ではない、と思っていた」

「……シスター・クローディアの御子？」

こくり、とユーリンが頷いた。

「私はシスター・クローディアに似ていない」

「何も母親似とは限らないだろ。」

「極端を言えば、両親のどちらにも似ない子が生まれることも世の中にはザラだ」

「イリアスは似ている」

ドルサックがぴくり、と眉を上げた。

ユーリンが視線をそらしながら続けた。

「正確には……、

イリアスはシスター・クローディアの血縁にある人に似ている」

「血縁？」

「そう。」

……旧国境地帯に駐留しておられるバルカシオンの末子、フラヴンケル公子」

ユーリンがグラスを揺らした。

「帝都から旧国境地帯への道のりは聖地を経由する。」

そのときに度々立ち寄り、私は何度か顔を合わせたことがある。イリアスが旅に出てからのことだから奴は会っていない。

初めて会ったときから思っていた。似ている、と」

フラウンケルはシスター・クローディアの年の離れた従弟にあたる。確かにクローディアの血縁と言っている。

「そのときから思っていたんだ。

シスター・クローディアの御子はイリアスの方なのだ、と …」

ふ、とユーリンはため息を吐いた。

「そのときに妙に納得したのを覚えている。

さっき話した通り、この件に関して私とイリアスには気持ちの温度差があった。

イリアスが慕うほどに、私はシスター・クローディアに心酔することが出来なかったんだ。

あれはイリアスが無意識にシスター・クローディアを実母だと悟って、それで湧いていた感情だったのかと私は腑に落ちた気がした。

シスター・クローディアは確かに素晴らしい方だよ。

私は一番近くにいたから、あの方のことはよく知っているつもりだ。

だからこそ、私は……」

微かに、グラスを包む手が震える。

「シスター・クローディアが怖かった」

「？、……怖い？……」

ユーリンが頷く。

「あの方は……内に何かを秘めていらっしやる。

イリアスのような烈しい熱ではない。

けれどあんなにも近くにいなながら、私はその“何か”が一体どういうものなのかと臆気にすら分からなかった。

ただ、あの方が胸の内に“何か”を秘めていらっしやることだけが確かで、私はそれが怖かったんだ」

ユーリンは小さく自身の体を抱いた。

「あの危うさが……、

イリアスに感じていた恐怖と似ていた。

だから私は、シスター・クローディアの御子はイリアスの方だと思う。

そして、シスターもそれに感付いてらしたのではないかと思った。

だってイリアスはあるなにフラウンケル公子に似ていた。フラウンケル公子は父親似……バルカシオン似だと聞く。

だったらシスターはイリアスの顔から、自身の血縁に感付いたはずだ。

私はそれを確認したい」

そのために、生まれ育った聖地を出た。

「もう何もかも明らかにしたい……、
でなければ、私もイリアスも“何者”にもなれないままだ ……」

…どうか我らを示す名を……

ユーリンは肘を付きながら組んだ手に額を埋めた ……

【僭王の側面】

帝都イザヴェル、皇城。

玉座の間は無人のままで夏の風の通り道をつくる。

現在の城の主バルカシオンは執務室にこもるばかりで、玉座の間には寄り付こうとしない。

僭称という謗りを気にしてのことではない。
ただ単に玉座の間で執り行われる形式的な務めをバルカシオンが好まないからだった。

そして貴族の生まれには珍しく、バルカシオンは他人をそばに置くのを嫌った。

侍従を伴うことはごく稀で、最近では敵対勢力の刺客を警戒した家臣らから護衛をつけるように奨められているのだが、バルカシオンは首を縦に振らない。

詰まる所、バルカシオンは人間嫌いなのだと言われている。そしてそれは妾たちや実の子どもらでさえ例外ではなかった。

家臣らに対しても、特に誰を重用するでもない。バルカシオンは冷徹なまでに平等だった。

…この日、

いつものようにバルカシオンは独りで執務室の机に向かっていた。

紙面をめくる音、ペンが紙の上を叩いて滑る音、そして窓から入る風の音。

静寂と変わらぬ空間で、バルカシオンはふと感じた気配に手を止めた。

「何だ」

すると、壁からするりと黒い鴉が現れた。鴉は一瞬で漆黒の装束の男の姿に変わる。

男は目以外を黒い装束で覆っており、一目で隠密に属する者だとわかる。その男がひざまずいた。

「聖地ヴァナディースのナイトメアから報告が。
フラウンケル殿下が、内密にノアトウーン神殿を訪れたそうです」

「……フランが…？」

バルカシオンが眉をひそめ、男の方に姿勢を向けた。

「……何か嗅ぎつけおったか ……、
難儀な小僧だ。」

かまわん、捨ておけ。
どうせ何も出来はせぬ」

「シスター・ユーリンの所在について、何やら調査をしているようです。」

いずれ帝都に戻られるやも……」

「些末な事だ。
好きにさせておけ」

「は」

そうして男は膝をついたまま深く一礼した。
男は続ける。

「引き続きご報告が。
シスター・クローディアがアイーダウッドに不在の可能性が……」

「？……、殺されたか？」

「いえ、どうやら出奔のようでございます」

「……まあ、そう易々と首をとられるような女ではないからな。

何やら、しでかすつもりやもしれぬ。

あれは昔から、喰えぬ女ゆえ……」

そうしてバルカシオンは唇を歪めた。

「フランと同様、捨ておいてかまわぬ。

あれは何を企んでおるかわからぬゆえ、どうせ何を想定したとしても裏をかいてくるであろう。
備えるだけ無駄だ」

「しかし、それでは」

「かまわぬと言っておる。
さがれ」

静かだが冷ややかなバルカシオンの声に、男は深く頭を下げて再び鴉の姿に変化した。

そしてそのまま現れたときと同じように、するりと壁に溶け込むように姿を消した。

再び独りになり、バルカシオンは何か思案するようにペンを宙に浮かせたまま動きを止めた。

「……」

バルカシオンはペンを置いた。
そうして静かに立ち上がり、部屋を後にした。

供をつけぬままで城の廊下を悠然と抜け、すれ違う官や侍女らの慌ててひざまずく反応を無視しながらバルカシオンは進む。

そして、彼は普段めつたに足を向けない場所にたどり着いた。

…無人の玉座。

背景に豪華な装飾の幕と、バルコニーの向こうに見える帝都の街並み。

バルカシオンはゆっくりと歩み寄った。

空の玉座をそっと撫でる表情は、何とも言えない色を浮かべていた。

「……兄上……」

小さな、風にかき消されそうなほどに小さな呟き。

「もうすぐだ……」。

……兄上……」

…僭王と呼ばれている男が、玉座の前で膝をついた。

そうして深く、深く目を閉じた ……

【16】王を巡る考察（後書き）

今回はあまり大きな動きのない回でした。
主人公たちに動きがないですからね。

ところで五木の私生活は客商売です。

と、いうわけでこの時期、これから大変なことになる予感です。
世間さまの連休は、五木のフル出勤を意味します。

頑張れ、私……

……では、次回。

おまけ登場人物設定

【クローディア・ルツツ・セレスティスアロー】

聖地ヴァナディース神官長

48歳 / 160cm / A型

黒髪 / 蒼い瞳

穏和 / 思慮深 / 威厳 / 美貌

この人はもともとは人物というよりも設定という扱いでした。

最初は名前だけ出して、あまり詳しい人物像はまったく考えてなかったんです。

けれどいつの間にかあれよあれよと前に出てきましたね。

こういうのをキャラが勝手に育った、と言つのでしょか。

ちなみにこの人のビジュアルは「若くは見えないけれど絶世の美女」という、頭の中ですら映像化できないややこしい設定。

どんな顔してんでしょうね……（苦笑）

【17】第三の拒絶

宿命られた相剋は三つ

血と涙と引き換えに破滅の夢を見る《維持の拒絶》

自我と器と引き換えに安寧を願う《犠牲の拒絶》

そして

存在と絆と引き換えに変革を求める《依存の拒絶》

喰らい合い求め合う矛盾の奔流は

九つの病にその身を投じる

【Prologue: Stars】

…その夜、

月がふたつ在った。

ひとつは晴れ渡った空に丸く甘い色の光を湛えて浮かんでいた。

そしてもうひとつは、凧いだ海の漆黒の中にぽっかりと映った月影。

ゆらゆらと揺れながら、潤んで溶ける。

その月が、ふいに泡立ち始めた。

月影を中心として、海が沸騰しているように見える。

もっともそれは夜半の海上、見届ける者など1人としてない。

その異変は誰ひとりの目にも触れぬまま約5分ほど続いた。

そうして泡立つ海面が渦を巻き始めた。

渦は次第に大きく広がり、その中央から“何か”を吐き出した。

吐き出されたその“何か”は、海の上に浮かび上がってその姿を空の月の光に晒した。

「はぐれたか」

「はい。」

ですがそう離れてはいないはずですよ」

男の呟きに応えたのは女だった。

海の上、宙に留まりながら男の傍で女が片膝をついて跪いている。

「ここは何処だろうか」

「わかりかねます。」

まずは陸地に向かうべきかと」

「ふむ。」

他の4人とも合流せねばなるまいな」

「はぐれた場合は帝都で落ち合う手筈です」

「よろしい。

ではまずは人里に向かって情報を得よう。

ここが“何処”で」

男が水平線の彼方に目を向けた。

「“いつ”なのか」

男はその瞳に月を映した。

男の瞳の色は黄金だった。

… さながら2つの太陽のような。

…

【ジェラルディンの兄妹】

「 …… 命に別状はないんですね? 」

妹・キリエが重傷を負ったとの報せに、レックスは取り乱したりはせず、ただ静かにそう問うた。

それに対し、苦いような苛立ったような表情を浮かべたロイドが頷く。

「……………そうですか」

ため息とも安堵ともつかぬ息を吐き、レックスは椅子に背中を預けた。

「すみません……………」

ご迷惑を」

「任務放棄、通信拒否。
言語道断だぞ、これは。」

お前、あとで会ったらしっかり叱っておけよ。

普段が甘やかし過ぎだ」

「そうですね……………」

……………本当に」

力ないレックスの声音に、脇で聞いていた歌鳥がロイドを見上げる。

「あの……………」

それでキリエさんは……………」

「イアルビーズつつう街の病院だ。」

マリーが迎えを手配したらしいから、そのあとはアジトに送って帰す。

ライズの能力は、他人を連れて移動出来ないから仕方ない」

「……………イアルビーズ……………」

聞きたくない名前だ。
レックスはそう思った。

「それで……弟は？
ライズくんは何と」

ロイドが肩をすくめる。

「知らん。

とりあえずキリエを襲ったあとの消息は不明だ。

ベルローズ、ロベリンと行動を共にしていたらしいから、これでお
前らの弟は完全に“クロ”だ」

何かをこらえるように、レックスが表情を歪めた。

……わかっていた。

あの子が姿を消した経緯から、あの子がレイン、ナイトメアに関わ
っているであろうことは。

けれど、確たる証拠が出てくるまでそれを信じたくなかった。

本当は何かの誤解が生じていて、実家の崩壊とあの子は無関係だっ
たことが判明する……、

……そんな淡い期待を、レックスはずっと抱いていたのに。

「……申し訳ありません」

「キリエに関してはともかく、弟に関してはお前に謝ってもらおう筋
合いはない」

「……それでも謝らせてください」

レックスは絞りだすような声で言った。

「形だけでも、僕はまだあの子の“兄”でいたい」

*

…レックスがジェラルディン家を出奔したのは、彼が16歳のときだった。

最初はただ単に『見聞を広げるため』と言って旅に出た。

だがレックスは始めから、もう家には戻らないつもりだった。

旅に出る前、護身のためにと父親にゴーレムを造ってもらった。

『王』を意味するレックスの名にちなんで、美しい白銀の獅子の姿をしたゴーレムだった。

レオと名付けた。

家にはもう帰らない。

そう覚悟を決めて家を出たのだ。

自分がいなくなったところで、弟が家督を継ぐことはあり得ない。弟にはその資質がない。

だが、レックスが家督を継ぐわけにはいかない。それだけは駄目だ。

レックスは自身が継母に憎まれていることを自覚していた。

その憎しみが、弟に対するプレッシャーに繋がっていたことも。

レックスが弟よりも優秀だということが周知の事実になれば、あの継母は弟を見放すだろう。

そうなる前に、レックスは早々に舞台から降りてしまおうと思った。

継母の執念はレックスへの対抗心によるもの、競う相手がレックスでさえなければ、その熱は治まりが効く。

自分がいなくなれば丸く収まる。

その頃のレックスはそう思っていた。

せめてキリエとフィリオにだけは、幸せでいて欲しかったのに。

…出奔して1年と少し経った頃に、レックスの元にファントム・コードの迎えが来た。

ジェラルディンに連なる者だということは隠したまま旅をしていたレックスを、その使者はジェラルディン縁の者として迎えに来たのだった。

レックスはファントム・コードのことを名前だけは知っていた。

ゴーレム造りに関わる者は、その歴史を学ぶ上で必ず一度は耳にする名前だったから。

ほとんど伝説かそれに類するような実在の不確かな組織。

レックスは本格的にゴーレム造りを学んだことはないが、家にはそれに関連する書物が山ほど蔵書されていたから一通り目を通してい

る。

だからこそ使用者がファントム・コードを名乗ったときに、それが何かを理解出来たのだった。

レックスはファントム・コードの理念に賛成した。

それに加えて、目的のない旅に虚しさを感じ始めていた時期だったから、ファントム・コードのような組織に身を置くのも良いか、という気がした。

そうして、レックスは始めゴーレムを所有する《マリオン》としてファントム・コードに入ったのだ。

最初の数年は実働メンバーとして数えられていた。レックスは風貌こそ樞鈍ではあったが、身体能力は人並み以上にはあった。

性格は温厚、言い方を変えれば冷静沈着。頭もよく回る青年だった。

加えてファントムの予言において、レックスにはルビー・エーテルの毒に対して耐性があることが確認されている。

彼は数年でファントム・コードの主力になった。

そうして数年後、彼はファントムの予言で自身の実家であるジェラルディン家が崩壊するであろうことを知らされる。

それにレイン＝ナイトメアが関係するであろう事も。

レックスは驚愕したが、任務のために、そして残してきた家族のために素性を隠して帝都に戻った。

遠巻きに見た久々の家。

周囲から伝え聞く現在の家族の近況。

胸に込み上げる懐かしさに浸る間もなく事件は起きた …、起きて、しまった。

ファントムの予言通りに。

夜半、突然街に響いた獣の咆哮。

共鳴し、呼応する悲鳴にも似た複数の雄叫び。

レックスは生涯忘れられないと思う。

突然の爆音とともに、広大な屋敷から火の手が上がった。

レックスが仲間とかけつけた時には場は混乱を極めていた。

屋敷から逃げ出してきた人々の中に家族の姿はなかった。

レックスは周囲の制止を振り切って自身のゴーレムと共に燃え盛る屋敷の中に飛び込んだ。

中に入って事態の深刻さに気が付いた。

炎と瓦礫の中を駆け回る獣たち。

何度か目にしたことがある、典型的な暴走ゴーレムの群れ。

血に濡れた牙と爪、汚れた毛並み …

煙に混じる血の匂い。

…そしてレックスは轟音と咆哮の中に混じる少女の悲鳴を聞いた。

…キリエ。

襲いかかってくるゴーレム達を薙ぎ払いながら、声の出どころを探し求めた。

女の子特有の甲高い悲鳴は、けたたましい雑音の中をまっすぐに突き抜けてレックスの耳に届いた。

記憶にあるキリエの部屋の方角に駆け抜け、レックスは炎の中にようやく求めていた姿を見つけた。

記憶の中の姿よりも成長していた妹は奇跡的に無傷で、レックスの姿を見ると泣きじゃくっていた顔をさらに歪めた。

…安堵がレックスの油断を招いた。

突然背中を襲った衝撃、

レックスは自分とキリエを囲った獣たちの姿を見た。

理性のない獣の爪で抉られた背中。

後から判明したが傷は心臓と肺にまで達していた。

それでもレックスはキリエを救い出した。

その渦中でレオを失いながらも。

レオが原初型ゴーレムでなかったことは不幸中の幸いだった。

でなければ、ゴーレムの消滅とともにレックスも命を落としていた

だろう。

駆け付けた仲間の助けもあってレックスは一命を取り留め、キリエもまた救出された。

だが、その夜の死傷者は30を超えた。

屋敷の使用人、住み込みの門弟、そしてジェラルディン家の当主夫妻。

遺体は獣の牙と炎の蹂躪によって相好のつかないものも多かった。

それゆえ、遺体が見つからないまま死亡者のリストに加えられた名前も多い。

事態が事態であったから、この事件はジェラルディン家の内の過失というよりも、むしろテロの可能性が高いというのが役人の見解だった。

帝都の役人らによる大掛かりな調査が始まる中、レックスは重傷の身を押しして帝都を出た。

屋敷に飛び込んでいった時に何人か顔見知りには会ったが、混乱に紛れて仲間の手を借りながらなんとか避けられた。

レックスはジェラルディン家の人間だが、この時には縁を切ったつもりでいたし、ファントム・コードのマリオンとして帝都に足を向けたのだ。

表沙汰に顔を出してはならない。

だが困ったのはキリエの処遇だった。

レックスは始めキリエを置いていくつもりだった。
ファントム・コードに関わらせるつもりはなかったのだ。

当主夫妻は死亡確定、
フィリオはその時点で生死不明。

キリエは唯一のジェラルディン本家の生き残りとして然るべき場所に
レックスはそう思った。

だがキリエは頑としてレックスと離れることに頷かなかった。

ずっと慕っていた兄。

突然出て行ってしまったとき、キリエはどれほど悲しんだか分からない。

やっと会えた。

離れていても、兄もキリエを想っていてくれた。

炎の中で助けに来てくれた姿を見て、キリエはそれを確信したのだ。

もう絶対に離れたくない。

キリエは懇願した。

連れて行ってくれ、と。

この事件で、レックスはゴーレムを失った上に自身も身体を害なっ
た。

レックスが戦えない身体になったのはキリエを助けようとしたため
だ。

貴重なマリオンを失ったファントム・コード。
組織に与えた損害は自分が補う。

キリエはそう主張してファントム・コードに加入したのだった。
レックスはその熱意に押された。

その建前の裏にある本音 ……
一途なまでに自分を慕うキリエの想いを察しながら、それを振り払うことが出来なかったのである。

【違和感】

聖地ヴァナディース、
ノアトゥーン神殿。

黄昏時に巡礼者たちが数多く訪れる季節である。

昼の熱風の名残でまだ生暖かい石造りの神殿の回廊に、密やかな足音がした。

（石の建物つてのは隠れる場所が少なくて調査がしづらいんだよね
…）

内心で呟いて、僧服を着た青年が天井を見上げた。
ルルである。

（まあ、それなりに収穫はあったかな）

そうして、関係者以外立ち入り禁止区域からするりと抜け出し、一般の参拝者たちの中に溶けこんだ。

：

「っはあく、暑かった」

物陰に隠れて僧服を脱ぎ、ルルは息を吐いた。

脱いだそれを手早くたたみ、隠していた荷物の袋に押し込む。

太陽が沈みゆく時刻、市場に灯りが点り始める。

ルルは袋を担ぎ、人波の中に紛れこんだ。

何か食料でも買い込んで宿に戻るうか、と店先の商品を眺めながら歩く。

先ほどまで着込んでいた肌は汗ばみ、微かな風さえ心地よい。

ルルは上機嫌で店頭に置かれた果物を手に取りながら鼻歌を唄った。こうしていればとりあえず（店員によるが）押し売りに話し掛けられることは少ない。

ルルは人懐こいので、ついつい初対面の人間とも話し込んでしまつて時間を浪費することも多い。

それで叱られることも多々あるので、自身の欠点を自覚しているルルは、こうして陽気に人を避けるのだった。

「」

それは陽気ではあるが、風に紛れて流れるような種類の歌声だった。並ぶ店先をはしごしながら進み、ルルはふと、人波の中に視線を感じた。

その方を見ると、小さな子どもと手を繋いだ少女がキョトンとしたような表情でルルを見つめている。

その視線の色に、ルルは思い当たって「あ」と少女に向かって指差した。

「もしかして、同郷？」

そう訊いたのは、ルルが唄っていたのが彼の故郷の民謡だったからだ。

少女は怖じ気づいたように肩を一瞬震わせたが、ルルの気安げな声におずおずと頷いた。

「…………え、ええ…………。」

その唄…………『デイデイナーフロスの数え謡』…………ですよね？…………」

その言葉に、ルルがぱつと笑った。

「そうそう！

いやぁ嬉しいな、こんな遠い土地でコレ知ってる人に会えるなんて。

あ、キミいくつ？

「同じ年くらい？」

「ちなみにボクは18歳ね」

矢継ぎ早に言葉を繰り出すルルに、少女がやや引く。

手を繋いだ子どもに至っては明らかに警戒して少女にしがみついている。

「……あの……はい……」

「私は16歳ですから……そうですね……」

「ボク、ルルって言うんだけど、キミは？」

「……あの……、」

「……サーシャ……」
「ガーランドです……」

あまりの馴れ馴れしさに、サーシャはどん引きであったが、ルルはお構い無しに笑った。

「サーシャね、」

よし覚えた！

この頃知ってるってことは、デイディーナフロスのどの辺りの出身？

ボクはバーガンディーの東の方だね、

ほらほら葡萄の有名な所！

ワインとかが名産でさ、

でもボクお酒飲めるくらいの年齢まで地元にいられなかったから、
出身なのに飲んだことないんだよね、

数え謠はさ、お祖母ちゃんがよく唄っててそれで覚えたんだ、

テンポがいいよね？
特に10の所の入りが…」

「あ、あの……」

話がまったく途切れないのを思い切ってサーシャが切り出す。

「わ、私……その、おつかいの途中で…、
早く帰らないと……。
ご、ごめんなさい！」

そう言つて、サーシャは一緒にいた子どもの手を引いて踵を返して
行つてしまった。

ルルはと言つと、

「あ、そうなんだ、
ごめんね〜、
機会があつたらまたね〜」

と何も気にした様子もなくサーシャの背中に手を振つた。
ルルにしたら、よくあることなのである。

「…ん？」

ふと、ルルは店先の果物の横に置かれた小さな袋を見つけた。
位置的に、サーシャと子どもがいた所だ。

中を見てみると小銭が数枚、袋には小さく小鳥の刺繍が入っている。
子どもの財布といったところか。

(さっきの子のかな?)

ルルはそれを拾い上げ、店の店員にさっきの2人のことを訊ねた。

それによって、ルルはサーシャ達の暮らす教会の場所を聞いた。

…

「ごめんください」

呑気な声でそう言って、ルルは教会の扉を叩いた。しばらく待つと、中から男の子が顔を出した。

「はい。」

…お祈りのかたですか?」

「あ、違う違う。」

これ、ここの子の持ち物じゃない?」

ルルがその男の子に拾った財布を差し出す。その子はそれを見て「あ」と声を洩らした。

「はい、あの …、これ、妹のです。
どこに?」

「果物のお店。」

妹ちゃん、まだ帰ってないの?

落としたことに気付いて探してんのかなあ?

さつき市場で妹ちゃんとお姉ちゃんに会ってね、
少しお話したんだよね。

だからこれ見つけたときに「そうかな」って思ってお店の人にこの場所を聞いて届けに来ただけど、追いこしちゃったかな？
余計なことしちゃったかも shouldn't

男の子は少しキョトンとした風にルルの話を聞いていたが、はっとしてフルフルと首を振った。

「そんなことないです、
ありがとうございます。」

届けてもらったことはぼくが伝えに行きますから、お兄さんは気にしないでください」

「そお？、んじやいいか〜。...

あ、伝えにつて今から行くの？

夜だから大人と一緒にじゃなきゃ駄目だよ。

じゃなきゃボクと一緒に行くよ」

「あ……、はい。」

大丈夫です。

奥に神父さまがいらっしやるので、神父さまにお願いします」

「そう。なら良かった。」

妹ちゃんとお姉ちゃんによろしくねん」

そう言つて、ルルはひらひらと手を振った。

男の子はしっかりした子らしく、礼儀正しく頭を下げて扉を閉めた。

(……面白い喋り方のお兄さん)

内心で呟き、男の子はパタパタと教会の奥に駆けた。

「神父さま」

神父クオーツは自室で写本の作業をしていた。

教典を書き写す、いわゆるアルバイトみたいなものである。

この教会のように規模の小さい所は、寄進や援助も微々たるものなので、こうして写本を作って業者や商人に売り、収入を得るのだ。

「お仕事中ごめんなさい」

「構いませんよ、

どうしました？フリック」

優しく笑いかけてくれるクオーツに、フリックは事情を説明した。クオーツは頷き、外出用の外套を羽織る。

「少し出掛けて来ます」

クオーツがそう言った相手は住み込みの修道士のエッダである。

ここ数日体調を崩して床に伏せていた彼だが、今日は調子が良いのか、昼間乾かしておいた薪を束にまとめる作業をしていた。

「すぐに戻りますから」

「はい」

クオーツの言葉に頷いて、エツダは黙々と作業に専念する。
クオーツは笑んで、教会の出口で待つフリックのもとに向かった。

*

「遅えよ、

またどつかの婆さんと長話でもしてたのか？」

先に宿に戻っていたグレンが、買い物袋を下げて帰ってきたルルの姿を見てそう言った。

「じめんじめん、

ちよっと寄り道しちゃったもんで。

あ、でもちゃあんと収穫はあったっすよ。
神殿でいろいろ情報かき集めて来ました」

言って、ルルが荷物を下ろした。

グレンに向かい、先ほど買ってきた果物を差し出す。

「何かわかったか？」

「うん、例のフラヴンケル公子はもう聖地にはいないっすね。
何日前にコツソリ出て行っちゃってマス」

「……………やっぱな……………」

これだけ足を棒にしながら情報を集めているにも関わらず、街では何の情報も得られなかった。

そうではないかと思っていたが、浪費した時間にグレンはげんなりとした。

「で、で、で、

大変なんですよ、グレさん。

そのフラウンケルが来た理由つてのが、どうやらシスター・ユーリンの安否確認だったらしいんですけど、

なんとシスター、生死不明で行方不明なんだって!」

「なにっ……………」

グレンが椅子から腰を浮かす。

「どういつ……………」

「フラウンケル公子が神殿を訪れる数日前に、忽然と姿を消したそうです。」

シスターの部屋からは争ったような跡と大量の血痕が見つかったとか。

神殿のお偉いさん方はそれを混乱を避けるために隠ぺいしているみたいだけど、

どういう経緯か国境にいたフラウンケルの耳に入ったんスね。

あるいは、フラウンケルが元々なにかを警戒していて、神殿に間者を送っていたのではないか、とも聞きました。

大層お怒りの様子だった、と聞きましたよ。」

「お怒り……？」

シスター・ユーリンの行方不明で？」

グレンは顎に手を当てた。

「シスター・ユーリンはシスター・クローディアの後継者……自分の父親の政敵だろ？……」

何者かによる襲撃、もしくは誘拐ならば、それはフラウンケルの父親であるバルカシオン派の息のかかった者の仕業である、と考えるのが自然だ。

もっと勘ぐるなら、聖地に近い土地にフラウンケルを置いて、そのフラウンケルにユーリンへの刺客を向けるようにバルカシオンが指示をした……
という考え方すら可能だろう。

「フラウンケルはシスター襲撃の件に無関係、ってことか？」

「ん、疑いがかからないように先手を打ってわざわざ顔を出した、とも考えられるけど。」

この件の調査はフラウンケルが預かるって言ったらしいし。

でも神殿のお偉いさん方が本当にフラウンケルに調査を任せてるらしいから、もしかしてシスター・ユーリンとフラウンケルは個人的

な交流があったのかもしれないね。それで信頼されたとか」

「……うん……」

「とにかく、今この聖地にはシスターも不在、フラウンケルも不在です。」

はっきり言ってもう用無しなんじゃねースか？」

「……マリーに聞いてみないとわからないが、どうもそんな風向きだな……」

次にルビー・エーテルが使用されるのは聖地ヴァナディース。

その予言に従ってここに来たが、物事には筋立てがある。

なぜ起きるのか。

その理由をファントムの予言は示さない。

今回現地で調査をして、グレンは“それ”が起きる要因をシスター・ユーリン、もしくはフラウンケル公子に見当をつけた。

その両方が聖地に不在となると、ルビー発動の理由がグレンにはまったく思い当たらない。

「まあ、変えるための未来……予言が外れるのはいつものことだからな……。」

むしろ俺らが何か行動を起こしてわざわざ未来を変える手間が省け

たつて言い方も出来るか ……」

「かもねん」

言つて、ルルが皮を剥かないままの果実をかじつた。そして気楽そうに話題を変えた。

「さつき市場で同郷の子に会つたんスよ」

「あ？………つたく。」

それで長話して帰りが遅かつたのか？」

「いやいや、あんまりお話出来なかつたのよ、なんか逃げられちつた」

「…また相手のこと考えずにベラベラ喋つたんだろ。フツの奴は引くぞ」

呆れたようにグレンが顔に苦笑を浮かべた。ルルは笑う。

「ボクとしてはフツにお話ししてるつもりなんスけどね？」

「お前がフツなら大抵の人間は無口の部類に入るな……。」

で？

その同郷の奴はなんで同郷だつて分かつたんだ？」

「あ、ボクの鼻歌に意味ありげな視線をくれたから。ボクそのとき地元为民謡をうたつてたんス」

「うたって……、
平和な奴だな……お前は」

「ちょっと地味だけど、結構かわいい娘こでした。

せつかくの縁だけど、ボク苦労してる女の子って苦手だし、向こうもボクのこと苦手っぽいからこれっきりかな」

「なんだ、“縁”って……」

再び呆れた声を吐いて、グレンは卓の上に置かれたグラスの水に手を伸ばした。

そして、ふとその手を止めた。

(苦労してる女の子……)。

ルルの同郷ってことは……北の方か？

……ルルが苦手そう……)

「……まさか、その女の子って“サーシャ”っていわないか？」

グレンの言葉に、ルルが意外そうな表情をした。

「あれ？、グレさん、知り合いだったの？」

「……マジか。」

まあ同じ街にいるんだから会っても不思議はないけどよ。

ここに来た初日に知り合った娘だ。

へそ曲げて教会を飛び出したっつう弟を捜すのを手伝って……」

「そーなの？」

そんなコトするような弟くんには見えなかったけど」

「？」

「あ、さっきその教会にサーシャちゃんの妹ちゃんの落とし物を届けに行ったんす。」

そこで出てきた男の子はなんだかしっかりしてて賢そうだったよ？」

グレンは軽く手を振った。

「あ、多分それは違う。」

あそこ子どもが何人もいんだ。

サーシャの弟は6歳だ」

「あ、じゃ違うわ」

水差しから自分のグラスに水を注ぎながらルルが笑った。

「いや〜、しかしビックリしたな〜」

「？、何が」

「あのね、その教会から帰る途中で少し寄り道して城門の方とかうるうるしてたんすよ。」

何かないかな〜、って。

そしたら、その教会で会った男の子がサーシャちゃんらと道を歩いててね。

きつとボクが落とし物を届けたことを知らせに行ってくれたんだな。

じゃなきゃ落としたこと気付いても、届いたことを知らないまま探し回っちゃったしょ？

で、その子らと一緒に歩いてたのが多分あの教会の神父さんだったんでしょ〜ね〜、

ちらつとそう呼んでるのが聞こえた」

「ああ、そりゃクォーツ神父だな。

俺は1回会って話した。

いい人だったぜ」

ルルはその神父が若かったから驚いたのだろう。

グレンはそう解釈した。

だがルルの話はまだ続けられた。

「その神父さん、話に聞いてた『レイン』の人相のまんまなんだもん。

マジでビビりましたよ〜」

…

グレンが目を丸くしてルルを見た。

「……………は……………？」

「いやいや、ボク『レイン』を実際に見たことないから。でも特徴とかは話に聞いてて、顔とかのイメージはしてたんスよね。

だから ……」

「待て」

「？」

今度はルルが目を丸くして首を傾げた。

「……まんま……ってことはねえだろ」

「だから、ボク実際にレインに会ったコトないから話に聞いた情報で ……」

「話に……って」

外見の年齢か、背格好か。

だがそれだけでイメージも何もあるまい。

「誰に聞いた情報だよ。」

それで出来たレインのイメージとクォーツ神父がダブるって、想像力を疑うぞ」

「だって、珍しいじゃないスか。」

ただの銀じゃなくて碧がかかった銀の髪なんて」

「……銀……？」

「銀の髪」

グレンが怪訝な表情を浮かべた。

「……………誰が？」

「いや、だから、サーシャちゃんらと一緒にいた神父さん」

「……………銀髪……………？」

意味ありげにグレンが復唱する。

(クオーツ神父じゃないのか……………？
それにしても、銀髪って……………)

「どんな男だった？」

「ほえ？」

「サーシャ達と一緒にいた、その神父。
銀髪の他にどんな特徴があった？」

「どんな、って……………」

何？、グレさん、

ボクなにか変なこと言った？」

「……………いいから」

ルルにしたら軽い気持ちでの世間話。
だが、グレンには何かが引っ掛かった。

…気のせいかもしれないけれど。

【胡蝶の夢】

「 ……誰が鬼婆じゃない、

この糞餓鬼やあー!!」

「痛い!!」

起き抜けに頭をどつかれて、少年はベッドの上で身悶えた。

「うう……、

……どこ、どこ?」

「アタシン家だよ。

まったく、命の恩人に向かって“鬼婆”たあ、とんだ餓鬼を拾ったよ」

老婆はぷりぷりと少年の額から落ちた濡れ布を拾い上げて桶に落とした。

少年がボンヤリとしながら

「命の……恩人……」

と呟く。

自身の身体を検めてみて、腕に巻かれた包帯や擦り傷だらけの足に気が付いた。

「……………ああ……………」

少年は息を吐く。

「そっか……………、
母さん、死んだんだ……………」

老婆がぴくりと少年の方を向いた。

皺だらけの肌、ぎよろりと飛び出した眼、大きな鷲鼻に所々抜け落ちた歯……………、
見れば見るほど醜い老婆だった。

けれど少年は覚えていた。

自分は確かにこの老婆に救われたのだ。

見回した部屋は狭く、染みのついた木の壁と天井、いかにも軋みそつな窓。

開け放たれたままの扉の向こうに、小さなかまどが見えた。

それだけで、この家の規模がわかる。

かなり小さな、小屋といってもいいくらいの家屋だろう。

「……………ねえ、俺はどのくらい寝てたの？」

「今日はアタシがあんたを拾って2日めさ。」

生き残った村の連中は西街に移ってつたよ。
あんたも行くかい？」

「……行かない」

少年はどさりとベッドに寝転んだ。

「……生き残った奴ら、いたのか。
……なんだ……」

「おや、また物騒なことを言うもんだ。
なんか恨みでもあったのかい？」

「……別に」

少年は寝返りを打って老婆に背を向けた。

…恨みに近い感情はある。

少年と母親は村で迫害されていた。

昔、少年と家族はもつと南の都市に暮らしていたのだが、役人だった父親が上司の過失で事故死した。

その当初、少年の家には見舞金が支払われたのだが、後々その上司が裏工作をして、自身の過失をもみ消した。

そうしてさらにあらぬ噂や中傷で少年と母親を街にいられないようにしてしまったのだ。

母親は少年を連れて自身の生まれた村に戻ったが、噂は村にまで伝

わっついて、肩身の狭い思いをしながら生活してきた。

見舞金の額に関しても誇大に伝わっていて、妬みから母親を雇ってくれる村人はいなかった。

母親は少年の将来のためにと財産を残しておきたかったのだが、収入がない中そんな事を言っではいられなかった。

苦しい生活を送る母子を、それでも村人たちは冷たい目で蔑んだ

…

「母さんがいないなら、あんな村に戻る理由なんかない。大体、もう影も形もないんだろ？」

老婆が頷く。

「焼け野原さ」

「……いい気味だ」

「そんな事を言うもんじゃないよ。あんたのおっ母さんも死んだだろうに」

「だからいい気味だっって言っただよ……」

優しかった母を害した報いだ。

村も、そして ……

「盗賊連中も、みんな死んだ……」

少年の眩きに、老婆が首を振った。

「まったく、何があっただらうね」

「……ドラゴンだよ」

少年がむくりと起き上がった。

それを見、老婆が少年の額に手を当てて熱を計った。

少年は目を伏せながら、

「綺麗なドラゴンだった……」

と呟いた。

老婆が首を傾げる。

「生き残った村人もそんな事を言ってるらしいね
けどそんなの、おとぎ話の生き物じゃないか」

「違うよ。」

本当に見たんだ。

とても綺麗なドラゴン。

突然現れて、盗賊たちを焼き払ってくれたんだ。

村ごと……」

「……………」

「何もかもを焼き払ってくれた。
とても綺麗な炎で。」

俺が生き残れたのだって、あのドラゴンが俺を殺そうとした盗賊を焼いてくれたからだよ」

少年が老婆の顔を見る。

「俺のもう1人の恩人だ」

「…一歩間違えば、あんたも焼き殺されてたかもしれないのに、かい」

少年は頷く。

「そういうものだろう？
奇跡なんて不公平で当然」

「…なるほど」

老婆はため息を吐いた。

「まだ幼いのに、可愛げのないものの考え方をする子だよ、あんたは。」

…で？

あんたこの先どうするつもりだい。

村に戻らないで、行くあてはあるのかい？」

「ないよ。」

だからここに置いてよ」

あっさりと言つてのけた少年を、老婆が目を剥いて見据えた。

「ばか言つてんじゃないよ、まったく。

子どもとはいえ人間ひとり増えるのが、どんだけ生活に負担がかかると思つてんだい」

「だつてお婆ちゃん、独りなんでしょ？

しばらく面倒みてくれたら、後は俺がお婆ちゃんの面倒みてあげよ。

俺すぐでかくなるし。

ちよつとの我慢じゃん」

飄々とした少年の口振り。

老婆は口を開けて肩を落とした。

「本当にとんでもない餓鬼を拾つちまったよ。

あんた、母親の口から生まれたのかい」

「苦労してるからしつかりしてるの、俺」

「はあ、まったく呆れちまうよ。

口がうまい子どもなんてろくな大人になるもんかい。

とにかく、アタシはあんたみたいな餓鬼の面倒をみるのは御免だよ。

怪我が治つたら出て行くんだね」

「ん、じゃあ治るまでをお願い続けるから」

「御免だつつつてんだろ」

言つて、老婆は部屋の扉に向かった。
少年がその背中に声をかける。

「お婆ちゃん、今日の御飯なに？」

老婆が鋭く少年の方に振り返る。

「アタシゃあんたのお婆ちゃんじゃないよ！」

「だって俺、お婆ちゃんの名前知らないもん」

「サンドラだよ。」

そう呼びな」

「うん、わかった。」

サンドラ」

「呼び捨てかい！」

老婆が呆れ果てたように首を振った。

少年がコロコロと笑う。

「ねえ、サンドラはどうして村に行ったの？
知り合いでもいた？」

その問いに、サンドラは静かに否定を示した。

「人がたくさん死んだと聞いたから見に行ったのさ」

「サンドラって野次馬なの？」

「言い方に気を付けな、まったく……」。

……別に大した用でもないさ。
ただ、種を蒔きに行っただけ」

「種？……何の？」

少年が不思議そうに老婆の顔を見る。
探るような視線を受け流しながら、サンドラが踵を返した。

「別にいいだろ、何でも。」

それより、あんたこそ名前は何てんだい」

「俺？」

……うーん、どうしよ」

「あん？」

不可解な反応に、サンドラが眉をひそめた。

「俺、自分の名前あんまり好きじゃないんだよね」

「親不孝者め」

仕方ないじゃん、と少年が笑った。

軽く少年の額を小突いた老婆の袖から、花の匂いが零れた

…

*

…見開いた蒼穹の瞳が、見下ろしてくる女の表情を映した。

「…なんだ、起きたのか。」

顔に何か落書きしてやろうと思ったのに、つまらん」

「……鬼婆」

寝呆けたようなライズの呟きに、女が眉をひそめた。

「誰が鬼婆だ、糞餓鬼」

そう言つて、ライズの鼻をつねる。

ライズはそれを軽く払いのけてベッドから身を起こした。

「……おはよう。」

迎えつてイヴだったのか」

「おはよう」

そう言つてベッド脇の椅子に座り直した女は、年の頃は30代の半ばに見えた。

顔立ちは整つてはいるがどこか中性的で、美人と言うのは少しそぐわない。

櫛を通しただけの赤毛や質素な服装にも、色香の通うものは何一つない。

その女が足を組み直して、病室の中をぐるりと見渡した。

部屋にベッドは2つ、ライズのものと同かい合って置かれたもう一つはカーテンが引かれており、中の様子は見えない。

「キリエは一度も目を覚ましてないらしいな。
看護師に聞いた」

「ねえ？、困っちゃうね」

「お前一緒に居たんだろっが。
守ってやれなかったのか」

「あ、ムリムリ。」

そのとき一緒じゃなかったし」

「そうかい」

女が低くため息を吐く。

「ま、死ななくてよかったな。」

「一応お前ら主力だし」

「そだね」

イヴがちらりとライズを見やる。

先ほどから会話にどこか力がないというか、どうも心ここにあらず、
という感じだ。

「何だ、まだ体調悪いのか？」

「ん？、 …いや…」

ライズがぼんやりと窓の外を見た。

「……夢をみてた……」

「夢？」

「うん、昔の夢……」。

懐かしくて、少しポーツとしちゃう感じ……」

「ほお」

そう言っつて、イヴは立ち上がった。

「じゃあ少し浸ってな。」

私は医者にキリエの容態を詳しく聞いてくるから。

馬車はすぐに手配できるけど、長旅になるから相談しないと」

「うん……、ありがとう」

ふ、と笑ったライズにイヴがひらひらと手を振った。

扉が閉まる音がして、窓のカーテンが揺れた。

「……おいで、サンディ……」

ライズが呟く。

その声に応えたように、ひらりと漆黒の蝶が現れ、ライズが差し出した指に留まった。

…

(あなたの中にはとても大きな憎しみがある)

(あなたは世界を憎んでいるわ)

…

ベルローズに言われた言葉が耳に蘇る。

(あなたは何のために戦うの?)

…ライズは深い息を吐いた。

「何のため……か……」

窓の外に視線を向ける。

蒼い蒼い空と、白を基調とした街並みが見えた。

(仕方がない)

たとえどんなに憎んだとしても。

(……世界はこんなにも美しい……)

だから、守らなければならないのだ。

【雛芥子】

…土煙舞う平原を貫き、西へと向かう公路を2頭立ての馬車が走る。

緑の立ち枯れた光景は荒涼とした印象が強く、夏の陽はさらに無情な風情で大地を照らした。

高く響く蹄の音。

…それが不意に共鳴のように重なった。

否、突然あらわれた複数の馬蹄の響きに飲み込まれたのだ。

「野盗 …！」

御者の悲鳴に似た叫びと、突然の異変に驚いた馬のいななきが重なる。

馬車を囲んだ5騎の盗賊、その内の1人が速度の落ちた馬車の御者台に座る男に向かって矢を放った。

それは男の肩に突き刺さり、痛々しい悲鳴をあげさせる。

そうして別の盗賊2人が両脇から馬車を引く馬を止めた。

この乗り合いの馬車はせいぜい10人乗り、抵抗にあったところで掠奪は容易い。

盗賊の1人が騎乗したまま馬車の後方の幌に手を掛けた

…

そのときだった。

「！！！！！！」

閉ざされたままの幌の切れ目から、突然飛び出してきたのは靴を履いたままの足だった。

盗賊は勢いの良い蹴りをまともに顔面に受け、仰け反るようにして落馬した。

男はそのまま昏倒する。

「どうした！？」

何事かと仲間が馬車の後方に回る。

すると、馬車の乗車口の木枠にぶら下がったまま足を突き出した姿勢の少年の姿があった。

体格は小柄で華奢、少女のようにすら見える。

勢いをつけて飛び出し、先ほど蹴倒した男の上を飛び越えて着地する。

手には何も持っていない。

丸腰である。

それを無謀とも愚かとも判断がつかぬ内に、少年は地を蹴って一番近くに馬を立てていた盗賊に向かって突進した。

恐るべき跳躍力で馬の頭より高い位置に飛び、少年は驚愕の表情を浮かべたばかりの盗賊を蹴り飛ばす。

頸骨が折れる音がした。

そのまま落馬してゆく男の手にあった剣を拝借し、少年は騎手を失いかけている馬の鞍を蹴って再び宙に舞った。

離陸点が馬の背であつたために、今度の跳躍はさらに高かつた。

少年はさらに次の盗賊の頭上に飛び、落下の勢いに任せて敵の脳天に剣の峰を打ち付けた。

低く短い呻き声を上げた男が落下する。

衝撃に抗議の声をあげた馬の首を軽く叩いてなだめ、少年が剣を持ち直した。

残り2人。

騎乗している者はそれだけで徒歩の者に対して戦力において圧倒的に有利。

しかしながら、先ほどの一瞬にすら思える少年の豪勇は盗賊たちを怯ませた。

倒れた仲間を見捨て、盗賊たちは逃げ去って行った。

…

「いやゝ、鮮やかだったなあゝ、さすがクリス」

馬車から顔を出して開口一番、ドルサックが感嘆の声をあげた。

誉められた当人はどこかボンヤリとした表情で、先ほど敵から奪った剣を地面に落とした。

刀身に細やかに入ったヒビは、クリスの剛力を言葉なしに語る。

倒れ伏す盗賊たちの内、最初にクリスに顔を蹴られた1人以外はすでに息絶えている。

そのうち1人は首の骨を折られ、もう1人は頭蓋骨を砕かれて。無意識の内に急所を狙うのはクリスの性だった。

最初の1人はただ単にクリスが本調子でなかったために怪我で済んだのだ。

なぜならクリスは、馬車が止まるまで熟睡していた。

あくびをひとつ飲み込んで、クリスは馬車の方に視線を向けた。

御者台から下ろされて怪我の手当てを受けている男が恐縮して見上げているのはユーリンだった。

その隣で、ケイヴィンが彼女の手伝いをしている。

「とりあえず進路に関係なく、近くの人里できちんと手当てをした方が良いでしょうね」

御者の怪我を看ながら、ユーリンがそう言った。

「うう……、す、すみません……」

「あなたのせいじゃない。

ドルサツク！、御者台、代われるだろう？」

声をかけられてドルサックが頷く。

「まあ片手でもなんとかなるかな。クリスもいることだし」

「？」

ドルサックの後半の言葉の意味を汲みかねて、ユーリンが首を傾げた。

その視界の端で、盗賊たちを乗せていた馬3頭がゆったりとクリスのそばに寄り添った。

*

進路を変えて馬車がたどり着いたのは、小さな町だった。

医者を訪ねて御者を送り、クリスら4人は盗賊たちが乗っていた馬3頭を引いて宿を探した。

「ちょうどいい、もらっちまおうぜ」

「ちょうどいいって……、」

隻腕で手綱が引けるのか、お前」

「まあなんとかなるんじゃないかねーか？
そろそろ路銀があやしいから節約しねーと」

「俺、馬乗れるよー！」

ケイヴィンが胸を張って挙手する。

ユーリンはそれを微笑ましく見やり、次いでクリスを振り返った。

「クリスは？」

馬に乗れるか、という問いかけで振り返ったユーリンの目に、どこか上の空で辺りを見回すクリスの姿が映った。

「クリス？」

「……ん」

クリスはふわふわと辺りを見回して、一言小さく

「花のにおい……」

と呟いた。

ユーリンが首を傾げる。

「花？、……ああ、本当だね。

どこからだろう」

「お前、花なんて興味あったっけ？」

ドルサックが意外そうにクリスを見た。

クリスは無言のままに辺りを見回し続けた。

(……らしいのにおい)

正確には、ライズの衣服や肌に染み付いていた花の匂い。それによく似た香りがどこからか漂う。

似た花の香などいくらでもある。

だがそれでもその香りがクリスの気に掛かったのは、もしかしたら、と思ったからだ。

ライズのゴーレム・サンデイは神出鬼没だ。

もしかしたらクリスを捜しに来るかもしれないという可能性をクリスはずっと考えていた。

出来れば早めにファントム・コードの誰かと接触したい。

ロイドかライズならばさらに話が早い。

だが、やはりこれはライズではないだろう。

花の種類はよく似ているが、これはやはり花の香だ。

ライズ本人の匂いが欠けている。

ライズではない。

「……ん」

納得したように頷いたクリスの様子に、ドルサックとユーリンが顔を見合わせて首を傾げた。

…そうして道を歩いていて、ふと、クリスはその花の香りが強くなったのを感じた。

ユーリンも足を止める。

「これは …、

見事だな……」

町の中央ともいえるその場所に、その広場はあった。

その一面に咲く赤やオレンジの花。

細長い茎の先に繊細なほど薄い花弁。

やわく吹いた風に、一面の花が波のように揺れた。

「おー！、すげー！」

ケイヴィンが感嘆の声をあげて広場の入り口まで駆け寄った。

そこで、ふとケイヴィンがびくりと足を止める。

その様子を見、ドルサックが

「どした？」

「……あれ……」

そう言つてケイヴィンが広場の中央を指差した。

その指差した先 ……

広場の中央は少し高くなつており、石垣で囲ったステージのような形になっている。

まるで花の泉の中央に浮かぶ小島。

その上には……断頭台。

古びて朽ちかけた骨組みだが、明らかに断頭台だ。

困惑の表情でケイヴィンがドルサック達を見た。

*

「あの広場はね、
昔、処刑場だったのよ」

夕刻、4人が部屋をとった宿の女将がそう言った。

「5年かそれくらい前だったかしら」

「それがどうしてあんな花畑に？」

ドルサックが首を傾げた。

給仕のために部屋に来ていた女将は肩をすくめて茶を注いだ。

「わからないのよ。

本当にある日突然 ……」

「突然？」

「そう。突然だったの。

まだ処刑場として使われていた頃よ。

ある日突然、一晩であんな一面に花が咲いたのよ。

不思議でしょう？

前日までは砂利と土ばかりの広場だったのに。

誰かが夜中に植え付けたとしか思えないんだけど、だとしても一晩であれだけの花、1人2人じゃとても無理だわ。

なのに広場横の詰所にいた刑事の誰も、その夜は何も気付かなかつたって。

本当に、奇跡としか言いようがないの。

だからなんだか改めて更地にするのも躊躇われて、かといってあの景色のまま処刑場として使うのも何だかね……、

……っていう話になって、それから処刑場はあそこから移動したのよ。

断頭台はその名残。

それから毎年、この時期になるとあそこにはああやって綺麗な花が咲き誇るわ。

今ではこの町の名所みたいなもので、わざわざあれを見に来る人もいるくらい」

「へえ」

ドルサックが感心したような声を洩らした。

女将の話を、ユーリンとケイヴィンも興味深げに聞いている。

クリスはというとどこか上の空だったが、もともと感情表現に乏しい少年なので、周囲も気にしなかった。

「あとね、山をひとつ越えた辺りに、また綺麗な所があるのよ」

「綺麗な所？」

女将が嬉しそうに頷く。

地元のことでも自慢できることがあるのを誇らしげに。

「丘一面、薄紫なの。」

晴れた日は本当に綺麗」

「花？」

「ええ、そう。」

何ていう花かはわからないんだけど。

…実はその場所も、ちょっとワケありで」

女将の表情が少しだけ曇った。

ドルサックが首を傾げる。

「ワケあり？」

「そう。」

……実はそこ、むかし小さな村だったのよ。

けど10年くらい前に壊滅してしまったの。

盗賊団に襲われて」

「盗賊…、」

なんだ、この辺りには多いのかい？」

「うん …、まあ多い方なのかもねえ……、
大抵はおいはぎとかなんだけどね。」

でもその村は徒党を組まれて襲われたらしいの。
ほとんど全滅だったらしいわ」

ユーリンが眉をひそめる。

「ひどい話だな……」

「ええ。」

でも盗賊も壊滅したのよ」

「……は？」

意味を取りかねて、ドルサツク達が首をひねった。

「村は焼き払われたの。
盗賊団ごと。」

ドラゴンが現れたなんて噂もあるけど、実際はわからないわ。
盗賊たちの仲間割れが起きたんじゃないか、っていう噂の方が現実
的かしらね」

「……どらごん……？」

とても静かな声でした。
クリスだ。

それに気付いてドルサツクが笑う。

「どうした？」

「……」

クリスは少し考え込むような仕草を見せた。
これはなかなか珍しい。

ケイヴィンが首を傾げる。

「クリス？」

「……」

何やら思案するようなクリスの様子に、ドルサック達が顔を見合わせた。

【年長会議】

サンクレールに滞在するファントム・コード達の元に奇妙な客が訪れたのは、クローディアらが街を発った2日後のことだった。

最初に彼と顔を合わせたのは歌鳥で、ちょうど宿のロビーにいたときだった。

ロイドが宿帳に記名した偽名を訪ねてきた老人の声がして、歌鳥は振り向いた。

それに気付いた宿のフロントが、老人に歌鳥を示して「あちらのお連れ様です」と紹介した。

老人は弓のように曲がった腰で振り向いて、長い眉毛に隠れてしまふいそうな目を丸くした。

「……おお……」

真っ白で立派な髭に隠された口元が動いた。

歌鳥はきよとんとして老人を見つめる。

…誰だろう。

そのとき、ロビーの階段から太いバリトンの声が響いた。

「ウォーレン？」

歌鳥と老人がほぼ同時に声のした方向に顔を向ける。予想に違わず、そこにいたのは漆黒の装いの長身の男・ロイドだった。

ロイドは老人と歌鳥を一瞬見比べて、まず老人の方に向いた。

「まっすぐアジトに向かう予定じゃなかったのか」

「通り道じゃけん、

顔を見ておこお思つての。

一目で判つたわ。

これが……」

言って、老人の眉に隠れた視線が歌鳥に向く。歌鳥は戸惑いながら、ロイドの方を見上げた。

「あの……」

「ああ、紹介する。

来い、2人とも」

そう言っつてロイドが顎で階段の上を示した。

…

この数日前には、重傷を負って意識不明だったクロードディアの従者・アイラは意識を取り戻していた。

彼女は主と父親の出立を聞かされてひどく落ち込んだようだった。

置いていかれた、という意識ではなく、それほど長く昏睡していた自分自身に腑甲斐なさを感じたらしい。

「……面倒をおかけした」

ことの成り行きを聞かされて開口一番アイラはレックスに頭を下げた。
レックスが笑う。

「こちらこそお父さんにはお世話になってますから」

「……」

アイラは傷のある肩を押さえた。

「痛みますか？」

「……いや」

「……あまり思いつめては駄目ですよ」

労る声に、アイラが顔を上げた。

レックスの顔は普段冴えない印象だが、それは返って人当たりを良くする種類のものだ。

「傷が治れば、いくらでも取り返しがつきます。

まずはきちんと体力をつけて療養に専念して下さい。

全快の状態でクローディア殿下やお父さんに合流する方がよろしいでしょう」

優しい声に、アイラは少しだけ表情を和らげた。

「……心遣い、感謝する」

頷いたレックスがベッド横の椅子から立ち上がったとき、扉をノックする音がした。

レックスの返事とほぼ同時に部屋に顔を出したのはロイドだった。

その後ろに見えた顔に、レックスが「あ」と声をあげる。

「せんせい
師匠」

ロイドと老人の半歩後ろにいた歌鳥が、レックスの言葉に首を傾げてロイドを見上げた。

「せんせい……？」

「ジムサウオーレン。」

うちの元・造獣師リーダーだ。

レックスに原初型ゴーレムの造り方を教えた男でもある」

レックスは造獣師の名門ジェラルディンの出身だが、実家にいる間にはゴーレム造りに携わったことがなかった。

しかも原初型ゴーレムは今や禁じられた技術といってもいい。

ジェラルディンのような王道の造獣師らには本来なら縁がないのだ。

「まあ、邪道じゃな。」

わしのような外れ者の技術者にはファントム・コードのような人外の組織は居心地がええ」

そう言つて、ジムサは「よっくらせ」と背負った荷物を部屋の隅に下ろした。

レックスが困つたように笑う。

「お久しぶりです。」

でも師匠、ここは僕らの部屋ではないので荷物は隣に ……」

「構わない」

アイラが短くレックスの言葉を遮った。

「荷物くらい置かせておけばいい。
別にここに寝泊まりするわけでもないのだから」

「そうですか？
すみません」

「……なぜ貴殿が謝るんだ……？」

半ば呆れたような表情と声で、アイラがレックスを見た。

「そうか」と言ってレックスが笑う。

部屋の中央に置かれたソファーに歌鳥とロイドが腰を下ろし、テーブルを挟んで向かい合うもうひとつのソファーにジムサが座った。

レックスがアイラのベッド脇から椅子を動かして、3人のそばに移動した。

「アジトに向かう途中だったんですか」

レックスの問いに、ジムサが頷く。

「技術関係の連中は揃って召集されとるらしいの。
なんでも、ルビーの現物が手に入ったとかで」

「ああ、この前ライズが入手した。
それなりの代償は払ったがな」

ロイドが言う“代償”とは、キリエの負った傷のことである。

『ルビー』と聞いて、歌鳥の表情が曇る。

ライズがそれを入手したらしいという話はすでに聞いていた。しかし歌鳥にとって『ルビー』の単語はセナ砦の惨劇と直結する。

そんな危険なものが親しい人間の手にあるという状況はあまり気分の良いものではなかった。

歌鳥の様子に気が付いていない風に、ジムサとロイドの会話は続く。

「たしかキリエの迎えにやイヴが派遣されたとも聞いたしの。まさしく総動員、かえ」

「まあな。」

ついでに聖地のグレンの所にはルルが行ってる」

「大事になってきたのう」

「……近えんだろ」

「確かに」

ジムサが眉の下の目をちらりと歌鳥に向けた。歌鳥がわずかに身を固くする。

「『虹姫』まで出てきたら、コトは近いえな」

その言葉に、ロイドが歌鳥に横目で視線を向けた。

「……歌鳥だ」

「カトリ、な。
ずいぶんとまあ可愛いらしい娘っ子じゃて。

エアリアルの二の舞にならんとええが」

「その話はいい」

低いため息を吐き、ロイドがソファア―に背を預けた。

歌鳥は隣のロイドとジムサを見比べるようにしてから、おずおずと

「あの……、なみか……じゃない、

カトリ……ナミカワです。

よろしくお願いします」

とペコリと頭を下げた。

ジムサが頷く。

「おうおう、礼儀の正しい子じゃ。

横のデカブツのときとは大違いじゃのう」

「うるせえよ」

小さな舌打ちをしてロイドが顔をしかめる。

「お前さんはファントム・コードに入った始めっから態度が大きかったからの。

可愛げのかけらも ……」

「やかましい」

「はは」

横でレックスが控えめに笑う。
そうして歌鳥に向かって

「ロイドさんのゴーレムは師匠が造ったんだよ」

「ゴーレム……、って、ブラック……ですか？」

「……すごいですね……」

歌鳥が洩らした感歎の声に、ロイドがどこか憮然として顔を背けた。

どうやらロイドはこの老人に頭が上がらないらしい。

珍しい一面を見た気がして、歌鳥が笑みを零す。

「……何だ」

「いえ、別に」

くすくすと歌鳥が笑った。

*

「……ずいぶん貫禄が出て来たじゃないかえ、
お前さん」

その夜、ロイドの部屋でジムサがそう言った。

卓の上には酒杯と茶器。

ロイドが酒杯の方を手取る。

「40も過ぎて数年だ。
貫禄も何もねえだろ」

「相変わらずじゃの」

ジムサが茶器を取った。
長い髭が茶に濡れる。

「今や、お前さんより長くファントム・コードに在籍するのはわし
くらいのもか……。」

まったく、皆早死にしおって……」

「……まったくだ」

言葉少なめにロイドがグラスをあおる。
そうして話題をひとつ零した。

「ライズとキリエがベルローズ＝ロベリンに遭遇したらしい。

その少し前には、ライズの奴はシグマ＝ラメッドにも出くわしてる。

どうやら向こうも詰めに入ってきてるような気がしてならねえ……」

「シグマ＝ラメッド……、

先代を殺した、あの《白い血の民》か……!!」

ロイドが苦い顔で、黙って頷いた。

「それでもライズは無事だったのかえ。
あれは昔からほんに運のええ……」

「同行してた加入予定のガキが凄腕でな。
それがシグマに深手を負わせたらしい。
まあ、取り逃がしたようだがな」

「それは惜しまれる。」

お前さんも溜飲が下がらんのかないかえ」

「……別にどうでもいい」

ロイドは琥珀の隻眼をちらりと流した。

「先代のことについては、俺はシグマを恨んじやいねえよ。
あれは俺の未熟が招いた事態だ。」

第一、仲間が死ぬ度に敵をいちいち恨んでたら身がもたねえ」

「……やっぱり貫禄がついてきたのう。」

お前さん ……」

ジムサが小さく息をつく。

「じゃが、誰も彼もお前さんのように達観はしておらんぞえ。
特に仲間を失ったことのなかった若い者はの」

「……わかってるぞ」

今度はロイドがため息に似た息をついた。

「……話は変わるが……」

「んん？」

「……ライズの奴が《ダブル・コード》である可能性が出てきた……」

ロイドの言葉に、ジムサが茶を吹き出しかけた。

「ダブル……、まさか」

「可能性というより、ほぼ確定だ。
ファントムの誤作動があつてな、
そのときに判明した。」

本人は何のことだか分からんようだが「

「……“誰の”……」

「わからん」

ロイドが首を振る。

「だが思い返してみれば、確かにあいつは特異ではある。」

ゴーレムの性能にしろ、思考にしろ、ファントムが選定してきたマリオンの中において、1人だけ毛色が少し違う……。

今まで気には留めてなかったが ……」

「……確かに。」

前々から感じておったが、ライズの“サンディ”の性能は群を抜く。

基本的に今の主流ゴーレムに比べて原初型ゴーレムは性能が高い。

それは“他者の血”で補強をせずに“自身の血”だけで造り上げるため、より顕著に主人の“心のかたち”が具現化されるからじゃ。

完成形に制限がない。

あるとすれば、主人の“精神力”の制限じゃ。

本人の器量以上のものは出来上がらん。

それを考えると ……」

「ライズの奴がゴーレムを造ったのはあいつが15歳のときだ。

その頃の“精神力”で完成したのがあのサンディ……

しかも完成当初から性能はあのままだ。

原初型ゴーレムの特性として、主人の成長にあわせてゴーレムも進化する場合がある。

だがサンディは出来上がった当初からあの性能。

創作者のレックスの腕前というよりも、やはりライズ本人の精神性が影響してるんだろう。

これはもしかしたら、もしかするぞ」

「……うむ……」

黙りこんでしまったジムサに向かい、ロイドが身を乗り出した。

「あなたに頼みがある。」

あなたがアジトに向かうのは、ライズが入手したルビーの分析のためだろう。

当然ライズもアジトに戻っているはずだ。

……あいつを頼む」

「頼む、……とは？」

「見守ってやって欲しい。」

あいつには自分が《ダブル・コード》である自覚がない。
この先なにが起こるとしても、まだ間に合うはずだ」

「……マリーエレメント嬢に相談してみるかえ」

「いや」

言って、ロイドは低く息を吐いた。

「マリーはおそらく答えない。
ファントム・コードはある程度“滅びの歴史”を踏襲しなければなら
ない。」

《ダブル・コード》は“歴史の修正点” …、
俺たちがそれに深く関与することをファントムは拒否するだろう」「
その言葉に、ジムサは眉の下の目を見開いた。

今のロイドの発言は …

「お前さん……まさか……

ファントムの“意思”に背くつもりかえ……!?!」

「声がでけえよ」

ロイドが人差し指を口元に寄せた。

ジムサが、2人しかいない室内を探るように見回す。

「お前さんの気持ちはわからんでもないが …」

「あんたにまで何かしろとは言わねえよ。

ただ、気に掛けてやって欲しいんだ。

今までの全てがファントムの手の上だ。

… 悲劇も含めてな。

それも仕方ない。

ファントムは感情も何もかもを引き換えにして《絶対意志》だけを
残した。

唯一の願いのために。

だがファントムは、今の世界を生きてる人間の感情に触れることが
ない …

俺はファントムの願いには賛同する。

目指している未来が同じなら、多少道筋が違ってもいいはずだ」

「……ファントム・コードを否定することにも繋がりがねんぞえ」

「繋がんねえよ。

ファントム・コードの否定は俺の人生の否定だ」

ロイドは強い色を湛えた隻眼をひたと向ける。

「俺は絶対に、

俺自身を否定しない」

【Count:3】

聖地ヴァナディース、

早朝。

太陽は地平から顔を出して間もなく、夜の名残で空気はまだ生ぬる
い。

これが真昼になると刺すような日差しと猛暑になる。

高台の神殿の威容に見下ろされながら、砂埃の舞う小路を歩く2人
組がいる。

「考え過ぎじゃね〜っすか？」

前を歩くグレンの背中に、ルルが持ち前の軽い声をかけた。

「別に関係ない気がするけどなあ」

「俺だってそうは思うけど、なんだか釈然としないだろ」

「まあ釈然とはしないかもだけど」

話の内容としては、ルルが見掛けた“神父”が何者なのか、という話である。

ルルが見掛けたサーシャ達と一緒にいた“神父”は、聞けば聞くほど『レイン』の特徴と一致する。

つまりそれはグレンの会った“クォーツ神父”ではない。

「俺が会った“クォーツ神父”は黒髪だった」

グレンはサーシャ達の教会にもう1人神父がいるとは聞いていない。

修道士が1人いるとは聞いているが、実際にその修道士と顔を合わせたことはなかった。

もつとも、グレンが教会に足を向けたのはクォーツと話をした一回きりだから、その修道士と町ですれ違ってくるいはあったかもしれないが。

「とにかく、お前が見掛けたサーシャ達が“神父さま”と呼んだ相手は俺が会った教会の神父じゃない。」

たまたま他の教会の神父に会ったってだけかもしれないけど、だとしてもお前の言うその神父の特徴は確かに『レイン』そのものだ。

そうある偶然じゃねえ。

その神父が何者なのかこの目で確認しておきたい」

「『レイン』じゃないことを？」

「…ああ」

「確認するまでもなく違うと思うけどなあ、
だって『レイン』で《白い血の民》の大將つしょ？
こんな聖職者（天敵）だらけの土地に来ます？」

「俺だってそうは思うが、何回も言ってるだろ。
念のためだよ」

「ふうん……、」

「……で、サーシャちゃんに訊いてみるんすか？
なんて？」

ルルの疑問に、グレンがピタリと足を止めた。

「……………」

「……………考えてないの？」

ルルが苦笑する。

グレンは気まずそうに頭を掻いた。

「……………不自然か？」

「不自然っしょ。

突然“昨日のアレ誰？”ってのも。

世間話するような間柄でもないんでしょ？

グレさんの場合、特に」

「……………」

グレンは立ち止まったまま腕を組んだ。

周りに建物はなく、片側に水路、もう一方は閑地だった。

おそらく秋冬は畑として使われている土地だろう。

グレンはルルを振り返る。

「お前が世間話に行つて、その中でそれとなく……………」

「えゝ？、今さらあ？」

確かに、昨日の時点ならまだしも今日になってルルが教会を訪れるのは“今さら”である。

(ライズの奴なら上手いことやれるんだろうけどな)

と、普段は反発している仲間の顔が頭に浮かんで、グレンははっと

首を振った。

…そのときだった。

「……グレさん」

「あ？」

「何か声、聞こえない？」

「声？、どんな」

「何か遠くの方から……」

そうして2人同時に見上げた空に。

「あああああああ」

「!?!」

「!?!」

さながら流星のように墜落してくる……人。

その姿を見、グレンが驚愕の声をあげた。

「ヴィヴィー!?!」

墜落してくる。

とっさの判断で、グレンはその着地点に走った。

閑地の真ん中で、グレンは少女を受け止め一瞬だけゴーレム化し、

衝撃を和らげる。

それでも咳き込み、地面に打ち付けた背中が痛んだ。

「……つつぁ……」

「ううゝ……」

人通りのない小路、

人々は真昼にそなえて家路についた刻限。

人目はなかった。

グレンが改めて身を起し、腕の中で目を回している少女の顔を確認した。

「お前……、やっぱりヴィヴィか!？」

「……グレン……?」

「何してんだ!？」

お前たしか虹姫と一緒にサンクレールに行ったはずじゃ……」

「いや……ちょっと……いろいろあって……」

頭がくらくらとするのか、エレナは額に手を当てたままぐったりとグレンに身体を預けている。

「っーか……ここ……あつい……」

「当たり前だ!

砂漠の真ん中だぞ!？」

ルルが駆け寄ってくる。

「それ誰？、グレさん」

「新入りだよ！、おい、しっかりしろ！ヴィヴィ！」

「何があつたら新入りさんが空から降って来るの？」

「知るか！」

エレナが呻いた。

「何が“なんとかなる”だよ……、

グレンがいなけりや墜落死じゃねえか……」

「あ？」

「ああもう……うる……さ……」

そのままエレナが沈黙した。

気を失つたらしい。

「お………おい！

ヴィヴィ！？」

グレンが慌ててエレナに呼びかける。

それを背中越しに覗きこんで、ルルが

「グレさん、ボクいいこと思いついた」

「あ!？、何が!？」

「このコの介抱のために教会に行くのはどう?
ここからならボクらの宿よりそっちのが近いし」

グレンが呆けたような表情を浮かべた。

しかし教会の方が近いことは確かなので、

「……よ、よし！」

それだ！」

とグレンはエレナを抱えあげて小路の方に戻った。

*

…小さな教会で、そのとき彼は針仕事をしていた。

強過ぎる屋外の日差しを薄紗のカーテンでやわらげながら、その明かりで室内は淡い光に満ちている。

修道士とはいえ男性が裁縫をするのは珍しい。
だが彼は線が細くどこか儂げな風情があった。

絹のように真っ白い細い髪が、病的に白い頬にかかっている。

男性には珍しい針仕事だが、明るい室内の光景はどこか絵画的な美しささえあった。

そのとき、扉が静かに開いた。

その隙間に覗いた顔を見て、彼は蒼い瞳を向けた。

「…なにか」

冷やかなほかに静かな声でそう問うた彼に、部屋を覗きこんだ子どもがおずおずと

「ここで本読んでいい？」

エッダ」

と言った。

エッダは顔色ひとつ動かさなかった。

「……どうぞ」

またか、と内心でエッダは思った。

この子どもの名前はエイルという。

この教会兼孤児院において最年長のまとめ役である少女の義弟だった。

最近この子どもは義姉に反抗的で、それゆえか孤児院の子ども達の中で孤立しがちだったことを、エッダは子ども達に関わらないながらも見掛けていた。

子どもなりになんとなく居場所がないことはわかる。

不思議なのは、何故この子どもは自分の傍に居場所を求めているのか、ということである。

特に話をした覚えはない。

面倒をみた記憶もないし、優しく接した記憶すらなかった。

この子どもの義姉は、明らかに義弟がエツダに近づくことに抵抗がある様子を見せる。

無理もない、と思う。

それは彼女の本能だろう。

エツダは《白い血の民》だ。

人間の“命”を犠牲にして自身の“命”を維持する異形の人種。

あの少女はいわゆる母性本能が強い。

弱い者を守るうとする彼女には、エイルがエツダに近づくのは猛獣に近づくように感じられるだろう。

その感覚は正しいと思う。

実際に夜、つまりエツダが《白い血の民》として活動する時間帯にこの子どもが近づいてくると、抑制していてもエツダは自身の飢えを意識することがある。

この子どもが懐いてくるのは、エツダにとってはありがたくない。

歓迎しない空気は発しているつもりなのだが、普段の振る舞いがそもそも冷淡なので気付かれてないのか。

エイルはひよこひよここと部屋の中に入り、エツダの椅子の足元で本を広げた。

子ども向けの童話だ。

エイルの年齢よりもやや年長向けの本だが、挿し絵が多いのでエイルは文字よりもそちらを見ているようだった。

エツダは無言で手元に目を戻して針を動かし続けた。

その間、教会の中どこからか少女の歌声と琵琶の音色が微かに流れてくる。

そうして数分。

「……？」

エツダがふと顔を上げた。

それに気付いてエイルが首を傾げながら見上げる。

「どうしたの？」

エツダは答えないまま視線を窓の方に向けた。

(……………気脈が揺らいだ……………?)

エツダは立ち上がりかけたが、そのとき

「!?!?!」

震動と爆音。

礼拝堂の方角だ。

エイルが不安げな表情で立ち上がった。

「なに?」

「じじいさま」

白い手で子どもの動きを制止して、エッダは扉に手を掛けた。

【Count:2】

教会に向かう小路。

グレンは気を失っているエレナを背負いながら、ルルを伴って歩く。

エレナは細身で、グレンは大柄なので背負うことに負担はないが、乾いた熱気で額に汗が浮く。

そんな道中、ルルがグレンの背中のエレナの顔をまじまじと見た。

「ふ〜ん、なかなか可愛い娘っすね」

「そうか?」

「ちょっと色気は足りないけど」

ルルのその感想に、グレンが複雑な表情を見せた。

「性格が男だからな。」

何せ一人称が“オレ”だ。

まあ、話してて楽っちゃ楽だな……」

「グレさん、女の子ニガテだもんね〜…。
モテるのに勿体ない」

「モテ……」

グレンが動揺して足元の凹凸に躓きかけた。
震動に、背中のエレナが軽く呻く。
しかし意識は戻らない。

「モテてねーよ！」

「え〜？」

まあライズつちには敵わないけど、グレさんも何気にモテてますっ
て。

ニガテなくせに女の子に優しいし」

「モテてない！」

大体、そんなことにうつつを抜かしていい立場じゃない」

「そおかなあ……、

別に彼女の1人2人いてもいいと思うけど」

「2人は駄目だろ」

呆れてグレンがルルを振り返る。
ルルはけらけらと笑った。

「グレさんはそおだね〜。

ボクは地元で一夫多妻が珍しくなかったから抵抗ないけど」

「ああ……、

そついやそつか……」

グレンは納得して頷き、エレナを背負い直した。

「同じ国の中でもいろんな所があるな」

「だって最初から1つの国だったわけじゃないし」

「……それもそうだ」

「このヴァナディースだって、位置的にログクロートの領地になつてもおかしくなかったわけだしね」

「ああ、確かにそうだな。
位置的に」

ルルが少し首を傾げた。

「……グレさん、疲れてきてる？」

「なんか返事がテキトーになってきてんすけど」

「暑いんだよ……」

この気温、重さは苦ではないが人ひとりの体温は背中に暑い。

首にべたつく汗を意識しながら歩くグレンの目に、目指す小さな教会の姿が見えてきた。

市街地の営みの音は後方に遠くなっている。

自身とルルの足音に混じり、聞こえるのはエレナの息遣い。

そんなグレンの耳を、微かに流れるような旋律が撫でた。

「 ……唄………? 」

澄んだ歌声と滑らかな旋律が、グレンの記憶の一部を刺激した。

…

（ …… だから唄うの ）

…

誇らしげに、しかし切なげに“彼女”はそう言った。

…

（ あたしにはそれしかなかったから ）

…

「 グレさん? 」

足を止めたグレンの顔をルルが覗きこんだ。
はっとしてグレンが顔を上げる。

「 どしたの? 」

「 …… あ、ああ、悪い。 」

「 なんでもない 」

首を傾げるルルを尻目に、グレンが足を進めた。

近づくにつれて歌声は鮮明になる。

それが目指す教会の中から流れてくることに気付き、グレンは複雑な表情を浮かべた。

（サーシャか……？

これは“語り謡”か……）

この国で“唄”は娯楽というよりも、修道的・文化的な意味合いの方が強い。

“語り謡”というのは神話や伝承を旋律にのせて語り継ぐ手段だ。

文化を書物に残す習慣がなかった地域では、このようなかたちで民話や民俗などを残してきた。

だから、別に歌声の主がサーシャだと気付いてもグレンはそれ意外には思わなかった。

「邪魔しちゃ悪いかな」

「いいんじゃないスか？

こつちも非常事態だし」

グレンは背中のエレナを意識した。

「……そうだな」

頷いたグレンの前にルルが出て教会の扉を叩いた。

「すみません、
ちよつといいですか？」

ルルが扉を開く。

中からパタパタと足音がして、先日顔を合わせた少年が出てきた。

「あれ？、お兄さん。
どうかしたんですか」

「お、こんちは〜。
ちよつと急病人で、休ませてもらえない？」

少年が首を傾げてルルの後ろを見た。
そうしてグレンの姿を見、

「あ、グレンさん」

「よっ……」

「……病人さん……」

グレンが背負ったエレナを見て、少年は驚いた表情を見せて教会の
中を振り返った。

「神父さま！
病人さんです！」

「！」

少年の呼び掛けを聞き、グレンはクォーツ神父の在宅を知った。

少年が扉を大きく開く。

ステンドグラスの明かりを背負う祭壇が見えた。
その下、ベンチが整然と並ぶ礼拝堂。

一ヶ所に数人の子ども達が座っている。
その中央に立つ少女がこちらを見た。

「グレンさん？」

「……………昨日の……………」

「悪い、サーシャ。

ちよつとコイツを ……」

そうしてグレンの視線がサーシャの傍のベンチに座る人影に向けられる。

グレンは一礼した。

「すみません、

クオーツ神父 ……」

「へ？」

グレンの語尾に、ルルの疑問符が重なった。
グレンが怪訝な表情をルルに向ける。

「なんだ？」

変な声だして」

「いや……、だって」

珍しく動揺したような顔で、ルルはグレンと教会奥の神父を見比べた。

“彼”は琵琶を手に、それを奏でる手を浮かせたままこちらを見て微笑んでいる ……

「あれが“クォーツ神父”？」

「そつだ。どうした？」

「だって」

教会の中にいる面々の視線がグレン達に集まる。

特に2人の様子を見つめる“彼”の目に、一瞬だが言いようのない色が浮かぶ。

ルルが一言

「あの人、昨日ボクが見かけたヒトですよ」

「……は？」

意味がわからない、といった表情でグレンが視線を“彼”に向けた。

「だって ……お前が見かけた“神父”って銀髪だったんだろ？」

「そつっすよ。」

だから …」

ルルもまた訳がわからないと言いたげな顔で“彼”を見る。

「銀髪じゃないスか」

「何言つて …」

2人の様子を不思議そうに見つめる複数の目。
出迎えてくれた少年が心配そうに見上げてくる。

「あの、病人さんを……」

「あ、ああ。」

そう……だな……」

(……どういうことだ)

訳がわからない。

不審感に心臓の鳴りが速まってくる。

「……なあ坊主」

「はい？」

「お前ん所のクォーツ神父の髪は何色だ？」

「……え？」

突然何だ、という表情で少年がベンチの“彼”を振り返る。

“彼”は微笑んだまま、しかしどこか普段とはほんの少しだけ違う何かを秘めたような表情をしていた。

「神父さまは ……、
クォーツ神父さまの髪は」

…銀です、

という少年の答えと、
グレンの背中でエレナが身動きする音が重なった。

「……………う……………、
……………なんだ、ここ……………」

「！、ヴィヴィ、
大丈夫か」

エレナはだるそうにグレンの背中にもたれたまま、顔だけを上げて辺りを見回した。

「暑……………、
なに、どこだよ此処……………、
……………グレン……………？」

そして。

「……………
……………！……………」

屋外に比べてあまりに明かりに乏しい教会の中。
それゆえの見間違いか。

それとも朦朧とした頭と目が見せた幻か。

だが、まさかという疑念とともに振った頭で見ても、“そう”と認識した目は“その”姿を変えなかった。

(嘘だ)

そんなわけではない。

…なのに

「ヴィヴィ……!？」

動揺の音が聞こえた。

グレンの声だ。

エレナの褐色の頬に、一筋流れた涙。

瞠目した目はただ一点を見つめる。

「イリアス」

零れ落ちる。

グレンとルルはその零れ落ちたひとつの単語を聞き逃さなかった。

「……今……?」

「嘘だ」

エレナは呟く。

「そんなわけではない」

なのに、何故。

エレナの目に映る、ベンチに座るひとりの男。

どれほど見つめ、どれほど間違いを確認しようとしても、見れば見るほどエレナの認識を肯定するだけだった。

…

同様に、グレンもまた戸惑った。

(どうということだ)

グレンの目には、ベンチに座る“神父”は細身で黒髪の優しげな男性だ。

しかし、ルルや“彼”と近しい少年にはその姿が別のものに見える。いる。

そう解釈するしかない。

そしてエレナには“彼”が“イリアス”に見えているらしい。

数ヶ月前に命を落とした親しかった男に。

(どうなってる)

この瞬間まで、グレンは“クォーツ神父”に対して好意的だった。

しかしこの瞬間、

混乱と不審は“得体が知れない”という否定的感情を芽吹かせた。

…

突然の来客の、しかしただならぬ空気にサーシャは困惑した。

何だろう、どうしたのだろう、おろおろと客とクォーツを見比べる。

すると、横に座っていたクォーツが「ふ」と息を吐いた。

そうして静かな所作で立ち上がる。

「サーシャ」

「は、はい」

「病人の方のために部屋を用意して差し上げなさい。

君たちも奥に行きなさい」

後半は子ども達に向けての言葉だった。

グレンの向けてくる不審の目、エレナの激しい動揺の視線を平然と受け止めながら、手を上げてクォーツは重ねてサーシャに促した。

「さ、お早く」

「…はい、はい。」

すぐに「…」

戸惑いながらサーシャは子ども達を連れて礼拝堂から奥に入ってしまった。

…ボタン、と扉が閉まる音。

クオーツは持っていた琵琶をベンチに置いた。
そうしてグレン達の方に目を向ける。

「…どうぞ？」

こちらへ」

「……クオーツ神父……」

「どうぞ」

にっこりと微笑むその表情に、グレンの不審がさらに膨れる。

自身の顔を見て泣き出した少女が目の前にいるというのに、それに対して何の反応もない。

温厚な人柄だろうとは思っていたが、これは異常だ。

…もともと抱いていた好意的感情を、この瞬間の反感が上回った。

…その瞬間。

「！！？」

一瞬だった。

【Count:1】

太陽が砂の街を照らす。

ヴァナディースは絶壁の孤島のような地形をしたナスターシャ砂漠最大のオアシスだ。

中央に位置する巨大な湖から水路を引き、人々は水源を確保している。

もしくは、その湖と繋がっているであろう水脈に井戸を掘る。

とにもかくにも、ヴァナディースはこの湖によって支えられている街なのだ。

…その時刻、

その湖の中心でささやかな異変が起きた。

乾いた風に揺れ、太陽の光を反射して煌めく水面。

その一部が静かに泡立ち始めた。

それはあぶくのようなものから始まり、次第に飛沫、徐々に激しさを増して渦を巻き始めた。

そして突然、その中心が破裂して“何か”を吐き出した。

湖畔にいた人々が何事かと視線を向ける、その先で、水飛沫の中か

ら大小2つの“人影”が姿を現した。

その2人は、どのような手段を用いてか湖の上に立っているように見える。

実際には空中に浮いているのだが、巨大な湖の中心での様子を肉眼で正確に見てとれる人物はいない。

ひとりは岩のような巨躯の大男だった。

褐色の肌、毛深く、獣染みた容貌で、黄銅色の瞳もどこか野蛮な色を帯びる。

その傍らに立つ男は、童顔で中肉中背、ごく当たり前の容姿をしている。

大柄な方の男が、辺りを見回して轟くような声を発した。

「あああゝ…、暑いな、おい。

何処だ、此処あ」

連れの疑問に、同じように周囲を見渡していた男が落ち着いた声で答えた。

「あの建物には見覚えがある。

おそらく聖地ヴァナディースだろう」

「此処に出たのは俺とお前だけか」

「そのようだな。

だが、そう誤差が生じるとも思えない。

場所はともかく、時間的にはズレてもせいぜい2〜3ヶ月以内だろう。

さっさと集合場所に向かうぞ」

「おお、 ……?」

連れの言葉に頷きかけながら、男が何かに気が付いたようにひとつの方角を見つめた。

「どうした」

空中で歩みを進め始めていた男が巨人を振り返る。

彼は危険な笑みを浮かべていた。

「匂う ……、

匂うぜ、ヴリトラ」

「何が」

「すぐ近くだ。

… 《ダブル・コード》がそばにいる!」

野獣のような獰猛さを思わせる声を発し、男がその巨体を屈ませた。

ヴリトラと呼ばれた男が何かを言いかけたが、それを待たずに巨人は水面を蹴った。

男の巨躯が上空に舞う。

まるで打ち上げられた巨大な砲弾のように。

蒼空にその身を躍らせて、男は目指す建物に向けて、自ら凄まじい速度で墜落して行った。

…小さな十字架を掲げた、小さな教会へ。

【17】第三の拒絶（後書き）

こんにちは、五木萩です。

今回の話について。

イキナリ前触れもなく第3勢力の登場です。
ある意味、新章への入り。

彼らは、ちよくちよく出て来る【Episode:0】
【Episode:0】に
関係して
きます。

そもそも【Episode:0】も触りも何もなく挟んでいるので
意味不明な点多いかと思いますが、少し頭に止めておいて頂くと
らいで大丈夫です。
後々ちゃんと明かします。

では、よければ次回もお付き合いください。では。

【18】白き王のアリア

私は育む

小さな命 小さな花を

私は泣く

小さな命 小さな花に

花も咲かねば散りはしない

そうして私は命を閉ざす

白く白く清らかに

色も音も 匂いも白く

春を待つ種を閉じ込めて

私は愁う

ただただ愁う

散るために咲く花

それを育む悲しみを

【Episode:0】

「ただいま、クリスタル！
大きくなっただな！」

「イリアス！」

日差しが石造りの床に回廊の手摺りの影を模様のように染め付ける。砂と日差しを避けるためのマントを脱ぎながら、長身の男が駆け寄ってきた子どもを抱き止めた。

「いい子にしてたかい？」

「うん！」

笑った子どもの表情に満足そうに頷いて、男は子どもの後を歩いてきた女に視線を向けた。

「ただいま戻りました、
シスター・ユーリン」

「改まった挨拶はよそう。
お帰り、イリアス」

親しげに笑いかけ、ユーリンはイリアスの脱いだマントを受け取った。

「クリスタルの世話、任せっきりですまないな」

「何を今さら。」

預かるときに詫びはもらった。

それより何か土産話のひとつでも聞こうか。
部屋に水菓子を用意させているんだ。
行こう」

「あ、悪い。

少し待っててくれないか？

実は、連れがいるんだ」

ユーリンが怪訝そうにイリアスを見た。

「……また拾ったのか？」

イリアスが苦笑して首を振る。

「違う、違う。

南部の街の修道院の神父に、聖地に修行にあげたいという見習いの子を預かったんだよ。
今は下で手続きをしている」

「おや……、いいのか？

お前は一緒に行かなくて」

「修道院の神父の紹介状があるから大丈夫だよ。
昔聖地で修行を積まれた方だと聞いたから」

「そう」

3人は、連れ立って大広間に向かった。

子どもは始終上機嫌で、右手にイリアスの、左手にユーリンの手を

取りながら歩いていく。

「それで？」

「どういう子なの？」

ユーリンがイリアスに向かって首を傾げる。

「うん、年齢は12歳だ。

とても頭の良い子で、教典の第58章までは完璧に暗唱できる。

確認はしていないが、多分最終章まで解読したいは終わってそうだな」

イリアスのその言葉に、ユーリンが目を丸くした。

「それは …… すごいな。

ここで生まれ育った私でさえ、全章解読は11歳だったぞ？

その子はいつからその修道院に？」

「確か …… 10になるかならないかの頃だと聞いている。

すごいだろう？」

だからその神父殿も「この子は大変な人物になる」と言って、聖地に戻るなら・と私に託された。

修道院に入る前に身寄りをなくして苦勞をしたせいか、やけに老成したような感じの子だ。

けれど才能を鼻にかける様子もないし、いい子だと思うよ。

私が個人的な判断で預かった手前、修行やその他の面倒は私がみることになると思う。

しばらくは聖地に落ち着けるかな」

「イリアス、ずっといるの!?!」

幼い手で大きな手を握っていた子どもが、顔を輝かせてイリアスを見上げた。

イリアスが微笑む。

「ああ、これからは早くはすぐに会えるよ。

私も嬉しい」

「やったあ!」

子どもが両手を上げて万歳をした。

その無邪気な様子は、聖職者ばかりの神殿には少しばかりそぐわなかったが、それでもその子を見る周囲の目は暖かい。

大広間は沢山の聖職者や参拝者が行き来しており、賑やかだった。

そんな中、しばらくした頃にイリアスが大広間に入ってくる人々の中から少年を1人見出だした。

「ああ、こつちだ」

穏やかだがよく通る声で呼び掛けられ、少年がこちらを見た。

「…イリアスさん」

少年は静けさを帯びたような足取りで、イリアスらのもとに近づい

てきた。
イリアスが頷く。

「大丈夫だったか？」

「はい」

やけに大人びた笑顔が印象的な少年だった。

ユーリンは子どもの肩に手を置いたまま、まじまじと少年を見つめた。

その視線に気付いて、少年がふわりと笑んで会釈をする。

そしてその蒼い瞳が、ユーリンに寄り添う子どもに視線を移した。

「……こんにちは」

その声に、子どもがニッコリと笑った。

「こんにちは！」

無邪気な挨拶を返されて、少年はさっきまでとは違って少しくだけたような笑みをこぼす。

「初めまして。」

「きみが、クリスタル？」

「はい！」

「クリスタル＝アーム！」

「お兄ちゃん、だれ！？」

くす、と少年が笑った。
そっと手を差し伸べる。

その手の意図を理解しない子どもは、少年の手とユーリンの顔を見
比べる。

ユーリンが頷いた。

「握手。

手と手で挨拶をするの。

よろしく、って」

「てっ？」

子どもがたどたどしく手を伸ばして、少年の手に触れた。
それを優しく握って、少年は一層優しい声を発した。

「エッダ」

子どもが首を傾げる。

「えっただ？」

「そう。ぼくの名前は
エッダ＝フェイトファスト。
よろしく、クリスタル」

柔らかく笑んで、少年が子どもの赤い瞳を見つめた。

…

【Shock of BlackStar】

聖地ヴァナディース、
とある小さな教会。

礼拝堂、その入口と祭壇の下で見合っていた数人を、突如轟音と衝撃が遮った。

「!?!?」

グレンは背負っていたエレナをおろした。
傍らにいたルルが、爆風と飛び散る建物の破片から庇うようにエレナを退がらせる。

「なにつ……」

涙に濡れたエレナの頬に埃がかぶさる。

教会の天井を突き破り墜落してきた“何か”
舞いあがる埃で何が起きたのか判らない。

グレンはその土煙越しに礼拝堂の奥を見た。

“レインに見える男”もまた、突然のことに目を丸くしており、口元を覆いながら軽く咳こんだ。

「……これは」

「……っはっはあ!!!」

土煙の中から、轟くような野卑た笑声が聞こえた。

それを聞き“レイン”が眉をひそめる。

グレンはその表情を初めて見た。

ルルとエレナを退がらせながら、グレンは“レイン”と煙の両方を警戒する。

すると、煙の中心から何かが破裂したかのように突風が巻き起こった。

そうして瓦礫の中に姿を現したのは、巨岩のような大男だった。

毛深い褐色の肌に盛り上がった筋肉。

黄銅色の瞳がまずグレンを捉えた。

「お前かあ？」

「あ？」

後ろの2人を庇うように立ち、グレンは改めて突如現れた乱入者を窺った。

(何だ ……、こいつ)

男はグレンの知らない装いをしていた。

リーヴダリル人とは少し毛色が違つ気がする。

男もまたグレンをまじまじと見る。

「違つなあ……、
けど、お前も……」

そのとき、男が突き破つてきた教会の天井の穴から、ひらりと人影がもうひとつ降り立った。

「おい、ワイリー」

呆れたような咎めるような声を発しながら男の傍らに降りた人物も、同じように異郷の装いと風貌をしていた。

年齢は若く見えるが、口振りや所作がどこか老成したような雰囲気がある。

不思議な若者だった。

男が若者に顔を向けないまま、

「おいおいヴリトラ、
此処あどんな食い放題バイキング
だ？」

《ダブル・コード》に

《セカンド・マリオン》 ……

おまけに《サード・マリオン》の匂いまでしやがる

とどろくような声から発せられた聞き慣れぬ単語の数々に、グレン

はずかにも眉を寄せた。

“レイン”もまたどこか苦い表情をしていたが、グレンとは違った色が混じる。

ヴリトラと呼ばれた若者は連れの言葉に興味を示した様子もなく、

「寄り道している暇はないぞ」

「《狭間》越えで消耗してんだ、大目にもろよ」

…そのとき

「神父さま!？」

何があつたんですか、今の音は!？」

礼拝堂の奥の扉が開いて、慌てたような表情のサーシャが現れた。

サーシャは礼拝堂の中に立ち込める土埃と散乱する瓦礫に息を飲む。

そして視線がその中央に立つ見知らぬ2人の男たちに留まった。

「…そのひと達は…」

サーシャの視線が男たちと神父を行き来する。

ワイリーと連れに呼ばれた巨人が、サーシャを見た。

しかし彼はサーシャ自体にはまったく興味を示さずに、彼女の視線

の先に立つ男の方に釘付けになる。

「……お前かあ？」

ワイリーの視線を悠然と受け止めながら、神父は身動きもない。

その姿を見、ヴリトラと呼ばれた若者が

「おい待てワイリー、

あれは……」

と声を発したが、それにまったく耳を貸さないまま、ワイリーの姿が突如消失した。

「!？」

そして響いた、轟音。

ワイリーが消えた一瞬の後に、神父の姿も消失した。

その彼が立っていた位置から後方、礼拝堂の祭壇が爆発したように見えた。

「神父さま!？」

サーシャが悲鳴じみた声をあげた。

舞い上がる埃の中に見える、巨人の後ろ姿。

少し前屈みになった体勢、突き出した屈強な腕、その拳は壁にめり込み、

…飛び散った血痕が見えた。

再度サーシャの悲鳴があがる。

思わず駆け出そうとしたサーシャの肩を、押し留めた腕。

「待て」

「グレンさん」

数秒ともいえる間にあり得ない距離を動いてグレンがサーシャのもとにたどり着いた事は、

サーシャにしたなら疑問に思っべきだったのかもしれないが、今のサーシャにしたらそんな事はどうでもいい事だった。

「神父さま……、神父さまが」

「駄目だ、近寄るな……。」

あいつは何かやべえ」

そう言いながら、グレンはワイリーの姿とその腕がめり込む壁を見る。

あまりに突然の事に、グレンの理解もまた全く追い付かない。

あの男たちは何なのか。

そもそも神父は“レイン”だったのか。

泣き出しそうなサーシャを留めながら、グレンはワイリーとヴリト

ラの両方に意識を向ける。

その視線に気が付いたかのように、ワイリーが首だけで振り向いてグレンの姿を見た。

「なんだ、お前なかなか良い動きするなあ……、
《セカンド》にしては」

ワイリーがにやりと笑みを浮かべる。
大きな口が耳まで裂けそうなほどに。

「“旨そう”だなあ」

…瞬間、悪寒が走る。

咄嗟にグレンはサーシャを後方に退がらせた。
勢いをつけ過ぎてサーシャの足がややもつれる。

「グレンさん！！」

「逃げる！！」

「逃がしやしねえよお！！」

切迫したふたつの声に重なる嗜虐的な声。

ワイリーの上半身が螺旋のようにぐるりと廻った …、

そのとき

「…手出しはご遠慮願いたい」

場違いに静かで穏やかな声は、際立っていたがためによく通った。

瞬間、ワイリーの腕が、壁にめり込ませていた腕が大きく弾かれた。その腕を追いかけて巨体が躍るように吹っ飛ぶ。

「うおお!?!」

ワイリーはその巨体から想像出来ないような軽い身のこなしで受け身をとった。
体勢を整え、自身がいた位置を見る。

「てめえ……」

壁に空いた大穴、ひび。
撒き散らした瓦礫と埃、
そして血溜まり。

惨状の上にあつて“彼”は柳のように立っていた。

表情はあくまでも穏やかで、さながら慈悲の具現であるかのように優しい。

しかしその姿は凄惨を極めた。

右腕は確実に折れている。
すぐ傍に寄りなくても判るほどに歪んでいる。

純白の長衣はその様相を一変させ、赤黒い模様を帯のように点のよ

うにつけた。

上半身に至っては白い部分よりも赤い部分の方が多いだろう。

それは顔にも言えた。

白く綺麗な顔立ちの大部分が、血と煤に汚れている。

口元を汚す血は、額からの傷口からのものか、それとも体の内の損傷から溢れたものか。

“彼”の安否を案じていたサーシャですら言葉を失う無惨な姿だった。

「……神父、さ、ま……」

一同の視線を一身に集めながら“彼”がひとつ息を吐いた。ため息のようにも、笑みのようにも聞こえた。

「その2人をどうにかされては困るのですよ」

“彼”は正常な左腕で髪と服の乱れを軽く直した。だが、まったく整えられた気がしない。

グレンですらあまりの痛ましさに息を飲む。

「……お……い……」

そのとき少し離れた位置から小さな声が聞こえた。

「イリアスっ……」

教会の入口、ルルの後ろに庇われるようにして立っているエレナが、口元を押さえながら“彼”の姿に目を奪われていた。

…そう、疑問は何ひとつ解決していないのだ。

未だエレナの目には“彼”が“イリアス”に見えている

…

グレンが叫んだ。

「ルル！！

ヴィヴィを

…」

連れて逃げる、と言いかけたのだが、それは新たに響いた轟音に打ち消された。

見れば、再びワイリーが“彼”に向かって拳を振り下ろしていた。

だが、今回は先ほどとは違う意味での驚愕がある。

“彼”は依然しなやかに立っている。立ったまま、正常な左腕でワイリーの屈強な腕を受け止めているのだ。

ワイリーが軋むような声を洩らした。

「この野郎……」

「やれやれ、挨拶もなしにこれなのだから、蛮族と呼ばれて無理もあるまい」

平然とした“彼”の声音。

それに重なる低い耳鳴り。

誰が初めにそれに気が付いただろう。

折れて歪んだ“彼”の右腕が淡く光を帯び始め、持ち上げられる僅かな間に完全に元の形を取り戻したことに。

巨人の拳を受け止めていた左腕に添えるようにして持ち上げた右腕。

“彼”はその指を揃えて軽くワイリーの拳を叩いた。

すると突然、何かが鈍く砕けるような音と、ワイリーの口から獣の咆哮のような声があがった。

仰け反り、よろめくワイリーの巨体。

見れば岩盤のような筋肉に覆われた彼の腕は、先ほどの“彼”の右腕と同様もしくはそれ以上に歪み、形を崩している。

「て、めえ……

何をし……」

顔の汚れを拭き取ることもしないまま、“彼”は音もなくワイリーの正面に立った。

そうして、まるで扉をノックするような所作でワイリーの胸部を叩いた。

“彼”の所作とまったく比例しない勢いでワイリーが吹っ飛ばす。

“彼”の長衣の裾が羽根のように翻った。

「お引き取りください」

穏やかに告げた相手は、礼拝堂の壁に穴を開けながら吹き飛んだワイリーではなく、それらの様子を傍観していたヴリトラだった。

ヴリトラはちらとワイリーの姿を見、そして視線を“彼”に戻す。

ガラガラと音を立てて崩れる瓦礫の中から、苛立ちを露にしたワイリーが起き上がってきた。

「馬鹿にしゃがって、

“喰って”やるぞ!!」

「本物の馬鹿か、お前は」

冷たく言い放ったのは、ワイリーの味方であるヴリトラだった。

「よく視ろ、

あれはただの《ダブル・コード》じゃない。

地上と歴史上双方でただひとり、我らが《尊師》と互角の《エーテル》を持つ男だ。

お前の力じゃ逆立ちしたって勝てはせん。

いい加減これ以上は身勝手が過ぎる。

《尊師》のご不興を買う前にさっさと行くぞ」

「ここまでコケにされて黙ってられるか!!」

吠えるようなワイリーの声がとどろく。

“彼”が低くため息を吐いた。
そして血濡れた瞼の下で瑠璃の瞳をグレンに向ける。

「その娘を連れて離れなさい」

「なっ……、」

ちよっと待て、あんた、いやお前は一体 ……」

グレンの声に“彼”はただ静かな視線を返した。

「混乱は理解しますが、現在この場において我々の利害が一致します。

今はそちらを優先して頂きたい。

ここは崩落の危険がある」

未だ教会の天井のワイリーが開けた大穴からは、パラパラと木屑や石片が落ちてくる。

グレンの背後で呆然としていたサーシャが、はっとして後ろを振り返った。

最初の轟音のとき、サーシャは子ども達と一緒にいたが、どういう事態か分からなかったため、動かないように言い聞かせてサーシャだけが様子を見に此処に来た。

素直な子ども達ではあるが、ここまで騒ぎがあっただけでもおとなしく待ってられるだろうか。

何があったのかと気にして戻って来ないと言いきれるか。

もし此処に子ども達のひとりでも来たら ……」

サーシャは踵を返そうとして、しかし思い迷ってたたらを踏んだ。

この事態がまったく理解出来ない。

危険だけは認識出来るが、それ以外はまったく事情も何もわからない。

この場において何をするのが最善なのか、何をしてはいけないのか、サーシャにはわからない。

そしてそれはグレン達にしても同じだった。

グレンにしてみれば、この状況に対して戸惑い以外何もない。

目の前にいるのはどれほど憎んでも憎み足りない不倶戴天の宿敵。

だが今この状況においてグレンが警戒しなければならぬのは、明らかに“彼”と相対している見知らぬ男の方だ。

教会の入口では、ルルが事態の成り行きを見守っている。

どうやら突然の乱入者はルルとエレナに対しては無関心であるらしい。

だがだからと言って安全が保証されているわけではないし、逃げる事が余計な刺激を与えないとも限らない。

…そしてこの場で最も困惑し動揺しているのは、エレナである。

どれほど目を凝らして見ても、エレナには“彼”の姿が“イリアス”にしか見えない。
他人のそら似というレベルではない。

あの流すような視線も、服の裾を払った手つきも、身動きした後の肩の高さや首の角度も。
表情、仕草までもまったく同じ人間が存在するだろうか。

あれは“イリアス”だ。
けれどあり得ない。

イリアスは死んだ。
クリスに看取られ、その首は敵に奪われた。

生き延びている筈がない。
クリスが“イリアスの死”を見届けているのだ。
疑いの余地などありはしない。

…なのに、何故。

「……………どうなってんだ……………」

…
激昂したワイリーの巨体が躍り、“彼”に向かって再び拳を振り下ろす。

先ほど“彼”に潰されたのとは逆の腕で、だ。

それを見るヴリトラの目には冷ややかに呆れた色があった。

（腕の再生にも頭が回らないのか……………）。

あの馬鹿、我を忘れてやがる……)

その視線の先で、ワイリーが“彼”に振り下ろした拳が振り払われるのが見え、ヴリトラは深いため息を吐いた。

(駄目だ、あいつは)

そして、ヴリトラがふらりと片足を浮かせた。

次の瞬間、ヴリトラの姿は“彼”とワイリーの間にあった。

「……」

「どけ!!!、ヴリトラ!!!」

“彼”はただ目を睨り、ワイリーは怒声を飛ばす。

ヴリトラがその目を、その掌を向けた相手はワイリーだった。

ごく平凡な若者の容貌のヴリトラが、するりと巨人のようなワイリーの懐に入り、その掌を巨人の腹に当てた。

瞬間、ワイリーの腹部が吹き飛ばされた。

それを見たサーシャが悲鳴をあげる。

グレンもまた目を瞠った。

しかし、飛び散ったのは赤い血ではなかった。

煙のように舞い上がる、

……“漆黒”の砂。

「ヴリ、ト……、てめ……」

「お前の勝手に巻き込まれてはかなわん」

ワイリーの腹部の穴から広がる“侵食”

舞い上がる“黒い砂”は空中を漂い、傷口からもさらに流れ出てその濃さを強める。

「この男が本気になる前に退散するのが最善だ」

ヴリトラが視線を向けた先で、“彼”がふわりと崩れた祭壇の下に降りた。

そしてにこりと笑んで見せる。

「話がわかる若者で助かります」

その言葉に、ヴリトラは表情を変えぬまま“彼”を見た。

「……《尊師》以外の人間からの賛辞は受け取らない主義だが、あんたは別格だ。

受けておく」

そう言ったヴリトラの掌の先には、硬直して腹部から崩れ去ってゆくワイリーの姿があった。

それはまるで巨大な像だ。

それを何の色もない目を向け、“彼”は首を傾けた。

「まさか命までは」

「まさか。」

これは“弟子”の中でも聞き分けがないゆえ、俺が宥めすかすのは手に余る。

いったん小さくしまい込んで、後で《尊師》に叱って頂く」

「……」

そのとき“彼”の表情に微かに複雑な色がよぎった。

「《尊師》によろしくお伝えください ……、

と言いたいところですが、貴方がたの《尊師》は私にとって出来れば永劫お顔を見たくはない御仁。

それも含めてよろしくお伝えください」

「それについては《尊師》におかれても同様のお気持ちだろう。しかと承った。

…ああ、そうだ」

そう言ったヴリトラの掌に、崩れて舞い上がったワイリーの“砂”が吸い寄せられるように集まってゆく。

“彼”はそれを見ながら、何かに気が付いたように顔色を変えた。

ヴリトラが苦笑に似た表情を見せる。

「不意打ちと誤解しないでもらいたい。
これは不可抗力だ。」

度重なる《狭間越え》で、我らの体は少々“容量”が大きくなり過ぎた。

分解して収縮するエネルギーに“世界”の方が耐えられないんだ」
低く、高く、唸るような耳鳴りが周辺に響き渡る。

グレン達もまた、大気を震わす“何か”に気付いた。

「なん……」

足元から這いあがる悪寒。
それは予感でもあった。

絶望的な何かが起こる。

グレンの背後で、突然サーシャが胸を押さえてよろめいた。

「サーシャ!？」

「……息……くるし……っ……」

そしてグレンもまた唐突に息苦しさを感じた。

気が付けば、周囲に舞っていた土煙や散らばっていた瓦礫の破片や
らが、巻き上げられてヴリトラの方に吸い寄せられてゆく。

ヴリトラの掌に吸い寄せられてゆく。

瞬間的にグレンは悟った。

(真空になってきている)

ワイリーの“砂”や、土煙や瓦礫だけではない。

ヴリトラの掌には“何らかの力”が発生していて、それは周囲の空
気さえも吸い込んでいるのだ。

…そして恐らく、

その現象の結末は。

「くそお!!!」

グレンはゴーレム化し、大きな獅子鷲に姿を変えた。

そして窒息寸前のサーシャの体を無理矢理に背中の羽根の付け根に
引っ掛け、疾走して礼拝堂から飛び出した。

…グレンのその行動の間に、ヴリトラが“彼”に向けた言葉。

「棲み処を荒らしてしまうことはお詫びする。

イリアス!! マツクール」

…瞬間、

大気が堪えきれなくなったかのようにヴリトラの掌から裂けた。

それはさながら漆黒の稲妻のような亀裂。

息を飲む間に、礼拝堂は闇に墜ちた。

【戸惑う白、戸惑う赤】

…重い衝撃が起きた気がする。
大地を揺るがすような轟音と共に。

『……………嘘だろ……………』

教会から転がり出、サーシャと、そしてルルとエレナをその翼で庇って衝撃に耐えたグレンは驚の顔で背後を振り返って呆然とした。

グレンの勢いに押されて転倒したルルとエレナもまた、身を起こして目の前を見て言葉を失う。

束の間に失神していたサーシャが目を覚まし、そして目尻が裂けんばかりに目を見開いた。

「なに……………、これ……………」

そこには教会があった。
あった、筈だ。

だがもうそれは教会どころか建物ですらなかった。
そして、もはや土地ですらない。

「何なの……………これ……………」

教会があった場所、

そこにはぼつかりと巨大な穴が空いていた。

深さはわからない。
それほどまでに穴の中は暗く、奥底が窺えない。

周囲にかろうじて建物の名残があったが、もう教会そのものは消失していた。

サーシャが悲鳴をあげる。

「みんなっ……!!」

よろめきながら立ち上がるサーシャの腕をルルが引き止めた。

「待つて、危ない!!」

「放して!!」

みんなが……みんなが中にいたの!!」

サーシャは顔色を失いながら半ば絶叫している。

「みんながっ……!!」

「……あ……ーシャあ……」

そのとき、一同の耳に確かに届いた幼い子どもの声。

サーシャが弾かれたように辺りを見回した。

「……エイル!？」

エイルね!？、何処!？

何処にいるの!？」

「サーシャあ……」

声がして、サーシャが駆け出す。

義弟の声は、大穴の縁に残った瓦礫の中から聞こえていた。

「エイル!！」

「サーシャ!！」

どうしよう……どうしよう……」

瓦礫をかきわけて崩れた壁の影に座り込む弟の姿を見、サーシャは涙ながらに抱き締めた。

「よかつ……た……」

「サーシャ、どうしよう……、

エツダが……エツダが」

その言葉に、サーシャは初めてエイルが座り込んでいるすぐ傍で倒れ伏す青年の姿に気付いた。

「……エツダさん!！」

サーシャの口から悲鳴があがる。

エイルはこの青年に懐いていた。

異変のときも一緒にいたのだろう。

まったくの無傷のエイルとは対称的に、瓦礫の上につつ伏せるエツダはまさに瀕死に見えた。

純白の髪は乱れ、目蓋は閉ざされていた。眉間に微かに寄せられたしわが、彼の苦痛を訴える。

白い肌にも細かな傷がいくつもついていた。

これはおそらく降り注いだ建物の破片や割れたガラスによるものだろう。

細い背中には無数の瓦礫や塵がかぶさっている。

そして最も深刻なのは、その脚だった。

「ああ……っ……」

なんてこと……」

エツダの両足は消失していた。

長衣の裾ごと太股から千切られたかのようにだ。

淡い色の服が、傷口から昇ってくる血の染みで赤黒く染まってゆく。そして、広がってゆく血溜まり。

「エツダ……、エツダ、起きてよう……」

泣きながらエイルがその背をゆする。

サーシャはおろおろと辺りを見回した。

…すると、いつの間にか背後に立っていた青年と目が合った。

「グレンさんっ……、
ああ……助けて……」

涙を浮かべながら縋るように見上げてくるサーシャの瞳。

だがしかし、グレンはそれにすぐに応えることが出来なかった。

…エツダ。

間違いない。

今、グレンの目の前に倒れ伏す青年は確かにグレンの知る“エツダ”だ。

それは何を意味する？

「…サーシャ、そいつは」

「教会の修道士さんです。

ああ、お願いです、

助けてください。

このままじゃ死んでしまっ……」

…死ぬものか。

危うくグレンはそう叫んでしまっところだった。

その青年は《白い血の民》だ。

生半可な傷で命がなくなることはない。

消失した体はいくらでも再生する。

他者の命と引き換えに。

…だがサーシャやエイルは、そんな事などまったく知らない様子だった。

泣きじゃくりながらエツダの名を呼び、体を揺する。

エツダのために涙を浮かべながら助けを求め。

…困惑するグレン。

その目の前で、エツダの腕がぴくりと動いた。

「!!、エツダ!!」

白い腕が宙に浮く。

それがエイルの顔に向かうのを見て、グレンは反射的に身を固くした。

だが、その手は静かにエイルの頬を撫でただけだった。まるで慰めるかのように。

*

…エツダは、何故自分はこの子どもを守ったのか、自分自身でも理解出来なかった。

懐いてくる姿を見て情が移ったのだろうか。

おそらくそれが理由としては最も妥当なのだろうが、エツダにとってそれは信じ難いことだった。

最初の轟音の後にすぐにエツダは現場に向かおうとした。

だが部屋を出ようとしたときに頭の中に兄の声が響いたのだ。

「そこに留まれ」と。

エツダは《白い血の民》だ。

《白い血の民》はその異形の力を陽の光の下では発揮出来ない。

この時点ではただの平凡な青年でしかないエツダを、“彼”は危険に近寄らせまいとしたのだ。

そうしてエツダは指示通り部屋に留まり、そわそわと落ち着きを失うエイルを宥めていた。

そんな時間の後に起こった異変。

エツダはそれをいち早く察して、その場から逃れようとした。

ただ腑に落ちないのは、その瞬間この子どもの手を取ったことだ。

降り注ぐ破片がかからないように懐に抱え込み、そして背後に迫った漆黒の圧力から庇うように前に押し出した。

エツダの意識はそこで途切れた。

そうしてほんの少しの空白の中、エツダは自身の名を呼ぶ声を聞いた。

鼻にかかった不安定に揺らぐ幼い声。

エツダはそれを不快に思った。
もともと子どもの声は好きではない。
ましてや耳を刺すような泣き声など聞きたくもない。

うつ伏せのまま目を開くと、涙に頬を濡らした子どもが自分の身体に手を触れているのがわかった。

エツダにはそれも不快だった。

触れられたくない。

関わりたくない。

涙など流されたくはない …

不快だった。

だからそれを止めようとした。

力なく伸ばした腕。

自身の指を子どもの頬に触れさせて、涙の筋をせき止めようとした。

「 … エツダ」

ひそやかなほどに小さな声が聞こえた。
若い男の声。

自分の名前が呼ばれたのだと気付いて、エツダがうつ伏せた肩越しにその声の主を見た。

「 … 」

視野に見つけた顔。

エツダはその顔を知っている。

(……………《獅子鷲》……………)

霞む視界。

それでもグレンの顔に浮かぶ困惑は明らかだった。

身体中が痛む。

意識も虚ろになりつつあった。

グレンは敵だが、マリオンだ。

マリオンは殺さない。

それが《約束》だった。

だがグレンはエツダを殺すだろうか。

殺すかもしれない。

だがそんな思考も面倒になり、エツダは目蓋を閉ざした。

エイルとサーシャが声を張らした。

「エツダー!!」

「エツダさん!!」

その光景に、グレンは棒を飲んだように動けない。

…ガシャ、という足音がした。

「エツダ」

その静かな声に、グレンが鋭く振り返った。
瓦礫の上を危なげなく歩み寄ってくる細身の男を。

「……………レイ……………」

「神父さま……！」

グレンの声に重なる、サーシャの叫び声。

「神父さま、ああ、^ご無事で……………」

「君とエイルも無事のようですね」

そう言いながら“彼”はエツダの傍らに膝をついた。
血に汚れた指でエツダの頬を撫でる。

「無茶をしましたね……………」

そう言って“彼”は上着を脱ぐとエツダの脚の傷口に巻き付けた。

サーシャが継るように

「神父さま、みんなは……………、あの子たちは……………」

「……………」

“彼”は答えない。

わずかに伏せた目と、何の色もない……………色を隠したような表情が、
言葉ではなくサーシャの問いかけに答えていた。

サーシャが目を見開く。

慄える瞳で“彼”を見つめた。

そして、顔を覆った。

「どうして……こんな事に……」

“彼”は答えない。

そしてエツダを抱えて立ち上がった。

「医者に連れて行きます」

「！、私たちも ……」

続いて立ち上がるうとするサーシャに“彼”が

「いえ、きみ達は東町のロウ牧師の教会に行っていないさい。

重大な事故が起きた旨をお伝えして、保護を願い出ておいで。

そうすれば後の役人の方々への対応は牧師がして下さいでしょう」

「ならあんたも行った方がいいんじゃないか」

冷静な声がした。

あるいは、冷静を努めようとした声か。

“彼”はその声の主を見た。

その声の主は感情を押し殺した表情で“彼”を見る。

「……グレンさん」

「あなたが一番事情に明るいだろ。
あんたがついて行った方がいい。」

……そいつは俺が医者に連れていく」

絡み合う視線。

“彼”はただ静かに、

グレンは感情を押し殺し、胸中の激情を堪えて。

しばし、しかし数秒。

先に口を開いたのは“彼”の方だった。

「……ではお願い致します。」

どうかエツダをよろしく」

そうしてためらいもなく、“彼”は腕に抱いたエツダをグレンに託した。

グレンは頷き、気を失っているエツダをその腕に受け取る。

……医者になど見せる気はない。

それは“彼”もグレンも同様だ。

エツダは人間ではなく、常人では死に至る傷でも致命傷にはならない。

(…… 人質のつもりか)

“彼”は内心で呟いた。

グレンにしたら歯痒いことこの上ない状況だろう。

何から何まで、グレンは問い詰めたいはずだ。

だがここには何も知らぬサーシャ達がいる。

サーシャが“彼”を無邪気に敬愛していることは付き合いの浅いグレンの目から見ても明らかだ。

そんな彼女の前で、宿縁と憎しみを剥き出しにして“彼”に接することがグレンには出来ない。

グレンがありのまま“彼”に接すれば、この素直で無邪気な娘が困惑するとわかりきっている。

あるいは真実のすべてを暴露するか。
だがそれはサーシャを傷つける。

グレンの言葉を信じたとすれば“彼”の正体に。
信じないとすれば、グレンに対する困惑に。

それをわかっていて、真実を話すことなど出来ない。
グレンはそういう男だ。

“彼”はそれを知っている。

だからグレンは、エッダを手の内に置くことで、再び“彼”と向か

い合う機会を確保した。

死にはしないが、エツダはしばらく動けまい。

仮にも“義弟”として傍らに置いておけるエツダを、“彼”が敵であるグレンの手に渡したまま放っておく筈がない。

……グレンのそういった打算を“彼”は見抜いた。見抜いていながら、エツダをグレンの手に託す。

「……さあ、行きましょう。2人とも」

“彼”がサーシャとエイルの背中を押した。

エイルは泣き出しそんな顔でエツダを見つめている。サーシャは振り返りながら

「グレンさん！

エツダさんを、どうか、どうかよろしくお願いしますっ……」

と何度も頭を下げた。

少しの後ろめたさを感じながら、グレンは頷く。

そして“彼”が

「ではこちらです。

途中までご一緒します」

とグレんに道を示した。

確かに医者に見せると言った以上、街に向かわなくては不自然だろう。

頷き、グレンは“彼”らの後に続く。

辺りはとても静かだった。

*

「……大変なことになってるなあ」

小さく呟き、ルルはひょっこりと瓦礫の影からグレン達の様子を窺っていた。

その腕の中で、口を押さえつけられて抱き抱えられているエレナがじたばたともがく。

「……つぶはあっ！
放せっ」

「あ、ごめんごめん」

「殺す気がよっ」

そう言って、エレナはルルから離れた。

「で、お前、誰だよ」

「あ、今さらだけど初めまして。
ルル＝ファルセットです。」

ファントム・コードのサポートメンバーね。
よろしく」

「よろし“こ”？」

「しかし、えらい事になったなあ……………」

ルルは苦い表情で、つい数分前まで教会があつた場所を見た。
今ではまるで地獄にでも繋がつていそうな闇を孕む大穴が空いている。

「……………可哀想に……………」

「……………」

エレナはふいとその大穴から目を逸らした。

そして街に向かって歩いてゆく一行の後ろ姿を見つめた。

「……………イリアス……………」

零れ落ちたエレナの眩きを耳に留め、ルルが頭を掻いた。

「ほんと、どうなってるんだろっねえ……………」

「イリアスじゃない……………」

「ん？」

エレナはうつむいた。

両腕で自身の体を抱く。

「イリアスは死んだんだから……。
あれはイリアスじゃない……」

なのに。

「でもあの神父のことを、あの変な格好の若い方も“イリアス＝マツクール”って呼んだよね？……」

と、ルルが言う。

そう、確かに聞こえた。

あの切羽詰まった状況でも、いや切羽詰まった状況だったからこそ、耳慣れた名前は確かに聞き取れた。

「でも……どうやらあの神父は“レイン”らしい。

グレさんにはそう見えてたらしいし……、
いや、そもそも最初はそう見えなくて確認に来たんだっけ……、

まあそれはいいや。

でもとにかく、あれが本物の“エツダ”なら、“レイン”の方も本物……」

「エツダは本物だよ。

オレはあいつと2回顔を合わせたことがある」

「あ、そうなの？」

ボクは1回もないから何とも言えなかつただけど」

「……間違いない。
簡単に忘れられる面じゃねえし」

エレナが背中を丸めて膝を抱いた。

「……どうすんの、
これから」

「ん〜、とりあえずコッソリ後についてって、グレさんと合流する
機会を窺お。」

この騒ぎを聞きつけた街の人たちが集まってくるかもしれないし、
離れた方がいいでしょ」

「……そう」

「歩けそう?」

エレナは頷いた。

「歩ける」

*

【グレんとエッダ】

…重い目蓋をよつやく上げると、ありきたりだが見覚えのない

天井が目に入った。

身体も鉛のように重い。

まるで埋め固められているかのように。

そして脚に至っては感覚そのものがなかった。

エツダは視線を動かした。

そしてそこにひとつの顔を見つける。

「……ずいぶん理解に苦しむ状況ですね……」

静かな声でそう零し、エツダは枕元に懨然と座るグレンから視線を外した。

「どういっつもりか、とお訊ねした方がよいのでしょうか」

「……余計な真似をしたら殺す。
大人しくしてろ」

「要らぬ脅しですね。」

この脚では私は動けない」

「ゴーレム化すれば別だろう。」

もっとも、まだまっ昼間だからめえの領分じゃねえがな」

エツダは小さく息を吐く。

「……此処は？」

「空き家だ。」

常にそういうのは下調べしてあるからな」

「……抜け目のないことで……」

そうして、エツダは同じ部屋にいるのがグレンだけではないことに気が付いた。

見覚えのある褐色の肌をした少女と、見知らぬ少年。

2人とも壁に背中を張りつけるようにして座り、特に少女の方はエツダを食い入るように見つめてくる。

ただ前回とは違って、その視線には怒りや憎しみに近い色がやや潜められ、代わりに困惑のようなものが見えた。

そしてそれはグレンにも言えるようだった。

「……なんで、あの子どもを助けた」

グレンの絞り出すような質問に、エツダが視線だけを返した。

「そんなになってまで。」

……あの子どもは何かでめえらにとって特別なのか」

「……それは私もお訊きしたい」

ささやかな眩き。

「意味などありません」

「……つぎけんな！」

グレンが声を荒げた。

エツダはそれに何も表情も変えずにただ視線を返す。

「てめえはそんな奴じゃねえ筈だ！」

人間なんか、食べ物かそれ以下くらいにしか思ってねえんだろ！？

セヴァルスタでは何人を犠牲にした！？

その中には女子どもがどのくらいいたか、そのくらいわかってんだろ……！

今までどれくらい罪もない人間の命を犠牲にして生きてきた！？

「グレさん」

ルルが口元に指を当てて静かに、と示した。

この空き家は集落から外れてはいるが、まったくの離れではない。大きな声を出せば近隣の民家に届く。

街中で“神父”とサーシャ達と別れた後、ルルが調べておいた此処に足を運んできた。

エツダの傷をグレンが着ていた黒に近い色の長衣で包み込んで抱え、周囲の人間にはすぐにそうとは判らなくした。

街の住人には、熱中症か何かで体調を崩した人間を運んでいるかの

ように見えたらう。

…グレンはルルに宥められて、浮かしかけていた腰を下ろした。
それを見て、エツダは静かに口を開く。

「……貴男方が私の人間に対する見解をどう解釈しようかと、訂正するつもりはありませんよ。」

私自身、正解を知らない」

「……人間を滅ぼすつもりなんじゃねえのかよ」

「さあ……」

エツダは空中を見つめた。
その空虚な瞳。

「私は兄様のお手伝いをするだけですから……」

そう言う間に、エツダの目蓋が堪えかねたように落ちてゆく。

今のエツダには何の力もない。

グレンはこの状態のエツダに手を出せる男ではない。

…それがよくわかった。

だから躊躇いなくエツダは眠りに落ちた。

後のことは“兄”が何とかしてくれるだろう

…

*

3人は一様に、エツダをどう扱ったらよいものか迷っているようだった。

敵意のほんの少しを削がただけで3人の目に映るエツダは、ごく当たり前の青年だった。

血の気のない白い肌は相変わらずだが、今までほど不気味には見えない。

ただ体調が悪いだけのように見える。

「……………どうすんの？」

グレさん

こちらが訊きたい、とグレンは思った。

アジトにいるマリーに連絡を取ろうかとも思うが、

……………もし……………

もし、今すぐエツダを殺せ、という返事が返ってきたら？

夜になればエツダは《白い血の民》としての能力を取り戻す。

人間を襲い、捕食すれば足の喪失など問題ではない。

すぐに再生する。

だが、今のエツダは傷つき動けない。

…何の罪もない子どもを救うために負った傷だ。

理由は不明だ。

だがエツダは子どもを助けた。
その事実が変わらない。

その一事で今までの遺恨がすべて帳消しになるわけではないけれど

…

「……こいつを盾にレインと話をする……」

「話って？」

「いろいろあるだろ、

さっきのワケのわからねえ連中のこととか、

なんで今まで姿かたちが変わって見えてたのか、とか ……」

「それはファントムへの報告を後回しにまでしてする話なのかな」

ルルは悪気の欠片もない表情でグレンに訊ねる。

……痛いところを突いてくる。

答えに窮するグレンを見ながら、ルルはちょこんと座り直した。

「……仕方ないスね、

この状況でエツダに手を出せるグレさんじゃないツスもん」

「……るせえよ……」

「…レインと言えば」

ルルがエツダの寝顔を窺いながら、

「さつきちよつち気になったことがあるんスよ」

「何だよ」

「《白い血の民》って、昼の間は普通の人間なんスよね？」

でもレイン、普通の人間じゃなくなかったツスか？

メタメタに折れてた腕とか勝手に治ってたし」

「……そういえば……」

「顔色もいいし。」

《白い血の民》って大体このエツダみたいな屍体っぽい顔色なのに。

なんか《白い血の民》の総大将って割には《白い血の民》っぽくない
いつつか……」

「レインは人間だよ！」

「レインは人間だよ！」

…

場違いに幼い声（しかも重複）がして、グレンとルルが顔を見合
わせた。

「……？」

「……？」

2人は声のした方に目を向けた。
その先で

「げ」

と悪戯を見つけられた子供のような顔をしたのはエレナだった。

「……………今のお前の声か？」

グレンの問いに、エレナが

「んなワケあるかい」

と言って、自身の服の裾を探り出した。

「イキナリ出て来るなよ！
つたく……………」

すると、エレナの服がもぞもぞと動き出した。
中で小さな生き物が動いているかのように。

そしてそれはその通りだった。

「ばあ！…！」
「ばあ！…！」

エレナの衿の中から突然現れて左右の肩に乗って声を上げたのは、
2匹の小さなネズミだった。

「！？」

グレンが驚いて身を引く。
ルルもキョトンとそれを見つめた。

「な、なんだ、それ」

「ん、話すとき少し長くなるっつか……」

「ラピだよー!」

「ラズだよー!」

「同時に違うことを喋るなっ!」

左右の肩に怒鳴りつけて、エレナは頭を掻いた。

「その子たち、ゴーレムか何か？」

ルルが首を傾げながら片方のネズミの鼻先に指を近づけてみる。
ネズミはヒクヒクと鼻をならした。

「……似たような感じ」

「可愛いね」

ポカンとしていたグレンが、はっと我に返った。

「つか、今そいつら聞き捨てならねえ事を言わなかったか!？」

「……そついでば」

今さっき

「レインが……人間……!？」

エレナの左右の肩で、2匹のネズミがこっくりと首を動かした。

「レインはいつも人間だよ」

「人間じゃなきゃレインになれないんだよ」

「ね〜」と言ってネズミがエレナの顔を挟んで頷き合う。

「……レインに……」

“なれない”？」

3人は顔を見合わせた。

【残り香と足音】

…とある小さな農村の昼下がり。

夏らしくなってきた時分、強い日差しに畑仕事を中断しての昼食の頃合だった。

ある2人連れの男女が村を訪れた。

共に軽装、旅人には見えなかったが村の住人でないなら旅人でしかない。

奇妙な2人組であった。

女の方は若く美しい。

しかし表情は凜とした風情を通り越して、どこか冷たい。

長い青磁色の髪が揺れる。

瞳は牡丹のような紅だ。

その女を従えるようにして先を歩く男は、さらに奇妙な印象を見る者に与える。

年齢は50代前半か。

整えられた頭髪と服装、歩き方にさえ品格が感じられる。

そして何より印象的なのは、その黄金の瞳。

それだけで光を放つように輝く黄金の瞳だ。

にも関わらず、その男は表情に乏しく瞳だけが爛としていて、何か
がそぐわない感じ。

∴ 2人は農民たちの視線をまったく気にしない様子で道歩く。

村を真っ直ぐ貫いた公道を颯爽と連れ立って歩く。

きつとこのまま立ち寄らないまま道を抜けて行くのだろう。

たまにそういう旅人もいるので、住人たちもそれ以上不審には思わ
なかった。

しかし、村を抜ける直前にとある家の前で、男がふと足を止めた。
後ろを歩いていた女が

「如何されましたか」

と訊ねた。

男はその家の納屋の脇に立て掛けられた“それ”を見つめている。

「……………」

そして男は足の向きを変えてその家の扉に向かった。

男の意を汲んでか、女がその前に出て扉を叩いた。

数秒の後、中年の女が中から出て来て顔を出す。

「はい？」

「失礼、あちらの槍を見せて頂きたいのだけれど宜しいか」

女は納屋の方を示してそう言った。

家の住人は突然の来訪者に戸惑いながらも頷いた。

「ええ ……、構いませんけども……………」

あなた方は……………？」

「旅の者です」

女と住人がそんなやりとりをしている間に、男がツカツカと納屋に歩み寄り、立て掛けてあった白銀の槍を手に取った。

「……………業物だな」

住人の女がその背に近づいて、

「忘れ物なんですよ」

と言った。

「忘れ物？」

「ええ、少し前に旅人を家に泊めましてね。
忘れて行っちゃったんですよ、荷物とそれと」

女が後ろからついてきて、その話を聞いて首を傾げて見せた。

「荷物も、槍も？」

身ひとつで出立したと？」

「そう …… いうことになりませんかね ……、
あたしもちよつと腑に落ちないところがあるんだけど ……」。

泊めたはずの旅人の人相も思い出せなくて。
なんとも怪談染みた話で、自分でも気味が悪くて。

でも荷物も槍も、ある物はいつまでもある物だから、とりあえず取
っておいて、持ち主が取りにくるのを待ってるんですよ」

「 …… ふむ」

そう言つて、男はその手に取った槍を眺める。
そして、刃に刻まれた文字を見つけた。

「 …… 聖句 …… 」

男が連れの女の顔を見た。

何かを言われる前に、女は頷いて腰の後ろに括りつけてあった袋から何やら取り出した。

そして住人の女に向かって差し出す。

「この槍、我々が買い取りましょう」

そう言つて女が差し出したのは数十枚の金貨だった。

住人の女は腰を抜かさんばかりに驚いた。

貧しい農村に生まれ育つた者ならば、金貨など生涯に2、3回は見れても5回はない。

ましてこの数は。

「あ、あの……」

「不足か？」

「い、いいえ、とんでもない……、」

けどもそれはあたしの所有物じゃないし……勝手に……」

「持ち主が取りに来たなら、その中から見合つた代金を渡しなさい」

そして女は辺りを見回し、男に声をかけた。

「荷物としてはいささか大きい代物……、」

村の住人から馬を買い取つてまいります、
しばしお待ち下さいませ」

「うむ……」

男は頷き、なおもその槍から目を離さない。

槍を、刃を眺めつつ、低い声で呟いた。

「……懐かしい気配だ」

白銀の刃が真昼の太陽の光を弾く。

柄に垂れた細鎖が涼やかな音を奏でて揺れた
…

【Episode:0】

「…神とは“何”だと思いますか、お師匠さま」

「え？」

男は書物から目を上げ、隣に立つ少年の横顔を見た。

「ただの雑談です」

少年は問いかけておきながら、興味のなさそうな風で手にした本のページをめくる。

神殿内に設置された図書館は規模が大きく人も多かったが、
2人が立つ区域は少々こ難しい専門書ばかりのコーナーだったので、
他に人影はなかった。

男は少年の問いに対し、つと視線を仰がせた。

「……………“思想”……………かな」

「思想」

男の答えを復唱して、少年が男を見上げた。

「お師匠さまは神の存在を信じてはおられないのですか？」

「うーん、どちらとも言えないな。」

『神とは“何”か』という問いに関して、私は“思想”と答える。

つまり私にとって“神”とは“思想”なわけだから、“思想”は“存在”するものなわけで、

だから私にとって“神”は“存在”する」

「……………たまにお師匠さまの持論は僕の理解を超えます……………」

「お前が訊いたんだろ？」

「……………はい」

そう言つて、少年は手にしていた本を棚に戻した。そして次の本を探して背表紙を順に撫でる。

男が首を傾げる。

「その問いは何から生じた疑問なのかな？」

「……午前の大司教さまの演説の中に、少し気になるくだりがあったもので」

「ああ、確かに変な顔をしていたね、お前。気に入らない箇所でもあったかい？」

「はい」

まったく物怖じしない態度で、少年は片手に本を積んでゆく。

「“神”が祈りや供物を要求しますか？」

絶対の信仰と崇拜でなければ救済してくださらないのでしょうか？

……無償の愛と慈悲を掲げておきながら、それらは矛盾しませんか？

第一、修行を積んだ者でなくば“神の声”を聞けぬというのは不公平ではないですか？

貧しい農民に修行の暇があるはずないでしょう。

聖職者だらけでは世の中は立ち行きません。

なのに……」

「まあ言いたいことは理解するよ」

男は苦笑に似た表情を浮かべて少年を見た。

「万人に平等に奇跡を施してこそ“神”だ、というのがお前の持論

なわけだね」

「はい。」

お師匠さまはどう思われますか」

「うん、そうだね……。」

私の“神”は別に奇跡を起こしたりはしないからなあ……」

男は胸に下げた十字架を指で遊ばせた。

「お前の言う通り、祈りや供物と引き換えに“神”が奇跡を施してくれるというのなら、それは“奇跡”ではなく“見返り”だな。

国に税を納めるのと似たようなものだ。

“信じる者は救われる”というのは、実はとても無慈悲な言葉だと思っよ。

信じなければ救われないという事だから、お前の言う通り“不公平”だ。

だが“不公平”という言葉に関してだって疑問視すべき点はあるだろう？

“平等”とは何か？

赤ん坊と罪人を等しく救済するのは“平等”かい？」

「……それは」

「万人に平等と言っても、そんなものはそもそもあり得ないんだよ。

この世に平等があり得るとしたなら、それは誰ひとり救済を必要としない世界……、
完全なる“無”の世界だ」

「……完全なる“無”の世界……」

呟いて、少年はどこか熱を帯びたような瞳で男の顔を見上げた。

「ならばお師匠さまは、いつも“何”に対して祈りを捧げていらっしやるのですか？」

「ん？、…そうだな……。」

祈りというよりも……」

男は腕を組み、目の前の棚を視線で撫で上げた。

「考え事、かな」

「か、考え事？」

少年が少し脱力し、危うく手にしていた本を落としかけた。
男が笑う。

「誰のために自分に何が出来るのか、考えてるよ」

…

*

「お師匠さまは誰かを憎んだことがありますか」

「ん？、あるよ」

「……どのくらい？」

「“どのくらい”？」

「……その存在を否定したくなるくらい、……かな」

「お師匠さまでも、そんな事を思うのですか」

「そりゃそうだろう。」

人間なんだから。

嫌いなものがなかったら、好きなものもない様なものだろう？」

「…そういうものですか」

「だと私は思うよ」

…

*

「お師匠さまは、なぜ聖職者になろうと思いなさったのですか」

「単にここで生まれ育ったからこうなったというだけだよ」

「……この道を選ばない、という選択はなかったのですか？」

「勿論あつたさ。
誰かに強制されたわけじゃない。
還俗は自由だった。」

けれど自分の意志でこの道を選んだんだよ」

「何故ですか？」

お師匠さまの“神”はこの信仰の中でなくとも奉仕出来るでしょう」

「ん？、うん……」

「……」

「そつだな……、」

……守るべきものがあつたから、……かな」

「……守るべきもの……」

「なんて、少し感傷的すぎる言い回しだったかな」

…

*

「お師匠さま、もし……」

「？」

「もし僕が道に迷ったら、お師匠さまを頼ってもいいですか？」

「もちろん。」

その為の“お師匠さま”だからね」

「……ありがとうございます……」

「うん。」

……たとえお前がどんな道を選んだとしても、私はお前の味方でいるよ。

導ける道なら導こう。

知らない道なら一緒に道を探そう。

だから1人で生きていこうなんて思わなくていいんだよ、

……エッダ」

…

（ ……ごめんなさい、

お師匠さま …… ）

…謝らなくていい……

（ 僕はどうしても許せなかった…… ）

大丈夫だ、

お前は何も悪くない。

(たとえ何に背を向けることになっても)

ああ、

わかってる。

(僕はどうしても取り戻したいです)

私も同じだよ、エツダ。

(お師匠さま)

大丈夫だ。

…

私も同じ道を歩こう。

…

【白き王の Aria】

「 …… レインに……、

“ なれない ” ？

どういうことだ？

ネズミ共

エレナの両肩に乗った2匹の鼠にグレンが問う。

鼠たちが「あのね」と口を揃えたとき

『いけませんよ、ラピスラズリ。』

他人の秘密を勝手に他人に教えては』

その涼しげな声は、突然どこからか響いてきた。

グレン達が弾かれたように顔を上げる。

「レインっ……!?!」

室内を見回す。

すると、部屋の一部の風景が潤んで歪んだ。

数瞬の後、景色を剥がすようにして背の高い細身の男が姿を現した。

「お待たせいたしました」

「レ……」

「レイン!?!」「レイン!?!」

グレンの声を遮って、二重の無邪気な声が上がった。

2匹の鼠はエレナの肩から飛び下りて、まっすぐレインのもとに向かう。

「ああ、お久し振り……」

レインの声が途切れる。

2匹の鼠がレインに飛び付く瞬間に、幼い子どもの姿に変わったからだ。

不意の出来事に、無防備な体勢のまま抱きつかれたレインは転倒して壁に後頭部を強打する。

「!」

「久しぶり〜!」

「久しぶりだね〜!」

「…ええ、本当にね……。」

「……………」

レインは床に座りながら小さな子ども達の頭をそれぞれ片手で撫でた。

その様子を見、ポカンとして言葉もなかったグレンは、しかしすぐに我に返って床に横たえていたエツダの傍らに移動した。

それを見て、レインがその笑みに静けさを帯びた。

「性に合わないことをなさらなくても結構ですよ。

私はエツダを人質に取られたとは思っていません。

どうせ貴男に今のエツダを害することなど出来はしない」

そう言って立ち上がり、レインは服についた埃を払った。

その両脇に立ち、双子らしき子ども達がレインの袖をそれぞれ掴む。

「お母上から伝言だよ〜」

「レインと未っ子に伝言なの〜」

「あのね〜、」

《黒い血の民》が《狭間》を通ったよ、って」

「追いつかれるかもしれないよ、って」

それを聞いてレインが苦笑した。

「もう追いつかれました。

つい先ほどの話ですよ。

雑兵でしたかね」

にこやかに双子に接するレイン。

その親しげな様子に、グレン達はますます呆気にとられる。

「なん……」

そしてグレンはレイン達とエレナの顔を見比べる。

あの双子は何者だ、と問いたかったのだが ……

「……レイン……」

エレナがつぶやく。

その声に、グレンやルルが顔を向けた。

「……お前、今度は……」

「……ああ」

動揺はあったが、イリアスの姿に見えた時ほどではない。

ここにレインが来るであろう事はわかっていたから、心構えも出来ていた。

エレナはグレンの方に目を向けた。

「あいつが……、さっきまで教会にいた奴か」

「ああ」

「怪我をしていた、箒の」

「……ああ」

“箒の”と付け足したのは、今さっき姿を現し目の前にいるレインがまったくの無傷だからだ。

服の汚れや破れすらなくなっている。

そのレインが、エレナの視線に気付いたように顔をそちらに向けた。

「色々と驚かせてしまったようだね」

静かな声。

耳にして気付いたのは、レインの声がもともとイリアスのそれと似ているという事だった。

エレナはレインを憎んでいた。

その憎しみは、レインがイリアス達の死に関わっていた事に起因する。

だが今、それが少し揺らいでいた。

「……………」

グレンもエレナも、最初の一言を迷っていた。

だがようやく、グレンが口を開く。

「……………サーシャ達は」

レインがにこりと笑う。

「然るべき場所に預けてまいりました。

ご心配には及びませんよ。

この先も何ひとつ。

あの子たちはルビーの耐性を持つ以外はごく普通の子ども達です
から」

「ルビーの……………?……………」

「ええ。

……………今日、犠牲になった子ども達もそうでした。

こんな所で失われてしまうとは、残念でならない」

その呟きは本心からの言葉に聞こえた。

グレンが眉を寄せる。

「……どういう意味だ？
てめえの目的のために、あの孤児院のガキ達を利用しようとしてた
って事か？」

「……そうですね。
そう言っていていいでしょう」

レインの口調はあくまでも軽い。
軽薄ではない。

ただ、まるで何でもない世間話をしているかのような口調だった。
それがグレンの神経を苛立たせる。

「ここで……、この聖地で何を企んでた」

「あの教会はただの棲み処ですよ。
あそこでルビー創作の何かをしたことはありません。

第一、子どもが簡単に出入りが出来るような所に危険物は置いてお
けませんし」

「なんで此処なんだ、
聖職者の……天敵だらけのこんな土地にお前らがいる訳ないっつう
俺たちの推測の裏をかいたつもりか」

「いいえ？」

ただ単に過ぎしやすいからですよ。
此処での生活が一番しっくりしますからね。

…砂漠の夜は星が美しいんです。

そう思うでしょう?」

レインの笑みはどこまでも晴れやかで無邪気だ。

…グレンはレインを憎悪している。

だが今、その感情をどうすれば良いのかわからない。

……エツダがいるからだ。

罪のない子どもを身を挺して守ったエツダの存在がグレンの憎しみに迷いを生じさせる。

ただ単にあの教会にレインとエツダがいただけなら、少しは違ったと思う。

子ども達をどうするつもりなのか、どんな害を加えるつもりなのか、とグレンは追及しただろう。

だが、違う。

レインとエツダは子ども達に危害を加えるつもりがない。

あの教会で、レインはグレンにサーシャの身の安全の確保を指示した。

……世界の破滅を企む者たちが、子ども達を守った。

「何が…狙いなんだよ。

もう訳がわかんねえ……」

弱々しいグレンの呟きに、レインが、ふ、と息をついた。

「そうですね……。」

貴男になら少しお話してもいいですよ」

そう言つて、レインはグレンの足元に横たわるエツダの姿を見た。

「その子を傷つけずにいてくれた貴男になら、ね……」

エツダは目を閉ざしたまま眠っている。

顔色は普段どおり蠟のように白い。

黒い布に巻かれた腰から下は、あるべき凹凸を失っている。

だが、異常はそれだけだ。

自らの手からグレンの手に委ねた、その時から変わったことは何もない。

「感謝しています。

本当に。

だからこそ、貴男の誠意には誠意でお応えしなければならぬでしょうね」

レインは自身に寄り添つように立つ双子に離れるよう肩を叩いた。

「私はね」

レインが言う。

「貴男方が思っているほど大それた事は考えていないのですよ。」

世界は私ひとりが何かを企てて滅びるほど脆いものではない。
どんな苦境に立たされたとしても、人は必ず立ち直るんです。

信仰がまさしくその力を体現しています。

人は神を信じることによって自分自身の心を救っている。

人は自分で自分を救える生き物なのですよ。

そんな生き物の世界をたった一人で滅ぼせると思うほど、私は思いあがってはいない」

レインの語りはどこか音楽的な響きさえ伴う。

「それに私は世界を滅ぼしたいと思うほど、世界に対して憎しみを抱いてはいません。

私には愛したものがありません。

それはこの世界ありきのものでした。

私はそれを理解している。

世界を愛しています。

過去にも、いま現在にも愛はある。

ただ……、私は未来だけが愛せない……」

「……………“未来”？」

グレンが眉を寄せた。

「……どういう意味だ」

「そのままの意味ですよ」

「未来は……」

グレンは引つ掛かりを覚えながら、それを噛み砕く前に言葉を紡いだ。

「この世界は、お前が創りだした《ルビー・エーテル》によって滅ぼされる。

その未来を変えるために、俺たちは……」

「それは“何度め”の歴史なのでしょうね？」

レインがグレンの言葉を囁くような声で遮った。

「“何度め”……？」

「《ファントム》は貴男方に何も伝えていないのでしょうか？」

それとも“彼女”自身、自覚がないのか……。

どちらにせよ道を違えたあのときから、我々には対立する歴史しかあり得ない。

詮索することも虚しいだけか……」

「何を……言つて」

「貴男は《ファントム》が《予言者》であると、本気で信じているのですか？」

レインが首を傾げる。

絹糸のような銀の髪が揺れた。

「“彼女”は私の同類ですよ。

《予言者》などではない。

“彼女”は歴史を《予知》しているのではなく、ただ《知つて》いるのです。

自分自身が生きた歴史ですから。

貴男方は知らないでしょうが、歴史は何度も繰り返しているのです。

《ひとつの結末》を《拒絶》する大多数の力によって、何度も時空を遡り、同じ歴史を何度も何度も繰り返した。

積んでは崩し、また積んでは崩した……」

「ちょっと、待て」

グレンは呆然と、信じられないといった表情でレインを見た。

こいつは何を言っているんだ？

「どひどひ……」

「そうですね、
わかりやすく例えましょうか」

レインが自身を示すように白い手を胸に当てた。

「私と“彼女”は、時空を超えて“未来”から来た。

……とても言うっておきましょう。

だから“彼女”は未来を知っている。

だから私は未来を壊したいと思っている。

実際に生きて、知っているから」

…常夜の天蓋、
偽りの星空。

その下、深い闇の中。

暗い暗い闇の中に、ひとつの“紅”

花のような、血のような。

それは少女のかたちをした“それ”の纏う真紅のドレスだった。

闇に溶かすように漂う、長く艶やかな黒髪。

空に泳がせる白い手。

長い睫毛を伏せたままだった少女が、機械的にその瞼を上げた。

紅玉の瞳を仰がせて、花のような唇を開く。

あまりにも微かな咳きが漂う。

『……………い……………りあ……………す……………』

あまりに無感情、あまりにあどけない声が闇に溶けて消える。

『……………え……………っだ……………』

空に向かって伸ばした白い手は、偽りの夜空の何を掴むことも出来ないまま力なく墜ちた。

【18】白き王のアリア（後書き）

最近、こないだ買った中古DS版の『ファイアーエムブレム紋章の謎』をクリアしました。

『ファイアーエムブレム』シリーズは大好きなゲームなのです。

でもキャラが多過ぎて半分も使えてないです……。あとガイドブックなしで進めていたので、仲間になるはずだったキャラを無視したりやつつけちゃったり。

（検索サイトで知った）

それらをふまえ、今2巡めです。

*

さて、今回登場した正体未発表の2人組。

ヴリトラとワイリーですが、こいつらはアジアチックな外見の設定です。

リーヴダリルはどちらかという文化的には欧米風の設定なので、アジアンでちょっと特異性を。

アジアン好きなんですよね、服とか音楽とか。とか言いつつ、最近は戦国武将とかも好きです。

NHKの某番組を観つつ、そこ繋がりアーティスト『Kalafina』に今はまっています。

【19】スベテノハジマリについて

あなたはわたし
わたしはあなた

あなたはわたしの一部でありわたしの全て
わたしはあなたの一部でありあなたの全て

それでもあなたがわたしにとってわたしよりも愛しいのは
やっぱりあなたがわたしではないからなのかしら

【Legend of 1st Land】

林業都市サンクレールを抱くようにしてそびえる山がある。

その山は街の背後に絶壁を、側面になだらかな丘陵を面していた。

山は深い森でもある。

その中には、木材を置いたためだったり、休憩をするための小屋がい
くつも点在していた。

そのひとつ、木漏れ日に霞む小さな家屋に歌鳥たちはいた。

*

アイラの症状が落ち着いた頃に、ロイドが一同に宿を引き払うことを告げた。

「山ん中の小屋をひとつ買い取った。

あまり長々と街中をうるつくのも頂けねえ。

教会をひとつ吹っ飛ばした件もあるしな」

その言葉に、歌鳥が

「そういえば……、その事はどういう風に処理されたのでしょうか。」

警察 ……じゃない、役人さんが調べた筈ですよね」

と呟いた。

それに対し、ロイドは

「表向き人間の被害はねえからな。

適当に事故ってコトに片付けたんだろ」

と軽くあしらうように言った。

その口調に、歌鳥は少し複雑な思いがした。

ロイドには、むかし殺された妻の犯人捜査を役人に打ち切られた過去がある。

そういう役職に不信感を抱いていてもおかしくない。

同じ部屋で、レックスが荷物をまとめ始めながらロイドにひとつ訊ねた。

「エレナさんと、合流するはずの子は？」

「街中にブラックを置いていく。」

「……ここまできたら、ヴィヴィは自分から帰って来るのを待つしかない」

「……………」

歌鳥の表情が曇る。

だが、かなりの日にちが経過した以上、確かにロイドの言う通りにするしかなかった。

「うまいことセヴァルスタにでも戻ってたら、また違っただけだな。」

あそこにはファントム・コードの仲間を置いてあるから」

その人物と接触できれば記憶が戻せるかもしれない。

ロイドはそういう意味でそう言った。

だが、それが不要な思案であることをロイド達は知らない。

エレナがすでに記憶を取り戻していることも、聖地ヴァナディースでグレンと合流することも、この時点では知る由もなかった。

「アイラ、お前は怪我が良くなったら好きにしる」

「言われずとも」

そう短く答えた女は、不機嫌そうに未だ鈍い痛みが残る肩を擦った。アイラは正確にはファントム・コードの直接の関係者ではないので、少しばかり居心地が悪いのは仕方がない。まともに話をしているのは治療役のレックスくらいだろう。

例によって人見知りの歌鳥にとっては、アイラはなかなか話しかけにくいタイプである。

その歌鳥だが、数日前からレックスにこの世界の文字や歴史を教わっている。

この日も、山小屋の一室で街で購入した書物を広げていた。

*

「…大昔、この世界は混沌の渦巻くひとつの大きな球体だったと言われている。」

あらゆる命はその球体の中で漂い、目的もなく生も死もない微睡眠の中で揺らいでいた。

けれどあるとき、その中にひとつの《意識》が生まれた。

その《意識》は球体を4つに割り、

《風》を《鳥》に、

《土》を《獣》に、

《水》を《魚》に、

《火》を《竜》に与えたという」

「《竜》？」

歌鳥が首を傾げる。

うん、とレックスが頷いた。

「《風》は《空》を表し、

《土》は《地上》を、

《水》は《海》を、

そして《火》は《地底》を表している。

そして各々を司る《民》が存在した。

《空》を司る《鳥人族》、

《土》を司る《獣人族》、

《海》を司る《人魚族》、

《火》を司る《竜人族》。

この4つの種族がいわゆる《第一人類》と呼ばれる世界最初の人類だね」

「…私たちの祖先は、《獣人族》ですか？」

「いや」

そう言って、レックスは挿し絵の小さなページをめくった。

「そうとは言えないけど、違っても言えないかな」

「？」

「次のページに行こう」

そう言つて、レックスがテーブルに広げた本をめくつた。

「ある日、赤ん坊を抱えた老婆が鳥人族の里を訪れて来た。

“この児の親御を探しています”

けれどその赤ん坊は鳥人族ではなかった。

そこで鳥人族の民はその老婆を獣人族の里に案内してやった。

しかし、赤ん坊は獣人族の子でもなかった。

そうして赤ん坊と老婆は人魚族と竜人族の里も訪ねたが、赤ん坊はそのどの種族にも属さない人種だった。

そうして彷徨う内、老婆は赤ん坊を抱いたまま死んでしまった。

それを憐れんだ4種族の人々は、その赤ん坊を1年毎にそれぞれ自分たちの里で育てることにしたんだ。

赤ん坊はやがて美しい乙女に成長した。

そうして4種族の人々は、ますます彼女を愛しんだ」

「良いお話ですね」

「うん、ここまではね」

レックスの含みを込めたその言葉に、歌鳥は首を傾げた。

「その先に、何か？」

「うん。」

成長した乙女の美しさは、何ものも較べるものがないほどだったという。

そんなある年、竜人族の人々が習わしを破って乙女を里に留め置いた。

次に乙女を迎えるはずだった獣人族の人々は怒り、他の2つの種族の人々と共に、乙女を渡せと竜人族に迫ったんだ。

竜人族はそれを拒んだ。

やがてその争いは人類最初の戦争を引き起こした。

だが、その戦争は竜人族対他3種族 …、つまり単純に1対3の争いだ。

竜人族に勝ち目はない。

そうする内、どうしても乙女を手放したくない竜人族の1人が、原初の形に立ち戻って乙女を飲み込んでしまったんだ」

「原初の形 …、

《竜》、ですか」

「そう。」

そしてさらに、《竜》は《地底》を司る。

乙女を飲み込んだ竜は、そのまま他の種族の関与を受けない深い地底に潜ってしまった。

3種族の人々は、乙女が失われてしまったことを深く悲しんだ。

そうして、彼らは乙女に似たものを生み出そうとしたんだ。

《鳥》でもなく《魚》でもなく《獣》でも《竜》でもない人間を。

互いの血を掛け合わせ、互いの血を消し合って。

そうして長い長い年月をかけて、3種族は交わり合いながらひとつの種族を目指した。

そして生まれたのが《鳥》でもなく《魚》でもない、《獣》でも《竜》でもない、

僕たち《第二人類》というわけ。

そして《第二人類》の誕生と引き換えに《第一人類》の3種族は滅んだ。

もうこの世界に《鳥人族》も《人魚族》も《獣人族》も存在しない」

「…ひとつの種族に、なったから」

「そういうことだね」

「あ、でも……」

歌鳥が本の挿し絵を指差した。

「《竜人族》は？」

歌鳥が示したのは、雄々しく叫ぶ竜の画だった。
その疑問にレックスが

「乙女を飲み込んだ後、さらに地底の奥深くに潜っていったとされている。

彼らは今でも乙女を奪われまいと自身らの象徴たる炎の中で、乙女を抱えた竜を守り続けているそうだ」

と語った。

【Legend of 2nd Land】

「今日はこの国の歴史から読んでみよう」

「はい」

歌鳥が折り目正しく返事をした。
レックスが頷いて本を開いた。

「……元々このリーヴダルは、農耕や牧畜の土着の民がそれぞれ部族ごとに分かれていた国だった。

いや、国というのは正しくないな。

各部族は完全に独立していて、交流もごく稀にあった程度だったという。

けれど西のウイルクナス国の侵略が始まってから、変化が訪れる」

「侵略」

「ああ。」

ウイルクナスは狩猟と略奪を主な産業にしている国だからね」

「略奪……って……産業になるんですか……」

「うん。」

戦いで領地を広げ、勝ち得た資産で民を養う国だったんだ。

そしてこの当時のウイルクナスは、国内で権力争いが盛んになっていた時期だった。

国内での領地争いが熾烈を極め、一部の豪族の目がこちらに向いたのも無理はない。

そうして山岳地帯を越えて侵略してきたウイルクナスの軍勢に対し、戦と無縁の生活を送っていたリーヴダリルの民はひとたまりもなかった。

鳥や獣を狩るために武器を扱うことはあっても、人間同士で戦うこととはなかったんだ。

そんなリーヴダリルの民にとって、軍隊や戦略を用いて侵略してくるウイルクナスは脅威だった。

土地や財産を奪われ、リーヴダリルの民は東へと逃れて行った。

けれどウィルカナスの侵略の勢いは緩むことがなく、リーヴダリルの約半分の土地が侵略者たちの手に落ちた。

今のリーヴダリルの公用語がウィルカナス語なのは、この時代の名残だといわれている」

「……でも、そのままだったらこの国はリーヴダリルじゃなくて、ウィルカナスの筈ですよ」

「うん。」

数年後に原住民が土地を奪還するんだ」

レックスは開いたページの地図を示した。

「土地を追われたリーヴダリルの民は東へと逃れ、ナスターシャ砂漠にまで追いやられた。」

一部の民はさらにそこから砂漠の先の山岳をも越え、その先の土地に定住した。

そして建国されたのがログクロートだ。

リーヴダリルとログクロートは元々は祖先を同じくする兄弟国だったんだ。

で、ナスターシャ砂漠に残った原住民なんだけど、彼らは東に移る踏ん切りがつかなかったんだ。

砂漠を越えれば、おそらく故郷には二度と帰れない。
農耕の民が土地を追われるとはどういうことか。

先祖伝来の土地で田畑を耕していた民は、財産よりも土地そのもの
に対する執着が強く、望郷の念もまた強かった。

そうして、原住民たちはついにウィルカナスへの反撃を決意した。

ナスターシャ砂漠のオアシスで戦力を組織して祖国奪還の軍を率い
たのは、

“神の使い”を名乗るひとりの少女だったという「

「女の子？」

「ああ。

名前はヴァナディース。

つまり聖地ヴァナディースは彼女の名前にちなんでついた地名なん
だ。

彼女の素性ははっきりしないんだけど、リーヴダリルのどこかの部
族の巫女だろう、というのが通説だ。

人心を惹き付け、未来を見通し、ときには自ら戦場に立って魔導の
力で味方を助けたという。

教典の第1章は彼女の活躍から始まる。

“異界より乙女舞い降りき”

“其は虹色の唄の継承者”

“曙光の翼もつ雲雀の娘”

“朱き血の民に約束の刻を告げるもの也”

「“異界”？」

その単語に、歌鳥はやや過剰な反応を見せた。

レックスはその理由をよく理解していたから、やんわりと頷いた。

「この“異界”というのは、ナスターシャ砂漠を指した比喻だろうと言われている。」

農耕民であるリーヴダリル人にとって、砂漠というのは当時かなり特殊な土地環境だったろうからね。

ちなみに“虹色の唄”というのは彼女が用いたという魔術のことだといわれている。

歌唱は、古来魔導に属するものだったから。

“曙光の翼もつ”というのは、彼女の率いる軍勢が東から進軍してくる姿を表現したものだだろう。

“約束の刻”というのは、故郷を追われたリーヴダリルの民の帰郷の誓いを指していると思われる。

…と、まあ、これはごく一般的な教典解読の一例なんだけど。

話を戻そうか。

ヴァナディースが率いるリーヴダリル原住民の軍勢は、5年をかけて全領土を奪還した。

そうしてウィルカナスの占領軍は撃退され、それまで独立していた原住民の部族が統一されてリーヴダリル国が建国された。

初代国王の座に就いたのは、盟主ヴァナディースの右腕として祖国奪還に尽力したヤヴンハールという人物だ」

「ヴァナディースという女の子は？」

「それが彼女のその後はまったくの不明なんだ。

戦争での傷がもとで亡くなったとも、無事に故郷に帰ったとも云われるけど、どれも有力な説ではない。

ただ、彼女はリーヴダリル建国の英雄として、この国の崇拜対象となっている。

出自やその後が不明な点も、彼女が神聖視される経緯に一役買っているのだろうね。

また、彼女が用いたとされる魔術や残した言葉は後に編纂され、国教の教典となっている。

そしてナスターシャ砂漠で解放軍が結成されたオアシスには彼女の名前がつけられた。

聖地ヴァナディース。

代々、長を女性に定めているのはヴァナディースを教祖としているからだ」

「はあ……」

歌鳥は感嘆ともつかぬ息を洩らした。

「これは……、

歴史ですか？

神話ですか？」

レックスが微笑んで肩をすくめた。

「どうかな」

【Knock】

「……人の魂は死した後、原初の渦に還るのだそうだ……」

小さな墓にすぎる女の背中をせつなく見守りながら、ユーリンは傍らに立つクリスにそう言った。

「うず？」

「ああ。

根源の球体を抱いていた原初の渦。

人の魂は、肉体を離れるとこの世ならざる場所へ流れつき、再び現世に生まれ出でるそうだ。

真偽のほどは知らんがね」

「……よくわからない」

たどたどしくさえあるクリスの言葉に、ユーリンがふ、と息を吐いた。

「ああ、私にもわからない。

嘘か真かわかったところで、死の意味が変わるとも思えないしな」

…立ち寄った小さな村、生後間もない子供が亡くなったと聞いた。

ユーリンは宿を借りた家人に、自身の身分を巡教尼と伝えてあったから、その成り行きで子供の弔いをする事になった。

村人も、まさか頼んだ相手が聖地最高の司祭だとは夢にも思わなかつただろう。

ユーリンは丁寧な祈りの言葉を唱え、真摯に遺族を慰めた。

その間、なんとなくクリスはユーリンを少し離れたところから見ていた。

そして、今。

「子が親より先に逝くのは不幸だな……」

「……」

それと同じ言葉を、クリスはつい最近耳にしたことがある。

…

秩序の方が、私たちを裏切ったんだ……

…

それは愛娘を喪った父親の嘆きだった。

(……“秩序”……)

ふと、クリスは眩暈にも似た感覚をおぼえた。

(この世に“こうあるべき”ものなどありはしない)

そう言ったのは誰だったろう。

(それは他者が勝手に決め付けた法則だ。

“あるべき”ものなどありはしない。

すべての秩序は各個の自主性によってのみ定められるものだ。

生まれ出でて、生きて、そして死ぬ。

我々にはそれ以上の意味もそれ以外の意味もない)

朗々と、音楽的でさえあるけれど、感情の温度に欠ける声音。
耳に柔らかい男声。

「戻ろう、クリス」

ユーリンの声に、クリスはつと顔を上げて頷いた。

小さな墓を囲う遺族たちのすすり泣きが、わずかに鼓膜を擦った。

…鈍い音がして、荒野の大地に“それ”が転がった。

一刀で頭領の首を落とされたのを見て、野盗たちは怯んで騎馬を下がらせた。

馬上で剣を抜き払った姿勢のまま、盗賊たちを一瞥した青年が冷ややかに口を開く。

「1人も逃がすな」

それは視線を向ける者たちに対してではなく、自身の背後に控えた数騎の従者に対するものであった。

その声を合図にして、剣を鞘から走らせる音を返事代わりに4騎の男たちが盗賊たちに向かって殺到した。

盗賊たちが慌てて馬首を巡らす。

手に負えない相手を襲ったことを後悔する間もなく、ある者は背後から斬り付けられ、またある者は弓で背中を射抜かれた。

号令をかけた青年の背後で、ただひとり微動だにしない壮年の男がいた。

その男が口を開く。

「見事なお手並みで」

背後からの贅辞に、青年は面白くもなさそうに

「こんな田舎の盗賊ふぜいに遅れを取っては国境警備隊の恥だ」

「ごもつとも」

青年がどこか無然とした表情で男を振り返った。

男の返事が人を食ったような印象だったからだった。

「変わらないな、お前は」

「殿下はご立派になられましたな。」

先ほどの剣技の冴えなど、お父上の若い頃のそれと比して遜色ない。やはり殿下がお父上の血を一番濃く受け継いでおいでだ」

「……それは今の世間では誉め言葉にはならないのを知っているか？」

「存じておりますが？」

「……ならいい」

青年 ……フラウンケル公子はため息混じりの声を洩らした。

「……それで」

男が自身の騎馬の手綱を緩ませたまま、フラウンケルに向かって首を傾げて見せた。

「一線を退いて久しいこの老兵を、わざわざこんな荒野の真ん中まで引きつれて殿下は何をお聞きしたいのでしょうか？」

「壁や天井のある場所では、どこに“耳”があるかわからないからな」

その返事に、男はふ、と息を吐いた。

「いかに警戒したところで、情報収集に関してはお父上の方が殿下よりも数枚も上手だ。

おそらく殿下の動きも筒抜けでしょう」

「耳に入ったところで、動かぬのなら同じことだ。

それと“殿下”はやめろ。

リーヴダリルは未だ国王不在なのだから」

「ふむ。

では、昔を思い出して“フラン坊っちゃん”とでも」

「それもやめろ」

本気で嫌そうな声と表情に、男が肩をすくめた。

「坊っちゃんは今と変わらず冗談が通じない。

……それでは、フラン様。

この爺やに聞きたいこととは何ですか？」

盗賊たちを一掃した部下がこちらの様子を窺うのを見、フラヴンケルは軽く手を上げて傍に戻って来るのを押し留めた。

そうして背後の男を肩越しに見る。

「30年前」

ぴくり、と男が眉を動かした。

「本当は何があつたのか聞かせてくれ」

「“本当は”」

「そうだ。」

「真実だけが知りたい」

「……………」

男はしげしげとフラヴンケルの横顔を眺めた。

「……………ずいぶんと昔のことをお調べになりましたね」

「未だ国境付近にはリーヴダリルに一矢を報いようとするログクロート出身のテロリストが多数うろついているのでな。それ関連の情報は自然と集まる。」

その中には聞き捨てならない噂も数多い。

特にシスター・クローディアに関しては。
シスターの治める聖地ヴァナディースは国境にも近いゆえ、警戒せねばならなかった」

「……“何も知らぬ” ログクロート人からしたら、シスター・クローディアはさぞ憎いでしょう。」

王家滅亡の手引きをした、と思われるでしょうからな。

そしておそらく、半分以上それは正しい」

「“おそらく”か？

お前はその当時の直接の関係者だろう。」

そのお前が“おそらく”などという言葉ではぐらかしても、何の意味もないぞ」

男が肩をすくめた。

「そんな昔のことをお調べになって、いったいどうするおつもりですか。」

藪を突いて蛇を出そうとしておられるようにしか見えませんが」

「蛇なら既に暴れ回っているだろうが。」

セヴァルスタでの反乱、及び聖地ヴァナディースでのシスター・ユーリンの身に起きた変事。

お前の耳に入っていないはずがない」

フラウンケルのどこか鋭い口調に、男はふいと視線をそらす。

「……わたくしはもう隠居した身なのですがね」

「ならばちょうどいい。」

義理や立場に縛られることなく私につけるだろう」

しれっと言つてのけられて、男は苦笑を零した。

「やはりフラン様はお父上の若い頃によく似ていらっしやる。」

…先代にも同じだけの器量があれば……」

その声に滲んだ苦渋の色に、フラウンケルはわずかに眉をひそめた。

“先代”とは、先年亡くなった第28代皇帝ヘルヴァルド5世のことだろう。

フラウンケルの父親・バルカシオンの実兄である。

「サジ」

「…わたくしから30年前のことをお話することは出来ません。」

決して他人に洩らさぬことをあの方に誓ったのですから。

その誓いが信じられたがゆえに、わたくしはこうして生かされていますのでございます。

その信用をどうして裏切れるでしょうか。

フラン様、

もし本当に真実を知りたいというなら、それが本心からなら、お父

上にお訊ねなさいませ。

他ならぬフラン様の心からの願いであれば、お父上はお話しくださるでしょう」

「……………」

「帝都イザヴェルへ参られませ、フラン様」

そう言つて、男は頭を下げた。

「あるいはそれは、皇族たることを否定なさっているフラン様にとつて知るべきではない“闇”やもしれませぬが」

【History of 2nd Land:2】

その日、テーブルに広げられた地図を見ながら歌鳥が「そういえば」と口を開いた。

「ログクロートもウィルカナス語を使っていた、つて聞いたことがあるんですけど……………」

部屋にいたのはレックスと、窓際で椅子に掛けながら外を眺めていたアイラ。

そして歌鳥の3人だ。

歌鳥の声に、テーブルを挟んで向かい合うレックスが頷いた。

「うん」

「でも、リーヴダリルがウィルカナス語を使うようになったのは、侵略された時代の名残なんですよね。」

侵略から逃れた人たちが建てた国なのに、どうしてログクロートもウィルカナス語なんですか？」

「ログクロート建国がリーヴダリル建国から約150年後のことだからだ」

そう答えたのは、窓際にいたアイラだった。

歌鳥とレックスが意外そうに彼女の方を見る。

「アイラさん」

「どうかしました？」

この数日、歌鳥とレックスの“授業”にアイラが口を挟んできたことはなかったので、レックスが首を傾げた。

アイラは視線を窓の外に向けたままで「べつに」と一言言ってから

「リーヴダリルが建国されて言語統一がなされた頃、砂漠を越えて新天地を求めた民はまだ移住先の原住民と領地争いをしていた。」

ログクロートは広い山岳地帯に点在する幾つかの高原からなる痩せた土地。

居住と農耕に適した土地は限られる」

「領地争い …… って…、リーヴダリルの人って戦争とかは苦手な民族だったんですね…?」

「血を流す戦いだけが争いではない。

交渉や話術による領地獲得、農耕技術の伝達、そして有力部族の権力者たちとの婚姻 ……、

ときには武力に頼ることもあったろうが、ログクロートに移った民はそういった手段で、原住民の中に溶け込むようにして安住の地を求めた。

ログクロートの建国はそうしてなされたのだ。

言語統一にあたり、移民たちにとっての祖国であるリーヴダリルの公用語が選ばれたのは、後の国交を考えてのことだ。

だが、建国当時からログクロートとリーヴダリルの間には確執があった」

「確執？」

歌鳥が首を傾げる。

「だって ……、元々は同じ民族なのに」

「だからだよ」

レックスが柔らかい声で言った。

「リーヴダリル人にしたら、ログクロートは土地を捨てた人々の建てた国だ。」

自分たちが血を流しながら祖国奪還のために戦っている間、砂漠の向こうで話術や計算で新天地を得ていた人々を ……」

「同胞とは呼べまい」

アイラがレックスの言葉を継いだ。

「リーヴダリルが建国された当初、祖国解放を喜んで砂漠を越えて故郷に戻った民もいた。」

だが、それらはことごとく迫害を受けたと聞く。

無理もない。

土地を、同胞を捨てて逃げておきながら、何をぬけぬけと、とな。

命を懸けて取り戻した土地を、どうして平和になってから戻ってきた者たちと分け合わねばならない……

そういった事情で故郷に拒まれ、移住地で生きてゆくことを選んだ民が建てた国がログクロートなのだ。

ゆえに、両国が互いに抱く感情は複雑だった。

ログクロートは不毛の地、農耕民族であるリーヴダリル人にとって好ましい土地ではない。

だからといって故郷に戻れない民は無理やりにその地に適応した。

だが、やはり故郷の地は慕わしい……」

アイラが小さなため息をついた。

「リーヴダリルにしたならログクロートは戦うことをしないで逃げて行った負け犬たちの建てた国だ。」

“聖戦”に勝って祖国を奪還したリーヴダリル人は誇り高い。

それに対し、ログクロートは誇りを捨てた民族だ。

ときには原住民に恭順して生き延びた。

元々は同じ民族だが、ウィルカナスの侵略によって分かれた後は、そういつたまったく異なる国民性が作り上げられた」

アイラはいつになく饒舌だった。

その様子に、歌鳥はふと思い出した。

いつかアイラの父・ワヤンと交わした会話。

…

(ワヤンさんって、ファントム・コードのメンバーで、クローディアさまの家来でもあるんですか)

(どちらが本業なんですか?)

…

ワヤンは「どちらも」と答えた。

あるいは、「どちらも副業だ」と。

……彼らの主・クローディアはかつて

…

「もしかして、アイラさんとワヤンさんは……」

*

3人のいる山小屋から少し離れた木陰で、ロイドは煙管をくわえたまま街の方角に顔を向けていた。

深い森の中、木々に遮られ見通せぬ視界。

ロイドの隻眼はその先に何を求めるわけでもない。

ただ街の方角を眺めるのは、それが“らしい”気がするからだ。
街で落ち合う予定のクリスマスを待っているのだから。

サンクレールは特殊な地形をした街だ。

出入口になる場所は限られる。

クリスが到着すれば必ずそのいずれかを通るはずなので、ロイドは自身のゴーレムを巡回させながらそれを待っているのだ。

（ちゃんと合流出来るようマリーがうまいこと調整したはずだから、来ることは間違いない……。

だが、いつになるかわからんのが歯がゆいな）

ふだんロイドの長身を包んでいる漆黒の装いはゴーレムが姿を変えたものだ。

今のようにはゴーレムと別行動をしている間は、ロイドの装いは少し

軽くなる。

それでも黒ずくめなのは当人の嗜好なのだろう。

ロイドは唇から煙管を離し、深く息を吐いた。

…すると、

「？」

鈍く、耳鳴りのようなものを感じた。

「なんだ？……」

『……い……ど……』

ロイドが眉をひそめた。

耳ではなく頭に響く、雑音の混じった声。

それは断片的ではあったがマリーエレメントの声に違いない。

「マリー？」

『……が……て……』

ひどく聞き取りづらい。

ロイドは無意識に手を耳に当てた。

「マリーか？、どじした」

『……くろ……ちの……たみ……』

ロイドは目を睜った。

「今……」

“黒い血の民”と。

瞬間、地面が激しく突き上げられた。

*

【不義の迷宮】

突然の震動に驚いた歌鳥が悲鳴をあげて椅子から転倒した。レックスもまた同じように床に倒れる。

少し離れた位置にいたアイラが、咄嗟に2人のもとに駆け寄った。しかし激しい揺れに、たどり着いた途端に膝をつく。

「大丈夫か」

「なんとか……、カトリさん、大丈夫？」

「……………」

床に伏せながら、歌鳥は恐ろしい記憶を呼び起こされていた。

…地震…

脳裏に浮かぶ、あの夜。

歌鳥はそれを振り払うように鋭い動作で自分の身体を抱き締めた。

(違うわ)

これは違う。

自分にそう言い聞かせる内に、揺れは確かに収まっていた。

レックスがカトリをかばうようにして肩にかぶせていた手を下ろした。

「何だったんだろう……、
今の……」

「!!、なっ……!!」

窓の外を覗いたアイラが、驚愕の声をあげた。
それに気付き、レックスが立ち上がってアイラの視線にならう。

「!?!」

歌鳥も見た。

外の景色は一変していた。

「なに……これ」

山小屋の周囲数メートル範囲は変わらない、当たり前前の地面をしている。

だが数メートルの範囲を越えた辺りから、まるで大量の塗料を撒き散らしたかのように、風景の輪郭だけを残して灰色の迷彩に染まっている。

それは空も同様で、まるで高く巨大な灰色の天井の建物の中のように、遠近感や平衡感覚を混乱させる。

「これは……何……？」

はっと歌鳥は顔を上げた。

「ロイドさんっ……！」

慌てて扉に駆け寄る歌鳥を追って、レックスとアイラも踵を返した。

「待って」

「迂闊に動くべきではない、
私が先に出る」

アイラが歌鳥の前に出る。

そして辺りを窺うようにしながら扉を開けた。

「……静かだ」

風の音も、木々の葉が揺れる音もしない。

鳥のさえずりや、微かに聞こえていたはずの街の営みの音も聞こえなかった。

まったくの無音。

「何なの……これ」

「《不義の迷宮》」

突然、降ってきた女声。

3人は弾かれたように声のした方を

∴ 山小屋の上を見た。

そこには2つの人影が。

「誰……?……」

「何者だ、これはお前たちの仕業なのか」

無表情のままこちらを見下ろす、男女。

50代と見られる男と、20〜30代くらいの女。

服装が少し変わっていて、歌鳥は故郷である異界の民族衣装を思い出した。

そしてひとときわ目を引くのは、男の方の爛と輝く黄金の瞳。

「《尊師》」

女が口を開いた。

先ほど同様、まるで感情に欠けた声であった。

「あれが」

「なるほど」

男の声もまた、温度に欠けて機械的だ。だが、それでも気品のようなのが漂う。

「“今回”の《虹姫》か」

「…!？」

歌鳥が瞠目する。

ほとんど反射的にレックスが歌鳥の前に立った。

「レインの関係者が…!？」

その言葉に、男がわずかに首を傾げた。

それを見、女が口を開く。

「《白き王》たちの仮の名前だったと記憶しております」

「ああ……、

確かそうであったな……。

レイン、………」

「レイン＝ナイトメア」

「ああ、そうだ。

“悪夢の雨”とは、ずいぶんと皮肉った名だと思った記憶がある」

男の言葉に耳を傾ける仕草をしながら、つと女が輪郭だけの森の奥

を見た。

「……《尊師》、
あちらの方に《ダブル・コード》の気配が。
それかなり強力です」

「ふむ。目障りだな」

女が頷く。

そうして優雅な所作で袖から筆を取り出した。

女が筆を宙に泳がせる。

「『漆黒の翼』

『闇の揺り籠』

『叡智の枝に刻を留めよ』

『蒼き眠りに爪を立てよ』

……」

宙に淡い光の文字が浮かんで風に流れる。

「『第一の病 忘失の指』

『第四の病 恐怖の眼』

『第八の病 強欲の顎』

……『出でよ』……」

女の歌声にも似た詠唱の後、号令に応えるかのように灰色の風景が
“所々”歪んだ。

「……！……」

灰色に染められた景色から、立体的に浮かび上がった景色。

起き上がる灰色の …、 “人間”。

「《ドール》 ……！？」

歌鳥が呟く。

のっぺりとして、輪郭に乏しい人型の群れ。

次々と灰色の地面からムクリムクリと起き上がってくる。

それらの異形の群れが、山小屋の周囲を囲んだ。

「何だ ……！？」

アイラが懐から短剣を抜き取った。

愛刀は部屋に置いてきてしまっている。

レックスが歌鳥を自身の後ろに庇う。

「これは ……」

まずい。とても。

第一、山小屋にはロイドが結界を張っていたはずなのに、2人の正体不明の人間が接触してくるまで何の異変も察知出来なかったなんて。

…屋根の上に立つ男が、女に声をかけた。

「あれらだけでは足止めには心許ない。
そなたも行くがよい」

「心得ました」

女がひらりと宙を舞った。

歌鳥らのはるか頭上を飛び越えて、袖を振りながら飛翔する姿はまるで蝶のように美しい。

歌鳥たちがそれに目を奪われた一瞬、男が3人のすぐそばに降り立った。

「!!!!」

レックスが反射的に歌鳥の身体を押し退けた。

男の腕が宙を掻き、その延長でレックスの身体を弾き飛ばす。

「レックスさん!!!」

「ジェラルディン!!!」

吹っ飛んだレックスの身体が、激しい音を立てて山小屋の壁に激突する。

咳きこんだ口から、微かに血が滲んだ。

それを見た歌鳥が悲鳴をあげてレックスに駆け寄ろうとする。
だが、その背後で男の腕が伸ばされた。

「伏せろ、ナミカワ!!!」

アイラが叫ぶ。

歌鳥が振り向き、振り向きざまに転ぶようにしてその場に伏せた。

アイラの剣が男の肩を狙った。

男はそれを視界に認めた。

次の瞬間、信じられないことが起こった。

「……！！！！」

高く澄んだ音をあげて、刃が折れる。

男の肩にぶつかった剣が、その衝撃に耐えられなかったかのように。

「ばかなっ……」

驚愕の表情を浮かべたアイラの眼前に、男の拳が見えた。

「やめてっ！！」

歌鳥の悲鳴と、アイラが吹き飛ばされる音は同時だった。

アイラの身体が輪郭だけの灰色の木の幹に衝突する。

歌鳥はそれを眼で追うしかなかった。

ぺたりと腰を抜かしたまま、歌鳥は目の前に立つ男の黄金の瞳を見た。

「あなた……、誰っ……！？」

困惑で声まで青ざめる。

動きたくとも、蛇に睨まれた蛙のように、金縛りにでもあったかの
ように指一本動かせられない。

「……ふむ……、」

今回はまた、いかにもひ弱そうな《虹姫》だ」

「……!?……」

「だがしかし、用心はし過ぎても、するに越したことはあるまい。
“女神候補”など、そう何人もいらぬのだよ。」

歴史の反復にはいささか飽いた。

貴兄はここで退場してくれたまえ」

男の言葉の意味をまったく理解できないままで、歌鳥の頭がたった
ひとつだけを悟った。

(この人……、私を殺すつもりなんだ……!!)

レインに感じたのとは違う恐怖が歌鳥を襲う。

少なくとも、レインは歌鳥を殺すつもりはないと分かっている。
だが、いま目の前にいるこの男は違う。

(いや……、そんなの)

男の一步が近づく。

(いや、死にたくない)

こんなところで。

(死ぬのは、いや)

…

… 男が腕を振り上げた。

「カトリさん!!」

レックスの叫ぶのが聞こえた。

アイラが倒れながらもこちらの方に身を乗り出そうとしているのを
視界の端に感じた。

(みんながいるのに、

死にたくない …!!)

クリスの顔が、ロイドの顔が頭に浮かんだ。

男の腕が振り下ろされる前の、一瞬。

「

…

『邪魔をしないで』」

… 歌鳥の唇が、機械的に動いた。

「!!」

男が目を睜った。

男が振り下ろした腕を、歌鳥の頭上で受け止めた光。

油膜のような、オーロラのような。

「これは……」

「『やっと見つけた居場所なの』」

歌鳥が男を見上げた。

瞳の色が、爛と鮮やかに輝く虹色に変わっている。

「『やっと見つけた、歌鳥が歌鳥でいられる居場所なの』」

『邪魔をしないで』」

声も少し変わっていた。

元々の歌鳥の声よりも明らかに決然としていて、まるで別人のようだ。

表情も凜として、普段の歌鳥からは想像もつかない強さが漂う。

「カトリ……さん……!?!」

レックスが困惑して呟く。

アイラも訳がわからず、立ち上がるうとした姿勢のまま固まってしまった。

歌鳥が立ち上がる。

否、歌鳥の姿の“彼女”が立ち上がって、男を真正面に見据えた。

「『歌鳥は優しくていい子なの』」

『誰だろうと、歌鳥をいじめる人をあたしは絶対許さない』」

「……《ダブル・コード》か……」

男がぼつりと零した。

少女は毅然として男に向き合う。

「『歌鳥はまだ心も身体も弱いけど、その内すごく強い子になるの』だからそれまで、あたしが歌鳥を守るんだから』」

「貴兄が表層に出れば、主人格を飲み込む事態になるのではないのかね？」

それでは元も子もなかるうに」

「『あたしが出なければあなたが歌鳥を殺す』」

『だったらあたしが抵抗するしかないじゃない』」

そう言つて、少女が片手を上げた。

「『おいで!!』」

『メロ!!』」

少女の周囲を漂っていた虹色の光が、少女の声にこたえて明確な形を作り上げ始めた。

それを見、さらに先ほどの少女の言葉にレックスが目を見開いた。

「……………“メロ”…!？」

そんな……………」

レックスの驚愕の視線の先で、少女の身体に半ば纏わるようにして姿を見せたのは、宙に泳ぐ美しい虹色の魚だった。

レックスが揺らぐ。

「そんな……、
どうして……。」

“メロ”……！？

カトリさん、
どうして君が？

“メロ”は……
死んだアーリーのゴーレムじゃないか！

*

【無彩色演戯】

突如あらわれた灰色の輪郭の人間の群れに囲まれて、ロイドは眉をひそめた。

「……つたく……」

持っていた煙管を懐にしまい、迫る人型の群れを一瞥する。
そして舌打ちでもしそうな表情で

「ひとがゴーレムを“脱いでる”ときに……」
と呟いた。

普段そのずば抜けた長身を包んでいる黒コートは今はない。
露にしたしなやかに屈強な長い腕を軽く組む。

辺りを見回す。

四方を囲まれ、灰色の景色が不気味に蠢いている。

それが全て地面から起き上がった“人間らしきもの”なのだから呆れてしまう。

「よくもまあ……」

そうして視線を山小屋の方に向けた。

琥珀色の隻眼に初めてよぎる、苦い表情。

その視線の先、灰色に染まった光景に突如鮮やかな色が差した。

朱色の振り袖。

風をかたどる長い青磁の色の髪。

音も立てずにふわりと降り立ち、女がロイドの姿を見た。

「……初めまして、」

《ダブル・コード》「」

瞬間、ロイドの脚が地を蹴った。

そして女の頭上に踵を振り下ろす。

だが次の瞬間、女の姿が消失して、ロイドの脚は地面を叩いた。

「ち」

「容赦なし、ですか」

少し離れた位置に再び姿を見せた女を確認して、ロイドがいかにも嫌そうに表情を歪めた。

「ばけもの人妖相手に、容赦もくそもあるか」

「なるほど」

表情ひとつ変えず、女が手に持っていた筆を宙に躍らせた。

「ないのは容赦ではなく余裕、というわけですね」

女が宙に描いた不可視の文字が地面に落ちて、さらに新しい“人型”が起き上がる。

ロイドが吐き捨てるように呟いた。

「……………《死屍解読》……………、《強制隷属》……………！！
レインでさえ手をつけないような禁術中の禁術だぞ……………！」

「それは“こちら”の歴史における良識でございましょう」

「……………なるほど？」

ロイドが腕を上げて指をならした。

「“こちらの良識”は通用しない、と。

…なら男の俺が女のお前をボコボコにしても文句はねえな？」

*

亜麻色の髪をなびかせるのは、少女自身の内から溢れる見えない力のように思える。

事実、灰色の塗料に塗り固められたような世界に風はなく、まったくの無音であった。

そんな中でしゃらしゃらと涼やかな光の粒を落としながら、宙を泳ぐ虹の魚が少女の肩に身を寄せる。

それを見、レックスは信じられない思いだった。

「……………“メロ”……………！」

見間違はずがない。

他でもない、レックス自身の手で造り上げたゴーレムなのだから。

“彼女”のために。

「アーリー……………！？」

倒れたままのレックスの動揺などまったく気に留める様子もなく、男は軽く腕を組んで少女を眺めた。

「ふむ……………、主人格よりは見所がありそうだ」

「『歌鳥をばかにしないで』」

少女が男を睨みすえる。
そして白い手を胸元に当てて、

「『あたしが守るから』」

と唱えるように呟いた。
少女の目が男を捉える。

「『いくよ!』」

『メロ!』」

少女の声に応え、光の魚が反転した。
その額の真ん前で空気が渦を巻く。

瞬間、その渦が円形の波状になって男に向かって噴出した。

離れた位置にあったレックスとアイラが、耳鳴りに似た感覚を覚えて顔をしかめる。

「ッ……」

それは音波攻撃だった。

放たれた高く音を超えた攻撃は男に向かって真っ直ぐに渦を巻いた。

その直撃を受け、男がよろめく。

それを確認して、少女が地を蹴った。

ただし男に向かってではなく、少女は男から距離を取るために跳躍した。

緩く開かれた唇。

大きく息を吸い込み、少女が声をあげる。

……が、それはあまりにも音域が高かったため常人には聞き取れず、

また言葉ではない声だったためにその意味するところを察することは出来なかった。

僅かに体勢を崩していた男が軽く頭を振って少女の姿を見た。

「……何か仕掛けたか？」

「『ひみつ』」

「ふむ」

表情ひとつ変えぬまま、男は辺りを視線で撫でた。

「……なるほど、だいたい解った」

少女が眉間に皺をよせた。

これも普段の歌鳥なら決して浮かべぬ表情だ。

男が片手を上げる。

たおやかに揺れる袖は光沢から見て絹地だろう。

男が指を鳴らした。

直後、少女に向かって一直線に灰色の地面が亀裂を奔らせる。

巻き上がる土煙から顔をかばいながら、少女がさらに後方へ下がった。

虹の魚がそれに続く。

虹の魚　　：メロが再び男の方に顔を向けて音波を放った。

さらに少女も口を開いて自身の声をメロの音波に上乘せする。

男が腕を前方に突き出してそれを受け止める。

指先が切れて血を噴いた。

男はそれをまったく気に留めない風で、手首をくるりと回した。

まるで蛇の首を真似たような動作だった。

その一瞬、男の親指以外の4本の指先が黒い靄をまとった。

その靄が噴出して少女を指す。

メロが少女の前に躍り出て、今度は音波を盾にした。

見えない壁にぶつかって、黒い靄が霧散する。

しかしそのせいで少女は男の姿を見失った。

黒い靄で瞬間遮られた視界、先ほどまで男が立っていた位置は無人だった。

少女がすばやく辺りを見回す。

すると右手に、今まさに跳躍から着地するところの男の姿を捉えた。

少女が瞬時に息を吸う。

男が再び手首を回した。

そのとき、少女は男が一瞬自分から視線を外したのに気がつき、そ

してその視線の先を悟って目を瞠った。

男が見たのは、山小屋の壁に身体を打ち付けて未だ起き上がることさえ出来ないでいるレックスだ。

少女はその意味を悟る。

男が少女にそれを悟らせようとしたのに気がつきつつ、少女は男の思い通りに動くしかなかった。

男が回転させた手首はひとつだけではなかった。

片手は少女に向けられて、もう一方はレックスの方に向けられていたのである。

少女が声を放った。

それはレックスに向けて放たれた黒い霧を打ち消したが、同時に少女自身に向けられた霧に対しては無防備同然になってしまった。

メロは少女を守るために音を発したが、男は明らかにレックスに向けたのよりもはるかに強力な攻撃を少女に向けていた。

加えて、メロが放った壁は皮肉にも少女がレックスを救うために発した声によって防御力をわずかに削がれた。

音の壁が破れ、黒い飛沫が少女を殴り飛ばした。

小柄な身体が後方に吹っ飛ばす。

「『……ッあ……』」

亜麻色の髪を顔にもつれさせ、少女が呻いた。
その傍に男が降り立つ。

「だいたい理解した。
貴兄は私を倒すつもりがない。」

その状態で全力を出せば、そのぶん主人格の意識を侵食してしまう。
そうなれば貴兄自身の意識も消滅する」

「『……………』」

「だが、そうまでして守るべき主人格の肉体を危険に曝して仲間を
救う ……
いささか愚かな挙動ではないのかね？」

「『……………愚かなんかじゃない』」

少女が肘をついたまま男を見上げた。
凜として輝く瞳がひどく美しい。

「『これは、あたしと歌鳥両方の意志』
『歌鳥にとっても、あたしにとっても《ファントム・コード》の皆
は大切』」

『あなたがそれを利用して、あたしはそれを責める気はない』
『あなたがひどい人だっただけの話だもの』

『……………そんなの初めから……………わかってる……………』
『わかってたのに、みすみす利用されたのは、あたし、の、落ち度
……………』
『歌鳥の身体を……………、傷、つけて……………しまった……………』」

少女の言葉が途切れがちになる。
男は首を傾けてそれを見下ろした。

「限界かね？」

主人格の意識を保護しながら表層に出ているのは「

「『残念……だけど、そう、みたいね……』」

『あたしは歌鳥を知ってるけど……、まだ……歌鳥の、方は、あたしを知らない……』」

『お互いに……理解、し合って、ないと……、あたし達……中で傷つけ合ってしまう……だけ……』」

「ふむ。」

……要らぬ心配だな。

貴兄も主人格も、ここで消える」

男が少女に向かって手を出した。

「『消えないわ』」

「なに？」

「『……間に合うように……なってるもの』」

男が不可解そうに僅かに目を細めた。

「“間に合う”？」

何がかね」

「『決まってるわ』」

少女がその唇に笑みを浮かべた。

「『ヒーローよ』」

瞬間、高い音を立て上空で空間が弾けた。

灰色の破片が舞う。

混沌を覗かす亀裂から躍り出たのは、漆黒を身にまとった小柄な少年だった。

【邂逅】

躍り出た黒い影は、はじめ人の形をしただけの“漆黒”だった。

だが、すぐに風に剥がされるようにして、顔部分だけ肌が露になった。

現れたのは一見すると少女のように繊細な顔立ちの少年。

身体つきも華奢で、しかし体格に似合わないほど巨大な剣を担いでいた。

虚空から現れ、そして落下してくる。

少年は空中で体勢を整えながら、真っ直ぐに灰色の大地に立つ男に向かって剣を振り下ろした。

信じ難いほどの轟音が響き、大地を揺らす。

男は寸でのところでそれを躲して、5メートルほど離れた位置に着地していた。

少年が地面にめり込んだ刃を振り上げ、肩に担ぎ上げた。細い腕一本で身の丈以上の剣を扱う姿はやけに現実感を欠き、まるで絵画のようだ。

「誰……だ？……」

レックスが突如あらわれたその少年の姿を見つめた。

黒い髪、白い肌。

そして射抜くほどに鮮やかな赤紫の瞳。

纏う“漆黒”の装いが、幻のように揺れる。剥がれてはまとわり、まとわっては剥がれる。

その異様な様に、レックスははっと思い至った。

「ブラック……！」

ロイドのゴーレム。

確か合流する予定の少年を迎えるために、街に放たれていた。

ということとは、その少年が彼なのか。

外見の特徴も、聞いていたものと一致する。

…少年・クリスが辺りを見回した。

灰色の地面、灰色の森、灰色の空。

空気は明瞭だったが、むしろそれがクリスにとっては不快な気がした。

明瞭過ぎて、それが返って刺々しい。

…そして。

「…」

クリスは足元に倒れ伏す少女を見た。

すでに気を失って長い睫毛が伏せられているが、見間違っはすもない。

「カトリ？」

クリスは膝をつき、軽くその肩を揺すってみた。

「……う……」

歌鳥は小さく呻いたが、目を開きはしなかった。

だが、クリスは小さく安堵したように息を吐いた。

少なくとも目に見える大きな怪我はない。

洩らした呻き声と呼吸にも異常はなかった。

「…クリスタル？」

背中に投げ掛けられた声に、クリスが顔を上げる。

声の出どころを探し、クリスは正常な景色の山小屋の傍らにうずくまっている男の姿を見つけた。

「……君が……、
クリスタルかい？」

クリスはきょとんと目を丸くし、しかしすぐにコックリと頷いた。

「そうか……」

レックスはこの状況をどう判断すればよいのか、少し迷った。

素直に救援を喜ぶには、クリスはあまりにもあどけない子どものようで、頼りないとは言わないが何かそぐわない。

……そして、黄金の眼の男もまたレックスとは違う意味での判断の迷いを見せていた。

「クリスタル……？」

男はまじまじとクリスの姿を眺める。

そして顎に指を当て、思索するような仕草を見せた。

「……クリスタル……」

名前を呼ばれた少年が男の方に顔を向けた。

そうしてその黄金の瞳に敵意を探る。

「……………」

クリスが初めて表情らしいものをその顔に浮かべた。

「…………お前、なに」

“なに”、とは？

「…………お前、

生きものじゃない」

子ども染みだ拙い口調で、クリスは真っ直ぐに男に向かった。

「生きてないのに、どうして、いる？」

「…………ほう。

なかなか個性的な解釈だ」

「…………お前、きもち悪い」

クリスが大剣の柄に両手を添えた。

「カトリに怪我させたのも、お前か？

……………だったら、おれはお前きらいだ」

クリスが剣先を地面から浮かせ、男の方に向けて構えた。

周囲に蠢く灰色の人型の群れを視界の端に意識しながらも、その動作には一切の乱れもない。

だが、その剣の刃が揺らいだ。

否、その剣の刃をクリスが纏っていた“漆黒”が手を伸ばし包みこ

んだ様が、刃が揺らいたように見えただけだ。

まるで黒い炎を灯されたような刀身。

すると、クリスがそれを大きく振りかぶった。

レックスがはつとして

「アイラさん！」

と叫んだ。

名を呼ばれたアイラがレックスの方を見る。

レックスはアイラに向かって「伏せる」と動作で示した。

…クリスの身体が真横に回転し、黒い刃が辺り一面を薙ぎ払った。

斬撃は剣本来の長さを遙かに越えて、軽く半径20メートルは達したろう。

灰色の人型の群れは、ことごとく胴体から真っ二つにされ、さらには山小屋までも破壊された。

レックスは地面に這うようにして、降ってくる破片や瓦礫から逃れた。

背中がひどく痛んだが、この状況では気にしていられない。

アイラもまた地面に伏して斬撃を避けた。

判断が遅かったら、彼女もまた灰色の人形たちようになっていただろうか。

「……敵か味方が判らん……！」

呆れたような怒ったような口調で呟いて、アイラはクリスの方を見た。

斬撃の遠心力に腕を引つ張られてよろめく姿が、やけに無邪気に見えた。

そのクリスが、よろめいた拍子に足元に倒れている歌鳥の体を踏まないようにとたたらを踏む。

その上に、不意に影がよぎった。

この灰色の空に太陽はないというのに。

「！」

見上げた先に、小さな輝く太陽がふたつ ……、

あの男の双眸があつた。

空中で、その指先が真っ直ぐにクリスの方を向く。

爪から発せられる黒い靄を目に捉えて、クリスは剣を振り上げた。

剣の軌跡をなぞって“漆黑”がクリスの頭上を覆う。

それがドーム型になって、クリスとその足元の歌鳥を男の放った“黒”から守った。

少年の“漆黑”と、

男の“黒”の攻防。

男が灰色の大地に着地した ……瞬間、未だ形を保つ“漆黑”のドームの中から流星のように飛び出してきた影がひとつ。

“漆黒”を脱ぎ捨て、生身のままで大剣だけを携えたクリスが男に突進する。

男は斬撃を受け止めるべく片腕を上げた。

男の爪から生じる“黒”が、腕全体を包む。

空中で回転を加えたクリスの剣が男の腕に直撃した。重々しい音がして、男の片足が地面にめり込む。

剣は僅かに男の黒い腕に食い込んで、止まった。

本当ならば、腕一本は軽く切り落とす攻撃だろう。

だがクリスは動揺しない。

仕留められなかった、という認識は瞬時にクリスを次の行動に移させる。

食い込んだままの剣をそのままに、固定された柄を支点にしてその身を回転させた。

高く振り上げた脚が、そのまま真っ直ぐ男の頭上を狙う。

クリスの最大の強みは、攻撃の正確さ　∴、つまりは体捌きの正確さとも言える。

寸分変わらず男の脳天を捉え、体重のすべてをかけて踵を落とした。

だが男は微動だにしない。

両足が大地にめり込むほどの衝撃だったにも関わらず、まるで銅像か何かのように体勢が崩れない。

男が剣が食い込んだままの腕を振り払った。

剣の柄から手を放していたクリスは、男の横をかすめて落ち、着地と同時に飛び退いて振り払われた剣を追った。

剣が地に落ちる前に、クリスの腕がそれを掴み取る。

地上で一回転して起き上がると、片手で大剣をかざして構えた。

身のこなしは獣のよう。

しかし武器を携えた姿は優美にすら見える。

男が感嘆にも似た声を洩らした。

「なるほど……」

「？」

「……貴兄が“今回”の“クリスタル”か。

これは《修正》が難儀であろう……。」

いや、つまり……

ふむ……」

男が何やら思案するような仕草でぶつぶつと呟く。

珍しくクリスがあからさまに不快な表情を浮かべた。

「……………」

先ほど剣を食い込ませた方の男の腕は黒く染まり、まるで墨を塗りとくったかのように負傷のほどは窺えない。

少なくとも腕のかたちは保たれたままで、血が滴り落ちるといっわけでもなかった。

けれどもクリスはそれを不審に思わなかった。

クリスには、目の前にいる男が“生きものではない”という確信があるから。

血が流れないことも腕が切れないことも不思議ではない。

…

この世に“こうあるべき”ものなどありはしない

…

クリスは再び剣の柄に両手を添えた。

*

「…『ロスト殲』！！」

灰色の森によく通るバリトンの声が響いた。

ロイドが弾いた指の先で、異形の群れが蒸発して消える。

ロイドが目で追う先で、朱色の袖がはためいた。

「『出でよ』！！」

凜とした声に応じ、異形の群れが地面から起き上がるのを見、ロイドが舌打ちした。

「次から次へと……」

「大地のすべては、例外なく死者たちの寢床でございます故」

言った女が筆を振るう。

描かれた光の文字が流れ、灰色の群れたたちの頭部にそれぞれ宿った。

すると、その人型が輪郭を歪ませ始める。

ロイドが眉をひそめる間に、それらは歪んで溶けてその姿を変えた。

灰色の輪郭だけの獅子に。

「……………」

どこまで邪道を究める？」

「道潰える迄」

女が白い織手でロイドを示した。

それに応えて、獅子の群れがロイドに殺到する。

「舐めるな」

呟き、ロイドが右顔面を覆う眼帯に手を掛けた。

…だが、次の瞬間。

「……………」

女が突然仰け反った。
何かに背中を突かれたかのように。

「……ッあ………」

女がよろめく。

それと連動するように、灰色の群れの人型と獅子両方が静止して震えた。

それを見、ロイドが眼帯を外そうといていた手を下ろした。

「……来たか」

ロイドが灰色の森の中で、山小屋がある方角に視線を向けた。

体内の痛みに堪えている女が呻く。

「……まさか……、空間を……突き破って……？」

そんな……

この《不義の迷宮》は……“結界”ではなく……“領域転換”……

たとえ《狭間》を越えられても……あの無限の時空間の中で……“此処”を探し当てられるはずが………」

そこで、女がはっとして顔を上げた。

「……しまった」、て表情だな」

ロイドがその顔に意地悪そうな笑みを薄く浮かべた。

「“向こう”に残っていた俺のゴーレムが案内役だ。分断させられたのが逆に幸いしたらしい。

俺のゴーレムだけでは《狭間》は越えられん。だが“あいつ”は《狭間》を越えられる。

そして“あいつ”には俺のゴーレム1体くらいなら受け容れられる“空白”がある」

女が目を見開いた。

「《拒絶の女王》……!!」

「…の、血筋だ」

言って、ロイドが片手を上げて女の方に真っ直ぐ拳を突き出した。

「!!」

「『殲』」

衝撃から未だ立ち直らぬ女に向かって放たれた蒼白い閃光。

顔面に直撃を受けて女が仰け反る。

美しい貌から煙が吹き上がった。

「…!!」

「先に良識がねえつつつたのはそっちだ。

恨むなよ
「

言って、ロイドが颯爽と女の頭上に跳んだ。

「『名を持たぬ血潮よ』

『凍てつく吐息にその貌を埋めよ』

『晒す心臓』

『御霊安かれ』
みたま

『汝の涙は何処に還る』」

弾丸のように零れる詠唱、女の周囲を蒼い光の線が奔る。

落下の勢いそのままに、ロイドの掌が女の顔を掴んで沈めた。

「『ロストフレア
灼殲』」

声をあげる間もなく、女の顔とロイドの掌の間から爆煙があがった。

ロイドが灰色の地面に女の頭を叩きつけ押さえ込む。

片膝で女の腹部を圧迫しながら、もう片方の脚で筆を持つ腕を踏みつけた。

そうして再び

「『灼殲』」

と唱えて指を弾く。

それは執拗なまでに幾度と続いた。

何度も爆煙をあげ、しかしロイドはこの力も緩めない。

それはロイドの気性から考えたら異常なまでの念の入れようだったが、それだけにロイドのこの女に対する警戒心の強さが窺えた。

…直後、女の身体が突然沈んだ。

「!」

灰色の地面に溶けたかのように。

ロイドは辺りを見回す。

(空間に揺らぎがない……、
死んだわけじゃないな)

この空間を造り上げたのはおそらくあの女だ。

“侵入者”による衝撃をその身に受けていたのがその証とっていいだろう。

そう考えると、空間の主たるあの女を倒すことは空間の崩壊にも繋がりがねないのだが、

(《黒い血の民》……、
倒すためには何が効果的なのか確認しとかねえと)

ロイドの頭にあるのはその事だった。

(気配はそもそも感知できる種類のものじゃなかったからな……)

灰色の人型の群れと獅子たちが再び蠢き始めた。
が、ロイドの方にはまったく寄り付かない。

ただ目的もなくふらふらと彷徨う。

ならばロイドの方にもそちらにかまう理由はない。

「ちて」

ロイドの姿が潤んで溶けて、幻のように消え失せた。

さほどの距離はない。

自身のゴーレムのいる場所まで

…、

クリス、そして歌鳥のもとまで。

ほぼ一瞬で、ロイドの姿は気絶している歌鳥の傍らに現れた。

【クリスタル・アームという人物】

正体不明の男と向かい合うクリスが、何かに気がついて歌鳥の方を振り向いた。

「ろいど」

音もなく姿を現していたのは、ずば抜けた長身の隻眼の偉丈夫。

「ご苦労だったな、

クー坊」

そう言っつて、ロイドは倒れている歌鳥の顔に乱れかかった髪をそつと整えた。

その手は黒い手袋に覆われ、いつの間にか普段の黒コートの装いになっっている。

クリスがほんの少し、彼とある程度の時間を過ごした人間でなければ察することが出来ないほどにほんの少し表情を和らげた。

レックスもまた、ようやく安堵の息を吐く。

「ロイドさん……」

「レックス、と ……、アイラも無事か。
よし」

そう言っつて、ロイドがクリスの向こう側に立つ男に視線を留めた。

「 ……ちっ」

「人の顔を見て舌打ちとは、貴兄の国では失礼に当たらないのかな？」

表情ひとつ変えぬままに男が首を傾け、そうしてふるふると横に振った。

「どうぞやら、我が弟子をだいぶ痛めつけてくれたらしい」

「ほう？」

いきなり姿を消したと思っつたら、てめえさんの所に泣きついたらか？」

「 “あれ” はそのように柔弱な女ではない」

そう言つて、男は辺りを視線で撫でた。

「しかし、空間の主を躊躇なく叩きのめそうとは、その度胸には恐れ入る。」

“あれ”を停止させることで、この《不義の迷宮》が崩壊し、無防備のまま《狭間》に放り出される事態を想定しなかったのかね？」

「八」

ロイドが薄い笑いを溢した。

「そんな保身的な理由でてめえらのご機嫌を伺ってられるかよ。」

「だいたい放り出される先が《狭間》なら、この空間よりよっぽど安全だ」

その言葉に、男が興味深そうにロイドの顔を眺めた。

「…なるほど。」

その解釈はあながち間違いではないやもしれぬな」

「おいクー坊、
なに氣イ抜いて下がってんだ」

ロイドと男の間に立っていたクリスが何となく位置をずらしたのを見て、ロイドが声をかけた。

「話のじゃまになる……」

「ならんならん、
つーか別に邪魔してもかまわん。」

そいつはお前に任す」

「え」

「え」

「え」

クリスのみならず、レックスとアイラも困惑の声を洩らした。
一同の反応に、ロイドが眉をあげる。

「向き不向きの問題だ。」

お前は守りに向かん。」

いま最も優先されるべきは歌鳥の安全だ。」

歌鳥を放って俺とお前の2人で攻めるのは論外、
ならお前が攻めて俺が歌鳥を守るのが最善だろう」

クリスは少しきょとんとし、そうして

「そうか」

と頷いた。

そのあまりの素直さに、初対面のレックスとアイラが口を開く。

「なんてピコア……」

「素直すぎる……」

そんな2人の反応に気付かないまま、クリスが手にした大剣の切っ先を灰色の地面から浮かせた。

瞬間、クリスの姿がその場の全員の視界から消えた。

否、それはクリスの跳躍力が全員の想定を越えていたがゆえに見失っただけのことだった。

クリスの跳躍は高く、しかも疾かった。

そのうえ落下速度も全員の想定を越えた。

ゆえに、クリスの消失と男に斬撃が降り掛かってきたのはほぼ同時のように感じられた。

「!!!!!!」

「……………ぐっ……………!!!」

直上からの斬撃、

僅かに位置をずらしたものの、クリスの剣は男の肩に深く食い込んだ。

クリスが男の胸を蹴って剣を引き抜き、距離を取る。

刃を追って鮮血が弧を描いた。

男は倒れなかった。

常人ならば絶命する傷を負いながら、彼は2、3歩下がって踏み留まった。

クリスはそれを見、認識したと同時に着地した大地を再び蹴った。

風車のように身体を捻らせながら、クリスは男の胴体を真横に斬りつける。

剣は完全に男の胴体を両断した。

…だが。

「……」

斬りつける直前、男の胴体が墨をぶちまけたかのように黒く染まった。

腕に負わせた傷同様、斬り裂いた箇所から血は流れ出ず、完全に両断したはずの胴体が離れることもない。

それどころか、男は平然と立ったままでクリスの姿を眺めやった。

(……動きが冴えた。

枷が外れた、といったところか)

先ほどまで、この少年は気を失っている少女を庇いながら戦っていた節がある。

だが今は、守っていたものを信頼する者に託すことが出来たがゆえか、何の制約もなくその剣を振っているように見えた。

その間に、ロイドは歌鳥を連れてまずはアイラに駆け寄った。

そして両脇に歌鳥とアイラを抱えてレックスのもとに一同を集める。

「ロイドさん」

「打撲か？、骨折か？」

レックスの方に顔を向けぬまま、ロイドが短くそう訊ねた。レックスが苦笑する。

「残念ながら、骨折のようです……」

「アイラは」

「打撲だ。おそろくな」

「了解」

そのまま、横たえた歌鳥の傍らに膝をついたまま動こうとしないロイドを見、レックスが控えめに声を掛けた。

「いいんですか」

「何が」

「行かなくて」

ロイドが琥珀の隻眼でちらとレックスを見た。

「お前、話きいてたか？」

「聞いていました。
納得もしてます。」

けれど、あの男はどうも得体が知れません……、

子ども1人に戦わせるのはあまりにも……

せめて、ゴーレムだけでも加勢させるべきなのは「

「必要ない」

短く言って、ロイドが自身の手袋を直した。

「少しピンチになるくらいがちょうどいいな……」

「は!?!」

ロイドの低い呟きに、レックスとアイラが声をあげた。

それに対して、ロイドが「静かに」と口元に指を当てる。

「な、何いって……」

「騒ぐな。感づかれる」

「どっちにだ?」

アイラが眉をひそめてそう言った。

アイラもレックス同様、クリスのようなあどけなさの強く残る少年を単身戦わせていることに多少の抵抗があるらしい。

「何かするつもりなのか」

「正解」

「“何か”って……」

「……この数日で、マリーと何回か交信してな」

その言葉には思い当たる。

歌鳥とレックスの“授業”の間、いつもロイドは席を外していた。

クリスを迎えるために街の方に行っていたわけだが、その間にマリーと何かしら連絡を取り合っているもおかしくはないし、当然だとも思う。

だが。

「マリーと、あの子について何か？」

「あいつは《軸の歴史》において、ファントムと深い関わりがある。ルビーにもな」

「……！」

「ここは《狭間》の中に浮かぶ漂流船みたいなものだろう。おそらく俺たちの住まう歴史や世界とは隔絶されている。

ならば好都合、

ここであいつの“チカラ”を呼び覚まして、《歴史の修正》には影響を与えないはずだ」

「待ってください、

ロイドさん。

いったい何を ……」

レックスは困惑した。

ロイドはまっすぐにクリスを見つめている。

「あいつの“チカラ”をこじ開ける。

マリーは言った。

《軸の歴史》において、それがすべての始まりだった　…、とな

*

『ファントムを維持するために、クリスタルⅡアームという人物を失うわけにはいかないの』

マリーのその言葉を聞いたとき、なぜだ、とロイドは問うた。
マリーは答えた。

『レインⅡナイトメアを倒すことは、きっと誰にも出来ない。
彼は《摂理》の外にいるから。

けれども止めることは出来るかもしれない。

少なくとも、“今のレインⅡナイトメア”ならば止められる可能性がある。
がある。

ただし、それは“クリスタルⅡアームという人物”が健在であれば
の話』

「……つまり？」

『レインⅡナイトメアが破滅を願うのは、クリスタルⅡアームのた

め。

この歴史でクリスタルⅡアームが維持されるのなら、レインⅡナイ
トメアが破滅を望む理由はない。

けれど、今の歴史のままではクリスタルⅡアームは失われる。

《軸の歴史》とは異なり ……

“自我崩壊”というかたちで

「“自我崩壊”？」

『今回のクリスタルⅡアームはとても不安定なの。』

“父親”が長く手元に置き過ぎたから

「……それが何かおかしいのか？」

『“父親と共に過ごした時間”と“イリアスⅡマツクールと共に過
ごした時間”に矛盾が生じている。』

《軸の歴史》におけるクリスタルⅡアームは単純だった。

“父親と共に過ごした時間”の記憶がなかったから。

だから、少なくとも“チカラ”が目覚めるまでは何の疑問も抱かな
いまま生きていられた

「疑問？」

『そう。』

つまり ……』

それは、かつてクリスがイリアスに投げ掛けたものと同じだった。

『 ……

自分はほんとうに“人間”なのか、

……といふこと』

… 峡谷から見上げる空は狭く、太陽が空に座す時間帯であるにも関わらず、夜のように暗い。

苔蒸した森、湿気が沈み淀む谷底。

踏めば水の滲む地面に足跡を残しながら、進む人影がひとつ。

フード付きの白い長衣をすっぽりと被った姿は、闇にも似た森の中に、月のようにくつきりと浮かび上がった。

彼（おそらく男だ）は轍を辿っていた。

それじたいには特に何か意味があるとは思わない。

地形的に人が暮らすには向かないが、ここは地図にも載っているれつきとした公道だ。

人も通るし、馬車も通る。

季節を無視した冷やややかな湿気が漂う中、男はいつそ優雅な足取りで轍を辿る。

そうしてしばらく進んだ頃、横倒しになった馬車を見つけた。

その傍らには石灰か何かの馬の彫像。端々崩れ、よこたわった姿勢だった。

その意味するところを男はまったく気にも留めない。

フードの下の白い頬を黒髪が撫でた。

そして、真紅の瞳が周囲を見回す。

そこで微かに動くものを見つけ、男は静かに歩み寄った。

「……」

倒れていたのは壮年の男だった。

意識はなさそうだ。

見たところ目立つ外傷はないが、体内の苦痛に悶えているように見える。

そして見覚えがある気がした。

「……………」

しかし男はすぐに目を離した。

見覚えはある。

だがそれに意味があるとは思えなかった。

いつ顔を合わせたのか覚えてもいない人間などどうでもいい。
取るに足りないことだ。

そして男は足を進めた。

辺りを歩き回り、幾つかの石灰の人形を見つけた。

そのすべてが倒れ伏した姿勢で、芸術性のかけらも無い。
それが何を意味しているのかは、男にとってはどうでもいい事だ。

そのとき、ふと湿った空気の中に“何かの香り”が混じった。

それは香水か、それとも化粧品に使われる香料か。
少なくとも自然の香りではない。

訝しげに、彼は辺りを見回す。

ちょうどそのとき、頭上の雲が晴れたのであろうか、峡谷の中に光
が射した。

瞬間、羽ばたきの音。

男が見たのは、まるで闇を分かつ亀裂のような狭い空に飛び立つ白
い鳥の後ろ姿だった。

男はしばらく鳥の影が消えた空を見上げていた。

そうして暗く淀んだ谷の底で、地面に落ちた蛍のように仄かに白い
羽根をひとひら拾い上げた。

【Episode:0】

晴れ渡った濃紺の夜空と清らかに白い砂の地平。
その狭間に、暁にも似た光が灯った。

… 聖地ヴァナディース。

砂の海に浮かぶ絶壁の孤島。
入江にも似た場所に設置された城門だけがたったひとつの入り口で
ある、天然の要塞。

だがこの時、岩の壁に囲われた市街地の各所から火の手が上がり、
街は混乱の渦の中にあった。

砂漠の中心に位置するヴァナディースが攻め込まれ、それだけなら
まだしも、ここまでの被害を被るなど考えられない事態だった。

だが、実際にそれは起こった。

ごく簡素な武装をした僧侶たちが、市民を誘導して神殿に避難を促
す。

ひとりの老婆が暗い空を仰ぎ、祈りの言葉を零した。

それに応えるものの存在など、はじめから保証されてなどいないの
に。

*

… 神殿の露台から街を見下ろす女の表情には、悲痛と憤りが入り混じっていた。

昨日までここから見下ろす夜の街は、地上の小さな星空だった。その星のひとつひとつに、人々の憤ましい営みがあった。

なのに今は …

「シスター・ユーリン！」

扉を開けて入ってきた神官が、切迫した声をあげた。

「……最後の通達だ、と …」

震える手で神官が差し出してきた書簡を目に止めて、ユーリンは眉間の皺を深く刻んだ。

「私は行かない」

「シスター」

「 … 齋しのもりだろうが、私が行って人質となれば、これよりはるかに多くの民を巻き込む戦が起こる。

私は聖地の長。

この地を動くことはない」

「 … ですがシスター！」

このままでは御身にも危険が及びます。

市民らもシスターのご無事を望んでいるはず、

シスターの御身を敵方に渡せ、と言う声があがらないのがその証。

せめて神殿から脱出を」

「私は動かぬ」

ユーリンは毅然として立ったまま、露台の向こうの混乱を見やる。

「…動けるものか」

小さく呟き、ユーリンは踵を返して部屋に入った。

そして続きの間に下げられた簾を上げる。

その向こうには籐の長椅子に腰掛ける男と、

その膝にすがるようにして床に座る10代半ばほどの少女、

その少女をなだめるように肩に手を置く少年がいた。

部屋に入ってきたユーリンの姿を見、少女が弾かれたように駆け寄る。

「ユーリン！

だいじょうぶ？

どうするの？

どうなるの？」

不安げにすがりついてくる少女の頬を撫で、ユーリンは淡く笑んでみせた。

「大丈夫よ」

そして長椅子に座る男に視線を移す。

男はユーリンと目が合うと無言で頷いた。

ユーリンもまた頷き返す。

そうして男の傍らに立って表情を強ばらせている少年を見た。

「エツダ」

「…はい」

「お前にこれを」

そう言つて、ユーリンは懐から短剣を取り出した。

銀製の柄と鞘。

幾何学的な模様が彫られ、装飾は鍔の紅水晶がひとつだけ。

エツダと呼ばれた少年が怪訝そうな表情を浮かべた。

「それは……？」

「鍵だ。」

これを持って聖堂へ行きなさい。

オベリスクの下に、地下への入り口がある。

お前は賢いから、きつとすぐに分かるはず」

「地下……？」

女性であるユーリンの腕で包み込めるほどその短剣は小さく、武器
というよりもまるでアクセサリーか何かのように見えた。

エツダの疑問に、ユーリンが頷く。

そうして傍らに立つ少女の肩を抱いた。

「この子を連れて、そこから聖地を脱出しなさい」

「！」

「ユーリンは!?!」

エツダの瞳目と、少女の叫びはほぼ同時だった。

ユーリンが優しく首を振った。

「私はここから離れられない。」

敵の狙いはこの私、

一緒にいてはお前まで危険にさらしてしまつ」

「いや！」

少女が首を振った。

長く滑らかな黒髪が宙を撫でる。

「ユーリンが行かないなら、わたしも残る！」

ぜったいにいや！

離れない！」

「 …… クリスタル」

少女はユーリンにしがみついて離れない。

ユーリンはその髪を撫で、そっと名前を呼んだ。

「これは私からのお願い。」

命令ではないから、そうしないのもお前の自由ではある。

けれどお願い。

私の娘、私の宝」

ユーリンが少女を優しく抱きしめた。

「ただの女として生きられない私の夢を叶えてくれた、私の可愛いクリスタル。」

ほんの少し別れが早まっただけ。

お前が私の手を離れる日は、もうすぐそこまで来ていたのだから。

だってお前には私とは違う生き方があるのだものね。

いつか話してくれたでしょう？

お前の夢を。

お願い、クリスタル。

私の想いを繋いで頂戴。

お前の夢が私の夢よ」

ユーリンを見上げた少女の真紅の瞳には、涙がいっぱい溜まって

いた。

ユーリンは微笑み、その額にキスをした。

「愛してるわ。

私のクリスタル」

「……………ユーリン……」

少女がユーリンの胸に顔を埋める。

その肩が震える。

微かに洩れる嗚咽の音が、痛々しい気がした。

数秒、ユーリンはその背中を撫でて宥め、そうしてエッダに向かって手にしていた短剣を差し出した。

「避難してきた市民もそこに誘導しなさい。

恥ずべきことに、この事態で指揮を執るべき司祭級の神官たちは、我先にと高官用の秘密通路で脱出した。

だが、その尻拭いをさせようというわけじゃない。

お前はここに踏みとどまることを自分自身の意思で選んだ子だ。今さら何を確認するつもりはない。

お前と私が近しい関係である事は、神殿の者なら誰もが知るところ。それを笠に、大いに我が物顔で仕切って来なさい。

お前は賢い。

そのうえ優しく、おまけに度胸がある。

エツダ「フェイトファスト修道士、
聖地の民を任せます」

「 …… 待つてください、シスター・ユーリン。」

この事態において、聖職者たる我々が市民を助けるべき立場にあるのはわかります。

けれど、何故ぼくなのですか？

いえ、自惚れを承知で言うならば、ぼくは確かにその任に向いています。

けれど、もつと向いている人物が ……」

エツダが長椅子で無言のままこちらを見守っている男を見た。

「なぜ、お師匠さまにその任を」

「 …… 私はここに残るからだよ」

優しい声で、エツダの師匠が口を開いた。

少女とエツダの視線が集まるのを意識しながら、彼は声以上に優しい表情で2人を見比べる。

「脱出しない人間に出口の鍵を渡す意味はない」

「イリアスっ」

少女が男の膝にすがりついた。

「どうして？」

「ユーリンと残るの？」

「一緒にいたいから？」

「一緒に、だから」

「一緒にだから？」

「そう」

イリアスは少女の髪を撫でた。

「私はユーリンと一緒にだから。」

「私がそばにいる。」

だからクリスタル、

お前はエツダと一緒に行きなさい。

一緒にいてあげて欲しい。

ユーリンが私と一緒にいてくれるのと同じように」

「4人一緒にだめなの？」

「どうしても？」

「どうしてもだめ？」

「イリアスもユーリンに、わたし達と一緒に行くことは言ってくれないの？」

「……クリスタル」

エツダが少女の肩に手を置いた。

「2人には……お立場がある。」

シスターは決して我儘や身勝手にここに残っていたわけじゃない。

リーヴダリルとログクロートの戦を起こさせないために、シスターはここに留まっていたんだ。

けれど、もう」

「向こうは実力行使に移った。

力尽くでもユーリンを都に連れて行くつもりだ。そうならば、もう止まらない……」

イリアスの表情が陰る。

「せめて援軍の望みがあれば、お前たちを少しでも長く手元に置きたい。」

共に堪える選択もあったらう。

けれど」

「……どんなに早くとも……今日明日という事はありません……」

明日を待たずに、神殿はきつと敵の手に落ちる。

苦々しく、エツダは表情を歪めた。

「悔しいです。」

……お世話になった人達をこんな所に置いて行くことしか出来ないなんて。

せめてぼくがもう少し大人なら ……

「それは困る」

エツダが顔を上げた。

こちらを見つめるイリアスの表情には、どこか悪戯めいた色が見える。

「お前はいつまでも、私にとっては子どものままでいてくれないと寂しいじゃないか」

「 ……お師匠さま」

「クリスタルを頼んだよ」

そう言っつて、イリアスはユーリンの顔を見た。
ユーリンが頷く。

緩やかに歩み寄り、エツダの手に“鍵”を握らせた。

「 ……この鍵は《断罪者》と呼ばれている。
聖地を治める者の証だ。」

私は今日これをお前に託すわけだけど、この先これをどうするかはお前の心に任せます。

ただし、この鍵を託す者には、伝えなければならない事がある。

それが代々《断罪者》を引き継ぐときの習わしだ」

「伝えなければならない事……?」

「そう」

ユーリンの瞳が、ひたとエツダを見据える。

「教典第100章」

その言葉に、エツダは瞠目した。

「…100……?」

「そう。」

全99章と言われている教典の、本当の最終章。

時間がないから一度だけ口頭で伝えるけれど、鍵にも記されているから後で確認なさい。

言語統一前の言葉の韻だけを刻んだものだが、お前は賢いから解るはず。

解読はしなくていい。

あと、ひとつだけ。

……この鍵で“1人以上を殺してはならない”」

「…?」

エツダは怪訝そうに眉をひそめた。

ユーリンの言葉の意図がよく掴めなかったからだ。

“1人以上”ということは、つまり“1人”も含まれる。

ならば“人を殺してはならない”という言い回しでよいのではないか。

その疑問をエツダが口にする前に、ユーリンが深く息を吸った。

「では聞きなさい。

これが、聖女ヴァナディースが最後に残した言葉だ」

*

…窓枠から見える景色がまるで絵画のようだ。

濃紺の夜空。

下の方は暁にも似ているが、それは街からあがる火の手の明かりだ。

「…お前の人生で、最も古い記憶は何だ？」

静かだ。

たった2人しかいない部屋はやけに広く、もの悲しい気がした。

ユーリンの言葉に、イリアスが首を傾けた。

「どうした？」

いきなり「

「
…私のいちばん古い記憶はね、
たぶんお前と2人で孤児院を抜け出した夜だ」

その言葉に、イリアスが笑みを零した。

「ああ、私も覚えてる。

神殿に召しだされるずっと前だな。
どうして抜け出したんだっけ？」

「さあ。

私も覚えてない。

子どもの頃のことだから、たぶん深い理由はないよ。
きつと笑えるくらい幼稚な動機だ」

言って、ユーリンは静けさを帯びて窓際に佇む。

「最初から最後まで、お前と一緒に……」

その呟きを、イリアスはあえて無視した。

ここに残るといふ決断をしたということは、つまり、そういう事だ

…

イリアスは静かに立ち上がり、ユーリンが立つ窓際に歩み寄る。

部屋の出口から見ると、窓を挟んで対称に立つ二体一組の像のよう
だ。

「あの2人は無事に聖地を出られるかしら」

「運は強いはずだよ。
私に拾われたんだから」

「説得力に欠けるな」

軽く笑って、ユーリンはイリアスの顔を見上げた。
月と炎による陰影で、幻想的なまでに美しく見える。

「お前には感謝してる」

「あの2人を連れて来たことか？」

「それも含めて」

緩やかに波打つ紅の髪が揺れた。

「……もし生まれ変われるなら、今度はお前と本当の兄妹として生きたいな」

「……そうか。」

私は少し違うな」

ユーリンが首を傾げた。

イリアスが微笑む。

「もし生まれ変われるなら
……」

私はお前と夫婦になって、エツダかクリスタルを子供に欲しいな」

その言葉に、はじめユーリンは目を丸くし、そしてすぐに吹き出した。

「どうして子供が“どちらか”なんだ？」

「決まってる。」

後々ずっと4人で暮らすためだよ」

イリアスの答に、ユーリンがクスクスと笑った。

「欲深いな。」

…けれど、そうね。

私もそれがいい ……」

石の床に伸びた2つの影の片方が揺れ、もう片方に寄り添った。

「…イリアス」

「ん？」

「……ありがとう」

*

街の喧騒がかすかに聞こえる。

まるで別の世界から聞こえる気がする。

石造りの回廊に響く2つの足音は、共鳴して鍵盤楽器の音色のよう

だ。

少女は先に行く少年に手を取られて足を速める。そつでなければ、膝が崩れてしまいそうだ。

すると、どこかで建物が崩れるような音がした。神殿のどこかだ。

足の裏に伝わった震動に、少女が躓いたように歩みを止めた。

少年がそれを叱る。

叱っているようには見えない口調で。

「クリスタル」

「今の、どこ？」

「急がないと」

「どこが壊れたの？」

「ユーリンとイリアスがいる方じゃないよね？」

暗がりの中でも、少女の怯える表情がよくわかった。あどけない瞳。

繫いだ手の平が小刻みに震えている。

エツダが何かを堪えるように

「…行かないと」

と少女を叱咤する。

「エツダ……」

「街の人たちを助けないといけないんだよ。
シスターとお師匠さまはぼく達にそれを託したんだ。

思い出して、クリスタル。

街の人たちはみんな親切だった。

あの人たちを助けないといけないんだ」

「うん……、うん、

わかった……。」

わかる……から……」

少女が両手でエツダの手を握った。

影さえ見えない暗がりの中で、ぽた、と床に涙が落ちた。

「エツダの言うこと、ちゃんときくから」

「……そう、

いい子だね。」

ごめんね、クリスタル。

もう少しの辛抱だから」

「だから……」

エツダの手を握る手に、力が込もる。

なのに切ないほどに弱々しい。

「エツダは……、
わたしにエツダを置いて行かせたりしないだね」

少年が目を瞠った。

「……クリスタル」

“置いて行かないで”ではない。

“置いて行かせないで”と言った。

…エツダが少女を置いて何処かへ行く可能性など頭にないのだ。

そのある意味愚かしくさえある無邪気な信頼が、ひどく愛しい。

……エツダが静かに息を吐いた。

溜め息ではない。

ただ、限りなく微笑みに近い表情で、エツダは少女を見た。

「…ああ、

ずっと一緒だ。

先に行くことはない。

先に行かせることもない。

始まりから終わりまで、

ずっと一緒だよ、

クリスタル」

「…………やくそく…………？」

涙をポロポロと零しながら、少女が小さく小指を出した。

…その、どこまでも子ども染みだした仕草に苦笑して、エツダが手を差し出して小指を結ぶ。

「約束する。」

…「ああ、急いじ」

少女がコックリと頷いて、手を引かれるままに走りだした。

…

そうしてしばらくして、聖堂に近づいた頃にエツダが足を止めた。

少女が首を傾げる。

「エツダ？」

「…変だ」

「何が？」

「…………静か過ぎる」

聖堂には避難してきた市民たちが集められている。そのはずだ。

なのに、喧騒は壁越しに遠く聞こえるものばかり。

数十、数百の人の気配を閉じ込めているはずの聖堂の扉の向こうからは、何も感じない。

不気味な静寂。

エツダの心臓が前触れなく鼓動を速める。

「……クリスタル、
離れないで」

「……うん」

少女がエツダの服の裾を握りしめた。

エツダが、おそろおそろ扉に手を掛けた。

……ギ、と重い音を立てながら、エツダの力に応える両開きの扉。

そのとき踏み出した足に感じた感触に、エツダは不審を抱いた。

それはとても親しみある感触。

けれど此処にはあまりにそぐわない感触。

「……砂？……、
……ッ！！」

息をした瞬間、鼻と喉の奥を刺す臭いにエツダが咳き込む。

エツダはそれを鉄が錆びた臭いだと感じた。

だって、これほど強烈であるならばあり得ない。

“あの臭い”であるはずがない。

少女がエツダの背中にしがみついた。

「クリスタル？」

「……いやだ……」

小さな体が震えている。

「エツダ……、

わたし、ここ、やだ……！」

聖堂は無人だった。

無数の燭台には火のひとつもなく、壮麗なステンドグラスが街にあがる火の手の明かりを透かす。

…炎の明かりのせいだろうか。

聖堂の中がやけに“赤く”はないか。

そして、何故これほどまでに聖堂の床一面に、

…砂が。

扉が重いのも道理、

床を埋め尽くす砂はエツダの膝下の位置にまで積もっている。

何が起きたのか訳がわからないまま、エツダの視線は自然とオベリスクを捜す。

…ユーリンに託されたものを。

すると暗がりの中、
そのオベリスクの陰で確かに何か動くのを見た。
いや、“誰か”が。

「……！、人だ」

小さく呟き、エツダが足を進めようとした。

だが、少女がそれを引き止める。

「クリスタル？」

「だめ……」

明かりのない中でも、少女の顔が怯えて強張っているのが見て取れた。

エツダが怪訝な表情を浮かべた。

「クリスタル？」

「だめだよ、エツダ。」

……あれは……

だめだ……！！」

その視線の先で、ゆらり、と人影が動いた。

エツダも見た。

遠くからでも、この闇の中でも明らかな人型の輪郭。

白い服。
白い肌。
白い髪。

…そして、

「!!!?」

瞬間、

その姿が巨大化した。

否、それはその人物が信じ難い速度でエツダ達の目の前に迫ったがゆえに、巨大化したように見えただけの事だった。

接近された、と認識した時には、エツダはその人物に両肩を掴まれていた。

その勢いのまま押し倒され、激しく転倒する。

「ッ!?!」

「エツダあ!!!」

打ちつけた背中中の痛みを意識できないまま、エツダは混乱しながら自分に掴み掛かる人物の顔を見た。

「…!!!?」

抗う手が止まるほど、ゾツとするような金色の瞳。

白目のない、眼窩に丸々嵌め込まれたような、表情のない双眸。

そして暗がりでもわかる、病的に白い肌。
いや、むしろ病的を越えてまるで…

抵抗して掴んだ腕の冷たさに、エツダは総毛だつ。

「なに…!?!」

「エツダ!

…はなして!?!」

少女が思い切り、エツダにかぶさる人物に体当たりをした。

“それ”は突き飛ばされて横転し、少女はエツダの体の上に崩れ落ちた。

「クリスタル!」

「っ……、エツダ、

だいじょうぶ…!」

瞬間、獣の咆哮にも似た声があがる。

少女に突き飛ばされた“それ”が、ばねのように起き上がって少女を押し退け、再びエツダの首を掴んだ。

「ッ!?!」

「エツダ!?!」

少女が叫ぶ。

「やめて!!」

少女が“それ”をエツダから引き離そうと必死でしがみつく。だが凄まじい力で振り払われ、吹き飛ばされてしまった。

エツダはそれを見、しかし声すら出せなかった。

首に食い込む冷ややかな指の感触。

呼吸が断ち切られる。

……首を絞められているのとは少し違う気がした。

食い込む指、食い込む爪に喉を抉り取られる。

そんな気がする。

エツダの襟が血に塗れ始めた。

…声が出ない。

呼吸とともに意識も断ち切られてゆく。

「……ッ……!!」

「エツダ……!!」

少女の目の前で、今まさに少年の体が壊される。

「やめてっ……!!」

ミシ、という音。

「いや ツー!!!」

少女の悲鳴。
その瞬間。

…世界が揺らいで突き動かされた。

【19】スベテノハジマリについて（後書き）

先日同僚のお姉さんとおばさんとランチに行き、楽しくお食事をした後に、何故かお姉さんがおばさんに「いい占い師」の番号を紹介されて終わりました。

……行くの？

…さて、今回もなんか色々詰め込んでます。
何に触れるべきか自分でサッパリです。ははっ。

とりあえず、

今回まで【Episode:0】で“クリスタル”と呼ばれる子ども
の性別は記述していませんでした。

気付いていた方もいたでしょうけど、《軸の歴史》における“クリ
スタル”は女の子です。

それが《今回の歴史の修正》がややこしくなっている一因なわけ
ですが、それは追々。

各キャラの秘密もまだまだあるので、よろしければお付き合い下さ
い。

では、次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8171k/>

Christ / Alarm

2011年11月21日22時49分発行